第四章　井上外務卿時代

第一節　一般的經過

第一項　條約改正豫備會議ト其前後

一　明治十二年九月十七日　井上外務卿ヨリ三條太政大臣宛

條約改正問題ニ就キ閣議開催方上申ノ件

井上外務卿

三條太政大臣殿

條約改正事件ニ付明後十九日午前九時内閣於テ御評議相願度就テハ同時内閣一同參會候樣夫々へ御達相成度候此段上申候也

十二年九月十七日

二　明治十二年十一月八日　井上外務卿ヨリ三條太政大臣宛

條約改正交渉ニ關シ駐英森公使ニ内達方上申ノ件

條約改正之儀ニ付別紙之通リ森特命全權公使へ内達致度然ルニ同公使義明夕郵船へ乘組任地へ出發候ニ付可成明正午十二時迄ニ何分ノ御沙汰相成度此段及上申候也

明治十二年十一月十八日

外務卿　井上　馨

太政大臣　三條實美殿

（以下朱書）

上申ノ趣聞届候事

明治十二年十一月十九日　太政大臣三條實美印

註　別紙森公使へノ内達ハ次號文書同公使へノ訓令ト同一ニ付省略ス

三　明治十二年一月九日　井上外務卿ヨリ森駐英公使宛

條約改正交渉方針ニ關シ訓令ノ件

今般條約重修に要する主眼は嚮きに我遣外各公使に附與せし訓狀にも記載せる如く現行の海關稅則を改正すると是迄各開港場に行はれ來りし不當の習慣を改正すると我政府より特に布告する或る規則を我國にある外國人民に遵守せしむるの端緒を開くとの三件にあり

右の三件を足下任所の政府に向て談判するに當りては自然前後の別說明の巧拙あるべきを以て先づ左に示す順序に從て着手すべし

一　海關稅則は別紙草案の如き稅目を以てせんとす其員額は先前訓狀に載する如く決て彼我の貿易を害傷する如き高額に非ず卽其高點は三割より騰らず之を平均するに總て一割二分餘に過ず而して此貿易條約たるや或は稅目を附添したる貿易條約書となすとも或は又我政府より布告する一般の稅目に基き收稅せしめ別に之を條約書に附添せず尤も之を施行するの期限を立て其期限內は變換することなかるべしとのことを別に盟約書に記載し之を各國政府と交換し置くは我政府の最も企望する處なり故に其邊の情實は足下も既に詳悉する所なるを以て總て足下の處辨に任すと雖其主義を强て主張するに不及若し彼において承諾せさる時は前に述る如く貿易條約の體裁を以て結約に及ぬも我において異議なき所なり到底前兩條の內何れなりとも彼か主意の存する處を探知し速に之を報告せらるべし尤も前に云へる期限は八年乃至十ケ年間を以て一期と定めて差支なかるべし足下赴任の上は前條の趣旨を體し英國外務大臣と談判の上右に同意せば結約調印の全權を當府在留英公使へ授與候樣請求可被申入候事

一　我政府より時々布告する諸規則の義は足下も承知せらるゝ通り英公使パークス氏は現行條約第五條を推し凡て在日本貌利太泥亞臣民は日本政府の法則を遵守するに及ばす唯英法のみを遵守すべきなりとの說を主張し之がため違式註違の諸條令より銃獵規則港規則水先案內規則鐵道檢疫の諸規則其他一般我政府より發行する行政上不可缺の規則章程の如きに至る迄一として之を英人に遵守せしむる能はざるの勢に至れり其弊害の甚敷は足下平常熟知せらるゝ處なり勿論英公使は前文我政府の諸規則發行の際同公使の允准を經て之を英人に布達せば恰も英國の法律と異なるなく施行せしむるを得との事は日常彼が論辯する處なりといへども實際におゐては卒に行はれざる事件のみ多し之を現行條約に照らすも我政府の法則を英政府の法律として施行すべしとの如き明文あるを見ず又之がため開港已來許多の紛擾を釀成し從て交誼上の妨碍を生ずるに至らんを恐る就ては足下英外務大臣に接晤の際從來の事實と後來發起せんとするの弊害を說明し其障碍を除却せんがため英國人民えも前條揭記する處の諸條令規則章程等をして日本人同樣遵奉せしめ之を違犯する者ある時は日本官吏之を處分するを得るの區域を立て其權理を施行するを得べき樣談判可有之候事

一　右區域なる者は違式註違等輕罪の種類區分を立治罪の方法罰則の分限譬へは禁獄三ケ月罰金五百元以下なる高を標準（此制限の一例を擧れば則ち實際に於て幾分か減却するとも我法廷におゐて處分するの初步を得るにあるなり）し此區域內のものに限り日本政府におゐて悉皆處分するの權を有するを得るの條款を條約書中に挿入し以て後來の紛擾を除かんとするの見込なり然りといへども此事たるや頗る細密の考案を要するに付其草案未だ全備に至らざるを以て編成次第之を送達すべきに付外務大臣と話次其端緒を開き置るべく候事

一　英外務大臣は我政府保護稅主義を主張し今般の重修も英國より我に輸入する諸物品に重稅を課する也と忖度するも未だ知るべからず就ては足下大臣と面晤の際我國維新已來騷亂屢起り其他百般改良の起業有之不得已場合よ

り數多の楮幣を發行するに至れり且貿易の實況を視るに明治一年より本年に至る迄輸入の高常に輸出に超過す故に此兩條の原因よりして正貨と紙幣との差異時としては三割已上に及べり是則我國財政上の一大困難たり今日にして之を匡救せずんば我人民日に窮乏に陷り外品を買得るの力全く滅滅するに至り卒に至重なる外國との貿易上におゐて衰頽を現出するの慘狀を見るに至るは疑ふべきに非ず加之內外負債支消の期あり實に我政府方今財政上におゐて必至困難の場合に立至れるを以て今我海關稅額を增加せんと欲するは此財政上の危害を補正するの一手段となすの外又他の念慮あるに非ず然り而て我內地生產の現狀を見るに海外輸出の品種は全く天產物のみ多くして機械製造の物品とては僅に一二に過ぎず斯の如き場合に當り何等保護の策を施行せんと欲するも到底有害無益に歸するのみ故に政府は保護稅主義を輕信して增額を課するの企に非ざるの所以を說明し英外務大臣の誤謬を氷解せらるべし

一　先前訓狀中に輸出稅廢除の事を載するといへども英政府おゐて格別之を好とするの意なき情狀あるを以て改て之を主張するに及ばざる也

卽今パークス氏歸英中に付外務大臣と談前條の件に涉るも時は同大臣於(マヽ)ゐては專ら同氏の意見を諮詢し之に依賴するは勿論なるべし同氏は足下も兼て承知の通り我貿易の概況盛衰原因等其他海關輸入出の稅額及我大藏の納經費の員額に至るまで詳悉熟知して殆と分厘を餘まさゞる人物に付論此等の事項に涉らは書上口話とも愼て算數些末の事たりとも可成失誤なく彼政府をして信を足下の言に措く樣兼て心懸け有之は最緊要事に候事

一　前條揭る所の趣旨を體し總て着實を旨とし談判上に付足下の見込有之乎又は彼政府より當方考案外の事を論出する事あらは要急の件は電報を以てし不要急の件は巨細公信にて被申越總て拥者の訓令を奉し處分候事と可被心得候此段及內達置候也

明治十二年十一月十九日

井上外務卿

全權公使　森　有禮殿

註　森公使携行ノタリフハ一二文書附屬書七ト同一ノモノナリ

四

明治十二年十一月二十八日　井上外務卿ヨリ三條太政大臣宛

條約改正交涉ニ關シ駐佛鮫島公使ニ內達方上申ノ件

條約改正之義ニ付先般上申濟在英森全權公使へ內達致候振合ヲ以テ在佛鮫島全權公使へモ別紙訓狀來ル十二月三日郵船ヲ以テ可及內達候間此段及上申候也

十二年十一月廿八日達ス

外務卿　井上　馨

太政大臣　三條實美殿

註　別紙訓狀ハ前號三文書同文ニ付略ス

五

明治十二年十二月三日　井上外務卿ヨリ森駐英公使宛

條約改正交涉ニ關スル件

內信

別後海上モ無御障御安着ノ御事ト奉存候御出立モ餘リ急速ヲ要シ匆々ノ御事ニテ事實ヲ不盡殘懷此事ニ御座候小生儀因循碌々消日致候御安慮被下度候御出立後ハ省中モ條約改正ニ關係候モノハ榎本生等ヲ始メ退省時刻之儀先四時迄ト相定メ候得共大概五字或ハ六字頃ニモ相成諸氏共殊之外勉勵相成候間御安心被下度候裁判權一件ニ付テハ兎角遲々相成勝故伊藤氏ニ談シビートン氏ヲ外務省へ雇本省ヲ專務トシテ任シ候樣致シ日々出省シ鹽田迄モ同人ニ附屬セシメ裁判權ヲ談判スルニ要用ナル「ヲフヰシヤル、インストラクション」ヲ相調サセ此分ハ則老兄幷ニ鮫島氏等へ度々ニ差出シ可申候　實ハ全備ノ物ヲ一度ニ差出シ候テモ通讀ニ飽キ可申候故漸ヲ遂テ差出候積リ故御地外務卿其他へモ其都度々々ニ御差出ノ方可然存候　當年中ニハ御約束仕置候精密ナルタリフ則スペシフヰツクトアドバリーム之區別モ相立且每百斤或ハ壹斤ニ付何程ト精細ニ相分リ候樣調整可申候此精密ナルタリフト航海幷ニ通商貿易條約トヲ相合シ多分當月廿日頃ニ郵送相成候樣ノ運ニ至レガシト實ニ時トシテハ憤色ヲ顯シ又ハ溫言ヲ以テ皷舞仕居候仕合ニ候得共何分道具ノ不足ナル芝居ヲ上手ニ打樣ナル氣味ニテ困難多シ御推察被下度候御出發ノ際御持參ノ粗ナルタリーフヲ兩三日ノ內各公使へモ相渡シ且其體裁モ兼テ御約束申置候通リ兩途ニ申出シ候積リニ御座候得共今以テ貴說ノ成功期シ難ク存候故更ニ主張不致只インペリヤールジクリーニ相成候得ハ吾政府ノ都合ナルハ勿論吾人民ニ對シ好都合ニ有之不得已時ハ只コン

メルシヤル、コンヴェンショナルへ十ケ年或ハ八ケ年ノ期限ニテタリーフヲ附錄ニ致候方ニテ異存無之段申入候覺悟ニ御座候故幾重ニモ相願フ處ハ平常ノ御說ヲ御主張無之樣只於當地吾輩ヨリ公使等へ言フ位ニテ御控へ置之程奉祈候稅目中壹ケ年輸入高ノ額十萬圓以上ノ物品ハ只三十品ナリ此ノ收稅ノ歩合ヲ比例スレハ則百分中ノ八拾分ニ當ル其他貳百何品ハ先雜品ト申モ過言ナラス故ニ右三十品ノ分ヲ稅目ニ揭載シ其他貳百餘品ノ分ハ則ゼネラールタリーフノ如キ者ニシテ只三割迄ヲ極點トシテ其餘ヲ課セサルベシノ一ケ條ヲ揭載シテ相濟セ度相考申候上野モ英政府於テ異論ハ有之間敷哉ト申居候曾テアールコツク氏モ雜貨ノ物品ヲ揭載スルハ煩雜ナル故重ニ收稅ノ目的アル分ヲ揭載スル方同意ノ旨上野へ談話致シ候由故先ツ第一ニアールコツクト御相談御試ミノ上至急御電報奉煩候別紙ニ其割合等揭載有之候間御一覽可被下候鮫島氏ヘモ老兄同樣今便訓狀差送リ申候間兩臺於テ克ク萬事ヲ被仰合候樣相願候

香港迄電信ヲ以テ申上候一事ハ元來英政府於東京改正調印ノ儀ヲ承諾セシ上ハ何事モ東京ニテ取極メ可申ト云テ老兄御持參ノタリーフ迚モ彼於テ只一見スル計リニテ其辨說ヲ

成サヽル樣ノ事ヲ致シ候テハ不都合故先ツ老兄ヨリ外務卿へ公然話シ出スニハ（定テ於東京ケネヂー氏ヘ粗ナルタリーフヲ相渡シタルベシ右ハ凡ソ每物品收稅ノ歩合ヲ相定メタルモノ故其極度丈ハ判然致居候就テハ同氏ヨリ最早御請取有之候哉自然御受取相成居候ハヽ政府ヨリ申越候次第モ有之候故御話シ申度）ト云工合ニテ御話シ相成候方宜敷樣相考申候尤モポンスホード氏抔ニプライヴェート、コンウェルゼーシヨンハ更ニ異論無之候

レーン氏ハ宜シク御接過無之ニ於テハ此際却テ害ヲ生シ可申候

右申迄モ無之候得共序ニ申上置候

日淸葛藤モ御出發前最後ノ答書差遣セシ儘何タル事モ無之候最早天津モ氷結ノ節故先ツ三四ケ月ハ差タル事ハ無之候故其間ニ條約改正ニ力ヲ盡シ置ク心組ニ御座候近來獨露ノ間自ラ不穩ノ說多ク露ハ佛ト結盟獨ハ墺ト連合トノ說最モ高シ御地ノ政略モ淸國ノ始末ニ就テハ實ニ要用ナル駈引有之候間時々御報告奉待候

英國ヨリ日本へ派出ノ公使相極リ次第傳報被下度候

伊國皇族モ過月廿七日延遼館へ着ニ相成當節ハ每晚ジンナ

ー抔ニテ囚入申候伊皇帝ヨリ我皇帝陛下へ第一等勳章捧呈ニ相成申候

追々嚴寒ノ候ニ相向ヒ時下折角御自愛所祈候　頓首

明治十二年十二月三日　　井上馨

森有禮閣下

二日（略）

左ノ通今便鮫島公使へ申遣候間爲御心得申進置候也

明治十二年十二月三日　　井上馨

森有禮殿

第一策

裁判權ニ屬スル小刑ヲ審問シ或ハ處罰スル權利ヲ回復スル云云則重ニ地方諸規則ニ係ル警察、水先、新聞、港則、貿易規則又時在ツテ起ル檢疫規則其他衞生上道路修繕、鐵道、銃獵、營業稅等ノ規則ニ對シ外國人犯罪スル時ハ其處罰譬ヘハ三ケ月ノ入牢五百圓ノ罰金迄ニ當ル分ハ我裁判廳ニ於テ我立法ニ因リ裁判處分スル樣致度則五百圓

ノ罰金幷三ケ月ノ入牢ヲ超過スル處罰ニ當ル者ハ之ヲ各國領事裁判廳ニ引渡シ各國ノ法ニ因テ之ヲ處罰スベシ併シ其處罰ノ制限假令貳拾圓又ハ拾圓ノ罰金十日ノ入牢ニ止マルモ聊タリトモ裁判權ヲ得ルノ初歩ヲ進メ申度見込ニ候事

第二策

第一策ヲ他ノ政府ニ於テ强テ否ム事アレバ其制限ノ區域ヲ減シタル方ニテモ又此條約取結ヒノ後二年目ヨリ之ヲ實際施行スベキ約束致置候テモ可ナリ

第三策

第二策モ終ニ其同意ヲ得ス强キ異論ノ攻擊ヲ受ケ其結果ヲナス能ハザル時ハ止ヲ得ス要用トスル諸法律規則ヲ自由ニ設立シ各國公使或ハ領事等ヘ從來協議スルノ習慣ヲ除却シ我設立シタル法律規則ニ因テ領事裁判廳ニ於テ之ヲ裁判シ其罰金或ハ沒收品ハ我政府ヘ附與スルノ約束致度候事

右三條ノ內可成丈ハ第一又ハ第二策ニテ結果スヘキ樣致度第三策ハ格別難澁トハ覺ヘ不申候也

註　鮫島公使宛二七一文書同文

六

明治十三年二月七日　井上外務卿ヨリ
三條太政大臣
岩倉右大臣宛

條約改正交渉ノ爲刑法治罪法草案下附方上申ノ件

外務卿

兩大臣宛

條約改正之際裁判權回復之儀

歐洲各國之東洋諸國ト交通スルニ各自其裁判權ヲ放却セザルハ土耳古埃及百兒斯支那及我國等ニ於ル如ク則西洋各國カ東洋諸國ヲ過スル一般之通習ニシテ殆ント一種特別之交際法アルニ似タリ今如此不正之通習ヲ全ク脫セントスルハ實ニ至難之業ニシテ漸ヲ以テセザレバ爲ス可カラスト雖トモ行政規則ニ類スルモノヽ如キハ是ヲ外國人ニモ遵奉爲致其裁判之權モ我ニ掌握不致候テハ現場理務上之不都合不勘幸ニ今般條約改正之期至レルヲ以テ假令其全權ヲ我ニ復シ能ハスト雖トモ幾分カ其目途ヲ相達候樣致度存候ニ付其心得ヲ以テ已ニ各國公使等ヘ開談致候處彼等ノ之ヲ拒ムニ常ニ辭柄トスル處ハ刑事之裁判ニ傍聽ヲ許サレサルト陪審ヲ置クノ法ナキト代言人ヲ許サヽルト裁判官ノ不練熟ナルトノ四件ニアリ然ルニ右等ハ折々御改正ノ御目的ヲ以テ刑法治罪法等方今御取調中ニ有之其草案モ已ニ整頓相成居候樣承ハリ候間右ヲ彼ニ示シ猶反覆論辯可成我素意相達度存候間御差支無之候ハヽ右草案取纏早々御下付相成候樣致度此段上申候也

十二年十二月十七日

七

明治十三年二月三日　井上外務卿ヨリ
各國公使宛

改正輸入稅目案送付ノ件

以書翰致啓上候陳者過日外務省於テ御面晤ノ際改正輸入稅率一通差進置候處今般別冊之通輸入稅目調製候ニ付三部差進候條貴政府ヘ御轉送被下度此段御倚賴如此候　敬具

明治十三年二月三日

外務卿　井上　馨

各國公使宛

英　四　號

米　七　號

露　三　號

佛　二　號

伊　四　號

白　四　號

獨　三　號

蘭　三　號

瑞典　二　號

埃　二　號

西　三　號

丁　二　號

註　改正輸入稅率及輸入稅目ナルモノ本信綴込ニ添附ナキモ二月三文書附屬書ノ六、七ハ同案ナルベケレバ參照アリタシ

八

明治十三年二月五日　英獨佛各公使ヨリ
井上外務卿宛

改正輸入稅目案受領本國政府ニ回付スヘキ旨回答ノ件

一　英國代理公使回答

British Legation

Tokio
5 February 1880.

Sir,

I have the honour to acknowledge receipt of Your Excellency's note of the 3rd instant, inclosing three copies of the proposed new Japanese Customs Tariff in its complete form.

In compliance with Your Excellency's request I shall not fail to transmit these three copies to Her Majesty's Government.

I take this opportunity of renewing to Your Excellency the assurance of my high consideration.

J. G. Kennedy.

His Excellency
Inouye Kaworu
Minister for Foreign Affairs

二　獨國公使回答

第五號

以書翰致啓上候陳者今般貴國政府ニテ編成相成候輸入稅目三部御送附被下候處謹テ致受領候右之中壹部ハ我カ本國外務省ヘ轉送可致候右得貴意度如斯ニ御座候　敬具

東京千八百八十年二月五日

フオン、アイゼンデツヘル

外務卿　井上　馨閣下

（右原文）

No. 5/54　Tokio, den 5. Februar 1880

Euerer Excellenz beehre ichmich den Empfang dreier Exemplare des von Ihrer hohen Regierung neuerdings ausgearbeiteten Importen-Tarifs mit dem ganz ergebensten Bemerken, dass ich nicht ermangeln werde, eine Exemplar derselben dem Äuswärtigen Amt des Deutschen Reichs zu übermitteln.

Ich benutze diese Gelegenheit, Euerer Excellenz die Versicherung meiner ausgezeichnetsten Hochachtung zu erneuern.

v. Eisendecher.

An

den Minister der Auswärtigen Angelegenheiten

Herrn Inouye Kaoru

Excellenz.

一　佛國公使回答

以手紙致啓上候然者本月三日附ヲ以テ貴國輸入商品ニ可相

課御見込之改正稅副書三部御廻附相成我本國巴里ヘ送附可致御依頼之趣正ニ了承致候右者閣下之御依頼ニ應シ速ニ佛國政府ヘ廻附可致且ツ今朝外務大輔ト御面晤之上取極メ候通リ右改正規則書ハ閣下之御請求ニヨリ既ニ客歲十二月十二日我外務省ヘ拙者ヨリ差送リ候稅則草案ト引替且ツ拾遺相成候旨可申遣樣注意可致候右回答得貴意度如斯候　敬具

千八百八十年二月六日

ド　バロウー

外務卿　井上　馨閣下

（右原文）

Tokio, le 6 Février. 1880.

Monsieur le Ministre,

J'ai reçu la lettre que Vous avez fait l'honneur de m'adresser, le 3 de ce mois, pour me prier de transmettre à Paris trois exemplaires révisés du Tarif des droits que Vous désirez prélever sur l'importation des marchandises Européennes au Japon. Conformément à Votre désir, je m'empresserai de faire parvenir ces documents ou Gouvernement Français et j'aurai soin, comme cela résulte d'un entretien que j'ai eu ce matin même avec Mr. le Vice-Ministre des Affaires Etrangères, de faire remarquer qu'ils sont destinés à remplacer et à compléter le projet de Tarif que, sur votre demande, j'ai déjà transmis au Departement le 12 Décembre dernier.

Veuillez agreer, Monsieur le Ministre, les assurances de ma haute considération.

R. de Balloy

Son Excellence

Monsieur Inouyé

Ministre des Affaires Etrangères

&c.　&c.　&c.

九

明治十三年三月十一日　三宮書記官ヨリ　井上外務卿宛

和蘭國駐劄使臣ニ關シ進言ノ件

益々御清康御奉職敬賀仕候當館官員一同無異御放神可被降候

扨過日ハ有栖川宮始各省ノ卿新任ノ電報頂戴仕候處何分事柄不相分ヨリ例ノ想像病ヲ發シ其當座ハ昔日征朝鮮論ノ破

烈セシ儀ニモ有之間敷哉ト案ぜ仕候處森公使ヨリ態々以電信被伺出候節ノ御答ヲ傳聞仕一安堵仕候樣ノ次第ニ御座候尤モ議政行政ノモチーブ委細拜承仕候事ハ否可有之ト本部ヨリノ來信ノミ相待申居候改更之際於閣下ハ不容易御刻苦ニ被爲亘候事カ遠察仕候

扨テ先便條約重修事件ニ付御出板相成候英和對譯ノ稅額書一冊御送被下正ニ落手仕候尤モ右ハ其節被仰聞候如ク各國公使ニモ御照會被爲在候越承知仕候當節ハ獨政府モ英或ハ蘭國等ト頻リニ內議致居候由ニ承リ候當地駐劄阿蘭國書記官ハ從來知人ニ有之候處當節ハ同國公使歸省中ニ付臨時代理相勤メ居候折柄我重修事件ニ付獨政府ト協議ノ命ヲ本國政府ヨリ受居候由ニテ專ラ該事ニ執掌致居候同人ノ口氣相伺候ニ獨政府モ此度我政府ヨリ提出ノ稅額ニ付テハ大ニ其引受方望ミノ有之樣ノ振ニ被察申候然ル處右稅額ハコンペンシヨナールタリフニ有之候カ又ハアウトノミータリフニ有之候哉其上一昨四日我政府ヨリ照會致候開港場稅關ノ規則興廢ノ議日本政府ノ權門ニテ處置スルトノコトハ此節如何ノ見込ニ候哉此邊ハ獨和兩政府ニ於テ大ニ不審ヲ抱キ居候趣キ內々承リ候尤モ此邊ノ議ニ付テハ近日本尾書記生歸

朝致シ候ニ付其節同人ヨリ可申上候將又和蘭國ニテハ我ヨリ駐劄使臣ヲ彼首府ニ不置邊ニ付テハ大ニ不滿ヲ抱キ居候趣キヤニ昨年議院ニテノ論ニハ日本ヨリ駐劄使臣ヲ我國ニ不送サレハ方今日本差出置候公使ノ任滿ル上ハ再ヒ公使ニ差出ザル等紛々議論有之候趣キニ候尤モ右ハ當府在留ノ書記官モ時々不滿ノ語氣相發シ居申候其上獨ト彼國ハ當節不可謂不仲ノ際ニ候處ヘ在伯林府ノ我公使和蘭駐劄ヲ兼任スル邊ハ如何ニモ不滿口上ニ可有之樣被察候間此邊御諒察兼テ被成置可相成答候得共書記官一名カ或ハ臨時代理名目ノ者重修ノ際ニヨリ御差出相成候ハヽ萬端我御都合ニ可有之奉存候尤モ右ハ兼テシイボルトモ掛念致居候ニ付其中同人ヨリモ可奉御意ト奉存候先ハ右早急申上度如是候　頓首

十三年三月十一日

三宮義胤

井上外務卿閣下

一〇　明治十三年六月十三日　井上外務卿ヨリ三條太政大臣宛

森有禮英國外務次官ト條約改正ノ儀ニ付談判ノ次第上申ノ件

英國駐劄特命全權公使森有禮同國外務省ニ於テ外務次官ボンスホート氏ト條約改正ノ儀ニ付談判ノ次第有之右對話書草文ニテ差越候間飜譯ノ上別紙供貴覽候此段上申候也

十三年五月十三日朱書達ス

本文別紙ハ公信局長ヘ相渡置ク

註　對英交渉一七八文書十三年三月十九日森公使來信參照

一一　明治十三年六月二十日　井上外務卿ヨリ三條太政大臣宛

條約改正草案竝ニ關係書類各國政府ニ通知ノ件

甲第百二十八號

條約改正草案進呈之義上申

條約改正草案幷右ニ關係之書類別冊ノ通調整出來候ニ付第壹號ヨリ第十二號迄取擧供閱覽候右ハ今般各國ヘ派出之公使ヲ以テ其在留國政府ヘ爲及通知候樣致度候條至急何分之御指令有之度此段上申候也

十三年五月廿日

外務卿　井上　馨

太政大臣　三條實美　殿

（以下朱書）

上申ノ通

明治十三年六月七日　太政大臣三條實美印

註　附屬書ハ符箋ニ左ノ通リ列記シアルモ寫ノ添附ナシ

附屬書

一　日本及大不列顛兩國間通商及航海條約附錄
一　稅關規則草案
一　噸稅規則草案
一　船稅說略
一　擬定輸入稅目
一　輸入稅率
一　橫濱港則
一　費歩一定說明
第四號、五號ハ內達（此際添付差出サズ）
第十號ハ輸入稅率

註　太政大臣宛上申書本文ニハ第壹號ヨリ第十二號迄トアリ然ルニ本目錄ニハ十一文書アルノミ而モ輸入稅率ハ重複シ居ルヤニ認メラルヽモ之カ次第ヲ知ル能ハス

一二　明治十三年五月二十二日　井上外務卿ヨリ在歐米各帝國公使宛

改正條約案及附屬書送付ノ件

附屬書
一　森公使ヘ送致書類目錄寫
二　日本及大不列顛修好條約草案
三　日本及大不列顛修好條約附錄覺書草案
四　條約諸條款及ヒ裁判權ニ關スル附錄覺書草案ノ叙言
五　日本及大不列顛兩國間通商及航海條約草案
六　擬定輸入稅目
七　輸入稅率草案
八　噸稅規則
九　橫濱港則
一〇　森公使ヘノ內達書
附錄　第一英譯文
同　第二英譯文
一一　鍋島青木長岡鮫島井田柳原六公使ヘノ內達書

五月二十五日發

曾テ電信ヲ以テ申進候通今般青木公使赴任便ニ托シ條約改

正案幷ニ右ニ付屬スル諸書類共別紙目錄之通貴君ニ送致候間御査收可有之候該件ニ付任國政府ト開談之順序ハ內訓狀又ハ內書ニ陳述致シ有之候間右ニ從ツテ其政府ヘ御談判之端緒可被相開候此段申進候也

註　駐米吉田公使ヘハ同日別信アリ、墺國五月廿六日蘭伊七月五日ニテ付與セリ、之等ノ約案ニ對シテ森公使ノ意見書アリ一九三文書以下關係文書參照、尙七月七日諸案再交付サレ居リ一九文書參照

附屬書一

森公使ヘ送致書類目錄寫　（和英）

1 一日本及ヒ大不列顛修好條約幷附錄覺書草案　（和英）
　附　叙言
2 一日本及ヒ大不列顛兩國間通商及ヒ航海條約草案（和英）
3 一同　附錄
4 一內　達　（和英）
　幷附錄　第一　第二
5 一鍋島青木長岡鮫島井口柳原　公使ヘ內達書寫　（和英）
6 一條約改正參考ノ爲メ各港開市アル府縣ヨリ上申シタル書類調査案
7 一條約改正ニ付東京商法會社報告
8 一稅關規則草案
9 一噸稅規則
10 一船稅說略
11 一擬定輸入稅目
12 一輸入稅率
13 一治外法權論
14 一日本帝國輸出入比較表
15 一橫濱港則
16 一費歩一定說明　（和英）
17 一治罪法
18 一刑法
19 一定額稅礎
「朱書」一燈稅規則
　次便送致」
註　本目錄ト簿册綴込附屬書ト合致セズ

附屬書二

日本及大不列顛修好條約草案

日本國皇帝陛下及ヒ大不列顛愛爾蘭統一國皇帝陛下ハ倶ニ雙方ノ國土臣民ノ間ニ幸ニ存スル所ノ親睦ノ交際ヲ維持擴充セン事ヲ冀ヒ兩國間ニ現存セル諸條約及ヒ約定書ヲ修正改良セン事ヲ決意シ之カ爲メニ

日本國皇帝陛下ハ……ヲ其全權大臣ニ任シ

大不列顛愛爾蘭統一國皇帝陛下ハ……ヲ其全權大臣ニ任セリ而シテ此雙方ノ全權大臣ハ互ニ其委任狀ヲ示シ其良好妥當ナルヲ認メ左ノ諸條款ヲ協議決定スルモノナリ

第一條

日本國皇帝陛下及ヒ其儲嗣繼承者ト大不列顛愛爾蘭統一國皇帝陛下及ヒ其儲嗣繼承者トノ間幷ニ雙方ノ國土臣民ノ間ニ永遠不易ノ和好友誼ヲ存スル可シ

第二條

日本國皇帝陛下ハ公使ヲ派遣シ倫敦ニ駐劄セシメ竝ニ總領事、領事若クハ副領事ヲ派遣シ大不列顛及ヒ愛爾蘭又ハ不列顛ノ諸植民地及ヒ諸屬地內何レノ港何レノ市府ニモ駐留セシムル事ヲ得可シ

日本國公使ハ大不列顛國ノ版圖內何レノ地ヲ問ハス自由ニ旅行スルノ權利アル可シ

大不列顛愛爾蘭統一國皇帝陛下ハ公使ヲ派遣シ東京ニ駐劄セシメ竝ニ此條約ニ依テ不列顛國貿易ノ爲メニ開キタル又ハ後來其爲メニ開ク可キ日本ノ各港或ハ市府ニ總領事或ハ副領事ヲ駐留セシムル事ヲ得可シ

大不列顛國公使ハ日本帝國內何ノ地ヲ問ハス自由ニ旅行スルノ權利アル可シ

第三條

日本ノ某港內及ヒ某市內ニ於テ商業ヲ營ム爲メニ住居シ地所ヲ賃借シ家屋ヲ購買シ及ヒ居家倉庫及ヒ禮拜所ヲ建營スル事ニ關シ竝ニ此等ノ港市外某ノ規程內ニ於テ某ノ主意ノ爲メニ自由ニ出行スル權利ニ關シテ從來日本皇帝陛下ヨリ不列顛皇帝陛下ニ許與セル特許及ヒ讓與幷ニ不列顛臣民ニ許與セル特許及ヒ讓與ニ就テハ今此條約ニ依テ左ノ如ク契約明言スルモノナリ

前述ノ特許及ヒ讓與ヲ准許スル所ノ諸條約、約定書、契約、地券、給與狀及ヒ各般ノ公文、公書ノ中ニ就テ此條約ニ附加セル約定書表ニ開列特記スル所ニ係リ而シテ此條約ノ箇條ニ抵觸セサルタケハ（其他尺然ラス）今玆ニ之ヲ保續固定スルモノナリ凡ソ條約或ハ約定書ニ依テ公衆共用ノ爲メ

ニ二箇國以上（大不列顛國共）一列ヘ給付シタル地所ノ如キハ自今以後外國人或ハ外國人ノ組合ヲシテ其地所ヲ支配スルノ權利ヲ有セシム可キ効ナキモノトス依テ右等ノ條約或ハ約定書ノ文義ノ本條ニ抵觸スルモノハ一切無効ノモノタル可シ

但シ公衆共用ノ爲メ保管者ニ給付シタル地所ハ本條ニ載スル所ノ限ニ在ラス

第四條

兩締盟國各自所轄ノ裁判所ニ於テ施行遵奉スル法律及ヒ裁判法ノ甚タ殊異ナルカ爲メニ從來困難ヲ生セシニ因リ又將來困難ヲ生セン事ヲ慮リ茲ニ兩國相結約シ日本ニ於テ左ノ條々ヲ不用ナラシムルカ如キ法律及ヒ裁判法ヲ制定施行スルニ至ルマテハ開港及ヒ開市場ニ在住シ又ハ法律ニ適シテ日本國內開港開市外ニ在住スル不列顛國臣民ノ身體、財產及ヒ權利ニ關シ日本裁判所ノ法權ハ此條約及ヒ之ニ附加セル覺書ノ諸條款ニ從テ施行ス可キモノトス

前述ノ覺書ハ兩締盟國ノ批准ヲ經可キモノナリ但シ爾後ノ修正ハ時々兩締盟國ノ全權大臣ノ間ニ協議ヲ爲シ雙方ノ同意ヲ以テ之ヲ加フル事アル可シ

第五條

此條約及ヒ之ニ附加セル覺書ノ條款ニ從ヒ不列顛皇帝陛下ノ裁判所ニ於テ施行ス可キ一切ノ權利ハ日本帝國ノ現ニ開キタル諸港或ハ市府ニ於テ不列顛皇帝陛下ノ設置シタル裁判所ニテ之ヲ施行利用スル事ヲ得可シ

第六條

凡ソ兩締盟國ノ一方ニ於テ現ニ別國ノ政府或ハ臣民ニ許與シ或ハ將來許與ス可キ殊遇、特許或ハ恩免ハ他ノ一方ノ政府或ハ臣民ニモ亦均シク之ヲ許與ス可シ尤モ之ヲ許與スルニ就キ別國ヨリ報酬ヲ求メサルトキハ他ノ一方ヨリモ報酬ヲ求ムル事ナク若シ又之ヲ許與スルニ別ニ附約アルモノハ則チ之ニ相應スル報酬或ハ特許ヲ求メテ之ヲ許與ス可シ是レ兩締盟國ノ茲ニ結約スル所ナリ

第七條

日本皇帝陛下ハ此條約及ヒ之ト同日附ノ通商及ヒ航海條約中ニ明記確定スルモノヽ外決シテ法權其他何等ノ讓與ヲモ爲サヽルモノト知ル可シ且殊ニ此條約ヲ以テ不列顛皇帝陛下ニ讓與スル所ノ法權ハ單ニ裁判權ニ止マル者ト知ル可シ但シ之ニ反對スルノ意義明白ニシテ更ニ疑ヲ容レサルモノハ此限ニ在ラス

凡ソ立法權或ハ行政權ニシテ從前不列顛國皇帝陛下ノ爲メニ其公使又ハ領事官タル者ノ執行シ或ハ執行セン事ヲ要求セシモノハ其日本政府ノ法律或ハ規則ヲ補助スル爲メナルト之ニ代ラシムル爲メナルトニ拘ハラス將來一切之ヲ執行ス可ラス又之ヲ執行セン事ヲ要求ス可ラス但シ爰ニ揭示スル所ト雖トモ此條約ニ附加セル覺書第一款中特別ニ定ムル所ノ事件ニ就キ其公使又ハ領事官等ヲシテ當然執行セシム可キ諸權ノ如キハ該款ノ存立スル間之ヲ不列顛皇帝陛下ヨリ褫奪スルモノト視做ス可ラス

第八條

此條約ハ日本國皇帝陛下ト大不列顛愛爾蘭統一國皇帝陛下トノ批准ヲ經其日附ヨリ……箇月內ニ……ニ於テ互ニ其批准ヲ交換ス可シ

此條約及ヒ同日ニ兩締盟國間ニ締結スル所ノ通商及ヒ航海條約ヲ批准シテ之ヲ履行スル上ハ專ラ此諸條約ヲ遵守シ是迄日本ト大不列顛ノ間ニ交換シタル諸條約、約定及ヒ契約書幷ニ其中ニ載スル諸約款ハ何等ヲ論セス悉皆無効タル可シ但シ此條約ノ第三條ニ載スル所竝ニ此條約ニ附加セル約

定書表ニ開列特記スル所ノ諸約定及ヒ他ノ事項ハ此限ニ在ラス

右證據ノ爲メ雙方ノ全權大臣ハ此條約ニ署名シ各其印ヲ捺スルモノナリ

明治……年……月……日　卽チ千八百八十年……月……日……ニ於テ

附屬書三

日本及ヒ大不列顛修好條約附錄覺書草案

……年……月……日日本國皇帝陛下ト大不列顛愛爾蘭統一國皇帝陛下ノ間ニ締結スル修好條約中ニ揭クル所ノ法權ニ關スル覺書

此覺書ノ諸款節幷ニ前述ノ條約中ニ定メタル方法ヲ以テ後來此覺書ニ加フ可キ諸修正ハ總テ右條約ノ諸條規ニ係屬スルモノニシテ單ニ該諸條規ノ存スルカ爲メニ其効力ヲ有スルモノトス是レ兩締盟國ノ茲ニ契約明言スル所ナリ

第一款

（第一節）　凡ソ財產上若クハ身體上ノ權利ニ關シテ專ラ不列顛國臣民ノ中或ハ其間ニ起ル所ノ諸論件ハ獨リ不列顛國有司ノ法權ニ歸ス可シ

（第二節）　凡ソ財産上若クハ身體上ノ權利ニ關シテ不列顛皇帝陛下ノ政府若クハ臣民ト他國（卽チ日本及ヒ不列顛外ノ各國）政府若クハ臣民トノ間ニ起ル所ノ諸論件ハ亦均シク大不列顛ト其他國トノ間ニ存スル條約又ハ契約ニ從テ或ハ不列顛有司ノ法權ニ歸シ或ハ其他國ノ有司ノ法權ニ歸ス可シ

第二款

（第一節）　日本臣民ト不列顛臣民ノ間ニ起ル所ノ民事訴訟ニ係ル諸論件ニ於テハ（本款ニ載スル例外ヲ除キ）獨リ被告方ノ管轄裁判所ノミ其法權ヲ有ス可シ但シ不列顛臣民ノ民事訴訟ノ被告タル一切ノ場合ニ於テ若シ本條約第五條中ニ不列顛皇帝陛下ニ附與シクル權力ニ據テ日本國內ニ設置スル所ノ裁判所ニシテ其訴訟ヲ審判スルニ相當シタルモノ有ラサルトキハ本節ノ法權讓與ハ無効ノモノタル可シ

（第二節）　凡テ仲理方法、訴訟法及ヒ判決實行方法ニ關スル所ノ諸事ハ專ラ本件ヲ審判スル裁判所ノ法律ニ從フ可シ

（第三節）　何レノ裁判所モ本款中上ニ揭クル所ノ諸條規ノ爲メニ一切ノ反訴（其裁判所ノ規則ニ因テ受理ス可キモノ）ヲ受理審判ス可キ法權ヲ失フ事ナシ

（第四節）　日本臣民ト不列顛臣民ノ間ニ取結ヒタル一切ノ會社ニ關係シ或ハ之ニ由テ起ル所ノ事件ニ就テハ日本裁判所ニ限リテ民事裁判ノ法權ヲ有ス可ク假令此覺書中之ニ反スル箇條アリトモ措テ問ハサル可シ且右ノ如キ會社及ヒ其社務ニ關スル事件ニ係ハリテハ其社員タル不列顛人幷ニ該社ノ總財產ハ共ニ專ラ日本裁判所ノ法權ニ從フヲ要ス可シ但シ（其財產ノ性質或ハ所在ニ由リ）日本法律ニ於テ外國人ニ所有又ハ支配ノ權利ヲ許サヽル所ノ財產ヲ取扱フ可キ目的ニテ日本人ト不列顛人ノ間ニ取結ヒタル會社ハ總テ之ヲ法律ニ反クモノト爲ス可シ

第三款

不列顛國臣民ニシテ日本ノ臣民ニ對シ若クハ日本外ナル各國ノ人民或ハ政府ニ對シテ罪科或ハ犯罪タル可キ所爲アリト訴ヘラルヽトキハ日本國內ナル不列顛皇帝陛下ノ裁判所ニ於テ之ヲ審問シ而シテ若シ其告訴ニ係ル所ノ所爲ハ大不列顛ノ法律ニ於テ罪科或ハ犯罪ト認ムルモノナルトキハ其有罪ニ決スル上該裁判所ニ於テ不列顛法律ニ從ヒ之ヲ處罰ス可シ若シ又其告訴ニ係ル所ノ所爲ハ大不列顛ノ法律ニ於テ罪科或ハ犯罪ト認ムルモノニ非サルトキハ其被告人ハ何

ノ裁判所ニテモ處罰セラルヽ事ナカル可シ

但シ若シ日本ニ於テ不列顛皇帝陛下ノ設立セル裁判所アラサルカ或ハ之アリトモ其裁判所ハ大不列顛ノ法律ニ於テ該罪犯ニ擬スル所ノ處罰（若シ處罰ス可キモノナルトキハ）ヲ實行ス可キ法律ヲ有セサルトキハ本款ノ法權讓與ハ無効ノモノタル可シ

不列顛臣民ヲ審問シ及ヒ處罰スルノ件ニ關シ此覺書又ハ本條約ニ依テ准許スル所ノ讓與中ニハ捕縛ノ權ヲ含有セサル事ヲ爰ニ明言ス

第四款

日本裁判所ハ前款又ハ其他ノ條件アリト雖トモ夫カ爲メ日本法律ニ於テ卽斷ヲ以テ受理處罰ス可キ小罪ヲ日本臣民ニ對シテ犯セル所ノ不列顛臣民ニ卽斷審判ヲ以テ二圓ニ超過セサル罰金ヲ課スヘキ法權ヲ失フ事ナシ

第五款

不列顛臣民ニシテ日本法律ニ於テ官府ニ對スル（各個人若クハ他國政府ニ對セサル）罪科、犯罪又ハ有罪ノ所業（全國或ハ一地方ニ關スル警察規則或ハ施政規則ニ對スル犯罪モ亦此中ニ含有ス）ト認ムル所ノ所爲若クハ其時々日本ト

大不列顛ノ間ニ履行スル條約或ハ約定書ニ於テ犯罪ト認ムル所ノ所爲アリト訴ヘラレ而シテ日本法律ニ照シ或ハ右條約若クハ約定書ニ依テ斯ル罪科或ハ犯罪ニ處スル刑罰ノ極度禁獄三箇月罰金五百圓ニ超過スルトキハ該件ハ不列顛皇帝陛下ノ裁判所ニ於テ之ヲ審判ス可ク若シ有罪タラハ該裁判所ニ於テ之ヲ處罰ス可シ但シ本款ニ因テ不列顛皇帝陛下ノ裁判所ノ法權ニ歸シタル罪犯ト雖トモ若シ前述在日本不列顛裁判所ニ於テ均シク之ヲ罪科、犯罪又ハ有罪ノ所業タリトシテ審判スル事ヲ得ス且不列顛皇帝陛下ノ所領內ノ裁判所ニ於テ之ト同樣ノ罪犯ヲ罰スルト同一ノ程限ニ從テ之ヲ處罰スル事ヲ得サルトキハ本款ノ法權讓與ハ無効ノモノタル可シ

且又各般ノ場合ニ於テ其時々行ハルヽ所ノ日本稅關ノ法律或ハ規則ニ從テ罰金、贈金或ハ沒收品ヲ徵收スル事件ノ如キハ右讓與ノ限ニ在ラス

本條約關係ノ約定書表

（此表未タ稿ヲ完フセス）

附屬書四

條約諸條款及ヒ裁判權ニ關スル附錄覺書草案ノ叙言

第一　此條約幷ニ附錄覺書ヲ草案スルノ主意ハ是迄明文ナキ所ノ事項ヲ明ニ條款中ニ載セ且是迄明解セサル所ノ文義ヲ明確ニ解釋スルニ在ルナリ

第二　舊條約中權限ニ關スル條款ノ甚タ簡短ナルカ爲メニ從來非常ノ困難ヲ生セシ事アリ蓋條約中文義ノ明ナラサル所ニ於テハ一事一物之ヲ公使ノ見解ニ任セシユヘ自然權限上ニ於テ一種ノ慣習ヲ生シ來レリ信スルニ其慣習タルヤ多クハ條約ノ語中ニ憑據ナキモノニシテ自ラ不都合ヲ釀成シ實地ニ於テ甚シキ指閊ヲ生スルニ至レリ

第三　從來權限ノ事ニ關シテ困難ノ生セシハ主トシテ日本政府ノ警察規則及ヒ其他ノ施政上ノ規則ヲ犯スヨリ生スル所ノ刑事裁判ニ在ルナリ

外國人ヲシテ右等ノ規則ニ從ハシムルハ日本ノ權利ニ非スト云ヒ（是レ謬見ナリト信ス）又日本ニ裁判廳ヲ設ケタル各國ノ法律ハ斯ル場合ニ施スヘカラサルモノタルニ因リ其處分ハ必然左ノ二者ニ於テ其一ニ居ラサルヲ得サルナリ卽チ（其一）外國人ハ右等一切ノ日本ノ規則ニ從ハスシテ全ク其罰ヲ免カル、事ヲ得或ハ至小ノ罰ヲ受クルニ止マル事（其二）若シ其罪ヲ犯スモノ某國人ナルトキハ其國ノ公使ヲシテ立法權ヲ施行セシメ以テ右等ノ規則ヲ間接ニ該國人ニ施ス事是ナリ抑或國ノ公使ノ要請スル所ハ右等ノ規則ニ從フト否ラサルトハ全ク自己ノ取捨ニ任スヘシト云フニ在リ又右等一切ノ案件ニ處スルノ罰則ハ必シモ法律ノ定ムル所ニ從ハス唯公使カ專斷ヲ以テ之ヲ定ムルカ又ハ自國ノ法律ニ準シテ之ヲ定メシノミ

第四　右ノ如キ情況ヨリ生スル所ノ困厄ハ玆ニ之ヲ贅言スルヲ要セス又現行條約ニ就キ妥當公正ノ見解ヲ下スニ於テハ右等ノ法律ヲ外國人ニ施スヘキ權利ハ果シテ日本ノ政權ヨリ剝奪セサルモノニ非サルヤ否玆ニ之ヲ論辨スルヲ冀ハス其故何トナレハ其果シテ然ルト否サルトニ論ナク現在ノ如キ條約ノ見解ト其見解ニ原ツキタル慣習ハ論理上及ヒ實際上ヨリ其結果ヲ考察スルニ決シテ允諾スヘキモノニ非サルヲ以テナリ

第五　右ノ困難ヲ免カルヽノ手段ハ（之ニ關涉スル所ノ國幾許ナルヤ該國法律ノ日本法律ニ異ナル所ハ如何ナルヤ日本駐劄ノ該國公使或ハ領事カ堂握スル所ノ立法司

法ノ權力ハ何等ノモノナルヤヲ顧ルトキハ）今後是等ノ困難ヲ生スヘキ一切ノ事件ニ關シ日本ヲシテ其政權ヲ全フセシムルニ在ルノミ

第六　一タヒ右ノ主義ニ從フトキハ右等ノ困難ヲ生スヘキ諸件ト同一ノ部類ニ屬スル諸案件ハ一切之ヲ日本ノ權內ニ歸セサルヘカラサル事勿論タリト雖トモ現今ニ於テハ該權ノ全部ヲ實際ニ施行セン事ヲ約定スルニ及ハス唯（一ニハ）是迄現ニ困難ヲ生シタル各事件ト（二ニハ）外國法律（殊ニ日本ニ於テ施行シ得ヘキ外國法律）ノ不十分ナルヨリシテ苟モ日本固有ノ裁判權ニ從ハサルトキハ全ク外國裁判ニ放任セサルヲ得サル所ノ諸件トニ限リ之ヲ日本ノ權內ニ歸セシムルヲ要スヘシト思惟ス

第七　上章ノ考案ニ據レハ右ニ揭クル部類ノ外ニ屬セル若干ノ刑事案件ニ就テモ右ト同樣ノ條款ヲ設クルヲ要スヘシ

第八　右兩事件ニ關スル所ノ條款中或ハ大不列顚トノ條約ニ於テ必要ナラサル者ナキニ非スト雖トモ其之ヲ設クル所以ノモノハ（第一）其愈確實ナラン事ヲ欲スルカ爲メ（第二）他ノ法律ヲ異ニスル國々トノ條約ニ於テ之ヲ須要トスルカ爲メナリ抑モ裁判權ニ關スル所ノ條款ハ十分ニ宏博ナラシメ以テ一切ノ事件ヲ網羅シ他諸國ト同樣ノ條款ヲ設クルヲ得セシメン事ヲ要ス

第九　從來外國人ハ漠然ト治外法權及ヒ特許ヲ口實トシテ行政司法ノ兩件ヲ要請スルニ因リ大ニ施政上ノ困難ヲ釀成セリ抑是等ノ權ヲ要請スルハ諸條約中ニ明確ノ憑據ナキモノニシテ日本政府ニ於テ或ハ之ヲ許容スル事アルモ決シテ其要請ヲ當然ナリトシテ之ヲ允諾スルニ非ス是ヲ以テ此草案ニ於テハ（第一）分明ニ司法權ト他ノ權トヲ區別シ而シテ其舊來旣ニ許與セルモノ（卽チ司法ノ權）ノミヲ是迄ノ如ク許與シ（第二）今後其權ヲ許與スル所ノ事項及ヒ其之ヲ許與スルノ方法程限ヲ明細ニ開列シ（第三）明ニ條款中ニ載セ且合格ノ法式ニ從ヒ許與シタルモノヽ外ハ何等ノ權ト雖トモ一切之ヲ要請スヘカラサル旨ヲ明言スルヲ要スヘシト思惟ス

第十　此草案ノ諸條款ハ兩國ノ權利ノ現ニ存スル所ノモノヲ明釋分疏スルモノニ非ス唯將來ノ權利ニ就キテ約條

ヲ設クルノミ然レトモ法理上ヨリ之ヲ見ルニモ又法理ニ基キテ之カ見解ヲ下スニモ其條款ハ多分現行條約ノ條款ヲ擴充詳解スルモノト甚タ異ナル所アラス故ニ日本政府ノ考案ニ從ヘハ此條約ハ決シテ新規ノ考案ニ出ルニ非サル事ヲ切言セサルヘカラス抑日本ハ此條約ヲ以テ（一二ノ瑣事ヲ除クノ外）嘗テ失ヒシ所ノ權利ヲ恢復セン事ヲ求ムルモノニ非ス唯諸般ノ原因ヨリシテ是迄實施スル事ヲ得サリシ所ノ權利ヲ（程限ヲ定メ且實地ニ行フヘキ見込ヲ以テ）實際ニ施行スルヲ得ン事ヲ要ムルノ意ナルノミ

註　題目ニ相異アルモ前項目錄ニ云フ叙言之ニ當ルベシ

附屬書五

日本及ヒ大不列顛兩國間通商及ヒ航海條約草案

一日本國皇帝陛下竝ニ大不列顛及ヒ愛爾蘭土國皇帝陛下ハ更ニ兩國人民ノ通商ヲ振興セシメン事ヲ希望スルニ付通商及ヒ航海條約ヲ結締スル事ノ必要ナルヲ察シ因テ

日本皇帝陛下ハ……

大不列顛皇帝陛下ハ……

ヲ其全權大臣ニ命シタリ而シテ兩國ノ全權大臣ハ相互ニ

各自ノ委任狀ヲ示シ其良好允當ナルヲ認メ以テ左ノ條々ヲ協議決定セリ

第一條

一締盟兩國ノ人民ハ各自相互ニ他ノ一方ノ版圖内ニ在ル諸所諸港及ヒ諸河ニシテ別國人民ヘ通商ヲ許可シタル場所ニ船舶及ヒ貨物ヲ以テ自由安全ニ來航スルノ自由ヲ有ス可シ又兩國人民ハ上ニ記ス所ノ場所ニ居住シ其場所ニ於テ家屋倉庫ヲ借受ケ之ヲ占有シ竝ニ法律ノ禁止セサル一切ノ產物製造品及ヒ商品類ヲ卸賣買或ハ小賣買スル事ヲ得可シ

一締盟兩國ノ軍艦ハ前項同樣相互ニ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ別國軍艦ヘ進航投錨滯在及ヒ修覆ヲ許可シ或ハ將來許可ス可キ諸所諸港及ヒ諸河ニ入港スルノ自由ヲ有ス可シ而シテ兩國地方規則ノ外國軍艦ニ照用ス可キモノハ雙方相互ニ之ニ服從スヘシ

一本條ノ條款ハ沿海貿易ニ照用ス可ラス該貿易ハ兩國相互ニ之ヲ自己ノ權内ニ貯存シ各自ノ法律ニ從テ之ヲ管理ス可シ

第二條

一締盟兩國ノ一方ニテ現ニ別國人民ニ許與シ或ハ將來許與ス可キ通商或ハ航海ニ關スル殊遇特許或ハ優免ハ總テ他ノ一方ノ人民ニモ均シク之ヲ許與ス可シ而シテ此殊遇特許或ハ優免ハ若シ報酬ヲ要セスシテ別國ニ許與シタル者ニ係ハレハ均シク亦報酬ヲ要セスシテ之ヲ許與シ若シ別段ノ約束ニ依テ許與シタル者ニ係ハレハ之ト同樣ナルカ又ハ之ニ相應スル約束ヲ以テ之ヲ許與ス可シ

第三條

一日本皇帝所領内ノ諸港ニ於テ噸稅、燈明稅、港稅、水先案内料、檢疫費、難破船救費或ハ其他何等ノ地方課金ニテモ日本船舶ニ賦課スル者ヨリ過多ナルカ或ハ之ニ異ナル稅金或ハ費金ヲ同一ノ港及ヒ同一ノ場合ニ於テ不列顛船舶ニ賦課スル事ナカル可シ又不列顛皇帝所領内ノ諸港ニ於テモ不列顛船舶ニ賦課スル者ノ外同一ノ港及ヒ同一ノ場合ニ於テ日本船舶ニ賦課スル事ナカル可シ

第四條

一日本皇帝所領内ノ產出或ハ製造ニ係ル一切ノ物品ヲ不列顛皇帝所領内ニ輸入スルニ際シ又ハ不列顛皇帝所領内ノ產出或ハ製造ニ係ル一切ノ物品ヲ日本皇帝所領内ニ輸入スルニ際シ共ニ他ノ別國ノ產出或ハ製造ノ同種物品ニ賦課シ或ハ賦課ス可キ稅額ヨリ過多ナルカ或ハ之ニ異ナル諸稅ヲ賦課スル事ナカル可ク又兩國一方ノ版圖内ニ於テ他ノ一方ノ版圖内ニ輸出スル一切ノ物品ニ向テ現ニ別國ニ輸出スル同種物品ニ賦課シ或ハ將來賦課ス可キ者ヨリ過多ナルカ或ハ之ニ異ナル諸稅或ハ費金ヲ賦課スル事無カル可シ又兩國一方ノ版圖内ニ於テ別國ノ產出或ハ製造ニ係ル物品ノ輸入ヲ禁止セサル間ハ他ノ一方ノ版圖内ノ產出或ハ製造ニ係ル同種物品ノ輸入ヲモ禁止スル事無カル可ク又兩國一方ノ版圖内ニ於テ別國ニ向ヒ物品ノ輸出ヲ禁止セサル間ハ他ノ一方ノ版圖内ニ向テ同種物品ノ輸出ヲモ禁止スル事無カル可シ

第五條

一現時或ハ將來法律ニ適シテ輸入シ得可キ一切ノ物品ヲ日本皇帝所領内ニ輸入スルニ際シ其輸入ハ日本船舶ヲ以テシ或ハ不列顛船舶ヲ以テスルニ論ナク總テ一樣ノ稅ヲ賦課ス可ク又現時或ハ將來法律ニ適シテ輸入シ得ヘキ一切ノ物品ヲ不列顛皇帝所領内ニ輸入スルニ際シ其輸入ハ不列顛船舶ヲ以テシ或ハ日本船舶ヲ以テスルニ論ナク總テ

一様ノ稅ヲ賦課ス可シ而シテ又現時或ハ將來法律ニ適シテ輸出シ得可キ一切ノ物品ヲ日本皇帝所領内ヨリ輸出スルニ際シ其輸出ハ日本船舶ヲ以テシ或ハ不列顛船舶ヲ以テスルニ論ナク總テ一様ノ稅ヲ賦課シ並ニ一様ノ拂戻金ヲ許與ス可ク又現時或ハ將來法律ニ適シテ輸出シ得可キ一切ノ物品ヲ不列顛皇帝所領内ヨリ輸出スルニ當リ其輸出ハ不列顛船舶ヲ以テシ或ハ日本船舶ヲ以テスルニ論ナク總テ一様ノ稅ヲ賦課シ竝ニ一様ノ拂戻金ヲ許與ス可シ

第六條

一締盟兩國ノ人民ハ各自相互ニ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ港内警察、荷積陸揚竝ニ商品貨物ノ納庫及ヒ其保護ニ關スル一切ノ事項ニ付キ内國人同樣ノ特許、自由及ヒ權理ヲ享用ス可シ且此等ノ事項ニ關シテ現時内國人ニ賦課シ或ハ將來賦課スヘキ者ヨリ過多ナルカ或ハ之ニ異ナル諸稅或ハ費金ヲ賦課セラルヽ事無カル可シ

第七條

一締盟兩國ハ通商便利ノ爲メ各自相互ニ總領事、領事、副領事及ヒ代領事ヲ命シ之ヲ他ノ一方ノ版圖内ニ在住セシムル事自由タル可シ然レトモ右ノ總領事、領事、副領事及ヒ代領事ハ其職務ヲ取扱フ前ニ定例ノ法式ニ從ヒ先ツ在任國政府ノ認可ヲ受ケサル可ラス又此締盟兩國ノ領事官ハ各自相互ニ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ最優待國ノ同級ナル領事官ニ現時許與シ或ハ將來許與スヘキ一切ノ特許、免除、優免ヲ享有ス可シ

第八條

一締盟兩國一方ノ軍艦或ハ商船若シ他ノ一方ノ沿海ニ於テ淺洲ニ乘上ケ或ハ難破シタル節該軍艦或ハ商船及ヒ其總部、該艦船附屬ノ諸什具物品類、荷物幷ニ商品、海中ニ投棄シタル物品或ハ該物品ヲ賣拂ヒタル代金竝ニ該艦船中ニテ見出シタル一切ノ書類ハ該艦船ノ持主或ハ其代人ヨリ法ニ照シテ之ヲ要求スルトキハ悉皆之ヲ引渡ス可シ若シ右持主或ハ代人トモ其場所ニ在ラサル節ハ其他ニ在留スル日本或ハ大不列顛ノ（其場合ニ隨ヒ）領事官ヨリ其在留國ノ法律ヲ以テ定メタル期限内ニ之ヲ要求スルトキハ則チ右領事官ニ引渡ス可シ且又此事ニ關シ右領事官持主或ハ其代人ハ右貨物保存費幷ニ内國船難破ノ節拂フ可キ難破船救費或ハ其他ノ費用ノミヲ拂フ可シ

一難破船ノ荷物及ヒ商品ハ一切關稅ヲ免除ス可シ然レトモ若シ消費ノ爲メ之ヲ荷捌キスルトキハ尋常ノ手續ヲ以テ該品ヲ輸入シタルト同樣ノ稅額ヲ納メシム可シ

第九條

一締盟兩國ハ左ノ如ク約定セリ若シ來ル……日前ニ此通商及ヒ航海條約ノ批准ヲ交換スルヲ得ハ右……日前ニ此ヨリ若シ又該日限前ニ交換シ得サルトキハ右ノ批准交換ノ日ヨリ爾後日本國ニ輸入スル不列顛皇帝所領内ノ產出或ハ製造ノ物品ニシテ此條約ノ附錄第一號ニ揭載シタル者ニハ同附錄所揭ノ稅額ヲ賦課スル事ヲ得ヘシ同附錄ニ揭載セサル物品ニハ日本稅關ノ普通稅目ニ依テ課稅ス可シ其稅額ハ該物品ノ產出地或ハ製造地ノ價格ニ第十條ニ揭載スル諸費ヲ加ヘ其總額ノ百分ノ三十ヲ超過セサル可シ

第十條

一日本皇帝ノ所領内ニ輸入スル物品ノ從價稅ハ該品ノ產出地或ハ製造地ノ價格ニ日本國内該品陸揚港マテノ運送賃保險料及ヒ口錢ヲ加ヘ其總額ニ對シテ計算ス可シ

一右從價稅徵收ノ爲メ輸入人ハ輸入品ノ原價竝ニ品名及ヒ前項ノ諸費額ヲ記載シタル告書ヲ稅關ニ差出ス可シ若シ稅關官吏ニテ右申告ノ價格ヲ不十分ナリト思惟スルトキハ稅關鑑定役ヲシテ其價格ヲ鑑定セシム可シ而シテ輸入人若シ二十四時内ニ其再鑑定ヲ請求セサルトキハ此價額鑑定ヲ以テ終結定着ノ者ト爲ス可シ

第十一條

一輸入人若シ前條ノ如ク再鑑定ヲ請求スルトキハ其再鑑定ノ爲メ自カラ評價人ヲ選定シ更ニ評價セシムル事ヲ得然レトモ稅關官吏ニ於テ其評價ヲ承諾スル事ヲ欲セサルトキハ其評價ニ百分ノ五ノ口錢ヲ加ヘ以テ該品ヲ輸入人ヨリ買上ル事自由タル可シ

第十二條

一日本皇帝所領内ニ於テ輸出稅ヲ增加新設又ハ再設（註　コヽ初メ）スルニハ其公告ノ日ヨリ六箇月ノ後ニ非サレハ効力ヲ有セサルモノトス

第十三條

一締盟兩國ノ一方ニ於テ内國產出或ハ製造物品ヘ新ニ製產稅又ハ内國稅ヲ課スルトキ或ハ現行ノ製產稅或ハ内國稅ヲ增課スル事アルトキハ他ノ一方ノ版圖内ヨリ同種物品ヲ輸入スルニモ亦之ニ平均賠償ス可キ稅ヲ賦課スルヲ得

領内ニ在留スル日本人民ハ總テ強募ノ海陸兵役及ヒ強募ノ公債或ハ軍用課金ヲ免除セラル可シ

第十六條

一不列顛人民ニシテ日本國内外國通商ノ爲メニ開カサル場所ニ於テ商品ヲ購買或ハ販賣シ若クハ其購買或ハ販賣ヲ契約スル者アレハ總テ其商品ヲ取押ヘ從テ之ヲ沒收ス可シ

又不列顛國ノ船舶ニシテ外國通商ノ爲メニ開カサル日本ノ海港ヘ通商ノ爲ニ入來ル事アル時ハ其船舶ニ對シテ一千圓ノ罰金ヲ課ス可シ且其陸揚船積或ハ船移ヲ爲シ又ハ陸揚船積或ハ船移ヲ爲サントセシ所ノ商品竝ニ該商品ノ輸送ニ用ヒタル諸端船及ヒ其他ノ物件ハ盡ク之ヲ取押ヘ從テ之ヲ沒收ス可シ

第十七條

一不列顛人民ニシテ其筋ノ日本官吏ヨリ受ケタル特別ノ免許狀ヲ所持セスシテ條約規程外ニ出行スルカ又ハ其免許狀ノ箇條或ハ制限ニ違背シ或ハ之ヲ忽諸スルニ於テハ地方官吏ハ直ニ之ヲ其規程内ナル最寄ノ地ニ送還シ又止ムヲ得サル場合ニ於テハ之ヲ警護シテ其地ニ送還シ此ノ如キモノハ此條約ニ對シテ罪ヲ犯スル者ト視做シ其犯罪ニ決スルニ於テハ每犯百圓ニ超過セサル罰金ヲ課シ及ヒ其再犯以上ニ及フモノハ二百五十圓マテノ罰金ヲ課ス可シ

第十八條

一凡ソ罰金、贖金及ヒ沒收品ニシテ日本皇帝陛下政府ノ官衙或ハ官吏ノ徵收スル所ニ係リ又ハ其官衙或ハ官吏ノ告訴ニ由テ徵收スル所ニ係ルモノハ其何ノ裁判所ニ於テ何ノ手續ヲ以テ徵收シタルヲ問ハス總テ日本皇帝陛下ノ政府ニ屬スルモノトシテ之ヲ該政府ニ納メシム可シ、

第十九條

一此通商及ヒ航海條約ハ右ノ批准交換ノ日ヨリ十箇年間之ヲ履行シ又締盟兩國ノ一方ヨリ此條約ヲ廢止セントスルノ意ヲ他ノ一方ヨリ通知シタル後十二箇月間尙之ヲ履行ス可シ而シテ其廢止セントスルノ意ハ該兩國各滿九箇年ノ時或ハ其後何時タリトモ之ヲ通知スルノ自由ヲ有ス

一締盟兩國ハ各自互ニ實驗ニ由テ裨益ト認メタル事ニ關シ雙方ノ承諾ヲ以テ此條約ニ改正ヲ加ルノ權ヲ有ス

第二十條

一此條約ハ雙方之ヲ批准シ其條約調印ノ日附ヨリ……

箇月以内……ニ於テ交換ス可シ

一此條約批准ノ上之ヲ履行スルニ於テハ專ラ此條約ヲ遵奉シ從前通商及ヒ航海ニ關シテ日本ト大不列顛ノ間ニ結ヒタル條約、約定書及ヒ契約書ハ一切之ヲ廢止ス可シ但此條約ト同日ニ締盟兩國ノ間ニ締結セル修好條約中ニ記載スル所ノモノハ此限ニ在ラス

右證據トシテ兩國ノ全權大臣此條約ニ署名鈐印スル者也

明治……年……月……日即チ千八百八十年

……月……日……ニ於テ

附屬書六

擬定輸入稅目

稅目例則

一編中謂フ所ノ斤ハ帝國ノ秤量ニシテ即英國アヴォルデュポイスヴエイト（アウンス）ノ二十一兩三分ノ一若クハ一磅（パウンド）三分ノ一佛國ノ六百零四具（グラム）七二五三ニ當ル但担（ピコル）ハ一百零々斤ノ別名ニシテ又ハ斤百六十分ノ一也

一尺量ノ碼（ヤード）、幅及因（フートインチ）ハ英國ノイムペリアル、メジュールス、オフ、レングスニシテ其一碼ハ卽帝國ノ曲尺三尺零一分六厘零八絲若クハ鯨尺二尺四寸一分二厘八毛六絲佛國ノ九百一十四美（メートル）六三四ニ當ル但其幅ハ碼三分ノ一ニシテ因ハ幅十二分ノ一也

一斗量ノ瓦（ガロン）、骨（クウオルト）及巴（パイント）ハ英國ノイムペリアル、メジュールス、オフ、カパシテイー、フオル、リクイヅニシテ其一瓦ハ立積二百

七十七因二七四ニ當リ卽帝國ノ二升五合零三六三佛國ノ四黎五
四五四五四ニ同シ但其骨八瓦四分ノ一ニシテ巴八骨二分ノ一也
一編中揭載スル所ノ物品ハ之ヲ大別シテ十六部門トス第一藥材製藥
第二染料顏料第三金屬第四皮角蹄牙第五油蠟第六布帛第七文具第
八酒第九砂糖第十煙草第十一飮食物第十二衣服及其附屬品第十三
雜貨第十四無稅品第十五禁制品第十六制限品是也

輸入稅目

第一　藥材及制藥之部

一　硫　酸　　每斤四厘
二　明　礬　　每担十三錢
三　龍腦（精粗ノ別無ク）　　每斤五十五錢
四　烙魯兒化石灰　　每担十八錢
五　丁香（母子ノ別無ク）　　每斤四錢
六　人　參　　每斤七錢五厘
七　膠（各種ノ）　　每斤一錢
八　麝香及麝香皮　　每匁十錢
九　甘　松　　每斤一錢二厘
一〇　腐蝕曹達　　每担三十錢
一一　洗濯曹達　　每担十錢

第二　染料及顏料之部

一二　染　粉（名稱ノ何タルヲ論セス帝國ニ於テソメコト通稱スル）　　每斤二十二錢五厘
一三　紺青（乾濕ノ別ナク鑛物ヨリ製出シタル支那靛、宇漏生靛別製靛、巴黎靛等ノ）　　每斤四錢
一四　洋　紅　　每斤六十錢
一五　呀嚕蟲　　每斤八錢五厘
一六　五倍子　　每斤八厘
一七　雌　黃　　每斤五錢
一八　乾　藍　　每斤二錢五厘
一九　水　藍　　每斤三錢五厘
二〇　鉛粉及亞鉛粉（各色ノ）　　每斤一錢三厘
二一　蘇木越斯　　每斤一錢三厘
二二　色　油　　每斤八厘
二三　紅　花　　殘斤七錢三厘
二四　郡　青　　每斤一錢六厘
二五　洋　漆　　從價百分ノ十
二六　絲　青　　每斤二錢六厘
二七　朱　　每斤九錢
二八　蘇木及伯西兒木　　每担三十五錢
二九　其他別項ニ揭載セザル染料及顏料類　　從價百分ノ十

第三　金屬之部

一類

三〇　安質母尼　　每斤八厘
三一　青　銅　　從價百分ノ五
三二　銅及黃銅類（條　竿　塊　錠ノ別無ク）　　每斤一錢三厘
三三　板銅及板黃銅類　　每斤二錢五厘
三四　管銅及管黃銅類　　從斤百分ノ十

三五　故銅及故黃銅類（改造適用ノ）　　從價百分ノ五
三六　白　銀　　每斤四錢五厘
三七　塊　鐵　　每担九錢
三八　條鐵竿、鐵　箍、帶　鐵、桁　鐵、釘　鐵、丁　鍛及了鐵　　每担二十二錢五厘
三九　板　鐵、鍍　鐵及有紋板鐵　　每担六十錢
四〇　筒鐵及管　鐵　　從價百分ノ十
四一　屋　鐵（電鍍シタル）　　每担七十五錢
四二　故鐵（改造適用ノ）　　從價百分ノ五
四三　鉛（條塊錠ノ別無ク）　　每担四十錢
四四　板鉛（別項ニ揭載セサル）　　每担七十五錢
四五　筒鉛及管鉛　　每担八十四錢
四六　白　銅　　每斤五錢
四七　鋼（條塊錠ノ別無ク）　　每担四十錢
四八　板　銅　　每担一圓
四九　錫（條塊錠ノ別無ク）　　每担一圓二十錢
五〇　亞鉛（條塊錠ノ別無ク）　　每担四十三錢
五一　板亞鉛　　每担九十三錢

二類

五二　鐵釘類（大釘、無頭釘、平頭釘、曲頭釘、曲尾釘、平尾釘等電鍍シタルト否トヲ問ハズ）　　每斤一錢
五三　銅釘及黃銅釘類　　每斤四錢五厘
五四　其他諸金屬釘類　　從價百分ノ十五
五五　螺旋釘及牝牡螺旋釘類（各種ノ）　　從價百分ノ十五
五六　葉鐵（箱ニ入リタル）　　每斤七厘
五七　鐵線及直徑一因ノ四分一ヲ超エサル卷輪ノ細竿鐵類　　每斤八厘
五八　諸金屬線及直徑一因ノ四分一ヲ超エサル卷輪ノ細竿諸金屬類　　從價百分ノ十
五九　其他別項ニ揭載セザル諸金屬類　　從價百分ノ五

第四　皮角蹄牙之部

六〇　獸蹄類　　每斤七厘
六一　牛角及鹿角類　　每斤一錢
六二　犀角其他一切ノ角類　　從價百分ノ五
六三　象牙及一角牙　　每斤十二錢五厘
六四　其他一切ノ牙類　　每斤三錢二厘
六五　生牛馬皮（生乾鹹醃等治理ヲ經サル）　　每斤八厘
六六　靴底皮　　每斤四錢
六七　熟皮類（靴底皮ニ非サル牛皮、小牛皮、馬皮、羊皮小羊皮、鹿皮等有色無色ノ別無ク治理ヲ經タル）　　從價百分ノ二十
六八　生羊皮（有毛無毛ノ別無ク治理ヲ經サル）　　每斤一錢
六九　毛羊皮（有色無色ノ別無ク治理ヲ經タル）　　從價百分ノ二十五
七〇　生皮類（別項ニ揭載セサル無毛ノ治理ヲ經サル）　　從價百分ノ十五
七一　毛皮類（虎皮、豹皮、海狸皮、水獺皮、狐皮、熊皮、

其他類似ノ獸皮等治理ヲ經タルト否トヲ論セス）　從價百分ノ二十五

七二　鮫　皮　從價百分ノ二十

第五　油蠟之部

七三　氣油（ガソリーン）　從價百分ノ三十

七四　苴麻子油（藥用ニ非ル）　每斤二錢三厘

七五　椰子油（ココノナット）及亞麻子油　每斤一錢五錢

七六　曬乾油（ドライエル）　每斤一錢

七七　石炭油及石腦油　每瓦五錢（ガロン）

七八　櫻櫚子油（パーム）　每斤一錢八厘

七九　豆油及落花生豆油　每斤一錢四厘

八〇　胡麻子油　每斤三錢

八一　其他諸燈油及機械ニ用フル油類　每斤一錢八厘

八二　松　油（トルペンタイン）　每瓦二錢八厘

八三　蜜蠟及木蠟　從價百分ノ十

第六　布帛之部

一類

八四　綿純子、綿繻子、綿紋繻子、綿綸子、クイルテイン（スクウエルヤード）グス、ピーケー及ディミテイース　每方碼一錢七厘

八五　綿天鵝絨（コットン、フラネル）紋、巴　每方碼一錢五厘

八六　綿天鵝絨　每方碼六錢

八七　生金巾　每方碼五厘

八八　白金巾　每方碼八厘

八九　唐　棧　每方碼一錢八厘

九〇　生天笠布（テンダクモメン）　每方碼八厘

九一　寒冷紗（クヲトルス）　每方碼七厘

九二　其他緋金巾、色金巾、紋金巾、縞金巾、左良紗、雲齊布、ジェーンス、デニムス、蚊帳（マスキートネツテイング）布、被（ベツトモーア）褥布等別項ニ揭載セサル一切ノ綿布類　每方碼一錢

二類

九三　旗　布　每方碼二錢五厘

九四　純毛呉呂及綾呉呂毳呉呂　每方碼四錢

九五　毛綿呉呂及綾呉呂　每方碼二錢五厘

九六　純毛フラネル　每方碼四錢五厘

九七　毛綿フラネル（イミテイションシールスキン）　每方碼三錢

九八　純毛モヘール　每方碼十錢

九九　毛綿モヘール（イミテイションクローリー）　每方碼五錢

一〇〇　毛　繻　子　每方碼三錢三厘

一〇一　綿綸呉呂メリノス及テイベツツメレンス（純駁ノ別無ク）　每方碼二錢八厘

一〇二　毛天鵝絨（純駁ノ別無ク）　從價百分ノ二十

一〇三　窓帷布（レーブス）（純駁ノ別無ク）　每方碼六錢

一〇四　純毛羅紗（原名如何ヲ論セス帝國ニ於テラシヤート通稱スル）　每方碼十二錢

一〇五　毛綿羅紗（パイロット、プレシデント、ユニオン等ノ如キ）　每方碼六錢

一〇六　毛純子セルデス羅世倂多及スパニストライプス（純駁ノ別無ク）　每方碼五錢五厘

一〇七　其他アルパカス、オルレンス、ロストルス、チアイナフイギュールス、バルザリーン、カムレットコールヅ、シマゴロー等綿羊毛ウォルステッド若クハ山羊及類似ノ獸毛ヲ以テ織リタル一切ノ純駁毛布類　每方碼五錢五厘

三類

一〇八　麻布、麻綿布及麻毛布類（生色、白色及有色ノ別無ク）　每方碼二錢八厘

四類

一〇九　絹布及絹ノ入リタル一切ノ布帛類　從價百分ノ二十五

五類

一一〇　臥氈（ブランケツト）　每斤五錢五厘

一一一　帆布（綿麻ノ別無ク）　每方碼三錢七厘

一一二　ブルッセルス氈　每方碼四十錢

一一三　パテント、タペストリー氈　每方碼十七錢五厘

一一四　キッドル、ミンストル氈（或ウェニシアント稱スル）　每方碼十三錢五厘

一一五　フエルト氈　每方碼十錢

一一六　廐氈（チユート或ハンドツチ、カルペツツト通稱スル）　每方碼三錢

一一七　天鵝氈、アキスミンストル其他一切ノ地氈類（カルペツツ）　從價百分ノ二十

一一八　護謨布（ニウヒツピンクス、ウニツピンクス）（各種ノ別無ク靴用ノ）　每碼三錢三厘

一一九　綿布手巾（ハンケルチーフス）（連製單製ノ別無ク）　每打十五錢（ダース）

一二〇　麻布及麻綿布手巾　每打四十五錢

一二一　絹布及レース手巾　從價百分ノ二十五

一二二　雨衣布　從價百分ノ十

一二三　卓布（テーブルクロース）（連製單制ノ別無ク）　從價百分ノ二十

一二四　革布（オイル製レツルクロース）（家具ヲ裝フヘキ若クハ傘袋ニ用フヘキ）　每方碼三錢八厘

一二五　蠟布（オイル製ワックスクロース）（牀ニ鋪展スヘキ）　每方碼十錢

一二六　檯案布類（テーブルクロース）（純毛若クハ毛綿ノ）　從價百分ノ二十

一二七　浴布及浴巾布（タウリング）　從價百分ノ二十

一二八　旅氈（トラベリング、ロクス）　從價百分ノ二十五

一二九　其他別項ニ揭載セサル諸布帛類　從價百分ノ十

第七　文具ノ部

一三〇　界紙本習字本算計簿記錄簿其他別項ニ揭載セサル諸簿册類　從價百分ノ十五

一三一　罫類（各種ノ）　從價百分ノ十五

一三二　印刷料紙　每斤二錢二厘

一三三　包裝用紙　每斤一錢二厘

一三四　無色唐紙　每斤三錢五厘

一三五　有色唐紙　從價百分ノ十五

一三六　畫圖紙、書簡紙、寫字紙、表紙々、乾字（プロテイング、ペーパル）紙其他別項ニ揭載セサル一切ノ紙類　從價百分ノ十五

一三七　鵝筆及筆嘴筆柄類　從價百分ノ十五

一三八　鉛筆、墨筆、毛筆、石筆諸類　從價百分ノ十五

一三九　石盤（ストレイト）（有席無席ノ別無ク別項ニ掲載セサル）　従價百分ノ十五
一四〇　其他雑（インモスクンズ）壺、墨池（スミツボ）、印材、封筒、封蠟、封粘（ウエーファス）、護謨粘、側字子（ゴムケシ）、戟紙子（カミキリ）、緞紙子（トデカミ）、護謨帯子（ゴムヒモ）等別項ニ掲載セサル諸文具類　従價百分ノ十五

第八　酒之部

一四一　亜啤酒（アプシンス）（罎入ノ）　毎打一圓八十錢
一四二　麥酒（ヴァイルビヤー）及黒麥酒（ヴァイルビヤースタウト）　罎入ノ水量一巴（パイント）ヨリ多カラサルモノ　毎打三十錢
罎入ノ水量一巴ヨリ多ク一骨（クウアルト）ヨリ多カラサルモノ　毎打五十錢
一四三　罇入　苦酒（ビット）　毎瓦四錢七厘
一四四　喝蘭地（ブランデイ）　従價百分ノ三十
罎入　毎打二圓八十錢
罇入　毎瓦九十錢
一四五　三鞭（シャンパン）　罎入ノ水量一巴ヨリ多カラサルモノ　毎打一圓九十錢
罎入ノ水量一巴ヨリ多ク一骨ヨリ多カラサルモノ　毎打三圓五十錢
一四六　櫻子酒（チェルリーコルデイアル）（罎入ノ）　毎打一圓四十五錢
一四七　林檎酒（サイドル）（罎入ノ）　毎打六十錢
一四八　杜松子酒（ジン）及糖水酒（ラム）　毎打一圓十錢
罎入　毎瓦三十五錢
一四九　里克（リキュール）（各種ノ）　毎打一圓十錢
罎入ノ水量一巴ヨリ多カラサルモノ　毎打二圓
一五〇　馬德拉伯爾多（マデイラポルト）及塞爾利（シエリー）　罎入　毎打二圓九十五錢
罇入　毎瓦九十五錢
罎入ノ水量一巴ヨリ多カラサルモノ　毎打一圓十錢
一五一　白耳馬（ウヰルマウツ）（罎入ノ）
一五二　大麥酒（ウヰスキー）　罎入　毎打二圓五十錢
罇入　毎瓦八十錢
一五三　葡萄酒（赤白ノ別無ク別項ニ掲載セサル）　罎入　毎打一圓
罇入　毎瓦八錢
一五四　其他名稱ノ何タルヲ論セス別項ニ掲載セサル一切ノ酒類　従價百分ノ三十

第九　砂糖之部

一五五　糖蜜及糖水　毎斤一錢
一五六　砂糖（帝國色位分テ十級トス鑑不備テ各港稅關ニ在リ）　毎斤一錢二厘
第一號ヨリ第三號ニ至ル
第四號ヨリ第六號ニ至ル　毎斤一錢八厘

第七號ヨリ第九號ニ至ル　毎斤二錢四厘
第十號　毎斤三錢
一五七　氷糖（帝國ニ於テコホリサタウト通稱スル）　毎斤三錢六厘
一五八　精製糖（塊磯粉粒ノ別ナク）　毎斤三錢六厘

第十　煙草之部

一五九　筒（シガレット）煙（マニラコ）　毎千五十錢
一六〇　紙管（シガレット）煙（ケンディン）　葉煙及餅（カケエン）煙、絲（キラミ）煙（バコ）、喫煙（スモーキング）、噌（チュウイング）煙（トバコ）　毎千個一圓五十錢
一六一　煙（シャンパン）類　其他ノ諸製　毎斤三十錢

第十一　飲食物之部

一六二　檸檬（レモン）水、生姜（ジンジャー）水、曹達（ソーダ）水等諸飲料類　従價百分ノ五
一六三　乾麵包（ビスケツト）（罐ニ入リタル）　従價百分ノ五
一六四　乳油（バツター）　毎斤二錢二厘
一六五　乾糖菓子（ドロツプ）類（各種ノ）　従價百分ノ五
一六六　珈琲（コーヒー）及冶古利（チコリー）（粒粉ノ別無ク）　毎斤一錢
一六七　乾魚及醃魚類　従價百分ノ五
一六八　穀粉（別項ニ掲載セサル各種ノ）　毎担二十八錢
一六九　煙腿（ハム）及醃腿（ベーコン）　毎斤一錢三厘
一七〇　豕骨（ラルド）　毎斤一錢
一七一　饂飩（ヌードル）素麵及西穀米（クロツナカヌセイメー）類　従價百分ノ五
一七二　瓜子（メロンシード）　従價百分ノ五
一七三　核子類（食料ニ充ル各種ノ）　従價百分ノ五
一七四　胡椒　毎斤四厘
一七五　胡椒粉　従價百分ノ五
一七六　精製鹽（卓ニ用フヘキモノ）　従價百分ノ五
一七七　茶　毎斤一錢七厘
一七八　菜類（食料ニ充ル）　従價百分ノ五
一七九　其他鱚（アンチョビー）魚、菓實（フルーツ）、菓糕（ペストリー）、油鰮（サルデイン）、臘腸（ソーセイヂ及ソーセージ）、檸檬糖（レモンスカイ）、醬（ソース）醋（ビネガー）、乳酪（チーズ）、乳實（コンデンスドミルク）、乳粉（デシケーテツトミルク）、乾菓漬菓、橄欖（サラダオイル）油、芥子粉、檀古（チョコレート）及醃漬、菜肉等別項ニ掲載セサル一切ノ飲食物類　従價百分ノ五

第十二　衣服及其附屬品之部

一八〇　靴類（各種各樣ノ）　従價百分ノ二十五
一八一　鈕釦（ボタン）、扣子（シンガオ）、鉤子（カギホネ）類　従價百分ノ二十五
一八二　綿製及麻製領子（エリ）　毎打二十七錢五厘
一八三　紙製領子　毎打三錢
一八四　帽類（各種各樣ノ）　従價百分ノ二十五
一八五　綿製襪子（ソックス）　毎打二十七錢五厘
一八六　毛製及毛綿製襪子　毎打六十七錢五厘
一八七　其他諸襪子類　従價百分ノ二十五
一八八　綿製長襪子　毎打四十錢
一八九　毛製及毛綿製長襪子　毎打九十錢
一九〇　其他長襪子類（フルソックスアンドスリーマホツ）　従價百分ノ二十五
一九一　襯衿（ボソム）鈕釦類（襟袖ニ用フル各種各樣ノ）　従價百分ノ三十
一九二　粧飾料品（組（ヒラウチヒモ）條、紉紐（マルウチヒモ）、線絲（モール）、線飾（サシヘリ）、流蘇（フサ）、髪網、而衣其他別項ニ掲載セサル手工機製ニ係ル一切

ノ絨飾料等物質ノ何タルヲ論セス　従價百分ノ二十五
一九三　綿製襯衫及襯褲（シャツ）　毎打一圓
一九四　毛製襯衫及襯褲　毎打二圓五十錢
一九五　毛綿製襯衫及襯褲　毎斤二圓
一九六　諸襯衫及襯褲類（他ノ）　従價百分ノ二十五
一九七　其他雨衣、襦袢、胸衣、袖口、手套、領紐、頸巾、肩衣、帶、褲帶、靴衣、脛衣等別項ニ掲載セザル一切ノ衣服及其附屬品類　従價百分ノ二十五

第十三　雜貨之部

一九八　集書帖類　従價百分ノ三十
一九九　琥珀　従價百分ノ三十
二〇〇　兵器類（大砲小銃、手銃、大砲彈、裝藥彈、刀劍其他一切ノ）　従價百分ノ三十
二〇一　權衡類　従價百分ノ五
二〇二　竹材（工作ヲ經サル）　従價百分ノ五
二〇三　籃類　従價百分ノ二十
二〇四　臥單及被衾類（連製單製ノ別無ク）　従價百分ノ二十
二〇五　鏡及鈴類　従價百分ノ二十
二〇六　拭靴器及拭靴蓆類　従價百分ノ二十
二〇七　刷子及篩子類（各種ノ）　従價百分ノ二十
二〇八　蠟燭　毎斤四錢五厘
二〇九　燭臺類　従價百分ノ二十
二一〇　杖及鞭類　従價百分ノ三十
二一一　乘車及其部分品類（別項ニ掲載セサル各種ノ）　従價百分ノ二十
二一二　鏈類（別項ニ掲載セサル各種ノ）　従價百分ノ二十
二一三　時辰鐘及其部分品類　従價百分ノ二十
二一四　櫛類　従價百分ノ二十五
二一五　珊瑚（工作ヲ經タルト否トヲ論セス）　従價百分ノ三十
二一六　船索　毎斤一錢六厘
二一七　塞子　従價百分ノ五
二一八　塞子鑽類　従價百分ノ二十五
二一九　脂粉薫香類（名稱ノ何タルヲ論セス香水、香油、染髪藥、磨滓粉其他一切ノ）　従價百分ノ三十
二二〇　綿莢　毎斤九厘
二二一　窓帷及蚊帳類　従價百分ノ二十
二二二　刃物類（別項ニ掲載セサル剃刀、鋏刀、筆刀、髭刀、鑷子其他一切ノ）　従價百分ノ十五
二二三　戸鎖、鎖、鎖、鈕戸栓、蝶鉸其他窓戸金具類　従價百分ノ十五
二二四　護謨紐類　従價百分ノ十五
二二五　扇子類　従價百分ノ二十五
二二六　フエルト（船底用若クハ屋背用ノ）　従價百分ノ十
二二七　烟火類　従價百分ノ三十
二二八　麻類（梳理シタルト否トヲ論セス）　毎斤五厘
二二九　箔類（金銀銅錫等ノ）　従價百分ノ十
二三〇　獵銃及其使用品類　従價百分ノ三十
二三一　額縁、鏡縁及紙壁縁、天井縁類　従價百分ノ二十

二三二　家具（別項ニ掲載セサル臥牀、臥具、倚子、憩牀、几案、盤臺、衣厨、衣櫃、置棚類及其部分品等一切ノ）　従價百分ノ二十
二三三　賭具（象棋、打球、骨牌等各種ノ）　従價百分ノ三十
二三四　窓玻瓈片類　一百方幅ノ鑒定價格我金四圓ヲ超エサル尋常無色無紋ノモノ　毎方幅六十四錢
其他一百方幅ノ鑒定價格我金四圓ヲ超エタルモノ　毎方幅二圓五十錢
二三五　鏡玻瓈片（水銀ヲ塗リタルト否及額縁ヲ着ケタルト否トヲ論セス）　従價百分ノ二十
二三六　玻瓈珠　毎斤三錢八厘
二三七　其他諸玻瓈材及玻瓈器類（別項ニ掲載セサル）　従價百分ノ二十
二三八　金銀器類（眞假ノ別無ク饌具ニ係ル）　従價百分ノ二十
二三九　壁爐、置爐及爐圍其他ノ附屬品類　従價百分ノ二十
二四〇　落花生豆　毎担十五錢
二四一　火藥綿、火藥其他一切ノ爆發物類　従價百分ノ三十
二四二　鐵器其他諸金屬器類（別項ニ掲載セサル）　従價百分ノ二十
二四三　帽鉤類　従價百分ノ二十
二四四　農具及木工鐵匠其他製機師具類（別項ニ掲載セサル）　従價百分ノ五
二四五　護謨管類　従價百分ノ五
二四六　樂器及其使用品類　従價百分ノ三十
二四七　寫眞器及寫眞紙類　従價百分ノ二十
二四八　鐵庫及鐵箱類　従價百分ノ二十
二四九　臺燈鉤燈、提燈及其部分品　従價百分ノ二十
二五〇　燈心　従價百分ノ二十
二五一　鎖及鑰類（別項ニ掲載セサル）　従價百分ノ二十
二五二　礦山機、電信機、鋸機、紡機、織機、縫機、莫大小機、印刷機、寫字機、鑄字機、其他別項ニ掲載セサル諸機械及機械ニ屬スル皮革帶、護謨帶、麻布帶等類　従價百分ノ五
二五三　大理石、石盤石其他石材類（造營料若クハ家具料ニ供スル爲メ工作シタル）　従價百分ノ二十
二五四　付木（各種ノ）　従價百分ノ三十
二五五　龍鬚蓆（支那蓆ト通稱スル一卷四十碼ノ）　毎卷八十錢
二五六　椶皮蓆及椰子蓆類　毎方碼七錢五厘
二五七　其他諸蓆類（別項ニ掲載セザル）　従價百分ノ二十
二五八　針類　従價百分ノ十五
二五九　雙眼鏡類　従價百分ノ二十五
二六〇　畫類（油畫、水畫、畳畫、寫眞畫、不販畫等有廓無廓ノ別無ク）　従價百分ノ二十
二六一　豆類（各種ノ）　毎担十三錢
二六二　雷管及導火管　従價百分ノ三十

二六三　煙管、煙管匣其他一切ノ吸煙具類　従價百分ノ三十
二六四　磁器及土器類　従價百分ノ二十
二六五　漆灰及巴黎灰　毎担七錢五厘
二六六　珠玉及佩帯粧飾ニ屬スル金銀細工物類（眞假ノ別無ク）　従價百分ノ三十
二六七　錢嚢、刺匣及手帳類　従價百分ノ三十
二六八　籐（割リタルト否トヲ論セス）　毎担三十七錢五厘
二六九　磨刀革子　従價百分ノ二十五
二七〇　砂紙　従價百分ノ二十五
二七一　馬具　従價百分ノ二十
二七二　尺度類　従價百分ノ五
二七三　綿子、菜子、麻子、亜麻子及胡麻子　毎担五十錢
二七四　靴　蠶　従價百分ノ十五
二七五　蠶繭、蠶綿及生絲屑絲　従價百分ノ十
二七六　斗類　従價百分ノ十五
二七七　化粧石鹸　従價百分ノ三十
二七八　其他諸石鹸類　毎斤一錢
二七九　眼鏡及眼鏡玻璃類　従價百分ノ二十五
二八〇　匙子叉及磨刀鋼子類　従價百分ノ十五
二八一　糊粉及鹸彈類　従價百分ノ十五
二八二　偶像類　従價百分ノ三十
二八三　化粧具匣類　従價百分ノ三十
二八四　階甲及階蹄（工作ヲ經サル）　毎斤一圓五十錢
二八五　階甲器類　従價百分ノ三十
二八六　玩具（各種ノ）　従價百分ノ三十
二八七　旅櫃提嚢及佩袋類　従價百分ノ二十
二八八　綿線麻線其他諸線類　毎斤三錢五厘
二八九　雨傘及晴傘類　従價百分ノ二十五
二九〇　傘骨（附屬金具ノ備リタルト否トヲ論セス）　毎打十二錢五厘
二九一　傘柄類　従價百分ノ二十五
二九二　壁紙類　従價百分ノ二十五
二九三　時辰鏢及其部分品類　従價百分ノ二十五
二九四　鏢鏃及鏢鎗類　従價百分ノ二十五
二九五　銅線索及鐵綯索類　従價百分ノ十
二九六　沈香　毎斤一錢二厘
二九七　白檀　毎斤六錢五厘
二九八　紫檀、黒檀、ティーク、黄楊木、鐵刀木其他類似ノ堅硬木類　従價百分ノ五
二九九　羊毛及其他ノ獣毛　毎斤二錢八厘
三〇〇　縫絲、縫絲及組絲類　従價百分ノ十
　綿製縫絲　毎斤三錢二厘
　　有軸　従價百分ノ十
　　無軸　毎斤六錢五厘
　毛製縫絲　毎斤十三錢五厘
　毛製組絲

三〇一　其他諸縫絲類　従價百分ノ十
　其他此稅目中ニ掲載セサル諸般ノ生獣物類　従價百分ノ十
三〇二　又此稅目中ニ掲載セサル諸般ノ全成若クハ部分ノ製作品類　従價百分ノ二十五

第十四　無稅品之部

三〇三　暦類
三〇四　鐵錨及錨鏈類（改造適用ノ故物ハ第四十二號ニ從テ納稅ス可シ）
三〇五　禽獣及魚鼈
三〇六　地圖及海圖
三〇七　晴雨儀類
三〇八　檳榔子
三〇九　獣骨（工作ヲ經サル）
三一〇　書籍（刊行ノ）
三一一　磚及瓦類
三一二　金銀（地金ノ）
三一三　鐵道汽車客車及鐵道馬車類
三一四　運貨車類
三一五　白堊（工作ヲ經サル）
三一六　石灰コークス及木炭
三一七　貨幣
三一八　寒子樹皮
三一九　綿屑
三二〇　玻璃刀
三二一　藥材及制藥類（第一號ヨリ第十一號ニ至ルマテノモノヲ除クノ外及禁制ニ非サル一切ノ）
三二二　生卵
三二三　金剛砂
三二四　泌藥
三二五　西班牙草及其他製紙草類
三二六　羽毛（工作ヲ經サル）
三二七　消防器類
三二八　天蠶絲
三二九　燧石
三三〇　生菓類
三三一　地球儀及天球儀
三三二　穀類（別項ニ掲載セサル各種ノ）
三三三　砥石類
三三四　鳥尿
三三五　ゴンニー袋（新故ノ別無ク）
三三六　ゴンニー布
三三七　石盖及滑石
三三八　飼草
三三九　ヘムロック及オーク（柔皮料ノ）
三四〇　苦草
三四一　驗液器類
三四二　氷

三四三　生護謨及板護謨
三四四　理學器、天文器、化學器、數學器、量地器、製圖器、外科器及解剖器
三四五　鉋鐵
三四六　石灰
三四七　茜根
三四八　麥芽
三四九　紅樹皮
三五〇　羅盤（海上若クハ野外ニ於テ用フヘキ）
三五一　水銀
三五二　顯微鏡類
三五三　鏡
三五四　模形類（諸新發明或ハ修養勸業）
三五五　船
三五六　油滓
三五七　鑛石（各種ノ）
三五八　苧麻（包裝料ノ）
三五九　羊皮紙
三六〇　必治參兒及洛兒參兒
三六一　草木及苗根（種藝料ニ充ツヘキ各種ノ）
三六二　白金（工作ヲ經サル）
三六三　黑鉛（工作ヲ經サル）
三六四　諸喞筒器類（別項ニ揭載セザル）
三六五　足袋（絹布ノ別無ク）
三六六　爛布（製紙料ニ充ツヘキ各種ノ）
三六七　道鐵及道鐵ニ屬スル枕鐵、犬釘類
三六八　松脂
三六九　生鹽（苞若クハ桶ニ入リタル）
三七〇　鹹肉（桶ニ入リタル牛肉豚肉ノ如キ）
三七一　砒石
三七二　貨本（稅關官吏カ至當ノ額數ト認可スル）
三七三　乾麵（包桶ニ入ツタル船用ノ）
三七四　種子（別項ニ揭載セサル播種用ノ）
三七五　招牌及廣告紙類
三七六　碗　青
三七七　鐵（剛柔ノ別無ク各種ノ）
三七八　海綿
三七九　紫　梗
三八〇　石材（寶石ヲ除クノ外工作ヲ經サル各種ノ）
三八一　獸蠟
三八二　茶鉛
三八三　電線
三八四　望遠鏡類
三八五　驗溫器類
三八六　木材及板類（刨ヲ經サル）
三八七　旅具
三八八　黃蕎
三八九　活字

三九〇　生菜類
三九一　船舶及舟艇
三九二　鯨骨及鯨鬚（工作ヲ經サル）

第十五　禁制品之部

三九三　僞藥類
三九四　擬造貨幣類
三九五　春畫其他諸般ノ淫醜物類
三九六　華氏驗溫器ノ百十度ヲ超エサル熱氣ニシテ發光スヘキ石炭油石腦油其他諸礦油類
三九七　鴉片（帝國政府ノ藥料ヲ輸入スルハ禁制ノ限ニ在ラス）

第十六　制限品之部

三九八　牛羊其他諸動物及皮角蹄等ノ傳染病ニ感觸シタルモノ及傳染病ノ流行セル地方ヨリ來ルモノハ其輸入ヲ禁止スヘシ
三九九　兵器火藥其他諸般ノ軍用物類ハ臨時布告其輸入ヲ禁止スル事有ルヘシ

附屬書七

輸入稅率

都テ從價稅ハ其貨物ノ生產若クハ製造ノ本地ニ於テ算定シタル原價ニ其陸揚ス可キ港迄ノ運送賃保險料及世話料ヲ合セテ其總額ニ賦課ス可キ事

輸入稅率

無稅之部

一　曆類

鐵鎖及鎖鐽（改造適用ノ故物ヲ除ク）
禽獸及魚鼈
地圖及海圖
包袋（新故ヲ論セス貨物ヲ入ルヘキ）
旅具（稅關長カ旅用必需ト認可スル）
晴雨儀類
檳榔子
乾麵包（桶ニ入リタル）
獸骨（工作ヲ經サル）
書籍（刊行ノ）
磚及瓦
金銀（地金ノ）
鐵道汽車、客車及鐵道馬車類
運貨車類
白堊（工作ヲ經サル）
石炭。コーク及木炭
貨幣
羅盤類
塞子樹皮（工作ヲ經サル）
玻瓈刀
藥種類（別項ニ揭載セサル蘆薈。甘草。大黃。黃芩。木香。藿香。蒼求。茯苓。山歸來。泊芙藍。加密列。施綿尖那。亞拉毘亞護謨。撒兒沙。巴里兒刺。兒茶。桂皮。幾那皮其他一切ノ）
生卵
金剛砂
汲藥
西班牙草及其他ノ製紙草類
羽毛（工作ヲ經サル）
消防器類
天鼈絲
燧石
生菓類
石盖及滑石
地球儀
砥石類
鳥尿
包袋布
飼草
ヘムロック及オーク（柔皮料ノ）
苦草
驗波器類

氷
生護謨及板護謨
諸學術器及其使用品類（理學用）
天文用、化學用。數學用。量地用。畫圖用。外科用及解剖用ニ屬スル）
搶鐵
豕脊
石灰
茜根
麥芽
紅樹皮
製藥類（別項ニ揭載セサル規尼。撒篤尼。英兒非。規尼達因。聖叔尼揑。加魯蔑兒。其他酸類。鹽類。諳母尼亞類。麻倔揑失亞類。剝篤亞斯類。曹達類等一切ノ）
水銀
顯微鏡類
鏡水
模形及畫圖（諸新發明或ハ修整勘業ノ）
鉛筆

藥油類（別項ニ揭載セサル桂皮油。橙皮油。丁香油。茴香油。肝油。薄荷油。枸櫞油及ヒ入リタル草麻子油等ノ）
油滓
鐵石
荷蘭（包裝用ノ）
羊皮紙
必治。參兒及格兒參兒
草木及苗根（種藝用ノ）
白金（工作ヲ經サル）
黑鉛（工作ヲ經サル）
諸啤筒器類（別項ニ揭載セサル）
疋地（塊粉ヲ論セス）
燭布（製紙其他ノ賃用ニ充ル）
道鐵及道鐵ニ現附シタル其部分
鐵具類
松脂
鹽（苞若クハ桶ニ入リタル）
鹹肉（桶ニ入リタル牛肉豚肉等ノ如キ）
硝石（精粗ヲ論セス）
貨木（稅關長カ至當ノ額數ト認可スル）

種子（別項ニ揭載セサル播種用ノ）
招牌及廣告紙類
碇青
鑞（剛柔ノ別無ク各種ノ）
海綿
紫梗
石材（切磨シタルト否トヲ論セス別項ニ揭載セサル）
獸獵
茶鉛
電線
望遠鏡類
驗溫器類
木材（斧斤鉋鋸ヲ經タルト否トヲ論セス別項ニ揭載セサル）
羌黃
活字（新故ヲ論セス）
生菜類
船舶及舟艇
繊絲屑
鯨骨及鯨鬚（工作ヲ經サル）
五分稅之部
硫酸

明礬
腐蝕曹達
格魯兒化石灰
洗濯曹達
人參
阿膠及魚膠
アンチモニー
青銅（工作ヲ經サル）
銅及黃銅類（板管。線ヲ除クノ外條。竿。塊。錠及改造適用ノ故物等）
白銀
鐵類（板。線。筒。管ヲ除クノ外塊。條。桁。竿。箍帶。釘。竿。丁字。冂形及改造適用ノ故物等）
鉛（板。筒。管。線ヲ除クノ外條。塊及錠等）
白銅
鋼（板。線ヲ除クノ外條。塊及錠等）
錫（板ヲ除クノ外條。塊及錠等）
亞鉛（板。線ヲ除クノ外條。塊及錠等）

其他別項ニ揭載セル種類ト全ク其質ヲ殊ニスル、金屬（工作ヲ經サル）
生牛馬皮（生乾鹹醃等未治理セサル）
蹄類
牛角。鹿角。犀角其他ノ角類
綿羊皮及山羊皮（有毛無毛ノ別無ク未治理セサル）
象牙。一角牙。海馬牙其他ノ牙類
松油
穀粉（別項ニ揭載セサル各種ノ）
綿莢
穀類（碎粉セサル米麥其他別項ニ揭載セサル一切ノ）
麻類
落花生豆
豆類（各種ノ）
漆灰及巴黎灰
籐（割リタルト否トヲ論セス）
棉子。麻子。亞麻子。胡麻子及菜子

紫檀。黑檀。黃楊木鐵刀木其他類似ノ堅梗木等
羊毛及其他ノ獸毛
標衡類
塞子
農具及木工鐵匠其他製機師具類（別項ニ揭載セサル）
護謨管類
諸器械及機械ニ屬スル滑車。護謨革帶類等
檸檬水。生姜水等諸飲料類
乾麵包（鑵ニ入リタル）
珈琲及治古利
乾糖菓子類
乾魚及醃魚
燻腿及醃腿
饂飩。素麵及西穀米類
瓜子
胡桃。根杏。椎。栗。橡等食料核子類
胡椒類
鹽（塲入苦クハ小苞ニシタル精製ノ）
乾菜類

其他鱶魚。菓育。菓糕。油鰛。臘腸。檸檬糖。醬。醋。乳油。乳酪。乳脊。乳粉。乾菓。漬菓。橄欖油。芥子粉。檀古聿。及醃漬菜肉等別項ニ揭載セサル一切ノ飲食物類
十分稅之部
樟腦（精粗ノ別無ク）
丁香（母子ノ別無ク）
茴香
甘松
染粉。紺青。洋紅。蝑蟧蟲。藍。
紅花。蘇木。蘇木越斯。五倍子其他別項ニ揭載セサル染料類
朱。雌黃。雄黃。鄧青。綠青。
鉛粉（赤色白色及黃色ノ）色油。洋漆。箔（金銀銅錫其他ノ）其他別項ニ揭載セサル顏料類
銅及黃銅類（板及管ノ）
鐵（板。筒。管。及鍍用。屋用等ノ）
葉鐵

鉛（別項ニ揭載セサル板及筒。管等ノ）
鋼（板索ノ）
錫（板ノ）
亞鉛（板ノ）
鐵線其他諸金屬線
熟牛馬皮（無色ノ）
蜜蠟及木蠟
金巾其他諸綿布類（天鵝絨類ヲ除クノ外一切ノ）
麻布。麻綿布及麻毛布類
羅紗其他諸毛布及毛綿布類（天鵝絨ヲ除クノ外一切ノ）
臥氈
帆布（綿麻ノ別無ク）
護謨布
雨衣布
竹布其他別項ニ揭載セル種類ト全其質ヲ殊ニスル布帛類
別項ニ揭載セサル諸般ノ生蠶物類
諸繩索類
屋瓦代用ノ石盤石及油紙類
傘骨（凹形其他ノ）

銅線索及鐵線索類
繊絲。組絲及縫絲類（綿製。毛製其他ノ）

十五分稅之部

釘。大釘。無頭釘。平頭釘。曲頭釘曲尾釘及平尾釘類
螺旋釘及牝牡旋釘類
諸生皮類（別項ニ揭載セサル無毛ノ）
豆油。落花生酒。菜子油。棕櫚子油。椰子油。綿子油。胡麻子油。麻子油。亞麻子油。魚油。獸油其他曬乾油及鏈ニ入リタル草蔴子油等
綿天鵝絨
界紙本。習字本及算計簿。記錄簿等諸簿册類
罫類
紙類（印刷用。寫字用。畫圖用。包裝用。表紙用等ノ）
筆類（筆喙及筆柄トモ）
石盤（有廓無廓ノ別ナク別項ニ揭載セサル）
其他墨壺。墨池。印材。封筒。封蠟。封粘。護謨粘。創字子。
截紙子。綴紙子。護謨帶子等別項ニ揭載セサル諸文具類
鏈類（別項ニ揭載セサル）
刃物類（剃刀。鋏刀。筆刀。菜刀。庖刀。餐刀及鑰子等別項ニ揭載セサル一切ノ）
戶鎖。戶栓。蝶鉸其他ノ窓戶金具類
護謨紐類
玻瓈片（十片ノ厚一因ヲ超エサル無色無紋且未磨ノ）
銕類
靴蠟
熨斗類
石硯（洗濯料ノ）及水硯
匙子。叉子及磨刀鋼子類
漿粉及硯箱

二十分稅之部

麝香及麝香皮
熟牛馬皮（有色ノ）其他小牛皮。綿羊皮。山羊皮。羊仔皮。鹿皮。塞多獸皮等（有色無色ノ別無ク）
鮫皮
石炭油及石腦油
毛天蛾絨
地氈類。
卓布（絹製ヲ除ク）
油布及蠟布類
檯案布類（絹製ヲ除ク）
浴巾
麥酒及黑麥酒
葡萄酒（赤白ノ別無ク別項ニ揭載セサル）
手巾（絹製レース製ヲ除クノ外綿布。麻布。麻綿布等ノ）
蠶蘭。蠶繭及生絲。屑絲
沈香及白檀
籃類
臥單及被衾類
鐘及鈴類
拭靴器及拭靴蓆類
刷子及箒子類
蠟燭
乘車及其部分品類
時辰鐘及其部分品類
窓帷及蚊帳類
額緣。鏡緣及紙壁緣。天井緣類
家具（別項ニ揭載セサル臥牀。臥具。椅子。凭牀。几案。盤。檯。衣廚。衣櫥。置棚。燭臺類及其部分品等一切ノ）
玻瓈片（有色有紋ノモノ又琢磨シタルト否トヲ論セス十片ノ厚一因ヲ超エタルモノ）
玻瓈器類
金銀器類（眞假ノ別無ク饌具ニ係ル）
壁爐置爐及爐圍其他ノ附屬品類
鐵器其他諸金屬器類（別項ニ揭載セサル）
帽鉤類
寫眞器及寫眞紙
鐵車及鐵箱類
臺燈。鉤燈。提燈及ヒ其部分品類
燈心
鎖及鑰類
玻瓈鏡類
造營用。家具用等ノ如キ工作ヲ經タル大理石。石盤石及煉化石製類
荐蔗蓆。櫚皮蓆及椰子蓆
畫類（彩色畫。墨畫。印畫及寫眞畫等有廓無廓ノ別ナク）
磁器及土器
馬具

二十五分稅之部

毛皮類（治理シタル有毛ノ綿羊皮山羊皮及治理シタルト否トヲ論セス虎皮。豹皮。海貍皮。水獺皮。狐皮。熊皮等ノ如キ）
絹布及絹綿布。絹麻布。絹毛布等
絹製（純駁）ノ毛巾。卓巾及檯案布類
旅氈
靴類（各種各樣ノ）
鈕釦。扣子。鉤子及其他ノ類似品等（其物質ノ何タルヲ論セス）
帽類（各種各樣ノ）
髢類。絲絛。絲飾。流蘇。髮網。面衣其他手工機製ニ係ル一切ノ粧飾料等其物質ノ何タルヲ論セス）
其他雨衣。襦袢。胸衣。袖口。領子。肌衣。襪子。長襪子。手套。領紐。頸巾。肩衣。帶。褲帶。靴衣。脛衣等別項ニ揭載セサル一切ノ現成衣服及其附屬品類
楯類
塞子鑽類
扇子類
玻瓈珠
雙眼鏡類
砂紙
眼鏡及眼鏡玻瓈類
磨刀革子
旅襆提籠及佩袋類
雨傘及晴傘類
傘柄（骨子有無ノ別ナク）
壁紙類
時辰鏢及其部分品類
鏢鏈及鏢鑰類
其他別項ニ揭載セサル諸般ノ製作品類

三十分稅之部

氯油
亞硝嗶。亞力。苦酒。櫻子酒。林檎酒。里克。馬德拉。伯爾多塞爾利。三鞭。啤蘭地。杜松子酒。燕酒。穀酒。白耳馬其他名稱ノ何タルヲ論セス別項ニ揭載セサル一切ノ酒類
砂糖（精粗ノ別無ク）
糖密及糖水
煙草（葉煙其他筒煙。紙管煙餅煙。絲煙。嗅煙。噏煙等一切ノ）
襦袢釦釦類（襟袖ニ用フル各樣ノ）
髓甲（工作ヲ經タルト否トヲ論セス）
集書帖類
琥珀
兵器類（大砲。小銃。手銃。大砲彈。裝藥彈。刀劍其他其部分品等一切ノ）
杖及鞭類
珊瑚（工作ヲ經タルト否トヲ論セス）
脂粉藥香類（別項ニ揭載セサル香水。香油。染髮藥。磨齒粉其他名稱ノ何タルヲ論セス頭髮鼻口若クハ肌膚ニ適用スル一切ノ）
煙火類
獵銃及其使用品附屬品類
諸賭具類
火藥。綿火藥其他一切ノ爆發物類
雷管及渣火管類
樂器及其使用品類
煙管烟管匣其他一切ノ吸煙具類（其物質ノ何タルヲ論セス）
珍珠寶石及金銀細貨類（金剛石ノ他物ニ嵌メタル及眞珠。瑪瑙。水晶。嘉美洲等ノ他物ニ嵌メタルト否トヲ論セス其他佩帶粧飾ニ屬スル金銀ノ襟飾。耳環。指環。腕環。鉛筆。羅盤等一切供眞假ノ別無ク）
錢裘。刺匣。手帳。夾袋其他ノ懷中具類。

石硯（化粧料ノ）
偶像類　……化粧具匣類（裝入物件ノ何タルヲ問ハス）
玩具（各種）

附屬書八

日本港噸稅規則草案

第一條

日本船舶幷ニ外國船舶ハ左ノ條々ニ從ヒ一噸ニ付二十七錢ノ噸稅ヲ日本政府ヘ（一年中一度ヨリ多カラス）納ム可シ

第二條

前述ノ噸稅ハ日本政府ノ打量法ニ依テ測定スル所ノ船舶ノ噸數ニ從ヒ之ヲ納ム可シ而シテ稅關官吏ハ日本港ヘ來着スル各外國船ノ可稅噸數ヲ測定スル爲メ自由ニ該船ヘ乘込ム可シ

第三條

外國港ヨリ入來ル各船舶ノ船長ハ稅關ヘ入港手數ヲ爲スト雖モ第一條ニ揭クル割合ヲ以テ一箇年分ノ噸稅ヲ該船舶ノ爲メニ稅關官吏ニ納メ其爲メ稅關ノ證印ヲ捺シ且ツ噸稅納濟ノ期限ヲ記シタル領收證ヲ受取ル可シ但其時既ニ噸稅ヲ納メテ未タ一箇年ノ滿期ニ至ラサルヲ明證スルニ足ル可キ稅關ノ滿期書ヲ差出シ之ヲ稅關長ニ示スモノハ格別タル可シ若シ其時船長ヨリ右ノ領收證ヲ指出ス事能ハサルニ由リ一箇年ノ期限內何時ニ揭ハラス此規則ニ揭クル所ノ定額ヨリモ過分ノ噸稅ヲ取立テラルヽ事アリトモ該船長ニシテ稅關ヨリ受取タル兩度ノ噸稅領收證或ハ其確實ナル寫ヲ差出シ之ニ依テ其過分ノ噸稅ヲ納メタルヲ明證スルニ於テハ右過納ノ分ヲ取戻ス事ヲ得ヘシ但シ右領收證或ハ其寫ハ兩領收證ノ中後ニ受取リタル分ノ日附ヨリ六箇月內ニ該領收證ヲ渡シタル稅關ニ指出スヲ要ス可シ

第四條

前納噸稅滿期ノ日ニ當リテ日本港內ニ滯在スル船舶ノ船長ハ直ニ翌年分ノ噸稅ヲ其港ノ稅關ニ納ムヘシ而シテ稅關官吏ハ此規則ニ違反スルヲ防カンカ爲メニ該港ニ滯在スル所ノ各船舶ノ船長ヲシテ噸稅領收證ヲ出シ示サシムルノ權ヲ有スヘシ

第五條

各船舶ノ船長或ハ持主ニシテ前條ニ揭クル時限及ヒ方法ニ從テ噸稅ヲ納ムル事ヲ怠ルトキハ其噸稅ノ外更ニ五十圓ノ罰金ヲ課シ而シテ其最初ニ怠リタル時ヨリ二十四時間ヲ經過スル每ニ右ト同額ノ罰金ヲ累課ス可シ

第六條

凡ソ船舶ニシテ先ツ噸稅ヲ納メスシテ日本港ヨリ出發セント試ムルモノアレハ則チ之ヲ引止メ而シテ前述ノ噸稅竝ニ第五條ニ揭クル罰金（若シ之ヲ課スヘキトキハ）ノ外更ニ五百圓ノ罰金ヲ該船舶ノ船長ヨリ納メ了ルマテ其出港ヲ許サヽル可シ

第七條

左ノ諸船舶ハ噸稅ヲ免カル可シ

一　軍艦及軍用船
二　遊船
三　漁船（漁獲品或ハ商品ヲ積載セサル）
四　積量二十噸ニ滿タサル船
五　困難ノ有樣ニテ入港シ（但稅關規則ニ依テ稅關ヘ入港手數ヲ要セサル間）或ハ修覆ノ爲メニ入港スル船

第八條

此規則中船長ト稱スルモノハ稅關規則中ニ載スル所ト同一ノ釋義ニ據リ一年ト稱スルモノハ某年月日ヨリ翌年同月同日迄ヲ指シ又時數或ハ日數ヲ以テ限ルモノハ稅關休日ヲ除キ算シ港（外國港ノ外）ト稱スルモノハ外國通商ノ爲メニ開キタル日本港ニシテ該港港則ニ定ムル所ノ經界內ヲ指シ船舶ト稱スルモノハ外國ニ通航スル內國船幷ニ外國船ヲ指スヌ噸稅及ヒ罰金ハ日本金貨或ハ一圓位ノ日本銀貨ヲ以テ拂フ可シ

附屬書九

横濱港則草案

第一條

横濱港ノ經界ハ十二天山ヨリ直線ヲ引テ燈明船ニ達セシメ又其燈明船ヨリ更ニ正北ニ向テ直線ヲ引キ鶴見川口ノ東傍ナル海岸ニ達セシメ以テ之ヲ劃定ス

第二條

各船舶港內ヨリ望見ル可キ距離ニ至レハ其國旗幷ニ番號旗ヲ船上ニ引上ケ而シテ港長ノ役所ヘ入港屆ヲ爲シ了ル迄之ヲ引下ク可ラス

第三條

臨時本港ノ經界外ニ碇泊スル船舶ハ港長ヨリ許可ヲ受ルニ非サレハ陸上ト交通スルヲ得ス

（本港經界ノ事〔此頭書ハ捜索ノ便ニ供スルノミニシテ規則中ニ屬スルモノニ非スト雖モ之ヲ引證シテ本文ノ意ヲ解スル可ラス以下倣〕）

（入港前旗ヲ引上クヘキ事）

（港長ノ指圖ニ從テ碇泊シ及ヒ碇泊所ヲ轉スル事）

而シテ各入港船舶ノ船長ハ港長ノ指定ムル場所ニ即時其船ヲ碇泊セシメ且其後タリトモ碇泊場所ノ轉移ヲ港長ヨリ指圖スル毎ニ必ス之ヲ轉移スルヲ要ス可シ但シ急迫ノ事故アル時ノ外港長ノ許可ヲ得スシテ自ラ其碇泊場所ヲ轉移ス可ラス

第四條

軍艦碇泊場ノ事

港内ノ一區分ハ專ラ軍艦碇泊ノ場所ト定ムル而シテ他ノ船舶舟艇ハ何樣ノ者タリトモ港長ノ許可ヲ得ルニ非サレハ該區分内ニ碇舶ス可ラス

第五條

繫泊シテ錨鎖ノ繼合ハサル樣爲ス可キ事

各船舶ハ在港中必ス繫泊スルヲ要ス可シ且錨鎖ノ繼レ合ハサル樣爲シ置ク可シ

第六條

夜中碇泊燈ヲ點スル事

凡テ本港内ニ碇泊スル所ノ船舶ニハ日沒ヨリ日出迄ノ間船上ノ最モ見ヘ易キ處ニ白色透明ナル一個ノ燈ヲ揭ク可シ但シ其場所ハ船身上二丈ヨリ高カラサルヲ要ス而シテ其形ハ徑八

「インチ」（凡六寸六分九厘）以上ノ球形ニシテ其製ハ間斷ナク明亮不變ノ光輝ヲ放チ一海里以上ヲ隔テ、地平ノ各所ヨリ望見ル可キ者タル可シ

第七條

繫留船井ニ石油火藥庫船碇泊場ノ事

各繫留船（航海ニ用ヒサルモノ）及ヒ石炭油、石腦油、火藥「ダイナマイト」其他爆發質、劇燃質其外危險質ノ物品ヲ積載スル所ノ各船舶ハ總テ港長ノ指圖スル場所ニ碇泊ス可シ但シ其場所ハ神奈川臺場ノ沖ニ在ル浮標ノ中心ヨリ正東正西兩方ニ引キタル一直線以北タル可シ

第八條

爆發物ヲ積ム所ノ船舶ハ其趣ヲ港長ヘ届出ツ可キ事

石炭油、石腦油、火藥「ダイナマイト」其他爆發質、劇燃質其外危險質ノ物品ヲ積載シテ着港シ若クハ之ヲ積込マントスル各船舶ノ船長ハ直チニ其趣ヲ港長ノ役所ヘ報知ス可シ又何等ノ船舶タリトモ港長ノ指定メタル碇泊所ノ外ニ於テ右爆發物等ヲ積卸スルヲ許サス且

日沒ヨリ日出ノ間ニ積卸ス可ラス又右爆發物等ヲ積載シタル各船舶、艀船等ハ常ニ赤旗ヲ前檣又ハ船首ノ旗杆ニ揭ク可シ

第九條

輕荷灰塵等ノ事

本港經界内ニ於テ軍艦又ハ其他ノ船舶ヨリ輕荷、灰、塵、或ハ其他ノ汚穢物ヲ水中ニ投棄スルヲ許サス是ニ由テ風雨ノ妨ナキトキハ日日塵船ヲ出シテ右等ノ諸碇泊船舶ノ灰、塵、汚物等ヲ取去ラシムル可シ尤之ヲ取去ラシムル所ノ各船舶ハ其爲メ相當ノ手數料ヲ拂フ可シ

第十條

許可ヲ得サレハ輕荷等ヲ採ル可ラサル事

何人タリトモ豫メ港長ノ役所ヨリ許可狀ヲ受クルニ非サレハ何ノ地ニ於テモ輕荷、砂、石或ハ土ヲ採ル可ラス

第十一條

難破物或ハ他ノ障碍物ヲ取除ク可キ事

都テ難破物或ハ其他危害ヲ生シ又ハ本港ノ通航ヲ妨ケ或ハ入港ノ障碍ト爲ル可キ諸物ハ港長ヨリ其持主ニ令狀ヲ下付シ期限ヲ定メテ之ヲ取除カシムル可シ若シ其期限内ニ之ヲ取除カ

繫泊標ヲ設クルニハ許可ヲ得可キ事

サルトキハ港長ニ於テ之ヲ取除キ持主ヲシテ其費用ヲ拂ハシム可シ

第十二條

船中ニテ燃燒物ヲ煖ム可ラサル事

港長ヨリ許可狀ヲ得ルニ非サレハ本港經界内ニ於テ一切繫泊標ヲ設置スル事ヲ許サス而シテ其既ニ設置シタルモノト雖トモ港長ニ於テ之ヲ轉移セサル可ラスト思惟スルトキハ之ヲ轉移セシムル事アル可シ又港長ハ船舶ヲ繫カサル繫泊標ニ他ノ船舶ノ繫泊スルヲ許ス事アル可シ然レトモ該繫泊標ノ所有主ニ屬スル船舶ノ到着ス可キ確報アレハ其繫泊ニ指圖サル樣前以テ港長ヨリ之ヲ明ケ渡サシム可シ又何レノ繫泊標タリトモ六箇月以上其所有主ノ船舶ヲ繫カサルトキハ港長ヨリ令狀ヲ下付シテ之ヲ取除カシム可シ而シテ若シ之ヲ取除カサルトキハ港長ニ於テ之ヲ取除キ所有主ヲシテ其費用ヲ拂ハシム可シ

第十三條

何等ノ船舶タリトモ瀝青、樹脂、獸脂其他劇

シク燒燃ス可キ物品ヲ船内ニテ煖ムル事ヲ許サス但シ船尾外安全ナル距離ニ於テ端舟又ハ筏ヲ懸ケ其上ニテ之ヲ煖ムルハ妨ナシ

第十四條

何等ノ船舶タリトモ本港ニ於テ失火スルトキハ其船鐘ヲ打鳴シ救援ヲ得ル迄之ヲ止ム可ラス且鳴鐘ノ外晝間ナレハ本船失火ノ信號旗（萬國信號旗中ノNM）ヲ船上ニ引上ケ夜中ナレハ間斷ナク號燈ヲ上下ス可シ

失火ノ時ハ合圖ヲ爲ス可キ事

第十五條

每年六月一日ヨリ十月三十一日迄ノ間暴風ノ起ル模樣アルトキハ在港ノ各船舶直チニ最上檣、上檣及ヒ其帆架ヲ下シ且臨機投錨シ易キ爲メ豫備ノ船頭錨或ハ大錨ヲ用意シ置ク可シ又汽船ハ蒸氣ヲ仕掛クル用意ヲ爲シ置ク可シ

大風ノ季節中用意ノ事

第十六條

港内巡査ノ援助ヲ得ント要スルトキハ晝間ナレハ萬國信號旗中ノG旒ヲ前檣ニ引上ケ夜中ナレハ青色燈或ハ閃光燈ヲ揭ケテ信號ト爲ス可シ

港内巡査ノ援助ヲ求ムル合圖ノ事

第十七條

郵便汽船出入港ノ際發砲スルノ外港長ノ特許ヲ得ルニ非サレハ各船舶ニ於テ發砲シ又ハ烟火ヲ打揚クルヲ許サス

港内發砲又ハ烟火ヲ禁スル事

第十八條

軍艦又ハ其他ノ船舶ニシテ傳染病流行ノ地方ヨリ來航シ或ハ航海中航内ニ傳染病患者アリシモノハ港内ヨリ望見ル可キ距離ニ至ルトキ其前檣ニ黄旗ヲ揭ケ本港ノ經界線内ニ入ル事半海里以下ノ處ニ碇泊ス可シ而シテ本港衞生吏員ノ許可ヲ得サレハ何人ニ限ラス其船ヲ下リ或ハ之ニ乘込ム事ヲ得ス但シ檢疫停船規則ヲ實施スル時ニ於テハ右等ノ諸船舶ハ本港ニ到達スル前ニ該時履行スル所ノ規則ヲ遵奉ス可シ

傳染病流行ノ港ヨリ來リ或ハ航海中傳染病者アリシ船ノ事

第十九條

各船舶出帆セントスルトキハ少クモ二十四時前ニ出帆旗ヲ引上ケ出帆シ了ル迄通常ノ時間ニ出港前出帆旗ヲ揭ク可キ事

内之ヲ揭ケ置ク可シ

又沿海通航ノ船舶ト雖トモ滯泊時間ノ長キニ隨ヒ本條ノ規則ヲ守ル可シ

第二十條

何等ノ船舶ヲ論セス苟モ此規則ニ遵從セサルカ或ハ之ヲ犯ス者アレハ其各船舶ノ船長ニ五百圓ヨリ多カラサル罰金ヲ科ス可シ

又此規則ヲ犯シ或ハ之ニ遵從セサル者ニモ亦每犯右同樣ノ罰金ヲ科ス可シ

反則者ヲ罰スル事

第二十一條

此規則中船舶ト稱スルモノハ總テ外國形ノ船ヲ指シ、庫船、貨船及ヒ艀船モ亦此中ニ含ム者トス但シ殊更ニ開載スルノ外總テ軍艦ヲ包含セス、罰金ハ日本金貨或ハ一圓銀貨ヲ以テ拂フ可シ、港長ト稱スルモノハ其代理ヲモ併稱スルナリ又船長トハ稅關規則中ニ用フル所ト同樣ノ意義ニ從フモノトス

釋義等

第二十二條

各船舶入港ノ時ハ必ス其指揮官ニ此規則書一部ヲ交付ス可シ但シ既ニ之ヲ交付シテヨリ未タ一年ヲ經サルモノニハ之ヲ交付スル事無ル可シ

規則書ヲ各船舶ニ頒付スル事

附屬書一〇

十三年五月二十二日森公使ヘノ内達書

内達

今般ノ條約改正ニ於テハ治外法權ノ二項ハ充分ニ之ヲ討論スルノ趣意ニ非ス然レトモ實際ニ於テ我政府ハ聊カ其一端ニ論及セサル可カラサル者アリ抑々今度我政府ニ於テ締盟各國ニ望ム所ノ趣意ハ現行條約中僅ニ法律ノ施行ニ關スル事項ヲ少シク變換スル所アルニ過キス而シテ法權ニ關スル事件ニ就テハ責テハ彼我互ニ現行條約ノ本旨ヲ相解シ以テ往々紛議ヲ生ス可キ訴訟事件ニ於テ將來ニ施行ス可キ法權ニ就キ雙方滿意ノ基礎ヲ確定セサルヲ得ス是宜シク知悉ス可キ事ナリ

凡ソ民事刑事ノ法權ニ就テ從來英國領事ニ於テ施行セル通常訴訟ノ分ハ今更ニ悉ク之ニ關涉スルノ趣意ニ非ス但シ一人ノ官吏（其人法律學ノ教育ヲ缺ク者ナキヲ得ス）ニシテ領事ト判事トノ兩職ヲ兼帶スルノ不都合ナル短所ハアレト

モ是等ノ事ハ姑ラク之ヲ不問ニ置キ先ツ此ノ裁判法ノ如キハ差シテ本政府ノ治術（司法ノミニ關スル分）ニ阻碍ナシト謂フモ不可ナル事ナシ然レトモ領事法權ハ渾テ阻碍ナシト謂フ可カラス是レ我政府ノ將ニ其方法ヲ變革セントスル者アル所以ナリ

法權ノ問議ニ渉ラサル所ノ事件ニ於テ英國領事之カ執行ノ權ヲ要求スル此問題ノ如キハ之ヲ他日ノ論議ニ讓リ玆ニハ曾ニ英國領事カ非議ヲ免レサルノミナラス純然タル法官ニテ執行フモ猶且異議ヲ免カレサル類ノ事件ノミヲ論述セントス

此類ノ事ニ就テ變革ヲ爲サヽル可ラサル事ニ至ラシメタル難事ハ他ナシ我行政上ノ規則ヲ實施スルノ方法ヲ求ムルノ時ニ當テ起ル所ノ者ナリ而シテ其實行ハ我國ニ住スル內外人民一般ノ安寧幸福ニ關スルモノニシテ卽チ港內、水先、檢疫、出版、銃獵地方警察其他ノ諸規則ノ如キ是ナリ

此類ノ事項ト領事裁判所ニ於テ審判スヘキ自餘ノ事件トノ區分ヲ實際ニ議別スルノ徵候ハ畢竟該裁判所ニ於テハ此類ノ規則ニ違犯スル者ヲ審理スルノ權力ヲ固有セサルニ在リ若シ之ヲ審理セント欲スレハ（英國ニ於テハ）公使ノ掌握セル立法權ヲ施行シテ更ニ該規則ニ適當スヘキ者ヲ立テ、以テ領事ノ法權ヲ擴張セサルヘカラス是レ此難事ノ由來スル所ナリ

抑々領事裁判所ハ特ニ立法ノ權ヲ得ルニ非サルヨリハ日本ノ法律ヲ奉行スル事能ハサルハ固ヨリナリ公使此立法權ヲ行フニ二途アリ其一ハ則チ單ニ該規則ヲ添ヘタル布達ヲ發シテ以テ之ヲ英國人民ニ遵守セシメ之ヲ英國領事裁判所ニ於テ審理セシムルニ在リ其二ハ則チ該規則ヲ自國ノ者ト爲シテ以テ更ニ布達スルニ在リ然ルニ英國公使ハ此二途ニ由ル事稀ニシテ多クハ種々ノ理由ヲ以テ斷然該規則ヲ英國人民ニ實施スル事ヲ拒絕シ或ハ時ニ之カ施行ノ手續ヲ爲スモ無益ニ數多ノ時日ヲ送リ太タシク遲滯スルヲ常トス而シテ之ヲ布達スルニ及テ我規則ヲ用ヒス又之ヲ自國ノ者ト爲サス更ニ自カラ殊別ノ規則ヲ作レリ然而シテ其規則ヲ施行スルカ爲メニ（昨年ノ檢疫ニ於テ著明ナルカ如ク）其器械ヲ備ヘス亦其費金ヲ給セス之ヲ我政府ニ委ネテ以テ英國ノ規則ヲ施行スルノ煩勞ヲ受ケシメ且其費用ヲ辨セシムルモ其規則立案ハ一モ我參與スル所ニアラス又之ニ關涉スルノ權ナシ（英國公使固ク之ヲ保證セリ其事載セテ別紙書信中ニアリ）

此慣例ノ基本トシ英國公使ノ要求スル所ハ則チ曰ク日本ノ法律ハ公使ノ帶有スル立法權ノ補助ヲ得サレハ以テ英國臣民ニ施行スヘカラサルカ故ニ必ス之ヲ施行スルニ先テ豫メ公使ノ認許ヲ得サルヘカラスト（書信中ノ處々ヲ觀ルヘシ）此論ノ理非曲直ハ之ヲ後ニ讓リ卽今ノ眼目ハ只如是ノ申分ハ我立法行政ノ兩權ヲ毀損スルノ甚太シキヲ示スニ在リ若シ英國公使ハ其論スル所ノ如ク公使其人ノ認許セサル我法律ハ公使ニ於テ之ヲ拋棄シ之ヲ英國人民ニ施行スルヲ拒絕スルノ權アリトセハ其結局ハ果シテ如何ソヤ我政府ハ要用ナル行政規則ヲ立テヽ英國人民ハ之ヲ犯スモ無罪トシテ之ニ安セン乎將タ此類ノ新法ハ總テ先ツ英國公使ノ認可ヲ求メン乎若シ果シテ然ラハ他ノ各國公使モ亦同一理ナルヲ以テ等シク其認可ヲ求メサル可カラス然ラハ則チ其實外國公使ヲシテ我立法官ニ投票セシムル者ナリ是レ蓋シ英國公使ノ明カニ請求スル所ノ地位タルヤ此書ニ附錄シタル書信ノ拔萃ニ就テ之ヲ見ルヘシ且ツ其書信ハ上ニ示述シタル兩樣ノ成跡ノ架空ナラサルヲ見ルニ足ル可ク又英國公使ハ是等ノ事ニ關スルノ地位ヲ占メテ以テ我政府ヲ凌辱スル實ニ甚

太シキヲ知ル可シ（特ニ上陸ノ雜沓ヲ防クカ爲メニ設ケタル稅關規則ニ係ル書信等ヲ見ルヘシ）蓋シ是等ノ申分ハ英國公使ノ作業ニシテ其政府訓示ノ趣意ニ非サルヘキハ我政府甞テ印行ノ書ニ就テ讀得タル英國外務省ヨリ其公使ニ贈ル所ノ訓示ノ語勢ニ似サル者アルヲ以テ推知スル所ナリ若シ果シテ然ル事ヲ知ルハ是レ我政府カ喜望スル所ナリ雖然英國公使ノ所爲若クハ申分ニシテ明ニ廢棄セラレサル者ハ我政府ニ於テハ之ヲ英國政府ノ所爲ナリト申分ナリト見認ヘキハ勿論ノ事タリ

然ルニ我政府ハ反對ノ所見ヲ以テ十分ニ事情ノ難所ニ注目シ殊ニ英公使ヨリ我政府ニ宛テタル書翰ニ見ユルカ如ク英公使カ大ニ不是トスル所ノ規則ヲ其儘採用シ或ハ之ヲ自國ノ者トシテ更ニ布達スルヲ肯セサル所以ノ事由ヲ思察セサルニ非スト雖トモ此ノ如キ情由ヲ容ルヽトキハ或ハ從來英國公使カ提出セル理論ハ其實格別不都合ナル者ニハ非ラサル乎トノ疑念ヲ起サシムルニ至ラン若シ然ランニハ右雙方ノ考案ハ其孰レヲ取ルモ到底不合ノ議論ヲ生スルニ至ラン故ニ知ル可シ此事ノ全體ノ制度ノ是非如何ヲ審察シ一層簡約ニシテ且ツ正當確實ノ新案ヲ求ムルノ基本ト爲スヘキニ

非サル事ヲ

我政府ノ所見ニ於テハ現行ノ制度ハ全ク謬誤ニ屬スル者ナレハ之ヲ修正スルヨリ寧ロ之ヲ全廢シテ更ニ別法ヲ設クルニ如カスト爲ス又假令英國政府ニ於テ此制度ヲ保守シテ異論紛議ヲ生スル事無カラシムルモノ他ノ外國公使ニシテ英國公使ト同樣ノ立法權ヲ有セサル者ニ至リテハ必ラス變革セサルヘカラサルノ由アル可シ是レ固ヨリ我政府ト其國政府トノ間ニ在ル事ニシテ英國政府ノ關セサル所ト雖モ而モ猶我政府ト他ノ外國政府トノ異論紛議ハ假令其性質ハ異ナルモ其延及スル所ハ英國政府ニ於テ用フル所ノ制度內ニ屬スル所ノ者（前ニ出ツ）ト相同シキ事知ルヘシ然ラハ則チ其全局面ヲ再考更定スル事ニ同意アラン事ヲ英國政府ニ求ムルノ要用ナルハ他ノ各國政府ト同一般ナルヘシ

之ニ反シテ我政府ハ既ニ上ニ說ケルカ如キ考案ナルヲ以テ順當正確ノ一法ヲ設ケ各般ノ論議ヲ定メ本件ヨリ生スル所ノ各種ノ實際ノ不都合ヲ排除スヘキ者ヲ取テ以テ前ニ略述シタル諸般ノ事件ニ於テ我立法及裁判ニ關セル完全ナル法權ヲ定メント決シタリ

玆ニ上述ノ事ヲ略言スレハ則チ左ノ如シ我政府ニ於テ犯罪人ヲ糺問處刑スルノ權ヲ外國ニ讓與シ各國各自ノ法律ヲ以テ是等ノ案件ヲ公正ニ處分スル者アリ又他ノ訴訟アリ條約ニ載セサル所ニシテ別種ノ者ニ屬ス卽チ公衆ニ對スル犯罪是ナリ其犯罪タルヤ實際ニ於テハ專ラ內外人ノ保護及安寧ノ爲ニ必要ナル行政規則ニ違犯スルニ在リ是等ノ犯罪ハ我國ニ設置セル外國裁判所ニ於テ公正ニ處分スル事ヲ得ヘキ者ニ非サルナリ

我日本政府ハ上文ニ說ク所ノ目的ノ爲メニ要用ナルト否トヲ決定スルノ權アルハ疑フヘキニ非ス又之カ爲ニ我規則ヲ我日本ニ居住セル諸人ニ遵守セシムルノ權アルモ亦疑フヘキニ非ス是等ノ規則ヲ實施スルノ現行制度ハ更ニ其用ニ適セス又之ヲ改正スルモ各實施ノ權我ニ在ラスシテ他國ニ在リトスルノ理論ニ基ク者トセハ到底其論ハ一致スヘカラス又實際ニ行ハルヘカラス蓋シ其理論既ニ已ニ條約ノ趣意ヲ誤マレル者タルヘキカ故ナリ

當初條約ヲ實行セシ時日本ニテ適當ナル施政及裁判ノ官衙ナカリシカ故ニ竟ニ外國政府ニ於テ條約ニ由テ實ニ讓與セシモノヽ外ニ過餘ノ行政及裁判ノ權ヲ行フ事トハ成リシナリ固ヨリ已ムヲ得サルノ時ニ乘シテ要取セシ所ノ者ヲ今將

ク當然ノ事トシテ之ヲ英國公使ヨリ要求セリ

然レトモ時勢既ニ一變シ今ニ於テハ日本政府相當ノ官衙備ハリ全ク事務ニ差支フル事ナシト信シ乃チ偶然自失セシ裁判權ノ一部分ニテモ其手ニ回復セン事ヲ期望ス但シ特ニ條約ニ由テ失ヒタル裁判權（其區域頗ル狹隘ナリ）ヲ云フニアラス彼ノ習慣ノ久シキニヨリ實際ニ失ヒシモノニテ而カモ英國公使カ今ヤ當然ノ權トシテ要求スル所ノ者ヲ回復セント欲スルノミ蓋シ同公使ハ特ニ至當ノ處置ヲ設ルノ時ヲ俟タス僅カニ慣習ノ故ヲ以テ該權ヲ直行セント要スルノミナラス尙且（其書信ノ語氣ニ於テ時々表出スルカ如ク）條約上ニ由テ當然之ヲ自得セント謀レリ是等ノ申分ヲ提出スルニ方テ英國公使若シクハ其政府ニ此法權ヲ歸スルノ意ハ條約書中一條トシテ之ヲ明示セル者ナシ然ルニ條約ハ大意ヲ揭クルノミト云フ（書信ヲ見ル可シ）仍テ條約ヲ點檢シ其趣意ヲ調査スルニ文中所用ノ言語ニ依リ判然其申分ノ虛妄タルヲ顯出シタリ雖然此件ハ玆ニ贅言スルヲ要トセス何トナレハ英國政府ニ於テモ實要ト論理トハ必ス一途ニ出ルモノニテ卽チ邦官ヨリ出タル事件ニ施行スヘキ法權ハ一ニ其官ノミニ歸スヘキ事ヲ認了セラレン事ヲ希望シ必ラス其然ルヲ信スレハナリ

我政府現ニ本論ノ法權ヲ施行スヘキ權限ヲ確定センカ爲ニ我政府ノ期望スル所ノ細目ハ之ヲ異日ノ信報ニ附ス可シ

又本件ノ別部卽チ上ニ揭ケタル種類ノ訴訟ト未タ一議ニ及ハスシテ英國領事ノ裁判權（更ニ其餘ノ權アルニ非ス）ニ屬シタル事件トニ於テ英國領事行政權ヲ要求シ且ツ之ヲ實施シタル事及當時英國公使治外權ノ暴論ヲ以テ條約其他ニ於テハ未タ嘗テ我國權ノ許サヽル諸般ノ特許殊典ヲ要求シ剩ヘ英國人民既ニ之ヲ享有シタル事ニ就テ我政府ノ討議ハ他日之ヲ通報スルノ時アルヘシ

外務卿　井上　馨　印

註　森公使ニ對シ更ニ同日附「條約改正關係書類取扱方ニ就キ內訓」ノ書信アリ、對英交涉**一八一**文書參照
何鯵島公使ニ對シテモ同樣內信**二七五**文書アリ

十三年五月廿二日森公使ヘノ內達書附錄第一英譯文

Appendix
to the
Private Instruction

(Not to be handed to H. B. M. Foreign Office, but for private information of H. I. M's Envoy)

References to correspondence between H. I. M's Government and H. B. M's Minister in which the questions of the foregoing note are dealt with.

(1)

You will refer H. B. M's Secretary of State for Foreign Affairs to the correspondence on the subject of Shooting Regulations which was spread over a period of seven Years from 1868 to 1875. This correspondence is replete with passages too numerous to extract in which the right of H. I. M's Government to enact any such Regulations in any shape or form applicable to British subjects is distinctly denied, and the sole right to legislate for British subjects asserted to lie exclusively with H. B. M's

Minister (as an instance take the words in a Despatch of H. B. M's Minister dated May 14 1873 in which he say: : —

"The power to *enact* and to *notify* Regulations for the governance of H. B. M's subjects in Japan is vested solely in H. B. M's Minister." And as an example of the practical effect of the deadlock thus produced H. I. M's Government having determined to forbid shooting by foreigners shose authorities refused to subject them to the necessary restraints, take an expression of opinion in a later despatch dated 9 November 1875 :—

.....I consider Your Excellency will not be justified in causing foreigners to be interfered with by the Japanese Police when shooting solely because the Foreign Representatives cannot consent to the encroachment proposed by Your Excellency on the rules which govern the providence of the foreign Courts." (This Government had demanded that any fines imposed for offences against the regulations by the Foreign Courts should be paid over to H. I. M's Government) "and I should add that the res-

ponsibility of any misunder standing that may occur by any unwarrantable interference on the port of the Japanese police with foreigners will rest entirely with Your Excellency's Government."

(2)

You will also refer to the correspondence in the Year 1874 on the subject of allowing British subjects (as claimed by H. B. M's Minister) to land at any place they choose on the sea wall at Yokohama in defiance of the Customs' Regulations. In this matter the right of H. I. M's Government to make even such rules as the Treaty (Art XVIII) expressly empawers them to make in this behalf is put on one side, and in practice and effect as well as in the correspondence itself completely overridden. The necessity for the rules in question is completely established in the letters addressed by the Superintendent of Customs to H. B. M's Consul at Kanagawa (copies of which correspondence were at the time exchanged between H. I. M's Foreign Office and H. B. M's Legation at Yedo.). So that the action of H. B. M's Minister was not only illegal but injustifiable on every practical ground also.

(3)

The Quarnatine correspondence of 1878 also furnishes abundant examples of the attitude of H. B. M's Minister. Notably you may refer to His Excellency's letter to the Delegate Wilkinson (dated 29 July 1878, copy inclosed in Despatch of 1 Aug. 1878).

In a despatch dated 27 August 1878 His Excellency again makes a distinct claim to a voice in Japanese legislation: remark especially the following: —

"On laws which affect the Japanese people only that opinion (i. l. H. B. M's Minister's) if sought for by Your Excellency, can of course be only given in a private form, but when the Japanese Government desire the establishment of Regulations which materially concern British subjects and British shipping in this country and which would have to be enforced in British Courts, I am bound to demand that I should be officially consulted by Your Excellency as to the provisions of such Regulations."

In a further despatch a few days later dated 30

August 1878. His Excellency uses the following expression :—

"I take this opportunity of pointing out that Quarantine Regulations of the kind proposed can only be enforced with my sanction in the case of British ships and subjects." See also the whole of this Despatch. The despatch dated 31 October 1878 also contains distinct enunciations of the like untenable principles. Although a good deal of this despatch is occupied in explaining what H. I. M's Govern- ment perfectly understood before, viz that the consular Courts are defendant fo rtheir juris diction in such matters on the legislative authority of H. B. M's Minister, yet the whole despatch is worth quoting as shewing the absolute deadlock necessarily produced by His Excellency's attitude.

(4)

The Quarantine correspondence of the present Year 1879 is equally instructive. Draw especial attention to Despatch dated July 19, 1879 and copy enclosed therewith of telegram sent by His Excellency to H. B. M's Consul at Nagasaki directly

instructing him to ignore and infringe the Quarantine then established by H. I. M's Government. In Despatch dated July 26. 1879 also it is distinctly laid down that the Quarantine Regulations of H. I. M's. Government" can only be enforced on British vessels and subjects with due reservation of the rights of the latter to the protection of their own *authorities and with the concurrence* of those authorities." And if these expressions needed interpretation it is afforded by the rest of this Despatch and by many others, as well as by the practical steps subsequently taken by H. B. M's. Minister in the matter. Draw special attention to the unwarrantable pretensions and the needlessly overbearing language of this Despatch. The remainder of the correspondence also contains many instructive passages, notably the Despatch of 2 August 1879 in which in reply to the remonstrance of H. I. M's Government against the issue by H. B. M's Minister of regulations framed independently of those of H. I. M's Government. His Excellency points out hatt H. I. M's. Government has no concern with the form

of the Regulations which he may choose to issue. Although such Regulations may be (as this one in fact was) in direct opposition to the request of H. I. M's Government and in open defiance of its rights.

(5)

Reference may also be made to the correspondence in the Pilotage Regulations in the present Year.

In this matter the only objection H. E. was able to find was that certain.

Were fixed too high. It was painted out to H. E. that the sum fixed repressented the mean of similar sum fixed by the corresponding Regulations of different European Countries; and in point of fact the testimony of ships Captains and pilots alike was almost unanimous as to the fairness of the sum fixed. Nevertheless the execution of these Regulation as against British subject was delayed to the great less & inconvenience of both native & foreigners until after H. E's. departure for England, nearly 12 months. In first application to H. B. M's Chargi d' Affaires the difficulties made had vanished and the Regulations in question were immediately made applicable just as they stood to British subjects. You will point out that the delay on the fact of H. E. was of course only because he had not been previously consulted and was purely vexations, as is privately known & provable.

十三年五月廿一日森公使ヘノ內達書附錄第一英譯文

Memorandum of Points
for Convenience of
the Japanese Minister in London
Accompanying the
Instruction
relative to the
Proposid Treaty Revision

---

1. In the matter of Jurisdiction the Government does not intend demanding at the present Revision

of Treaties and actual change (except on one or two specified cases, hereafter mentioned) in the existing Treaty stipulations; but will claim to have its rights under the clauses of the existing treaties, relative to Jurisdiction, recognized; and to have these clauses fairly interpreted, so that the Government may be in a position to exercise, if it chooses, the rights of jurisdiction which *de jure* belong to it, but which, from various causes, it has not hitherto exercised *de facto*.

2. An agreement between all parties as to the *exact* interpretation of the jurisdictional portions of the Treaties, cannot perhaps be easily arrived at; but it would be a step gained, if at the present time a position declaration were given by the foreign parties to the Treaties, to the effect, that Japan is entitled to everything in the nature of sovereign authority *not expressly taken away by Treaty;* and that in ascertaining what is and what is not within the power and competency of this Government, the Treaties *alone* are to be looked at, and the question settled according to the true interpretation of them, as in similar cases between other Governments. (Note. Although the 'treaties' are spoken of in general, because the provisions of them all are, for practical purposes, identical, the Government does not mean by this form of expression to admit the principle of 'co-operation' between the foreign treaty powers which means, a kind of league against Japan, but insists on its right to deal with each nation as though it were the only one in treaty relations with Japan.)

3. If the above declaration were obtained, Ministers resident here would for the future be precluded from refferring as they now, in practice, habitually do, to other standards, such as '*customary*' rights of foreigners in Japan, the Minister's own personal view of the '*propriety*' of any piece of Japanese legislation, &c. &c. The foreign powers should be requested to give their representatives special and stringent instructions on this point.

4. Although the Government does not intend at present to assume and exercise in practice *all* the rights to which it believes itself *lawfully entitled*

yet as it wishes to have recognized its abstract right to all such power and authority as is not expressly taken away by Treaty, it is desirable to state here, roughly, the *extent* to which it is believed the treaties *do lawfully* deprive it of jurisdiction; so that it may be seen how much is left untouched by the Treaties and consequently remains in the sovereign authority of this country.

5. The Government believes that its inherent territorial jurisdiction is taken away, *only* as regards the class of cases pointed out in the Treaties, viz:— cases between two subjects of the same foreign nationality, and cases of crimes and offences committed by a foreign subject against Japanese subjects. (Note. Other papers containing the arguments in support of these proposition will be attached by way of Appendix to these instructions.) And further that with regard *even to these* cases, the effect of the Treaty is to deprive the territorial tribunal of nothing but the right to *try* and to *punish* such offences.

6. All *other* cases (except a few at present *specially* taken out of the territorial jurisdiction by different portions of the Treaties, such as Trade Regulations &c which the Government wishes specially restored to its jurisdiction by the same formal means as they were taken away) the Government considers untouched by the Treaties, and therefore asserts that the inherent territorial right of jurisdiction over them has never been taken away, and consequently remains in the Japanese sovereignty. To this class belong all offences against Japanese law except when the offence is committed against a *subject* of Japan; and consequently all offences against police and other administrative regulations come under this class.

7. Over all matters not falling within the Treaty the Government Claims the right of jurisdiction absolutely and fully: and over those which *are* alluded to in the Treaty, it claims to exercise jurisdiction *up to the point at which the Treaty takes it away.* viz:— up to the point of *trial* and subsequent *punishment.*

8. Of this claim in its enterely the Government

now seeks only an abstract recognition or if such a recognition cannot, owing to differences of opinion in interpreting the Treaty, be obtained to the full extent of the Government's position, at any rate as much recognition as is necessary for the purpose now in view *must* be obtained, so that what the Government is about to demand in the way of *practical* reforms may be yielded as a right, and not as a *concession.*

9. That is desired now is a recognition that the existing practice regarding jurisdiction, and the position hitherto assumed in the matter and positively asserted in word and deed by some of the representatives in this country, (and most of all by the British Minister) are not in accordance with the true intent and meaning and object of the Treaties; and, as to the future, that by looking back to the Treaties themselves (which though often referred to in general terms, yet never form the actual basis of the positions assumed by the representatives, their *actua' stipulations* being quite left out of sight) the conflicts of jurisdiction now continually arising may be obviated.

10. It is proposed to do this in two ways, dealing respectively with the two classes of cases above mentioned. viz:— those affected by the Treaties, and those quite unaffected by them. To take the last named, first: Although it is claimed that all cases except offences against '*subjects*' are within Japanese jurisdiction, yet it is not intended *at present* to demand the actual exercise of the whole of the jurisdiction thus inherent in the Japanese sovereignty, but only of that part of it which is connected with *special administrative regulations.* Of the cases legitimately cognizable by the Japane se tribunals, as not being offences against subjects, there are a great variety, and these of very different importance: For instance an attempt on the life of the monarch, or a conspiracy against the Government, fall strielly within Japanese jurisdiction; but it is not proposed actually to assume jurisdiction over such matters at present, unless cases should arise demanding punishment, but not cognizable by the foreign tribunal called upon to punish them. So also ordinary '*magisterial*' cases, such as 'drunkenness' where hot offences against subjects, are, strictly, within the territorial jurisdiction; but these may very well be left for the present to be dealt with, *as to their trial and punishment,* by the magistrales of the various foreign communities, if it were found desirable, and it were practicable to make a distruction between these and the other cases.

11. The line then, it is proposed to draw *for the* present purpose is one which is already marked out by the nature of the authority vested in the foreign Conculs; there are certain offences which are offences by the general law of the various nationalities represented by Consuls here, all these it is proposed to leave within their cognizance: there are certain other offences which only become offences by some act of legislation, whether of the Japanese sovereign authority or of the foreign ministers having special legislative powers over their own nationals; these offences are not punishable by the Consular Courts unless and until those courts have been *specially* given a jurisdiction over them by the exercise of legislative power by their superior authorities. All *such* offences it is proposed to withdraw from the cognizance of the Consuls, and restore to their oawful jurisdiction. viz:— that of the territorial tribunals, from which they have never been lawfully taken away.

12. Thus, all regulations of local police, sanitary, shooting, and other administrative regulations, would be *entirely* in the hands of the Japanese authorities *both as to legislative and judicial jurisdiction:* and thus would be obviated the one great difficulty hitherto existing.

13. Although the power given by H. B. M. to Her Minister and Consuls in respect of these matters was probably not in H. M's competency to give, being in excess of the rights accorded to Her by the Treaty; yet, so long as it is not exercised, and the Japanese Government is not called upon to recognize its validity, there is no occasion to require an alteration in the Orders in Council to be made: only, this Government *must point out* to H. B. M's Government that it considers H. M. has attempted to

confer upon Her officers in Japan power and authority and jurisdiction which it was not Her's to give the Treaty never having conceded it to Her.

14. Secondly, as to the class of cases to which the Treaties really apply. This Government wishes foreign Governments to instruct their representatives here to confine themselves to the exercise of the rights of jurisdiction actually belonging to them. viz:— the right to *try* and *punish* leaving to this Government, all that has not been taken away from it (Note by the draftman.) viz:— the power of arrest &c. in accordance with *Japanese law.*

It appears to me idle to enquire whether the general legislative power as to crimes and offences, the trial and punishment of which lies with the foreign tribunals, is or is not taken away, because, granting, as it must be granted, that an offence not punishable by English law cannot be made punishable in English courts by Japanese legislation, it follows that all Japanese criminal legislation which is not identical with the English is worthless for Englishmen: and so, whether this legislative power be theoretically taken away or not, it is, practically, nugatory.

15. Although, as a matter of abstract right, it is competent to this Government to make all such administrative regulations as it may think fit, and to impose any amount of punishment upon offenders against them, yet, having regard to the anomalous state of things hitherto existing, the Government is willing to lay down beforehand, for itself, for the satisfaction of foreign powers, a limit of punishment in all such matters.

16. To fix that limit is a matter of detail; but for the very offences in question H. B. M's Government has itself fixed a limit of punishment, in defining the legislative powers of H. M's Ministers in China and Japan that limit is three months imprisonment and $500 fine.

17. It would be well if consular authorities were reminded, by special and stringent instructions from their Government, of the limits of their functions and powers, and were forbidden to assert *administrative* authority, an authority clearly not belonging to them, but one which owing to the encroachments upon territorial jurisdiction in judicial matters, has, almost as a matter of course, been exercised in all consular districts; and is now no doubt regarded by the Consuls as a part of their lawful functions.

18. One more thing will require special mention and will ultimately call for some express provision in the form of an undertaking of declaration by the foreign powers, especially H. B. M's Government: this is the present habit of diplomatic interference with the course of judicial proceedings. At present it is the almost universal habit, even in civil proceedings, for the Minister to interfere, not unfrequently *even during the actual pendency of a suit:* and when a decision is adverse to the foreign suitor in a Japanese Court, the appeal is more often carried diplomatically to the Foreign Office, than the superior courts as lawfully provided. This practice should itself be forbidden by more stringent instructions to the Minister. But it is feared that when foreign subjects become amenable to Japanese administrative tribunals the evil would be greatly intensified, and the proceedings *never* be allowed to pass without interference and diplomatic *pressure.* To obviate this some very definite and positive assurances should be sought, by which the interference of Ministers should be limited within the bounds laid down for it by the universal voice of International Law.

19 There is also the question of excise licences, the immunity from the burdens of which at present enjoyed by foreigners is not only in itself a fraud on the national revenue; but is the means of further defrauding the revenue by the illegitimate proceedings to which it opens a door; whereby Japanese subjects are enabled, by conniving with a foreigner as the ostensible owner of a business, to escape the payment of excise-duties upon goods really the property of the Japanese party to the transaction. But this matter would fall more naturally perhaps into the question of Customs and other similar imposts generally.

17 November 1879.

附屬書一一

明治十三年五月鍋島青木長岡鮫島井田柳原六公使ヘノ內達書

條約改正要領內達

今般彼我條約改正ノ要領ハ之ヲ大別シテ財務及裁判ノ二部ト爲ス可シ

曩ニ予カ先任既ニ內達ヲ附與シ卿等之ヲ領收ス其文中今般ノ條約改正ニ關シ我要求スル所ノ事件ハ特ニ我帝國方今ノ財務ニ在ルノ主意ヲ布ケリト雖モ今又此內達ヲ附シテ以テ前意ヲ補充シ我政府要求ノ主旨ヲ完全ナラシムルヲ以テ須要ノ事ト爲ス卿等本件ヲ處スルニ方テ宜ク常ニ銘心セン事ヲ望ム所アリ卽チ我政府ハ維新以來我國古來稀有ノ大事變ニ際會シ多クハ政事上ノ擾亂ニシテ國歩頗ル艱難ヲ極メ此時ニ當リ每ニ之ヲ征定整頓セシ事是ナリ加フルニ爾來內國百般ノ工業ヲ興起シ或ハ製產工藝ノ改良ヲ進ムル等ニ當リ其際財務ノ困難ニ會スル每ニ我政府ハ楮幣ヲ發行スルノ外固ヨリ之ヲ救フノ術ナク其幣ヤ漸次ニ流通ノ額ヲ增シ良久シク實貨ト同價ヲ保チタリト雖モ漸クニシテ其價格ヲ失ヒ市價ノ下落スル忽チ方今ノ甚シキニ至レリ是レ固ヨリ然ルヘキノ勢ナリト雖モ今ニシテ之カ治術ヲ施サスンハ他日何ヲ以テ之ヲ防遏スルヲ得ンヤ

我政府年々金貨ヲ以テ支拂フヘキ支出ノ類別許多アリ就中其尤大ナル者ハ歐洲市場ニ於テ兩度ニ借入タル公債ノ年賦拂ト其利子借リ入タル公債ノ元利年賦拂其他締盟各國ヘ公使領事ヲ派遣スルノ如キ殆ント減節スル能サルモノ是ナリ其他年々內外貿易ノ不平均ヲ生シ間接ニ金貨ヲ以テ其差異ヲ償出スルノ一事ハ今此ニ細論セスト雖モ事情已ニ斯ノ如シ故ニ今ノ時ニ方テ我政府ノ先ツ第一ニ知ラント欲スル所ノモノハ何ノ地何ノ術ニ由テ金貨ヲ求メ得ヘキ乎ヲ定ムルニ在リ是レ實ニ我財務ノ全局ヲ轉スルノ樞軸タル事卿等宜シク察ス可キノミ然而シテ目下我政府ニ金貨ヲ得ルノ源ハ只之ヲ海關稅ヨリ收入スルノ一路アルノミ是レ遂ニ其意ヲ玆ニ決ス所以ナリ

予其外國政府ノ意ヲ考察スルニ蓋シ其心私カニ謂フ我政府今般ノ改正ニ依テ輸入稅ヲ增サント計ルハ其目的二樣ニ出テ一方ニ向テハ外國品ニ較々重苛ナル輸入稅ヲ課シテ一種ノ抑制法ト爲シ之ニ由テ內國ノ工業ヲ保護セント欲シ又一方ニ向テハ海關稅ノ收額ヲ增加セント欲スルニ在リト而シテ是稅頗ニ流行セルモノヽ如シ

予思フ歐洲政府ノ中ニ苟シ斯ノ如キ謬見アルハ是レ大ニ我本意ノ徹底ヲ妨害シ本邦ノ實益ヲ阻碍スル者タルヲ以テ予切ニ卿等ノ權宜ヲ以テ務メテ之ヲ排除セン事ヲ要ス卿等此事ニ論及セハ請フ宜シク左ノ要點ヲ力述シ我政府所取ノ意見ヲ明示セヨ曰ク蓋シ保護說ハ概ネ文明ノ諸國ニ於テ異論紛々タレトモ必竟之ヲ採用スルニ堪ル程ノ製產力アル國ニ在テハ或ハ大功ヲ奏スル事アルヘシ之ニ反シテ工業ノ力ナク僅々二三ノ未製品ヲ出スニ過サルノ國ニ於テ之ヲ採用スルハ實ニ迂愚ノ極ナルノミト

能ク我國內地ノ現狀ニ通曉スル者ノ說ニ由レハ今ノ日本ハ前條末段ノ部類ニ屬スル者ナリ夫レ然リ故ニ我レ思ニ所謂ル保護說ニ從ハントスルノ措置ハ曾ニ好結果ヲ得サルノミナラス或ハ自滅ヲ招クニ至ルモ亦知ル可カラス畢竟保護說ノ如キハ我レニ於テ全ク度外ニ置クノ論タル事照乎トシテ其レ明カナリ予更ニ言フ我政府ノ大主意ハ單ニ是レ將來實貨ノ收入ヲ一層多分ニ增加シ漸次上文所謂ノ楮幣下落ノ害ヲ醫治シ傍ラ實貨支出ニ必要ナル費目ニ宛ント欲スルノ外別ニ思考アルニ非ス是則チ我財政ノ危急困難救濟スルノ一術ニシテ萬不得已ニ出ツルノ策ナリ然リ而シテ卿等又各能ク注念ヲ加ヘ須ラク駐劄政府ヲシテ銘心セシムヘキ要件アリ卽チ我政府ノ斯ク海關稅ヲ以テ其收額ヲ加增セント欲スルヤ其主意未タ嘗テ夫ノ通商貿易ノ利害ヲ蔑視セサル是ナリ實ニ不當ノ苛稅ハ適ニ以テ交商ノ意氣ヲ挫折スルニ足リ元來關稅賦課ノ眞目的ヲ破リ其極ヤ竟ニ卻テ收額ノ減殺ヲ招クアルモ其加增ヲ望ミ難シ是レ固ヨリ我政府ノ知悉スル所ナリ

次ニ予カ卿等駐劄ノ政府ニ對シテ其注意ヲ牽ント欲スル所ノ者ハ他ナシ在留外國人民ト我國民及政府トノ間ニ起レル訴訟裁判ノ異同ヨリ生スル所ノ難事是ナリ卿等駐劄國ノ政府ヲシテ我カ日常交通ノ際ニ於テ遭遇スル所ノ難事ノ種類及大小ヲ通曉セシメンカ爲メニ現今裁判權ノ事ニ就テ我政府及人民ト在留外國人民トノ關係如何ヲ卿等ヨリ務メテ明亮ニ辯解セン事ヲ要ス

第一全社會ノ安寧ノ爲メニ內外人民一般ニ實守セシムルヲ要スルノ時ニ方リ我政府ヨリ隨時布告スル所ノ諸般ノ行政規則ヲ實施スルニ於テ本省ト外國公使トノ間ニ屢々紛議異論ヲ生スル事アル是レナリ

內外交涉裁判權ノ事ハ卿等ノ熟知スルカ如ク率ネ現行條約書中簡略ニ之ヲ一條ニ登載セリ然リト雖モ是等ノ條款一トシテ我政府ニ對スルノ犯罪卽チ外國臣民我政府ノ行政規則ヲ犯ス件ノ如キハ之ヲ明示セル者ヲ見サルナリ是ニ仍テ外國臣民ト雖モ尙且我行政規則卽チ出版條例、遊獵規則、檢疫規則、鐵道規則、水先規則ノ類ノ如キニ至テハ全然我政府ノ裁判ニ服ス可キハ疑ヲ容レサルナリ故ニ在留外國人苟シ上ニ揭載スルカ如キ條例規則ヲ犯ス者アラハ必ス當ニ我裁判所ノ審問ヲ受ケ日本ノ法律ニ照シ之ヲ處罰スヘシト確信ス然ルニ或外國公使ニ在テハ我カ此ノ條約ノ眞意ニ基キ斷定セル主義ヲ駁シ自家隨意ノ見解ヲ下タシ以爲ラク在留外國人ハ其行政規則ニ關スルト關セサルヲ問ハス更ニ日本ノ法律ニ從フノ義務ナク將タ自國ノ法律若シクハ外國法律ノ體裁ニ改作シタル日本ノ律ヲ奉ス可シト之ヲ詳說センニ凡テ日本政府ノ行政規則ハ之ヲ在留外國人民ニ施行ス可カラズ但シ一旦外國公使ノ手ニ於テ外國法律ノ體裁ニ改作シタル上ハ始テ之ヲ外國人民ニ施行スル事ヲ得ヘク然リ而シテ若シ犯者アラハ外國ノ法律ニ由リ外國官吏ノ審問處罰ヲ受ク可シトスルナリ此等託言ハ平生我締盟諸外國公使ノ齊シク其口ニ藉ク所ト爲リ由是若シ一號ノ日本行政規則ヲ居留外人ニ施行セント欲セハ各國各異ノ法律及裁判所アリテ爲メニ大不便ヲ致シ其極竟ニ此等規則ノ實施ニ大困難ヲ生シ往々當然ノ罰ヲ加ヘスシテ止ム者アルニ至ル是レ卽チ我規則ニ附載セル罰例ハ此等諸外國臣民ニ對シ毫モ其効用ヲ及ホス事能ハサレハナリ

何國ノ法廳ニ論ナク敢テ能ク外國ノ法律ヲ奉行セスト云ヘル主義ニ據テ之ヲ論スレハ本邦內ニ設置セル外國法廳ニ於テモ亦然ルナリ今設シ日本法律ニ照セハ當ニ某罰ニ處スヘキ程ノ案件アリテ此ヲ該外國法廳ニ於テ審問センニ苟モ其國法ニ斯ノ如キ定律ナキトキハ則チ其犯罪者ハ全ク處罰ヲ免カル、ニ至ルカ故ニ良シヤ外國ノ法律ニ模制セシ日本法律タリトモ敢テ之ヲ實行シ難キ所以ノ理ハ右主義ニ照シテ判然タリ是ニ由テ之ヲ觀レハ前條外國公使等ノ託說ノ如キハ第タ無稽ノ主義ニ根據シタル者ナル事知ル可キナリ

夫レ然リ故ニ我カ外國居留地內ニ現存スル此ノ不正悖理ノ情況ハ其衆人ニ困難ヲ與フル果シテ幾可ソヤ且ツ其良政府ノ施治ヲ窘迫スル果シテ如何ソヤ乃チ玆ニ訴フル諸害難ノ根抵ヲ索レハ唯是レ前條ノ託詞ニ在リ卽チ以テ我政府ニ對シテ其未タ嘗テ條約中ニ除却セラレサル本然ノ權利ヲ執行スル事ヲ許サヽル是ノミ此根抵ヨリシテ日常發出スル所ノ無算ノ弊害モ皆ナ之レニ坐スルナリ是レ數ノ睹易キモノナルヘシ

今外國政府ニ右等ノ趣意ヲ提出スルニ臨テ首トシテ明知セサル可ラサル者アリ抑モ我レヨリ提出スル改正ノ主意タルヤ敢テ彼方ヨリ權利ノ讓與又ハ其交回ヲ一モ要求スルノ念アルニアラス唯其業已ニ我掌領ニ屬スルモノヲ復收シ今回改正ノ條約中一定ノ方法ヲ設ケ以テ從來現行條約ノ爲メニ未タ嘗テ嚴然觸冒セラレサル所ノ權力施行ノ約款ヲ編入セントス欲スル是ナリ次ニ通知ヲ要スルモノアリ彼方ニ在テ若シ一旦右主義ヲ承認セハ則チ今復タ我カ論抗スル主義ヲ十分主張セスシテ幾分ノ減節ヲ其間ニ施スハ素ト辭セサルナリ卽チ右權力ノ施行ヲ制限シテ罰例ノ範圍ヲ預定シ此制限ヲ過料洋銀五百元以內及ヒ禁獄三箇月以內ト定ムル是レナリ

以上說ク所ハ專ラ行政上一般ノ規則ノミニ止マレリト雖トモ此論題ハ自ラ他ニ連及ス卽チ普通若クハ一地方ノ警察規則ニ因テ制定シタル小罪（違警罪）是ナリ既說ノ如ク從來

外國人ニテ我政府ノ警察規則ヲ犯ス者アルトキハ則チ之ヲ其自國ノ領事法廳ニ引渡シ其國官吏之ヲ審問シ其國ノ法律ニ照シテ之ヲ處罰スルノ例ニテ其手續恰モ他一般ノ案件ニ於ケルカ如シ然ルニ今我警察法廳內ノ實況ヲ一見シ將タ此等裁判所ノ曾テ洋法採用以來ニ護ル所ノ實驗如何ヲ顧ミレハ則チ警察規則ヨリ起レル外國人民輕罪卽チ違警罪ノ如キ各件ニ至テハ都テ之ヲ該所ニ於テ處理セシムルモ充分適當ナルヘシ是レ我カ深ク信知スル所ナリ故ニ今復タ從來ノ如ク右等規則違反ノ外國人ヲ其領事法廳ニ引渡サスシテ自後ハ日本官吏ニテ之ヲ處理セシメント欲ス但シ此事ヲ處スルニ當リ外國政府ヲシテ次ノ事情ニ注意セシムルヲ緊要ナリトス曰ク抑々已レノ力能ク衆意ヲ滿足セシメ得ヘキヤ否ヲ確知セスシテ漫ニ自カラ重任ヲ其有司ニ負擔セシムルノ危害ナル事ハ是レ素ヨリ帝國日本政府ノ明知スル所ナリ（本然權利ノ論ハ姑ク置テ問ハス）且ツ前陳ノ如ク其自ラ好テ制限ヲ施スノ表意ハ以テ我政府ノ夫ノ法權論題ニ關シ其解難トシテ今回提起セル全策中常ニ正直謙遜ノ意ヲ兼存スル明徵確證タルヘキナリ

特ニ望ム卿等駐劄ノ政府ニ對シ克ク此點ヲ通告シ充分之ヲ

了得スルニ至ラン事ヲ

本件ノ如キハ既ニ席上ノ論ニアラスシテ宜ク當ニ迅速ノ改良ヲ行フヘキ實際ノ要務ナリ苟クモ此ヲ改良セサルトキハ兩國人民間ノ友交通商上ニ永ク障碍ヲ爲ス可キノミナラス我輩確信スルニ前條提出ノ如キハ外國政府ニ在テ一見或ハ其意ニ滿タサル所アル可シト雖モ然レトモ是レニハ因テ以テ我政府ノ目的ヲ遂シニハ以テ外國ノ利益ヲ謀リ即チ唯此ノ一策アルヲ知ルノミ

卿等任國政府ノ聰明ナル固ニ顯著ナルヲ以テ之ヲ推慮スルニ必スヤ應ニ今般我ノ提出スル意見ノ不得已ニ出ル事ヲ承認シ且ツ前條中概陳スル綱領ノ大主義ヲ同意スルニ至ルヘシ是レ予カ信シテ毫末疑ハサル所ナリ

明治十三年五月　日

外務卿　非上　馨

一三　明治十三年五月十三日　吉非上雖外務公卿ヨリ廻ル

條約改正草案及訓令送付ノ件

附屬書　吉田公使ヘノ訓令案

吉田公使ヘ　別信案　第四號

今般青木公使赴任使ニ托シ條約改正案幷ニ右ニ附屬スル諸書類共別紙目錄ノ通貴君ニ送致候間御査收可有之候就テハ同公使ニ於テ貴地ニ到着ノ上ハ速ニ其任國政府ト開談ノ順序内訓ニ依リ全權委任ノ書翰ヲ以テ其政府ニ提出シ開談ニ着手スヘキ儀ニ候尤モ開談ノ順序ニ關シテハ内訓ニ於テ詳細ノ儀ハ申進候ニ付茲ニハ略ス

註　草案及附屬書ニ付テハ前掲一二文書參照

附屬書

十三年五月(ママ)日附吉田公使ヘノ訓令案

Draft of Instruction to Yoshida Kiyonari Minister Plenipotentiary of Japan in Washington, with regard to the Revision of Treaty.

It is known to you and to the Government to which you are accredited that in the 4th year of Meiji (1871) the Government of Japan gave notice to U. S. Government and the several other Powers with which it had concluded treaties, of its desire to proceed to the revision of those treaties in the 5th year of Meiji (1872). When the Embassy of H. E. Iwakura Tomomi was about to depart for America and Europe, information was given to the U. S. Government and all the other Powers that the revision would be postponed until the return of that Embassy. Since its return, various circumstances, both in the internal and Foreign Affairs of the Empire have induced the Government to defer the revision. Now, however, all these difficulties have been removed and we desire to avail ourselves of the situation to obtain the revision of the Treaties.

By the revision, this Government expects to come into a fuller enjoyment of the sovereign rights inherent in this Empire, and to this end there are several clauses in the old treaties which ought to be amended and modified. Among the most important of these clauses are those which relate to the trade regulations and the Customs Revenue in the several subsisting Treaties and especially in the convention of 1866. This Government is confident that the United States, will, upon a proper representation of the facts and after due consideration, see the necessity of a resumption by Japan of the right of establishing its own Tariff, and this is now the principal object of this Government. It is considered to be of the utmost importance—even of necessity. From the beginning of our intercouse with foreigners the expenditures of this Government have increased from year to year. As while the Treaties are in force it could not increase its revenues from imports and exports the consequence is that it became necessary to exact increased internal taxes from the people. It will thus be compelled to exhaust almost the fountains of national prosperity at their sources. There is something worse than pecuniary loss, because the people will begin to see that they are heavily taxed by reason of foreign interference with our revenue system. In course of time they shall thus naturally be led to exasperation against the policy which this Government would gladly pursue of extending more and more facilities to foreign intercourse.

It is therefore of vital importance to foreign trade and to the improvement of friendly relations that this Government should be free to resume its ori-

ginal sovereign right, to adjust its Tariff, and trade regulations according to its own financial necessities and to the political necessity of maintaining internal satisfaction and peace.

The United States Government and other friendly Powers may reasonably expect that no revision of the Tariff shall impose upon the merchandise of their respective countries any high duties than are found necessary by some of them. They may also expect that this Government will in no case discriminate in the duties imposed upon the products of those nations unless that discrimination shall be made in recompense for some discrimination in favor of the products and commerce of Japan, in other words upon the principle of commercial reciprocity, which prevails among enlightened nations when this Government may find it convenient to agree thereto by special convention. Upon such principles of reciprocity this Government would be willing to abolish its duties upon exports, and would also, if it shall be found necessary to produce a satisfactory arrangement, be willing to open one or

an idea of great loss sustained by this Government a copy of it is hereto annexed for your use. This Government desires to so revise the existing Treaties that the export duties therein provided for may be removed and all provisions therein and also in the convention of 1866 which restrict the right of this Government to lay and collect duties on imports may also be removed. This Government will agree if the above last named propositions be consented to, by any Treaty Power to open to such Power so consenting to the same, additional ports for residence and commerce to the subjects or citizens of such Power, and also to abolish all export duties as to such Power.

You will read this instruction to the Secretary of States and give him a copy if he desires it.

一四　明治十三年六月十日　駐米公使ヨリ外務卿帝國公使宛

東京全權委員派遣ノ儀在國政府ヘ要求方訓令ノ件

新條約全案ハ廻議ヲ經既ニ許可ヲ得テ印刷ニ取掛タリ今日

more new ports to foreign commerce. Upon this principle also this Government expects that the right of controlling the coasting trade of this Empire as inherent to the rights of an independent states should emphatically be recognized. When the Tariff convention of 1866 was agreed to, this Government had very imperfect information in regard to the cost and price of foreign merchandise. It therefore consented to a schedule of specific import duties—including all *unenumerated* article. It was the intention that these duties should yield a revenue of five per cent upon the foreign cost of the respective articles. It has been found by experience that these duties in many cases amount to even less than one per cent upon the real value of the goods which are imported in large quantities. A table has been prepared at the Yokohama Custom House showing the difference between the actual import revenue at that port from year to year and what it would have amounted if the duties were equal to 5 *per cent.* This does not include all the merchandise imported, but as it is sufficient to give

ヨリ一週間餘ニテ皆出來ノ上夫々各公使ヘ相渡シ可申候就テハ（魯）政府ヘモ七月下旬頃ニハ相達可申候其期ニ臨ミ候ハヽ同政府ニ對シ關稅ノ增額ト裁判權利ノ一ト點ヘ付テハ我政府不得已相企タル主義且其權利ヲ有スル事柄故充分御辨議有之度候右草案ニ對シ各政府ヨリ異議百出スルハ必然タリ尤先般差進候森鮫島二公使ヘノ內狀寫中ニモ申述置候通閣下ニモ彼政府ヨリ各條款ニ對シ存慮ヲ論出スルカ或ハ彼ヨリ新个條ヲ以テ我條款ニ代用セン事ヲ要求スル時ハ臆斷ヲ以テ確答ノ義無之樣被致度若シ御地ニ於テ右存慮代用个條等ニ付各自論辯スル時ハ第一ニハ多少主意ノ相違ヲ惹起シ第二ニハ各政府ヨリ各異見ヲ提出シ對之變換存慮ノ是非ヲ應答候テハ到底收末スル所ヲ失シ可申乍併凡テ草案上ノ主意ハ聚ニ御說明相成彼ヲシテ氷然解釋セシメ候ヲ主義ト被致度抑此改正談判ノ場所ハ兼テ東京ト相定居候義ニ付右草案ノ條款ニ付異見ヲ生シ候ハヽ勿論協議上ヨリ結局功ヲ奏スル事柄ニ付總テ我政府ニ於テハ各國ヨリ東京ヘ派出ノ全權委員ト協議決定可致旨ヲ返答被致度候故ヲ以テ閣下ノ說明ニテ我條款ノ主義ヲ（魯）政府ニ於テ略了解候上ハ速ニ全權委員ヲ東京ニ派出被致旨ヲ同政府ヘ速ニ御請求

有之度候森鮫島ヘ内狀寫幷口頭ニテモ陳述セシ其略ニ曰ク
粗各政府ノ異見ヲモ先ツ承知仕度ニ付个條个條ニ因テ異論
有之候ハヽ一ト先當地ヘ御通知相成度旨申入置候併尚再考
候ニ右樣ノ手續致候テハ殊ノ外日月ヲ費シ只々各國ヨリ全
權委員ノ派出ヲ遲延セシムルノ口實ヲ與ヘ候如キニ付斷然
全權者派出ヲ速カニ請求シ於當地夫々協議ヲ遂ケル樣致度
候其邊ハ御了解違ヒ被下間敷候御熟知ノ通稅目一定稅額增
加ノ義ハ目今我會計上最モ急務トスル所ニ有之且裁判權モ
竝閉ニ難捨置一大緊要ノ事件ニシテ早ク好手段ヲ設ケ追々
我法權回復ノ道ヲ開キ不置候テハ將來益々我權理上ニ損害
ヲ受ルノミニ有之是レ卑官今般裁判權ノ事ニモ斷然着手セ
ル本旨ニ御座候條彼是ノ情實篤ト御諒察至急委員派出ノ義
其政府ヘ御要求被成速ニ好果ヲ被結候樣汲々御盡力被下度
此段吳々モ致希望候云々

十三年六月十日　　井上馨

……殿

一五　明治十三年六月十五日　英國代理公使ヨリ井上外務卿宛

條約改正ノ範圍及手續ニ關スル件

謹啓然ハ條約改正之義ニ付昨日閣下ト御面談ニ及候節今般貴國ハ締盟諸國ト現行條約ノ改正相成度主旨閣下ノ御陳述有之就テハ拙者ノ意見ヲ筆書シ以テ閣下ニ進呈スルハ則チ貴我兩政府ノ利益ニ可有之ト存候凡ソ双方ノ誤解ヲ避ケンニハ條約改正ノ商議ヲ始メサル前ニ先ツ貴我兩政府ノ主意ハ如何ニ有之候哉又其願望スル所ハ孰レノ邊ニ有之候哉ヲ互ニ判然ト了解スルハ專一ノ事ト存候尤モ此義ハ閣下ニ於テ御同意ニ可有之ト存候

抑モ我政府ノ狀態ヲ察スルニ其特說トスル所ハ昨日閣下ニ申上候通リ明白單一ノ者ニ有之候卽チ一千八百七十九年四月一日我外務卿ハ在倫敦日本公使ノ來翰ニ回答被致候節我政府ハ貴政府ノ要求ニ隨テ倫敦會議ノ義ヲ相見合セ可申事ヨリ幷ニ我政府ハ貴政府ノ願意ニ應シ條約改正ノ商議ヲ東京ニ於テ相開可申旨ヲ通知被致候且千八百七十九年七月十五日「サー、ハリ、パークス」ヨリ「サリスパリー」侯ノ諭達ニ從テ寺島氏ニ及報道候次第ハ貴政府ニ於テ其現行ノ

稅則ニ改正若クハ修正ヲ加ヘント欲スル所ノ意見ヲ先ツ締盟諸國ノ政府ニ御回達相成候テ諸邦一列ノ商議ヲ可催手續無之內ハ我政府ニ於テハ肯テ條約改正ノ商議ニ與カル事ヲ辭スト云フ旨意ニ有之候

顧テ貴政府ノ狀態ヲ察スレハ此新規改定ノ稅則ニ付テ我政府ヘ御送附ノ爲メ去ル二月三日當公使館迄御差出相成候分ヲ除ク時ハ其外前文ニ起載セシ我政府ヨリ閣下ノ先任ヘ御通知置候事ヲ貴政府ニ於テ御採用相成候樣子更ニ相見ヘ不申候

昨日閣下被仰聞候ニ此稅則新定ノ事ハ各國ノ商議ニ掛ケン爲既ニ御通達ニ相成候由且其新定ノ稅則ハ蓋シ至當ノ者ニシテ尤モ締盟諸國ニ於テ之ヲ採用センニハ多少ノ說明ヲ要シ修正ヲ加入可致旨又在倫敦ノ日本公使森氏ニ諭達シ同氏ヨリ稅則新定ニ關スル說明ヲ我政府ニ致サシメ若シ右改定ニ同意ヲ得候上ハ則チ我政府ヨリ條約稅則ヲ議定スルノ全權ヲ日本駐劄ノ我公使ニ授與可被致樣我政府ニ要求セシメ候旨モ承知仕候

御面話中ニ閣下被仰候日本ハ固ヨリ締盟諸國ノ同意ヲ經スンハ條約改正ヲ實行スルノ權理無之候得共其自國ノ稅則ヲ

制定シ且東京ニ於テ締盟諸國ノ名代人ト各箇異別ニ商議スルノ權理ハ有之候旨御辯述相成候

右之諸件ハ判然了解致置度事柄ニ有之候故何卒更ニ閣下ヨリ我政府ニ對シテ閣下ノ意見ハ便チ猶又說明ヲ容レ可申旨ヲ御確報有之度希望仕候昨日閣下被仰聞候ト拙者致案察候ニハ自國ノ稅則ヲ改定スルニ付日本ノ希望スル所ハ他無ク今般ハ復タ條約結訂ノ時ノ如ク前年締盟諸國ノ干涉ヲ受ケズ止タ其稅則ヲ以テ先ツ此等諸外國ニ照會シテ商議ヲ開可申旨意ニ有之候由且舊條約ハ原ト各箇異別ニ批訂セシモノナルカ故ニ之ヲ改正スルモ亦締盟諸國ノ名代人ト各箇異別ニ商議セン事ヲ貴政府ニ於テ固ヨリ希望被成候得共若シ締盟諸國ノ願意有之候ハヾ一列ノ諸國ト同時ニ協議スルモ亦妨ケ無之候由尤モ條約調印ノ儀ハ各國別異ニ可致且一樣ノ稅則ヲ各國ニ施行可致旨相伺候

閣下又被仰候ニハ寺島氏嘗テ企圖被致候テ單ニ一千八百六十六年ノ現行稅則ヲ改正センカ爲メ商議ヲ開キ別ニ新條約ヲ要セサル意見ニ有之候得共閣下ニ在テハ然ラス其裁判權ヲ始メ商業ニ至ル迄現行條約ノ全體ヲ改正シ更ニ通商條約ヲ結訂シ若干年ノ間施行スヘキ稅則ヲ附加セン事ヲ企圖被

成候旨承知候樣ヲ願クハ閣下幸ニ担當ヲシテ日本政府之意見幷願望ニ付キ分明ニ我政府ニ通報スルヲ得シメン事ヲ敎具

千八百八十年六月十五日

東京英國公使館

ゼ゛ヨルデン゛ケネデー

外務卿 非上 馨閣下

(右原文)

British Legation
Tokio.
15 June 1880.

Sir,

Referring to the conversation which I had the honour to hold yesterday with Your Excellency on the subject of Treaty Revision, it appears to me that it would be of advantage both to Her Majesty's Government and to the Government of Japan that I should place on record the opinion I formed from Your Excellency's statement of the position assumed by Japan in regard to the proposed Revision of the Treaties now existing between Japan and the

Treaty Powers.

Your Excellency will I am sure agree with me that in order to avoid misunderstandings it is of the highest importance that previous to the commencement of negotiations for Treaty Revision, the views and wishes of Her Majesty's Government and of the Government of Japan should be clearly understood.

The position of Her Majesty's Government, as I understand it, and as I had the honour to inform Your Excellency yesterday, is clear and simple. On the 1st April 1879 Her Majesty's Secretary of State for Foreign Affairs, in reply to a letter from the Japanese Minister in London stated that Her Majesty's Government have decided, at the request of the Japanese Government, to abandon the project of a conference in London and that they are willing to acced to the desire of the Japanese Government that the negotiations for the revisions of the Treaty should take place at Tokiô.

On the 15th July 1879 Sir H. Parkes, under instructions from Lord Salisbury, informed Mr. Tera-

shima that Her Majesty's Government decline to enter into any new negotiations for the Revision of the Treaties until after Your excellency's Government shall have Communicated to the Governments of the Treaty Powers as a basis for joint negotiations the proposals which they—the Japanese Government—wish to make relative to the amendment or modification of the existing tariff.

As regards the position of the Government of Japan, it does not appear that they have taken any official steps to accede to the desire of Her Majesty's Government as announced in the above mentioned note to Your Excellency's predecessor, excepting the communication on the 3rd February last to this Legation of the proposed new tariff for transmission to Her Majesty's Government.

With respect to this new proposed Tariff Your Excellency was good enough yesterday to confirm your previous statement that it had been communicated as a basis for negotiation, and you further said that it had been communicated as evidence of the reasonable character of the proposed tariff charges and for adoption by the Treaty Powers subject to further explanation and modification, and that Mr. Mori the Japanese Representative in London had received instructions to furnish explanations to Her Majesty's Government respecting these Tariff proposals, and after the concurrence in them of Her Majesty's Government to request that full Powers should be forwarded to Her Majesty's Representative in Japan to negotiate and conclude a Treaty-tariff.

In the course of our conversation Your Excellency admitted that Japan has not the right to effect a Revision of her Treaties without the consent of the Treaty Powers, but Your Excellency insisted on the right of Japan to fix her own tariff and to negotiate separately in Tôkiô with the Representatives of Powers having Treaties with Japan.

As these are points upon which a clear understanding is desirable, I have the honour to request Your Excellency's Authority to assure Her Majesty's Government that your views are capable of further explanation. If I understood Your Excellency rightly,

you were good enough to inform me yesterday that in fixing her own tariff Japan merely wished to submit as a basis for negotiations a tariff framed by herself and not by the Treaty Powers, as had been done on previous occasions, and that although the Government of the Mikado wishes to negotiate separately with the Representatives of the Treaty Powers for the Revision of the Treaties which were Separately concluded originally, yet Japan would not object to negotiate with all or part of the Treaty Powers acting jointly together, if the latter should wish it—provided that separate Treaties be signed with each Power—and that the same tariff be inserted in each Treaty.

Your Excellency was also pleased to state that Mr. Terashima had at one time intended to propose negotiations for a simple revision of the existing Tariff Convention of 1866, without a new Treaty, but that you propose a general Revision of all existing Treaties, which would include commercial matters as well as the subject of jurisdiction and the conclusion of new Commercial Treaties with

致義無之ト存候得共末文ニ至リ前顯談話中增者之申陳候義ニ付貴ト ニ於テ御了解相成候大意ヲ御再說有之候一段ニ於テハ更ニ少シク辨明ヲ要シ候點モ有之候若シ是等之點ニ付解說モ不致打過候ニ於テハ更ニ一層之謬誤ヲ惹起シ候恐モ可有之ト存候依テ右等之點ニ付可成直實管約之解說ヲ左ニ可致陳呈候

去二月閣下（差進候擬定輸入稅目草案之義ハ正ニ來諭之如ク我政府之意見之情理アル事ト擬定輸入稅目ハ寬裕ナル主意ヲ以テ編成セル事トヲ閣下ヨリ貴政府ヘ御證明可相成目的ニテ公然及進送候モノニ有之右草案ハ卽チ双方協議之豫案爲ス可キ存思ニ有之候

頃日御談話之砌申陳候通通商條約ニ附加ス可キ稅目（目今印刷中）中ニハ重立タル輸入品三十件ヲ列載シ其輸入稅ハ卽チ既ニ致進送候草案之原則ニ從テ賦課スル見込ニ有之其餘之物品ハ悉ク一般之稅目中ニ集合開載シ全ク條約ニ關涉セシメサル存思ニ有之候右新定輸入稅目ハ不日差進其他改正之全事件ニ關係スル一般ノ草案類モ其節取纏メ可差進候貴翰幷ニ千八百七十九年七月十五日「ソル、ハルリ、パークス」ヨリ拙者ノ先役ヘ被差越候書翰之趣ニテハ貴政府ニ

Tariffs annexed for a stipulated term.

Hoping that Your Excellency will kindly enable me to furnish Her Majesty's Government with a clear statement of the views and wishes of the Government of Japan. I avail myself of this opportunity to renew to Your Excellency the assurance of my high consideration.

J. Kennedy.

His Excellency
Inouye Kaoru
Minister for Foreign Affairs

一六　明治十三年六月二十六日　井上外務卿ヨリ英國代理公使宛

條約改正ノ範圍及方式ニ關シ回答ノ件

附屬書　十三年六月二十二日靑森公使來電

無號

謹啓然ハ條約改正事件ニ關シ且殊ニ過般閣下ト及御談話候事ニ關シ本月十五日附ヲ以テ御差越之貴翰正ニ落掌致候偖來示中最初ニ御開陳相成候事件ニ就テハ前段ニ增補更改可

於テハ日本政府之希圖スル所ハ單ニ千八百六十六年稅目約定書之修正ニ止マリ且該約定書ニ調印シタル各國條約國之連合商議ヲ允諾スルモノヽ如ク了解被致候義ト存候然ルニ右ハ少シク事實ニ適合不致候故今此一事ニ付貴政府ノ謬見ヲ除却可致ト存候

抑日本政府ニ於テ條約改正ニ着手セント希望致候ハ閣下モ定メテ御承知之通既ニ諸條約國之政府ヘ通牒候事ニテ卽チ（英國トノ間ニ於テハ）千八百五十八年條約ノ第二十二條ニ揭載スル權利ニ據ルモノニ有之候

右ノ箇條中改正ノ期限或ハ性質ニ付別段ニ揭示スル所無之候得共若シ經驗ニ由リ修正ヲ要スト思惟スルニ於テハ之ヲ修正ス可キ旨記載有之候又日本政府ニ於テハ單ニ千八百六十六年ノ稅目約定書ノミヲ改正スルノ存思ヲ述候事決シテ無之候此段貴政府ニ於テ御注意有之度候偖拙者ノ推察致候ニハ千八百七十八年中拙者之先役ヨリ在倫敦日本公使ヘ交付セル諭達ヲ貴政府ヘ通牒セシニ因リ幾分カ貴政府ノ謬見ヲ惹起候事ト被存候尤モ右諭達ニ於テハ主トシテ我國財政上ノ急需之次第ヲ申述有之候乍然右諭達ハ只々千八百六十六年ノ稅目ノ事ノミヲ擧クルモノニハ無之且單ニ一般之財

政ニ係ル事件ノミヲ載セタルモノニテモ無之爾余之事件ニモ論及セシモノニ有之候右ハ該論達ヲ通讀致候ヘハ其文中ニ於テ十分明瞭ナル事ト存候即チ右論達中左之通陳示有之候

「經驗ニ由リ若クハ事實止ムヲ得サル事アリテ整頓ヲ要ス可キ事アラバ條約改正ノ時ニ際シ我皇帝陛下ノ政府ニ於テ其議ヲ擴張ス可キ完全ノ自由ヲ存スル々」又其後文ニ曰「其時ト場所トハ協議決定スル所ニ從ヒ一般ニ諸條約ノ改正ニ着手スルヲ以テ我政府ノ企望スル所トス」

右ノ文ハ即チ條約改正事件ニ付日本政府ニ於テ最初ヨリ保持スル所ノ定說ヲ貴政府ヘ知ラシムルニ十分ナル可シト存候扨我政府ノ定說ハ最初ヨリ右ニ明示スル如クニシテ拙者ノ存知候所ニテハ改正事件ヲ商量スル所ニ於テ各條約國ノ合議ヲ求ムル等決シテ無之候又拙者ヨリ既ニ屢々申述候通千八百六十六年兩締盟國間ニ執行セシ手續ニ從フ事ハ我政府ニ於テ斷然謝絕致候此義ハ閣下ニ於テ格段ニ御注意アラン事ヲ企望致候抑今回協議ノ結局ハ原條約（即今回ノ改正ノ根原タルモノ）締結ノ時ニ於ル如ク諸條約國ト夫々各別ニ條約ヲ新訂スルニ至ラン事ヲ目的ト致候義ニ有之候尤各國公然結黨シテ日本國ト協議スルニ非スシテ貴政府及ヒ該事件ニ關係アル他國トノ間ニ於テ私ニ合議一致ヲ約スルカ如キハ日本ニ於テ故障可申立筋無之候此事ハ贅言ヲ須タサル義ト存候又通商條約ニ輸入稅目ヲ附加スルヲ以テ便利トスル事ニ付以前拙者ヨリ申陳候一條ハ尙又重ネテ玆ニ確言致候尤右稅目ハ協議之節豫メ年限ヲ約定スヘキモノニ有之候

前顯申進候主意ニ基キ法權上及ヒ通商上ノ事件ニ關スル諸條約之完全ナル草案ハ近日進送可致候ニ付此段モ併セテ貴政府ヘ御通報被下度候此段申進候　敬具

明治十三年六月二十六日

井上馨（手署）

英國代理公使　ゼー、ヴェルドン貴下

（右英文）

Foreign Office Tokio.
The 26th the 6th Month
the 13th Year Meiji.

Sir,

I have the honor to acknowledge the receipt of your letter of the 15th instant in relation to the subject of Treaty Revision, and referring especially to the conversation I had the pleasure of holding with you on a previous occasion:

In reply I beg to state that I do not see any particular occasion to add or to change the statements made in the first part of that communication: but as to its latter part, wherein *you* (sic) statements made by me in the conversation above referred to, I find a few points which appear to me to require some additional explanation; and which if allowed to pass without comment might, I fear, possibly lead to yet further misapprehension. I now therefore take the liberty to comment upon these points in as direct and brief a manner as possible.

The draft of the proposed new import tariff which I had the honor to communicate to you in February last, was officially communicated to you, as you rightly state, with the object of affording to H. B. M's Government evidence of the reasonable character of our proposals and the liberal disposition with which the proposed rates of import duty had been framed throughout; and this draft was intended to form a preliminary basis of negotiation.

As I informed you verbally in our recent conversation, the actual tariff which I propose to annex to the Commercial Treaty will be one (now going through the press) containing only some thirty principal articles of import, the duties upon which are fixed upon the basis of the draft already communicated: All other articles it is proposed to embody in the General Custom Tariff which is intended to be entirely independent of Treaty. This new import tariff shall be communicated to you in the course of a few days together with other and general drafts in relation to the whole matter of Revision.

I gather both from your present note and from the communication of Sir Harry Parkes dated the 15th July 1879 addressed to my predecessor, that H. B. M's Government has been to some extent under an impression that Japan wishes simply to revise the Tariff Convention of 1866, and that she is willing to accede to 'joint action' on the part of

the Treaty Powers signatory to that Convention.

I wish however to call your attention to the fact that this is not exactly the case, and I take therefore this opportunity of removing any erroneous views entertained on this subject by your Government.

The desire of the Japanese Government to proceed to a revision of the Treaties has been notified, as you are no doubt well aware, to the several Governments of the Treaty Powers in virtue of the right stipulated for in (as regards Great Britain) Article XXII of the Treaty of 1858.

The said Article you will observe contains no specific reference to the extent or nature of Revision, but speaks generally of the introduction of modifications of which the necessity is demonstrated by experience. And I should remind H. B. M's Government that the Japanese Government has never manifested any intention or desire of simply revising the "Tariff Convention of 1866." I however venture to conjecture that your Government might have been led to some extent into this misapprehension by the communication to them of an instruction given to Japanese Minister in London by my predecessor in 1878, which it is true, was principally taken up with an exposition of the financial necessities of this Empire: but at the same time it needs only to read that communication to see that it did not deal with the Tariff of 1866, or even with the general financial question, *exclusively:* but had reference to other matters besides, as a reference to the language used will show plainly enough.

Thus, it was said:—"It is however necessary to mention that His Majesty's Government reserves to itself the entire liberty of extending the discussion at the time of Revision to such other subjects as experience and necessity have shown to require adjustment, &c.": and again further down, that "it is the desire of this Government to proceed to the *general* revision of the Treaties at such time and place as may be agreed upon."

The above passages will, I feel sure, be sufficient to remind your Government of the position assumed *from the outset* by the Japanese Government respecting the question of Treaty Revision.

The position thus being what I trust I have now made it clear that it always has been, there is in my opinion no occasion whatever calling for "*joint action*" on the part of the treaty powers in dealing with the present question of Revision, and as far as this Government is concerned, I beg to call your particular attention to the fact, which I have already repeatedly stated, that this Government declines to follow any such steps as those which were taken by both contracting Parties in 1886; but that what it contemplates as the result of negotiation is the conclusion of a new and separate Treaty with each one of the Treaty Powers as in the case of the original Treaties which now form the primary subjects of Revision. It may be superfluous to add that as regards any joint action agreed upon between H. B. M's Government and other Powers interested, Japan has of course nothing to say, so long as such action is confined to joint proceedings among the Powers themselves and does not extend to an official combination of action in dealing with Japan.

I beg also to confirm my former statements with regard to my views on the expediency of annexing the import tariff to the commercial treaty for a fixed term of years to be agreed upon in course of negotiation.

I request that you will kindly report at the same time to your Government that I shall have the honor shortly to communicate complete drafts of Treaties dealing with both jurisdictional and commercial matters based upon the original understanding above set forth.

I avail myself of this occasion to renew to you the assurance of my highest consideration.

(Signed) Inouye Kaoru.

I Gordon Kennedy Esq.

H. B. M's Chargé d'Affaires.

附圖等

十三年六月十一日着森公使來電

Enouye

Gaimusho

Tokio

Yours 15th: British Government perfectly understand our demand; mistake caused by believing German Minister Tokio.

Mori.

一七　明治十三年六月三十日　井上外務卿ヨリ駐英佛獨露墺各帝國公使宛

條約改正案及附屬書類送付方ノ件竝ニ第十二條修正通知ノ件

森鮫島青木柳原井田公使別信案　英廿號　佛十七號　露六號　獨八號　墺五號

先便青木公使ニ托シ御送致申候　青木柳原井田公使ヘハ（先般御携帯ノ）通商條約草案第十二條聊修正致候間前案ト引替之爲メ不取敢別冊壹本差進候其他書類モ追々印刷出來候間一纏之上次便御送附之積ニ有之候此段申進候也

一八　明治十三年七月六日　井上外務卿ヨリ各國公使宛

條約改正案及附屬書類送付ノ件

附屬書　通商條約附錄稅目草案

以書翰致啓上候然貴國ト我國トノ間ニ取結候條約改正ノ義ニ就テハ兼テ貴政府ヘ申進置候處今般右草案書類出來候ニ付則チ別冊修好條約幷ニ附錄覺書草案通商條約草案幷ニ附錄及改正趣意書共各二通ツヽ、封入及御送致候條早便貴政府ヘ御轉送相成度及御依頼候且右草案ニ基キ新條約締結之運ニ到リ候樣致度就テハ貴政府ニテ全權委員御選定相成當府於テ速カニ右御談判ニ取掛候樣冀望致候條其段貴政府ヘ同時御申立相成度此段可得貴意如斯候　敬具

年　月　日

外務卿

「朱書
米清ヲ除ク」

某國公使閣下

「朱書
露　十四號　獨　十五號　蘭　十六號
瑞典　七號　墺　九號　佛　八號
西班牙　十號　丁抹　十號
以上七月六日ニ達ス
伊　十號　白　九號

註　添附書類綴ハ五月二十二日附在外帝國公使ヘ送附書類同一案ナルベキニツキ一二文書參照

附屬書

稅目草案

日本及ヒ　兩國間通商及ヒ航海條約附錄第一號　日本國輸入品目並ニ其稅則

一帆布（綿麻ノ別無ク）　毎方碼三錢七厘
二時辰鐘　從價百分之二十
三綿英　毎斤九厘
四綿絲　毎斤三錢二厘

綿布類

五綿繻子　毎方碼一錢七厘
六綿天鵞絨　毎方碼六錢
七左良紗　毎方碼一錢
八生金巾　毎方碼五厘
九色金巾　毎方碼一錢
一〇生天竺布　毎方碼一錢
一一緋金巾　毎方碼八厘
一二寒冷紗　毎方碼一錢
一三石炭油　毎瓦五錢
一四塊鉛　毎担四十錢
一五諸機械類（無稅部外ノ）　從價百分ノ五
一六竿鐵及釘鐵　毎担二十二錢五厘
一七紅花　毎斤七錢三厘
一八難底皮　毎斤四錢

砂糖（帝國色位十級以下ノ）

一九自第一號至第三號　毎斤一錢二厘
二〇自第四號至第六號　毎斤一錢八厘
二一自第七號至第九號　毎斤二錢四厘
二二第十號　毎斤三錢
二三傘骨（附屬金具ノ備リタルト否トヲ論セス）　毎打十二錢五厘
二四時辰鏢　從價百分ノ二十五

毛布類

二五臥氈　毎斤五錢五厘
二六毛繻子　毎方碼三錢三厘
二七縮緬呉呂　毎方碼二錢八厘
二八オルレンス　毎方碼二錢
二九純毛羅紗（原名如何ヲ論セス帝國ニ於テラシヤト通稱スル）　毎方碼十二錢
三〇絹綿布類　從價百分ノ二十五

一九　明治十三年七月七日　井上外務卿ヨリ在外各帝國公使宛

條約改正案及附屬書類送付ノ件　其一

附屬書一　十三年七月七日附森公使宛往電
二　書類目錄
廿四號　在英　森
九號　在獨　青木
公使へ別信案
七號　在露　柳原
六號　在墺　井田

別紙甲號寫之通リ今日電報ヲ以テ申進候如ク修好條約草案通商條約草案同附錄幷ニ改正趣意書別紙乙號之通リ書簡相添已ニ昨六日本地駐劄英獨露墺公使ヲ始メ各國公使へ交附致シ本國ヨリ全權委員撰定相成早々談判ニ取掛度旨申入置候ニ付左樣御承知有之度候又改正書類追々印刷出來ノモノ別紙丙號目錄之通リ更ニ差進候條御落手有之度此段申進候也

十三年七月七日

註　乙號各國公使宛書翰ハ前掲一八文書ナルニ付省略ス
丙號目錄ノ書類省略ス　一二文書附屬書參照

附屬書一

甲　號　十三年七月七日附森公使宛往電

Copie
Mori
Japanese Legation
London

Communicated yesterday Draft Treaties to all Foreign Ministers in Tokio except the American minister inform this all other Legations.
Inouye.

The 7th July 1880

附屬書二

丙　號

書類目錄

一　日本及ヒ　修好條約幷附錄覺書草案　（和　英）
一　同草案ノ叙言幷註解新調ノ分　（英　）
一　日本及ヒ　兩國間通商及ヒ航海條約　（和　英）
一　同　附錄　（同　）
一　條約改正趣意書　（英二通）（佛四通）
一　內　達　（和　英）

一　森公使へ內達書　（和　英）

幷附錄　第一　第二

一　條約改正參考ノ爲メ各港開市アル府縣ヨリ上申シタル書類調查案
一　條約改正ニ付東京商法會議所報告　（英　）
一　稅關規則草案　（和　英）
一　噸稅規則　（和　英）
一　船稅說略
一　擬定輸入稅目　（和　英）
一　輸入稅率　（同　）
一　治外法權論　（英　）
一　日本帝國輸出入比較表　三葉　（和　英）
一　橫濱港則　（同　）
一　費歩一定說明
一　治罪法
一　刑　法
一　定額稅礎
一　擬定收稅額概算表
一　各國輸入稅率比較表

條約草案及關係書類送付ノ件　其二

廿五號　在英　森公使
拾　號　在獨　青木公使
七　號　在墺　井田公使　へ別信案
八　號　在露　柳原公使
二十號　在佛　鮫島公使

別紙書目寫之通條約草案關係書類ノ中夫々性質ヲ區別シ長岡鍋島兩公使へ相達置候就テハ先々ヨリ貴下へ及御送致候分モ右同樣ニ御心得有之度此段申進候也

十三年七月七日

二〇　明治十三年七月八日乃至十二日　英獨墺佛各公使ヨリ井上外務卿宛

條約草案竝覺書等領收本國政府へ送致方回答ノ件

一　英國代理公使來翰

謹啓本月六日附貴簡拜展致候然者修好條約草案竝ニ法權ニ關スル覺書、通商航海條約草案竝ニ附錄海關稅則案及ヒ右修好條約草案竝ニ法權ニ關スル覺書ノ說明書相添我政府へ送致之儀御依托之旨承知致シ候乃チ條約改正ニ付商議之根

據トシテ右書類早速我政府ヘ送達可致候尤閣下當府ニ於テ近日右商議相開カレタキ御期望之旨併セテ可及上申候仍テ此段及拜復候敬具

千八百八十年七月八日

在東京英國公使館

ゼ、ジ、ケネディー

外務卿 非上 馨殿閣下

（右原文）

British Legation
Tokio
8 July 1880.

Sir,

I have the honour to acknowledge receipt of your note of the 6th instant forwarding to me for transmission to Her Majesty's Government copies of a Draft Treaty of Friendship with a Memorandum on Jurisdiction annexed thereto—of a Draft Treaty of Commerce and Navigation with a Tariff proposed to be annexed to it, and also of an explanatory statement on the Draft Treaty of Friendshep and on the Memorandum relating to jurisdiction.

In compliance with Your Excellency's wishes I shall not fail to forward to Her Majesty's Government by the first opportunity the above Mentioned Documents as a basis of negotiation for Treaty Revision, and at the same time I shall convey to Her Majesty's Government the hope Your Excellency that negotiations may be shortly commenced in this City.

I take this opportunity of renewing to Your Excellency the assurance of my high Consideration.

J. Kennedy.

His Excellency
Inouye Kaoru
Minister for Foreign Affairs

Euerer Excellenz, die Versicherung meiner vorzüglichsten Hochachtung zu erneuern.

V. Eisendecher.

An
den Minister des Auswärtigen
Herrn Inouye Kaoru
Excellenz.

II 獨逸公使來翰

第二十六號

以書翰致啓上候然者本月六日附之貴翰ニ接シ日本獨逸國修好條約幷ニ附錄覺書竝ニ其他日本獨逸兩國間通商航海條約草案幷ニ附錄及ヒ條約改正趣意書共各々二部ツヽ御回送相成候處謹テ落掌致候右書類ハ閣下ノ御希望ニ應シ次ノ米國郵便ヲ以テ本國政府ヘ轉送シ併セテ改正談判ノ全權著命任ニ相成候樣我政府ヘ可申立候右御回答如斯ニ御座候敬具

東京千八百八十年七月八日

フォン、アイゼンデッヘル

外務卿 非上 馨閣下

（右原文）

No. 26/249 Tokio, den 8. Juli 1880

Euerer Excellenz beehre ich mich den Empfang des geneigten Schreibens vom 7 ten d. Mts., mit welchem Sie mir den Entwurf eines Freundschafts-Vertrages zwischen Deutschland und Japan nebst einer Denkschrift dazu, ferner einen Anhang dazu und erklärende Bemerkungen zu der Vertrags-Revision in je zwei Exemplaren übersenden, ganz ergebenst zu bestätigen.

Ich werde nicht ermangeln, Euerer Excellenz Ersuchen entsprechend, diese Schriftstücke mit der nächsten Amerikanischen Post meiner hohen Regierung zu übermitteln und gleichzeitig die Ernennung eines Bevollmächtigten für die Revisions-Verhandlungen nachzusuchen.

Ich benutze diese Veranlassung,

III 墺國公使來翰

七月八日達

以書翰致啓上候然者本月六日附之貴翰ニ接シ墺地利洪噶利ト日本トノ修好條約通商航海條約幷ニ附錄及ヒ改正趣意共御回送相成候處謹テ落掌致候右書類ハ早速我カ本國政府ヘ轉送シ且ツ閣下ノ御希望ニ應シ改正談判ノ全權著命任ニ相成候樣我政府ヘ可申立候右御回答如斯ニ御座候敬具

東京千八百八十年七月八日

「ホッフクル、フォン、ホッフクンフクルス」自記

外務卿 非上 馨閣下

（右原文）

Oestr.-Ung. Legation.
Tokio, den 8 ten Juli 1880

Ich habe die Ehre den Empfang der Note vom 6. d. Mts. zu bestätigen, womit Euer Excellnz die Gefälligkeit hatten mir die abgesonderten Entwürfe eines neuen Freundschafts-und Handels-und Schiffahrtsvertrages zwischen Oesterreich-Ungarn und Japan nebst Anhang und erläuternden Bemerkungen zu übersednen.

Ich ermangle nicht diese Dokuments auf dem raschesten Wege der K & K Regierung vorzulegen, zu deren Kenntniss ich gleichzeitig den in derselben Note, betreffs der Designierung eines Bevollmächtigten der K & K Regierung ausgesprochenen Wunsch Euer Excllenx bringe und benutze diesen Anlass zur erneuerten Versicherung meiner ausgezeichnetsten Hochachtung.

Hoffer von Hoffenfels.

Seiner Excellenz,
Herrn Inouye Kaoru,
Kaiserlich-Japanischem Minister der
Auswärtigen Angelegenheiten.

四 佛國代理公使來翰

七月十二日達

Veuillez agréer, Monsieur le Ministre, les assurances de ma haute considération.

R. de Balloy

Son Excellence
Monsieur Inouyé
Ministre des Affaires Etrangerès
&c. &c. &c.

二一 明治十三年七月十日 井上外務卿 獨逸公使對話筆記

日本條約草案ニ關スル件

明治十三年七月十日獨逸公使館ニ於テ日本條約草案ニ就キ井上外務卿ト獨逸公使トノ對話ノ筆記

獨逸公使筆記
通辨 木尾權少書記官
譯 荒川邦藏

外務卿曰ク

方今日本人民中大ニ不穩ノ形勢有リ一般ニ立憲政體ノ設立及ヒ外國人ノ治外法權ノ廢獻ヲ希望ス新聞雜誌モ亦悉ク之ニ左袒セリ政府ニ在テモ久シク之ヲ拒絶スル能ハス外國人ノ裁判權ハ大ニ不充分ナル所アリ殊ニ日本ノ法律

以手紙致啓上候然者本月六日附貴翰ヲ以テ條約改正ニ付閣下之御見込草案四通御送附相成正ニ落手致候右ハ閣下ノ御來意ニ應シ貴翰之反譯トモ相添ヘ我本國政府ヘ速カニ遞送致候右回答得貴意度如斯候敬具

千八百八十年七月十二日

エル ド バロワー

外務卿 井上 馨閣下

(右原文)

Légation DE FRANCE
AU
Japon.

Monsieur le Ministre,

Tokio, le 12 Juillet 1880.

J'ai reçu la lettre que vous m'avez fait l'honneur de m'écrire á la date du 6 de ce mois pour me communiquer quatre documents formant le complément de vos propositions relatives à la révision des Traités. Conformément à votre désir, je me suis empressé de les transmettre à mon Gouvernement ainsi qu'une traduction de la lettre d'envoi que les accompagnait.

規則ニ對シテハ最モ甚シキカ故ニ是迄種々改更ヲ經タル此條約草案モ其目的トスル所ハ實ニ此弊害ヲ一洗スルニ有之候今日ノ形勢タル人民及ヒ外國公使ニ對シテ主極困難ナリ偏ニ各國ノ扶助ヲ希望致候右此草案ハ專ラ日本ノ要求ヲ載セタルモノニ付キ他日談判ノ際大ニ改正ヲ加候テ不苦候

公使曰ク

外國政府ハ此草案ヲ看テ驚駭スルモ知ル可ラス此草案ハ其考案甚タ當ヲ得ス要求多クシテ讓與鮮ナシ之ヲ改正談判ノ基本ト爲ス事難カルヘシ殊ニ裁判權ノ一件ニ至テハ最モ然リ日本ノ裁判法ハ未タ確信難仕候

外務卿曰ク

英人ノ日本法律ヲ蔑視スルニ就キ日本人民ハ大ニ慨嘆致居候抑英人ハ屢々日本ノ內事ニ干涉シ法律ノ當否ヲ彼是レト非難シ而シテ之ヲ遵奉致サス日本政府ハ強チ此草案ノ採用セラレン事ヲ期望スルニアラス只之ヲ基本トシテ談判ヲ遂ケ速ニ結局ニ至ラン事ヲノミ冀ヒ候

公使曰ク

草案ノ旨意ハ採用セラレサルモ計ル可ラス日本政府ハ要

求スル事多クシテ讓與スル事鮮ナシ

外務卿曰ク

報酬ノ件ハ草案中ニ登錄致サス是レハ他日談判ノ際協議ニ及フヘシ日本政府ニ於テハ可成全權委員ノ要請ヲ容レント欲ス譬ハ東京西京及ヒ大坂ノ如キハ全ク外國人ノ爲ニ開クモ苦カラス○物品三十種ノ表ヲ製シテ通商條約ノ附錄ト爲セリ畢竟此三十種ハ全輸入ノ五分ノ四ニ當ルカ故ナリ其他ハ僅少ナルヲ以テ省ケリ尤御要請ニ候得者全輸入稅表ヲ副ヘ候テモ宜シク候必竟既ニ條約中ニ揭載候上ハ濫リニ表中ノ定限ヲ超ユヘキ義ニ無之樣存候

公使曰ク

第十三條ハ疑點アリ少々難解相考候

外務卿曰ク

日本政府ハ第十三條ヲ以テ內國物產ノ被害ヲ防カン事ヲ欲セリ譬ヘハ日本製ノ麥酒葡萄酒煙草等ニ內地稅ヲ課スルトキハ同種ノ輸入物品ニモ亦其輸入稅ノ外ニ內地稅ヲ課セントスルノ旨意ナリ外國人日本國內ニ於テ酒又ハ煙草ヲ製造スルトキハ日本人ノ製造者ト同樣ニ內地稅ヲ拂ハサルヲ得サル義ニ候

公使曰ク

御請求ノ各件中殊ニ裁判權ニ就テ一言申上度キ事ノ御座候抑外國人ヲ以テ舊條約中第一ニ制限ヲ立テタル亘魁ト爲シ外人ヲ法律外ニ置キタルモ亦外人自己ノ處置ニ在ルトノ評說國內一般ニ傳播シ居レトモ是レハ大ナル了見違ヒニテ候日本コソ其發端ヲ爲シ初メヨリ外人ヲ狹區內ニ住居往來セシメタルニアラスヤ日本人外國ニ在テハ全ク自由ニ往來スルヲ得且ツ往々寬待厚遇ヲ受ケシモ外人目本ニ在テハ恰モ警察監視ヲ受クルノ情態アリ何クニ到テモ猜疑ヲ受ケ且ツ種々ノ制限ヲ甘受セサルヲ得ス故ニ外人自己ノ裁判ヲ守ラント言ヒシモ至當ノ理ト謂ハサル可ラス況ヤ日本ニ在テハ習慣風俗ノ相違ヒ法理ノ相矛盾シ司法ノ道未タ開ケサルニ於テヲヤ若シ否ラスンハ丐ソ共同和合シテ生ヲ營ムヲ得可ケンヤ外國政府ニ在テモ海外裁判ハ多額ノ費用ヲ要シ且ツ往々不便利ヲ極ムルヲ以テ倘シ日本裁判ニ確信ヲ置クヘキ憑證アリト信心スルトキハ必ス好テ之ヲ日本ニ委托ス可シ現今尚未タ此憑證ナキハ憾ムヘキ事ニ候○日本內ニ在テ彼我裁判管轄ノ相異ナルカ爲メ種々ノ弊害ヲ生スヘキハ拙者モ寔トニ推察致候

公使曰ク

草案ノ案文ハ少シク錯雜シテ充分明瞭ナラス從前ノ如キ簡文明瞭ナル條約トハ雲泥ノ違ヒアリ其文章宜シカラサルノミナラス兎角辯護ノ文體ヲ具ヘ申候

外務卿曰ク

草案ハ最初日本語ニテ起草シ「ビードン」氏之ヲ英語ニ譯セリ文章ハ修正ヲ加ヘ候テモ宜シ事柄ハ拙者十分辨解可致候

公使曰ク

將來ニ存シ行ヘキ舊約定目錄ノナキハ殘念ナリ且又開港市ノ地名及ヒ經界ノ事ニ至テモ明文ナシ是等ノ義ハ直チニ伯林ニ於テ目立ツヘシ

外務卿曰ク

經界ノ義ハ談判ノ際御協議ニ可及候

公使曰ク

兩條約草案中「本條約ニ照シテ開キタル港」ノ語アリ左スレハ港名ヲ揭載可致義ニ存候

外務卿曰ク

至極御尤ニ候

本來此新條約中ニハ一切ノ犯罪洩レナク之ヲ處罰シ且ツ一般ノ秩序及ヒ身體所有物ノ完全ニ關スル日本法律ハ外人モ亦必ス之ヲ遵守スヘキ事ヲ締結セサルヲ得サリシナリ其他外人ノ裁判ハ眞ノ官吏ヲシテ之ヲ行ハシメ妄リニ商人ノ領事ニ委任セサル事ト爲サヾル可ラス

外務卿曰ク

御證例ノ旨意大體御尤ニ候若シ獨逸國ノミニ就テ論スルトキハ个樣ニ條約ヲ改正スルヲ要セサルモ知ル可ラス佛米及ヒ殊ニ英國ノ處置ハ之ニ反シテ親愛篤實ナラス且ツ往々剛慢不義ヲ極メリ故ニ日本ノ信用ヲ受ケス云々

公使曰ク

此草案ハロギーキ上ヨリ論スルトキハ條約ニアラスシテ却テ日本ノ要求ヲ纂輯シタルモノト謂ハサル可カラス

外務卿曰ク

尤左樣ニ候日本ハ先ツ第一ニ獨逸國ト協議ヲ遂ケン事ヲ希望ス青木公使ヘモ个樣ニ訓諭致置候閣下願クハ獨逸政府ニ於テ可成ハ速ニ條約改正上ノ意見ヲ陳述スヘキ事ニ御盡力被下度候若シ我レト獨逸ト協議相調ヒ候上ハ自他各國ニ對シテ困難可無之察候

公使曰ク
左樣上申可仕候
外務卿曰ク
青木公使ハ貴國政府ニ向テ行政法律上ノ裁判權ヲ我レニ委托アラン事ヲ歎願可致筈ニ候御返答有之次第電報可致存候
公使曰ク
日本政府其裁判權要求ト共ニ裁判法進達ノ證據ヲ各國ニ示サヽルハ至極遺憾ニ候今日尚裁判權利執行ノ要件ニ不充分ナル處アリ例令ハ新刑法草案ハ未タ公布致サレス外國人ヘモ適用スヘキ民法ノ御備ヘナシ其他商法、身代限處分法、爲替法ノ如キモ亦御制定之レナシ又盟誓、公聽裁判、陪審裁判、及ヒ殊ニ判事識力ノ保證ノ如キニ至テモ亦悉ク缺乏致居候之ニ反シテ獨逸國ニ於テハ數年間ノ研學、試驗、實際ノ見習等判事育成ノ方法充分備ハリ居候
外務卿曰ク
日本ハ判事ヲ育成シ泰西ノ法律規則ヲ採用スル事ニ盡力致居候今日已ニ大ニ進歩致候現今ノ外人裁判法ハ兎角不

十分ナル所アリ殊ニ安寧及ヒ交際上ノ行政法律ニ對スル犯罪ノ如キハ不問ニ置ク事屢ナリ是レ卽チ日本ノ法律ナルカ故ナリ假令ヒ適々外國公使其本國人ニ遵守スヘキヲ公告スル事アルトモ元來外人ニ及ホス可キ成規ニアラサルヲ以テ之ヲ如何トモ爲ス能ハス公然之ヲ公告スルノ全權アルハ英國公使ニ限レリ然レトモ英公使ノ日本法律ヲ公告スルノ方法ハ屢々我意ニ滿タサルモノアリ將又各國別ニ裁判權ヲ有スルトキハ同一犯罪ヲ甲裁判所ニ於テハ重罰ニ處シ乙ニ於テハ輕罰ニ處シ丙ニ於テハ無罪ニ附シ又或ハ判事我權内ニ在ラスト宣言シテ之ヲ受理セサルアリ其弊害一方ナラス商人ノ領事ハ全ク裁判權ヲ有セサル事ニ致度候
公使曰ク
拙者ニ於テモ國家、及ヒ身體所有物竝ニ公共ノ秩序ニ關スル日本法律ニ對スル犯罪ハ洩レナク之ヲ處罰スヘキ制規ヲ設クル論ニ至テハ至極御同意ニ候若シ日本裁判所ニ於テ此ノ如キ犯罪ヲ處分セントスルトキハ外國ノ判事日本官吏トナツテ裁判スルカ或ハ日本判事外國法律家ニ就テ試驗ヲ受クルニアラスンハ行ハレ難キ義ト愚考致候右

等保證ノナキ間ハ外國政府ハ日本ノ要求ヲ容レ得サルモ難計候既ニ本國人民ニ對シテモ其責ニ任シ得サル義ニ御座候
外務卿曰ク
我政府ニ於テモ曾テ外國判事ヲ置クノ論ヲ立テリ拙者ハ至極同意致候當時寺島君ノ說ニ據レハ「パークス」氏ノ勢力最モ強キカ故ニ斯ノ如キ裁判ハ變シテ立會裁判トナルハ必定ナリト然ルニ立會裁判ハ我レノ好マサル所ナリ拙者ノ考案ニ從ヘハ此擧行ハル可シト雖モ同條中之ヲ拒ム者アルヲ如何セン○將又第一ニ獨逸國ト協議ヲ遂ケ得ル事ニ候得ハ大慶不過之候岩倉公モ亦夕同樣之ヲ希望致候ニ付幾重ニモ閣下ノ御盡力ヲ仰キ候
公使曰ク
然ルヘク我政府ヘ上申可仕候尤獨逸國ハ各國ト共同シテ改正ノ御談判可仕覺悟ニ御座候
外務卿曰ク
共同談判ハ我レニ於テモ妨ケナシ左スレハ前以テ獨逸國ト調和致度候夫レモ畢竟獨逸國ノ決ハ我レニ取テ最モ緊要ナルカ故ニ一旦獨逸ノ承諾ヲ得タル上ハ自他各國ハ大體引當ニ致サレ可申候青木公使伯林府ニ於テ懇々我要求ヲ縷述可致樣訓諭致置候
公使曰ク
閣下ノ尊言一々伯林ニ報告可仕候尤此草案不都合ナルカモ難相計候
外務卿曰ク
乍併拙者が今日陳述シタル所ヲ以テ幾許カ其不都合ヲ補ヒ候樣竊カニ致希望候抑我輩ノ志ハ一ニ各國人民ノ文明敎化ヲ傳習スルニ在リ十年乃至十五年コノカタ現ニ其證據ヲ立テタルニアラスヤ且又我輩ノ願ヒハ泰西ノ各大國ト同等ノ權利ヲ有シ同等ノ地位ヲ占メントスルニ在リ今日實ニ之ニ熱心從事セリ雖然今日我レニ缺乏スル所ハ千百雷ナラス故ニ今日既ニ斯ノ如キ條約改正ノ要求ヲ爲スハ猶早キニ過クルカモ知ル可ラス然レトモ國中一般ノ希望ナルヲ以テ政府之ヲ如何トモスル能ハス故ニ政府ニ在テモ各國我要求ヲ全ク拒絶スル等ノ事ハ無之義ト信シ居候若シ獨逸國ニ於テ我要求ヲ御聽容有之候得ハ別シテ感佩ニ不堪候將又外國人日本ノ不義不信用ヲ嘆訴致候モ全ク不理ト謂フ可ラサレトモ彼レ自ラモ亦幾分カ其罪ナキ

ニアラス奈何トナレハ外國人タル者十ニ八九ハ往日開港
ニ於テ亂暴不體裁ヲ働キ以テ其權力ヲ逞フシタルカ爲メ
其害毒ヲ將來ニ遺スニ至レリ粗暴ノ風間ハ尙今日ト雖モ
一般外國人ノ免レサル所タリ之ニ加フルニ近頃條約改正
上世論種々ニ分レリ此ノ如キ事情ナルヲ以テ日本人タル
者多少外國人ヲ憚忌醜惡スルモ亦全ク道理ナシト難言候

（右原文）

Unterredung betreffend die Japanischen Vertrags-Entwürfe zwischen Minister Inouye und dem Kaiserlichen Vertreter.

Minister :

Es herrscht grosse Unzufriedenheit im Volke, man verlangt allgemein eine Konstitution und Aufhebung der Exterritorialität der Fremden, die gesammte Presse wirkt in diesem Sinne, Regierung kann sich dem nicht länger verschliessen ; Gerichtsbarkeit der Fremden vielfach unzureichend, namentlich bezüglich Jap. Gesetze und Bestimmungen ; Beseitigung bestehender Uebelstände Zweck der Vertrags-Entwürfe, die schon mehrere Veränderungen

erfahren haben. Lage dem Volke und den fremden Vertreteen gegenüber sher schwierig, Bitte um Unterstützung der Mächte. Entwürfe können bei den Verhandlungen erheblich modificirt werden, enthalten das, was Japan wünscht.

Vertreter :

Fremde Regierungen werden überrascht sein. Entwürfe nicht glücklich gefasst, viel verlangt, gar nichts geboten, schwer als Basis zu benützen, namentlich in der Jurisdiktions-Frage. Japanische Rechtspflege bietet noch keine Garantieen.

Minister :

Volk ist namentlich emport (empört ?) über die Art, wie Entland sich Jap. Gesetzen gegenüber verhält, häufige Einmischung in innere Angelgenheiten Japans, Zweckmässigkeit von Gesetzen in Frage gestellt, dieselben für Engländer oft nicht accepirt. Regierung erwartet keineswegs Annahme der Entwürfe, wünscht aber auf deren Basis zu verhandeln und zwar so bald als möglich.

Vertreter :

Eindruck der Entwürfe entschieden ungünstig,

Jap. Regierung verlangt viel und gewährt gar nichts.

Minister :

Die Gegenleistung (en ?) stehen nicht in den Vertrags-Entwürfen, sie werden bei den Verhandlungen besprochen werden ; Regierung wird den Wünschen der Bevollmächtigten möglichst entgegenge(?) kommen, so z. B. könnten Tokio, Kioto und Osaka den Fremden ganz geöffnet werden. Die Beifügung eines Tarifs von nur 30 Nummern zum Handelsvertrage ist erfolgt, weil die aufgeführten Artikel 4/5 der Einfuhr repräsentiren, alles übrige ist unwichtig und deshalb ausgelassen ; wenn es gewünscht wird, kann der Tarif, selbst wenn derselbe nur theilweise im Vertrag enthalten wäre, sollen nicht erfolgen.

Vertreter :

Artikel XIII scheint bedenklich und ist etwas unklar.

Minister :

Regierung wünscht mit Artikel XIII Benachtheiligung einheimischer Producenten zu vermeiden. Wenn z. B. auf Jap. Bier, Wein, Taback pp. eine innere Steuer liegt, so soll die gleiche Steuer von denselben importirten Produkten ausser dem Eingangszoll erhoben werden. Ebenso soll der Fremde, welcher in Japan Sake oder Taback producirt, die gleiche innere Abgabe zahlen, wie der Jap. Produzent.

Vertreter :

Text der Entwürfe komplizirt und nicht klar genug, auffallender Gegensatz zu den bestehenden einfachen und deutlichen Verträgen, Keine günstige Redaktion, etwas kategorische Form.

Minister :

Entwürfe zuerst Japanisch, dann Englisch durch Mr. Beardon, Redaktion kann verändert werden, zu allen Erklärungen bereit.

Vertreter :

Liste der fortbestehenden älteren Abmachungen selbst leider, über offene Häfen und Vertragsgrenzen ist nichts gesagt, das wird sofort in Berlin auffallen.

Minister :

Grenzen sollen bei den Verhandlungen zur Sprache kommen.

Vertreter:

In beiden Verträgen wird auf die „nach diesem Vertrage" geöffneten Häfen Bezuge genommen, also müssten sie auf darin stehen.

Minister:

Das ist richtig.

Vertreter:

Was die gewünschten Zugeständnisse im Allgemeinen, speciell die Jurisdiktionsverhältnisse betrifft, mache ich darauf aufmerksam, dass es ein allgemein hier im Lande verbreiteter Irrthum ist, die Fremde als die Urheber der ersten Beschränkungen uin den alten Verträgen und der Sonderstellung der Ausländer zu betrachten. Japan hat damit den Anfang gemacht und die Fremden von vornherein nur innerhalb bestimmter sehr eng gezogener Grenzen zugesallsen; während Japaner im Auslande ganz frei waren und sich einer besonders zuvorkommenden Behandlung, sogar oft einer gewissen Bewanderungen(?) erfreuten, steht

der Fremde in Japan gewissermassen unter kontinuirlicher Polizeiaufsicht, begegnet überall einem entschiedenen Misstrauen und hat sich in mannigfache Beschränkungen zu fügen. Dass die Fremden eigene Gerichtsbarkeit in Anspruch nehmen, war eine absolute Nothwendigkeit, bei den verschiedenen Sitten, Rechtsgewissen und dem Mangel einer moderenen Rechtspflege in Japan war nur auf diesen Weise cin Zusammenleben möglich. Die fremden Regierungen würden die kostspielige und oft unbequeme Jurisdiktion mit Freuden Japan überlassen, wenn sie die Ueberzeugung hätten, dass die einheimische Rechtspflege die nöthigen Garantieenbietet. Das ist m. V. noch nicht der Fall. ——Ich gebe zu, die diversen Gerichtsbarkeiten in Japan mancherlei Uebelstände mit sich bringen, es müsste in den neuen Verträgen namentlich dafür gesorgt werden, dass alle Vergehen und auch Jap. Bestimmungen, die sich auf die öffentliche ordnung, Sicherheit von Person und Eigenthum beziehen, von Fremden befolgt werden. Die fremden Jurisdiktion sollte ferner von wirklichen Beamten, nicht

von kaufmännischen Konsuln ausgeübt werden.

Minister:

Argumente im Ganzen zutreffend. Käme Deutschland allein in Frage, so würde das Bedürfniss einer Aenderung der Verträge nicht in dem Masse hervorgetreten sein, Haltung Frankreich's, Amerrika's und namentlich England's weniger wohlwollend und erhlich, oft sehr schroff und unfreundlich, daher Jap. Misstrauen pp.

Vertreter:

Die vorliegenden Entwürfe sind logischer Weise nicht Verträge, sondern eher Zusammenstellungen der Wünsche Japans zu nennen.

Minister:

Zugegeben. Japan wünscht zuerst und zwar so bald als möglich sich mit Deutschland zu verständigen, Herr Aoki ist in diesem Sinne instrucirt, ich bitte Sie dafür zu wirken, dass die Deutsche Regierung ihre Wünsche betreffend d e Reivision bald äussert; sind wir mit Deutschland einig, so werden mit den übrigen Mächten keine Schwierigkeiten entstehen.

Vertreter:

Werde dem entsprechend berichten.

Minister:

Herr Aoki soll Ihrer Regierung die Bitte um Ueberlassung der Jurisdiktion in Verwatlungssachen ausdrücken, er wird die erhaltene Antwort telegraphiren.

Vertreter:

Es ist bedauerlich, dass die Japanische Regierung nicht gleichzeitig mit ihren Jurisdiktionswünschen den auswärtigen Mächten einige Beweise für die Entwickelung der Rechtspflege vorlegt. Bis jetzt fehlen noch sehr viele Vorbedingungen für sachgemässe Handhabung der richterlichen Gewalt. Das Strafgesetzbuch ist nicht promulgirt, ein Civilgesetzbuch, das für Fremde anwendbar wäre, existirt nicht, ein modernes Recht in Handelssachen, Konkursen, Wechsel-Angelegenheiten fehlt, ebenso wie der Eid, die Oeffentlichk ist der Gerichtsverhandlungen, Geschworen-Gerichte und vor allen Dingen eine Garantie für die Fähigkeit der Richter. In Deutschland z. B. langjähriges Studium, Staatsexa-

men, praktisches Arbeiten.

Minister:

Japan ist bemüht, Richter zu erziehen und moderne Gesetze und Bestimmungen einzuführen, schon jetzt erheblicher Fortschritt. Die gegenwärtige fremde Jurisdiktion ist oft unzureichend, namentlich bleiben Vergehen gegen Jap. Verwaltungs-Vorschriften für Sicherheit und Verkehr häufig straflos, weil diese eben Jap. Verordnungen sind, die für Fremde nicht gelten, es sei denn, dass der betreffend Vertreter sie besonders als für seine Landsleute bindend publicirt hat. Formelle Vollmacht dazu hat eigentlich nur der Englische Gesandte, die Art und weise wie er unsere Gestze Publicirt, erregt nicht selten Anstoss. Bei den verschiedenen fremden Gerichten wird vielleicht eine und dieselbe Sache streng, leicht oder gar nicht bestraft. In anderen Fällen erklärt sich der fremde Richter inkompetent. Kaufleute, Welche Konsuln sind, sollten keine Jurisdiktion haben.

Vertreter:

Bin durchaus für Vereinbarung von Maasnahmen zur Ahndung aller Vergehen gegen Jap. Verordnungen, welche die Sicherneit des Staates, der Person und des Eigenthums wie die öffentliche Ordnung betreffen. Wenn aber Jap. Gerichte solche Vergehen aburtheilen sollen, so sehe ich die Möglichkeit dazu nur wenn, entweder fremde Richter im Namen Japans und als Jap. Beamte Recht sprechen, oder die Jap. Richter vor fremden kompetenten Fachmännern ein Staatsexamen ablegen. So lange derartige Garantien nicht bestehen, werden die fremden Regierungen schwerlich auf die Jap. Wünsche eingehen, sie können die Verantwortung ihren Staatsangehörigen gegenüber nicht übenehmen.

Minister:

Regierung hat die Anstellung fremder Reichter erwogen, ich bin dafür; der Vorschlag ist schon früher gemacht worden, Herr Terashima meinte damals, dass Einfluss Sir Harry Parkes würde derartige Gerichte zu mixed courts stemepln, m. V. ist der Vorschlag durchführbar, ich stosse aber bei Kollegen auf Widerstand. Es würde uns sehr angenehm sein, wenn wir uns zunächst mit Deutschland verständigen könnten, Herr Iwakura wünschen das ebenfalls, ich bitte Sie nochmals, mit dahin zu wirken.

Vertretet:

Werde meiner Regierung melden, Deutschland beabsichtigt übrigens nicht allein, sondern gemeinschaftlich mit anderen Mächten über die Revision zu verhandeln.

Minister:

Gemeinschaftliche Verhandlungen sind uns ebenso recht, wir möchten aber dann vorher mit Deutschland ein Einverständniss erzeilen, weil seine Stimmen uns am wichtigsten sind und wir wollen alsdann der Zustimmung anderer Mächte ziemlich sicher sind. (sein ?) Herr Aoki ist instrucirt, in Berlin zunächst vertraulich unsere Wünsche vorzutragen.

Vertreter:

Werde die Mittheilungen des Ministers nach Berlin rapportiren, verfehle mir aber nicht, dass der Eindruck der Entwürfe ein wenig günstifer sein wird.

Minister:

Hoffe, dass meine heutigen Erklärungen diesen ungünstigen Eindruck einigermassen verwischen werden. Wir sind naturgemäss bestrebt, anderen Nationen auf dem Wege der Civilisation und Kultur nachzueifern und haben in den letzten 10 bis 15 Jahren Zeugniss davon abgelegt, dass wir es erst (ernst ?) meinen. Unser Wunsch ist Gleichberechtigung und Gleichstellung mit den grossen Kulturvölkern des Westens, darauf arbeiten wir hin. Ich fühle wohl, dass uns noch ausserordentlich viel fehlt und dass deshalb die gegenwärtigen Anträge bezüglich der Vertrags-Revision vielleicht verfrüht erscheinen; die Regierung kann aber nicht anders als der allgemeinen Stimmungen im Lande nachgeben, sie hegt die Hoffnung, dass die fremden Mächte sich nicht ganz ablehnend verhalten werden und würde ein Einentgegenkommen (Entgegenkommen?) Deutschlands mit ganz besonderem Danke anerkennen. Wenn die Fremden über Jap. Misstrauen und wenig freundliche Stimmung plagen, so haben sie nicht

unrecht, theilweise sind sie indessen selbst daran Schuld. Der Durchschnittfremde in den offenen Häfen suchte, namentlich in früheren Jahren seine Ueberlegenheit durch mannichfache Rücksichtslosigkeiten und Rohheiten zu dokumentiren, die einen nachhaltigen und sehr üblen Eindruck hiterlassen haben. Der Ruf der Rohheit haftet dem Fremden im allgemeinen noch an, dazu ist neuerdings auch eine politische Spannung anlässlich der Revisionsfrage getreten. Dass der Japaner unter solchen Umständen der Ausländer mehr oder weniger meidet und scheut, scheint mir nicht so ganz ungerechtfertigt.

一一一　明治十三年七月九日　井上外務卿ヨリ吉田駐米公使宛

日米新條約ノ形式ニ關スル件

吉田公使別信案　第十號

條約改正草案ノ儀ニ付テハ貴君御出發前略及御談示候通先任外務卿ニハ專ラ稅權ノミニ關シ改正ヲ施シ裁判權ノ方ハ

談判ノ都合ヲ見計ヒ漸次ニ論及セントノ旨趣ニ之有候處拙者奉職以來少シク之ヲ變更セサルヲ得サル處アルヲ以テ特ニ稅權ノ一邊ニ止ラス裁判權ノ事項ニ論及セントノ目的ニ之有候事ハ貴君モ御承知ノ通ニ有之其趣旨ハ曾テ各國公使ニ及談話候事有之處ヨリ或ハ拙者ニ至リ前說ヲ一變セシ樣ニ思惟候外國公使モ有之既ニ英政府ノ如キハ一時疑惑ヲ生シ電報ヲ以當地在留「ケネデー」氏迄問合越候次第ニ至リ候依テ拙者之ニ答ヘテ我政府ハ當初ヨリ其目的ヲ變更セシ事ナキ旨ヲ明ニシ其裁判權ノ事項ヲ他ノ諸件ト同時ニ提出スルハ聊カ最前我公使ニ付與シタル訓狀ニ異ナルガ如ク相見候得共大體ニオイテハ決シテ大差異ナキ理由ヲ陳述ニ及置候卽別紙甲[1]乙號往復書簡寫貴君御心得ノ爲此ニ封入差遣候扨又改正草案ハ別冊印刷ノ分幷ニ改正趣意書、附錄、共都合四冊一時ニ六日當地在留各公使館ヘ回達及候ニ付不日各其政府ヘ轉送可致候且鍋島長岡兩公使ヘモ一體ノ手續申含メ書類悉皆相渡出發致候然ルニ米國トハ兼テ貴君御取結相成候約書有之ニ付テハ自ラ他邦ノ振合トモ違ヒ如何樣ノ事ニ取計可申哉其邊ビンハム氏ト打合セ度其上ニテ草案書類可相渡積ニ有之候處前文約書ハ最初ヨリ貴君御擔任ニテ專ラ我政府ノ冀望ニヨリ米政府於テモ好意ヲ以テ卒ニ締約ノ結果ニ立至候儀故今日ニ至リ當方ヨリ右約書ヲ廢シ新ニ各國同樣ノ條約ヲ取結度等ノ如キ事ハ申出候テハ不都合ト相考旁以右ヲ其儘存シ置之ニ附加スルニ今般ノ新案ヲ以テスル樣ニ致候ハヾ雙方ノ好都合モ可有之ト拙者見込居候其故ハ右約書中第十箇條ノ趣旨ニ據ル時ハ前上ノ通リ處分スルモ米政府於テハ決テ異議無之筈ト存候且又米國丈從前ノ手順ヲ以今回ノ約書モ於華盛頓府貴君御結約ニ相成候方可然相考申候其爲ニ別段訓條御請求有之候ハヾ御勘考ノ上至急其草案ヲ以御申越有之度候尤歐洲ト其趣意ヲ異ニスル時ハ實際ノアブリケーションニ差支候間可成ハ米政府ノ方ハ歐洲ノ各國結約後ニ至リテ決局候ハヾ最モ好都合ト相考候得共尙貴君御見込御申越有之度候若シ兩條約書二ツナカラ存置候テハ體裁不宜ニ付貴君既ニ御締結ノ分ハ廢棄シテ差支無之トノ事彼ヨリ申出候ハヾ當方於テハ勿論異議無之候間其邊ノ都合詳細國務卿エワーツ氏ヘ御面話有之勉テ雙方ノ胸懷ヲ洞開シ且前述ノ手續等モ御談示有之候テハ如何ト存候米日兩國間ハ勿論他歐洲各締盟國ニ對シテモ好面目ヲ表スル樣ノ好結果ヲ奏候樣御熟議有之度猶同氏ノ意見御聞

取ノ上早便御報知有之度候

一、當早春輸入稅目案ヲビンハム氏ヘ及通達候處其後右ニ對シ米政府ヨリ申越ノ次第有之旨ニテ其書翰ノ寫ハ本年第五號別[2]信ヲ以差遣候且其節我答書草案モ差遣置候處其中少シク變更致シ更ニ別紙[3]丙號ノ通回答可致ト存候右米政府異議ノ點ハ頗ル正確ナル樣ニモ覺ヘ候得共同政府ニ於テハ既ニ海關稅額ヲ自由ニ制定スルノ權ヲ公認スル云々約書中明載シ置ナカラ他ノ國ニ先ンジ右樣ノ儀發論候ハ前後不都合ノ樣存候得共今般ノ論旨ハ自ラ英國ニ對スルヲ目的トスルノ意モ幾分カ含包候樣存候依テ夫レニ拘ラス貴君國務卿ヘ面話ノ序ヲ以米國其他ノ國ヨリ干涉候テハ當方增稅ノ目途難達極テ迷惑ナル旨間接ニ御諭明有之度尤米政府於テ我國製產品卽チ絹布漆器類ノ中區分ヲ立減稅ノ事ヲ承諾候樣ノ模樣モ候ハヽ當方於テ夫ニ應スルノ考案ヲ起スモ亦差支ナカルヘシト存候是又兼テ御差含有之度候

一、結約ノ儀ハ前述ノ如ク米國ノ方ハ既ニ其地ニ於テ調印モ相濟候次第ニ付此度ノ分モ歐洲各國ト是非共之ヲ異ニシ於其地貴君委員トナリ御取結相成候樣國務卿ヘ御談合

有之度候且又米政府ヘハ貴君ヨリ兼テ裁判權ノ儀ハ改正ヲ不求旨御申入有之候ヲ此度突然裁判權ノ事項ヲ提出候テハ如何ニモ不都合ニ候得共此儘ニ差置候テハ實際數多ノ混雜差起リ終ニ我政府ト他國ノ間ニ平常苦情百出交際上ノ困難ヲ惹起シ候事不候故不少得已雙方相互ノ間ニ權限ノ制限ヲ相立候事ニ候間此段都合好御辯明ヲ冀望致候右件々申進候也

註　1別紙甲乙號往復書簡寫一五、一六文書參照
　　2對米交渉四四三文書
　　3別紙丙號次號七月十三日附米國公使宛往翰

二三　明治十三年七月十三日　井上外務卿ヨリ米國公使宛

日米新條約ノ形式ニ關スル件

井上外務卿

米國公使宛

以書簡致啓上候陳ハ當方ニ而今回調製候修好條約幷ニ附屬覺書草案通商條約草案同附錄幷改正趣意書共過日及御廻送置候仰條約改正ノ義ニ付テハ貴政府ニ於テハ既ニ我政府ノ希望ニ應シ新條約締結ノ運ニ至リ一千八百七十八年七月廿

五日華盛頓ニテ貴我兩國間ニ條約調印相濟ミ貴政府ニ於テ我政府ニ對シ懇親ヲ表セラレ候義ハ我政府ニ於テ厚ク感銘スル所ニ候然ルニ過日差進置候草案中ニハ既ニ結約シタル條款中ニ漏候點有之夫ニ付テハ不候止事情ニ因リ更ニ企(脫)致シ(脫)主趣ハ過日御面晤ノ際親シク陳述致置候通ノ次第ニ付其ノ邊御洞察ノ上該件ノ再談判相開キ候手順等ノ儀ハ如何樣ノ都合ニテ可然哉閣下ノ御高案ヲ煩度候尙御勘考ノ上詳細御示諭有之度此段得貴意候敬具

十三年七月

七月十五日(廿カ)　達濟

二四　明治十三年七月二十三日　米國公使ヨリ井上外務卿宛

新條約交渉ノ形式ニ關シ回答ノ件

第千二百八十號

本月十三日附貴簡致拜展候然者先般拙者ヘ御送附相成候條約改正案及ヒ附錄覺書ノ事ニ關シ一千八百七十八年七月二十五日ノ貴我條約談判ノ際貴政府ニ對シ我合衆國政府ノ表示シタル友誼ノ衷情ヲ御感賞有之且又閣下今般再談判ヲ被開候ニ付テハ如何樣ノ手續最モ良策ニ可有之哉拙者ノ意見可申述旨御照會ノ趣致承知候然ル處拙者儀當テ及御通示置候通リ我政府ノ訓令ニ因リ目下條約改正ノ事ニ關スル談判ニハ一切難致參與又貴國皇帝陛下ノ闕下ニ在留スル諸外國公使ノ本件ニ關スル協議ニ致班列候儀モ一切難相成候間聊カ拙者意見左ニ申述候ノ外無他事候抑々今般貴政府ニ於テ各締盟國ヘ御請求相成候條約改正若クハ條約談判ハ各國各別ニ御商議可有之儀貴政府ノ爲メニ至緊至要ノ事ト存候且夫レ貴政府ハ各國ト各別ニ御商議可相成ハ間然ス可カラサルノ權理ニ有之候儀ハ明白ニ有之且閣下ノ今要望セラレ候本件ヲ諸外國公使ノ合同協議ニ附スルハ乃チ是レ諸公使ノ多數ニ托シテ失敗ヲ招キ各國合同ノ代理者ヲシテ閣下御所望ノ條約承認ヲ阻碍セシムルニ外ナラサルモ亦明白ニ有之候況ヤ該協議ニ於テ一國ノ公使ニテモ異議ヲ立ル者有之以上ハ決シテ一致ノ結局ニ至ル可ラズト主張スル事ヲ得セシムルニ於テヲヤ抑モ公法ニ於テ萬國人民同等ナルノ主義ハ西洋諸國ノ是認シテ共ニ遵奉スル所ニ有之外國政府ト雖トモ日本政府ト雖トモ同シク此主義ヲ遵奉セサル可カラサル儀ニ有之候間向後外國トノ條約談判ハ曩ニ我合衆國トノ談判ニ於テ巧ニ施行セラレタル規範ニ準ヒ各國各別ニ之ヲ執行セラレ候儀ハ貴政府ノ爲メニ十全無二ノ上策ニ可有之ト存候條此段得貴意度如斯敬具

千八百八十年七月廿三日

在東京合衆國公使館

ジョン、ヱ、ビンハム

外務卿　井上　馨閣下

(右原文)

No. 1280　United States Lagation,
Tokio, July 23th. 1980.

His Excellency
Inouye Kaoru,
H. I. J. M's Minister for Foreign Affairs,

Sir:

I have the honor to acknowledge Your Excellency's note of date the 13th instant, wherein, referring to the drafts of proposed treaties and an accompanying memorandum which you did me the kindness to send me, Your Excellency is pleased to say that "His Majesty's Government was deeply

moved by the spirit of good friendship manifested toward Japan by the Government of the United States" in the negotiation with His Majesty's Government of the Treaty of July 25, 1878; and you do me the honor to request that I should indicate to Your Excellency my "opinion as to what course it would be best to pursue in conducting again the negotiations on the subject."

In reply I beg leave to remind Your Excellency that I have heretofore made known to you that under the instructions of my Government I cannot at present enter into any negotiations concerning treaty revision, nor participate in any joint conference on the subject with the other Foreign Representatives accredited to His Imperial Japanese Majesty's Government, and therefore I cannot do more than give it as my opinion that it is of the utmost importance to Your Excellency's Government that you should conduct your negotiations separately with the other Foreign Powers in relation to any treaty revision or treaty negotiations which you desire to make with either of them.

It is obvious that Your Excellency's Government has the indisputable right to negotiate separately with each and every Foreign Power, and it is also obvious that to submit your proposed measures to the Representatives of the Foreign Powers jointly, is to put it in the power of a majority of the Foreign Representatives to defeat and prevent the acceptance by the Foreign Powers jointly represented in such conference of any treaty Your Excellency may propose, and I may add that it might be insisted in such conference that so long as any one of the Powers represented therein objected no final agreement could be reached. The equality of nations before the law is a principle asserted and acted upon by all Western States, and to no Government is the observance of this principle more essential than to that of Japan,—therefore it is my opinion that the only safe or politic course for Your Excellency's Government in the premises is to conduct all your treaty negotiations hereafter separately with the Foreign States, following the rule so wisely acted upon by your Government in its recent

negotiation with the United States.

Accept, Sir, the renewed assurance of my highest consideration.

John A. Bingham.

一一五　明治十三年七月十二日　佛外務卿代理上野大使輔對話筆記

條約改正草案ニ關スル件　一

明治十三年七月十二日午前十字外務省ニ於テ外務卿代理上野外務大輔佛國代理公使「ド、バロアー」氏ト對談筆記

大輔

外務卿ハ同夫人病氣ニテ過日來熱海ニ滯留ニ付キ代理ノ任タリ今日拙者貴下ニ對談スルハ卽チ外務卿ノ名義ヲ以テスルナリ

今日貴下ノ來臨ヲ願シハ過日送付シタル條約改正草按ニ付貴下ノ御意見拜承致度且ツ右草按ニ付貴國政府ヘ貴下ノ良好ナル御報告アラン事ヲ冀望スルニ在リ

條約改正ハ目下我全國ノ一大問題ト相成居ニ外務卿ノ熱海ニ在ル每日兩三通ノ意見書ヲ接受スルアルニ至レリ

條約改正ハ殆ント全國民人ノ熱望スル所ト成リ政府ハ外國ニ向ヒ幾分カ我國權ヲ收回セサレハ施政上多少ノ艱難生スヘシ抑モ年前我外國ト條約ヲ締結セシ時ニ於テ我政府ハ未タ近世ノ外國交際ノ情態ヲ熟知セス條約章按ノ如キモ外人ノ手ニ成リ我政府ハ唯之ニ調印シタルニ迄テ素ヨリ此條約ハ其儘ニ存シ置ク可キ者ニ無之然ルニ

天皇陛下ハ維新以來依然舊條約ヲ踐行被遊今日ニ至リ候然レトモ今日ノ日本ハ昔日ノ日本ニ非ス年來我國ノ面目ヲ改メタルハ貴下ノ親シク見ル所ナリ故ニ舊條約ハ現今ノ形況ニ應シ多少ノ改正ヲ加ヘサル可ラサルハ貴下モ亦承認スルナル可シ彼「サンドウイッチ」一小島ノ如キサヘモ屹然一箇ノ自主國ノ體裁ヲ失却セス外國ト結約イタシ候ハ貴下ノ所知ニ有之然テ彼ノ開化ノ如キ拙者ノ親シク見ル所ニシテ我開化ノ度ヲ以テ彼ニ降ルモノト覺ヘス貴國政府ハ彼ヲ待ツ所ヲ以テ我ヲ待ツモ決シテ過等ト爲スニハ非サラン

代理公使

過號御送付ノ條約改正草按ハ過ル七日接手翌八日ノ郵船ニテ我政府ヘ送致セリ急遽ノ際何等ノ意見モ付セスシテ

送致シタリ拙者ハ此改正草按ニ付テハ其任ニ非サル故公務上ノ談判ハ出來ス唯拙者ノ私見ヲ陳述スルニ過キス今此草按全體ニ付テ論スルニ貴國政府ハ餘リ望ミ過キルカト思惟ス

刑法治罪法布告ハ一大進歩ト云フ可シ然レトモ之ヲ擬施スル裁判官果シテ其人アリヤ我佛蘭西ニ於テモ人凡三十歳位ニテ始メテ裁判官ト爲ル位ニテ學識德望經驗等其人ハ一朝ニテ得可キニ非ラス貴國ニ於テ善良ナル法官ヲ得ル容易ナラサル可シ然ルニ今貴國裁判權ニ付キ違輕罪ヲ擧ケテ自己ニ收回セントス是レ第一ニ望ミ過ルト思惟スル所以ナリ

大輔

善良ニシテ經驗アル法官ヲ得ル容易ニアラス然レトモ現時横濱ノ彼領事裁判ノ如キ素ヨリ善美ナリトモ存セス我法官不能ナリト雖モ彼領事裁判ニ降ルトモ覺ヘス然レトモ人命所有權ノ如キ至重ナル事件ニ關シテハ尚依然貴國ニ其法權ヲ貯有セシメ唯違輕罪ノミ望ムハ望ミ少ナル者ニシテ現今ノ形況ニ適應スル者ニ非ラスヤ

代理公使

此違輕罪ニ關シテコソ却テ困難多カルヘシ重罪ハ至少ニテ貴國ト交際以來我國人ニシテ重罪ヲ犯セシ者ハ僅ニ壹人アリシノミ然テ違輕罪ノ如キ日々其擬施ヲ見ル此ニ付キテハ實ニ多少ノ困難ヲ見ル可シ

既ニ銃獵規則ノ擬施ノ如キ貴國巡吏ノ人ヲ待ツ極メテ人ヲシテ徒ラニ煩惱セシムルヲ喜ブニ似タリ彼旅行免狀ノ如キモ亦然リ拙者客年富士山ニ登ルヤ山下ノ驛ニ着シ投宿未タ三分時間ヲ經サルニ巡吏來ツテ免狀ヲ出示スルヲ求ム彼等ノ我輩ヲ待ツ我輩ヲ敵視スルニ似タリ此等ハ總テ鎖末ノ事ナレト外人ニ向ツテ不快ナル感觸ヲ起スナリ

大輔

如此ハ巡吏ノ其職務ヲ盡スニ嚴ナルニテ彼等ハ彼等ノ責ナレハ外人ト雖モ假スニ寬典ヲ以テス可ラス殊ニ外人ノ犯法者ハ到底罰ヲ被ムラサル者多シ若シ外人カ實ニ我法權ノ下ニ立ツニ至リナハ巡吏ノ外人ヲ待ツ我國人ト同一般ナル可シ

公使

貴國法官ハ其罪ノ有無ヲ問ハス其外人タルヲ以テ罪セント欲スル如キ意思アラン此意思ヲ脫却セヌマテハ我政府

ハ決シテ法權ヲ委棄セサル可シ我政府カ之ヲ海外ニ保持スルハ不得止ニ出ツルナリ我政府ニ取リテ決シテ得策ニ非ラス貴國政府ニ於テ法律其當ヲ得法官其人ヲ得ハ我政府ノ法權ヲ棄ツルハ猶棄敝履ナルヘシ

大輔

我法官ニ向ツテ云々ノ疑アルハ遺憾ナリ然レトモ我法官ニ如此意思ナキハ拙者之ヲ保證ス我民人モ亦在横濱貴國法官ニ向テ此疑ヲ抱ク者ナキヲ保タス是レ蓋裁判上曲敗者ノ常情ナラン歟

公使

我法官ハ務メテ貴國民人ニ都合ヨキ如ク注意スルト云ヘリ

大輔

我政府ニ於テモ外人ニ關スル訴訟ハ務メテ注意シ司法卿ノ指令ヲ要スル程ナリ

公使

司法卿ノ裁判ニ關涉スルハ不可ナリ

大輔

是蓋シ現時我國體ノ然シムル所ナリ現今ノ形況ニテハ我

國人ノ外人ニ對スル訴訟ノ控訴ハ之ヲ上海若クハ「サイゴン」ニ於テス訟主費用ノ大ナルニ堪ヘス勝ヲ取ル可キニ似タル訴訟モ之レカ處メニ默止ニ付スル弊アリ若シ法權ヲ我政府ニ委付セハ控訴上告等ニ關シテ多少ノ便益ヲ見ル可シ

公使

然レトモ現今貴國ノ裁判執行法ノ如キ實ニ驚ク可キ者アリ拙者知ル所一訴訟ノ如キ五年間遷延シ遂ニ大審院ノ宣告ヲ得タル後六ケ月ニ至ルモ更ニ執行ヲ得ス債主ハ未タ一錢ヲモ得スト云ヘリ

大輔

夫ハ非常ノ例ナル可シ常ニ然ルニ非ス

公使

改正草按中貴國ハ唯タ其自己ノ望ム所ノミヲ表示シ更ニ外國ニ對シ與ル者ナシ

彼開國ノ事ノ如キ如何

大輔

貴國ノ望ム條件ハ貴國ノ發議ヲ待ツ可シ

開國ハ何時ニテモ致ス可シ但タ貴國人民ノ我法權下ニ適

從スルヲ要スルヲ要スルノミ然ラサレハ開國ハ出來ス

公使

貴下先キニ貴國ノ進歩ヲ說ク却テ開國ヲ非トス言矛盾ス、ルニ非スヤ且ツ開國ノ益アルヤ支那ヲ以テ證ス可シ毎歳外人ノ支那國ニ殘ス金額ハ既ニ數百萬圓ニ昇ル

大輔

支那ヲ以テ標準ト爲スヲ得ス支那ニ入ル所ノ數百萬圓ハ果シテ支那人ノ有ナル可キ歟噫?

拙者ハ卽今開國ヲ可ト爲サヽルモ我礦山ヲ外人ニ貸讓スルハ一良策ナラントス拙者ノ龍動都府ニ駐在スルヤ一日都府ノ紳士學者等ハ會集シ此說ヲ陳述シ大ニ諸家ノ同意ヲ得タリ他日拙者之ヲ廟議ニ付スルナルヘシ但タ此外人ノ礦業ニ關シテハ特別ノ法律ヲ設ケ之ヲ擬施スル法官ハ外人ヲ雇使スルニ在リ是レ蓋拙者一己ノ意見外務卿代理ヲ以テ言フニ非ス

公使

寄合裁判（可）ナラスヤ

大輔

其否ラサルヲ論明ス

ルヤ其一冊ヲ以テ正本ト看做ス可キヤ

大輔此辯明ヲ爲サントスル時公使曰ク餘リ長談ニナレハ明日談ヲ續ク可シ明日十二字御來餐ヲ乞フト大輔曰ク領諾ス、午後二字半畢

二六　明治十三年七月廿三日　外務卿代理上野大輔　佛國代理公使對話筆記

條約改正草案ニ關スル件　二

明治十三年七月廿三日午後二字三四佛國公使館ニ於テ外務卿代理上野外務大輔佛國代理公使「バロアー」氏對談摘要筆記

大輔

昨日辯明セント欲セシ稅則ノ事ヨリ發言ス可シ

第一　輸入稅率ハ其根據ヲ示ス卽チ稅則ノ說明書ト看做モ亦可ナリ

第二　輸入稅目ハ從價稅從品稅ノ區別ヲナサスシテ現ニ稅關ニ於テ收稅ス可キ普通稅目及ヒ稅額ヲ示ス

第三　通商條約附錄ハ前稅目中ニ就キテ輸入額ノ最多

公使

兩三年前寄合裁判ノ談アリシ貴國ハ斷然不同意ヲ表セリ遺憾トス

大輔

寄合裁判ハ今日ニモ不同意ナリ

拙者ハ切嘱ス此草按ニ貴下ノ良好ナル報告ヲ貴國政府ニ御送致アラン事ヲ

公使

拙者ハ貴下ノ意ニ副フ能ハサル事ヲ遺憾トス貴國政府ノ外人ニ向ツテ法則ヲ擬施スルハ銃獵規則ト游歩規則ナリ然ルニ此二規則ノ擬施實ニ前ニ言ヘル如ク困難多シ今此草按ノ如ク他ノ違註（マヽ）罪ヲ擧ケテ之ヲ貴國政府ニ委付セハ其困難實ニ底止スル所ヲ知ラサラントス拙者故ニ依舊條約說ヲ爲スナリ

大輔

不得止事ナリ

通商條約ニ付キテハ如何

公使

彼稅則ニ付キテハ三冊ノ稿本ヲ得タリ三冊併行スル者ナナル三十品ヲ拔取シ定稅品ト爲シタル者ヲ示ス此他ノ物品ニ付キテハ卽通商條約第九條ニ示ス如ク我政府ニ於テ時宜ニ應シ稅額ヲ低昂スルノ權理ヲ有ス但シ百分ノ三十ヲ超過セサル可シ

公使

御辯明ノ次第篤ト了解セリ我政府ヘ委細報告スヘシ然ルニ拙者ハ一切ノ物品ニ向ツテ定稅ヲ要ス可シト思惟ス何トナレハ歐洲貿遠來殊ニ細少ノ收利ヲ目的ト爲ス者アランニ貴國港ニ着シ稅額時々ノ高下アラハ大ニ失望スルナラン各國公使モ此儀ニ就テ同意見ナル歟ト存ス

大輔

貴國ニテモ同樣ノ稅則ナレハ我商賈ノ貴國ニ到ル者モ亦同樣ノ不便ヲ被ムル可シ

公使

輸出稅ノ存廢如何

過日外務卿ニ面晤ノ節同氏ハ存稅說ナレト內閣ニテ未決ナリトノ談ナリシ

大輔

輸出稅ハ必ス漸次ニ廢ス可シ但條約上ニテ廢ス可シトハ

云難シ既ニ漆器ニ輸出稅ヲ廢シ政府ハ現ニ利益ヲ見タリ昨日修好條約ニ付キ貴下ハ依舊條約ヲ可トシ更ニ改正ヲ爲サヽル可シトノ御見込ト見ヘタリ此旨意ヲ以テ駐佛公使鮫島氏ヘ報知セント（ス）其旨意ナルヤ

公使

其旨意ナリ但拙者ノ意見ハ卽「バロアー」一己ノ意見ナレハ我政府ニ於テ他ノ意見アリヤハ知ラス

大輔

通商條約ニ付キテハ如何

公使

此儘ニテ談判ニ取掛候ハ難ル可シ拙者ハ貴國ヲ愛ス甘言ヲ以テ歡ヲ貴下ニ求ムルヲ欲セス直言ヲ以テ貴國ニ利益センコトヲ望ム昨日モ餘リ直言ニ過キタル歟ト思惟ス併シ貴國人ハ近來直言ヲ受ヌ故好結果ヲ見サルニ似タリ既ニ「グラント」氏ノ如キ頗ル貴國ヲ稱揚スルニ過キ却テ貴國人ヲシテ慢心ヲ生セシメタルヲ見ル

大輔

直言ハ拙者ノ好ム所ナリ多謝ス唯タ貴下カ此草按ニ付キ依然舊條約ヲ存スルヲ可ト爲スヲ遺憾トス現今ノ儘ニテハ迚モ人心ヲ滿盡セシムルニ足ラサル可シ廿年前ノ形況ト現時ノ形況ヲ比較セハ誰モ舊條約ヲ依然守ル可シト爲ス者ハナカラン

夫一國內ニ二樣ノ立法權否七八種ノ立法權アルニ堪ユ可キ歟行政法律ニ關シテ其各布告前ニ各國公使ノ意見ヲ取ラサル可ラサルカ如キハ實ニ自主國ノ體裁ニ關シテ忍フ可ラサル者ニ非スヤ

公使

至當ノ御事ナリ然レトモ今日ノ形況ニ至リシハ自然ノ勢ニシテ誰人ノ罪ニモ非ラス故ニ當分ノ中ハ唯至當ノ法律ヲ設ケ之ヲ外國公使ニ通知シ其各自國人ニ擬施ス可キ事ヲ請求スルヨリ外他ナシ至當ナル法律ニ向ツテ各國公使ハ云々セサル可シ

大輔

各國其情ヲ同一ニセス其法ヲ異ニス甲ノ見テ至當ト爲ス所ノ者豈乙ノ至當ト爲スヲ保ツ可ケンヤ加之各國ノ嫉妬心アルヲ覺フ是レ事ニ處スルノ難キ所以ナリ

公使

各國ノ嫉妬心ハナキ事ト存ス

拙者ハ玆ニ貴國ノ我輩外人ヲ待ツ失宜ヲ論セントス貴下ノ虛心聽取スルヲ乞フ

○吹上禁園規則ノ如キ末頃ニ樹木ヲ伐採シ犬ヲ牽入ル等ヲ禁セリ此規則ハ大臣參議及ヒ外國公使等ニ向ツテ特ニ設ケタル者ナレハ彼公園ノ芻蕘雉兎共往者ト同一ニ非ラス既ニ公使ヲ大使參議ト同等ニ優待シ却テ之ヲ芻蕘ニ比スルニ非スヤ

○檢疫規則ノ如キ我公使「ジヨフロアー」氏殆ント同意ヲ表シテ前外務卿ニ書ヲ送レリ然ルニ一言ノ答モ無ク突然タル布告アリタリ

○條約改正ニ付キテモ我前外務卿「ワダントン」寺島外務卿ヘ書ヲ送リシ事アリ然ルニ今般ノ草按中更ニ其旨意商量セサル者ニ似タリ

大輔

吹上禁苑規則ノ如キ要スルニ鎖末ノ事ニ非ラスヤ改正草按ハ各國ニ向ツテ同一ノ草按ヲ設ケシ故獨リ貴國主張ノ旨意ヲ採用スル能ハス然レトモ此草按ニ付キ將來貴國ト談判中自ラ至當ノ論點ニ歸著スル事ト存ス

拙者ハ貴下ノ心情ヲ吐露シテ談セラレシヲ深謝ス尙時々來往親睦ナル交際ヲ乞フ

公使

拙者モ亦深ク望ム所ナリ

午後三時半頃談畢

二七

明治十三年 月十二日 上野外務大輔ヨリ米國公使宛

ジヤパン・デーリー・ヘラルド紙事件ニ關スル件

Mr. Bingham:

In the Japan Daily Herald of the 16th & 17th insts, were published what purported to be the drafts of the treaties of Friendship and of Commerce and Navigation and the accompanying documents submitted by this Government a short time since to the Representatives of Treaty Powers.

The publications referred to resemble so closely the original proposals, the conclusion is forced upon me that the Herald was at the time in possession of the documents or copies thereof.

As the proposals were put forth in that strict Confidence so essential in matters touching affairs

of state, I deem it my duty to acquaint Your Excellency, and through you the Foreign Representatives that the documents were published without the knowledge or Consent of this Government.

I am Sir
very Respectfully Yours.
Wooyeno Kagenori.

和文ヲ附セスシテ遣ス

二八　明治十三年七月二十三日　上野外務大輔ヨリ米國公使ヘ

ジャン・テーリー・クラルド事件ニ關スル件

I　米國公使來翰

July 23, 1880.

Sir:

I am in receipt of your note of yesterday in relation to the recent publication in the Japan Daily Herald of papers which that journal alleged "to be the draft of the treaties of friendship and of commerce and navigation and accompanying documents", which had been submitted by His Imperial Japanese Majesty's Government a short time since to the Foreign Representatives.

I received those papers and treated them as strictly confidential and for the information of myself and my Government, and have accordingly made no other use of them than to transmit a copy to the Honorable the Secretary of State of the United States.

I agree with you that the publication in the Herald is so nearly a copy of the original papers that there can scarcely be a doubt that the publisher was in possession of the original documents or of substantial copies thereof, It is to be regretted that the editor of the Herald had so little regard for the manifest rights of this Government and is so rude as to made proclamation in his paper against the right of the Government to have its wishes in this behalf respected.

I have sent a copy of your note to my several Colleagues, in accordance with your request, to the end that they may be thereby advised that the publication aforesaid was without the knowledge or consent of Your Government.

I remain, Sir,
Yours very respectfully,
M. A. Bingham

His Excellency
Wooyeno Kagenori
&c. &c. &c.

II　獨逸公使來翰

第三十二號

日本政府ノ許諾ヲ得スシテ新條約草案并ニ其附錄ヲ「ジャツパン・ヘラルド」新聞ニ掲載有之候旨本月二十三日附ノ貴翰ヲ以テ外國公使中ノ筆頭者ニ御通知有之候趣ニ候右書翰ハ昨日「ビンハム」君ヨリ通達有之候處右掲載ノ義ハ拙者ノ承諾ヲ經候義ニ無之候條此段拜答得貴意候也

於東京千八百八十年七月二十五日

フォン・フイゼンデツケル

外務大輔　上野景範閣下

(右原文)

L. K. d. G.　　Tokio, den 25, Juli 1880
No. 32/267

Euere Excellenz haben dem Doyen der diplomatischen Corps in einer Note vom 23. d. M. die Mittheilung gemacht, dass die Publikation der neuen Vertrags-Entwuerfe mit den zugehoerigen Anlagen im Japan Herald ohne Wissen der kaiserlichen Regierung erfolgt hat.

Nachdem diese Note gestern durch Herrn Bingham zu meiner Kenntniss gebracht wurde, habe ich die Ehre Euerer Excellenz zu versichern, dass die in Rede stehenden Dokuments auch ohne Vorwissen oder Autorisation von *meiner* Seite im Herald erschienen sind.

Mit vorzueglichster Hochachtung
v. Eisendecher

Seiner Excellenz Herrn Wooyeno Kagenori,
Vice Minister der Auswaertigen Angelegenheiten.

III　英國代理公使來翰

以書簡致啓上候陳者本朝駐劄合衆國公使ヨリ該公使宛貴翰ノ寫相達乃チ致一閱候處本月十六日及十七日ノ「ジャツパン・ヘラルド」新聞紙上ニ近時日本政府ヨリ諸締盟國ノ公

使ヘ配附相成候條約改正案ノ寫トシテ公行セル書類ハ恰モ
其原案ノ行文ニ髣髴タルヲ以テ貴政府ニ於テハ斷シテ當時
該新聞記者ハ右原案書類若クハ其寫ヲ掌握セシモノト認定
セラレ且右書類ハ貴政府ノ御承諾ヲ得ズシテ新聞紙上ニ致
掲載候者ニ有之候旨各國公使ヘ報道ニ及候樣「ビンハム」
氏ヘ御通諜相成候趣致承知候實ニ前顯ノ公用書類ハ全ク貴
政府ノ御承諾ナクシテ公然新聞紙上ニ掲示候儀ニ可有之拙
者ニ於テ慈悚ノ至、遺憾ニ不堪儀ニ有之候仍テ此段閣下迄
回答申進候敬具

千八百八十年七月二十六日

東京　英國公使館

ゼ、ジ、ケネディー

外務大輔　上野景範閣下

（右原文）

H. B. M. Legation Tokio
26th July 1880.

Sir,

The United States Minister at this Court, has communicated to me copy of a Note addressed to him, in which you inform Mr. Bingham that the documents published in the Japan Daily Herald of the 16th and 17th Instants as copies of the Draft Treaties recently submitted to the Representatives of the Treaty Powers by the Government of Japan, so closely resemble the original proposals that the conclusion is forced upon your Government that the Herald was at the time in possession of the documents in question or copies thereof and you further acquaint Mr. Bingham for the information of the Foreign Representatives, that these documents have been published without the knowledge or consent of the Japanese Government.

In reply to the above Communication I have the honor to Convey to Your Excellency the expression of my surprise and regret that these official documents should have been published without the knowledge or consent of His Imperial Japanese Majesty's Government.

I take this opportunity of renewing to Your Excellency the expression of my distinguished consideration.

J. G. Kennedy.

四　露國公使來翰

第三十六號

以手紙致啓上候陳ハ過般各自己ノ政府ヘ送遣ノ爲メ各國公
使ヘ御送付ニ相成候條約改正草案書類ハ頃日横濱英字新聞
ニ貴帝國政府ノ承諾ナク刊行ノ議ニ付各國公使ノ首長タル
米國公使ビンガム氏ヘ右御照會相成候處去ル二十二日附御
書翰ノ趣ヲ同公使ヨリ拙者ヘ報知致サレ候
右ノ公告ハ全ク貴國政府ノ承諾上ニテハ無之事ト固ヨリ拙
者ニ於テ相信ジ居候敬具

明治十三年七月廿六日

露國特命全權公使

スツルウエ

外務卿代理

外務大輔　上野景範閣下

註　露國公使ノ譯文ナリ、原文ハ省略ス

五　以國公使來簡

以書簡致啓上候然者在日本外國公使等ヱ極密ノ手續ニ因リ
過日御送付有之候條約草案ヲ貴政府ノ承認ヲ經スシテ「ジ
ヤツパン　ヘラルド」新聞紙中ニ掲載イタシ候儀御通知ノ
爲メ去ル二十二日附ヲ以テ米國公使ヨリ御送致相成候貴簡寫
ヲ同公使ヨリ交際官筆頭ノ名義ヲ以テ拙者ヱ差越申候處右
草案編制者タル貴政府ノ承認ヲ經由セサルノミナラス御商
議ニ預リタル吾國皇帝政府ノ承認ナクシテ右書類ヲ公刊ニ
付シ候儀ハ拙者ニ於テ因ヨリ致ス間敷事ト存居候段閣下ニ
及御確答候敬具

於箱根千八百八十年七月二十九日

ベルギラニー

外務大輔　上野景範閣下

（右原文）

Hakone le 29 Juillet 1880

Monsieur le Ministre

Mr. le Ministre des Etats Unis d'Amerique, en sa qualité de Doyen du Corps diplomatique, vient de me transmettre la copie d'une Note que Votre Excellence lui a adressée en date du 22 du mois cou-

rant, par laquelle V. E. tient à faire savoir aux Représentants étrangers accredités au Japon que la publication des projets de traités, qui leur avaient été communiqués dernièrement sous une forme strictment confidentielle, a été faite dans le Japan Herald sans l'avec et le consentement du Gouvernement Impérial.

Pour ce qui me regarde je puis, en réponse, donner à V. E. les assurances les plus formelles que je ne me serais pas cru autorisé à livrer à la publicité les documents en question sans le consentement préalable non seulement du Gouvernement Impérial qui a formulé les projets, mais sans le consentement aussi du Governement du Roi mon Auguste Souverain à qui les propositions ont été faites.

Je prie V. E. d'agréer l'assurance renouvelée de ma plus haute considération.

Barbolani

A Son Excellence
Mr. Wooyeno (Sic) Kanenori
Fonctionnant comme Ministre des
Affaires Etrangères

&c. &c. &c.

六 佛國代理公使來翰

以書簡致啓上候然者去ル七月二十二日附貴簡ヲ以テ同月十六、十七日刊行ノ「ジャッパンダイリー ヘラルド」新聞兩號中ニ貴政府ノ承認ヲ經スシテ條約改正草案ヲ致掲載候由交際官筆頭ニ御通知有之并ニ右貴簡ノ趣ニテ者貴國駐在外國公使等ノ内ノ一人ヨリ右新聞社ニ前記書類ヲ差遣リ候事ト閣下ハ御了解有之候樣分明ニ相見ヘ申候拙者ニ於テハ右草案送付ノ方式ニ因ルモ固ヨリ公布ニ付ス可ラサル者ナルハ容易ニ了解致候右草案御送致ノ貴簡中内密ノ意ヲ御記載無之ニ付拙者共同僚ノ中貴政府ニ對シ敢テ惡意ヲ挟ミ候譯ニハ無之候得共拙者ト意見ヲ殊ニシ右樣ノ所業ニ因テ以テ其自國人又ハ外國在留人ノ便益ニ供セントノ致思考候事ト拙者ハ致了解候右故貴簡ノ側面又ハ右御書面中若シ内密ノ一語ヲ御加載有之ニ於テハ更ニ疑惑ヲ來シ且紛紜ヲ生シ候ニハ至ラサリシト存候敬具

於東京千八百八十年八月九日

エルネスト バロウ

外務大輔 上野景範閣下

（右原文）

Tokio, le 9 Août 1880

Monsieur le Ministre,

A la date du 22 Juillet, vous avez écrit au doyen du Corps Diplomatique pour lui faire savoir que les projets de révision parus dans les numéros du "Japan Daily Herald" des 16et 17 du même mois avaient été publies à l'insu et sans l'assentiment du Gouvernement Japonais. Votre Excellence donne en outre clairement à entendre dans cette lettre que les documents dont il s'agit ont été communiqués à la Presse par un des représentants étrangèrs accrédités à la Cour de Tokio. Je n'éprouve aucune difficulté à reconnaitre que, dans la forme même où il ont été donnés, les projets en question ne me paraissaient pas déstinés à la publicité; cependant, comme la lettre d'envoi qui les transmettait ne portait pas la mention Confidentielle, Je m'explique que certains de mes collègues, dont le mauvais vouloir à l'égard du Gouvernement Japonais ne saurait d'ailleurs être sonpçonné, aient été d'un avis différent du mien et aient cru rendre service à leurs nationaux ou à la colonie étrangère, en adoptant la ligne de conduite qui'ls ont suivie. Dans mon opinion le seul mot Confidentiel, placé soit en marge soit dans le Corps de la depèche eut levé tous les doutes et évité l'incident.

Veuillez agréer, Monsieur le Ministre, les assurances de ma haute consideration.

R. de Balloy

Son Excellence
Monsieur Ooyeno
Vice Ministre des Affaires Etrangères
&c. &c. &c.

二九 明治十三年九月二日 米非上公使館ヨリ

各國公使ヘ回章會議諮詢ノ件

Foreign Office, Sept. 2d. 1880

To Mr. Bingham

Sir:

Reffering to Mr. Wooyeno's note to Y. E. of date

the 22d July and your reply thereto dated the 23d idem, I beg to request that you will, if you can consistently, furnish me a copy of the circular note addressed by you to the Foreign Representatives on the same subject.

I am, Sir,
very respectfully yours
Inouye Kaoru

His Excellency
John A. Bingham
&c. &c. &c.

三〇 明治十三年九月二日 米國公使ヨリ外務卿宛

各國公使ヘ回文寫封送ノ件

附屬書 七月二十三日附米國公使ヘ回章寫

第一三一九號

以書翰啓上致候陳ハ去月二十二日附ノ書翰ヲ以テ上野閣下ヨリ拙者ヘ御依頼ノ旨趣ニ從ヒ共月廿三日附ヲ以テ拙者ヨリ各國同僚ヘ宛ノ回文送達致置候處右爲御入用ノ趣本日附書翰ヲ以テ御申越ニ付即チ別紙右回文爲及封送候右回文ノ

儀ハ七月廿六日ニ於テ「ストートウェーゲン」氏及「グルート」氏ニ到達致シ又二十三四五ノ三日ヲ以テ他ノ同僚「ストルーブ」氏「アイゼンデッヘル」氏ニ到達致候旨記載有之候テ右回文指戻シ相成候右得貴意度如此御座候敬具

千八百八十年九月二日日本東京合衆國公使館ニ於テ
ジョン、エー、ビンハム

外務卿 非上 馨閣下

註 英文ニ依レハ右ノ外カスティーロ氏アリ

(右原文)

No. 1319

United States Legation,
Tokio, Japan, Sept. 2, 1880.

His Excellency
Inouye Kaoru
His Imperial Japanese Majesty's
Minister for Foreign Affairs,

Sir:

Reffering (sic) to your note of this date in which you request a copy of the circular letter addressed by me on the 23d of July last to my sevral Colleagues in Compliance with the request made of me by Mr. Wooyeno in his note dated the 22d of July last, I have the honor to enclose herewith a copy of said circular letter so addressed by me and to say that the same was returned to me endorsed "received." 26th July, Stoetwegen, De Groote and Castillo, and also endorsed by others of my Colleagues, de Struve, Eisendecker &c. as received by them 23d, 24th and 25th of July last.

With renewed assurances of my highest consideration I am very truly yours.

M. A. Bingham

附屬書

十三年七月二十三日附米國公使の回章寫

No. 933

U. S. Legation
Tokei, July 23, 1880.

My dear Colleagues:

I beg leave to acquaint you that I am in receipt of a note dated yesterday from Mr. Wooyeno Kagenori acting for the Minister for Foreign Affairs, a copy of which I deem it my duty to bring to your notice, to the end that each of you may address to Mr. Wooyeno such reply as you may respectively deem proper. In my opinion the note does not call for joint action; nor do I think that joint action thereon is either desired or expected by the Foreign Office.

I shall forward a reply to Mr. Wooyeno today expressive of my surprise and regret that the documents mentioned have been published without the consent of H. I. J. M's Government as mentioned in the note.

Accept, my dear Colleagues, the renewed assurance of my high consideration.

John A. Bingham

To their Excellencies
C. de Struve, E. E. & M. P. of H. I. Russian Majesty.
Count Barbolani, E. E. & M. P. of Italy.
C. de Groote, E. E. & M. P. of Belgium.
K. von Eisendecker, E. E. & M. P. of Germany.

Ho Ju Chang & chang Sz Kwei Minister of China.
Chevalier de Stoetwegen, Min. Resident of the Netherlands.
Chevalier de Castello y Trigueros, Chargé d'Affaires of Spain.
J. G. Kennedy, Chargé d'Affaires of France.(sic)
Chevalier Hoffer de Hoffenfels, Minister Res. of Austro-Hungary.
Enclosure: Mr. Wooyeno to Mr. Bingham dated July 22 1880, in relation to the publication in the Japan Daily Herald of the Treaty project of H. I. J. M's Government.

三一　明治十三年八月二十五日　井上外務卿ヨリ青木駐獨公使宛

和蘭公使召還方要求ニ關スル件

附屬書一　十三年八月二十五日附青木公使宛第一訓令
二　十三年八月十八日附青木公使宛往電
三　十三年八月二十日附青木公使宛往電

内信

本邦駐在和蘭公使ノ召還ヲ要求スル一件ニ付テハ本月十八十九及廿四日附ヲ以テ別紙ノ通電信相發候右今便別紙訓狀差進候故大體ハ右ニテ御了悉ト存候得共尚爲念當初ヨリ今日ニ至ル迄ノ顚末ヲ叙述シ貴君御參考ニ備ク候

抑我政府ニ於テ條約草案ヲ各公使ニ交付セシハ七月六日ニ有之而シテ右草案ハ各公使私閲ノ爲メニ非ラス全ク各其本國政府ヘ送致スル爲メナル事ハ載セテ其照會文ニ有之候處豈圖ンヤ七月十六十七兩日ノ横濱ヘラルド新聞ヲ閲スルニ別紙切拔ノ通公刊有之實ニ驚愕ノ至ニ不堪我政府ニ於テ斯クノ如キ外交上重要ノ書類ヲ輒スク新紙ニ付スル事ハ萬々無之又外國公使ニ於テモ決シテ無之筈ト信用候得共公刊ノ原因太タ怪訝ニ不堪因テ直チニ別紙甲號寫ノ通外務大輔

貼紙一　外務卿不在ニ付ヨリ駐我交際官宿老米國公使ニ宛テ各公使ヘ草案刊行ノ次第ヲ通知ニ及候處白蘭二箇國ヲ除クノ外ハ皆公刊セザル旨ノ確答有之候然ル處一タ魯公使館ニ於テ英米獨公使等會話ノ席ニ於テ英代理公使ヨリ蘭公使ノ通信ヲ示シ近日草案ヲ新紙ニ付セシハ蘭公使ノ手ニ出テタル旨右諸公使ニ通知有之節其居合ノ公使等直ニ其寫ヲ取リ候同夜魯公使ヨリ直ニ上野大輔ニ公然トナク其旨通知有之且ツ其夜半英

下ケ札

公使ヨリモ態々書翰ヲ以テ其旨通達有之候是ニ於テ公刊ノ原因始メテ判然ニ歸シ候然レトモ右ハ全ク英代理公使ト蘭公使トノ私信ニシテ之ヲ以テ斷交ノ根抵トナスハ或ハ不盡トノ懸念有之候ニ付右二使ニ宛テ外務大輔ヨリ直ニ詰問書差遣候方可然トノ議論相起候得共反復照考候得ハ最早右草案刊行ハ蘭使ノ手ニ出候事世上ニ分明相成候而已ナラス英魯獨米ノ諸公使ヨリハ蘭使ヘノ書翰ノ寫ヲ添ヘ各其本國政府ニ通牒相成候次第蘭使モ今更自己ノ所爲ニ非ラサル段ハ相拒ミ不得程ノ證據明了ニ相成候得共爲念其寫ヲ英代理公使ヨリ公然呈露セシメン爲メニ米公使ニ照會セシニ同公使ヨリ回答有之其旨趣ハ蘭公使回答ノ怠慢ト英代理公使ヘ通信ノ事實トニ據ルトキハ其證跡判然タルニ付更ニ公然其寫ヲ要セサルトノ勸告有之候故遂ニ斷交ノ事ニ一決シ去ル十八日別紙天號ノ通蘭公使ニ通知セリ其翌日蘭公使

貼紙二　ヨリA號ノ通電信ヲ以テ本官ニ面謁ヲ乞候得共事故アリB號ノ通返答候處尚又C號ノ通申越候ニ付D號ノ通回答ノ末大輔同公使ニ接シ該件ニ關シ應答セシ事別紙地號筆記ノ通ニ有之候結局蘭公使條約草案ヲヘラルド新聞社ニ交付セシ事ヲ明言致シ候右應答ニ依リ益我要求ノ根抵ヲ確實ナラシ

下ケ札二

貼紙三　ムルノ一證ヲ得候蘭公使擧措ノ不當ナルハ敢テ辯論ヲ不俟シテ判然タリト雖トモ今彼ノ辨解ニ對シ本省法律顧問ノ意見別紙人號覺書ニ記載候間御熟覽可被成候

右ノ次第ニ付彼レノ辨解ハ一トシテ其當ヲ得タルモノニ無之之ニ反シテ我根據トスル處ハ前述ノ通リ明確允當ノ理ニ基クモノニ有之候去ル十九日電信中ニペルソナルリーノ語ハ卽チ同公使ヨリ英代理公使ニ與ヘタル書翰ヲ指シ又ヲフイシヤリーノ語ハ卽チ同公使自カラ外務省ニ出頭シ外務大輔ニ面シ交付ノ事ヲ親シク明言シタルモノヲ指シタル事ニ有之候其國外務卿ヘ請求ノ際或ハ其證據充分ナラサルヨリ我要求貫徹セサルカ如キ結果ニ至リ候テハ前途交際上太タ障碍ヲ生シ候間前述ノ事情御體認ノ上充分御辨明有之度候且又我政府ニ於テ無據右ノ如キ不好談判ニ渉リ候理由ハ縷々訓狀ニ記載スレバ明瞭ニ御了解ノ事ト存候右ニ就テハ横濱ガゼツト及ヒ東京日々新聞其他ノ新紙ニ於テモ其非擧ヲ痛論スルモノ或ハ之ヲ保庇スルモノ筆舌々タリト雖トモ之ヲ要スルニ其公使ヲ拒絶スルニ至テハ實ニ容易ナラザルノミナラズ此一擧措ノ爲メニ將來兩國ノ情好感觸幾分歟不快ノ位地ニ陷ルハ論ヲ俟タザル事ニ付我政府ニ於テモ成ル可

ク穏當ノ處置ヲ取リ度候得共抑外交機密ノ事件タルヤ一旦漏泄ノ端緒ヲ開キ候時ハ將來弊竇百出實ニ底止スル處ヲ不知ノ場合ニ立至候ハ勢不得免況ンヤ目下各國ト重要ノ談判着手ノ際ニ臨ミ首トシテ斯クノ如キ非擧ノ一例ヲ默認スルトキハ他ヲ戒飭スルノ途更ニ無之又保己ノ主義ヲ全フスル能ワス夫是ヲ考量スルトキハ我政府ニ於テハ今日ノ措置ニ出候モ實ニ不得已次第ニ有之候然シナカラ此ハ是現今ノ公使措辨ノ宜ヲ不得ニ由リ候事ニテ敢テ其本國政府ト我政府ノ交誼上ニ於テハ毫モ隔意有之譯ニ無之候他日公平ノ公使ヲ更ニ被派候ニ付テハ素ヨリ兩國ノ親交ヲ不失段ハ其外務卿ヘ併セテ御陳述有之度候此段申進候也

明治十三年八月廿五日

外務卿　井上　馨

特命全權公使　青木周藏殿

追テ本文法律顧問ハ米人ニ付其意見書中引用スル所モ多ク來書ニ據リ又其論理モ米國人ノ口氣ニ出候間其御心得ヲ以テ御覽可被成候且其和文ハ今便ノ間ニ合兼候間次便送致可致候

再伸蘭公使ヘ送致候條約改正草案ノ書類ハ其表面ヘ一番號ヲ記載シ且ツ（秘）ノ字ヲ付シ置候此段モ申進置候

（下ケ札一）
本文通信トハ蘭公使ヨリ英公使ニ宛條約草案ヲ新聞紙ニ公刊セシハ自カラ成セシ事ナリトノ意ヲ示シタル書翰ヲ云フ

（下ケ札二）
怠慢トハ別紙甲號書類中米公使ニ宛テタル書翰ニ對シ他ノ公使ハ回答アリタレトモ蘭公使ハ回答ナキ事ヲ云フ

（貼紙一）
（朱書）「甲號」

（貼紙二）
（朱書）「天號　A號　B號
C號　D號　地號」

（貼紙三）
（朱書）「人號覺書」

註　甲號以下添附書類省略ス

附屬書一

明治十三年八月廿五日附

青木全權公使ヘノ第一訓令

去ル十八日拙者ヨリ左ノ通電信ヲ以テ及急報候

海牙府ヘ赴キ和蘭國外務卿ニ接談ヲ遂ケ其在日本公使ノ行跡ニ於テ甚タ宥恕シ難キモノアル事ヲ述フヘシ其坐スル罪狀ハ卽チ頃日我ヨリ該公使ニ送付シタル日本條約改正草案ヲ其本國政府ニ傳致ス可キモノナルニ渠レ直ニ之ヲ新聞紙ニ揭載セシメ公布シタルは是ナリ因テ至急該公使召還ノ儀且別人新任ノ事ヲ請求スヘシ日本政府ハ向後無餘義該公使ト公務上ノ通信ヲ謝絕セリ前顯ノ處分ハ深ク遺憾ナレトモ他ニ施ス可キ術ナクシテ此ニ及ヒタル旨ヲ開陳アリタシ餘ハ書面ヲ以テ

蓋シ和蘭皇帝陛下ノ政府ニ在テハ固ヨリ速ニ右請求ニ應シ毫モ異議ヲ容レサル事ト致信察候乍然該事件ノ顚末ヲ詳細ニ報道セシメ斯ク外交上ノ敬禮ヲ失シ例規ニ違犯セシ行跡ニ付諸般ノ情況ヨリ且我政府ノ遂ニ斯ク非常ノ處置ニ及ヒタル所以ノ理由ヲ擧テ之ヲ彼政府ニ通知シ其領會ヲ致スハ亦自カラ當然ノ事ト存候實ニ今回ノ處置タルヤ古來萬國ニ在テ之ヲ施ス事極テ稀ナル所ナリ尤モ今回日本政府ノ處置ハ其間然ス可カラサル事獨リ右罪狀ノ重大ナルヲ見テ之ヲ知ル可キニ非ス苟モ我政府ノ榮威令名ヲ保持シ且將來復タ密事漏泄ノ患ナカラシメンニハ之ヲ舍テ他ニ由ルヘキ途更ニ無之事ト思惟ス

抑モ客月六日卽チ右條約改正草案書ヲ和蘭皇帝陛下ノ辨理公使ヘ送付シ其他諸外國公使ヘモ又同時ニ各之ヲ送付シテ各自ヨリ其本國政府ヘ傳致可有之樣致置候是レ此諸公使ハ當時未タ以テ條約ヲ訂結スルニ足ル十分ノ權力ヲ有セサルニ因テナリ

夫レ該草案ヲ送付スルニ臨ミ其機密ヲ要シ他見ヲ憚ルヘキ旨ヲ外國公使ヘ可申入事ハ固ニ無用ノ儀ノミナラス却テ不當ノ事ト思考セリ元來外國公使ハ我政府ニ於テ厚ク信義ヲ置カサル可ラサル所タルニ若シ之ニ對シ右樣申入候テハ實以大不敬ニ相當リ可申事ト致信察候七月十六日及ヒ十七日發免ノ「ヂヤバン・デイリー・ヘラルド」（横濱印刷ノ英字新聞）中ニ前顯ノ草案書ヲ一々揭載セルヲ見ル依之事實取糺候處當政府ニ屬スル者ニテ該書類ヲ「ヘラルド」ヘ附與致候モノハ一切無之ニ付右事件ヲ諸外國公使ヘ通知致シ且右

書類ヲ新聞紙ニ掲載致候ハ日本政府ノ知ル所ニモ無之又日本政府ヨリ許可シタル事ニモ無之旨陳示致候右拙者ヨリ外國公使ヘ　指遣候書翰ハ　去月廿二日附ニテ　卽チ　該草案書ヲ「ヘラルド」ニ掲載セシヨリ五日ノ後ニ指出候モノニ有之候然ルニ各外國公使ヨリハ大抵夫々ニ返翰指越候テ同歎ノ趣申越候得共獨リ「セヴアリール・ド・スツートウエーゲン」氏ヨリハ今以何等ノ返事モ無之候

乍然右書類ヲ「ヘラルド」ヘ付與致候ハ全ク同氏ノ所爲ナリト余敢テ玆ニ斷言スルナリ且又「ヘラルド」ニ載スル所ハ該書類ノ出所ヲ窺ヒ知ル可キ恐レアル所ノ文字ヲ出板前故サラニ削除セシモノタルヲ見レハ同氏ノ該書類ヲ「ヘラルド」ニ付與セシ時ハ身カラ其所爲ノ責ニ當ル可キ心組ニアラサリシ事ヲ推知セサルヲ得サル儀ニ有之候加之「ゼヴアリール・ド・スツートウエーゲン」氏ハ此事ヲ默止ニ付シ去ルヲ得ル間ハ力メテ自カラ其該事件ニ關係セル跡ヲ隱匿セリ亦同氏カ信依スル所ノ「ヘラルド」新聞ノ如キモ便チ當省ヲシテ該事件ノ探査ヲ遂ケサラシメント企圖セリ以テ其罪ヲ蔽ハント欲スル意アルヲ睹ルニ足ラン

同氏ノ所爲ハ本ト故意ニ出ルモノニシテ且該所爲ノ全ク外國公使ノ職分ニ違ヒ竝ニ我政府ノ信義及ヒ情願ニ背ケル事ヲ十分承知ノ上ニテ此ニ及ヒタル事更ニ疑ヲ容レサル事ニ有之候卽チ右草案書ヲ外國公使ニ送付セシヨリ之ヲ「ヘラルド」ニ掲載セシマテハ十日ノ猶豫有之而シテ此十日間我政府ニ於テ該書類ヲ世ニ公ニスルヲ許サヽリシ事ハ「セヴアリール・ド・スツートウエーゲン」氏ニ於テ必ス十分知ル所ニ可有之候

七月十四日ノ「ヘラルド」新聞紙ニ我政府ノ條約改正全案ハ既ニ一週間以前ニ於テ諸外國公使館ヘ送付相成タル旨ヲ記載シ隨テ我政府徒ニ延滯スル事無ク該案ヲ世ニ公ケニセン事ヲ望ミ且諸公使モ可成丈ケ速カニ之ヲ商法會議所ニ諮詢セン事ヲ欲スル旨ヲ說キ又其該案ヲ秘スル理由ノ在ル所ヲ知ルニ苦シムト云フ語有之候

若シ我政府ノ當時該案ヲ世ニ公ケニセザリシ事實ハ未タ以テ和蘭國公使ヲシテ其機密ニ屬スル所タルヲ悟ラシムルニ足ラザリセバ右ニ摘拔セル新聞紙ノ所說（卽チ新聞紙ニ此說ヲ載セタルヨリ二日ノ後該公使ハ改正案ヲ其新聞紙ニ載セシメタリ）ヲ見テ苟モ考一考ヲ此ニ加フレハ則チ該公使ハ必ス以テ之ヲ悟ルニ足ル可キナリ

去月廿二日拙者ヨリ差出シタル書翰ハ適ニ以テ該公使ヲシテ其所爲ヲ說明スルノ機會ヲ與フルモノナリ然ルニ渠レカ默止シテ之ニ回答セサルハ是レ則チ其辭柄ノ以テ躬カラ能ク辨白スルニ足ルモノ無キニ非スシテ獨リ何ソヤ拙者ハ「セヴアリール・ド・スツートウエーゲン」氏ノ所爲ニ於テ一モ之ヲ寬恕スベキ事情アルヲ發見スル能ハズ何トナレハ蓋シ同氏ハ右新聞社說ノ從來我政府ノ利益ニ敵對ナル事ヲ知リ乃チ夫ノ條約改正案ヲ該新紙上ニ公刊セシメ以テ止タ和蘭政府トノ交際ノミナラズ其他諸締盟國トノ交際ニ於テ我政府ニ反對スル批評ヲ招クニ至ラシメント欲スレハナリ

凡ソ一國政府ヨリ他國政府ヘ差出ス所ノ考案タルヤ其雙方ノ商議中又ハ其外交上ノ取扱ニ係ル間ハ咸ナ是レ外見ヲ憚リ機密ニ屬スベキ事ハ我政府ノ常ニ遵奉スル所ニシテ且ツ萬國普通ノ例規ナリト致信察候而シテ駐劄外國公使カ其本國政府ヘ送致スル爲メニ受領シタル案文ノ如キハ則チ此例規ニ據テ之ヲ取扱フコソ公使ノ本分ニ有之候然ルニ斯ノ平易明白ナル要典ニ悖戻シ剩ヘ其本國政府ノ未タ之ヲ受理セサルニ先チ直ニ之ヲ駐劄國ノ新聞紙ニ付與シテ公布セシムルカ如キニ至テハ是レ外交ノ一大原則ヲ犯スモノナリ惡ゾ之ヲ放過シテ其再犯ノ機會ヲ得セシム容ケンヤ

今再ヒ足下ノ本件ヲ和蘭國外務卿ニ通知スルニ方リ宜シク懇到ニ陳示スヘキモノアリ卽チ日本政府ニ於テハ情實不得已「セヴアリール・ド・スツートウエーゲン」氏ノ召還ヲ請求スルニ至リ候段深ク遺憾ニ候得共左リ迚ハ此外取ル可キ處置ノ道更ニ無之旨且ツ爰ニ斯ク請求シテ和蘭皇帝陛下ノ將來當廷ニ駐劄セシムル公使ハ我政府ノ信敬ヲ受ルニ足ルノ人材ナル事ヲ望ム所ハ他ナシ是レ日本皇帝陛下ノ其今日幸ニ兩邦間ニ存在スル親睦ノ交誼ヲ永久保持セン事ヲ庶幾スルノ確證ニ有之候旨ヲモ開說可被成候也敬具

明治十三年八月廿五日

外務卿　井上　馨

特命全權公使　青木周藏殿

追啓

此訓令ハ和蘭國外務卿ヘ御讀聞セ可有之又其望ニ任セ右寫ヲ差出ストモ苦カラス候事

附屬書二

（朱書）

「千八百八十年」

明治十三年八月十八日發

電報

伯林府公使館ニテ

青木公使宛

井上外務卿

足下直ニ「海牙（ヘーグ）」府ヘ出張シ蘭國外務卿ニ面談ヲ遂ケ而シテ日本駐劄公使カ其政府ヘ送ル爲メ遣ハシタル日本條約改正草案文ヲ當地ノ新聞ニ投記シ甚タ赦シ難キ不正ノ罪ヲ犯セシ事ヲ告ケヘシ依テ速ニ同氏ヲ召還シ別人ノ新任アラン事ヲ乞フヘシ日本政府ハ以來同氏ト公信ノ往復ヲ絶タサルヲ得ス右ノ一條ハ不得止ニ出ルモノニテ深ク悲嘆スル所ナル事ヲ述ブベシ

附屬書三

明治十三年八月廿日發

電報

在伯林日本公使館ニテ

青木公使宛

井上外務卿

在日本和蘭國公使ハジツヤパン・デイリー・ヘラルド社ヘ改正條約草案ヲ寄贈シタル旨ヲ自證シタリ又該公使可成ハ之ヲ内濟ニシタシト請求スレトモ素ヨリ其需ニ應シ難シ依テ直ニ「ハーゲ」ニ出立シ可成速ニ該公使ノ召還ヲ促スベシ

三三　明治十三年九月二十四日　森駐英公使ヨリ　井上外務卿宛

條約草案チヤイナテレグラフ紙所載ニ關スル件

十三年別信第六十三號

過般巳來本使ヘ御回附相成候條約改正草案既ニ當地新聞紙チヤイナテレグラフヘ追々分載公布相成甚以不都合ノ次第ニ付電信ヲ以テ報告可致筈ノ處右書類出所ハ横濱ニ在リ又其元ハ東京駐劄外國公使ノ手ニ出候模様東京諸新聞紙中ニモ相見エ且閣下ニモ御處分中ト仄ニ傳聞致候故發電相扣候扨重大機密ノ事件初發ヨリ世上ニ漏聞紛議百出非常ノ障碍ヲ招クヘキコト痛心罷在候乍去事爰ニ至リ候上ハ本使等ノ務ムヘキハ右漏聞ノ件ニ就キ我政府ノ御處分目的ヲ熟知シ外人應接等ノ節不都合無之樣可取計筋ニ候處前件ニ對シ今以テ何等ノ御報知モ無之甚不審ノ次第ニ候最初漏出候事由ヨリ右ニ付我政府ノ御處分其時々御報知希望此事ニ候依テ公布ノ新聞紙切抜相添申進候也

九月廿四日

在英　森　有禮

井上外務卿殿

三三　明治十三年八月　伊國公使ヨリ　井上外務卿宛

條約改正ニ關スル意見書送付ノ件

附屬書　伊國公使意見書

私信

謹啓然者所謂條約改正ナル緊急ノ問題ニ付キ拙者ノ意見ヲ長文ノ佛語ニ相認メ封入シテ差上候條御落手被下度候萬一拙者ノ意見明瞭ニ閣下ヘ通曉不致事有之候テハ甚タ遺憾ニ存候間何卒右書翰飜譯ノ儀ハ御省中最良ノ譯者ヘ御命相成候樣仕度此段敢テ申上置候愚妻ヨリモ閣下幷御内室マテ宜敷可申上旨申出候也頓首再拜

千八百八十年八月　箱根ニ於テ

伊國公使　バルボラニー

東京　外務卿　井上　馨閣下

（右原文）

Hakone, the August

1880

Private

My dear Minister

I have the honour to inclose by a long letter in French on the important question of the revision of the Treaties.

I beg to recommend Your Excellency to charge of the translation of this letter the best translator you have. I shall regret very much if my ideas should not be properly and rightly presented to Your Excelllency's consideration.

My wife wishes to be remembered to you, to Mrs. and Miss Inouye.

Believe me very sincerely my dear Minister.

Barbolani

To His Excellency

Mr. Inouye Kaoru

Minister for Foreign Affairs

&c. &c. &c.

Tokio.

附屬書

極密且特別

伊國公使意見書

東京ニ於テ最終拜唔ノ節拙者ヘ御申聞ノ通リ箱根ニテ閣下ニ再謁ヲ得ルノ好機會ニ際シ拙者共ニ御通知相成候條約草案ニ付キ拙見ヲ面リ閣下ニ陳開セント致期望居候處不幸ニシテ尊意變換伊香保表ヘ御旅行ノ由新聞紙上ニ相見ヘ今回ハ事實相違無之事ト致掛念候ニ付キ一書ヲ呈スル方ニ致決心候

今首トシテ閣下ニ申述候迄ニハ無之候得共左ニ陳述イタシ候件ハ全ク拙者一個ノ意見ヲ記シ候マテニテ敢テ本國ヘ差送リ候草案熟讀ノ上該國皇帝政府ニ於テ決定可致旨趣ヲ豫想スルニアラス故ニ伊國公使ノ名義ニテハ無之拙者數年ノ滯在中其事情ニ通曉シ其價値ヲ評定シ得タリシ日本國ニ對シ懇親誠實ナル一友タルノ名義ヲ以テスルモノナリ

閣下ノ草案中ニ揭クル所ノ至重ナル問題ハ裁判權及ヒ稅目改正ニ關スルノ二個ニシテ其他ハ第二ニ位スルモノナルカ故ニ拙者ハ此二個ノ問題ニ付キ陳開スル所アラントス

日本伊太利兩國間ニ結フ可キ新條約ノ爲メ閣下ト共ニ拙者ノ草案ヲ商議スルノ光榮ヲ得タリシ際條約面ニ照シ開港場ニ在ル外國人ノ享有セル特別ノ裁判權ニ於ルハ後來ハ知ラズ差當リ現行ノ景狀變換ニ付テハ毫モ外國政府ノ承認ヲ得可ラスト致縷述セシハ閣下ニ於テモ定メテ御記憶ノ事ト存候

乞フ玆ニ言辭ヲ粧飾セス赤心ヲ吐露シ以テ此眞正ノ理由ヲ閣下ニ告ントス

人ノ言フアリ曰ク日本國ハ未タ法律ノ整頓セス尙ホ未タ之ヲ照行ス可キ賢明方正且良能ナル法官ヲ有セス且自今以後數年間ハ尙ホ之ヲ有セサル可ク警察官吏ハ就中外國人ニ對シ徒ラニ煩勞ヲ加ヘリト此駁議中往々其實然ルアリト雖モ全體ノ實ニ至リテハ敢テ是等ヲ云フニ非スシテ其要領ハ貴國ノ自愛心ニ觸レン事ヲ恐レ交際上又ハ公文中ニハ秘シテ之ヲ言ハサルナリ願クハ閣下ノ親友ト認メ以テ拙者ノ之ヲ陳述スルヲ許可アラン事ヲ

抑モ太古ヨリシテ歐洲諸國ニ於テハ外國人ヲ其國ヨリ掃攘スル事ハ一定シタル政府ニテハ決シテ之ヲ一方法中ニ編入セス該洲ニテハ他ト貿易通交ノ友誼ヲ斷ント欲スルノ論ス

ラ已ニ承認ス可キ事ニアラスシテ已ニ古昔ノ希臘國カルタージュ府羅馬帝國ニ於ケルモ全ク貿易ニ賴リ以テ强大ナルニ至リ今世ノ諸國モ亦之ニ賴リ以テ其國ノ巨大ノ財源ヲシテ益々富殷ナルニ至ラシメタリ今玆ニ歐洲ヲ以テ論スル所ノモノハ亞米利加洲ニモ亦推及ス可クコレ該洲ハ歐洲ノ創立ニ係リ且之ヨリ發生セシニ外ナラサレハナリ

然ルニ日本國ノ景狀タルヤ全ク他ト相異ニシテ外國貿易ノ爲メ二三ノ海港ヲ開クヲ得ルニ至リシハ單ニ兵力ヲ藉ルノ外ナラサリシヲ反復論スルハ贅言ニ屬ス可ク其國自己ノ開化ニ矜誇シ歷代不朽且著明ナル古傳ヲ墨守シ以テ幕末ノ際マテ拒抗シ强迫ノ擧アルニ至リテ初メテ請求ニ應セシナリ尤モ拙者ニ於テハ此强迫ノ所爲ニ付キ毫モ其辯解ヲ搜索セント欲スルノ意アルニ非サルハ閣下ノ御了承アラン事ヲ庶幾スル「ノミナラス他ニ關涉セサル理論ニ據レハ砲聲ヲ藉リ」[1]

去午外國ニ於テハ一旦此極度ノ手段ヲ用ユルニ決定セシニ方リテヤ若曩日ノ原狀ニ再復シ得可ラサルカ爲メニ必要ナル注意ヲ爲サヽルニ於テハ頗ル先見ヲ誤レリト言フ可キハ勿論ニシテ然リ而シテ其目的ヲ達スルカ爲メニ缺ク可ラサルモノナリト思惟セシ所ノ注意之ヲ詳解センニハ卽チ此保證ハ適サニ左ノ二件ニシテ第一ハ居留地內外國人ノ治外法權第二ハ雙方協議ヲ經且輕少ナル稅額之ナリ

若シ此ノ二個ノ保證ヲ以テ一時存セサルモノナリト假想センニハ如何ナル景狀ニ至ル可キヤ

日本國若シ現今ノ諸卿ノ如キ賢明ナル宰相ノ管轄ニ屬スル間ハ其好意ノアルニ拘ラス間隙ノ生スルヤ必セリトハイヘ其弊害タルヤ恐ラク甚ダ巨大ナラサルヘシト雖モ一旦復古黨ノ政權ヲ握ルニ至リテハ其危害タルヤ最モ重大ナル可クシテ此想像タルヤ敢テ莫シトハ保シ難ク就中皇帝陛下若シ日本國ニ代議政體ヲ許可アルニ一定スル時ニシテ此輩政權ヲ握ルニ至リテハ其第一ノ所爲タル種々ノ方略ヲ造爲計畫シ以テ外國人ヲ掃攘スルニ汲々タル可キハ判然ニシテ陽ニ條約面ヲ準守シ或ハ其ノ法官ヲ以テ又ハ其官吏ヲ以テ就中警察官吏ヲ以テ外國人ヲシテ日本國內ニ留リ難カラシメンカ爲メ之ニ逼迫シ之ヲ疲困シ之ヲ煩擾セシム可ク又外國貿易ニ付キテハ一擧シテ之ヲ掃盪スルハ最モ容易ニシテ卽チ百分ノ百又ハ百分ノ二百ノ稅ヲ輸入物品ニ課スルノ外ナラズシテ橫濱及神戶ニ在ル外國商館ハ其舖店ヲ鎖サヽルヲ得

ヲ防得シ不正ノ利ヲ射且其國内ヨリ金銀貨幣ヲ輸出スルニ
職トシテ之由ルトノ奇怪ナル臆説ヲ世上ニ隱然傳播スルヲ
究メテ容易ナラシメタリ
閣下幷ニ御同僚ノ諸君ハ此ノ如キ論ニ御同意ナラサルハ拙
者固ヨリ之ヲ熟知スコレ歐洲中貨幣ノ缺乏ヲ告ルハ日本ト
殆ント同一ナル景狀ニ在ル諸帝國ノアルアリ而シテ此諸國
タルヤ外國トノ貿易ヲ以テ其原因ト爲サント欲スルトハ遙
カニ懸隔スルハ閣下ノ詳知スル所ナレハナリ而シテ近世經
濟家ハ彼ノ陳腐ニシテ且確切ナラザル輸出輸入上貿易衡論
ノ主義ヲ能ク論駁セリ歲末ニ至リ横濱港ノ輸入カ百萬又ハ
二百萬ヲ超過スルヲ見テ慨然痛歎スル所ノ輩ハ英國ニ於テ
ハ昔時ヨリシテ一年間ノ輸入ノ額ハ輸出ヨリ超過スル二億
萬又ハ三億萬ナルヲ聞クニ於テハ一大驚駭ヲ喫ス可キヤ必
然ニシテ若シ貿易權衡論ノ理論ヲシテ至當ナラシメハ英國
ハ之カ爲メ日本國ヨリ貧窮ナル事二百乃至三百倍ナルノ結
果ヲ發生ス可キナリ
教育ノ充分ナラス又ハ凶惡ノ志意ヲ狹ムノ徒ハ新聞紙ヲ以
テ最モ茶毒タリ且恐懼ス可キ理論ヲ世上ニ傳播スルハ甚タ
慨歎ニ堪サル事ニテコノ徒ニ於ル世上固弊スル所ノ病根ハ
サルナリ
歐米二洲ニ於テ若シ一政府アリ此ノ如キ方略ヲ行ハント思
慮センニハ人アリ云ハン該政府ハ自殺ヲ欲スルナリト日本
目下ノ輿論ニ於ケルハ然ラスシテ却テ之ヲ稱賛シ且答テ曰
ン吾儕ハ外國人ヲ視ス貿易ヲ做サスシテ玆ニ已ニ千有餘年
ヲ平穩ニ經過セシカ故ニ自今以後尚ホ是等ナクテハ經過シ
得サルノ理アランヤト拙者ノ玆ニ陳スルモノハ世上ノ輿論
ニシテ此論タル實ニ大ニ注意セサル可カラスシテ而シテ外
國ニ對シ都テ讐敵ノ狀アルハ閣下モ亦御同見ニ可有之其然
ル所以ハ容易ニ了解シ得可キナリ
抑々日本ヲ外國ノ爲メニ開キシヤ該國古來ノ社會及政略上
ノ組織ヲシテ數年ヲ出サル間ニ全ク一變セシ所ノ一大改革
ト相遭遇シ此擧タルヤ許多ノ利益ヲ毀傷シテ遺スナク所有
ノ權利ヲ損害シ不平ノ念ヲ懷ク者及ヒ轉變ノ災ニ罹ル者ヲ
大ニ釀成シ之カ爲メ幸福ヲ得可リシ輩モ政府ノ進入セル新
路ノ爲メ百般ノ諸事物悉ク創立ニ係ルニ因リ租稅ヲ人民ニ
重課シ以テ陸續要スル所ノ金額ニ充ルニ因リ故ニ幸福ハ中
途ニテ停止阻遏スルニ至リタリ故ニ新聞紙中民權家ヲシテ
世人ノ被ムル所ノ弊害ハ都テ外國人ノ來リテ日本人ノ利害

權テ外國貿易ヨリ發生スト流布スルニ夙夜汲々タルカ故ニ
智識ナキ世人ハ直チニ之ヲ信用シ而シテ此徒ノ高談激論ア
リト雖モ依然事勢ノ變換セサルヲ視遂ニ政府體裁上ノ改革
ヲ請求スルヨリ他ノ良劑ナシト思惟スルニ至ル亦宜ナラス
ヤ
出版自由ハ善良ノ權ニシテ近世開化中ノ一大美事ナリト雖
モ之ト同時ニ代議政體ヲ設置セサル邦國ニアリテハ大ニ危
害ヲ生シ得ベシコレ此ノ權ノミニシテ上下二院中且立憲政
府ト密着離レサル他ノ保證中ニ權衡ヲ有セサルトキハ他ノ
責任ナキ諸權ト同シク其適度ヲ超ヘ且殘虐ト變スルニ推及
スルヲ以テナリ議院政體ノ政府ハ黨派ヨリ編成スル政府ナ
ルカ故ニ必ラス有權黨ノ新聞紙及反對黨ノ新聞紙ヨリ甲ヲ
以テ乙ヲ警戒シ世人之ニヨリ以テ其是非ヲ了解スルモノナ
リ
然ルニ日本政府ハ新聞紙ニ對シテハ更ニ勢力ヲ有セス假令
罰金又ハ入獄ノ援アルニモセヨ之ヲ稱賛スル者ハ至テ鮮少
ニシテ世擧テ之ヲ暴戻ノ所爲且威權濫用ト目スルナル可ク
若シ果シテ然ランニハ政府モ亦自ラ新聞紙ヲ興スノ外アラ
スシテ假令之アルモ其黨タルヤ竝行スルヲ得サルヘク將タ
目下ノ景狀ニテハ政府ハ已ムヲ得スシテ其勢焰ニ附從スル
ヤ毎回ナリ乍去輿論ヲ薫陶シ且今ニ比スレハ却テ善良ナル
方向ニ誘導スルカ爲メ尚ホ二三ノ爲ス可キアリト拙者ハ致
愚考候
玆ニ新聞紙ニ付テ陳述スル所ノ論ヨリシテ日本國ニ議院政
體ヲ編成センヲ閣下ニ勸奬スルハ拙者ノ意ニ無之此件タル
ヤ甚ク困難ナル一問題ニシテ拙者ハ之ヲ論定スル能ハス日
本政府ノ此件ニ躊躇猶豫ノ狀アルハ拙者ノ能ク解スル所ナ
リ
日本國タルヤ古昔ノ政體ヲ變革シ歐洲ノ法制ノミヲ引用ス
ルノ日タル尚ホ淺キカ故ニ歐洲ニ於テモ確乎不拔ノ基礎タ
ルカ爲メニハ數百年ノ星霜ヲ要セシ所ノ政體ニシテ日本人
民ノ早ク已ニ之ニ堪ユルニ足リトナスハ實ニ頗ル疑惑ヲ抱
クヲ免カレス況ンヤ歐洲中ノ大國ニテモ尚ホ未タ全ク之ヲ
存セス將タ他ハ僅カニ其半ハヲ存スルニ於テオヤ日本ニテ
ハ目下ハ道德及ヒ生活上ノ幸福ニ付キ改良ヲ加ルヲ專務ト
爲スヘク其實果シテ之ノミヲ專務ト爲セリト拙者ハ致思惟
候若シ知識ナク又ハ邪念ヲ挾ム輩ニシテ議院政府ト稱スル
モノハ斷然常ニ豐饒富殷ト其義ヲ同フスト人民ニ信用セシ

ムル所ノ論ニ服從スルヲ挽回セント欲スルトキハ政府ハ力ヲ盡シテ前記ノ目的ヲ達スルニ汲々タラサル可カラス是輩タル立憲政體ハ恰モ善良ナル果實ノ如クニシテ其熟シタルハ食料トナシテ佳ナリト雖モ其未タ熟セサルハ健康上甚タ有害ナルヲ眞ニ知ラス或ハ又之ヲ知ラサルニ假裝スルモノナリ

今玆ニ現出スル所ノ一ノ至重ノ問題ハ如何ナル手段ヲ以テ政府ハ其國庫ノ充實ナラサルトキニ於テ人民ノ幸福ハ費用增加ノ爲メニ消盡スルヲ改良シ得ヘキヤヲ知ルニアリテ爰ニ閣下ニ陳述スルノ語次殊ニ頃日中紙幣下落ノ件ヲ閣下ヨリ拙者ニ御話及アリシニ因リ左ニ少シク會計ノ事ヲ論セントス

日本國ハ其土壤タル膏腴ニシテ且格外ノ物產アリト雖モ未ダ十分ナル產出ト云フヲ得サルハ勿論ニテ將タ最モ鮮少ナリト言フモ不可ナルナカル可ク此原因ヨリシテ一旦進入セシノ后ハ更ニ迂回又ハ後退スル能ハサル所ノ新路ニ前行スルカ爲メニ必需ナル手段ヲ政府ニ給スルヲ得ス故ニ勉テ物產ヲ勸奬增殖セサル可ラサルハ固ヨリナリト雖モ此結果ヲ得ンカ爲メニハ資本ヲ必要トシ而シテ日本國ハ之ヲ有セス該國ノ長久時間四分五裂ノ際且封建ノ時ニ方リテハ節儉ノ精神タルヤ發達スル能ハサリシカ所謂資本ハ其增殖ス可キ方法ニ因リ使用スル彼ノ節儉ノ集蒐セシモノノ他ニアラサルハ皆人ノ知ル所ニシテ故ヲ以テ日本國ハ其爲セシ所ノ一大變革及ヒ一新景狀ニ對シ急需ノ爲メ其節省セシ財貨ヲ忽チニ消費シ現今ハ一般ノ疲弊ヲ被ルニ至レリ而シテ之ヲ以テ該國政府及外國人ノ過失ニ歸セリ

此ノ如キ景狀ニ在リテハ外國ノ資本ヲ日本國內ニ蒐集スルノ他ハ之ヲ療スルノ方法ヲ知ラサルナリ請フ今其方法ヲ解カン

究メテ簡單ニ且最モ直接ナル手段ハ全國ヲ外國人ニ開キ其好ム所ニ從テ居住シ動靜ニ產ヲ購求シ日本人ト同シク民權ヲ悉ク享有スルノ權利ヲ許可スルニアリ

乍去此ノ如キ建議ハ採聽ヲ得サルヤ必然ニシテコレ第一夷狄入寇ト大呼ス可キ衆庶ノ皮想ノ見ト相衝突シ第二ハ閣下ニ於ケルモ亦外國人ハ日本裁判權ニ全服スルノ約ナキトキハ之ヲ允可セス而シテ外國ハ尙ホ未タ此約ヲ承認スルノ意アラサル可ク故ニ此手段ハ實際行ハル可キモノナラス若シ然ラサルモ尙ホ早キニ失スルモノト拙者ハ致詳悉候

其他公債ヲ募ルノ方法アリト雖モ此事タルヤ若シ數回ヲ重ヌルニ至リテハ歲月ヲ經過スルニ從ヒ不利ヲ釀シ且後來ノ爲不便ヲ生スルモノナリ

拙見ニテハ外國ノ資本ヲ供用スル日本帝國一大銀行ヲ創立スルノ他アラスシテ該銀行ハ其豫備金屬ト相適スル紙幣ヲ發行スルノ權利ヲ有シ而シテ該紙幣ハ貨幣ト交換シ得ヘキモノトス付テハ可成丈他ノ銀行ニ付與セシ特典ヲ減縮ス可キハ勿論ナリ

此創立ニ付キ政府ノ得ヘキ諸利益ヲ玆ニ悉ク縷述スルハ不要ニ屬スベキナレトモ此扶援ニヨリ政府ハ礦山ヲ發掘シ目下必需ノ道路鐵路ヲ造爲シ漸ヲ以テ價格ヲ失ヒシ紙幣ヲ減消シ急需ノ便ニ供スルカ爲メ相當ノ利子ニテ金銀ヲ得可キハ明白ニシテ又此銀行ハ農民救助ノ爲メ耕農土地ニ關スル銀行即チ地所抵當貸付所ヲ創設スルヲ得ヘクシテコレ日本國ノ爲メ一大幸福タルベシ其理ハ稼穡ハ固ヨリ諸蓄ヲ輸入シ必要ノ草木ヲ蕃殖スルニ由リ日本ハ產物及ヒ其富裕ヲ眞ニ增加スヘク木棉及毛布ヲ製シ以テ英國ト競爭スルニ非ス此競爭タル日本政府ハ外國ノ織物ニ輕クモ百分ノ三十又ハ四十ノ稅ヲ課スルニ非サレハ相頡抗スル能ハスシテ而シテ若シ果シテ之ヲ做シ得ルモ其實如何ナル利益ノアリヤ二三ノ製造家ヲ富マスカ爲メニ彼憫然ナル日本消費者即チ國中衆庶ヨリ此差ヲ出サヽルヲ得ス故ニ全國ヨリ論スレハ一ノ利益ニ非スシテ眞正ノ損失トス拙者ハ元來英人ニ非ス伊國ハ日本ニ木棉ヲ賣與スルノ國ニアラス因テ拙者ノ論ハ眞ニ公平ト言フ可キナリ

此美麗ナル邦國ヲ親愛スルヨリシテ不覺此ノ如ク冗長ナル餘論ニ涉リシハ幸ヒニ願クハ閣下ノ宥恕アラン事ヲ拙者ハ之ヨリ轉シテ當初ノ條約改正ノ問題ニ復歸セントス

閣下ヨリ御協議ノ現行裁判法ノ改正ヲ得ヘシト拙者ハ思惟セサル所ノ眞正ノ理由ヲ已ニ陳述セシニ付閣下ヨリ御送致ノ意見書中ニ正理ニ據テ揭示セラレシ弊害ニ對シテハ更ニ爲ス可キノ方ナク實ニ施ス可キ良劑ノアラサルヤノ問題アランニハ拙者ハ敢テコレナシト思考セサルナリ

諸外國ハ閣下ト同シク日本國開港場ノ目下ノ景狀タル未タ完全ナラスシテ警察、港內及ヒ檢疫諸規則等ノ如キ缺漏不存ノモノハ之カ爲メ方法ヲ設置スルヲ必要ナリト認ムルノ意アリト拙者ハ思惟シ而シテ若シ閣下ヨリ協議アリシ手段ヲ允諾ス可キモノト認メザルトキハ定メテ外國ヨリ他ノ手

コレ乃チ閣下ニ陳セント約セシ所ノモノニシテ若シ夫レ爰ニ記載セシ意見ノ閣下ノ意ニ適セス又閣下ト其趣ヲ異ニスルアルモ其實正且公平ナルハ閣下ノ完察アラン事ト致期望候敬具

箱根ニ於テ　千八百八十一年八月

バルボラニー

外務卿　井上　馨閣下

栗木貞次郎(譯)

註　1「以下原文ニ依レハ『スルノミニシテ拙者ハ抽象的理論ヲ試ミムトスル外アルコトナシ勿論祀火ヲ日本ニ開キタルEuropeen及米國人ノ側ニ權利アリトスルニ在リ』ト云フニ在リ

2「所有」ハ今ノ譯例ニ依レハ「既得」ナリ

（右原文）

伊國公使意見書原文（佛文）

Hakone le Août 1880

Très confidentielle
et particulière

Monsieur le Ministre

J'étais dans l'attente de voir Votre Excellence à Hakone, ainsi que vous me l'aviez fait espérer à notre dernière entrevue à Tokio, et j'aurais saisi avec empressement une si belle occasion pour vous entretenir verbalment sur les projets de Traités que vous nous avez communiqués pour vous faire connaitre ce que j'en pense. Malheusement je vois dans les journaux que vous avez changé d'idée et vous vous étiez rendu à Ikao et je crois que cette fois-ci ils disent vrai. Je prends donc le parti de vous écrire.

Je n'ai pas besoin de déclarer tout d'abord à V. E. que je ne ferai qu'exprimer ma manière de voir tout à fait *personnelle,* sans entendre préjuger d'aucune façon les décisions que le gouvernment de Roi croira devoir prendre lorsqu' il aura sous les yeux les projets que je n'ai pas manqué de lui transmettre. Ce n'est pas donc en ma qualité de Ministre d'Italie que je vous parlerai, mais comme un ami sincère et dévoué du Japon, que j'ai appris à connaître et à estimer pendant mon long séjours ici.

Les deux questions principales que soulévent vos projets sont celles relatives à la juridiction et un changement de tarif. Tout le reste n'a qu'une importance secondaire. C'est de ces deux questions donc que je vous parlerai.

Si vous rappelez des entretiens que j'ai eu l'honneur d'avoir avec vous lorsque nous avons discuté ensemble mon projet pour un nouveau Traité à conclure entre le Japon et l'Italie, je vous ai toujours dit qu'à mon avis le Japon n'obtiendrait des puissances étrangères pour le moment du moins, aucun changement dans l'état actuel des choses quant à la juridiction exceptionnelle dont jouissent les étrangers dans les ports ouverts d'après les traités.

A présent, si vous me permettez de vous parler franchement et à coeur ouvert je vous en dirai la raison *veritable.*

Quant on vous dit que le Japon n'a pas encore un Code de lois ; qu'il ne possède pas et ne possédera de long temps des Magistrats éclairés, compétents et impartiaux pour appliquer les lois ; que sa police est tracassière surtout envers les

段ヲ述フ可クシテコレ此書翰ノ初メニ於テ拙者ノ說示セシ緊密ナクシテ同一ノ目的ニ達シ且加ルニ定メテ效ヲ奏シ得可キモノナリ

雙方協議ノ稱ヲ付ス可ク且通商航海條約ノ一部ヲ爲セル稅目ニ付テハ御商議アリシ稅額タル實ニ頗ル輕キカ故ニ概シテ佳評ヲ得シト閣下ニ具申スルハ滿足ノ至リニテ只恨ラクハ日本政府ノ意ニ從ヒ單ニ六箇月前預メ通知シ以テ之ヲ變換スルノ便益ヲ貴政府ニ保有セシメントノ閣下ノ希望アルニ拘ハラス之ヲ變更シ普通稅則ニ於ルモ亦同一ナリト言フヲ得サルヲ尤モ此ノ如キ方法ハ營業上確定ノ質ヲ缺キ殊ニ遷隔ノ距離ヨリシテ商法上ニ發ス可キ際ノ外已ニ閣下ニ陳述セシ眞正ノ理由タルル所ノ目下現今ノ輿論ノ爲メ每時稅目ヲ變換スルニ付キ完全ナル自由ヲ閣下ニ付與スルハ承諾セサル可クシテ日本國ノ爲メニ圖ラントハ（爰ニ陳スル所ノモノハ全ク拙者一個ノ意見ナリ）他言ヲ須キス單ニ現行條約ニ據リ百分ノ五ト決定セシ最高稅額ヲ百分ノ十ニ昂貴セント請求スルハ最モ簡一ナラサルヤ、拙見ニテハ此方法タル外國商モ之ニ堪ヘ得ヘク日本商敎者ニモ亦過度ニ重加スルニ非スシテ帝國ノ爲メ歲入ヲ增加スヘキモノナリ

étrangers etc. etc. etc. il peut y avoir du vrai dans toutes ces objections, mais toute la vérité n'est pas là. L'objection capitale on vous la cache dans les rapports et dans les notes officielles de crainte de choquer votre amour propre. Permettezmoi en ami de vous l'exposer.

Parmi les puissance européennes, depuis les temps les plus reculés, l'*exclusion des étrangers* n'a jamais été érigée en système par aucun government regulier. La supposition même qu'en Etat en Europe veuille rompre toute relation commerciale et politique avec les autres n'est pas admissible. C'est par le commerce que la Grèce ancienne, que Carthage, que l'Empire Romain ont grandi ; c'est par le commerce que les grandes richesses des états modernes se sont développées. Ce que je dis de l'Europe s'applique également à l'Amerique qui n'est qu'une création, une dérivation de l'Europe.

Pour le Japon les choses se sont passées d'une manière toute différente. Je n'ai pas besoin de rappeler ici que c'est seulement par la force qu'on a pu obtenir l'ouverture de quelques ports au commerce étranger. Fier de sa civilisation à lui, fidéle à ses anciennes et glorieuses traditions, le Japon a résisté jusqu'au bout et n'a cédé qu'à la violence. Veuillez bien noter que je ne cherche nullement à justifier cet acte de violence ; j'adments même volontiers qu'en théorie abstraite. Le droit n'était certainement pas du côté des Européens et des Americans qui ont ouvert le Japon à coups de canon.

Mais une fois que les puissances étrangères s'étaient décidées à avoir recours à cette extrémité elles auraient été bien imprévoyantes, il faut en convenir, si elles n'avaient pas pris les précautions nécessaire pour rendre impossible tout retour à l'ancien état de chose. Or ces precautions, ces garanties pour mieux dire qu'elles ont jugé indispensables pour atteindre ce but sont justement 1.) l'exterritorialité des étrangers dans les limites des concessions ; 2) la fixité du tarif à un taux convenu et modique.

Et en effet, supposons pour un moment que cet deux garanties n'existent pas. Qu'arriverait-il ?

Aussi long temps que le Japon serait gouverné par des Ministres sages et éclairés, comme les Ministres actuels, il est possible que les inconvénients ne seraient pas très grands, quoique des froissements, malgré toute leur bonne volonté, ne manqueraient pas de se produire.

Mais le danger serait bien autrement grave, si un parti rétrograde arrivait au pouvoir ; et cette supposition n'est pas improbable, surtout si l'Empereur se décidait à doter le Japon du système représentatif. Un tel parti venant au pouvoir, il est bien clair que son premier acte serait de tâcher de se débarasser des étrangers par tous les moyens possibles et imaginables.

Tout en ayant d'air de rester fidéle à la *lettre* de Traités, il ferait par ses juges, par ses employés, par sa police principalement, persécuter, harasser, taquiner les étrangers au point de leur rendre le séjour au Japon insupportable. Quant au commerce étranger il lui serait trés facile de le annihiler d'un seul coup ; il n'aurait qu'à frapper les importations d'un droit de 100 ou 200 % et toutes les maisons étrangères établies à Yokohama et à Kobe devraient fermer leur comptoirs. Si en Europe ou en Amerique un gouvernement s'avisait de prendre des mesures pareilles, on dirait qu'il veut se suicider. Mais au Japon, dans l'état actuel de l'opinion publique, on applaudirait au contraire et on répondrait—Nous avons vécu et bien vécu des milliers d'années sans les étrangers et sans le commerce ; pourquoi donc ne pourrions-nous pas nous en passer encore ?

J'ai parlé de l'opinion publique et en effet il faut bien la prendre en sérieuse considération. Vous devez convenir, mon cher Ministre, qu'elle est toute hostile à l'élément étranger et cela s'explique facilement. L'ouverture du Japon a coincidé avec une révolution formidable qui a changé en peu d'années de fond en comble toute l'ancienne organisation sociale et politique du Japon. Dans ce travail elle a heurté de front beaucoup d'interêts, lésé bien des droits acquis et engendré une foule de mécontants et de déclassés. Les masses qui auraient dû par ces changements gagner en bien-

être ont vu ce bien-être arrêté, enragé par les besoins excessifs d'argent qu'a eu le Gouvernement, qui, ayant tout à créer dans la nouvelle voie où il était entré, a été obligé d'aggraver la main sur le peuple en élevant les impôts. Rien de plus facile donc aux démagogues de la presse d'insinuer dans le public l'idée absurde que tous les maux dont on souffre sont causés par la présence des étrangers, qui font des gains illicites au détriment des Japanais et exportent du pays tout son or et son argent.

Je sais très bien que ni vous ni vos collégue partagent cette opinion, car vous n'ignorez pas qu'il y a d'autres puissants Empires en Europe, qui sous le rapport du manque du numéraire se trouvent a peu près dans le même état que le Japon et qu'ils sont bien loins de vouloir en attribuer la cause au commerce étranger. La science économique moderne a fait justice de la vieille et fausse doctrine de la *Balance commerciale* entre les importations et les exportations. Les messieurs qui jettent les hauts cris en voyant qu'à la fin de l'année les importations dans le port de Yokohama

dépassent d'un ou deux millions les exportations, seraient bien surpris d'apprendre que depuis long temps en Angleterre le chiffre des importations dépasse celui des exportations de 200 à 300 millions par an. Si la théorie de la Balance commerciale était vrai il faudrait tirer de ce fait la conclusion que l'Angleterre est 200 ou 300 fois plus pauvre que le Japon.

Il est bien regrettable que des gens qui n'ont pas une instruction suffisante ou bien sont animés de mauvaises intentions répandent dans les masses par la voie des journaux des théories malsaines et pernicieuses au dernier point. Ils ne font que prêcher du matin au soir que tous les maux dont elles souffrent leur vient du commerce étranger. Quoi de plus naturel que les masses ignorantes les prennent au mot, et voyant que malgré leur déclamations les choses ne changent pas demandent comme remède unique et suprême un changement dans le forme du gouvernement.

La liberté de la presse est un pouvoir bienfaisant, c'est une des plus grandes conquêtes de la civilisation moderne, mais il peut devenir extrêmement dangereux dans un pays qui n'est pas doté en même temps d'un système représentatif. En effet lorsqu'il est seul et n'a pas de contrepoids dans les chambres et dans toutes les autres garanties inhérentes à un gouvernement constitutionnel, il tend comme tout autre pouvoir irresponsable à devenir exorbitant et tyrannique. Le gouvernement parlementaire est un gouvernement de partis ; il y a donc toujours une presse du parti qui est au pouvoir et une presse d'opposition. L'une sert de correctif à l'autre et le public entend le pour et le contre.

Mais ici au Japon le gouvernement est tout-à-fait désarmé devant la presse. S'il a recours aux amendes ou à la prison, il y a bien peu de monde qui l'approuvera ; la majorité dira que ce sont des actes de violence et des abus de pouvoir. Il ne resterait au gouvernement qu'à se faire lui aussi journaliste, et même alors la partie ne serait pas égale. Pourtant je crois, permettez moi de le dire, que le gouvernement aurait pu faire quelque chose de plus pour éclairer et mieux conduire l'opinion publique, tandis qu'à présent il est bien souvent obligé de se mettre à sa remorque.

Je ne voudrais pas, Mr. le Ministre, que de ce que je viens de dire à propos de la presse, vous tiriez la conséquence que je conseillerais l'introduction du système parlementaire au Japon. C'est une question celle-ci bien délicate sur la quelle j'hésiterai à me prononcer ; je trouve donc parfaitement justifiées les hésitations du gouvernement a son égard.

Le Japon ayant renoncé à son ancienne forme politique, et n'ayant adopté que depuis peu d'années seulement l'organisation européennes il est très douteux en effet que le peuple Japonais puisse être déjà mûr pour supporter en régime qu'il a fallu des siècles et des siècles pour qu'il prenne racine en Europe ; et là-même il y a un grand Etat où il n'existe pas encore et d'autres où il n'existe qu'à moitié.

Je crois que le Japon ne devrait aspirer pour le moment et n'aspire au fond qu'à une amélioration

de son bien-être moral et materiel ; et c'est à obtenir ce but que devraient tendre à mon avis, tous les efforts du gouvernement s'il veut détourner les masses de suivre les conseils de gens ignorants ou de mauvaise foi, qui leur font croire que gouvernement parlementaire est forcément et toujours synonime d'abondance et de richesse. Ces gens-là ne savent pas ou font semblant d'ignorer que le gouvernement constitutionnel est comme un bon fruit, qui fait beaucoup de bien lorsqu'il est mûr, mais dont la nourriture, quant il est encore acerbe, est très nuisible à la santé.

Mais ici il se présente une question capitale celle de savoir par quels moyens le gouvernement pourra suffire à la tâche d'améliorer le bien être public, qui se résout en un surcroit de dépenses lorsque le trésor Impérial n'est pas bien fourni. Puisque je suis en train de bavarder avec vous, et puisqu'un jour vous m'avez fait l'honneur de me demander mon opinion sur les causes de la baisse des *satz* permettez que je vous parle aussi un peu finance.

Il est clair que le Japon malgré la grande fertilité

et la richesse exceptionnelle de son sol ne produit pas assez, on peut même dire qu'il produit très-peu et n'est pas en état par conséquent de fournir au gouvernement les moyens qui lui sont nécessaires pour marcher dans la nouvelle voie dans laquelle il est entré et dont il lui serait impossible désormais de se détourner ou de reculer. Il faut donc qu'il tâche de stimuler et d'accroître la production. Mais pour obtenir ce résultat il faut des capitaux et le Japon n'en a pas. L'esprit d'épargne pendant sa longue période de ségrégation et sous le régime féodal ne pourrait pas s'y développer, et tout le monde sait que le capital n'est que l'épargne accumulée qu'on emploie d'une manière reproductive. Ainsi il est arrivé que le Japon, devant une transformation si radicale qu'on lui a fait subir et les besoins si pressants de la nouvelle situation a bien vite épuisé ses ressources économiques et souffre à présent d'un malaise général dont il attribue la faute au gouvernement et aux étrangers.

Je ne vois d'autres remèdes à cette situation qu'en cherchant d'attirer dans le Japon les capitaux étrangers. Mais de quelle manière ?

Le moyen le plus simple et le plus direct serait l'ouveture du pays entier aux étrangers, la faculté accordée à ceux-ci de s'établir partout où ils voudraient, d'acquérir des biens meubles et immeubles, d'y jouir enfin de tous les droits civils à l'instar des Japonais.

Mais je sais très-bien qu'une telle proposition n'a aucune chance d'être acceptée. D'abord elle heurter ait trop de front les préjugés des masses qui crieraient à l'*invasion des barbares* et ensuite vous ne voudriez jamais l'accorder sans la condition que les étrangers se soumettent tous à la juridiction japonaise, et il est bien probable que les puissances ne seraient pas encore disposées à admettre cette clause. Je reconnais donc que pour le moment ce moyen est impraticable ou tout au moins prématuré.

On pourrait bien recourir à des emprunts, mais les emprunts quand ils se multiplient deviennent onéreux à la longue et engagent trop l'avenir.

Il n'y aurait, selon moi, qu'à avoir recours à la fondation d'une grande Banque Impériale Japonaise, avec des capitaux étrangers, qui aît droit d'emission de papier en rapport avec sa réserve métallique ; et ce papier devrait être convertible en argent. Il faudrait naturellement restreindre autant que possible les privilèges accordés aux autres banques.

Je n'ai pas besoin de développer ici tous les avantages que le gouvernement pourrait retirer d'une institution pareille. Il est clair qu'avec son aide le gouvernement pourrait exploiter les mines, faire les routes et les chemins de fer indispensables, retirer peu à peu le papier déprécié et avoir à un taux raisonnable de l'argent pour les besoins pressants. Cette Banque pourrait fonder aussi une Banque agraire ou crédit foncier pour venir au secours des agriculteurs, ce qui serait le plus grand bonheur pour le Japon, car c'est par l'agriculture surtout, par l'introduction du bétail et par la propagation des plantes utiles que le Japon pourra augmenter sérieusement sa production et sa richesse et non pas en luttant avec l'Angleterre pour fabri-

quer des tissus de coton et de laine. C'est une lutte qu'il ne pourrait soutenir que si le gouvernement pouvait frapper d'au moins 30 ou 40 % le tissus étrangers. Et même en ce cas quel en serait l'avantage? C'est le pauvre consommateur japonais c'est à dire la grande masse de la nation, qui devrait payer la différence pour faire enrichir quelques industriels. Pour le pays en général ce ne serait pas un bénéfice mais une perte réelles. Je ne suis pas Anglais, mon pays ne vend pas les cotonnades au Japon, ainsi mon jugement est tout-à-fait impartial.

Mais je vous demande bien pardon, Mr. le Ministre, de cette longue digression à laquelle j'ai été poussé seulment par l'intérêt que je porte à ce beau pays, et il est temps que je revienne à mon point de départ, à la question de la révision des traités.

J'ai eu l'honneur de vous exposer les véritables motifs pour lesquels je ne crois pas que vous obtiendrez les changements que vous proposez au système juridictionnel en vigueur. Est-ce à dire pour

cela qu'il n'y ait rien à faire et qu'il n'y aurait aucun remède à apporter aux inconvénients que vous signalez si justement dans vos *obse vations?* Je ne le pense pas non plus.

Je suis d'avis que toutes les puissances sont disposées à reconnaître avec vous que l'état actuel des choses dans les ports ouverts, du Japon laisse beaucoup à désirer; que le manque des Réglements de police, de port, de quarantines etc. etc. exige qu'on prenne des mesures à cet égard, et si elles ne trouvent pas acceptable le moyen que vous proposez, elles vous en proposeront probablement d'autres, qui sans avoir les inconvénients que je vous ai signalé au commencement de cettre lettre, pourront atteindre le même but et avec plus d'efficacité encore.

Quant au tarif, que nous-pouvons appeler conventionnel et qui ferait partie intégrante du Traité de commerce et de navigation je me plais à vous dire qu'il a fait en général une bonne impression, l'élevation des droits que vous proposez étant en effet assez modérée. Je regrette de ne pouvoir pas en dire autant du *Tarif général* pour lequel vous

voudriez réserver au Gouvernement Impérial la faculté de le changer à sa guise moyennant seulement un avis préalable de six mois. A part les inconvénients qu'une telle mesure apporterait au commerce à cause surtout des grandes distances et de l'incertitude dans les opérations, je vous ai déjà dit la véritable raison pour laquelle, vu l'état présent de l'opinion publique au Japon, ou se refusera à vous donner liberté entière de remanier à chaque instant une partie du tarif. Ne serait-il pas plus simple pour le Japon (c'est une opinion toute personnelle que je prends la liberté d'émettre ici) de demander tout bonnement que le *maximum* des droits qui par les Traités existants est fixé à 5 % soit élevé à 10 %? Ce serait, à mon avis, une mesure que le commerce étranger pourrait supporter, qui ne péserait pas beaucoup sur le consommateur Japonais, et qui ferait doubler les recettes des douanes à l'avantage du Trésor Impérial.

Voilà, Mr. le Ministre, ce que j'avais à vous dire en remplissant ma promesse. Il est possible que tous les jugements que j'ai formulé ne soient pas

de votre goût ni selons vos idées, mais vous leur reconnaîtrez au moins, je l'espère, le mérite de la sincérité et de l'impartialité.

Veuillez, Excellence, agréer l'assurance renouvelée de ma considération la plus haute.

Barbolani

A son Excellence
Mr. Inouye Kaoru
Ministre des Affaires Etrangères
&c. &c. &c.
Tokio.

三四　明治十三年十月八日　在非歐米各帝國公使ヨリ

條約改正ニ關スル參考書類送付ノ件

英ヲ除キ
在歐米各國我公使ヘ別通信　「佛」第十七號　露十三號　獨十六號
　　第十一號　伊　五號　墨　九號
　　米第一號

「明治十三年往別信合案八號」

十月八日發

條約改正ニ關スル書類今般別紙目錄ノ通改正ノ分及ヒ新規

出來之分共取揃ヘ差進候條御收手有之度候也

明治十三年十月

別紙

目錄

一　横濱港則　改正ノ分

一　明治八九十三箇年度平均元價十萬圓以上物品表　改正ノ分

一　現行擬定兩稅目收稅額比較表　新規出來ノ分

一　英米兩國收稅額比較表　同

一　修好條約幷附錄覺書草案叙言及特別註解

和文譯出來ノ分

註　目錄ノ書類ハ浩瀚ニ亙ルヲ以テ省略ス、尙同日附森公使宛書類**一九九**文書參照

三五　明治十年十月二十一日　井上外務卿ヨリ三條太政大臣宛

外國人內地雜居ノ儀ニ付上申ノ件

附屬書　內地雜居ニ關スルデニソン意見書

在佛國特命全權公使鮫島尙信ヨリ外國人內地雜居ノ儀ニ付

別紙[1]ノ通申來候依テ其利益ヲ熟考候處若シ全ク治外法權ノ制限ヲ廢シ我內地ニ居住スルヲ願フノ外國人ハ一ニ我法律ニ服從スルニ於テハ此等ノ外國人ニ限リ內地雜居ヲ許可スルハ我ニ取テ敢テ妨ケ無之義ト存候尤愈外人內地雜居ノ事ヲ許可スルニ至レハ外人歸化ノ法等夫々精細適當ノ條規法則ヲ立テ之ヲ許可施行スヘキハ勿論ニ候得共大體我國內何地タルヲ論セス全ク我法律ニ服從スヘシトノ事ヲ承認シ歐米諸國同樣ノ例規ニ從テ內地雜居ヲ請求スルノ國アラハ斯ノ如キ國民ニハ之ヲ許可スヘシトノ決意ヲ以テ其發議ニ應對致シ不苦候旨兼テ訓令相達置候樣致度仍テ別紙相添此段上申相伺候也

十三年十月廿一日

外務卿　井上　馨

太政大臣　三條實美殿

（以下朱書）　指令

伺ノ通但外國人內地住居ノ事ハ彼ヨリ相當ノ讓許ナクシテ輕易ニ難差許儀ニ付談判ノ際深ク彼ノ意衷ヲ察シ果シテ好機ノ在ルヲ信セハ一國擧テ我法律ニ服從スル國民ニ限リ內地住居差許スヘキ決意ヲ以テ談判不苦尤モ一人乃至數人ノ

者ノ如キハ却テ紛雜ノ處ヲ免レス因テ此分ハ難及沙汰此旨可及內達事

明治十三年十二月廿六日　太政大臣三條實美印

註　1 二七四文書十三年四月一日附鮫島公使來翰參照

附屬書

十三年八月廿五日附デニソン意見書

內地雜居幷ニ通商ヲ外國人ニ許ス事

本題ハ芳川少輔閣下ヨリ拙者ニ諮問アリタルニ由テ左ニ鄙見ヲ開申ス

蓋シ鮫島全權公使閣下以謂ラク佛國政府ト協議結約ノ上日本內地ノ旅行、通商、居住ノ權利ヲ擴張セン事ヲ謀ルハ今日復タ成シ難キ事ニ非サルヘシト乃チ閣下（芳川）因テ辱ナク拙者ニ下問シ如何ナル約束制限ヲ以テ右權利ヲ外人ニ讓與スレハ國家ニ害ナキヤ又此讓與ヲ爲スニ其程度ノ極果シテ若何ナル乎現時日本ノ諸外國ト交際スル實況ニ關シテ拙者ノ意見ヲ陳述セシメラレタリ

夫レ本題ノ今日皇國ニ最大緊要ナル所以ハ則チ他ナシ苟モ斯ノ約定ヲシテ成就セシメハ其關係スル所ハ獨リ佛蘭西トノ交際ヲ一變スル而止ナラス其他ノ外國ニ在テモ亦擧ナ應

サニ相率ヒテ要求ヲ提出シ夫ノ諸條約中ニ記載セル懇親ナル國云々ノ句ニ據テ佛國同樣ノ免許ヲ乞フニ至ルヘケレハナリ

凡ソ締盟諸國ハ固ニ斯ク某一國ニ讓與シクル諸免許ヲ同樣享受スルノ權理アリト云フト雖モ此免許ノ讓與ニ對シテ約束制限アルカ故ニ先ツ其規約ヲ承認シ而ル后チ始テ當ニ免許ヲ享受スヘキ事是レ理ノ明白ナルモノナリ爰ニ於テ日本政府ハ一ノ外國ト免許讓與ノ約定ヲ爲スニ臨ミ他ノ諸國モ亦タ其規約ヲ承諾シテ同樣免許ヲ要求ゼハ則チ齊シク之ヲ讓與スルニ及フハ自然免レ難キ所ナルヘシ

抑モ當政府カ其從來外國ニ讓付シタル諸權利ヲ回復スルニ一日片時ヲ愛シム事ハ拙者窃ニ察了スル所ナルカ故ニ鄙見ニ於テハ則チ以爲ラク苟モ彼ニ在テ亦同シク其現今執行スル治外法權ヲ相當我ニ讓付シ以テ報酬スルニ非スンハ如何ナル事情ニ拘ハラス我ヨリ此上更ニ彼ニ讓與スル事アル可ラスト

敢テ信ス日本政府倘シ外人ニ許シ隨意ニ內地ニ旅行シ通商シ居住シ又鑛山及ヒ不動鑛物ヲ除クノ外ハ財產（動產ト靜產トヲ問ハス）ヲ所有スルノ權利ヲ付與スルモ復タ一モ危

害ノ憂ヲ抱ク容ラサルナリト

今此等ノ讓與ヲ爲スニ當リ須ラク彼ヲシテ我ニ報酬セシムル事左ノ如クナルヘシ

第一　凡ソ此免許讓與ノ故ヲ以テ外國人カ内地ニ獲ル所ノ財産及ヒ此ニ關スル諸契約ハ一切日本裁判廳ノ管轄ニ屬スヘシ

第二　都テ此財産及ヒ夫レヨリ生スル利分ハ必ス日本臣民カ同樣ノ財産ニ付キ納ムル所ト同一ノ租稅ヲ拂フヘシ

第三　凡テ右ノ免許ヲ享受スル諸人ニシテ若シ所謂開港場ノ條約里程ト稱スル域外ニ於テ借金ヲ爲スカ或ハ罪ヲ犯ストキハ則チ其借金、犯罪ニ係リ日本裁判廳獨リ之ヲ管轄スヘシ

第四　凡ソ日本領地内ニ在ル財産ニシテ右ノ免許ヲ享受スル所ノ各人ニ屬スルモノハ一切領事若クハ其他外國官吏ノ干渉ヲ受ケスシテ專ラ之ヲ日本ノ國法ニ服從セシメ即チ今般爰ニ日本裁判廳ニ付與シタル民事刑事ノ裁判ヲ施行スルニ於テ其斷定セル宣告ニ應シ或ハ之ヲ封產シ或ハ之ヲ處辨スヘシ

拙者寫カニ以謂ラク今若シ外人ヲシテ此約定ニ從ヒ日本内地ニ於テ靜產ヲ所有セシメ而シテ之ニ許スニ其靜產ヲ惠贈、讓渡、或ハ遺言ヲ以テ他人ニ交付シ又之ヲ書入レ典當スルノ權利ヲ得セシムルモ更ニ日本政府ノ爲メ有害ノ事ニ非スト、加稱、斯ノ如キ靜產ニ就キ遺言ヲ以テ讓受ケタル家督相續ノ事件ニ關シテハ其相續人ノ本籍ナル國法ヲ取リ先ツ其財產ヲ管轄スル裁判廳ニ出シ適當ノ考驗ヲ經タル上ハ該國法ニ依リ之ヲ處分スルモ差支ナカルヘシト但シ該國法ニ定ムル所ハ苟モ日本ノ政府幷ニ臣民カ其自國ノ法律ニ從ヒ一般或ハ特別ノ貸方トシテ要求スル所ノ權利ヲ決シテ奪フ可ラサルナリ

且ツ預シメ爭論紛議ノ患ヲ防カンカ爲メ日本政府ヨリ其方法ヲ設ケ内地免狀ヲ發シ以テ外人ノ内地ニ旅行シ、通商シ、居住シ及ヒ財產ヲ所有スルノ權利ヲ制裁セサルヘカラス

爰ニ熟慮ヲ要スルモノアリ卽チ苟クモ此約定ヲ成就セシメント欲セハ必ス別ニ會議ヲ開キ衆員ノ論定ヲ經ルノ一途アルノミ一人單個ノ敢テ能ク達シ得ヘキニ非サル事是レナリ

鄙見ニ於テハ清國及ヒ朝鮮ノ當政府ト締ヒタル條約中ニ該兩國ヲシテ今般我カ企圖スル内地免許ノ讓與ニ就キ他ノ外國ト倶ニ此讓與ヲ要求シ得ルノ權理ヲ存有スルモノ更ニ之レ靡シト

一千八百八十年八月廿五日

東京外務省

エッチ、ダブリユ、デニソン

白

然リト雖モ余敢テ信ス今日ニ至リ儻シ日本政府ヨリ内地開通ノ事ヲ提出セハ米國政府ノ之レカ爲メ其治外法權ヲ讓付スルヤ必セリト夫レ往年ニ在テ米國政府カ施シタル處分ハ卽チ其日本トノ交際上ニ關スル萬般ノ事ニ於テ毎ニ他ノ締盟諸邦ト協同一致セン事ヲ欲シ加之當政府ヲシテ一ノ外國ニ特殊ノ免許ヲ讓與スルニハ之カ爲メ必ス其他諸國ノ承諾ヲ得ルヲ要セシメン事ヲ望ミタル結果ナリ今ヤ則チ然ラス此論理ハ復タ以テ米國政府ノ執守シ能ハサル所ナリ以上敬

一千八百七十三年中ニモ右同樣ノ問題起リタル時歐洲締盟ノ各國カ取リタル處置ノ如キハ拙者ノ聞知セサル所ナレトモ當時ニ在テ米國政府ハ則チ蓋シ其治外法權ヲ擧テ之ヲ内國（日本）官府ニ讓付スルヲ以テ安全ナラスト爲セリ（米國外交書類第一部　一千八百七十三年　一千八百七十四年　版第三百八十二葉　又　版第六百七十葉　ヲ見ヨ）

レ靡シト

蕞ニ千八百七十三年中ニモ右同樣ノ問題起リタル時歐洲締盟ノ各國カ取リタル處置ノ如キハ拙者ノ聞知セサル所ナレトモ當時ニ在テ米國政府ハ則チ蓋シ其治外法權ヲ擧テ之ヲ内國（日本）官府ニ讓付スルヲ以テ安全ナラスト爲セリ（米國外交書類第一部　一千八百七十三年　一千八百七十四年　版第三百八十二葉　又　版第六百七十葉　ヲ見ヨ）

三六　明治十三年十一月十三日　井上外務卿ヨリ　在歐各帝國公使宛

條約改正關係書類送付ノ件

「朱書　英四十五號　佛三十四號　露二十號　在歐各公使ヘ機密信案　獨廿一號　澳十五號　伊九號　白　十三號」

「朱書　明治十三年往機密信十三號」

以機密信申進候然者新稅則案中石油稅ノ義ニ付在我米公使ヘ往復書簡幷ニ右ニ關シ在米吉田公使ヘ申達シ候書類共取纏メ爲御參考差進候扨又先般及御送附候定額稅礎ノ附言及英文譯幷ニ西洋形船舶一覽表等別紙目錄ノ通出來候ニ付及御送致候也

尙以稅關規則英文中少々字句修正致シ候處有之候ニ付爲念書拔キ差進候御參觀有之度也

目　錄

此ノ意見書太政官ヘハ出サズ只本省參考ノタメ玆ニ付ス1

註　1此ノ附記ハ十三年十月二十一日太政大臣宛上申書ニ添付セザリシモノナルコトヲ明カニセルモノナリ

一、石油稅ニ關スル米公使ト往復書類
一、定額稅礎（和文）ノ附言
一、同　英文譯
一、西洋形船舶一覽表
一、各國歲入表

註　石油稅ニ關スル書類ハ對米交涉四四二文書以下ニアリ其他ノ添付書類ハ省略ス

三七　明治十年三月十日　各非公使宛卿ヨリ

修好條約草案附屬約定書表送付ノ件

附屬書　修好條約草案附屬約定書表

各國公使ヘノ御書翰案

以書翰致啓上候然ハ去ル七月六日附ヲ以テ差進候條約改正草案中修好條約草案ノ末尾ニ記載有之候從來ノ約定書表今般別紙ノ通草案取調出來候ニ付卽チ封入差進申候御落手有之度候尙又右ハ追テ改正談判ノ際ニ至リ貴方ノ御考案ヲモ酌量シ多少添削可致積ヲ以テ取調候ニ付未タ完全ノモノニハ無之候間左樣御承知有之度候右ノ趣閣下ヨリ御申添早便

貴政府ヘ御轉送相成度此段可得貴意如斯候敬具

明治十三年十二月

「英」三十九號　米　五十號　露　二十號　佛　十九號
伊二十一號　白　十八號　獨　廿九號　國　廿四號
瑞典十二號　洩　十六號　西　十九號　丁　十五號」

十二月十六日　起章
十二月廿一日　遞濟

附屬書

十三年十二月二十一日附英公使宛往翰附屬約定書表

The
Table of Conventions
referred to
in the foregoing Treaty

(N. B. This table is, for reasons explained in a subsequent note, at present imperfect; but it is communicated as expressing correctly so far as it goes the changes considered, by the Imperial Japanese Government, to be necessarily consequent upon the provisions made in the bodies of the treaties to which it refers.)

Whereas, by the operation of the 'Favoured Nation' clause of the Treaty hitherto subsisting between the High Contracting Parties, the Government and of may have enjoyed within the territories of His Imperial Majesty sundry rights and privileges not directly granted by any Treaty or Convention between the High Contracting Parties. And whereas, by the further operation of the said clause or otherwise, the relations between the Governments and respectively of the two High Contracting Parties have, for many yeras past, and until the present time, been mutually understood to be regulated by the terms of a Treaty made between the Empire of Japan and the Austro-Hungarian Monarchy and dated 18 October 1869:

It has been determined by and between the High Contracting Parties that all the agreements, stipulations and provisions of the Conventions and other documents referred to in Part I. of this table shall, for the purpose for which they are there referred to, be deemed to be applicable to and whether named therein or not.

It is understood that where any agreement, stipulation or provision of any convention or other document, in either part of this Table referred to, conflicts with anything contained, expressly or by implication, in the foregoing Treaty or the Treaty of Commerce and Navigation of equal date or their annexes, the latter shall in all cases prevail.

Part I.

Title and date of Convention or other document.	Extent to which continued or confirmed
	So far as the matters and provisions contained in th same are neither consummated nor expired by lapse of time, nor superseded by subsequent arrangements, nor

	inconsistent with the present (draft) Treaties ;—
Treaty of Friendship, Commerce and Navigation between the Austro-Hungarian Monarchy and Empire of Japan, dated 18 October 1869.	Article III—The whole, except so far as Osaka is treated as an Open Port, and except the words "the harbour regulations shall be arranged in similar manners."
	Article IV.—The whole.
Nagasaki Land Regulations. 9 September 1860.	Article I to VI inclusive, and the first paragraph of Article VII.
Form of Certificate of Title appended to above.	The whole,—except so far as the same asserts or recognizes as absolute the disqualification of Japanese subjects to hold land in the settlement.
Second Supplement to above Regulations.	The whole.
Regulations for the Trade and Residence of foreigners at Osaka. 1 Jan. 1868.	Articles I and III.
Arrangements for sale of land at Osaka and Hiogo. 7 August 1868.	Article III—From the commencement to the words "per tsubo" inclusive. Article IV. Article V—From the commencement to the words "per tsubo" inclusive. Article IX.
Conditions of sale annexed to above Arrangements.	The whole, except Article VIII.
Form of Title Deed annexed to above Arrangements.	The whole, except the Condition therein numbered "Secondly," and except so far as the condition numbered "Thirdly" absolutely excludes by implication the right to transfer to a Japanese subject.

29 April 1862.	
Yokohama Memorandum for Race Course &c. 19 December 1864.	The whole.
Yokohama Convention for improvement of the settlement. 29 Decr. 1866.	The whole.
Arrangement for the establishment of Foreign settlements at the Port of Hiogo and at Osaka. 16 May 1867.	The whole.
Arrangements for the settlement of foreigners at Yedo. 26 Novr. 1867.	Articles I to IV inclusive. Article VI. Article XI.
Arrangements for the settlement of foreigners at Niigata and Ebisuminato. 26 Novr. 1867.	Articles VII and VIII.
Hiogo Memorandum. 8 October 1868.	The whole.
Further Arrangement relative to the Foreign settlement at Yedo. 4 May 1870.	Articles I to V. inclusive.
Conditions of sale annexed to above 'Further Arrangement.'	The whole, except so much of Article VII as refers to the provisions of Article VI of the above 'Further Arrangement.'
Form of Title Deed annexed to the above 'Further Arrangement.'	The whole, except Article II.
Agreement respecting the foreign Cemetery at Niigata. 26 Aug. 1870.	The whole.
Title Deeds for foreign Cemeteries at the Port of	The whole.

Hakodate. 5 Decr. 1870.

Agreement or Title Deed for the lot of land in foreign settlement at Hiogo, known as the cremation ground. 12 April 1872.

The whole, except so far as the same relates to Municipal buildings and Board.

(Sundry other Conventions, arrangements &c relating to land not printed in the official Collection of 'Treaties and Conventions' between Japan and Foreign Nations, to be subsequently introduced.)

Note. This table is (unless by inadvertence) complete as regards Conventions &c contained in the 'Collection' here referred to. Other documents not so contained it is incon- venient for sundry reasons to introduce into the table in this Draft. Such additious may be appropriately made in the course of actual negotia- tion upon the proposals formulated in the draft Treaties themselves.

All existing Title Deeds to land in the Ports or Cities of Japan open to foreign residence, granted by authority of the Imperial Japanese Government.

All.

Part II.

(This part will be different in the case of each of the Powers, containing, as it will, only such Treaties and Conventions as subsist between Japan and any one of the Powers exclusively, and are not affected by the Favoured Nation Clauses in other Treaties; as, for instance, Special Postal Conventions &c &c)

三八　明治十三年十二月二十三日乃至二十四日　井上外務卿ヨリ往ク

約定書表領收ノ件

一　英國代理公使來翰

本月廿一日御認ニ相成候貴翰拜誦仕候大不列顛日本ノ間ニ可取結修好條約草案第三條ニ關スル約定書總表ノ謄寫落手拜見致候陳ハ閣下御申越ニ隨ヒ該總表ハ幸便次第本國政府ニ遞送可致且ツ其砌右ハ完備結了ノ書類トシテ御廻送被下候譯ニハ無之條約改正商議ノ基礎及ヒ商議中本國政府ノ考案ニ備フヘキモノニ有之候旨通知可致候敬具

千八百八十年十二月廿三日

英國代理公使

ゼー、ジー、ケネデー

外務卿　井上　馨閣下

（右譯文）

Yedo

December 23, 1880.

Sir,

I have the honour to acknowledge the receipt of Your Excellency's note of the 21st instant, enclosing two copies of the Draft Table of Conventions referred to in the 3rd Article of the Draft Treaty of Friendship between Great Britain and Japan.

In compliance with Your Excellency's request I shall transmit this Table to Her Majesty's Government by the first opportunity and at the same time point out that this Table of Conventions has not been communicated as a final and complete document, but as a basis of negotiation and for the consideration of Her Majesty's Government during the negotiations for the Revision of the Treaties between Great Britain and Japan.

I avail myself of this opportunity to renew to Your Excellency the assurance of my highest consideration.

J. G. Kennedy.

His Excellency

Inouye' Kaoru

Minister for Foreign Affairs.

二　佛國公使來翰

一二月二十六日發

以書簡致啓上候然者閣下ヨリ御送致相成候改正條約追加草案正ニ落手則チ今朝佛國く向ケ出帆ノ郵船ヲ以テ原文幷ニ英語譯文共我國政府へ及轉送候敬具

千八百八十年十二月二十六日

於東京

ロ ケ ッ ト

外務卿 井上 馨閣下

（右原文）

Tokio, le 26 Décembre 1880,

Monsieur le Ministre,

J'ai reçu le projet additionnel au Traité de Révision que vous m'avez adressé. Je me suis empressé de transmettre à mon Gouvernement, par la malle partie pour France ce matin, le texte de ce document ainsi que la Traduction anglaise qui l'accompagnait.

Veuillez agreer, Monsieur le Ministre, les assurances de ma haute considération.

Roquette

Son Excellence

Monsieur Inouyé,

Ministre des Affaires Etrangères

&c. &c. &c.

三 獨逸公使來翰

以書翰致啓上候然者本月廿一日附ヲ以テ御送付相成候條約改正案第八號中約書表共被添正ニ落手則チ我政府へ廻送可及候敬具

千八百八十年十二月廿八日

於東京

アイゼンデッヘル

外務卿 井上 馨閣下

（右原文）

Tokio den 28. Dezember 1880.

No. 44/418

Euerer Excellenz beehre ich mich den Empfang des geneigten Schreibens vom 21. d. Mts., mit welchem Sie mir das am Schluss des Artikel 8 des neuen Vertrags-Entwurfes erwähnten Verzeichniss der bisherigen Konventionen übersandten, mit dem ganz ergebensten Bemerken zu bestätigen, dass ich nicht verfehlen werde, dasselbe meiner hohen Regierung demnächst vorzulegen.

Genehmigen Euere Excellenz die Versicherung meiner verzüglichsten Hochachtung.

v. Eisendecher,

An

den Minister der Auswärtigen Angelegenheiten

Herrn Inouye Kaoru

Excellenz.

四 墺洪國公使來翰

以書簡致啓上候陳者過ル七月六日付ヲ以テ御通知及置候條約改正草案ノ儀ニ付本月廿一日英文日本文共被添御申越ノ旨委細承知候條我國政府ヘ報道可致候敬具

千八百八十年十二月廿九日

ホ ッ フ キ ン フ ヒ ル ス

外務卿 井上 馨閣下

（右原文）

Tokio, den 29 December 1880.

Euer Excellenz.

Ich habe die Ehre den Empfang der Note vom 21. d. M. nebst Bielagen in englischem und japanischem Idiome zu bestätigen, welche bestimmt sind den unter dem 6. Juli gefälligst mitgetheilten Vertragsentwürfe zur Vervollständigung zu dienen.

Ich werde nicht verfehlen, auch die gegenwärtige gefällige Mitheilung Euer Excellenz zur Kenntniss meiner hohen Regierung zu bringen und benutze noch diesen Anlass, um Euer Excellenz die Versicherung meiner ausgezeichnetsten Hochachtung zu erneuern.

Hoffer von Hoffenfels.

Sr. Excellenz

Herrn Inouyé Kaoru

Kaiserlich japanischem Minister der Auswärtigen Angelegenheitn, &c. &c. &c.

三九 明治十三年十二月廿五日 在非外務卿ヨリ在英帝國公使宛

本條約關係ノ約定書送付ノ件

〔第六十一號〕

在英特命全權公使 森 有禮殿 外務卿 非上馨

「朱書第三十七號」　在獨特命全權公使　青木周藏殿　外務卿　井上　馨
「朱書第四十三號」　在露特命全權公使　柳原前光殿　同　上
「朱書第四十七號」　在墺特命全權公使　井田　讓殿　同　上
「朱書第四十三號」　在伊特命全權公使　鍋島直大殿　同　上
「朱書第廿號」　在蘭特命全權公使　長岡護美殿　同　上
「朱書第四十七號」　在米特命全權公使　吉田清成殿　同　上

先般及御交付候修好條約草案附屬約定書表（英文）ノ原文二通今般差進候條御了收有之度候將又該書表ノ義ハ去ル二十一日本地駐劄ノ各國公使ヘ交付シ各其政府ヘ轉送爲致候義ニ有之候條此段爲御心得併セテ申進候也

註　1約定書表（英文）ハ前揭三七附屬書參照
2宛先ニ在佛公使ナキハ同月四日鮫島公使任所ニ於テ發去ノ爲ナルヘシ

四〇　明治十四年三月十六日　森駐英公使ヨリ井上外務卿宛（電信）

英國政府ノ條約改正ニ關スル意見書各國政府ヘ送付ノ件

森　公使

井上外務卿宛

英國政府改正ノ意見書ヲ各國政府ヘ回送ノ答ナレトモ我ニ送致スヘキヤ否ヤ相分不申云々

註　電信原文綴込ナシ

四一　明治十四年四月一日　上野外務卿代理ヨリ在外各帝國公使宛（青木公使ヲ除ク）

條約改正談判方針ニ付訓令ノ件

條約改正一件ニ關シ過般別紙ノ通リ青木公使ヘ申遣シ候間則爲御照知右寫差遣候條御收手有之度候也

「朱書英四號　佛二號　露四號　澳二號　伊壹號　蘭壹號　米四號

外務卿代理
外務大輔　上野景範

註　1青木公使ヘ機密信寫略ス

十四年三月十五日附上野外務卿代理ヨリ青木公使宛機密信第二號條約改正談判方針ニ付訓令ナルニツキ三四八文書參照
2青木公使密信附屬
森公使ヘノ密信寫
十四年四月一日附上野外務卿代理ヨリ森公使宛機密信第三號訓令ナルニツキ二〇九參看
3青木公使密信附屬
在英公使館雇レーン氏ト英外務大輔ポンスフヲルト氏トノ對話書寫略ス
十三年十一月二十四日ノ會談要領ナルニツキ二〇七文書附屬書參看

四二　明治十四年四月十四日　長岡駐蘭公使ヨリ井上外務卿宛

條約改正ニ關シ和蘭國外務卿ト會談ノ件

附屬書一　十四年三月三十日長岡公使和蘭國外務卿對談要領一
二　同　四月二日對談要領二
三　同　四月四日對談要領三
四　同　四月九日對談要領四

十四年機密第拾貳號

我國條約重修ノ義ハ目下緊要ノ一問題ニシテ歐洲ニ於テモ批評百出頻リニ其當否ヲ論シ居候得共各政府ニ於テハ互ニ其擧動ヲ窺ヒ居候ノミニテ更ニ確乎タル方向ニ不相立樣見受居候處過般英政府ヨリ傳徼ヲ發シ候後頓ニ方向相附キ候義ト相見候既ニ白耳義ニ於テハ先信第拾壹號ヲ以テ開陳仕リ候通同政府現今ノ見込ハ粗ホ其要ヲ示シ其後蘭政府ノ見込モ推察候處別紙對話趣意書（甲號ヨリ丁號迄）ノ通ニ有之枝葉ニ至リテハ多少彼此相違ノ點無之ニシモアラスト雖モ我新草案ヲ耳受セサルノ大本ニ於テハ孰レモ一轍ニ歸宿候樣被相考候是全ク或ル大國ノアルアリテ意ヲ其間ニ介スルノ然ラシムル所トハ乍申夫レカ爲メ我政府發議ノ草案ヲ耳受セラレサルハ如何ニモ遺憾ノ至ニ有之候
乍去蘭政府ノ義ハ對話趣意書ニ於テモ御承知ノ通其趣意稍ヤ穩當ニシテ殊ニ今回外國ノ協議ニ於テモ斷然中立ヲ保持シ愈實施ノ時ニ到リ候ハヾ夫々招介周旋モ致スヘキ趣ニ候得共愈委員ヲ派遣シ商議ノ節ニ立到不申候半テハ其雌雄ハ判定難致候得共兎ニ角我國ノ爲メ頗ル便宜ヲ謀リ候主義ト致信用候右不取敢及內陳候條詳細ハ別紙對話書ニ於テ御了悉相成度候也

十四年四月十四日

特命全權公使　長岡護美

外務卿　井上　馨殿

追テ本文ノ義ニ付本月六日差立候電信寫壹葉爲御心得及御差廻候也

附屬書一

甲號

條約重修ノ儀ニ付長岡公使和蘭國外務卿ト對話趣意書

三月三十日ノ分

公使云

重修條約ノ儀ニ付テハ是迄屢々御談示モ致シ來リ且ツ東京ニ於テハ既ニ數月已前ヨリ改正ノ用意相整ヒ居候事故貴政府御評議ノ模樣ニ由リ可成速ニ右全權委員御派出相成速ニ結了候樣御下手被下度候

蘭外務卿云

今般貴政府ヨリ御差遣相成候草案ハ篤ト取調ヘ能ク勘考モ致シクル處各國政府ヘ協議ヲ遂ケサレハ確定難致廉モ之レナキニシモアラス旁以テ總令新任公使ハ至急差出候トモ之ニ委員タルヘキ全權ヲ與ヘ相當ノ訓令ヲ授ケ候迄ノ運ニハ至リ兼候

公使云

貴政府ニ於テ我新草案ニ對シ御異論ノ廉ハ東京ヘ委員御差出ノ上我委員ト御商議相成候テ可然事殊ニ我政府ニ於テハ右ヲ希望致居候ナリ然ルニ其前ニ於テ各國政府ヘ御協議相成ラサルヲ得サル所以ハ抑モ如何ナル御主意ニ候哉又タ第一我新草案ニ付貴政府眞成ノ御考ハ如何ニ候哉御差支モ無御座候ハヽ內ニテ相伺度候

蘭外務卿云

閣下トハ兼テヨリ格別ノ御懇意柄ニモ有之殊ニ貴政府御希望ノ重修一件ニ付テハ拙者モ竊ニ好結果ヲ希ヒ居候處故御所望ニ候ハヽ欣然御話可致候

先ツ當國ニ於テ今般貴政府御企ノ重修條約草案ニ下シタル見解ハ抑モ右草案ハ舊條約ヲ全廢シ新規ニ御結ヒ替ノ御企ニテ殊ニ權利上ヨリ御要求ノ筋鮮ナラサルヲ以テ何分御同意難致トノ見込ナリ則チ之ヲ細說スレハ成程貴國ハ輓近些少ノ年數ヲ以テ文物百般可驚ノ進歩ハ相現レ一般能ク承知ハ致居候ヘトモ迚モ歐洲各國同樣ノ位置ニ進ミタリトハ認メ申サレス歐洲各國同樣ノ位置ニ進歩セサル間ハ他ノ亞細亞各國ニモ差響キ候事故全ク新舊切替ノ御改正ニハ同意難致候首トシテ英佛獨等ヨリ申立二三箇月中ニハ各國打合セ濟ノ上公然貴政府ヘ相答ヘ候樣立至ルヘクト實ハ拙者ニ於テモ懸念致居候事ニ有之蘭國ノ儀モ夫迄ノ處ハ人ニ先ンシ公然御確答ハ仕リ兼候事ト御信用被下度シ

乍去當國ハ貴國トハ格別ノ御舊誼モ有之候間柄故貴國ノ便益ヲ謀リ勘考候ニ元來舊條約タルヤ互助ノ許容ニテ取結ヒタルモノ故猶ホ之ハ其儘存シ置キ不得止ル御要求ノ个條ヲ之ニ附加スル仕組ニテ今回ノ改正ヲ被遂候ハヽ蘭國ハ諸方ニ先キ立チ御商議ヲ始メ申スヘシ各國ノ內ニモ格別ノ異存ハ之レアル間布若シ之レアリ候ハヽ爲貴國夫夫辯解モ可致圖ニ御座候又タ將來內地旅行內地雜居モ自由ニ成シ得ヘキ進歩ノ程度ニ相達候ハヽ毛頭異議ナク歐洲同樣ノ條約ニ御同意可致候

右ハ當政府ト一ト通リノ見込ニテ委シクハ猶又御談示ニ及フヘシ乍併極メテ秘密ニ被成置度候云々

右ニテ畢ル

附屬書二

乙號

條約重修ノ儀ニ付長岡公使和蘭外務卿ト對話趣意書

四月二日分

蘭外務卿云

過日モ粗ホ御內話致シ置キ候通リ御差遣ノ草案ニ付商議ニハ難取掛候得共從前ノ條約ヲ基礎ニシ之ニ新規ノ个條ヲ附加スル事ニ相成候ハヽ直樣ニテモ商議ニ可及積リナリ如何

公使云

右ニ付テハ猶ホ委シク承リタシ、シテ委員ノ儀ハ先前ヨリ御咄合ノ通リ東京ヘ御差出シ御決定ナルヘシ

蘭外務卿云

實ハ歐洲各國ニ於テハ多少異議モ之アルヘキ趣ナレトモ當國ニ於テハ先前ヨリ御咄合ノ通勿論委員ハ東京ヘ差出シ東京ニテ商議結約ノ積ナリ

又タ貴政府ニ於テ新規ノ个條ヲ舊條約ニ附加スル當政府ノ論ニ御同意相成ル儀ナラハ當政府ニ於テハ各締盟國ニ關セス重修ノ開談ニ取懸可申候元來今回ノ重修論ニ付テ

ハ各國ノ内ニハ種々ノ說モ之アリ候得共當國ハ斷然中立ノ積ナリ新草案中貴政府ノ爲メ餘議ナク被考候个條モ鮮ナラス殊ニ稅則等ニ至リテハ御尤ト存シ候事項有之候

公使云

然ラハ貴政府ハ斷然中立ノ姿ニテ舊條約ニ基ツク論ニ我政府サヘ同意候節ハ直樣商議ヲ始メラレ縱令各政府ノ間ニハ何等異議ヲ主張スルモ貴政府ハ確乎動カス結了迄ノ運ニ立至ラシメラルヽ義乎

蘭外務卿云

貴政府ニ於テ舊條約ニ基ツキテ重修論ヲ開カレ候ハヽ白耳義ハ無論同意致スヘク又英國ハ左程ノ面倒ハ申ス間布縱令「パースク」氏ハ貴國ノ爲メ不利ナル論ヲ主張スルニセヨ「グラドストン」氏ニ至リテハ猥ニ他國ヲ壓抑スル其人ニアラサレハ必ス其當ヲ失セサルヲ信スル也然ラハ獨、伊、等モ次第ニ折合セ申スヘシ尤モ佛國ハ貴國ニ對シ餘程ノ異見ヲ抱キ重修談判モ歐洲ニテ相開キ度希望ノ趣ニテ奇妙ナル感觸ヲ抱キ居候樣ニ相見ヘ候果シテ然ラハ現ニ佛國ヲ除ク外ハ格別異議ヲ主張スヘキモノモ無之儀ニハ無御座候哉

乍去萬々一各國政府ノ間ニ於テ歐洲ニ於テ談判ヲ開ク論ノ多數ニ決シ貴政府ニ於テモ御同意可相成義ナレハ三百年來ノ御舊誼ニ對シ當府ヲ以テ其場所ニ充テ乍不及各國ノ間ニ紹介シテ貴國ノ趣意ヲ辯明シ萬一ノ裨補ヲ以テ舊來ノ情好ヲ恢復致度事ト竊ニ希望仕居候事ニ御座候

尙ホ當政府ニ於テモ深ク議ヲ盡シ度キ所存ニ付キ今ヨリ大藏工部ノ兩卿ヲ招キ相談ノ圖ニ候得共明後四日午後三時頃御參省アリタシ尙又御相談スヘシ

右ニテ畢ル

附屬書三

丙號

條約重修ノ儀ニ付長岡公使蘭國外務卿ト對話趣意書

四月四日分

蘭外務卿云

過日御談話ノ後大藏工部卿等ト篤ト談示致シ候處結局當政府內定ノ大意ハ過日御談話ニ及ヒ候點ニ出テス候

公使云

然ラハ試ニ之ヲ再說シ之ヲ約言スレハ今般我國ヨリ差出シタル草案ハ新舊仕替ヘ候企ニツキ貴政府ニ於テハ之ヲ受ケラレス然シナカラ今回要求セシ箇條ハ盡ク之ヲ謝絕セサルノミナラス相當ト被相考候箇條モ鮮ナカラサルナリ是ニ由リテ我政府ニ於テ舊條約ヲ基礎ニシ之ニ其箇條ヲ附加スル事ニ相成候ハヽ貴政府ニ於テハ直ニ右商議ヲ始メラルヘキ御內定ト存候　右ニテ相違ハ無之候哉

蘭外務卿云

我政府ノ內意ハ右ニテ相違ナシ

右ニテ畢ル

（朱書）

「（四月六日右ノ意ヲ摘要シ本邦へ發電）」

附屬書四

丁號

條約改正ニ付長岡公使和蘭國外務卿ト對話趣意書

四月九日分

蘭外務卿云

我政府內意ノ大要ハ過日御漏シ致シ候通ニハ候得共尙ホ一言申上置キ度事アリ其ハ他ニアラス貴政府ニ於テ最前申上置候趣意ニ御同意相成候ハヽ當國ニ於テハ曾ニ早々商議ヲ始メ候ノミナラス各國ヘモ夫々紹介致スヘキ心得ナリ依テ御差支モ無之候ハヽ可成速ニ貴政府ヘ御通知被下タシ

公使云

最前ヨリノ次第トモ併セテ逐一我政府ヘ通知可致候

右ニテ畢ル

四三　海牙ニ於テ條約改正會議開催方蘭國政府ノ意向ニ關スル件

明治十四年五月九日　長岡駐蘭公使ヨリ　井上外務卿宛

附屬書　十四年四月二十六日發長岡公使來電

十四年機密信第拾四號

和蘭國海牙府ニ於テ我國條約重修論下調ヘ會ヲ開設候ハヽ如何同政府ヨリ各國政府ヘ照會ニオヨヒ候大要ハ客月廿六日ヲ以テ旣ニ發電ニオヨヒ至候間疾ク御了悉ノ義トハ存候得共今又其詳細ヲ左ニ縷陳ニ可及候

陳者客月十四日附第拾貳拾三兩號機密信ヲ差立候後屢々當國外務卿ニ面會シ改正論ニ付篤ト及談示候處到底蘭外務卿ノ見込ニハ蘭政府ニ於テハ多少各政府ヘノ釣合モ有之候故無據陽ニ舊條約ヲ本ニスヘキ說坏ハ相唱ヘ候ニモセヨ其實

ハ孰レニテモ宜布殊ニ新案一體ニ付テハ十分了解モ致居候間決テ日本政府ノ顧慮ヲ要セス候得共何分各政府商議未開ノ已前ニ於テ或ル政府ヨリハ傳檄ヲ出シ各政府ニ在リテハ各々自己ノ意見ヲ主張シ互ニ其應否如何ヲ相窺ヒ居候樣ニテハ所詮速ニ結了ノ場ニ難立到ハ勿論今回企圖ノ美擧モ十分ノ結果ヲ得ヘカラサルヤモ難計如何ニモ殘念ニ付何卒蘭政府其間ニ入リテ能ク之ヲ周旋調停シ海牙政府ニ於テ今回改正ノ下調會ヲ開キ篤ト談合ヲ盡シ候上東京ニ於テ相開カルヘキ本商議ニ及ヒ候樣致候半ハ定メテ日本ノ爲メ好都合ニ可有之候其故ハ同シク道理ヲ有シ均シク情實ヲ保ツノ事項ト雖モ日本政府單一ノ發議ト蘭政府贊成ノ協議トニ於テハ各政府感應ノ如何恐ラク淺々ノ差等ニ有之間布勿論蘭政府ニ於テ歐洲各政府ノ議論ヲ一定シ合從我國ニ迫ルノ强迫主義ニハ毛頭無之唯々蘭政府カ三百年來ノ舊交ニ對シ今回ノ一擧ヲシテ穩當ニ取纏メ東洋ノ舊友日本ヲ云フ　ヲシテ昔日ノ位置ヲ恢復爲致度是全ク當政府友愛ノ國誼ニ有之候間幸ニ策ノ好事ヲ以テ同視スル事勿レ云々

已上蘭外務卿ノ見込　右ハ應接ノ際ニ於テモ其意言外ニ相溢レ他ノ貴紳ニ就キ相質候テモ其說ハ大抵一轍ニ相歸シ居候間外務卿ノ厚意異シテ候面ノ裝飾ニ無之段ハ宜布信用可被下候又タ同卿ノ見込ニハ英佛外務卿等ニ於テハ平常懇信ノ間柄ニ有之殊ニ改正論ニ就テハ不絕通信致居候處强テ格別ノ異說モ無之候間其下調會ノ義ニ付テモ定メテ同樣ノ事ト被相考候果シテ然ラハ各政府ニ於テモ無論其議ニ應シ可申歟兎ニ角日本政府ノ便益ヲ計リ聊カ昔日ノ舊誼ニ相答ヘ度所存ニ有之候間屢々懇切ニ談話有之其結末ニハ每時モ「今ヲ距ル拾有餘年前日本政府ニ於テ和蘭政府ノ忠告ヲ嘉納耳受セラレナハ恐ラクハ今日ノ困難ハ之アル間布キモノオ（マヽ）」ト屢々大息被致居候是則去月廿六日閣下ヘ發電ニオヨヒ候所以ニ有之候

其後森公使巴里ヨリ電信幷ニ書面ヲ以テ改正論將來ノ目途ニ付至急面談致置度ニ付出巴吳候旨被申越前陳條約論ヲ首トシ其他ノ公務モ甚タ繁多ニハ候得共寸隙ヲ偸ミ出巴致シ着巴當日ヨリ直ニ改正論ニ取掛候處英政府ニ於テ頃日森公使ノ辯明ヲ以テ主義頓ニ變シ更ニ新案ニ基ツキ商議可相開事ト相成最前各國ヘ差出候傳檄ハ一應取消シ改メテ新傳檄ヲ出スヘキ企ノ由詳細ハ同公使ヨリ具狀ノ告ト致信用候ニ付別段細報ニ不及候斯テ將來ノ方向論ニ付テハ多少相違ノ點之レアリテキニシモアラスト雖モ均シク閣下ノ命ヲ奉セサル

ハ官旅難致事故相違ノ點ハ詰リ相違ニテ唯々將來一層奮勵事ニ從ハン事ヲ約シ致歸館候歸館後蘭外務卿ニ面會英政府ノ新主義等相漏シ及談示候處右樣ノ運ヨリシテ各國共追々ニ折合結局下調會ヲ要セサル樣立到候ハヽ至極可賀旨同外務卿ノ答ニ有之候

扨又右下調會ノ義ニ付過般蘭政府ヨリ差出候書面ノ返答トシテ本月六日到達致候英政府答書ノ大意ハ蘭政府ノ企圖ハ至極懇到ノ良案ニ候得共聊カ勘考ヲ要スヘキ一事アレハ尙ホ四五日ヲ待ツテ確答スヘシトノ趣此一事タルヤ何等ノ事項歟ハ推知難致候得共多分獨政府ト見込不相合故ナラン乎之ニ就テハ蘭外務卿モ粗ホ同說ニ有之候

先ツ近今ノ形況ハ已上開陳ノ通ニ有之右下調會ノ義モ其實全ク强迫主義ニ無之候ハヽ我政府於テ夫カ爲メ毫モ失害ハ無之義トハ存シ候得共更ニ之ヲモ要セサレハ無此上事ニ付決テ勸奬ハ不致候乍去蘭外務卿折角ノ懇情ハ勿論忽諸シカタキニ付縱令下調會ハ其成ヲ告ケスシテ其實効ハ之ニ相顯レサルニモセヨ何卒其懇情ハ今回改正論大段落ニ至ル迄ノ一助ニ相供シ度奉存候尤モ最初ヨリ談話ノ體裁ハ重モニ情實上ヨリ說ヲ設ケ權利上ノ理論ハ先ツ第二義ト致來候處當

外務卿ニ於テモ同樣全ク懇信上ノ打明ケ詞ヲ以テ右樣ノ場合ニ進入候條其邊ハ深ク御考察被下度相願候尙ホ各政府ヨリノ答意幷ニ將來ノ狀況等ニ飽迄注視追々縷報可申進圖ニ候得共差向キ右迄及內陳置候也

明治十四年五月九日

特命全權公使　長岡護美

外務卿　井上　馨殿

追テ機密信ニハ是迄公信ノ如ク其都度應答ノ成規ニハ無之哉ニ候得共東西隔絕ノ地自然其着否如何モ懸念ニ候間御答ヲ要スル分ハ格別一時ノ報告ニ止ルモノト雖モ着否ハ都度々々御答相成候樣致度此段モ添テ申進候也

附屬書

明治十四年四月二十六日發長岡公使來電

拙者機密ノ報知ヲ得タリ蘭政府ハ我舊交ノ好ミヲ思ヒ我國トノ談判ニ便利ナラシメンコトヲ欲シ我考案ノ回答ニ付テ至當ノ見解ヲ得ン爲メ海牙府ニ於テ評議センコトヲ他條約國ヘ照會ス可シト

「フアンデルポット」ハ不日拜命スヘシ

海牙府

長岡

井上殿

（右原文）

To Inouye

I am confidentially informed that Dutch Government considering our old friendship and wishing to facilitate negotiation with Japan, will submit to other Treaty Powers to consult at the Hague in order to come to proper understanding about answer to give in reply to our proposals.

Van der pot will be appointed in a few days.

Nagaoka

The Hague

Apr. 26th 1881.

Rec'd, Apr. 27th 1881.

四四　明治十四年六月三日　青木駐獨公使ヨリ井上外務卿宛（電信）

改正談判開催地ニ關スル件

改正談判ハ歐羅巴ニ於テ御開キ被成度思召ノ趣風說アリ御府ノ爲幹旋致呉候事不可容疑義ト被存申候就テハ不日快哉ク通報可有之ト相樂罷在候左候テ過日當外務省ヘ罷越候處同省官員ヨリ申聞候ニハ近來日本政府ハ從來ノ持論ヲ變更シ重修事件ハ歐洲ニ於テ開談セント欲スル歟ノ趣ニ有之候云々且又當府駐劄一二某國公使ヨリモ右ニ類スル私話有之重修一件ニ於ケル開談ハ蘭國都府ニ於テ御催可相成歟ニ致承知候勿論右公使ノ陳スル如キ事ハ有之間敷トハ奉存候得共當外務官員ノ話モ有之旁御注意ノ所在ヲ了知致兼不得止別紙横文壹葉寫ノ通本月四日電報[1]ヲ以相伺候次第ニ御座候就テハ否電報ニテナリ書面ニテナリ御教示可相成儀ニ付其際ニ至候ハヽ彼此愚存可申進候モ可有之候得共不取敢右得貴意度早略如此御座候也

明治十四年六月九日

在獨逸國

特命全權公使　青木周藏

外務卿　井上　馨殿

（追啓省略）

註　1前掲四四文書

旨意相伺度候

千八百八十一年六月三日

伯林

青木

東京

井上殿

四五　明治十四年六月九日　青木駐獨公使ヨリ井上外務卿宛

改正談判歐洲ニテ開催ノ風說ニ關スル件

機密信第九號

七月二十三日到

重修一件ニ付テハ最早當國政府ヨリ何等ノ沙汰歟可有之ト企首相待居候得共何分今日迄確タル通知無之候乍併近來佛國ヨリ來報ニ依レハ佛國政府ニ於テハ前顯重修一件ニ付テハ斷然英國政府ノ提出案ヲ棄却シ獨國政府ノ議案ヲ嘉納候旨公然相唱來候由右ハ素ヨリ鈴木氏等ノ報告ニテ委細御了承ノ事トハ奉存候得共此ノ一事ニテ兼々申進置候通獨國政府今回ノ一件ニ於テハ爾以各國ノ先導者トナリ多少日本政

四六　明治十四年六月二十三日　青木駐獨公使ヨリ井上外務卿宛

條約改正談判歐洲ニテ開催方ニ關スル件

附屬書一　十四年六月九日附青木公使宛往電

條約改正歐羅巴會議ニ關シ我意向通知ノ件

二　十四年六月十八日發青木公使來電

歐羅巴會議延期方申請ノ件

機密信第拾號

本月九日別紙「甲」號ノ電信落手候ニ付同十八日「乙」號ノ通以暗號氣付申上置候畢竟重修事件ハ於歐洲商議相成候方皇國政府ノ御有益不鮮候云々昨年中已ニ以内書意見申上置候末先達來當境ニ於テモ種々該件ニ係候世評有之候ニ付皇國政府ノ御趣意或ハ其邊ニ歸嚮相成候歟ト致推察候儘御所存伺出候處前顯甲號御敎示ノ旨ニ據レハ世評ノ根原全ク獨佛兩公使ノ懇話的建言ニ致起因候歟ニ相見候抑又兩公使就中獨公使ニシテ縱令懇話的ニモ如斯建言申出候邊小官ニ於テハ千萬奇怪ニ存申候何トナレハ當國外務官員（卿及代理者ニハ無之候）ヨリ毎次小官ヘ申聞候ニハ重修事件ハ於歐洲商議不可然皇國重修委員ニシテ其全權不足ニ候節ハ電線ヲ假テ東京ニ稟議シ彼此失費不鮮決議ノ時日亦隨テ可遷

延トノ事ニ御座候尤「フォン、アイゼンデッヘル」氏ニ於テハ歐洲商議ノ機會ヲ時トシ歸省致度内意モ可有之反之外務官員輩ノ所存ニテハ於此地開商議候テハ自分ノ職掌益々煩劇タルノ戒モ有之候ニ付暗ニ之ヲ豫防シ且聊體ヲ敬シテ東京ニ遠ケ候方各國ノ壓力速ニ其功ヲ奏シ此地ニテ失候モノハ彼地ニテ取回ト申樣ノ内意モ可有之歟ト推察罷在申候該末段ノ二條ハ全ク下官ノ推察ニ候得共到底先般來度々申上置候獨政府ノ建言各國共果テ致納得候末其主義下官ヘ通知有之候ハヽ早速報道可申上ニ付其節マテハ歐洲ニテ商議スルト判然御決定無之方可然奉存候加之獨政府ノ建言ハ獨リ除英國ノ外自他各國共已ニ之ヲ嘉納致候由ニ候間此際ニ臨ミ我定意變更ノ模樣相見候テハ英政府ニテハ之ヲ口實トナシ獨政府ノ建言ニ左祖不致モ難計隨テ獨政府ノ好意ヲモ損害可致都合ニ相成可申候併シ前顯建言ノ主義公然通知有之其旨趣如何ノ模樣次第更ニ我ヨリ歐洲商議ノ義申出候ニ於テ曾ニ格段ノ不都合無之而已ナラス閣下ニテモ十全タル全權御負戴有之親ラ歐洲ヘ御出有之候ハヽ爲皇國有益不鮮候樣奉存候尤此義モ今日ヨリハ其可否確ト申上兼候得共御參考ノ爲不取敢如此謹言

明治十四年六月廿三日

特命全權公使　青　木　周　藏

外務卿　井上　馨殿

（追啓省略）

附屬書一

甲號　十四年六月九日附青木公使宛往電

條約改正歐羅巴會議ニ關シ我意向通知ノ件

Conference for Treaty-Revision to be held in Europe has been proposed by French and German Ministers here in strict confidential form, but Japanese Government has yet decided nothing about it. I will inform you if any decision be arrived at. Keep it very secret in the meanwhile.

June 9, 1881.

附屬書二

乙號　十四年六月十八日發青木公使來電

歐羅巴會議延期方申請ノ件

Wait with your decision regarding proposed revision in Europe untill foundation of proposition agreed by other governments, if too late (if not too late ?), but do not tell this to French and German Ministers.

Berlin, 18th June 1881.

四七

明治十四年六月二十三日　柳原駐露公使ヨリ　井上外務卿宛

我改正案ヲ拒否セントスル英國政府ノ回章ニ關スル件

別信　第廿三號

一、先頃當國外務卿代理ギルス氏ニ面會ノ際條約改正事件ニ付不遠スツルウエ氏ヘ訓令狀ヲ可發候ニ付其前尚拙者ヘ協議致度申聞ケ候故承諾致置其後催促候得共何分遷延致候然ルニ在佛國鈴木貫一ヨリ内報ヲ得ルニ英國主トシテ改正案ヲ拒ムノ企テヲ起シ各國ヘ内々廻章ヲ發シ候趣ニ有之此回章果シテ魯政府ヘ來リシ哉判然不致候得共亞細亞課長ブローセ（外務省書記官ナリ）ヨリ長田曲木ニ私話スル所ニ據レハ英國ノ影響アルト又獨逸モ改正ヲ肯セサル景況ニ付獨リ魯國ノミ專決獨立シテ先ツ着手シ難キ事情アリテ右兩國模樣ヲ窺ヒ候旁ギルス氏ヨリノ協議遷延候事ト推察候先般長田伯林ヘ私行シ青木公使ニ面晤セシ際同國ハ漸最初不可トセシ方嚮ヲ變スル哉ノ色アルヲ以テ果シテ確乎タル地位ニ致ラハ拙者ヘ報告可致趣ニ候得共于今報知無之又森公使ハ先般巴梨ニテ長岡氏ニ會合ノ節英國モ微シク最初ノ方嚮ヲ變セントスル由話シ候哉ニ傳承候得共是又確報無之候此段爲御心得拜啓候且該地ニ於テスツルウエ氏ト右改正事件ニ付御談判ノ景況爲參考早便御報告企望致候

右得貴意候也

明治十四年六月廿三日

特命全權公使　柳　原　前　光

手　啓

井上外務卿殿

四八

明治十四年七月六日　柳原駐露公使ヨリ　井上外務卿宛

條約改正商議開始方ニ關スル獨逸政府ノ回章ニ關スル件

別信　第廿七號

一、近頃蘭國外務卿ヨリ條約改正事件ニ付長岡公使ヘ内話スル處ヲ密聞スルニ先頃獨逸政府ヨリ回章ヲ發シ曰ク日本條約改正ノ議歳月ヲ費シテ紛々決セス此形勢ニテハ底止スル處ナキヲ以テ先ツ條約改正スルコトヽ東京ニ於テ各國委員會議スルノ二點ニ同意シ箇條ノ討論ヲ開キ然ル後本國政府ノ主義ヲ一定セントノ大意ニ有之趣仍テ歐洲大陸諸國之ニ應スル者アリテ和蘭モ同意ヲ表シタレトモ仍ホ瞥ラク英國ノ影響ヲ窺ヒ然ル後斷決スル由ニ有之候右改正事件ニ付當國事情ノ近況ハ先般別信第廿三號ヲ以テ内啓致候通リスツルウエ氏ヘ訓令發出ノ一段ニ臨ミ漸英獨拒否ノ模様伺察致シ遷延候形勢ニ付拙者ニ於テ獨逸政府ノ方嚮且前述蘭國外務卿ヨリ洩ラス所ノ各國景況承知候ハ緊要ノ事ニシテ且筆紙ノ往復ニテハ事情難盡候故來七日當地出發青木長岡兩公使任所ヘ旅行面詢致度決定シ去二日暗號電報ニテ其大意及御報知置候

明治十四年七月六日

特命全權公使　柳原前光

井上外務卿殿

四九　明治十四年七月二十七日　青木駐獨公使ヨリ井上外務卿宛

改正會議開催方各國共承諾ノ件

九月八日到

（前略）

先月廿三日附機密信中獨政府ノ建言ハ獨リ除英國ノ外自他各國共已ニ之ヲ嘉納イタシ候云々申出置候處其後英政府モ亦致協定且商議ノ場所ハ東京タルベク候旨當外務省ニ於テ公然承知イタシ候尤英政府專獨政府ノ建言ニ致協意候上ハ其重修委員（パークス氏ヲ言歟）ニ可交付訓令ノ義ニ付テモ尚獨政府ヘ協議致度トテ過日來其草稿取調ニ取掛居候由ニ有之候然ルトキハ先各國共協議相整候都合ニ候間此段不取敢申出置候猶其内獨政府ヨリ巨細ノ通知有之次第速ニ可申上候草々敬具

明治十四年七月廿七日

全權公使　青木周藏

外務卿　井上　馨殿

註　四六文書參照

五〇　明治十四年八月四日　青木駐獨公使ヨリ井上外務卿宛

條約改正豫備會議開催方英政府ニ於テ提唱ノ件

附屬書一　十四年七月二十三日英外務卿來翰抄譯文
二　十四年七月三十日森公使ヨリ青木公使宛書簡
三　十四年八月三日クセロー氏談話筆記
四　十四年八月三日發青木公使來電

機密信第拾三號　三月十九日到

拾弐號密信差出置候後昨八月二日森公使ヨリ別紙甲乙號ノ通リ報告有之申候右甲號ノ云々ハ本然事務ノ順序ニ就テ論之候ハヽ先ツ英國政府ヨリ通知可致筈ニハ無之況ンヤ重修事件ニ付最初ヨリ各國ノ間ニ媒介シ首唱先導懇ロニ我請求箇條ヲ取扱候獨政府ヨリハ從前拙官迄何等モ箇條ヲ致枚擧候通知無之候間英政府ノ擧動一入奇怪ニ被存申候且前顯英外務卿ノ通信中ニハ先前拙官ヨリ說明主張致候行政權回復及擴張一月廿七日付差出置候覺書ニテ御記念可被下候ノ義ニ宛候答辭一句モ無之依テ事體益不分明ニ相見候間昨三日當外務省ヘ致出頭重修事務擔任ノ者ニ就テ種々懇話相開候末先前獨政府ヨリ各條約國ヘ照會相成候建言ノ正文或ハ其大意被申聞度英政府ニシテ在龍動我公使ヘ既ニ公然云々ノ箇條致通知候上ハ事實更ニ機密ト申ワケニ無之云々申入候處建言ノ正文ハ難相示候得共別紙丙號獨語覺書（但シ此文ハ重修事務委員「フォン、クセロー」氏致口述候ノ通リ拙官ヨリ閣下ヘ申牒ニ付拙官於其目前書留候モノナリ）可致トノ事ニテ有之申候左候テ英政府ヨリ森同僚ニ對シ前顯云々先ツ致通知候事ハ獨政府ニ於テモ萬々奇怪ニ相含居候樣相見候處愚察ニ依レハ英政府ノ擧動或ハ種々ノ權謀ニ致起因候事歟ト存申候何トナレハ別紙丙號ニテ御承知可被成通リ獨政府ヨリハ行政權擴張ノ事項ニ付テモ我政府ノ請求ヲ顧眷シ各政府ヘ及示談候處英外務卿ノ公書中ニハ此件ニ關候字句絕テ無之候（勿論フォン、クセロー氏ノ懇話ニ依候得ハ各國共獨政府ノ建言ニ同意スルトノ事ノミニテ誰モ行政權ノ一項ニ付別段明細ニ相答候者ハ無之由ナリ）是英政府該權讓與相嫌候證據ニモ有之候マヽ獨政府ニ秘シ右公書ヲ以致提出候主義ノミニテ我政府ヲ滿足セシムル趣意ニテモ候歟又通知一件ニ付英政府ヨリ前以獨政府ヘ照介モ無之斷然着先鞭候樣ノ擧動致候義ハ昨年來獨政府ノ首唱先導ヲ怨望罷在候間最後ノ期ニ臨ミ其ブレスタイヂヲ回復シ併テ我款心ヲ求ムルノ了簡ニテモ有之候歟兎ニ角英政府ノ擧動ハ甚不順序ノ姿ニ相見申候夫故縱令英外務卿ヨリ右公書差出候トモ之ニ對シア

クセブテーブルノ御答杯御差遣相成候テハ他日重修ノ際商議的ノ餘地益縮小可致ハ必然ノ義ト存候ニ付不取敢昨三日付ヲ以丁號電信差出置申候猶追日英政府訓令一件ニ付獨政府ヘ確答有之候上該政府ヨリ更ニ拙官ヘ云々通知可有之ニ付其際マデハ英政府ニ對シ何モ御確答無之方可然存申候右急報申上度云々敬具

明治十四年八月四日

特命全權公使　青木周藏

外務卿　井上　馨殿

附屬書一

甲號

英國外務卿ヨリ答書ノ略　七月廿三日付

貴政府請求ノ程度ハ過大ニシテ肯諾シ難シ殊ニ裁判ノ如キハ預メ日本法律幷治罪法等ヲ精査セサルヘカラス改正著手中ナル法律及法廷ノ實際取扱振等ハ果シテ歐洲ニシテ實施ノ者ニ類似スルヤ否ハ未タ之ヲ判知シ難シ此理由ト其他ノ事故アルニ由リ貴政府ヨリ提出アリシ二通ノ條約稿本ハ適當ナル基礎トシ受ルヲ得ス然トモ日本財政ト兩國通商トニ關スル件ニ至テハ雙方利益ヲ共享センカ爲メニ互相讓與以テ滿意ノ局ヲ結フ事蓋シ難キニ非サルヘシ依テ我政府ハ稅則其他通商事件ニ付商務院ノ意見ヲ下問セリ故ニ余ハ將サニ不遠在東京我公使ニ令シ於東京各國公使ト共ニ改正ノ基礎ヲ定メンカ爲メニ預先ノ商議ヲ開クコトヲ貴政府ニ照會セシメントス歐洲結約諸國皆既ニ前議ニ左袒セリ必此主義ニ基キ各國ノ利益ニ應シ別々ノ約ヲ結フニ至ルヘシ是本件ヲシテ速ニ滿意ノ結局ニ至ラシメント欲スルノ友意ニ出タル者也

註　原書翰ハ五四附屬書二參看

附屬書二

乙號　明治十四年七月廿日　附森公使ヨリ青木公使宛

其後御絕音申上候ヘ共續テ御快復ノ御事ト信用罷在候陳ハ條約重修一件ニ付英外務卿ヨリ一書落手致候間其大意抄譯供御內覽候右ニ付早速東京ヘ及電報置候次第有之候間本邦ヨリノ指令ヲ待今後着手ノ模樣ハ尙追々可及御通報候貴任國政府ノ近狀御聽取ノ義モ候ハヽ御內報被下度相願候早々頓首

七月卅日

森　有禮

青木公使閣下

附屬書三

丙號

獨逸外務省ニ於テ樞密書記官クセロウ氏青木公使ヘノ談判筆記千八百八十一年八月三日

本年一月獨逸政府ヨリ英國政府ヘ向ケ日本條約改正ニ就キ共通目的ノ談判ヲ東京ニ於テ熟議ヲ遂クヘキ意見ヲ申送リ又協議上ノ新稅則ノ外如何ナル手段ニ據ラバ治外法權ヲ維持シナカラ外國人ニ對スル日本ノ行政權ニ就キ協議可相整哉夫々意見ヲ申添置候處漸ク近日ニ至リ英政府ヨリ之レニ同意ノ回答到達致候去ナカラ英政府ハ右ニ就キ商法會議所ノ考案ヲ問合セ候ニ付改正談判ノ着手ハ猶ホ遷延可致趣ニ有之候然シ獨逸政府ハ可成的速ニ右協議委任ノ運ビニ盡力致居候也

東條一郎譯

(右原文)

Confidential.

Promemoria

über

die mündliche Mittheilung an den Kaiserlichen Gesandten Herrn Aoki seitens des Geheimen Legations-Rath Herrn von Kusserow auf dem Kaiserlich Deutschen Gaimu Sho.

den 3, August 1881.

Die fehlende Zustimmung Englands zu den Januar d. J. für gemeinschaftliche Verhandlung in Tokio zur Gewinnung der einstimmenden Basis für die Revision der einzelnen Verträge, welche ausser den Vorschlägen betreffend eines neuen Conventional-Tarifs auch die Erwägung gehabt, ob und unter welchen Cautelen ein Entgegenkommen betreffs der administrativen Befugnisse Japan gegenüber den Fremden unter Aufrechterhaltung der Exterritorialität bezeigt werden könnte, ist hier endlich vor kurzem angelangt. Die Englische Regierung hat indess Handelskammern über Details zum Breicht aufgefordert, wodurch der Beginn der Verhanlung noch verzögert wird. Die Deutsche Regierung versucht jedoch möglichst beschleunigte Instruktionssertheilung zu veranlassen.

附屬書四

丁號　十四年八月三日發青木公使來電

English communications to Mori adheres in general to German proposals to foreign Powers, but administrative question has been omitted which Germany suggested taking into consideration. Strongly advise you to delay therefore decisive steps London.

Berlin, the 3 August 1881.

五一　明治十四年八月二十五日　井上外務卿ヨリ在外各帝國公使宛

條約改正談判地ニ關スル件

在歐米各我公使へ機密信案

條約改正ノ談判ヲ開クベキ場所ハ兼テ申進候如ク各締盟國政府ヨリ有權ノ使臣ヲ東京ニ派シタル上ニテ此方ニ於テ熟商可致手順ニ相成居候處先頃此地駐劄獨佛兩國公使ヨリ我國有權ノ委員ヲ歐洲ニ派シ締盟國中ノ一國ニ於テ各國委員ト相會シ不件ノ內商議ニ渉ルトキハ我政府期望ノ旨趣餘蘊ナク說明スルヲ得ベキノミナラズ各政府何程迄ニ我請求ニ應シ得ベキ歟ノ極點モ分明ニ相成且各政府ノ委員モ其本國ニ近便ナルガ故ニ輙スク其意向ヲ貫通スルヲ得ベク旁彼地ニ於テスル方了局ノ捷徑ナル旨申出候因テ當方ニ於テモ其便否得失等折角考按中ニ有之候處此程尙又獨逸公使其本國外務省中ノ友人ヨリ電報ニ接シ其趣ニヨレバ歐洲ニ於テ會議ノ儀ハ最早難被行旨內話有之候是ヨリ先キ長岡公使ヨリノ通信ニ據ルニ蘭政府ハ各國改正ノ談判ヲ其府下ニ於テスル事ヲ冀望シ密カニ各政府ヲ誘招セシニ大陸各國ハ孰レモ同意ニ候得共獨リ英政府ハ斷然之ヲ拒絕シタル趣ニ有之右ニ因テ考察スルニ嚮キニ獨佛公使ヨリ發議セシハ蓋シ蘭國ノ企圖ニ基キ而シテ其後獨公使ヨリノ申出ハ英政府ノ拒絕セシニ職由スル事ト被存候右ノ次第ニ付歐洲ニ於テ開談ノ儀ハ我政府ニ於テモ全ク謝絕ノコトニ決定シ右兩國公使ニ回答致置候元來右兩公使ヨリ本議ヲ提出候ハ本國政府ノ名ヲ以テスルヲ避ケ全ク自己ノ意見トシテ我政府ノ意向ヲ試ミ我ニ於テ異存ナキトキハ兩國公使ヨリ更ニ各其本國政府ニ勸告スベキ積ニ相成居候故我ニ於テ之ヲ謝絕スルトモ全ク公使ト本官トノ內話ニ止マリ公然タル談判ト視做スベキモノニ無之又各其政府ヨリ拒絕候トモ全ク其公使ノ勸告ヲ不採迄ニテ我政府ニ取リテハ直接ニ拒絕ヲ受ケタル等ノ譯ニハ不相成候右ノ事實ハ公私トモ決シテ他言無之樣致度候此段爲御心得內密申進候也

明治十四年八月四日　起草

外務卿代理

外務大輔　上野景範

八月二十五日發遣

英機密第二十一號

佛同　八號

露同　十三號

獨同　十二號

墺同　七號

伊同　四號

蘭同　十二號

米同　十二號

五二　明治十四年十月十四日　森駐英公使ヨリ井上外務卿宛

東京預議會開催案ニ關シ意見具申ノ件

謹啓今回歐諸國ヨリ發シタル東京預議會同ノ一案ニ付熟々考ルニ其案ヲ何國ヨリ首唱シタルニ拘ラス英國ニ取テ之ヲ便利ト做スハ爲メニ自己擅横ノ世評ヲ避ケ會同ノ公議ヲ後楯ニシ以テ東洋出稼キノ商人共ヲ保護スルヲ得ルニ在リ又獨逸ハ爲メニ歐大陸ノ牛耳ヲ執リ英ト和同シ東洋ニ向テ威權ヲ一張セント試ミ佛伊露其他小國ニ在テハ爲メニ目前ノ損失ヲ見サルノミナラス尙其便利ヲ分取スルコトヲ得ルアルヲ以テ容易ク之ニ同意シタルノミ此ノ見ノ果テ然ルヤ否ヲ問ハス該案ハ偏ニ便利ヲ外國ニ與ヘ之ヲ我國ニ奪フハ言ヲ待タサルナリ而テ該案ヲ以テ我ニ迫リ之ニ同意ヲ强求スルハ恰モ軟綿ヲ刀鋒ニ加ヘテ人ヲ威服スルノ類ナリ此ノ術ハ近世土耳其ノ如キ切支丹宗門外ノ弱國ヲ處分スルニ於テ最モ効アリ今ヤ之ヲ東洋ニ及ホシ端緒ヲ我國ニ向テ開カント欲ス卽チ歐洲全力ヲ以テ我國ニ迫マリ其擅令（ダクテート）ヲ達セント試ルナリ一度此擅令ヲ甘容スルヤ其禍患永ク我ヲ窘ルコト必セリ假令其患永遺ハ空想ニ出テ未タ以テ深ク之ヲ慮ルニ足ラスト做スモ我外交ヨリ占メ得ント欲スル所ノ諸利ハ爲メニ大ニ妨害ヲ受ケテ國歩ヲ遲クシ又且爲メニ東洋開進ノ

便路ヲ曲クルニ至ルハ昭然タリ故ニ該案ノ我將來ニ關シテ利害ヲ來タス所ノ機ハ須ク今日ニ決スト知ルヘシ願クハ我廟堂諸君深ク此ニ慮ル所アリテ該案ニ對スルノ良法ヲ議定アランコトヲ有禮不肖ト雖トモ所見ナキニ非ス然トモ身遠ク外ニ在リ又談判ノ責任ヲ負フニ非ス今發言僅ニ愚見ノ一端ヲ顯ハスモ蓋シ有損無益ニ屬スヘシ唯杞憂ヲ此書中ニ寫シテ兩閣下ニ致スノミ謹言

明治十四年十月十四日

於倫敦　　森有禮

伊藤閣下

井上閣下

五三　明治十四年十月二十日　井上外務卿ヨリ三條太政大臣宛

條約改正ノ件ニ付御委任ノ儀上申ノ件

秘第三十九號

條約改正草案ハ昨十三年七月六日ヲ以テ各外國政府ヘ及廻送其手續等其節及上申置候通ニ有之爾來在歐我公使ヨリモ

其任國政府ヘ往復ヲ重ネ夫々間斷ナク督促候得共急速確答ヲ難得候處英佛其他各國政府モ多クハ我草案ニ對シ不同意ヲ申出候就中先般英外務卿ヨリ森公使ヘ差越候回答ノ趣ニテハ到底我ヨリ提出候草案ヲ拒絶シ之ヲ以テ開談ノ基本ト難致矢張千八百五十八年ノ條約第二十二條ノ趣意ヲ基礎トシ東京於テ豫定閣議ノ上雙方意見ヲ陳述可及トノ義ニ有之尤モ改正論題ノ眼目タル法權稅權ノ兩項中法權ニ關シテハ我法律及ヒ施行ノ良否訴訟審判ノ規則等實行ノ如何ヲ察見シタル上ニ非レバ容易ニ諾否ノ決答ヲ爲ス能ストノ趣ニテ頗ル疑懼ノ念慮ヲ抱キ候樣相見候然シ海關稅目ノ如キハ精精當方企望スル所ニ適愜候樣熟議可及旨右英外務卿書簡中ニ縷述有之候次ニ又獨逸政府ヨリ靑本公使ヘ通報ノ趣ニテハ自カラ英政府ト別異ニシテ特ニ海關稅權ノ一議ノミニ止ラズ我請求ノ行政規則ノ事項ニモ論及シ可成我冀望ヲ達セシメ度トノ事ニ有之候夫是今日迄ノ成行ヲ以テ推考候處ニテハ英政府於テハ法權ニ關シ到底我ニ對シ讓與候意向更ニ相見不申僅ニ海關稅額ノ高低ヲ論シ改正ノ局ヲ結ハントノ目的ニ可有之之ニ反シ獨政府ノ方ハ前述ノ如ク行政權ニ關シテモ幾分數我請求ヲ容レントノ意向有之ニ付幸之レニ賴リ以テ英政府ヲ始メ其他各國ヲモ同意爲致度現今當地駐劄獨逸公使ニモ密談中ニ有之候其他伊佛兩政府ノ如キハ其間ニアリテ周旋調和ニ力ヲ盡スト雖トモ專ラ英獨ノ擧動ニ倣ヒ其方向ヲ決シ候內意ニ有之候間深ク論不足ト存候

各國政府改正事件ニ付目下我ニ對スルノ情狀如前文ニ候一體順序ヲ以テ論スル時ハ我ヨリ提出シタル草案ニ對シ彼ヨリモ別ニ考案ヲ附シテ我ニ可示ハ勿論ノ事ニ候得共既ニ英政府ノ如キハ其決意大體ヲ回答書中ニ含蓄セシメ我ニ通報候上ハ今更此一點ニ關シ細論ヲ費シ候トモ只日月ヲ費スノミ其功ヲ奏スル能ハサル事ト相考候

抑今般重修ニ際シ完全ノ法權ヲ回復セントスルモ之ヲ論出スルノ時期未タ至ラス去迚海關規則ノ如キ事々物々法制ニ關セサルハナク到底之ヲ不問ニ附スル能ハサル處アルヲ以テ纔ニ法律上我ニ取リ能フ可キモノヲ分チテ限界ヲ立之ヲ超過セサル間ハ外人ヲシテ我裁判ニ服從セシメントノ考案ヲ以テ我草案ニ揭出シ候義ニ候得共之トテモ最初ヨリ必成ヲ難期段ハ既ニ是迄略及具上置候次第モ有之候處如前述彼既ニ右考案ノ斷拒ヲ主張候以上ハ今ヨリ之ヲ極論候トモ徒ニ時日遷延ニ流レ候ノミニテ究竟我企望ヲ達スルノ見込難

相立ト懸念致候就テハ當方於テ姑ク一步ヲ讓リ行政規則限界以內ト雖トモ我法律ニ照ラシ彼ノ領事裁判所ニ於テ處罰スル方法ヲ以テ結約致候方捷徑ト存候條其段更ニ及上申置候各國公使ノ內獨逸公使ハ彌預定談判ノ全權委任既ニ本國ヨリ達越候趣ニテ何時ニテモ開談可及旨通報有之候間不日談判ニ取懸申度候其旨趣ニテ開談候テ可然候ハヽ至急御指令被下度候且又右同時ニ條約重修全權委任狀御下附有之度候此段及上申候也

明治十四年十月二十日

外務卿　井上　馨

太政大臣　三條實美殿

（以下朱書）

上申ノ旨趣ヲ以テ開談可致事

明治十五年一月十一日　大政大臣三條實美印

五四　明治十四年十月二十一日　井上外務卿ヨリ三條太政大臣宛

條約改正ノ件ニ付駐英森公使交涉ノ次第上申ノ件

附屬書一　十四年七月十二日森公使ヨリ條約改正ノ件ニ付英國政府ノ回答ヲ促スタメ英外務卿ヘ往簡ノ譯

二　十四年七月二十三日英外務卿ヨリ條約改正事件ニ付森公使ヘ來翰ノ譯

三　十四年八月九日附森公使ヨリ英外務卿ヘ照會ノ書翰譯文

四　十四年十月二十五日附英國代理公使來翰　條約改正ニ關シ各國共同會議開催方ノ件

條約改正ノ件ニ付在英國森公使ヨリ英國外務卿ヘ別紙甲號ノ通及照會候處乙號ノ通回答有之尚又丙號ノ通照會候旨申越候且在我英國代理公使ヨリモ丁號ノ通申出候ニ付此段併而上申仕候也

朱書
甲號　森公使ヨリ英外務卿ヘ千八百八十一年七月十二日附

乙號　英外務卿ヨリ森公使ヘ千八百八十一年七月二十三日附

丙號　森公使ヨリ英外務卿ヘ千八百八十一年八月九日附

丁號　英代理公使來簡譯千八百八十一年十月廿五日附

附屬書一

甲號　十四年五月十二日附森公使ヨリ英外務卿宛往翰

條約改正ノ件ニ付英國政府ノ回答ヲ促スタメ英外務卿ヘ往翰ノ譯

以書簡致啓上候然ハ三月廿二日附拙簡ヲ以及御照會置候貴我條約改正ノ事件ニ就テハ未タ御書面ニテ御回答ハ無之候得共爾來貴政府ニ於テハ右事件御熟議ニ相成且又別案（カオントルプロポーザル）ヲ御編成相成我國ニテ致冀望候件件ノ内貴國御冀望ノ廉ニ矛盾不致分ハ右別案中ニ御揭載相成然テ右御修正ノ草案ハ不日拙者ヘ御回附可相成旨御口談相成候事ニ有之候隨テ右事件ニ付今又閣下ヲ相煩シ候儀ハ別事ニテモ無之本件ノ儀次第ニ遲延相成荏苒相決不申テハ甚敷我國財政上其外ノ事ニ損害ヲ相及ホシ且我外國貿易上ノ關係ヲモ妨害可致ニ付何卒閣下當府御發途前ニ於テ本件ノ確乎ト相捗取候樣致シ度切ニ致冀望候此段可得貴意如斯候拜具

千八百八十一年七月十二日

森　有禮

英外務卿「グランヴィル」宛

註　右原文ハ二一九階屬書三參照

附屬書二

乙號　十四年七月二十三日附英外務卿ヨリ森公使宛來翰譯

以書翰致啓上候然者貴我條約改正ノ儀ニ付本年三月二十五日附ヲ以御差越相成候御書面ノ事ニ就キ尚又本月十二日附ヲ以テ御差越ノ貴翰正ニ致落掌候偖右改正商議ノ儀遲延相成候而ハ貴國財政上及ヒ其他ノ事ニ損害ヲ及ホシ且ツ貴國ト外國ノ貿易上ノ關係ニ於テモ妨害ヲ生シ可申ニ付急ニ右事件ノ確乎ト相捗取候樣御企望ノ趣委細致了承候隨テ今般御協議ノ儀精々迅速ニ相捗取候樣致度段ハ於拙者モ全御同情ニ有之我政府ニ於テモ右樣ノ運ニ相成候樣專ラ致盡力居候事ニ有之候乍併來諭ノ趣ニテハ或ハ我政府ノ筆閑ヨリシテ遲延ヲ惹起セリトノ思想ヲ生ス可キ恐モ有之候得ハ拙者ニ於テハ箇樣ノ思想ヲ格正致サヽル可ラスト存候即チ御承知ノ通我政府ハ貴政府ヨリ改正案ヲ受領致シ直樣其協議ニ切要ナル手續ノ端緒ヲ開キ候事ニ有之候乍去千八百七十九年中我政府ヨリ致請求候改正案ハ本年二月二十八日ニ於テ約定書表ヲ致入掌候迄ハ完全ノモノニ無之且該表ハ修好條約草案ノ最重要ナル附錄ニテ有之候又他ノ歐洲諸條約國ニ於テモ同樣ノ改正案ヲ致受領候事ニ候得ハ我政府ハ無論此等ノ諸邦ト意見ヲ交換セサル可ラサル譯ニ有之然テ今般貴政府ニ於テ現行條約ニ施サント御冀望相成候更正ノ性質ハ遙ニ貴我條約第二十二條ニ揭載有之候改正ノ旨意ニ超過致居候得者速ニ一同ノ同意ヲ得候儀ハ尚更難キ事ニ有之候偖又修好條約草案ノ題旨ハ大率我國入ノ後來貴國ニ在テ服從ス可キ法權ニ付新タニ規制ヲ立ツルニ外ナラス候處貴政府ヨリ御提出ノ問題ハ頗ル浩瀚ニシテ且重大ノモノニ有之候得ハ預メ貴國ノ法律幷ニ貴裁判所ノ制度及ヒ裁判法ヲ詳細ニ致考査候上ナラテハ御協議ニ難及次第ニ有之候右裁判ニ關スル事件等ハ我政府ニ於テ未タ十分ニ致承知居不申貴國ニ於テモ現ニ法律御改正ノ事ト致信用候得共右改正法律ハ歐洲各邦ニ被行候主義ト何程致一致候哉又貴國裁判所ニ於テハ裁判法ニ一定ノ規則無之樣相見ヘ候處改正裁判法ハ何程歐洲ノ主義ニ致一致候哉我政府ニ於テハ右等ノ事ヲ判斷ス可キ方便更ニ無之候右樣ノ理由有之且其外玆ニ詳言ヲ要セサル理由モ有之候ニ付我政府ハ貴政府ヨリ御提出相成候二通ノ條約案ヲ致受納之ヲ協議ノ基礎ト致候儀難相成存候乍併貴國財政上ニ關係ヲ及ホシ且貴我兩國ノ貿易ニモ均シク關係ヲ生ス可キ事件ニ就テハ稍々容易ク御談合モ相整可

中歟ト竊ニ致欣喜候依之貿易ニ關スル諸事件ハ雙方ニ於テ互助ノ讓與ヲ基礎ト致シ及御商議候ハヽ滿足ノ達意ヲ得候事不難ト相信申候右ノ見込ヲ以テ我政府ハ稅則其外貿易上ノ諸事ニ就キ當國商法會議所ヘ致諮問置候且又近々東京駐劄公使ヘ訓令ヲ相授ケ東京ニ於テ諸外國公使ト連合ノ預先會議ヲ開キ從來ノ經驗ニ因テ肝要ト見認ムル改正ヲ現行條約ニ加フル爲メ一般ノ約定ヲ取極ム可シトノ考案ヲ貴政府ヘ提出爲致候運ニ相至可申ト存候尤歐洲諸條約國ニテ右一般ノ約定ニ同意致候上ハ之ヲ以テ改正條約ノ基礎ト爲シ諸條約國ニテ各別ニ條約ヲ取結可申又條約取結ヒノ場所幷ニ其體裁ハ各自ノ最便利ト考フル所ニ任セ候テ可然ト存候前陳ノ考案ハ歐洲諸條約國ニテモ同意候事ト致信用候且此考案ハ貴政府ノ御願望ニ對シ最友好ノ情宜ヲ以テ致陳呈候儀ニ付貴政府ニ於テモ御採用相叶且依之本件ニ付雙方ニ利益アル決着ヲ得ルニ至リ可申ト相信申候此段可得貴意如此候敬具

千八百八十一年七月二十三日

グランヴィル手署

森公使宛

註　右原文ハ二一九附屬書四

附屬書三

丙號　十四年八月九日附森公使ヨリ英外務卿ヘ照會ノ書翰

我カ提案拒否ノ理由ヲ質シ幷テ東京會議開催ニ付照會ノ件

拜啓然ハ日本及ヒ英國條約改正ニ付提出シタル草案ニ關シ去月廿三日附ノ尊翰正ニ致落手候隨テ拙者ハ直チニ我政府ヘ貴翰ノ大意ヲ通知シ殊ニ閣下カ不日在東京ナル英公使ニ命シテ申出サシメントスル儀ニ付御申越ノ趣ヲ通知致候此事ハ東京於テ我政府ト各國公使一同トノ際ニ先ツ預メ商議ヲ開キ以テ現今ノ條約中ニ就キ從來經驗ニ於テ其判然當ニ修正スヘキ須要ナル改正ニ關シ大體ノ同意ヲ得ントス儀ニ有之候也

我政府ハ拙者ニ訓達シテ左ノ如ク陳述セシメラレ候條此段得貴慮候即チ右開議ノ考案ニ付何等ノ決答申進候儀ハ姑ラク置キ先ツ其第一ニ希望スル所ハ二三ノ論點ニ付キ閣下ヨリ何分ノ御說明ヲ求メ度儀ニ有之隨テ時日ノ消費ヲ省ク爲メニ拙者ハ敢テ其論點ヲ爰ニ呈覽ニ及候

第一我政府ハ其冀ニ提出シタル改正草案ヲ貴政府ハ如何ナル理由ヲ以テ御拒棄被成今般ノ談判ニ之レヲ基本トシテ用フル事ヲ肯ンセサル哉其理由ヲ承度候

閣下右書翰中御申述被成候樣今度我政府カ將ニ取用セントスル改正ハ其性質ト云ヒ又其程度ニ在テモ現今ノ條約中ニ兼テ制定シタル改正ノ區域ヲ踰越スルノ故ヲ以テ遂ニ雙方速カニ同意スルノ場合ニ難相成旨ニ有之且ツ其一例トシテ閣下ハ裁判ノ新法ヲ御指示被成候即チ此新法ニ依レハ向來日本ニ在ル英國人ハ此裁判ニ服屬スヘキ儀ニ有之隨テ閣下ハ先ツ日本ノ法律成典ト日本裁判所ノ審判手續トヲ精密ニ吟味センコソ肝要ナリト御申述被候末此等ノ理由其他閣下カ目今陳述スルニ及ハスト御見察ノ理由アルニ因リ則我政府カ提出シタル二通ノ改正條約案ハ談判ノ爲メ適當ナル基礎トシテ御受納難被成旨御申越被成候

然カハアレトモ閣下御承知ノ通リ我政府ハ本件ニ付猶ホ二三ノ辨明ヲ加フルノ權利アルコト明白ノ事ニ候此談判ノ初期ニ當リ日本政府ハ其大體ニ希望スル所殊ニ貿易事件ニ付希望スル所ハ詳細說明ニ及ヒタリ今之レヲ簡說センニ其希望ハ他無シ則チ我國ハ凡ソ獨立主宰國カ各其固有スル權利ト特權ヲ再ヒ回復セント欲スル而已ノ事ニテ此等權利幷ニ特權ハ千八百五十八年ノ條約ニ依リ一時我ノ所有セサルモノニ相成居候儀ニ有之候其故ニ日本ハ其要求スル廉ヲ一層詳細ニ縷陳スルハ洵ニ勢ノ已ム可ラサル譯ニシテ乃チ遂ニ亘多ノ時日ト工夫ヲ費シ以テ彼ノ新條約案ヲ作リ我事ヲ了スルニ及ヘリ仍ホ又該草案ヲ差出スノ際ニ於テ我政府ハ將來更ニ年期ヲ定メテ極度ノ海關稅ヲ設ケ之レヲ日本稅關ニテ執行セシメンコトヲ欲スルノ意志ヲモ同時ニ陳述セラレタル儀ニ有之候

然處此レニモ拘ハラス且ツ貴國ハ當初ヨリ本件ニ付キ其好意ヲ致スヘキノ趣充分承及ヒタルニモ拘ハラス今ヤ拙者ハ則左ノ如ク人ニ告知セサルヲ得サル位地ニ立ツ者ニ有之卽チ右新條約案ハ全ク無用物ト認メラレ談判論議ノ案題ニスラ採用ナキノミナラス左リ迚之レニ對スル辯駁ノ考案ヲ御差出ノ見込モ更ニ無之樣子ニ相見受ケ且ツ新規ニ他ノ條約各國ト會同開議ヲ催サン事然ルヘキ旨諭示ヲ蒙ムルニ至レリ抑モ此諭示タルヤ若シ之レヲ今日ニ爲スニ非スシテ數年前ニ在ラシメナハ則蓋シ或ハ事理ノ宜キヲ得ルニ近カルヘシト察セラル實ニ千八百七十二年ノ七月以後ハ何時ニモ此ヲ爲シ得ルモノナレハナリ

又日本政府カ揭出シタル新條約案ハ豫定セシ改正ノ範圍ヲ超過スト云フ議ニ付テハ拙者敢テ疑惑ナキ能ハサル次第ニ有之拙者ハ未タ現今條約中ニ於テ改正ノ程度ヲ制限スル所アルヲ見ス又本件ノ性質如何ヲ顧ルニ未タ其制限アルヲ知ラサルナリ誠ニ貴我兩國ノ眞利實益ニ取リテハ今般ノ改正ハ充分其病源ヲ推究シ之レヲ修正シテ遺ス所ナカラシムルニ在リ卽チ日本ハ其多年ニ得サル所ノ諸般必要ナル實利ヲ終ニ今回ニ收復スルノ意ヲ各國ノ爲メニ承認セラレンコトヲ願望ス是レ情勢ノ自然ニ出ルモノニ有之又英國ニ在テハ凡ソ兩政府カ相滿足シテ公正合理ナリト看做シ能フヘキ條約ヲ施行セントスル手續方案ニ對シテ固トニ當ニ欣然之レヲ嘉納アルヘキ筈ナリト是レ拙者篤ク自ラ跂望スル儀ニ候然リ此事ニ付縱令ヒ貴邦ノ商人ニ於テ萬一其商利或ハ特權ノ幾分ヲ損失スルノ憂アルニモ致セ是レ貴政府ニ望ム所ニ有之而ルヲ況ンヤ此憂慮ハ全ク所謂杞人ノ憂ニシテ曾テ其實ナキコトハ拙者ノ肯テ確信スル所ニ御座候

又夫ノ日本內國ノ法律ヲ採テ直ニ英國臣民ニ使用スルノ儀ニ付テハ是レ誠ニ其中ノ一小部分ヲ使用スルニ過キサレハ豈シ亦以テ這回貴政府カ草案却斥ノ議ヲ決行スルノ理由ト爲スニ足ラサル可シト被察候實ニ本件ニ就テハ若シ其御望ミアラハ當館ニ於テモ又ハ東京ニ於テモ詳悉ニ何時ニモ說明スルコトヲ辭セサル儀ニ有之候處曾テ其御申込モ無之又我法律成典ノ一部分ニシテ之レヲ外國人ニ使用セント今回企圖シタル法典ノ如キモ若シ嚮キニ御求有之ハ便チ貴覽ニ供シ得ヘキノ處意ニ其儀モ無之將タ彼ノ日本裁判廳ノ審判法如何ニ關シテ空ク大ニ憂慮ヲ抱カレタル事ニ付テハ則苟シ其邊御取調ノ末我政府カ目下專ラ詮議ヲ此ニ致シ將ニ歐米人ノ中ニ就キ適任ノ判事或ハ判事補ヲ傭入レ以テ凡ソ外國人關繫ノ詞訟ヲ審判スルノ補助タラシメントスル事アルヲ御聞知被成タランニハ此憂念ハ蓋シ全ク消滅ニ歸スヘキモノニ可有之候然レトモ若シ此裁判施行ノ事ニ付キ儼ヒ貴政府ハ事實檢査ノ上未タ其時期ノ熟セサルコトヲ發見シ卽チ貴政府カ日本ニ於テ裁判施行ニ關シタル責任ヲ縱令ヒ一部分タリトモ未タ之レヲ他ニ委托シ自カラ其負擔ヲ輕ルノ時期ニ至ラサルコトヲ發見スルアルモ彼ノ貿易關稅ノ問題ニ至テハ則チ實ニ閣下モ御指示ノ如ク其模樣ニ依リテハ之レヲ特別ニ看做シテ談判ヲ遂ケ得ヘキモノナルコト寔ニ明瞭ナル事ニ有之而シテ裁判權ノ一件ハ自カラ其利弊功過ノ

論一定スルヲ俟テ之レヲ談判スルモ妨ケ無キ儀ニ候夫ノ通商條約草案ニ載スル諸條ノ如キハ之レヲ現在英國ト他各國トノ際ニ存スルモノト參看スルニ殆ント同一ナルモノニ有之然ラハ則惡ソ此ヲ一見速了ノ下ニ拒斥シテ顧ミサルノ理ハ有之間敷候

右ノ次第拙者ハ我政府ニ對シ如何ニモ今般貴政府カ其草案ヲ全ク却斥シテ之レヲ論判ノ基本ニモ取用セサル所以ノ理由ヲ呈示スルコト能ハス加之ナラス此ニ對シテ其可否ヲ論駁シ究問スルノ儀モ亦タ無之平ラニ之レヲ棄却シテ取ラレス實ニ我政府ハ公明實直ニ其要求スル條件ヲ該草案中ニ表ハシタルモ今ヤ則之レニ應スルニ此擧ヲ以テスルモノハ其理由果シテ何所ニ存スルヤ拙者ハ未タ其ヲ得サル次第ニ有之候若シ右要求ノ條件中ニ非理不公ナルモノアラシメハ宜シク其旨御指示有之筈ナルニ專由ノ御說明モ無クシテ直下ニ拒絕スル事ハ蓋シ是レ本件ヲ迅速ニ調和整頓スルノ順路ニ非サルカ如ク相見申候

次ニ拙者ノ訓令ニ依リ敢テ閣下ニ捧呈スル問題ハ卽チ貴政府カ各國會同開議ノ案ヲ目下必要ナリト御申出相成候ハ如何ナル理由ニ御座候哉此儀ハ我政府カ其說明ヲ希望スル所ニ有之苟シ此希望ニシテ閣下ノ御解說ヲ蒙ムルニ非サレハ拙者ハ則チ右會同開議ノ案ニ全ク御同意難仕存候愚考ニ於テハ凡ソ會同開議ノ事タルヤ先ツ日本ト各國トノ際ニ其條約ノ大意綱領ヲ議定同意シタルノ后チ若シ其細目小件ニ於テ某々國ノ利害ニ關シ相撞着スルコトアルニ會セハ則チ之レヲ調整スル爲メニ會議ヲ用フルノ利アルナリト然ルニ閣下ハ之レニ反シ會議ヲ開キ先ツ以テ總體ノ主議ヲ議決同意シ而ル後其細目ヲハ日本ト各國トノ間ニ於テ特別ニ協議スルヲ可ナリト御示諭有之候得共此手續ノ儀ハ鄙見ニ於テ蓋シ事物ノ順道ニ背馳スルモノナラント被察候初メ日本ハ各國ト別異ニ其條約ヲ取結ヒタルカ故ニ今般ノ新條約案ニ在テモ亦同樣ノ手續ヲ用ヒンコトヲ望ミ卽チ苟モ別他ノ手續ヲ用フルコト判然必要ナリト示サヽルニ非スンハ此新案ヲ處置スルニモ各國獨別ニ商議アランコトヲ望ム所ニ有之且ツ此事ハ貴國ニ對シテ殊ニ然リト存候抑モ貴國ハ他ノ各國ト比スルニ其日本トノ關係ニ於ル一層重大ナル而已ナラス現今ノ條約取結ノ際實ニ貴國ハ合衆國ニ次キ直チニ之レヲ訂結シタルノ廉ヲ以テ此回其條約改正ニ臨ミ貴國ノ責任ハ餘國ニ比シテ最モ重キモノニ有之候願ミルニ合衆國ハ夙ニ

自國内政ニ於テ十分ノ自由主義ヲ尚トヒ且ツ我現今條約ノ性質ハ原ト一時定限ノ間施行スヘキモノナルコトヲ悟リテ既ニ業ニ數年以前ニ在テ我國ノ爲メニ謀リ日本亦夕當ニ右同樣ノ自由ヲ享受スヘキコトヲ認諾シ隨テ近年ニ至リ其通商事件ニ付テ假條約ヲ定メ右ノ意見ヲ其中ニ披陳スルニ及ヒタル儀ニ有之候就テハ大英國ニ在テモ亦タ日本ノ權理ヲ扶助贊成スルコト疑ヲ容レスト拙者ノ篤信スル所ニ有之候然リ其レハ兎モ角モ英國ノ責任ハ會同開議ヲ催スノ故ヲ以テ一モ輕重增減スルモノニハ無御座候貴政府カ日本新條約案ニ對シ自カラ率先シテ其餘各國ノ過半ニ勸說シ之レヲ拒棄スルニ至ラシメタル事ハ固トニ我政府ノ熟知スル所ニ有之尤モ是レハ蓋シ貴政府カ我國ニ對シ他ノ方策ヲ以テ公正ノ處置ヲ致サントスルノ意ニ出ルコトハ拙者ノ堅ク冀望シタル儀ニ御座候去リ乍ラ縱然ヒ會同開議ニ於テ他ノ諸邦カ英國ノ意見ヲ採用スルトモ又ハ之レヲ修正スルトモ其儀ニ拘ハラスシテ弊國ハ其會議ノ結果ヲ善惡トモニ全ク之レヲ英國ノ行爲ニ歸スル筈ニ有之是レ自然ノ理勢ニ候右ノ次第ニ付拙者ハ未タ夫ノ會同開議ノ現今ニ急須ナル所以ヲ認定難致尤モ本件ニ付キ閣下如シ能ク其說明ヲ惠マル、コトヲ恪守シテ一モ違犯セシコトハ無之然リ而シテ千八百七十二年ニ至リ固トニ條約ノ明文ニ依テ諸般弊害ヲ修除シ得ヘキノ期ニ達スルモ我國ノ要求スル所ハ各國ニ在テ多クハ言ヲ左右ニ托シ常ニ緩漫淹滯ヲ以テ之レニ應シ延テ今日ニ及ヒタル儀ニ候今ヤ則我國勢ノ一日モ此ヲ容シ難キノ秋ニ會セルヲ以テ我政府ハ其公平ナル互相ノ格ニ基キタル新條約ヲ取結ハント欲スル適順ナル要求ニ於テ英國政府カ速カニ之レヲ承認シ復タ稽滯ヲ此ニ致ス莫ラン事ヲ切望スルコトニ候

又彼ノ裁判施行ノ問題ニ付テハ向來外國人ニ係ル事件ヲ裁判スル一良法ヲ設クル爲メニ實地有効ナル手續ヲ求メサル可カサル事是レ日本政府ノ今日ニ主張スル所ニ有之候從來領事ノ裁判タルヤ多クハ是レ唯タ正理公法ヲ戲弄スルモノニ過キス各國皆ナ自己ノ裁判所ヲ具ヘ自己ノ吟味方ヲ用ヒ曾テ諸邦ノ間ニ一致協同ノ事アル無ク證據人ハ其身所屬ノ領事廳ニ非サレハ出頭立合スルヲ拒ムコトヲ得ヘク又控訴裁判所ハ或ハ全ク存在セサルカ或ハ之レ有ルモ其隔遠ノ地ニ在ルヲ以テ實際其用ヲ達セス將タ或ル國ノ裁判官ハ全ク其任ニ適セサルモノアルニ至リ候是ニ於テ今般我政府カ改

モアラハ則拙者ハ每ニ之レヲ我政府ニ傳達スルヲ怠タラサル儀ニ有之候

偖又尊翰中ニ條約改正ノ斯ク遲延ニ及ヒタル罪ハ之レヲ英國ニ歸スルヨリモ寧ロ日本ニ歸スヘシトノ貴說御申述相成候得共拙者敢テ御同意難申候條此段不得已開陳致候抑モ新條約案ニ附加シタル約定書表ノ當時未タ出來セサルカ爲メニ久ク時日ヲ遷延セシメ頃ロ漸ク彼ノ會同開議ノ事ヲ御申出被成候譯ニ御座候哉右約定書類ノ儀ハ必ス貴國外務省ニ於テ能ク知悉セラレタル筈ニ候將又右ノ遷延ハ貴國カ他ノ各國ト其意見ヲ照會スルカ爲メニ之レヲ致シタル儀ニ候哉此等ノ理由ハ果シテ十善ナルヤ否ヤヲ今更ラ穿鑿スルハ不要ナリト愚考致候實ニ日本カ改正延期ノ爲メ蒙ムリタル損害ハ一朝一夕ノ故ニ非スシテ乃チ積年ノ不幸ニ有之今ヤ千八百五十八年條約ノ起原ト其効果如何ニ付拙者ハ余カ先任ノ論說ヲ玆ニ不贅候得共我國カ輒チ條約文面ノ爲メニ數年間ニ受ケタル損害ハ洵ニ莫大ナルモノニ有之然リ彼ノ條約ハ以テ我富國ノ道ヲ妨ケ以テ裁判ノ正理ヲ曲ケシメ又以テ外國人處分ノ際我國民ヲシテ其正邪曲直ヲ批議シ政府ノ信用ヲ傷フニ至ラシメタル儀ニ候然ルモ我政府ハ常ニ此條約正案ヲ提出シ外國政府ヲシテ其重大ナル責任ノ一部分ヲ免レシメント欲スルノ意ハ宜シク各國ニ於テ之レヲ前述ノ裁判方法ト相比較シテ其可否ヲ取捨アルヘキ筈ニ候去リ乍ラ萬一右ノ草案ニシテ其儘採可スル所タラサルモ今日ニ現存スル事物ノ情勢ハ必ス之レヲ修正センコトヲ要シ殊ニ日本行政規則ノ實施ニ關シテハ尤モ然リトスル儀ニ有之候且又將來內外人民ノ交際ヲ一層盛ンナラシメンニハ必スヤ裁判施行ノ良法ヲ設定センコトヲ要スルノ儀モ併セテ玆ニ御注意迄ニ申進候實ニ現今ノ情態ハ固トニ歎息スルニ足ルモ猶ホ且幸ニ開港場以內ニ止マリ他ニ及ボサヾルヲ得タル儀ニテ丐ソ復タ此慘狀ヲ內地一般ニ波及セシム可ンヤ是レ苟モ事理ヲ解スル政治家ノ同意スルニ忍ヒサル所ニ有之候

將タ通商事件ニ付テハ日本ノ要求スル所ハ是レ現ニ英國カ其植民屬國ニ付與シタルモノニ比スルモ更ニ少小ナリトシ加之ナラス彼ノ近年漸ク野蠻ヲ脫シタル國民ニ英國カ付與シタルモノヨリモ猶ホ少小ナル儀ニ有之候且ツ日本ハ或論者ノ說ニ數歩ヲ讓リ卽チ其論者ノ云フ所ハ凡ソ自國ノ富盛ヲ謀ラハ必ス先ツ其對敵國ノ貿易ヲ束縛痿養セシムヘシ此他良策アルヲ知ラスト爲スモ我政府ハ敢テ此說ニ由リ其策

ヲ執行スル自由ノ權理ヲ主張セス自カラ好ンテ倘ホ一時此權ヲ讓ルヘシト宣告被致候即チ其輸入稅ヲ定ムルニ當リ曾テ各國ニ對シ互相ノ稅額ヲ日本輸出品ニ置カンコトヲ要求セサル事ニ有之而シテ此輸出品ニハ各國中非常ノ苛稅ヲ課スルモノ有之候實ニ今般日本ノ要求スル所ハ一モ非義不要ナルモノニ無之皆是レ其國狀ノ古今一變シ且ツ多年ノ經歷ニ因リ判然公正ナリト認ムヘキ必迫ノ要求ニ有之候若シ英國ニシテ之レヲ處スルニ中正無偏ノ精神ヲ以テスルニ於テハ則他ノ各國モ蓋シ亦同樣ニ公正ノ處分ヲ此ニ致サンコトハ疑フヘクモ無御座果シテ然ランニハ條約改正ニ關スル體裁如何ノ如キハ是レ誠ニ本日論スヘキノ主眼ニ無之而シテ其細目小件ノ如キハ一會ノ協議ヲ開キ適當ノ說明ヲ以テ之レヲ調和スルモ亦タ可ナラント被察候

篇末ニ至リ申述度儀ハ閣下御來示ニ於テ各國假會議ノ事ハ歐洲ナル締盟各國ヲ會同スルニ在リト有之候事ニ候去リ乍ラ愚案ニ於テ貴政府ハ蓋シ此會議ニ合衆國或ハ淸國ヲ加入セシメサルノ意志ハ有之間敷ト存候實ニ此兩國ハ日本ト最モ重大ナル關繫アルモノニ候將タ其他苟モ我締盟國ナル以上ハ其米利堅ニ在ルト亞細亞洲ニ在ルニ拘ハラスシテ咸ナ

此會議ニ與カラシメテ然ル可シト被察候

蓋シ改正談判ヲ成就セントスル其體裁方法ニ付テハ固トニ意見ノ不同アルヲ見ルモ畢竟其達セント欲スル目的ニ至テハ則各國皆同說ナルヘシト致信察候所謂其目的ハ卽改正條約ノ談判ヲ速ニ結了シ凡ソ其今日ノ現狀ニ於テ必要ナル條款ヲ盡ク其中ニ記載スル事ニ候今日ハ是レ復タ微倖機巧以テ商賈ノ爲ニ傚フヘキ時ニ無之各締盟國ニハ宜シク其自己意見ヲ吐露シテ躊躇スヘカラサル筈ニ御座候日本ニ在テハ則業ニ已ニ其意見ヲ最モ公明實直ニ披露シ今只タ大英國ノ亦タ同樣ノ精神ヲ以テ之レニ應スルアランコトヲ期望スル耳

右ノ次第拙者ハ我政府ノ訓令ニ從ヒ前文數件ノ論點ヲ敢テ致捧呈候間何卒閣下ノ明亮ニ御說示アランコトヲ希望仕候敬具

一千八百八十一年八月九日

在倫敦日本公使館

森

英國外務卿閣下

註　1原文對照スルニ「海關稅ニ最高限ヲ定メ」トノ意ナリ

右原文ハ二三一附屬書參看、尙本文書ニツイテハ二六文書併テ參照アリタシ

附屬書四

丁號　十四年十月廿五日附英國代理公使來翰

條約改正ニ關シ各國共同會議開催方ノ件

拜啓然ハ我外務卿ヨリノ訓令ニ遵ヒ拙者左ノ通リ閣下へ御通知申候卽チ我政府ハ日英間條約改正ニ關スル貴政府提出ノ諸草案ヲ領收被致候事ニ有之右草案ハ千八百八十年七月六日ニ於テ拙者ノ閣下ヨリ落掌スル所ニシテ修好條約草案幷ニ之レニ附加シタル法權ニ係ル所ノ覺書及ヒ其注說書幷ニ通商航海條約草案ニ有之候將タ彼ノ約定書表ハ右諸草案ヲ完全スルニ必用ナルモノニテ千八百八十年十二月二十一日閣下ヨリ拙者へ御送付相成乃チ倫敦へハ本年二月廿八日ヲ以テ到達被致候

隨テ我政府ハ其平素貴政府ノ爲メニ存有スル友愛ノ精神ヲ以テ快然右草案ノ詮議ニ取掛リ乃チ直チニ歐洲各條約國へ照會ニ及ヒタル事ハ我外務卿ヨリ確報有之候儀ニシテ右條約各國へハ貴政府ヨリ右同樣ノ改正草案ヲ送付アリタルニ付斯ク我政府ヨリ照會スルノ目的ハ以テ各國共同ノ承諾ヲ便捷ナラシメント欲スルニ有之蓋シ條約改正ノ希圖スル目途ヲ達センニハ此共同ノ承諾ヲ得ルコト至テ要用ナル儀ニ可有之候

現今英日兩邦間ニ存スル條約ヲ改正スルニ當リ其要求ノ宜シク準守スヘキ廉ハ卽チ該條約第二十二條ニ定メタルモノニ有之其條ニ云ク

「兩締盟國ノ各方ハ實施經驗ノ上其判然修正セント欲スル箇條アルニ於テ之レヲ本條約ニ加入セシムルノ目的ヲ以テ千八百七十二年七月一日以後ハ條約改正ノ事ヲ要求スルヲ得ヘシ」ト

附箋

條約類纂第百十九枚目

英吉利條約第廿二條ニハ和文左ノ如シ　高「朱書」

兩國ニテ條約ノ實地ヲ驗シ改革セン事ヲ求ル時ハ其一年前ニ通達シテ再驗ヲ爲スヘシ其事ハ今ヨリ凡十四年ノ後ニ在ルヘシ」

千八百七十二年中貴政府ヨリ條約改正ノ爲メ大使ヲ英國へ

特派被成候節我政府ハ直チニ之レト改正談判ヲ開カントテ其用意被致候儀ハ定メテ貴政府ノ御存知ニ可有之然ルニ右大使ハ其政府ノ意見一變シタルノ故ヲ以テ乃チ英國ヘ到着ノ節ハ此談判ヲ謝辭シテ遂ニ開議ニ至ラサルコト是亦御存知可有之候爰ニ於テ本件ハ貴政府ノ志願ニ依リ千八百七十八年迄延期スルヽヿコ相成爾後二三ノ照會ヲ貴我ノ際ニ預シメ往復シタル末貴政府ハ右談判ヲ東京ニ於テ開クヘキ旨御申出相成候ニ付我政府ハ無何異議早速御同意ニ及ヒ隨テ貴政府ノ將ニ現行條約ニ加ヘント欲スル修正ノ條件ハ何等有之候哉承知致度旨申進候儀ニ候

夫ノ前述セル改正二案中ニ所見ノ修正箇條ノ如キハ蓋シ現條約第二十二條ニ定ムル廉ト相一致スルモノトハ難認候其故ハ右ノ修正箇條ハ其希圖スル所獨リ所謂修正ノ策ニ止マラスシテ實ニ現條約ノ全體ヲ奪換シ之レニ代フルニ數多要件ニ於テ甚タ差異アル二個ノ新規條約ヲ以テセント欲スルモノニ有之候

右改正草案中ニ定ムル條款ハ大ニ其影響ヲ在日本英國臣民ノ身分ニ及ボスヘキモノニシテ其所有スル治外特權ハ大ニ短縮セラルヘク其從來在日本ナル英國官吏ヨリ受ル施政上幷ニ裁判上ノ保護ヲ禦ハルヽコト多ナルヘク而シテ渠等ハ方ニ二樣ノ管轄ヲ奉シ之レニ服從スヘキ次第ニ相成可申卽チ其一ハ英國ノ法權ニシテ其一ハ日本ノ法權ナリトス此事ヤ恐クハ和順シテ竝行シ難ク遂ニ貴政府カ今般ニ修正セント御望被成候モノニ比スレハ一層巨大ナル困難紛議ヲ生スルコト蓋シ可有之候

又英國臣民ノ貿易上ニ係ル利益モ貴政府提出ノ海關稅則ニ揭クル割合ニ由レハ痛ク損害ヲ蒙ムル次第モ可有之此ノ如キ過高ノ割合ハ必ス彼ノ貴我兩國ノ爲メ方今勸奬セサル可ラサル通商擴張ノ事ヲ傷フコト明白ニ有之候

將タ又貴國カ千八百五十八年ニ現行條約ヲ訂結セシ以還著シキ進步ヲ爲サレタルニモ拘ハラス貴政府ハ外國人ニ對シ一モ新規ノ讓與ヲ爲サントスル御申出モ無之却テ彼輩カ舊條約ニ依テ得タル權利ノ中幾分ヲ禦奪シ且ツ其內地旅行竝ニ內地通商ニ係ル現在ノ制限ヲ將來ニ持存センコトヲ御申出相成候儀我政府ノ遺憾ト思惟スル所ニ有之抑モ右ノ制限ハ未タ國情人心ノ靜定セサル間コソ必要ナルモノニ候也仍ホ又貴政府ハ斯ク外人ニ對シテ其自國民ニ付與セル同一ノ特權ヲ向後モ付與セザルカ上ニ其從來外人ニ賦課シタル貴キ地租ヲ依然存在セシメ非常ノ課銀ヲ此科目ヨリ取立テ且ツ其上ニ別他ノ稅金ヲ加賦センコトヲ希圖被成候

故ニ此條約草案ヲ以テ改正談判ノ適當ナル基礎トスルコトハ我政府於テ承諾シ能ハサル儀ニ有之候元來裁判權ニ關シ日本政府ヨリ發題セラレタル論點ハ（修好條約ノ趣旨ハ殆ント全ク此裁判權ノミニ係ル）至大至要ナルヲ以テ方今御改正中ト被存候日本政府ノ法律ト其裁判院ノ章程幷ニ裁判法ノ性質如何トヲ慥密ニ査究致シ候上ナラテハ容易ニ之ヲ取計可申場合ニ至リ難ク候然レトモ外國人ニ關係スル地方行政規律竝ニ警察規則ヲ實施セシムル事及ヒ通商條約中ニ揭載スル所ノ數件ニ至リテハ雙方承諾ノ地位ニ達スルエトハ敢テ難事ニモ無之且ツ之ヲ完結候ニハ東京ニ於テ豫メ各國共同會議ヲ開キ候方最モ上策ト我政府於テ信用致候

故ニ我政府ハ其公使ニ指令シテ東京ニ於テ日本政府及該府駐劄外國公使ト豫シメ各國共同會議ヲ開カシメ以テ舊條約中ニ就キ其年來ノ經驗ニ由テ修正ヲ今般ニ要スル箇條ハ果シテ如何ヲ示談シ一致ノ承諾ヲ求メ而シテ歐洲締盟各國ノ齊シク其承諾ヲ此ニ致シタル上ハ之ヲ以テ新條約若クハ改正條約ノ基礎ト致ス可キ見込ニ有之候然ル上ハ締盟諸國ハ東京ナリ歐洲ナリ其便宜ト思考スル所ノ地ニ於テ各自別々ニ條約ヲ締結シ其體裁ハ新條約ト作スモ又ハ現存條約ニ附加スル約定書ト成スモ是レ皆ナ各國ノ意ニ任シテ差支無之儀ニ候

蓋シ上述ノ意見ハ歐洲締盟諸國ニ於テモ同意致シ各此趣旨ニ隨ヒ在東京ノ其公使ニ訓令ヲ下ス可キハ我政府於テ充分信察スル所ニ有之候

前顯我政府見込ノ趣ハ拙者訓令ニ隨ヒ今般閣下ヘ御通知及ヒ候且ツ條約改正ノ談判ニ渉ランタメ右ニ提出スル方法ノ如キハ全ク日本政府ノ改正草案ニ對シ最モ懇切ナル心情ヨリ發シタル儀ニ有之候聞右ハ必ス貴政府ノ御承諾ニ預リ以テ本件ヲ調整完結スルノ媒酌ト相成ルヘキコトヽ我政府於テ深ク希望致シ候此段得貴意候敬具

一千八百八十一年十月廿五日

在日本英國代理公使

ゼ、デ、ケネデー　手記

外務卿　井上　馨閣下

五五　明治十四年十月二十一日　井上外務卿ヨリ三條太政大臣宛

森特命全權公使歸朝申請ニツキ請訓ノ件

附屬書一　イ十四年十月二十一日發森公使來電
東京ニ於ケル商議ニ參列方申越ノ件
ロ十四年十一月二日發森公使來電
右回答催促ノ件
二　十四年十一月五日附森公使宛往電
任地滯留方回答ノ件
三　十四年十一月五日發森公使來電
歸朝理由申報ノ件

英國駐劄森特命全權公使ヨリ條約改正ノ事ニ關シ一旦歸朝可致旨電信ヲ以テ別紙甲號ノ通申越候ニ付別紙乙號ノ通リ其義ニ不及旨電報置候處尙又別紙丙號ノ通リ申越シ右最後電報ノ趣ニテハ海關稅ノ一事ニ關シ必然我請求ヲ可遂確見有之哉ニ相見候然ル上ハ一旦歸朝爲致前件談判ノ義悉皆御委任相成可然義ニ可有之哉一應相伺候若シ其義ニ不及トノ事ニ候ハヽ歸朝ニ不及旨重ネテ電報可致候哉至急何分ノ御裁令有之候樣致度此段相伺候也

附屬書一

甲號イ　十四年十月二十一日發森公使來電
東京ニ於ケル商議ニ參列方申越ノ件

Though personally inconvenient, I am able, if desirable, safely leave Legation in London for six months to assist negotiations Tokio, particularly respecting commercial matters.

Oct. 21, 1881.

甲號ロ　十四年十一月二日發森公使來電

Please telegraph what is your opinion respecting my telegram of 21 October.

Nov. 2, 1881.

附屬書二

乙號　十四年十一月五日附森公使宛往電
任地滯留方回答ノ件

Stay in your post, as your presence there is very important as soon as we shall open here preliminary about Treaty revision.

Nov. 5, 1881.

附屬書三

丙號　十四年十一月五日發森公使來電
歸朝理由申報ノ件

My reason for offering assistance is based on strong conviction of securing full freedom of tariff and my absence safe till discussions renewed in Europe as British Government alone decide nothing and Europe will be guided by advices through their representatives at Tokio.

Unless this telegram changes your views, I will remain.

Nov. 5, 1881.

五六　明治十四年十一月八日　森駐英公使ヨリ井上外務卿宛

東京會議ニ付歸朝ノ件

附屬書　十四年十一月十七日森公使來電一、二
我方改正草案撤回方意見開申ノ件

機密信第五拾貳號

我國ノ權威ヲ保持シ行爲全ク自由ヲ得ルノ域ニ入ルヘキタメ我提出ノ約案回收ヲ公告スルコト又東京會議ハ通商事件ニ關シテハ各國ト別ニ商議スヘキ充分ノ權理アルコトヲ約定シテ之ヲ肯諾アリ度トノコト十月十七月電信ヲ以建議シ同月廿一日自記ノ私事ニハ不便アレトモ東京會同殊ニ通商事件ノ商議ニ參賛ノ爲メ六箇月間歸京差支ナキ旨ヲ電報セシニ何等ノ回敎ヲモ得ス再應電報ノ末十一月五日ニ至リ本使任所ニ滯在スヘキ旨ヲ指令セラレ於是本使ノ歸朝ヲ要セラレサルコトヲ領知セリ然トモ本使ヨリ歸京ノ議ヲ發シタル理由ヲ明言スルハ不急ニ非ストシ更ニ電信ヲ以歸朝參賛ノ意見ヲ呈シタル所以ハ海關稅割ハ全ク自由專定ヲ得ヘキ見込アリ且再ヒ歐地ニ於テ商量ヲ要スル日マテハ本使歸朝スルモ差支ナシ是英一政府ニテ何事ヲモ獨斷スル能ハス歐洲諸國ハ在東京使臣ヨリノ建議ニ因テ處置スヘケレハナリ若シ此電信ニ依リ閣下ノ御意見一變セサレハ本使當地ニ在勤スヘシトノ旨ヲ說明セシニ今日迄指令ヲ得ス因テ目今本使ノ卑見ヲ呈スルモ無用ト考ヘ一言ニ及ハス只前日來發電ノ手續ノミ申進置候也

明治十四年十一月十八日

特命全權公使　森　有禮

外務卿　井上　馨殿

附屬書

十四年十月十七日發森公使來電一

我方改正草案撤回方意見開申ノ件

Parkes will leave Marseilles 13 November. Strongly recommend to withdraw at once our draft Treaty in order to maintain our dignity and enjoy entire freedom of action.

Oct. 17, 1881.

十四年十月十七日發森公使來電二

Earnestly hope proposed joint negotiation be only acceded to on stipulating our full right to negotiate separately with each Power on commercial matters. My advice is based on present condition of European affairs.

Oct. 17, 1881.

五七 明治十四年二月十日 在英國非上外務卿公使ヨリ

貴官倫敦府滯在ヲ最モ可然旨通達ノ件

附屬書 十四年十二月五日附森公使宛往電

外務卿 井上 馨

特命全權公使 森 有禮殿

機密第三十四號

條約談判ヲ開キ候上ハ貴官倫敦府ヘ御滯在相成候方最モ可然旨内閣於テ決議相成候儀ニ付本月五日發電致シ候ニ付右寫爲念差進候也

附屬書

十四年十二月五日附森公使宛往電

閣議ノ意向通達ノ件

Your telegram November fifth had full considerations by cabinet and decided your presence in London is more necessary than in Tokio when negotiation opened.

Dec. 5, 1881.

五八 明治十四年二月七日 在英國非上外務卿公使ヨリ

條約改正豫備會議參加方奏請ノ件

謹啓陳者先般貴政府ヨリ御提出相成候條約二章案ヲ現行條約改正談判ノ基礎トスル事ハ我政府於テ承諾シ能ハサル旨去ル十月廿五日附「拙翰ヲ以テ閣下ヘ御通知及ヒ置候就テハ今般拙者義同條ノ閣下駐剳各國公使ト共ニ締盟諸國ヨリ發題スル所ノ會同預議ニ貴政府ノ御入會アラン事ヲ可申入旨我政府ヨリ指令有之候條此段及御通知候此會同發議ノ旨趣ハ前顯書簡ニテ既ニ及陳述置候通リ現行條約中經驗上修正セサル可ラサル場合ニ立至リタル條件如何ニ關シ先ツ諸締盟國ヲシテ一致承諾スルノ途ヲ得セシメ而ル後右關係ノ諸國政府ニ於テ其修正ノ條件ヲ認可シタル上ハ則チ之ヲ以テ條約改正ノ基礎ト爲ス儀ニ有之候右ニ發題シタル方法ハ一ハ以テ外國貿易ノ利益ヲ謀リ又以テ貴政府ノ要望スル所ヲ顧ミ成ル丈ケ此兩點ヲ和合セシメ且ツハ諸締盟國ト日本國トノ間ニ幸ニ現存スル友誼ヲ鞏固ナラシムルノ旨趣ヨリ相生シ候儀故貴政府於テモ御承諾可相成事ト我政府於テ深ク冀望致シ候此段得貴意候敬具

一千八百八十一年十二月七日

江戸

ジェー、ジー、ケネデー

外務卿 井上 馨閣下

註 一五四文書附屬書四

(右原文)

Yedo

December 7, 1881.

Sir,

With reference to my note of the 25th October last in which I informed Your Excellency that my Government declined to accept as a basis of negotiation for the revision of the Existing Treaties the two Draft Treaties proposed by your Government I have now the honour to inform Your Excellency that I have been instructed by my Government to join my colleagues, the foreign Representatives at this Court in inviting your Government to enter on the conjoint preliminary negotiations proposed by the Treaty Powers.

The object of these preliminary negotiations, as I have already stated to Your Excellency in the above mentioned note, is to enable all the Treaty Powers to arrive at an agreement as to the amend-

ments in the existing treaties which experience has proved to be desirable, and which, after being approved by all the Governments concerned, shall serve as a basis for the revision of those Treaties.

Her Majesty's Government confidently trust that the proposed course of proceeding will be acceptable to the Government of the Mikado, as it has been prompted by a desire to reconcile as far as possible the requirements of His Imperial Majesty's Government with the interests of foreign commerce and to strengthen the friendly relations which now happily exist between all the Treaty Powers and Japan.

I take this opportunity of renewing to Your Excellency the assurance of my highest Consideration.

J. Kennedy.

To

His Excellency,

Inouye Kaoru,

Minister for Foreign Affairs.

有之候

然レトモ又現存ノ條約ニ改正ヲ加ヘ更ニ雙方ノ得利便益ヲ計リ之レヲ實際ニ徵シテ良好ナル協議ヲ要スヘシト看做ス所ノ事項ヲ改正スルハ我政府素トヨリ異存無之候且ツ我政府ハ該事件ニ就キ可成的日本國ニ協同致スヘキ希望ニ外ナラスシテ殊ニ又親密ナル交際ヲ維持確保セント欲スルノ切ナルコトハ閣下素トヨリ御洞知ノ事ト存セラレ候

此故ニ我獨逸政府モ亦歐羅巴ノ諸條約國ト共ニ現行ノ條約規則ヲ改良シ改正ノ區域及ヒ其件目ニ干スル談判ヲ直チニ此東京ニ於テ相開クヘキ儀ニ就テハ我カ獨逸政府ノ正ニ承諾致ス所ナリ之レニ依テ我政府ハ拙者ニ右談判ノ訓令ヲ授ケ併セテ獨逸領事ツアツペー氏ヲ以テ第二ノ談判委員ト爲シ之ニ陪列致タサセ候事ニ相成候右各政府協同ノ趣旨ヲ關係アル各國政府ニ提出セラレ隨テ其各政府之レヲ受理シ之レニ據テ改正セラルヘキ所ノ條約ヲ各政府ト別々ニ當地又ハ外國ニ於テ夫々締結ノ運ビニ至ラセラレンコトハ我政府ニ於テ他ノ諸政府ト共ニ希望スル所ニ有之候

將又提出相成リタル第一着ノ談判ニ際タリ諸政府ノ贊成協同ヲ博セラレン事ハ我カ獨逸政府ノ一段希望スル所ニ御座

五九　明治十四年十二月七日　獨逸公使ヨリ井上外務卿宛

條約改正會議開催方ニ關スル獨逸政府ノ意嚮通告ノ件

第二十七號

以書簡致啓上候陳ハ拙者今般我カ政府ノ訓令ニ據リ客歲七月六日附[1]幷ニ十二月二十一日附[2]ノ貴翰ニ關シ即チ貴我兩國間ニ締結アリシ條約改正ノ儀ニ就キ拙者陳述ノ趣意ヲ結局セン爲メ左ニ御回答申進候

抑モ貴政府ニ於テ御編成相成リタル條約書改正草案及ヒ右ニ干係ノ書類中掲載ノ趣旨ニ就キ我帝國政府ハ他ノ條約國ト協議ヲ遂ケ篤ト考察致候處該案ハ啻ニ全ク至當ナラサルノミナラス且ツ貴政府ニテ該草案ノ如ク負擔セラルヽニ於テハ方今日本國ノ責任高度ニ達シ兩國間良好ナル交際ノ進歩ニ不利益アルヘキコトヽ玆ニ確言セスンハアルヘカラス且ツ獨逸政府ノ意見ニ據ルニ果シテ該草案ヲ受理スルニ於テハ之レカ爲メ殆ト避クヘカラサルノ障碍ヲ來タシ種々ノ難事ヲモ惹起スヘシト考慮致候間乍遺憾該草案ヲ至當ト認メ難ク即チ之レヲ以テ改正談判ノ基礎ト看做シ難キ次第ニ

候

右ノ趣ニ付尚ホ閣下ノ御思慮ヲ煩度如斯ニ御座候敬具

東京千八百八十一年十二月七日

フォン、アイセンデッヘル

自記

外務卿　井上　馨殿閣下

註　1及2ハ一八及三七文書ナリ

（右原文）

No. 27.

Tokio, den 7 December 1881.

Euerer Excellenz beehre ich mich im Anschluss an meiner hohen Regierung und im Anschluss an meine mündlichen Mittheilungen auf die sehr gefälligen Noten vom 6. Juli und 21. December v. J., betreffend die Revision des zwischen Deutschland und Japan abgeschlossenen Vertrages Nachstehendes ganz ergebenst zu erwidern. Nach eingehender Erwägung der von Euerer Excellenz hohen Regierung ausgearbeiteten Vertrags-Entwürfe, sowie der dazugehörigen weiteteren Schriftstücke, ist die Regierung Seiner Majestät des Kaisers in Überein-

stimmung mit anderen Vertragsmächten zu der Überzeugung gelangt, dass es nicht ganz billig und auch für die fernere Entwicklung der gegenseitigen guten Beziehungen nicht vortheilhaft sein würde Japan gegenwärtig ein so hohes Maass von Verantwortung aufzuerlegen, wie Ihre hohe Regierung es nach den vorgelegten Entwürfen eventuell zu übernehmen bereit ist.

Die Deutsche Regierung sieht sich daher, in Anbetracht der ihrer Ansicht nach kaum zu vermeidenden nachtheiligen Folgen und mannigfachen Schwierigkeiten, welche aus einer Annahme der vorerwähnten Entwürfe entstehen durften, zu ihrem besonderen Bedauern ausser Stande jene Vorschläge zu aczeptiren oder dieselben als geeignete Basis für Revisions-Verhandlungen anzusehen.

Auf der anderen Seite verkennt die Regierung Seiner Majestät keineswegs die Zweckmässigkeit solcher Modifikationen des bestehenden Vertrages, die den veränderten beiderseitigen Bedürfnissen und Interessen Rechnung tragen und welche die Erfahrung als für die Förderung des guten Einvernhmens

nutzlich erscheinen lässt. Es ist im Übrigen, wie Euere Excellenz Sich versichert halten wollen, der Wunsch meiner hohen Regierung dem Japanischen Reich in dieser Angelegeheit nach Möglichkeit entgegenzukommen und damit aufs Neue zu bethätigen, dass sie auf die Erhaltung und Befestigung freundschaftlicher Beziehungen besonderen Wert legt.

Im Einverständniss mit den übrigen Europäischen Vertragsmächten erklärt sichdeshalb die deutsche Regierung bereits, sofort in Tokio in gemeinsame Vorverhandlungen über die Gesichtspunkte und Grenzen einer Revision und die wünschenswerthen Änderungen der bestehenden Vertagsbestimmungen einzutreten. Sie hat zu diesem Behufe mich mit den erforderlichen Instruktion en versehen und den kaiserlichen Konsul Herrn Zappe angewiesen eintretenden Fallles als zweiter deutscher Delegirter den Berathungen beizuwohnen. Die Regierung Seiner Majestät ist ferner mit anderen betheiligten Mächten der Ansicht, dass die so getroffenen Vereinbarungen den respektiven Regierungen vorzulegen und von

denselben zu genehmigen sein würden und dass als dann die dementsprechend zu modifizierenden Verträge selbst, einzeln und getrennt mit jeder Regierung, entweder hier oder ausserhalb Japan abgeschlossen werden können.

Die deutsche Regierung giebt sich der zuversichtlichen Hoffnung hier, dass es gelingen werde in den vorgeschlagenen Präliminar-Verhandlungen durch Wohlwollen und Entgegenkommen von jeder Seite eine befriedigende Einigung zu erzielen.

Indem Euerer Excellenz ich hiernach weitere Entschliessungen anheimstelle, darf ich meiner vorzüglichen Hochachtung erneuten Ausdruck geben.

v. Eisendecher

An
den Minister der Auswärtigen Angelegenneiten
Herrn Inouye Kaoru
Excellenz
hier.

(和譯略ス)

Translation.

German Legation. Tokio, December 7, 1881.
No. 27

Acting under instruction from my Government and in connexion with my verbal communications, I have the honour to lay before Your Excellency the following answers to the courteous notes of the 6 July and 21 December of last year, referring to the Revision of the Treaty concluded between Germany and Japan.

After careful examination of the new draft treaties elaborated by Your Excellency's Government, as well as of the other documents annexed thereto, the German Government, in concert with other treaty powers, feels persuaded that it would not be equitable and just nor advantageous for the further development of reciprocal good relations to burden Japan at present with such great responsibilities as Your Excellency's Government, according to the drafts submitted, is prepared eventually to undertake.

Taking into consideration the inevitable disadvantages and manifold difficulties which are likely to

arise from an adoption of the above mentioned draft treaties, the German Government much regrets that it cannot accept these proposals nor consider them as a suitable basis for negotiations.

On the other hand His Majesty's Government fully recognises the utility of such modifications in the existing treaty which may correspond to the altered requirements and interests of the contracting parties and which practical experience shows suitable for the furtherance of a good understanding. Moreover Your Excellency may feel assured that it is the desire of the German Government to meet as much as possible the wishes of the Japanese Government in this matter and thus to prove the value it attaches to the maintenance and strengthening of mutual friendly relations.

His Majesty's Government therefore, in concert with other European treaty powers, declares itself ready to enter at once into conjoint preliminary negotiations here in Tokio in order to arrive at an understanding about the aims and limits of a revision and the desirable alterations in the existing

treaties. My Government has fo· this purpose furnished me with the necessary instructions and has besides appointed Mr. Consul Zappe as second delegate of Germany in the proposed deliberations. My Government further shares the opinion of other powers concerned that the agreements thus arrived at should be submitted to and sanctioned by the respective governments and that the treaties themselves modified on the base of such agreements might be concluded separately with each government either here or outside Japan.

His Majesty's Government entertains the earnest hope that mutual good-will and friendly sentiments on all sides will bring about a satisfactory understanding in the proposed preliminary negotiations.

Whilst respectfully awaiting Your Excellency's further decisions, I avail myself of the opportunity to renew the assurance of my highest consideration.

signed Eisendecher.

His Excellency

Inouye Kaoru

Minister for Foreign Affairs.

六〇　明治十四年十二月七日　墺國公使ヨリ井上外務卿宛

豫議會開催方ニ關スル墺國政府ノ意嚮通告ノ件

十二月九日到

以書簡致啓上候陳ハ拙者今般我カ政府ノ訓令ニ據リ客歳七月六日附幷ニ十二月二十一日附ノ貴翰ニ關シ卽チ貴我兩國間ニ締結シタル條約改正ノ儀ニ就キ左ニ御回答申進候

抑モ貴政府ニ於テ御編成相成リタル條約書改正草案及ビ右ニ干係ノ書類中揭載ノ趣旨ニ就キ我帝國政府ハ他條約國ト協議ヲ遂ゲ篤ト推敲致候處該案ハ雷ニ全ク至當ナラザルノミナラズ且ツ貴政府ニテ該草案ノ如ク負擔セラルヽトキハ方今日本國ノ責任高度ニ達シ兩國間良好ナル交際ノ進歩ニ却テ不利益アルヘシト玆ニ確信セザルヲ得ス候

且ツ墺國政府ノ意見ニ據ルニ果シテ該草案ヲ受理スルニ於テハ之レガ爲メ殆ト避クヘカラサルノ障碍ヲ來タシ種々ノ難事ヲモ惹キ起スヘシト考慮致候間乍遺憾該草案ヲ至當ト認メ難ク之レヲ以テ改正談判ノ基礎ト看做シ難キ次第ニ有之候

然レトモ又現行條約ニ改正ヲ加ヘ更ニ雙方ノ得利便益ヲ計リ之レヲ實際ニ徵シテ良好ナル協議ヲ要スヘシト看做ス所ノ事項ヲ改正スルハ我政府素トヨリ異存無之候

且ツ我政府ハ該事件ニ就キ可成的日本國ニ協同可致希望ニ外ナラズシテ殊ニ又親密ナル交際ヲ維持確保セント欲スルノ切ナルハ閣下素トヨリ御洞知ノ事ト存セラレ候

此故ニ我墺國政府モ亦歐羅巴ノ諸條約國ト共ニ現行ノ條約規則ヲ改良シ改正ノ區域及ヒ其件目ニ干スル協同豫議ヲ直チニ此東京ニ於テ可相開儀ニ就テハ我カ墺國政府ノ正ニ承諾スル所ナリ之レニ依テ拙者今般我政府ヨリ右談判ノ訓令ヲ受領致候

右各政府協同ノ趣旨ニ據リタル草案ヲ關係ノ各國政府ニ提出セラレ隨テ各國ノ政府之レヲ受理シ然ル後之レヲ各政府ト別々ニ當地又ハ外國ニ於テ夫々締結ノ運ビニ至ラセラルヘキ爲メ之レヲ以テ條約改正談判ノ基礎ニ充テラレン事ハ我政府ニ於テ他ノ諸政府ト共ニ希望スル所ニ有之候

將又提出相成リタル第一着ノ談判ニ際シ諸政府ノ贊成協同ヲ博セラレン事ハ我カ墺國政府ノ一段希望スル所ニ御座候

右ノ趣ニ付尚ホ閣下ノ御意慮ヲ質度如斯ニ御座候敬具

東京千八百八十一年十二月七日

ホッフメル フォン ホッフェンフェルス

自記

外務卿 井上 馨閣下

(譯文)

Tokyo, den 7, December 1881

Euer Excellenz,

Euerer Excellenz beehre ich mich im Auftrage meiner hohen Regierung auf die sehr gefälligen Noten vom 6. Juli und 21. December v. J. betreffend die Revision des zwischen Oesterreich-Ungarn und Japan abgeschlossenen Vertrags Nachstehendes ergebenst zu erinnern.

Nach eingehender Erwägung der von Euer Excellenz hohen Regierung ausgearbeiteten Vertragsentwürfe, sowie der dazu gehörigen weiteren Schriftenstücke ist die Regierung Seiner Majestät des Kaisers und Königs in Uebereinstimmung mit anderen Vertragsmächten zu der Ueberzeugung gelangt, dass es nicht ganz billig und auch für die

fernere Entwicklung der gegenwärtigen guten Beziehungen nicht vortheilhaft sein würde, Japan gegenwärtig ein so hehes Mass von Verantwortung aufzuerlegen, wie Ihre hohe Regierung es nach den vorgelegten Entwürfen eventuell zu übernehmen be reit ist.

Die K & K Regierung sieht sich daher in Anbetracht der ihrer Ansicht nach kaum zu vermeidenden Schwierigkeiten, welche aus einer Annahme der vorerwähnten Entwürfe entstehen dürften, zu ihrem besonderen Bedauern ausser Stande, jene Vorschläge zu acceptieren oder diesselben als geeignete Basis für die Revisions-Verhandlungen anzusehen.

Auf der anderen Seite verkennt die Regierung Seiner Majestät keineswegs die Zweckmässigkeit solcher Modifikationen des bestehenden Vertrages, die den veränderten beiderseitigen Bedürfnissen und Interessen Rechnung tragen und welche die Erfahrung als für die Förderung des guten Einvernehmens nützlich erscheinen lässt.

Es ist im Uebrigen, wie Euer Excellenz Sich versichert halten wollen, der Wunsch meiner hohen Regierung, dem Japanischen Reiche in dieser Angelegenheit nach Möglichkeit entgegen zu kommen und damit aufs Neue zu be stätigen, dass sie auf die Erhaltung und Befestigung der freundschaftlichen Beziehungen besonderen Werth legt.

Im Einvernehmen mit den übrigen europäischen Vertragsmächten erklärt sich deshalb die K & K Regierung bereit, sofort in Tokyo in gemeinsame Vorverhandlungen über die Gesichtspunkte und Grenzen einer Revision und die wünschenswertheesten Aenderungen der betreffenden Vertragsbestimmungen einzutreten und bin ich zu diesem Behufe von meiner hohen Regierung mit den erforderlichen Instruktionen versehen worden.

Die Regierung Seiner Majestät ist ferner mit anderen betheiligen Mächten der Ansicht, dass so getroffenen Vereinbarungten den respektiven Regierungen vorzulegen und von denselben zu genehmigen sein würden, um sodann der Revision selbst der Verträge, die mit den verschiedenen Regierungen einzeln und getrennt entweder hier oder ausserhalb Japans vorgenommen werden könnt, zur allgemeinen Basis zu dienen.

Die K & K Regierung gibt sich der zuversichtlichen Hoffnung hin, dass es gelingen werde, in den vorgeschlagenen Präliminar-Verhandlungen durch Wohlwollen und Entgegenkommen von jeder Seite eine befriedigende Einigung zu erzielen.

Indem ich Euerer Excellenz hiernach weitere Entschliessungen anheimstelle, benutze ich noch diesen Anlass zur erneuerten Versicherung meiner ausgezeichnetsten Hochachtung.

Hoffer von Hoffenfels.

Seiner Excellenz
Herrn Inouye Kaoru
Kaiserlich Japanischen Minister des Aeussern.

六一 明治十四年一月八日 在佛上國公使ヨリ差出

我條約國ノ追認及京會商提議ノ件

以書翰啓上候陳者先般口頭ヲ以テ閣下ニ及御報知候後ニ付當政府ニ於テハ閣下ヨリ千八百八十一年七月六日ヲ以テ

御送致相成シ條約改正ノ草案ノ旨趣ハ甚タ以テ遺憾ノ至リニ候得共承認致兼候旨閣下ヘ御報道可申トノ下命之有并ニ吾政府ハ兩國ノ利益ヲ保護シ且幸ヒニ締結セシ友誼ヲ益々敦厚ナラシムル可キ條約改正ノ基礎ニシテ後日吾政府ノ認可ヲ要スヘキモノヲ設定スルカ爲メ東京ニ於テ此談判ヲ開キ差支無之段速カニ閣下ニ御報知可申旨拙者ニ許可有之候儀ニ候ニ付テ申進候斯吾政府ヨリ拙者ノ擔任トシテ付與セシ此職務ニ付若シ兼テ承知致居候通リ締盟各國ノ協同希望スル所ノ熟議ニ至ルヲ得ルニ於テハ此上モナキ幸福ノ事トス存候敬具

千八百八十一年十二月八日

於東京

ロケット

外務卿 非上馨閣下

(右原文)

Tokio, le 8 décembre 1881.

Monsieur le Ministre,

Me référant à la communications verbale que

j'ai eu l'honneur de faire à Votre Excellence il y a quelques mois, je suis chargé par mon Gouvernement de Lui annoncer que c'est avec un vif regret qu'il ne croit pas pouvoir accepter le projet de révision des traités que vous lui aviez adressé à la date du 6 Juillet 1881.

Je me hâte d'ajouter que le Gouvernement de la République m'autorise à porter sans délai à Votre connaissance qu'il est tout prêt à entamer à Tokio des négotiations ayant pour but d'etablir, sous réserve de son approbation ultérieure, les bases d'une révision de nature à sauvegarder les intérêts de nos deux pays, et à resserrer encore, s'il est possible, les liens d'amitie qui les unissent si heureusement.

Je m'estimerai particulièrement heureux, si, dans la tâche qu'il m'est donné d'entreprendre, je puis réussir à arriver à une entente, que les Puissances Signataires désirent, je le sais, d'un commun accord.

Veuillez agréer, Monsieur le Ministre, les assurances de ma très haute considération.

Roquette

Son Excellence
Monsieur le Ministre
des Affaires Etrangères
à Tokio.

六二 明治十四年二月四日 在露國公使ヨリ外務卿宛

條約改正ニ付各國ト共同諭議會開催方ノ件

露公使來翰大意

貴國ト我國トノ間ニ存立ノ條約ニ代用可相成御所望ニテ條約改正草案二通相添我政府ヘ可及廻送旨千八百八十年七月ヲ以テ拙者ヘ御通知相成候右草案我政府ヲイテ愼密ニ調査被致候貴國ノ益開進ニ赴キ益幸福ナラン事ハ我政府ノ希望スル所ニ候得共右草案中ニ條約改正論議ノ全體ニ適當不致御發論相見候歟テハ我政府ハ各國交際官ト共同諭議ヲ開キ一致ノ道ヲ以テ改正一件議定イタシタキ見込ニ御座候右貴政府オヰテ御承諾相成候ハヽ各別條約改正ノ基礎ト相成可申ト存候

右ノ目的ニテ拙者ハ各國ト共同諭議可致旨命令相受候此段得貴意候也

十四年十二月十四日 (露曆十二月二日)

スツルウエ

井上外務卿閣下

註 露語原文ハ之ヲ省略ス、別紙佛譯文ハ露語原文ニ添付シ來リタルモノナリ

(右佛譯文)

Traduction

Tokio, le $\frac{2}{14}$ Décembre 1881.

Monsieur le Ministre.

An mois de Juillet 1880 Votre Excellence a bien voulu me communiquer, pour être portés à la connaissance du Gouvernement Impérial, deux projets de traités que le Gouvernement Impérial Japonais désirait voir substitués aux traités actuellement existant entre la Russie et le Japon.

Ces projets de traités ont été soumis à un détaillé.(Sic)

Le Governement Impérial, tout en étant animé de sentiments d'un amical et sympatheque intérêt pour

le développement et la prospérité du Japon et tout en tenant compte des désirs du Gouvernement Japonais, trouve que les propositions contenues dans ces projets de traités ne s'accordent pas en tous points avec sa manière d'envisager la question de la révision des traites.

Le Gouvernement Impérial est d'avis qu'un examen préliminaire, conjointement avec les Représentants des autres Puissances intéressées, des questions impliquées dans la révision des traites aboutirait peut-être à une entente qui, si elle était approuvée par les Gouvernements respectifs, pourrait servir de base à la révision des différents traités,

Dans ce but je suis autorisé à prendre part aux négociations préliminaires qui pourraient avoir lieu entre les délégués du Gouvernement Impérial Japonais et les Représentant des Puissances ayant des traités avec le Japon.

Veuillez agréer, Monsieur le Ministre, l'assurance de ma haut considération.

Signé C. Struve.

Son Excellence

Monsieur Inouye Kaoru,
Ministre des Affaires Etrangères
de S. M. l'Empereur du Japon.
&c. &c. &c.

其開議ノ御用意有之タル趣然ルニ今般我政府提出候改正草案ハ二個ノ條約草案ノ體裁ヲ爲シソノ條款ハ曾ニ現行條約ノ修正ニ止マラス數多ノ要件ニ於テ甚タ現約ト相異スル所アリテ殆ト新規條約ニ代フルノ思慮アルカ如クニ察セラレ卽チ前ノ第二十二條ニ定ムル所ト適合候モノトハ認メ難シトノ事又[夕]改正草案中ニ定ムル條款ハ大ニ在日本英國人民ノ身位ニ關係シ其兼テ享有セル治外法權ヲ短縮セラルヘク且ツ其裁判ノ制度相和順シテ實際ニ行ハルヽ事難カルヘシトノ事又タ改正稅則草案中其課稅ノ割合重キニ過ルモノアリ貿易ノ擴張ニ害アルヘシトノ事又タ我政府ニ於テハ外國人ニ對シ一モ新規ノ讓與ヲ爲ス事ナクシテ却テ內地旅行及ヒ內地通商等ノ事ニ關スル現在ノ制限ハ依然尙之ヲ保續セントスルハ貴政府ノ遺憾トセラルヽ所ナリトノ事此彼ハ事由アルノ故ヲ以テ貴政府ニ於テハ我政府提出ノ草案ヲ以テ改約談判ノ適當ナル基礎トナス事ヲ御承諾難相成トノ事又我地方ノ行政律令幷警察規則ヲ外國人ヘ推及スル件及ヒ通商條約草案中ニ所揭ノ件々ニ關シテハ貴政府其公使ニ指令シテ東京ニ於テ先ツ各國公使ト豫メ共同ノ會議ヲ開キ各國ノ同意一致スル所ヲ定メ以テ日本ト各國トノ間ニ意解(ママ)ス

六三　明治十四年十二月十七日　井上外務卿ヨリ英國公使宛

改正條約草案及豫備會議ニ關スル件

公第二七九三號

以書簡致啓上候然者貴我兩國間ノ條約改正ノ爲メ冀キニ我政府ヨリ提出セル草案ニ付キ貴政府ヨリノ訓令ニ依リ其意見ヲ拙者ヘ御通知相成候本年十月廿五日附ノ尊翰落手披見致シ候處貴政府平素我政府ニ對スル懇親ノ衷情ヲ以テ快然右草案ヲ調査セラレ且ツ此條約改正ノ目的ヲ達センニハ各國ノ同意一致ヲ必要トスレハ此同意一致ヲ便捷ナラシメント欲シ直チニ歐洲各締盟國ヘ御照會有之タルトノ趣ヲ領シ誠ニ欣喜ノ至リニ存候

扨テ又貴下ノ御陳述ニハ現行條約ノ改正ヲ要求シ得ヘキ條款ハ卽チ日英間ノ條約第二十二條ニ定ムル所ノモノニ之レ有リ右樣ノ改正ヲ爲ス儀ハ往年ニ於テモ貴政府ハ一旦既ニ

ヘキ新規條約若クハ改正條約ノ基礎トナサント欲セラルヽトノ旨ニテ畢竟右考案ノ如キハ我日本政府ノ改正草案ニ對シ貴政府ノ最モ懇篤ナル情意ヨリ發シタル所ナレハ我政府ニ於テ之ヲ承諾シ右會議ヲ以テ此論件滿足ナル落着ニ至ランコトヲ貴政府深ク冀望セラルヽトノ趣ニ有之仍テ右貴翰ニ對シ拙者最モ懇親ノ意衷ヲ以テ二三ノ意見ヲ左ニ開陳シ併セテ貴政府ノ注意ヲ仰キ候其趣意タルヤ偏ヘニ各國ノ同意一致ヲシテ完全ノ上ニモ尙完全ナラシメント欲スルニ外ナラス候

貴翰中其言辭ノ慇懃ニシテ其趣旨ノ好和ナル且殊ニ貴政府カ我要求ノ改正談判ニ及ハルヘキノ趣ヲ明言セラレタル友情ノ淺カラサルハ我政府ノ實ニ深ク感喜スル所ニ有之此友情ノ懇切ナルヲ以テセハ談判ノ滿足ニ調成スルヤ斷シテ期スヘク更ニ疑ヲ容ルヘカラサル儀ト存候蓋シ我ヨリ提出セル草案ニ於テハ其體裁ノ儘ニテハ之ヲ御承諾ナサレ難キ趣ナリトハ雖トモ又タ貴翰ノ御趣旨ニ據レハ該草案ノ本旨タル我國ノ行政及理財上ニ關スル現今ノ數難件ヲ議シ以テ之レヲ匡救センコト貴政府ノ御承允有之ハ甚タ喜欣ニ堪ヘサル處ニ候依テ我カ草案中貴政府ニ於テ御承允難相成論點ニ

對シ我政府ノ趣旨ノ在ル所ヲ委ニ辨明可致候

我カ草案ノ體裁ニ付テハ現行條約第二十二條ノ文面ト相密合セストノ御議論ハアリトモ必スシモ貴政府ニ於テ該草案ノ旨趣ニ拘ハラス獨リ其體裁ノミニ關シ異議ヲ御主張相成儀ハ有之間布ト信シ候全ク該草案ハ現行條約施行以還年來ノ實際經驗上ニ據リ作案シタルモノニ有之義ハ貴政府ニ於テモ御承認可有之處ニシテ卽チ現行條約第二十二條ヲ遵守候義ト信用致シ候蓋シ該條款タルヤ唯タ經驗ニ依必要トスルノ改正ヲ爲シ得ヘシトノミアリ而シテ其改正ヲ要求シ得ヘキ事件ノ性質ニ至リテハ更ニ制限無之候

又貴政府ニ於テ我國近年ノ進歩ヲ稱贊セラルヽ段欣然ノ至ニ候既ニ然リトセハ我國此變換セシ形狀ノ度ニ應シ相當ナル便法ヲ設ケ以テ我國ノ進歩ヲ識認セラルヽノ意ヲ表セラルヘキコト疑ハサル所ナリ外國貿易ノタメ我內地ヲ開クノ時期ハ卽チ專ラ治外法權ノ制ヲ全廢スルノ期ト相對スル事ト我政府ニ於テ兼テノ定見ニ有之段貴政府ニ於テモ御承知ノ事ニ可有之故ニ今日貴國人民ノ法權ヲ短縮スルハ只僅カニ漸次其方向ニ向テ一步ヲ進ムルニ過キス早ク其期ヲ見ンコトハ自他共ニ最モ希圖スル所ニシテ其希圖ヲ達センニハ

現今ノ狀況ヲシテ步々漸次ニ改更スルノ一策アルノミニ候

又タ前件ニ比スレハ尙一層直接ノ關係ヲ貿易上ニ有スル卽チ稅則ノ一案ニ對シテハ貴政府ノ異議ノ存スル所僅ニ其一部ニ止マルハ誠ニ喜フベキコトニ有之候此般ノ論點ハ勿論細詳ニ審議ヲ盡セシ上ニ非サレハ到底決議スルヲ得ヘカラス候固ヨリ重稅ハ特ニ商業ノ擴張ヲ妨害スルノミナラス卒ニ之ヲ以テ歲入ヲ增加セントノ目的ヲ失却スルニ至ルノ明晰ニシテ且無疑ノ實理タルハ我政府於テモ素ヨリ熟知スル所ニ有之候故ニ我カ草案ノ稅額ノ如キハ識者ノ說ニ據ルモ輸入ヲ減セスシテ歲入ヲ增スニ恰モ適當トナスヘキモノニ可有之存候

又タ我レヨリ報酬讓與ノ箇條ナシトノ事ニ付貴政府御意見アリト雖トモ我政府ハ曩キニ旣ニ時々明證ヲ與ヘテソノ寬裕ナル趣意ヲ表シタリソノ他內地旅行ノ特許及條約上ノ權理ノ外ナル細少ノ便益ヲ英國及ヒ其他ノ人民ヘ許與シタルモノ甚タ少シトセス是皆外國政府ノ請願ニ應シ當時何等之レカ報酬ヲモ外國政府ヨリ要求スル所ナク甘ンシテ之ヲ許與致シタル義ニ有之是等ノ事情ハ篤ト御高慮有之度存候

將タ貴政府來諭ノ各國共同豫定會議ニ於テハ我政府ニテ改正ヲ要スルモノトシテ旣ニ開陳致シ置キタル各事件ヲ談判ニ附スルヲ得ヘク且ツ今般此共同豫定會議ニ我政府同意致スヘク候ヘトモ今後此類ノ會議ニ於テ共同ノ所爲ヲ以テ先例トハ爲ス可ラストノ約諾ヲ以テ拙者承諾可致候

貴政府平素我政府ニ對シ表セラルヽ所ノ友情ノ厚渥ナルヲ知レハ今般ノ細審會議ノ日英其他各國政府皆共ニ均ク滿意ノ結局ヲ得ンコト拙者ノ確信シテ敢テ疑ヲ容レサル所ニ有之候右得御意度如斯候敬具

明治十四年十二月十七日

外務卿　井上　馨

大不列顚國代理公使

ゼ、ゴルドン、ケネデー貴下

六四　明治十四年三月二十日　井上外務卿ヨリ佛國公使宛

東京會商承諾ノ件

外務卿　井上　馨

佛蘭西國特命全權公使

ギイヨーム、ド、ロケツト閣下

以書簡致啓上候然者條約改正ノ件ニ付本月八日附貴簡落手致披見候昨年七月六日附ヲ以テ差出シ置候條約改正草案ハ貴政府ニ於テ御承允難被成ニ付其段我政府ヘ御通報可被成旨閣下ヘ御指令有之候由御申越ノ趣致承知候且又幸ニ兩國間ニ存在スル交和ノ情誼ヲシテ可成親密ナラシメ貴我雙方ノ利益ヲ稗補候樣ノ改正ヲ遂クル爲メ改正ノ基礎ヲ定ムルノ御目的ヲ以テ當府ニ於テ會議ヲ開設可被成旨拙者ヘ御通知有之樣貴政府ヨリ閣下ヘ御訓令相成候趣是又致領承候我政府於テモ素ヨリ貴我兩國間ノ交誼ヲシテ益々親密ナラシメ及ヒ貿易上互相ノ利益ヲシテ擴充セシメン事ヲ冀望致シ候義ニ有之且懇篤ナル貴政府ノ御來意ニ對シ欣然右會議ニ御同意可致積ニ有之候尤モ其終局ニ至リ我政府ハ各國政府ト各國政府ト各自別々ニ條約ヲ締結候見込ニ有之候將又兼テ閣下ヘ及御談話置候通リ今般ノ如キ連合ノ擧ハ將來改正ノ談判又ハ其他ノ場合ニ於テ是レヲ例規トハ看認不申候條左樣御承知有之度候前條ノ趣可然自閣下貴政府ヘ御申立相成候樣及御依賴候此段回答得貴意候敬具

六五　明治十四年二月二十日　井上外務卿ヨリ英國代理公使宛

東京豫備會議參加方承諾ノ件

公第二八七〇號

以書翰致啓上候本月七日附貴簡落手致披見候然者我政府ヨリ提出シタル條約改正ニ關スル二個ノ草案ハ談判ノ基礎ト被成候事ハ貴政府ニ於テ御不同意ニ付在東京ノ貴下同僚ト聯合豫議會ヲ設ケ我政府ヲ招待被成現在條約ニ就テ實際改正ヲ要用トスル件ヲ協議シ改正ノ基礎ト被定度旨貴政府ヨリ訓令有之候趣致領承候該聯合豫議會ノ目的タル乃我政府企望スル所ト外國貿易ノ利益トヲ可成和熟一致セシメ併テ交際上ノ情誼益敦睦ナラシメントノ趣意ハ固ヨリ於拙者欣然御同意致シ既ニ本月十七日附ノ拙翰ヲ以テ申進置候通リ我政府ハ貴政府ノ懇篤ナル御旨趣ニ對シ今般御發題ノ會同豫議ニ入會候義差支無之候依テ同會議ニ於テ協議和熟ニ至リ候上ハ締盟各國ト各自別々ニ條約ヲ締結スル見込ニ有之候且我政府於テハ右聯合ノ擧ヲ將テ此後條約改正ノ談判又ハ其他ノ談判ニ於テ例規トハ看做シ難候間此旨添テ由進候因テ前條ノ趣閣下ヨリ可然貴政府ヘ御報道相成候樣及御依

賴候此段回答得貴意候也敬具

明治十四年十二月廿四日　外務卿　井上　馨

大不列顛國代理公使

ゼー、コルドン、ケネデー貴下

六六　明治十四年二月二十六日　井上外務卿ヨリ青木駐獨公使宛

改正會議通譯トシテ「シーボルト」ヲ招聘ノ件

青木公使ヘ密信案

我起草セシ條約改正案ニ關シ在各國我公使ヨリ追々報道有之各政府ノ意向モ粗諒知セラレ候就中英國政府ニ於テハ我發題セシ草案ヲ全ク拒絶シ新タニ其考案ヲ以テ東京ニ於テ各國公使ニ協議シ通商條約ノミノ基礎ヲ定メ裁判權ノ條項ニ關シテハ一切議及セザル見込ニ相見ヘ候又獨逸政府ニ於テハ追々貴官ヨリノ御報道ノ如ク東京ニ於テ商議スル事ハ既ニ協同シ且行政權ノ條項モ强テ拒絶スルノ模樣ニモ不相見就テハ尙此末前々卑官ヨリ申進候旨趣ニ基キ充分ノ行政權ヲ我ニ把持セサレハ日本ノ治安上言フ可ラサル程ノ不都

合有之趣御說明有之可成右ニ關スル一切ノ始末ヲモ商議候樣御盡力有之度致冀望候右兩大國ノ意見稍異ナルモ東京ニ於テ商議スルノ一段ハ既ニ同論ニ有之他各國ニ於テハ格別異說無之兩國ニ雷同致候事ト被察候因テハ各國政府ヨリモ我要望ノ如ク不遠商議委員ヲ東京ニ派遣可致左スレバ晩クモ來年ノ初メニハ開談ノ事ニ至ルベクト豫期致候右開談ノ上ハ卑官專ラ其事ニ當リ候積ニ付商議應答ノ際能ク我事體ヲ審カニシ彼此ノ意衷ヲ通徹セシムル事最肝要ニ付本省ニ於テハ鹽田三等出仕ヲ以テ專ラ應接上ノ通譯ニ使用可致積ニ有之候然ルニ同人儀ハ是迄專ラ國內ニ在ツテ我約案起草最初ヨリノ手順等ハ粗熟知致居候得共外國政府意嚮ノ如何ヲ親炙上ニ聽取シタル議ニモ無之又開談中常ニ外國委員トノ間ニ絕ヘズ往來交換シ間接ニ彼此曲折ノ事情ヲ暢達セシムルニハ適當不致因テ外人中我事情ヲ悉知シ常ニ我利益ヲ冀圖シ兼テ邦語ニ通スルモノ此際最モ必要ニ有之候處幸ヒ其館附シーボルト儀ハ恰モ右ニ適當セシ人物ト致認定候就テハ目下其地ニ於テモ重修談ニ付本人御必要ト察シ候得共他ニ相當ノ者無之候爲開談中不省ニ於テ使用致度候如何樣ニモ御繰合ノ上至急ニ來朝候樣致度候就テハ右ノ趣貴官ニ於テ御承諾相成候上ハ一應シーボルト氏ノ意中御聞糺シ相成リ同人ニ於テモ來朝ノ義異存無之候ハヽ今一ツ同人ヘ約束致置度義有之卽チ開談中專ラ通譯等ノ勤ニ服事致候ニ付テハ只管拙官ノ意見ヲ各國委員ヘ通暢セシムル事ニノミ注意シ此際苟ニモ自己ノ意見ヲ交ヘ通譯ノ語句ヲ斟酌シ又ハ他人ト談話ノ際拙官ノ意見ニ齟齬ノ說ヲ述ル等命令外ノ擧動無之樣誓約爲致度事ニ候依テハ本人來朝ノ有無當方ノ都合モ有之候間電報ヲ以テ御報有之度爲其符號豫メ左ニ附記致置候間右ヲ以テ御回答有之度候此段申進候也

符號

來朝可致候トキハ　Yes

差支アルトキハ　No

六七　明治十四年二月二十七日　青木駐獨公使ヨリ井上外務卿宛

シーボルト招聘ニ關シ回答ノ件

附屬書一　十四年月日不明青木公使宛往電

二　十四年十月六日青木公使來電

機密信第貳拾三號

十二月十四日到

今回東京商議ニ付當館在勤バロン、シーボルト氏ヲ閣下ノ秘書官ニ御採用相成度別紙甲號電信寫ノ通御申越ニ付其旨本人ニ相達候處本人申聞候ニハ不肖ノ身ニ取リ閣下ヨリ如斯信用ヲ受候義ハ一身ノ榮譽幸福トモ可申事ナレハ喜テ御請可致候得共右御請仕候義ハ單ニ閣下ノ御信用ト日本政府ニ對スル公義不得止ニ出候事ニテ其內實目下當府ヲ辭去候一點ニ於テハ當惑千萬ノ參懸リ有之其理由ハ第一前年來親類中ノ勸ニ依リ結婚ノ企有之縡ニ其端緒ヲモ相開居候ニ付今突然當國ヲ辭退候テハ只花ヲ見テ其果ヲ見ザル如キ憂患有之第二ニハ單獨ノ伯母某齡頗ル老衰シ別ニ眷養ノ人無之ニ付本人ヲ愛護シテ子ヲ視ル如ク且同婦人ハ一貴族ノ寡婦タルヲ以テ多量ノ所領地モ有之候處之ヲ「シーボルト」氏ニ讓與セントスルノ內意ニテ兼テ其遠行ヲ好マス然ルニ其意ニ背キ又々日本ヘ渡航候ニ於テハ自他類族ノ者等之ヲ機會トシテ其間ニ入リ種々妨害ヲ成シ折角希望シタル所領地讓受ノ義モ終ニハ水泡ニ屬シ候哉モ難計恐戒有之候云々詳細陳說申候依テ於拙官モ其情實最ト存シ則別紙乙號電信寫ノ通本人義閣下ノ信用ト從來日本政府ノ待遇ニ對シ全ク私

情ヲ捨テ公義ヲ取リ候處置丼ニ前兩條豫期ノ損害ニ對シ其報酬トシテ幾分的歟俸給外ニ若干ノ金錢ニテモ御施惠可相成歟云々申進候處右ハ御採用難被成旨御返報[1]ニ付其旨ヲモ申聞且種々說諭相加候處本人ニ於テハ素ヨリ難被行事ヲ請願スルノ念慮無之公義ノ爲其身ヲ處スルノ決心ニテ有之閣下ノ信用ト日本政府ノ優待ニ對シ斷然難裂ノ私情ヲ裂キ渡航可致トノ事ニ御座候就テハ來十一月中旬ノ郵船ニテ出發可致事ニ結局相纏申候然ルニ本人義先年來每壹箇年ノ約定ニテ一箇ノ住宅ヲ借用シ家賃モ不少相拂居候處其期限未滿ニシテ卽今本邦ヘ出發イタシ候ニ付テハ目前ノ損害實ニ難堪傍觀情狀有之候間閣下ノ尊慮ヲモ不伺路費ノ外支度料トシテ三百弗丈出發ノ際給與可致都合ニ候間其情狀御酌量相成拙官一存ノ處分何卒不惡御認可被下度奉希候此旨得貴意候草々敬具

明治十四年十月廿七日

特命全權公使　青木周藏

外務卿　井上　馨殿

註　1「御採用難被成旨御返報」寫見當ラズ

附屬書一

十四年月日不明青木公使宛往電

（豫議會ニ書記局員トシテシーボルト招聘ノ件）

Desire to have Siebold for my private secretary and interpreter at conference which now appears to take place here about beginnig of the next year. Can you spare him? If can, ascertain if he is willing to come. He must come under condition that he must in all things submit to my orders without in the least attempting to enforce his own ideas. Before he starts, find out minutely decision of German Government upon treaty revision and let him bring it. Answer by telegraph.

附屬書二

十四年十月六日附青木公使來電

Can spare Siebold during the negotiations on the following conditions:—

His present salary and allowance continue the same and that he is to return to his position here within a year.

Will you authorize me to promise him besides extra retribution for his special service? Advise

by telegraph approval.

Berlin, 6 October 1881.

六八　明治十四年十二月八日　青木駐獨公使ヨリ井上外務卿宛

シーボルト出發ノ件

附屬書一　十四年十一月二十四日附青木公使宛往電

二　十四年十二月二日發青木公使來電

三　十四年十二月二日附青木公使宛往電

機密信第貳拾六號

書記官「バロン、ホン、シーボルト」氏一件ニ付テハ本年機密信第二十三號[1]ヲ以詳細申進置候通同人義先月十三日馬港拔錨ノ郵船ニ搭シ本邦ヘ渡航相成候積ニテ旣ニ同月初旬當府出發定期マデハ告別ノ爲在南獨逸其親族ノ處ニ寄留罷在候然處同人出發ノ際當外務官員「フォン、クセロー」氏ヨリ同人及拙官ヘ申聞候ニハ不日英公使「バークス」氏日本ヘ致趣仕由ニ付「シーボルト」氏若シ同公使ト船便ヲ同シ長途ノ航海中懇親的ノ談話ヲ以重修一件ニ關シ近來英政府ノ意向ハ勿論同公使ノ心算等漸次機會ヲ見合セ質疑被致

候ニ於テハ先年來ノ關係モ有之候故多分同公使事「シーボルト」氏ヘハ其精神ノ所在ヲ表示可致然ルニ於テハ今回東京商議ニ際シ多少日本政府ノ御心得ニ可相成義モ探索相調都合可宜云々トノ事ニテ有之申候尤右「クセロー」氏ノ忠告ハ固ヨリ公務上ニ出候事ニテハ無之全ク平生ノ懇親上ヨリ極々内密的ニ懇話致シ申候因テ拙官熟考ヲ加候處英政府ノ我ニ對向スルハ獨逸政府ノ中立平等的心術トハ相違ヒ候ニ付「パークス」氏亦其國商法上ノ利害ニ固着シ守舊ノ主義致擴張候邊ハ無疑事ト信候併シ「クセロー」氏致忠告候通「シーボルト」氏ハ先年來「パークス」氏ト親懇ノ關係有之候事故同時航海ノ機ニ乘シ「シーボルト」氏ヲシテ英政府及「パークス」氏ノ意向ヲ探ラシメ傍ラ「シーボルト」氏ノ懇親的和談ヲ以幾干的ナリトモ「パークス」氏ヲシテ日本政府ニ對スル友誼ノ感覺ヲ增生セシメ候ニ於テハ實ニ不日錦地御開設ノ商議ニ際シ御便益不少事ト存候ニ付「シーボルト」氏ノ渡航ノ期ハ「パークス」氏ト同時可然ト一決シ「パークス」氏ノ擧動相伺居候處最初ニハ先月中旬ノ郵船ニテ赴任可致哉ニ致承知候得共段々ニ出發遲延相成漸ク本月十一日抜錨ノ郵船ニテ馬港出發トノ事過日確報ヲ得候ニ付當時南獨逸僑居「シーボルト」氏ヘモ其旨相示シ延期渡航ノ用意爲致置申候然處先月廿四日付別紙甲號寫ノ通暗號電信ヲ以同人滯館可然云々御申越相成其旨致了悉候得共同人義ハ先便ニテモ度々申進置候通今回ハ只管閣下ノ信任ニ對シ内實種々ノ情縷アルモ斷然之ヲ拋却シ折角拮据シタル住所ヲモ頓ニ他人ヘ讓渡シ且當府辭去ノ義致決心節ハ拙官ヨリ當國政府ヘモ公然歸朝ノ通知イタシ置申候隨テ當國皇后陛下ヨリハ別段電信ヲ以當時同陛下御療養先ヘ御召寄態ト告別ノ謁見被仰付且當國皇帝ヨリハ當國勤務中交際上ニ於テ彼此交誼ヲ表シタル標示トシテ別紙横文ノ通三等賞牌賜與相成候程ノ參懸ニ有之候故今更同人ヲ引留候事ハ殆ト難出來程ノ不都合ニ有之申候且又閣下御差立ノ電文（廿四日付）面ニ依リ候得ハ同人義最早御需要無之トノ事ニハ相見不申嘗テ拙官ヨリ申立候種々ノ情縷ヲ御憐察被成候末前顯御電報相成候次第ト被見受候ニ付前陳愚考ノ都合モ有之旁此節ハ斷然爲致歸朝申候依テ別紙乙號電信寫ノ通去ル二日及御報置申候右ニテ此境ノ情實御照亮被下候草々敬具

明治十四年十二月八日

特命全權公使　青木周藏

外務卿　井上　馨殿

追テ別紙丙號電信ハ乙號ノ通電信差立候後ニテ致落手候ニ付別段拙者ヨリ答電差出不申候將又別紙横文寫三葉[2]ハ「シーボルト」氏歸朝一件當外務省ヘ屆書及同人ヘ當國皇帝ヨリ賜與相成候賞牌一件ニ關候往復書翰ニ付爲念差進候間御査收被下度候也

註　1 前揭文書
　　2 省略ス

附屬書一

甲號　十四年十一月二十四日附青木公使宛往電

(Your) Telegram about Siebold, since mine 19 October, (and) your private letter stating circumstances about him *which* (?) convinced me that you had better keep him in Berlin.

24 November 1881.

附屬書二

乙號　十四年十二月二日發青木公使來電

Siebold's recall officially communicated here. He is already on the way to Tokio.

2 December 1881.

附屬書三

丙號　十四年十二月二日附青木公使宛往電

In respect to my telegram of 24th November, has Siebold left or not? If not, let him stay to accomplish his desire. Answer by telegraph.

December 2, 1881.

六九　明治十四年十二月二十四日　井上外務卿ヨリ青木駐獨公使宛

豫議會開催決定事情ニ關スル件

數回ノ芳簡拜披候頓ニ御回答可致ノ處條約重修一件ニ付各外國公使ヨリ報道ノ趣意其差異如何申來候哉ヲ相待チ詳細申進度今日迄延引致候次第ニ候實ハ是迄貴官獨逸政府ト御往復ノ旨趣御報知ノ都合ニヨレハ獨政府ハ英政府トハ其政略ヲ異ニシ我政府ヘ好意ヲ表彰ス可ク佛政府モ亦幾分カ獨政府ニ左袒可致ト相待居候然處去ル十二月七日附英代理公使別紙書簡[1]ヲ送リテ我發案ヲ拒却シ東京於テ聯合預議會ヲ開キ我政府ノ臨會ヲ請ヒ續テ獨墺西佛露蘭（伊ハ米タ書簡ヲ送ラス）些少文辭上ノ異同ハアルモ到底同樣ノ趣意申來

レリ殊ニ佛公使ハ英政府ト全ク同一ナル訓條ヲ得シ事ヲ明言シタリ獨公使別紙十二月七日附來簡[2]ノ主意ノ如キモ到底英政府ノ所言ニ外ナラス是レ拙官ノ最遺憾トスル所ニ有之預議開會ノ後ハ各政府ノ企望スル所或ハ異同可有之歟是レ蓋シ預(ママ)想ス可キニ非ラス然リト雖モ既ニ拒絶セラレタル草案ヲ抱キ空ク時日ヲ消スルヨリハ早ク從來困難ノ事件ヲ此會議ニ提出シ協議ヲ試ミ候方便法ト相考候ニ付後來ノ例規ト爲ラサル事ヲ承諾之上ハ該會議ニ臨會ス可キ旨獨公使ヘモ回答セリ此ヨリ以前英政府ハ其代理公使ヲ經由シ十月廿五日附書簡[3]ヲ送リタリ拙官ハ之レニ對シ十二月十七日[4]ノ答書ヲ送致シタリ此答書中ニ我內地ヲ開クノ時期ハ卽チ治外法權ノ制ヲ全廢スルノ期ト相對スル事ヲ明言シタリ頃日獨佛公使等ノ內談ニ據レハ英政府ハ歐洲各政府ニ說クニ我日本政府ハ現今ノ制限ヲ以テ國ヲ鎖シ乍ラ却テ裁判權其他ノ權理ヲ收回セントスルノ企望ヲ有ス杯ノ事ヲ以テセシ由且ツ英公使來簡中※印ノ語辭ニ對シ此一事ヲ公文中ニ言明シテ我政府ノ意嚮ヲ汎ク外人ニ示セシ所以ナリ佛公使ノ如キ深ク此一事ヲ明言シタル事ヲ嘉賞セリ今英公使ノ來東ト我答書ヲ併テ速送ス貴官善ク我答書ノ趣旨ヲ了悉シ都合ヲ見計ラヒ獨政府ニ辨明アリタシ偖今般開會ノ上幾分カ裁判權收復ノ上ハ其功能ヲ實際ニ顯シ外人ニ顯示セサル可ラス假令ハ玆ニ人アリテ其身分資產ヲ擧ケテ全ク我法律ニ從ハント云ハンニハ其內地ニ住シ礦業等從事スル事ヲ許可スル事ノ如シ然レトモ此等ノ人カ各開港場卽チ治外法權地ニ住スル商人ト相連合シ(註略)策ヲ以テ利ヲ射ルノ恐ナキニ非サレハ嚴ニ我裁判ニ屬スル者トノ限界ヲ劃定シ又外國人ノ移住ニ付キ要用ナル法律ヲ制定シ之ヲ附加條約ニ揭載セントス是レ蓋シ拙官カ現ニ內閣ニ於論セシ所ニシテ未決ノ事件ニ屬スレハ只貴官ノ御含マテニ被成置獨政府ヘ御明言無之樣致度追テ許可ヲ得候上ハ至急可及御報知候

前文預議會ハパークス氏來着ヲ待タス來ル十五年一月十二三日頃ヨリ開會ノ積ニ有之候

シーボルト氏御遣シ相成多謝候同人ハ拙官ノ通辨ニ相用候心算ニ有之右會議相濟次第其地ニ差遣可申候

獨公使ト拙官ノ交際ハ公私共至而親密ニ有之拙官ハ公使ノ人材ヲ敬重イタシ候間時宜ニヨリ此意ヲ獨政府ニ御通シ有之度候

右回答旁申進候也

明治十四年十二月廿四日

外務卿　井上　馨

特命全權公使　靑木周藏殿

註　1 2 3 4　夫々五八、五九、五四附屬書四、六三文書ナルニ付キ參照

七〇　明治十四年十二月三十日　井上外務卿ヨリ獨逸公使宛

東京豫備會議參加ノ件

公第二八八七號

以書簡致啓上候陳者日耳曼國ト日本國間ニ現存スル所ノ條約改正ノ義ニ關スル客歲七月六日[1]幷ニ十二月廿一日[2]附ノ拙翰ニ對スル回答トシテ閣下ヨリ貴政府ノ訓令ニ依リ御差越相成候本月七日[3]附貴簡領收致シ候卽チ貴政府ニ於テハ我政府ヨリ提出シタル條約草案幷ニ之ニ附屬スル草案ヲ愼密ニ御考量相成リ候處我政府ヲシテ斯ノ如キ大責任ヲ負擔セシムルハ貴我ノ善良ナル交誼ヲ更ニ親密ナラシムル爲メニハ不利ナリトノ義他ノ各國政府ト同樣ノ御考案ニ有之趣ニテ此等ノ理由アルヲ以テ貴政府ハ遺憾ナカラ斯ノ如キ提出案ヲ以テ條約改正ノ基礎ト爲ス事ヲ御承諾相成リ難キ旨御通知有之候

乍去貴國政府ハ現行條約中雙方結約國ノ時勢變遷ニ因リ要望スル所ト其利益ニ可成相當スヘキ改正ヲ爲スハ有益ノ事タルヲ充分ニ識認有之ヲ以テ實際成ル可キ丈ケハ我政府ノ冀望ニ應セラルヘキ旨御陳述相成リ候

閣下又貴國政府ニ於テハ條約改正ノ目的幷ニ制限及ヒ本件ニ關スル他ノ事件ニ付キ締盟各國ノ協同一致ヲ得ンカ爲メ右各國ト共ニ會同豫議ヲ開ク可キ御用意アルヲ以テ貴政府閣下ニ必要ナル訓令ヲ御附與相成リ且又領事サツペ氏ヲ副會員ニ任セラレ候旨御通知相成リ候

右ノ如ク貴國政府於テ互相ノ交誼ヲ維持シ且ツ鞏固ナラシムル事ヲ重ンセラルヽ證アルハ拙者於テ甚タ滿足スル所ニ有之候就テハ日耳曼及日本兩國ノ目的及利益ヲ成ルヘキ丈ケ調和セントセラルヽ貴國政府ノ懇切ナル御旨趣ニ遵ヒ且ツハ貴政府御申出ノ方法ニ依リ協議熟成ヲ得候上ハ我政府ハ締盟各國ト各自別々ニ條約ヲ締結スヘシトノ見込ナルヲ以テ我政府ハ右御申出ノ會同豫議ヘ入會ノ用意致シ候尤モ當政府於テハ今般御發題相成リ候聯合ノ擧ヲ將テ此後條約

改正或ハ其他ノ談判ニ於テノ先例トハ看做シ難ク候間此旨添テ申進候因テ前條ノ趣閣下ヨリ貴政府ヘ御報道相成候樣及御依賴候此段得貴意候敬具

明治十四年十二月廿八日

外務卿　井上　馨

獨逸國特命全權公使

カ、フォン、アイゼンデッヘル閣下

註　123共々一八、三七、五九文書

七一　明治十四年十二月二八日　井上外務卿ヨリ墺國公使宛

豫議會開催方承諾ノ件

以書簡致啓上候陳者墺地利國ト日本國間ニ現存スル所ノ條約改正ノ義ニ關スル客歲七月六日幷ニ十二月廿一日附ノ拙翰ニ對スル回答トシテ閣下ヨリ貴政府ノ訓令ニ依リ御差越相成リ候本月七日附貴簡領收致シ候即チ貴政府ニ於テハ我政府ヨリ提出シタル條約草案幷ニ之ニ附屬スル草案ヲ愼密ニ御考量相成リ候處我政府ヲシテ斯ノ如キ大責任ヲ負擔セシムルハ貴我ノ善良ナル交ヲ更ニ親密ナラシムル爲ニハ不

利ナリトノ義他ノ各國政府ト同樣ノ御考案ニ有之趣ニテ此等ノ理由アルヲ以テ貴政府ハ遺憾ナカラ斯ノ如キ提出案ヲ以テ條約改正ノ基礎ト爲ス事ヲ御承諾相成リ難キ旨御通知有之候

乍去貴政府ハ現行條約中雙方結約國ノ時勢ノ變遷ニ由リ要望スル所ト其ノ利益ニ可成相當スヘキ改正ヲ爲スハ有益ノ事タルヲ充分ニ識認有之ヲ以テ實際可成丈ケハ我政府ノ冀望ニ應セラルヘキ旨御陳述相成候

閣下又貴國政府ニ於テハ條約改正ノ目的幷ニ制限及ヒ本件ニ關スル他ノ事件ニ付キ締盟各國ノ協同一致ヲ得ンカ爲メ右各國ト共ニ會同豫議ヲ開ク可キ御用意アルヲ以テ貴政府閣下ニ必要ナル訓令ヲ御付與相成リ候旨御通知有之候

右ノ如ク貴國政府於テ互相ノ交誼ヲ維持シ且ツ鞏固ナラシムル事ヲ重ンセラルヽ證アルハ拙者於テ甚タ滿足スル所ニ有之候就テハ墺地利及ヒ日本兩國ノ目的及ヒ利益ヲ成ル可キ丈ケ調和セントセラルヽ貴國政府ノ懇切ナル御旨趣ニ遵ヒ且ツハ貴政府御申出ノ方法ニ依リ協議熟成ヲ得候上ハ我政府ハ締盟各國ト各自別々ニ條約ヲ締結スヘシトノ見込ナルヲ以テ我政府ハ右御申出ノ會同豫議ヘ入會ノ用意致シ候

尤モ當政府於テハ今般御發題相成リ候聯合ノ擧ヲ將テ此後條約改正或ハ其他ノ談判ニ用ユル先例トハ見做シ難ク候間此旨添テ申進候因テ前條ノ趣閣下ヨリ貴政府ヘ御報返相成可樣及御依賴候此段得貴意候敬具

七二　明治十四年十二月二九日　英國代理公使ヨリ井上外務卿宛

東京豫備會議ノ件

以手紙致啓上候陳者今般貴國政府ニ於テハ我政府ノ懇篤ナル友誼ニ對シ東京於テ會同豫議ニ御入會相成リ同會議ニ於テ協同和熟ニ到リ候上ハ締盟各國ト各自別々ニ條約ヲ締結スヘキ御見込ニ有之且ツ貴政府於テハ右聯合ノ擧ヲ將テ此後條約改正ノ談判又ハ其他ノ談判ニ於テ例規トハ看做シ難キ旨御通知相成リ候本月廿四日附貴翰昨日落手致シ候即チ貴簡御依賴ノ趣ニ應シ早便ヲ以テ右寫我政府ヘ可及送付候此段御回答得貴意候敬具

一千八百八十一年十二月廿九日　東京於テ

英國代理公使

ジョー、ジー、ケネデー

井上外務卿時代　條約改正豫備會議ト其前後　七二

外務卿　井上　馨閣下

（右原文）

Tokio, December 29, 1881.

Sir,

I have the honor to acknowledge the receipt yesterday of Your Excellency's note dated the 24th instant, in which Your Excellency is good enough to inform me that His Imperial Majesty's Government is prepared, in deference to the friendly consideration uniformly manifested by Her Britannic Majesty's Government, to enter upon a conjoint preliminary conference at Tokio with a new to arriving at a common understanding upon which His Imperial Majesty's Government shall conclude separate Treaties with each of the several Powers, but that such conjoint action as is now proposed will not be regarded by Your Excellency's Government as a precedent for any future revision of Treaties or other matter of negotiation.

In compliance with the request contained in Your Excellency's note I shall forward a copy of it to my Government by the first opportunity.

I avail myself of this opportunity to renew to Your Excellency the assurance of my high consideration.

J. Kennedy.
H. B. M's Chargé d'Affaires

His Excellency
Inouyé Kaoru
Minister for Foreign Affairs.

七三 明治十四年十二月三十日 井上外務卿ヨリ露國公使宛

東京豫備會議ノ件

公第二八九八號

以書翰致啓上候本月十二日附貴簡落手致披見候然ハ昨年七月貴政府ニ及進達候條約改正草案ハ於貴政府愼密ニ御調査相成候末我國進歩ノ形狀增々隆昌ニ趣キタル事ハ深ク御賞賛有之隨テ目下我政府ノ冀望スル所ノ主旨等委細御瞭察有之候得共該條約改正草案中所載ノ發議ニ至テハ悉皆貴政府ノ御考案ト符合不致ニ付他ノ締約各國政府ト御同意ノ上改正ス可キ諸件ヲ豫メ協議シ其議定スル所ノ條款ヲ以テ改正

談判ノ基礎ト可被爲ト ノ御意見ニ有之就テハ我政府ノ委員及締約各國委員ト可開會議ニ御加列可相成旨貴政府ヨリソ訓令御受領ノ趣致領承候我政府於テモ素ヨリ貴我兩國間ノ交誼ヲシテ益々敦厚ナラシメン事ヲ冀望致シ候義ニ有之殊ニ貴政府懇篤ノ御主旨ニ對シ欣然右會議ニ加列可致且其終局ニ至リ各政府ト各自別々ニ條約ヲ締結候見込ニ有之候尤モ今般ノ如キ各國連合ノ擧ハ今後改正ノ談判又ハ其他ノ場合ニ於テ例規トハ難見做候條左樣御承知置有之度候前條ノ趣ハ自閣下貴政府ヘ可然御申立相成候樣及御依賴候此段回答得貴意候也敬具

明治十四年十二月廿九日

外務卿 井上 馨

露西亞國特命全權公使
カール、スツルウエ閣下

七四 明治十四年十二月三十日 獨逸公使ヨリ井上外務卿宛

東京豫備會議ノ件

第三拾號

以書簡致啓上候然者貴政府ハ當方ヨリ申上候條約改正ニ付會同豫議ヘ御入會ノ御用意被成候旨本月廿八日付貴簡落手致了承候則チ御請求ニ應シ貴簡ノ趣旨早速我政府ヘ上申可致候就テハ貴國政府ハ會同豫議ヘ政府ノ代理トシテ出席可相成議員ノ氏名御申越被下度候且又該議員ニ對面スヘキ御場所幷其時日ハ閣下ノ御都合ニ任セ可申ト存候此段貴答如斯御座候敬具

明治十四年十二月三十日

獨逸國特命全權公使
フォン、アイゼンデッヘル

井上外務卿閣下

(右原文)

No. 30

Tokio den 30, December 1881

Das sehr gefällige Schreiben vom 28. d. Mts., in welchem Euere Excellenz mir mittheilen, dass Ihre hohe Regierung bereit ist, in die vorgeschlagenen gemeinsamen Präliminar-Berathungen über die Revision der Verträge einzutreten, habe ich die Ehre zu erhalten.

Euerer Excellenz Wunsche gemäss werde ich mich beeilen, den Inhalt des Schreibens zur Kenntnis meiner hohen Regierung zu bringen.

Indem ich um geneigte Mittheilung der Delgirten ganz ergebenst ersuche, welche die Regierung Seiner Majestät des Tenno in den bevorsthenden Verhandlungen vertreten werden, beehre ich mich die Wahl von Zeit und Ort für die Zusammenkunft Euerer Excellenz gefälligem Ermessen anheimzustellen.

Genehmingen Euere Excellenz die erneute Versicherung meiner vorzüglichsten Hochachtung.

v. Eisendenher

An
den Kaiserlich Japanischen Minister der Auswärtigen Angelegenheiten
Herrn Inouye Kaoru
Excellenz.

七五 明治十四年十二月三十日 墺國公使ヨリ井上外務卿宛

豫議會ノ時日場所決定方ノ件

本月廿八日附ノ貴翰落收致候陳ハ條約改正ノ儀ニ就キ提出致候東京ニ於テノ合同豫議ヘ貴政府入會ノ御用意有之趣領承致候閣下ノ御希望ニ應シ貴翰ノ趣旨ハ我本國政府ヘ速ニ報道可致積ニ有之候

天皇陛下ノ政府ニ代テ右ノ會同豫議ヘ出頭可有之各委員ノ姓名ハ閣下ヨリ御報知被下度且ツ東京ニ於テ右會同ノ場所及ヒ時日ヲ定ムルハ閣下可然御取計相成度存候此段得貴意候敬具

東京千八百八十一年十二月三十日

ホッフヘル、フォン、ホツフヘンフェルス

自記

外務卿　井上　馨殿

（右原文）

Tokio, den 30. December 1881

Euer Excellenz.

Das sehr gefällige Schreiben vom 28ten d. M., in welchem Euer Excellenz mir mittheilen, dass Ihre hohe Regierung bereit ist, in die vorgeschlagenen gemeinsamen Prüliminar-Berathungen einzutreten,

hatte ich die Ehre zu erhalten.

Euer Excellenz Wunsch gemäss werde ich mich beeilen, den Inhalt des Schreibens zur Kenntnis meiner hohen Regierung zu bringen.

Indem ich nun geneigte Bekanntgabe der Namen der Delegirten ganz ergebenst ersuche, welche die Regierung Seiner Majestät des Kaisers von Japan in den bevorstehenden Verhandlungen vertreten werden, beehre ich mich die Wahl von Zeit und Ort für die Zusammenkunft in Tokio Euer Excellenz gefälligen Ermessen anheimzustellen.

Genehmigen Euer Excellenz die erneute Versicherung meiner ausgezeichnetsten Hochachtung.

Hoffer von Hoffenfels.

Seiner Excellenz

Inouye Kaoru

Kaiserliche Japanischem Minister des Aeussern

etc. etc.....

井上外務卿ヨリ英代理公使宛

豫議會打合會開催時日通知ノ件

公第貳號

外務卿　井上　馨

英國代理公使　ケネデー貴下

以書翰致啓上候昨年十二月廿九日附貴簡落掌致披見候然者昨年十二月廿八日附拙簡ノ趣意ハ既ニ早便ヲ以テ貴政府ヘ御申立相成候趣御報知被下致領承候就テハ右豫議會開設ノ前ニ手續等及御打合置度義有之候間別ニ御差支モ無之候ハヽ來十八日午後二字當省ヘ御出張有之候樣致希望候右ハ外各國公使ヘモ夫々申通置候義ニ有之候右得貴意度如此ニ候敬具

十五年一月十二日

七七　明治十五年一月十二日　井上外務卿ヨリ獨逸公使宛

豫議會ニ付打合セノ件

公第壹號

以書翰致啓上候昨年十二月卅日附貴簡落掌致披見候昨年十二月廿八日附拙簡ノ趣意ハ速ニ貴政府ヘ御通報被下候趣就テハ當政府ニ於テ豫議會ヘ出席致候我政府代理者姓名及開

會時日場所等御問合ノ趣致領承候即チ我政府ノ代理者ハ則チ拙者既ニ委任被命候間左樣御承知有之度尤モ別ニ第二委員ヲモ操命候見込ニ有之候間猶取極次第其人名御通知可及將又會議ノ場合ハ我外務省ニ設置候方變方ノ都合ニ可有之ト存候間既ニ準備致居候其他尚ヲ委細ノ手順等御內談致度候間御差支モ無之候ハヽ來十八日午後二字當省ヘ御出張有之度致希望候右ハ各外國公使ヘモ夫々通知致置候此段得貴意度如此ニ候敬具

十五年一月十二日

外務卿　井上　馨

獨逸國全權公使

フォン、アイゼンデッヘル閣下

七八　明治十五年一月十二日　井上外務卿ヨリ墺國公使宛

委員名、會議ノ場所及時日通知ノ件

公第壹號

以書翰致啓上候昨年十二月卅日附貴簡落掌致披見候昨年十二月廿八日附拙簡ノ趣意ハ速ニ貴政府ヘ御通報被下候趣就

テハ當政府ニ於テ豫議會ヘ出席致候我政府代理者ノ姓名及開會時日場所等御問合ノ趣致領承候

我政府ノ代理者ハ則チ拙者既ニ政府ノ委任被命候間左樣御承知有之度候尤モ別ニ第二委員ヲモ撰命候見込ニ有之候間猶取極次第其人名御通知可及將又會議ノ場所ハ我外務省中ニ設置方雙方ノ都合ニ可有之ト存候間既ニ準備致居候其他尙委細ノ手順等御内談致度候間御差支モ無之候はゞ來十八日午後二字當省ヘ御出張有之度候右ハ外各國公使ヘモ夫々通知致候次第ニ御座候

此段得貴意度如此ニ候敬具

明治十五年一月十日　起草（十二日達濟）

外務卿　井上　馨

墺地利全權公使

フォン、ホン、ホッヘンフェル閣下

七九　明治十五年一月十三日　英代理公使ヨリ井上外務卿宛

豫議會打合會ヘ出席ノ旨回答ノ件

謹啓然ハ昨日附貴翰ヲ以テ御申越相成候御望ニ任セ不日開場ノ條約改正豫議會ニ關シ閣下幷拙者ノ同僚外國代理委員ト共ニ右會議手續法ノ要點ヲ協議スル爲メ來ル十八日午後二字拙者儀登省可致此段回答得貴意候敬具

千八百八十二年一月十三日

在東京英國公使館

ジ、ピ、ケネデー

手記

外務卿　井上　馨閣下

（右原文）

H. M's Legation,

Tokio, January 13, 1882.

Sir,

In compliance with the wish expressed to me in Your Excellency's note of yesterday's date I have the honor to inform you that I shall have the pleasure of attending at your office at two o'clock in the afternoon of the 18th instant in order to discuss with Your Excellency and with my Colleagues, the Foreign Representatives, certain points of procedure in regard to the impending preliminary conference on Treaty Revision.

I avail myself of this opportunity to renew to Your Excellency the assurance of my high regard.

J. P. Kennedy

His Excellency

Inouye Kaoru

Minister of Foreign Affairs

八〇　明治十五年一月十四日　獨逸公使ヨリ井上外務卿宛

豫議會ニ付打合セノコト回答ノ件

以書簡致啓上候然者本月十二日付第壹號貴簡致落手候則御依頼ノ通來十八日午後二時貴省ヘ出頭可致候此段貴答如斯候敬具

明治十五年一月十四日

獨逸國特命全權公使

フォン、アイゼンデッヘル

井上外務卿閣下

（右原文）

No. 1

Tokio, den 14, Januar 1882.

Euerer Excellenz beehre ich mich den Empfang des geneigten Schreibens No. 1 vom 12. d. Ms. mit der ganz ergebenen Benachrichtigung zu bestätigen, dass ich nicht verfehlen werde, Ihrem Wunsche genäss mich am 18ten d. Mts. Nachmittags 2 Uhr, im Auswärtigen Amt einzufinden.

Genehmingen Euere Excellenz den erneuten Ausdruck meiner vorzüglichsten Hochachtung.

An　　v. Eisendecher

den Kaiserlich Japanischen

Minister der Auswärtigen

Angelegenheiten

Herrn Inouye Kaoru

Excellenz

八一　明治十五年一月十四日　墺國公使ヨリ井上外務卿宛

豫議會ニ關スル打合セ會ニ出席ノ件

本月十二日附ノ貴翰拜讀御來意ノ通リ來ル十八日午後二時貴國ノ外務省ヘ出頭可致候右得貴意度此如ニ候敬具

東京千八百八十二年一月十四日

ホッフマン、フォン、ホッフマンホルス

外務卿　井上　馨殿閣下

（名原文）

Tokio, den 14 ten. Januar 1882

Euer Excellenz,

Den Empfang des sehr geehrten Schreibens vom 12. d. M. bestätigend, beehre ich mich mitzutheilen, dass ich nicht ermangeln werde, der gefälligen Einladung für nächsten Mittwoch den 18ten d. M. 2 Uhr N. M. nach dem kaiserlich japanischen Ministerium des Acussern zu entsprechen.

Ich benutze diesen Anlass, um Euer Excellenz den Ausdruck meiner ausgezeichnetsten Hochachtung zu erneuern.

Hoffer von Hoffenfels.

Seiner Excellenz
Inouye Kaoru
Kaiserlich Japanischen Minister des Aeussern
etc, etc, etc.

八三　明治十五年一月二十日　英代理公使ヨリ外務卿宛

英公使ハークス着京迄議會ヲ一週間延期方ノ件

20, Janr, 82.

My dear Mr. Inouye

Sir Harry Parkes has telegraphed to me from Hongkong that he will come straight on to Japan instead of going round by Shanghai as I anticipated. He may therefore reach Tokio next Thursday. Under these circumstances it seems to me that it would be an Act of Courtesy toward him and it certainly would be a matter of satisfaction to me if the Revision Conference proposed for Wednesday and Thursday next could be postponed for a week. So far as I know my Colleagues have no objection to such postponement and consequently I should be much obliged if you would favourably entertain and give effect to my proposal.

I remain, dear Mr. Inouye, faithfully and sincerely,

Yours J. P. Kennedy

His Excr.
Inouye Kaoru

八三　明治十五年一月二十三日　英代理公使ヨリ外務卿宛

議會延期方ノ談話ニ對シ回答ノ件

Foreign Office.
January 23, 1882.

My dear Mr. Kennedy;

With reference to the postponement for a week of the Revision Conference decided to meet on Wednesday and Thursday which you asked to be made as a matter of courtesy to Sir Harry Parkes, I would say that as you were already made acquainted at the time of our luncheon at Shiba Palace the day before yesterday, the representatives are unable to come to an agreement so as to give effect to your request, and you must be aware that without their consent I alone am unable to do so.

But if you will come to the meeting on Wednesday where you might again propose the postponement, I will not on my part proceed with any important questions connected with the Conference. By doing so the Conference shall not be referred without the consent of the representatives on one hand and on the other you shall have the satisfaction of having your request in fact complied with, and all will be satisfied.

I remain
Yours ever Faithfully
(Signed) Inouye Kaoru

八四　明治十五年一月二十六日　米公使ヨリ井上外務卿宛

共同議議會參加方照會ノ件

外務卿　井上　馨

米國公使ヨリ往翰

公第四號

以書翰致啓上候陳ハ閣下ニ於テ御熟知ノ通リ我政府ハ現行條約ノ改正ニ關シ締盟各國ト從此ノ意見ヲ通徹センカ爲メ今般貴ニ右各國ト共同預議會ヲ開キ可申旨ニ致同意候右ハ此會議ニ由リテ滿足ナル未條約ヲ取結（ママ）ンノ捷徑ト相成可申ト信楽候儀ニ有之候尤モ該會ノ議定スル所タリトモ我政府ニ於テ全ク同意不致候得ハ遵守ノ義務無之旨雙方約諾ノ上ニテ該會開設ノ儀ニ致同意候隨テ貴政府御加入相成居候ニ千

八百六十六年ノ改稅條約モ此度會議ニ附シ可申且ツ千　八七十八年貴我締結セシ華盛頓條約未タ實施ノ場合ニ立至不申旁貴政府於テ該會議ニ御加列相成候義緊用ノ事ニシテ我政府於テモ深ク所希望ニ有之候右ノ次第ニ付閣下於テ可然ト御思考ノ上ハ電報ヲ以テ貴政府ヨリ右會議ニ御參與ノ全權御領受相成候樣致度此段得貴意候敬具

十五年一月廿六日

八五　明治十五年一月二十七日　井上外務卿ヨリ森駐英公使宛

東京豫議會開會ノ件

機密第壹號

兼テ申進置候現行條約改正ノ爲メ於當地相開候各國會同豫議ニハ拙者ヲ我政府ノ全權委員ニ鹽田少輔ヲ第二委員ニ被命去ル十八日各委員相會シ右預議會手續等相議シ續テ廿五日ニ於テ第一次會相開キ各委員會同シ伊太利臨時代理公使ノ傍聽員タル事ヲ認可シ又米公使臨席認否ノ儀ヲ拙者ヨリ提出候處衆諾ノ上臨席ノ招狀ヲ米公使ニ差送候儀致議決候又白耳義ニテ横濱領事ウォルフヲ委員ニ致候趣ヲ以テ和蘭イクシ候トモ或ハ右會議若シクハ之ニ加入ノ各國ノ中ニテ何等ノ處分有之候トモ之カ爲メニ我政府ハ決シテ其責任ヲ受ケス候間此義明白ニ御約束致シ置キ度此段得貴意候敬具

一千八百八十二年二月十四日

在日本東京合衆國公使館

ジョン、エー、ビンカム

外務卿　井上　馨閣下

（右原文）

No. 1690　　United States Legation

Tokio Japan, February 14th 1882.

His Excellency Inouye Kaoru

H. I. J. M's Minister for Foreign Affairs

Sir:

Referring to your note dated the 26th ultimo in which you request specifically on behalf of your Government, that I shall enter the preliminary conference agreed to be held between His Imperial Japanese Majesty's Government and the Representatives of the European Treaty Powers, I have the honor to say that I will in compliance with your said requests attend the conference with the express understanding that the United States Government is in no wise to be committed either by my attendance therein, or by any action which may be taken by said conference or by any of the parties thereto.

I avail myself of this occasion to renew to Your Excellency the assurance of my highest consideration.

John. A. Bingham.

八七　明治十五年三月二日　井上外務卿ヨリ米國公使宛

豫議會參加資格ニ付照會ノ件

外務卿　井上　馨

米利堅特命全權公使

ジョン、エー、ビンカム閣下

公第六號

以書簡致啓上候然ハ方今開設中ノ豫議會ヘ閣下御參席可相

公使ヨリ拙者迄申出候得共領事ヲシテ臨席セシムルハ不都合ニ付之ヲ謝絶致置各公使中一名ヲシテ兼任セシムル哉又ハ更ニ公使ヲ派遣候方可然旨電報ヲ以テ該政府ニ申入候右會議筆記ノ儀ハ其都度編纂致シ差送可申候得共右ノ件々不敢申進候也

明治十五年一月廿七日

外務卿　井上　馨

在英

特命全權公使　森　有禮殿

註　同日附駐露柳原公使宛機密信三號ハ同文ナリ

八六　明治十五年二月十四日　米國公使ヨリ井上外務卿宛

共同豫議會參加ノ儀ニ付回答ノ件

第一六九〇號

以手紙致啓上候然ハ日本帝國政府ト歐洲締盟各國公使トノ間ニ開設ノ事ニ相成候會同豫議ヘ拙者加入可致樣閣下貴政府ニ代リ去月廿六日附貴ヲ以テ特ニ拙者ヘ御請求相成候ニ付卽チ御請求ニ應シ會議ヘ參席可致候尤モ假令拙者參席

成トハ雖モ閣下於テ斯ク御參席相成候ガ爲又ハ右豫議會若シクハ之ニ加入ノ諸國中ニ於テ何等ノ處置有之候トモ貴政府ハ之ニ依テ束縛サル、責任ハ決シテ負擔セラレサル旨特ニ御約束相成度旨去ル一月廿六日附拙簡ニ對スル回答トシテ拙者ヘ御通知相成候去月十四日附貴簡致落手候閣下於テ會議ヘ御參席相成候義速ニ御承諾相成候ハ拙者於テ滿足スル處ニ候然レトモ此儀ニ關シ閣下ハ貴政府ヨリ兼テ訓令ヲ御領收相成候趣御答書中ニ相見ヘス候元來拙者於テ諸委員ガ資格ヲ承知致候ハ肝要ノ義ニ有之候間今般閣下ハ貴政府ノ訓令ニ依リ會議ヘ御加列且議事ニ御參與可相成事ニ候哉否御通知被下候ハヾ幸ノ至ニ存候此段得貴意候　敬具

十五年三月一日　起草　三月二日　達濟

八八　明治十五年三月二日　米國公使ヨリ　井上外務卿宛

豫議會參加通告ノ件

第一六九六號

以書簡致啓上候然ハ拙者義今般我政府ノ訓令并ニ貴政府ヨリノ懇切ナル御招待ニ隨ヒ方今條約改正ノ件ニ關シ御開設

相成居候豫議會ニ加列シ且ツ其議事ニ參與可致候此段得貴意候敬具

一千八百八十二年三月二日

東京合衆國公使館於テ

ジョン、エー、ビンガム

外務卿　井上　馨閣下

（右原文）

No. 1696　United States Legation,
Tokio, March 2, 1882.

Sir:

I have the honor to say that in accordance with the instructions of my Government and in compliance with the invitation so kindly extended to me by Your Excellency's Government, I will join the preliminary conference now being held on the subject of treaty revision, and will participate in its deliberation.

I beg leave to renew to Your Excellency the assurance of my highest consideration.

John A. Bingham.

His Excellency

Inouye Kaoru,
H. I. J. M's Minister for
Foreign Affairs.

&c.　&c.　&c.

八九　明治十五年三月二十日　井上外務卿ヨリ　米國公使宛

豫議會參加通知ニ對シ回答ノ件

在本邦米國公使
ジョン、ビンガム閣下

外務卿　井上　馨

公第拾號

以書翰致啓上候陳ハ本月二日附貴翰ヲ以テ貴國政府ノ訓令ト我政府案內ノ趣ニ因リ現今開設中ノ條約改正豫議會ニ御出席且議事ニ御參與可被成旨御申越ノ趣致承知候就テハ次ノ木曜日卽不月廿三日午後第二時外務省ニ於テ議會相開候ニ付閣下御出席有之候樣致度此段回答旁得貴意候敬具

十五年三月廿一日

九〇　明治十五年三月二十一日　米國公使ヨリ　井上外務卿宛

次回ヨリ豫議會ニ出席ノ旨回答ノ件

米國公使　ジョン、エ、ビンガム

手記

外務卿　井上　馨閣下

第一七〇九號

謹啓本日附貴翰致接手候陳者今般貴政府ノ御案內ニ應シ拙官儀目下御開會中ナル條約改正豫議會ニ出席シテ其ノ議事ニ參與致スヘキ旨御請求相成併セテ次ノ會議ハ來ル木曜日午後第二字ヨリ外務省ニ於テ御開キ相成候旨御通報ノ趣領承致候就テハ拙官儀欣然該集會及爾後ノ集會ニ出席シ其ノ議事ニ參與可致候右回答得貴意候敬具

千八百八十二年三月廿一日

（右原文）

No. 1709　United States Legation,
Tokei, March 21, 1882.

His Excellency
Inouye Kaoru,
H. I. J. M's Minister for Foreign Affairs,

Sir:

I have the honor to acknowledge the receipt of Your Excellency's note of this date, wherein you request me to attend, in compliance with the invitation of His Imperial Majesty's Government, the Preliminary Conference now being held on the subject of treaty revision, and to participate in its deliberations, and in which Your Excellency is also pleased to notify me that the next meeting of the Conference will be held at the Foreign Office at 2 P. M. on Thursday next.

It will give me pleasure to be present at that and the future meetings of the Conference, and to participate in the deliberations thereof.

Accept, Mr. Minister, the renewed assurance of my highest consideration.

John A. Bingham.

九一　豫議會ニ參加通知ノ件

明治十五年二月八日　非伊國代理公使ヨリ外務卿宛

以手紙致啓上候陳ハ貴政府於テ伊日兩國間ニ存在スル現行條約ニ換用セラレン事ヲ冀望セラレ千八百八十年七月中條約改正案ニ通閑下ヨリ「コンド、ベルボラニー」氏ニ御送付相成之レヲ我政府へ通報可致樣御申越相成候

抑伊日兩國間ニ幸ニ現存スル友誼ノ敦厚ナル閣下固ヨリ御承知ノ事ニシテ精勵以テ開明ノ路ニ勇進スル邦國ガ其他勵ノ成績ヲ奏スルヲ見ルヲ得ルハ我國ニ於テ最モ希望スル所ニ有之候故今般ノ御提出案ノ如キモ如斯ク懇信ノ心ヲ以テ査究相成候義ニ有之候

然ルニ不幸ニシテ右御提出案ノ條款中多クハ我政府幷其他締盟各國過半ノ意見ト協和セザル所アリテ我政府於テ之レヲ御承諾イタシ兼候ハ遺憾ノ至ニ有之候

然レトモ我政府日本ヘ對シ抱ク所ノ友誼ノ誠心ヲ證明センヲ希望シ今般貴政府東京於テ締盟各國ト共ニ御開設相成候豫議會ニ欣然參與シ乃チ拙者ヲシテ之レニ會同セシムルノ訓令ヲ付與相成候

我政府於テハ已ニ御開設相成候豫議會ノ協同一致ト好結果ヲ見ン事ヲ希望候ハ拙者固ヨリ保證スル所ニ有之候依テ此議會ニ因リ御提出可相成草案ノ如キハ若シ協同ヲ得承諾相

成候上ハ他日當地ナリ歐洲ナリ貴政府ノ希望セラルヽ地ニ於テ各國別々ニ締結スベキ條約ノ條款ノ基礎ト可相成ハ勿論ノ事故我政府於テ之レヲ調査可致義ニ有之候

拙者於テハ訓令ニ隨ヒ貴國ノ多年鋭意ト忍耐トヲ以テ計畫セラルヽ改進事業ノ開發ヲ幇助スルヲ得ハ幸甚ノ至ニ候右得貴意度如此候敬具

千八百八十六年二月八日

伊國代理公使

ニ、マルタン、ランチャーレー

自記

外務卿　井上　馨閣下

(右原文)

Tokio, le 8 Febrier 1882.

Monsieur le Ministre,

Dans le courant du mois de Juillet de l'année 1880 Votre Excellence a bien voulu communiquer à Monsieur le Conte Barbolani, pour être portés à la connaissance du Gouvernement du Roi, deux projets de traités que le Gouvernement Impérial désirerait voir substitués aux traités actuellement en vigueur entre l'Italie et le Japon.

Votre Excellence n'ignore certainement pas quels sentiments de sympathique amitié existent si heureusement entre l'Italie et le Japon; c'est Vous dire que les propositions auxquelles j'ai l'honneur de me référer ont été examinées avec cet esprit de bienveillance et d'intérêt qui font vivement désirer à mon pays de voir aboutir les efforts d'une nation qui s'est si bravement engagée dans la voie du progrés. Il n'a malheureusement pas été possible au Gouvernement du Roi d'accepter ces propositions qui sur plusieurs points ne s'accordent pas avec sa manière de voir et celle de la plupart des autres Puissances Européennes signataires des Traités.

Le Gouvernement du Roi, désireux cependant de prouver que l'intérêt qu'il porte au Japon ne saurait être purement platonique, s'associe volontièrs aux négociations préliminaires que le Gouvernement Impérial, d'accord avec les Puissances signataires, a commencées à Tokio, et il m'a donné l'ordre d'y prendre part.

Le Gouvernement du Roi verra, j'en suis sûr, avec plaisir les negociations qui commencent aboutir à une entente général, mais il se réserve d'examiner les propositions qui en seront la conséquence afin que, si elles venaient à être partagées et acceptées, elles puissent naturellement servir de base à la stipulation des Traités que chaque Puissance pourra ensuite séparément conclure avec le Japon soit ici, soit en Europe, ainsi que le Gouvrnement Japonais parait le désirer.

Pour ma part je m'estimerais très heureux. si d'accord avec mes instructions, j'aurai pu contribuer au développement des réformes progressistes(sic) pour lesquelles le Japon lutte depuis si longtemps avec tant de courage et de persévérance.

Veuilles agréer, Monsieur le Ministre, les assurances de ma plus haute considération.

Le Chargé d'Affaires d'Italie

E. Martin Lanciare

Son Excellence

M'onsieur Inouyé Kaoru

Ministre des Affaires Etrangères

Tokio.

九二　明治十五年二月廿五日　井上外務卿ヨリ伊代理公使宛

豫議會參加通知ニ對シ回答ノ件

外務卿　井上　馨

伊太利國代理公使

ガバリヨレ、ヒ、マルタン、ランチヤーレス貴下

以書簡致啓上候二月八日附貴翰落手致披見候陳者貴政府ニ於テハ我政府ヨリ一昨年提出致候條約改正草案ヲ篤ト御調査相成候處貴政府ノ御意見ト協和セサル所アルヲ以テ御承諾難相成旨ニテ他ノ締盟各國ノ發論ニ因リ現ニ當處ニ於テ致開設候豫議會ヘ御加列相成則貴下ヲ委員ニ被命候旨幷ニ此議會ニ於テ協議決定候件々ヲ以テ他日我政府ノ希望スル地ニ於テ各國別ニ締結スヘキ條約ノ基礎トスヘキ旨御申越ノ趣致領悉候御來意ノ如ク貴政府會同豫議ニ御同意相成貴下右會議ニ御加列被成候義欣然致領承候當方於テモ素ヨリ貴政府ト友誼深厚ニ有之義ニ候得共今般豫議會ノ結果ニ於テハ必然貴我兩國ノ交際ヲシテ益々親密ナラシムルニ至ル

可クト深ク致信用候尤我政府於テハ今般聯合協議ノ擧ヲ以テ此後條約改正或ハ其他ノ談判ニ用ユル先例トハ難見做候間此段貴ヘヨリ貴政府ヘ御報道相成候樣及御依賴候右回答得貴意候敬具

十五年三月廿五日

九三　明治十五年三月廿五日　井上外務卿ヨリ三條太政大臣宛

條約改正ノ義ニ付治外法權撤廢ニ關スル意見上申ノ件

附屬書　居留地ノ擴張及外國人ノ內地通商ニ關スル腹案

抑モ條約改正ノ一件タル明治四年岩倉大使米歐巡廻ノ節之ヲ各國政府ニ提出セラレタリト雖モ彼是其調和ニ至ラズ終ニ東京ニ於テ之カ議ヲ開ク事ニ決シタリ爾來內國多事或ハ內閣ノ交代等アリテ我政府モ事ニ此ニ從フニ暇アラズ爲メニ茲苒數年月ヲ經過セリ然ルニ治外法權ノ存在スルト海關稅權ノ減殺セラルヽ所アルトハ實ニ我國ノ大厄害ニシテ長ク不問ニ付シ去ル可ラサルヲ以テ改正ノ議再ヒ起リ當時ノ議ニ云法權稅權一擧シテ兩ラ之ヲ恢復セン事ハ甚難事タリ但タ先ツ稅權ヲ恢復シテ海關稅則等ヲ左右スルノ實權ヲ掌握シ得ルトキハ法權ハ冥々裏ニ自ラ隨附シ來ルヘシト此議ニ基キ明治十一年二月ヲ以テ海關稅則ヲ主トシテ改正ノ議ヲ各國政府ニ提出シタルニ是亦輒ク調定ニ至ラス稅權ノ一方猶且ツ容易ニ回復シ得ザルモノトナレリ尤モ米國ノ如キハ我ノ議ヲ容レ條約ヲ訂結セサルニ非ス然レトモ歐洲諸國ノ同シク改訂スルノ日ニ非レハ之ヲ實行スルヲ得サルヲ以テ結約アリト雖モ亦之レナキト一般ノ情況ナリ

然ルニ明治十二年九月鞏不肖ノ身ヲ以テ當任ヲ辱シ時ニ自以爲ラク稅權ハ寧ロ嘗ク不問ニ置クトモ法權ノ回復ニ至テハ實ニ猶豫ス可ラサルモノアリ稅權ノ回復ハ固ヨリ我國ノ損益ニ關スル鮮少ナラスト雖モ之ヲ治外法權ノ我權理ニ檢束ヲ受ルニ比スレハ自ラ輕重大小ノ別アリ夫レ治外法權ナルモノハ萬國公法上果シテ何等ノ基礎ニ據テ存定セシモノ乎世界中治外法權ノ厄害ニ遭遇スルノ邦國ヲ數フレハ埃及、土耳古、支那、日本等トス而シテ其權域ハ其國ノ情態ニ從ヒ互ニ差等アリテ一定スル所ナシ就中我日本ノ如キハ之カ檢束ヲ蒙ル最モ甚シトス試ニ我現狀ヲ觀察スルニ治外法權ノ爲メニ我裁判權ノ制限セラレタルヤ國家ノ秩序安寧

ヲ保全スルニ於テ施政上最緊要トスル所ノ行政諸法規及地方規則ノ如キサヘ眼前之ヲ犯ス者アリテ相當ノ處分ヲ施スヲ得サルカ如キハ今更ニ愚言ヲ要セス其制法ノ權ニ於テモ現條約中之ヲ拘束スルノ條款ハ之レナシト雖モ實際ハ一種ノ積習殆ント法ト成ルカ如キモノアリ乃チ我邦ニ在留スル公使中其英公使ノ如キハ其本國政府ヨリヲルダ、イン、カオンシル中ニ於テ特與セラレシ權アルヲ以テ其權域ヲ踰ヘサル限リハ其國人ニ向テ法ヲ令シ之ニ服從セシムルヲ得ルト雖モ是亦未タ以テ充分トスルニ足ラス況ンヤ其他ノ公使ニ於テハ皆殆ント此等ノ特權ヲ有セサルヲ以テ我ノ布令スル所若シ偶マ其國ノ法律ト符同スルモノハ輒ク之ヲ其國人ニ遵守セシメ得ルト雖モ其符同セサルモノニ至テハ之カ遵守ヲ命スルヲ得ス故ニ若シ各國公使中ニ於テ我法令ノ旨趣ヲシテ其國民ヘモ實施セシメント欲セハ各々其委任ヲ得タル丈ノ權限内ニ於テ我ノ趣旨ヲ取テ其國ノ法則ニ構成シ然後之カ遵守ヲ命セサルヲ得ス是等ノ事情アルカ爲メ我政府ニ於テ法則ヲ制定又ハ改正スルニ臨ミ之ヲ内外一般ニ實施センセントセハ必先ツ之カ構按ヲ各國公使ニ内談シ實際我目的ノ達スル樣依賴スル所アラサルヲ得サルノ慣習ヲ馴致シ其

積習ノ久キ今ヤ隱然五ニ約定セシモノヽ如キ狀ヲナセリ若シ如此積習ヲ放置シテ漸次之カ除却ニ着手セサルトキハ頑然益々固着シテ遂ニ一種ノ法ト化シ復タ動カス可カラサルニ至ラン然ルニ稅權ノ一方ハ之ヲ一見スレハ左マテ難事ニアラサルカ如シト雖モ彼ノ英佛等ノ如キ權勢相對スルノ邦國ニ於テモ其稅則中ノ一二條款ヲ改正スル事猶且論議數回ニ渉リ俄ニ協定ニ至ラス況ンヤ我國ノ如キ治外法權ノ存在スルモノヨリ彼等ノ國ニ向テ大ニ求ムル所アラントス決シテ容易ノ業ニアラサルナリ良シヤ稅權ハ容易ニ回復シ得タリトスルモ若シ他ノ一方ニ於テ治外法權ヲ今日ノ儘ニ付シ去ルトキハ稅則其他海關ニ關スル諸法則ノ實行ニ至テハ依然未タ檢束ヲ免レサル所アルヲ以テ偶マ復シ得タル所ノモノモ傍ヨリ脫失スルノ憾アルハ必然ノ理勢ナリ故ニ今日ニ於テハ寧ロ稅權ハ不問ニ付スルト雖モ法權ハ則チ其幾部分ナリトモ必之カ回復ヲ圖ラサル可ラサルナリト

當初馨此議ヲ以テ敢テ閣議ニ呈セシニ幸ニ聽納セラレタルヲ以テ決然今日ノ重任ニ膺リ卽チ此趣旨ニ基テ改正案ヲ擬草シ實ニ一昨十三年七月ヲ以テ之ヲ各國政府ニ提出シタリ然ルニ馨ノ淺學不文ナル一二ノ外國法律家ニ嘱テ或ハ起稿

或ハ飜譯セシメタルカ爲メ第一ニ其文章字句ノ間ニ圭角ヲ露ハシテ兩國修好上ノ文體ニ適ハサルアリ第二我ニ求ムル所多キニ過テ而シテ殆ント彼ニ與フル所ナク第三彼我ノ權限區域上ヨリ事務取扱ノ混雜ヲ致シ第四ニハ法律ノ不完全判官ノ信用シ難キ等ノ故ヲ以テ各國皆之ヲ拒斥シ從テ數回ノ辯論ヲ煩ハシ漸ク當地ニ於テ豫備會議ナルモノヲ開キ各國各個ニ締約スルニ先チ之カ改正ノ基礎ヲ論定スヘキ事ニ協議相整ヒ本年一月廿五日ヲ以テ初トシ開議既ニ四回ニ及ヘリ而シテ前回マテハ左マテ異論モナク概ネ我ノ求ムル所ニ適ヒシカトモ次回ノ議題ハ則チ我行政ノ諸規則ヲシテ外人ニ服從且ツ効力ヲ有セシメント欲スル一段ニシテ實ニ彼我雙方利害ノ關係スル所タレハ多少互ニ意見アリ辯論數回ニ渉ルベシト察知スルナリ

抑モ外人等カ萬里ノ險海ヲモ恐レス遙ニ此地ニ來テ貿易ニ汲々タル所以ハ何ソヤ畢竟其自家ノ利ヲ獲ンカ爲メノミ卽チ利ノ在ル所ハ人必ス之ニ赴キ一進一退唯タ利ニ是レ從フ而シテ天下未タ嘗テ一方ノミ利ヲ獲テ其約條ノ甘結スルモノアラサルナリ顧フニ改正一件ノ拮据經營既ニ數年ニ渉リ而シテ未タ調和協定ニ至ラサルモノ究竟スレハ彼我ノ間ニ

其利ノ得失アル一事ニ外ナラサルナリ而シテ各國政府ノ我改正案ニ對シ彼是異議スル所アルモノモ平心之ヲ考察スレハ亦其一理ナキニアラス

歐米各國ノ互ニ交通スルヤ固ヨリ治外法權ノ如キ特異ノ事ナキハ勿論自由ニ内地ニ居住シテ商賈ヲ營ミ工業ヲ興ス等一モ束縛ヲ加ヘラルヽ事アルナシ然ルニ外人ノ我國ニ在留スル者ノ狀ヲ視レハ其居住スル所ハ僅々開港場ニ於テ海邊ノ一隅ニ區畫セラレ居留地ノ外ハ決シテ商賈工業ヲ營ムヲ得ス又居留地外若干里程ノ内ハ隨意ニ遊歩スルヲ得ルト雖モ其遊歩規程外ニ至テハ療養若クハ學術研究ノ故ヲ以テ我政府特別ノ許可ヲ得ル者ニ非レハ旅行スルヲ得ス蓋シ是レ彼等ノ治外法權ヲ把持シテ容易ニ放手セサル所以ナルカ故ニ取ラント欲セハ必酬フル所ナカル可ラス利害平分シテ然後條約始テ成リ我ノ求愈大ナレハ彼ノ望亦隨テ大ナルヘク我レ今治外法權ノ幾部ヲ脫シ或ハ稅權ノ幾分ヲ回復セント欲セハ又彼ニ利ナルモノヲ以テ之ヲ讓與セサル可ラス若シ少シモ彼ニ利分ヲ讓與セスシテ獨我ニ全益ヲ占領セントセハ我改正ノ目的ハ遂ニ達成ノ期ナカルヘシ故ニ今日ニ於テハ彼ニ與フルノ割合ニ從テ我ニ取ル所アルノ外ニ馨復タ他

ノ方略アルヲ知ラサルナリ

然ルニ我政府ノ曾テ各國ニ内示スル所ヲ以スレハ彼レ悉ク我要求ニ應セハ新ニ一二ノ港ヲ開テ之ニ報ユルノ意ナルカ如シ然レトモ現時函館長崎諸港ノ景情ヲ觀ルニ偶マ居留セシ外人モ漸次貿ヲ負テ横濱神戸ニ移住シ新潟ノ如キハ外人ノ滯居スル者僅ニ二三人ニ過キス即チ知ル新タニ港場ヲ開クモ外人ニ於テ以テ其利トセサルヲ然レハ則チ何物カ以テ報酬ニ充ツルニ足ルヘキ乎別紙ニ具載シ以テ愚見ノ在ル所ヲ呈ス時期切迫速カニ廟議御評決相成度此段上申仰御裁令候也

年　月　日

井上外務卿

三條太政大臣殿

附屬書

居留地ノ擴張及外國人ノ内地通商ニ關スル腹案

本邦各開港開市場ニ居留スル各國ノ人民我行政諸規則ヲ遵奉シ之ヲ犯ス者ハ我法律ニ從テ各國領事裁判所ニ於テ裁斷シ尤警察規則ノ違註罪ニ係ル罪犯ハ總ヘテ我裁判所ニ於テ裁斷處罰シ及ヒ其借地借家或ハ自カラ建築シタル家屋ニ關

一、地面ハ總ヘテ人民相對上ノ約束ヲ以テ借受シ外國人ニ於テ之ヲ所有スルノ權ヲ認許セスト雖トモ若シ其不動産ノ所有ヨリ起ル所ノ訴訟及ヒ分産處分法等ノ如キ他ヨリ其不動産ニ波及スル裁斷ニ關シ總ヘテ我法律ニ從テ我裁判所ニ於テ裁斷スルヲ承諾セハ所有ノ權ヲ許與スルモ妨ケナカルヘシ但シ外國人ハ地方ノ議員又ハ官吏ト爲ルヲ許サス

一、外國人ニ於テ若シ其東京ヨリ前橋又ハ高崎ニ到ル迄ノ途中或ハ該地ニ滯留中ニ起リタル事件例ヘバ車賃又ハ旅宿料等ノ訴訟ノ如キ其他日用品買賣ニ關シ其代金百圓以下ニ係ル訴訟ハ日本人同樣總ヘテ其土地ニ屬スル區裁判所ノ裁斷ニ服從スル以上ハ前橋或ハ高崎ニ於テ或ル區域ヲ定メ旅行通商ノ場所トナシ其區域内ニ於テ外國人ノ旅宿シ商賣ヲ營ム事ヲ許スヘシ尤開港及ヒ開市場ニ在ル雜居地ノ如ク土地ヲ借リ家屋ヲ建設シテ在留スルヲ許サス其場所ニ到ル毎ニ必ス地方官ヨリ定規ノ免狀ヲ請求シテ旅行スヘシ

一、野蒜港ヲ開テ開港場トナシ築港工事竣功ノ上ハ横濱神戸等ト同樣區域ヲ定メ外國人ノ雜居ヲ許スヘシ尤

シテ起ル所ノ訴訟幷ニ他ノ事件ヨリ右地所家屋ニ關係シ來ル所ノ訴訟ハ一切我法律ニ依テ我裁判所ニ於テ裁斷シ且國稅ニ屬スル分地方稅及ヒ協議費ニ屬スル分トモ總ヘテ日本人同樣ニ拂ハシメ若シ之ヲ拒否スルトキハ我法律ニ依テ處分スルヲ承諾スレハ我政府ニ於テハ更ニ左ノ利益ヲ外國人ニ讓與スヘシ

一、東京横濱神戸大坂箱館等各開港開市場ニ在ル外國人居留地ノ區域ヲ擴メ從前居留地ヲ改メテ總ヘテ雜居地ト爲シ東京ハ朱引内横濱ハ神奈川區大坂ハ市區其他神戸箱館等ハ地形ニ從テ之ヲ擴メ右區域内ハ外國人ノ雜居ヲ許スヘシ

一、從來居留地ノ定メハ此約定ニ依テ消滅スルモノナレハ其地租等ノ如キモ之ヲ低減シ日本人同樣國稅地方稅及協議費等ヲ拂フニ止マリ道路修繕等ノ爲メ特別ノ出金ヲ要セス尤外國人ニ對シ特別ニ修繕ヲナサス内國普通ノ道路規則ニ從フヘキハ勿論ナレトモ現今居留地内ノ如キ場所ヲ特別修繕セン事ヲ望ムトキハ別段ニ出金セシメ其全額ニ應シタル修繕ヲ爲シ與フヘシ

地面ハ總ヘテ人民相對約束ニ依テ借受スヘシ我政府ヨリ之ヲ外國人ニ供給セサルヘシ

一、野蒜ヲ開港シタル上ハ仙臺ヲ旅行通商ノ場所トナシ前橋同樣ノ約束ニ依テ外國人ノ旅行通商ヲ許スヘシ

一、神戸大阪ハ京都ヲ旅行通商ノ場所トナシ箱館ハ小樽ヲ旅行通商ノ場所トナシ前同樣ノ約束ニ依テ外國人ノ旅行通商ヲ許スヘシ

以上開列スル所ノ讓與ハ外國人ニ於テ我行政諸規則ヲ遵奉シ我法律ノ裁判ニ服從スルヲ承諾セス及ヒ條項中ニ揭クル所ノ約束ニ從フヲ欲セサルトキハ總ヘテ無効ニ歸シ各開港開市場及居留地トモ全ク現今ノ通タルモノトス

又

一、内地何レノ地ヲ撰ハズ諸鑛業或ハ我人民ニ許ス所ノ諸工業及農業等ニ從事セント欲スル外國人ハ全ク我法律ニ服從スル事ヲ承諾スヘキ證書ヲ認メ公使ノ保證ヲ以テ外務省ニ申立ル上ハ之ヲ允許スヘシ

九四　明治十五年四月六日　井上外務卿ヨリ在外各帝國公使宛

條約改正豫議會ノ經過通報ノ件

附屬書　十五年四月五日井上外務卿豫議會ニ於テノ宣言

外務卿　井上　馨

柳原、井田、長岡、青木、
本間、高平、二臨時代理公使

無號別信

昨五日條約改正預議會ニ提出致候別紙英文差進候間御熟閲有之度候尚詳細ノ發案ハ次便郵送可致候今般ノ發按ニ對シ各公使多クハ我發論ノ趣旨ヲ贊成シ早便其政府へ報道可致旨答辭申述候彼外國公使ノ聯合モ大ニ勢力ヲ減候姿ニ有之候既ニ昨五日ノ會議ニ於テ英公使ヨリ海關稅ノ儀ニ關シ發議ニ及ヒ且ツ日本政府之ニ對シ何等ノ讓與ヲ爲スヤノ問題ヲ發スル可キ旨内々聞及候ニ付最早猶豫ス可キ場合ニ非スト存ジ所謂先シテ以テ人ヲ制スルノ機ヲ失ハサル樣斷然發按提出致候處按ニ違ハズ此大體論一度出ルヤ夫ノ稅論ノ如キハ頗ル細事ニ屬スルノ勢アルヲ以テ暗ニ英公使ノ鋒鋩ヲ挫クニ至リ英公使ハ遂ニ發議不致候（竊ニ聞ク所ニヨレバ英公使ハ稅額ヲ三百萬圓ニ減ズルノ發議ニ有之候趣ニシテ拙者ハ四百萬圓ヲ要候見込ニ有之候）今般發按ノ趣旨ハ貴官

於テ善ク御了解ノ上時機ニ應ジ其政府へ御陳述御盡力有之度候右申進候也

四月六日

青木公使へハ

三月三十一日無號別信ニ付シ差送候我政府ノ發案別紙ノ通修正イタシ昨五日ノ會議ニ致提出即英文（已下同文）

註　前揭**九三**文書幷ニ次揭附屬書參照

附屬書

明治十五年四月五日井上外務卿預議會ニ於テノ宣言

偖テ本日拙者ノ提議セント欲スルハ抑モ我國泰西各國ト締盟以來外交上ノ全局ニ大關係アル未曾有ノ事タリ其事トハ他ナシ今ヤ我カ日本政府ハ大ニ通商貿易ヲ旺盛ニシ且ツ各國トノ交際ヲ益々鞏固ナラシメンカ爲メ或ル約束ニ於テ以テ全國ヲ外國人ニ開カント欲スルコト是也實ニ此一事ハ我政府ノ力ヲ以テ爲シ得ヘキ讓與中ノ最價値アルモノタルハ各員ニ於テモ皆同意ナランコト予カ疑ヲ容レサル所ナリ蓋シ此事タルヤ殆ト各員意想ノ外ニ出タルヘシト雖トモ我國維新以來國是ノ存スル所遂ニ此ニ至ルハ是レ只自然ノ情勢ナリ而シテ我政府ノ常ニ大ニ目的トスル所ハ宇内普通ノ公

法及ヒ道德ノ主義ヲ採用シ終ニ以テ現時ノ列國ト駢立スルニ至ランコトヲ期スルニ在ルハ我政府當初ヨリノ政術ヲ注視シタル人々ノ能ク察知セラルヽ所ナルヘシ且ツ維新ノ初業及ヒ漸次各般ノ改革ヲ行ヒシ事蹟ハ各員ニ於テモ多クハ親シク之ヲ目擊セラレ其間我政府カ爲メニ幾多ノ艱難ニ遭遇シ而シテ確乎ト其方向ヲ動カサヽリシ事實ハ是亦夙ク知セラルヽ所ナリ今其事歷ヲ縷述セスト雖トモ封建制度ヲ廢シ隨テ人民ノ權利ヲ同等ニシ又タ施政ノ方法ヲ改革シ行政ト司法トヲ分離シ或ハ敎育普及ノ制度ヲ設ケ耶蘇敎ノ禁ヲ寬ニシタル等其最モ著シキモノトス其他外國ノ學術及ヒ機械ノ運用ヨリ大ニ萬般ノ進步ヲ開キタルヲ看ヨ郵便ノ制ヲ立テ萬國郵便ノ聯合ニ加入シ又電信ヲ架シ鐵道ヲ布キ又沿海ニ燈臺ヲ建築セシ等ノ如キ是ナリ特ニ各員ノ注意ヲ請ハント欲スルモノハ我國ノ法律及ヒ裁判法ノ改正ニシテ卽テ近代ノ主義ニ基キ刑法治罪法ヲ新定シ以テ身體財產ノ保護ヲ全カラシメ且ツ各員ノ記存セラルヽカ如ク曩キニ勅令ヲ以テ代議政體ヲ創立スヘキヲ期定サセラレタルハ是レ實ニ漸次進步ヲ主トスル國是ヲ圓滿成就スルモノタリ此容易ナラサル多年ノ事業ヲ爲シ得タルモノハ内ニ在テハ幸ニ人民

愛國ノ至誠ニ出ル盡力ニ因ルコト多ク又タ外ニ於テハ實ニ歐米開進ノ事跡之レアルカ爲メニ我國進步ノ改革ヲ行フニ當テヤ其事情ニ適スル限リハ修心ノ道ナリ政治ノ法ナリ皆此泰西ノ實例ニ因ラサルハナシ然ラハ則從來ノ事業ニ於テハ各國ノ幇助恩惠實ニ淺少ナラス拙者我國ニ代リテ深ク之ヲ謝セサルヲ得ス今ヤ各國ノ誘導ニ因テ旣ニ判然迷ヒナキノ道ニ入リタルカ故ニ初メ我カ古來鎖國ノ頑夢ヲ破リテ開化ノ道ヲ知ラシメタル各國ニ取リテモ將來必ス滿悅ノ結果ト成ルニ至ランコト拙者ノ確信シテ亦自カラ誇稱スル所ナリトス

當國ノ政府幷ニ人民ニ在テハ決シテ其勉力ヲ撓メスシテ益益制度ノ改良ニ從事スヘキハ拙者ノ玆ニ確言スル所ニシテ此制度改良ノ業ハ初メ各國政府ノ翼贊ニ由リテ端緒ヲ開キタルモノニシテ仍ホ將來内外人ノ俱モニ企圖スル德義智識ト幷ニ實際上共同ノ利益ハ以テ日本ヲシテ愈ヨ各國ト親密ナラシムルニ至ルヘシ

然ルニ玆ニ不幸ニモ當國ニ於テ内外國人ノ自由親睦ナル交際ヲ妨クル二三ノ障碍依然ト存在スルモノアリ現行條約ニ依テ外國人ハ唯狹隘ナル開港場以内ニ於テノミ居住シ交易

スルヲ許サルヽナリ如此キ舊制ノ遺風ハ事情時勢今日ト甚タ相異ナルノ當時ニアリテ行ナハレシモノナレハ當政府ノ見込ニ於テハ宜シク速ニ廢除スヘキモノトス爾來我國ノ外交年ヲ逐テ開達シ且ツ內地文化ノ進步如何ヲ察スレハ右ノ如キ障碍ハ須ラク之ヲ除却センコト尤モ希望ニ堪ヘス且ツ苟モ內外人ノ間行政上及ヒ司法上ノ制度ヲ異ニシ雙方相離間スルニ於テハ則チ貿易上眞實ノ利益ハ必ス之カ爲メニ痿痺シテ振ハス彼是ノ間親睦ナル交情ヲ熟達セント欲スルトモ得ヘカラサルナリ

當政府ハ從來常ニ時機ノ臻ルヲ佇望シ卽チ外交及ヒ貿易ノ開達ヲ加ヘンカ爲メ右ニ述ル障碍ヲ袪ニ撤去シ得タリト自カラ前ンテ斷言シ得ルノ時機ヲ俟ツコト玆ニ久シ

此時機タルヤ當政府ノ見込ニ於テハ早ク旣ニ今日ニアリト認メタルカ故ニ日本全國ヲ外人ニ啓キテ其日本法律ニ服從スル上ハ何ノ場所ヲ問ハス入居スルヲ許可センコトヲ發議ス故ニ卽チ外國人民ハ日本人民同樣ノ制限ニ從テ國內何レノ地タリトモ隨意ニ旅行シ居住シ且ツ動產不動產所有シ商賣產業ヲ營ナムノ自由ヲ許與センコトハ當政府今日ニ在テ異議ナシ是レ拙者ノ欣然敢テ各位ヘ報道スル所ナリ斯ク

報道ヲ爲スニ臨ミ拙者ハ各位ノ好意英明ナル補助ヲ仰キ當政府ヲシテ遂ニ此目的ヲ達スルヲ得セシメンコトヲ冀望ス

此新制度ヲ施行スルノ日ニ於テハ則チ外國人民ハ從來海濱ナル僅少ノ開港場內ニテ施用セルモノトハ全ク殊別ナル裁判權ニ服從セサルヲ得サルコトハ各位ノ公義正道ニ於テ是認アルヘキハ聊カ疑ヲ容レサルナリ夫レ公衆ノ秩序安寧ヲ保タンニハ必ス我國ノ法令ヲ齊シク國內ニ在テ其恩澤ヲ蒙ムル居住人民ヘ一樣ニ施行スルヲ要スルハ勿論ナレトモ外國人民ノ爲メニ謀ルニ凡ソ公正至當ナリト認ムル保證ト免除トハ之ヲ付與スルコトヲ怠ラサルヘキ旨ヲ玆ニ陳述ス右ノ保證ト免除ハ卽チ各國人民ノ果シテ新制度ニ服從シテ充分其安全ヲ享有スルヤ否ヤノ疑問ヲ悉ク各位ノ胸裏ヨリ融解セシムルニ足ルヘシト深ク信用ス

仍ホ當政府提出ノ策案ニ付テハ他日明細ノ書面ヲ以テ詳密ニ報道スル所アラントス此策案ハ外國人民ノ利益安全ヲ深ク顧慮シテ調製シタルモノニテ卽チ凡ソ其管轄ニ關スル特權ノ之ヲ付與シテ差支ナキモノハ咸（皆悉）付與センコトヲ決定ス

若シ前述ノ如キ條款ヲ立テ以テ此ノ廣大ナル變革ヲ爲サン

コトニ付キ雙方同意ノ上ハ則チ拙者ハ其舊新轉移ノ爲メニ數年間ノ準備期限ヲ設ケンコトヲ玆ニ提議ス此期限間ニ外國人民ハ商業ノ爲メ自由ニ內地ヲ旅行スルノ許可ヲ得ヘク而シテ日本政府其期限內ハ他日上ニ揭クル諸種ノ權利ヲ讓與スヘキノ時ニ至リ要求スルカ如キ裁判權ノ施行ヲ請求セサルヘシ然レトモ內地ニ於テ內外人民ノ間ニ起ル民事幷ニ刑事訴訟ニ付裁判實施ノ爲メニ必要ニシテ且ツ我政府ニ於テ國家ノ秩序安寧ヲ保持スルニ要用ナリト認ムルモノタケヲ施行セント欲スルノミ右準備期限ノ設置ハ以テ日本政府ノ爲メニ其司法及ヒ行政上ノ制ヲ整頓セシムルノ猶豫ヲ與ヘ且ツハ外國人民ノ爲メニハ新制度ニ向テ用意準備スルノ機會ヲ獲セシムルナリ

以上陳述スル所ハ今般我政府提出スル策案ノ大意ニシテ此策案ハ卽チ各委員ノ了察アル如ク以テ內外人交際ノ面目ヲ一新シ其交通ヤ自由ニシテ復タ制限アルナク且ツ雙方ノ利益ヲ與フルコトナルヘシ此策案ハ以テ外國輸入品ノ爲メニ新ニ廣大ノ市場ヲ得セシメ又タ以テ外國資本ヲ招誘シ隨テ工業貿易ノ盛昌ヲ致スニ至ラン是ヨリシテ內外ノ友誼ヲ厚フシ雙方利益ノ關係ヲ愈ヨ鞏固ナラシメンコトハ更ニ疑ヲ

容レサルナリ拙者ハ右ニ所述ノ精神ヲ體シ敢テ本案ヲ各位ニ提出シ其好意英明ナル熟慮ニ付セラレンコトヲ望ム

（右英文）

MEMORANDUM.

I have been obliged to let some time pass, since the opening of this Conference, before entering upon the subject of the extension of the rights of foreigners in Japan, because the proposition I shall have the honour to make to you, is of so important a character as to have necessarily required the most careful consideration on the part of His Majesty's Government.

I may be allowed to say that since the first treaties were entered into by Japan with the Western Powers there has never arisen a question of wider bearing on the whole character of our relations than the proposition I shall have to submit to you to-day. In announcing to you that His Majesty's Government are disposed, in the interest of the fullest development of commerce and with a view of strengthening the ties of friendship which so happily exist between our respective

nations, to open the whole of Japan, under certain conditions, to foreigners, I doubt not you will agree with me that this is in fact, almost the only valuable concession within the power of this Government to make.

Unexpected as this announcement may come to you, it is however only the natural consequence of the policy pursued by the Imperial Government since the Restoration of His Majesty's authority. To every one who has studied attentively the policy pursued from the commencement by this Government, it will have become evident that the latter have invariably kept in view one paramount and exalted object, the assimilation by our country of the universally acknowledged principles of Public law and Morals, so as to render it more and more fit for holding its place among modern states.

Many of you, gentlemen, have been actual witnesses of our first efforts in this direction, and have followed us through the various stages of our reforms, but you all are aware of the difficulties by which this Government have been surrounded, and how steadfastly they have persevered in the course they had entered upon. I need only allude to the abolition of the feudal system with its inherent inequalities of individual rights, to the reforms effected in all branches of the administration, to the separation of the judicial and administrative branches of the public service, to the important measures taken for the advancement of public education, and to the policy of toleration adopted with regard to the Christian faith. I may also refer to the material progress achieved through the introduction of foreign science and mechanical appliances, to the establishment of an effective postal service and our entry into the International Postal Union, to the construction of telegraphs and railways and to the lighting of our whole coast. Especially also I may draw attention to the reforms in our Laws and Judicial Procedure, guaranteeing the security of property and person, by the enactment of codes of Criminal Law and Procedure in conformity with modern ideas. And I must not omit in closing to recall to your memory, that the eventual introduction of representative institutions, which has been lately sanctioned by Imperial decree, is the crowning act of a policy of grandual progress in that direction.

You are all aware, gentlemen, that in this long and difficult task, in which we have been happily supported by the patriotic efforts of our people, we have had before us the results of European and American culture, and it was this example of western morals, policy and administration that served us in the course of our reforms as a model, as far as circumstances admitted, for the improvements adopted. I should be neglecting the duty of gratitude if I allowed this opportunity to pass, without expressing in the name of my country a deep sense of obligation for the moral and material assistance hitherto afforded to the Japanese Government by the Foreign Powers in the performance of their important task. But I feel proud to be able to assure you, that the course you have assisted us in entering upon is irrevocably fixed, and will, I trust, be hereafter a cause of gratification to those Powers who first aroused us to a sense of the disadvantage of our past isolation. I may affirm that, far from relaxing in their efforts, the government and people of this country will continue the work of reform thus inaugurated through your assistance, and in future common moral and intellectual aims, as well as common practical interests, will more and more unite Japan with foreign nations.

But unfortunately there remain still in this country certain barriers which prevent the free and intimate intercourse between foreigners and the Japanese people. By the existing Treaties foreigners are only admitted to reside within narrow limits and trade in certain open ports. These remnants of the past policy adopted under different circumstances and conditions should, in the opinion of my Government, soon be removed. The whole course of the development of our foreign relations and the progress achieved by this cuntry point to the desirability of removing these barriers, and

prove that as long as foreigners and natives are separated by different administrative and legal systems, the real interests of commerce are paralyzed and the growth of friendly feeling is restrained.

The Government of His Majesty the Emperor have always looked forward to the time when they could confidently take the initiative, and declare that, in the interest of the fuller development of friendly relations and commercial intercourse, these obstacles should be removed.

This time has in their opinion now come, and they propose to open the whole country to foreigners, and to grant them admission, subject to Japanese law, to any part of the Empire. I beg to inform you therefore that the Imperial Government are prepared to admit that foreign subjects shall be free to travel to, and to reside at, any place they may choose, to acquire real and personal property, to carry on trade and exercise any other calling, under the samd conditions as Japanese subjectes. In making this communication to you I

request your friendly and enlightened assistance in enabling this Government to carry out their purpose.

I confidently rely on your sense of equity and justice to admit that under these new arrangements it would only be right that foreigners should come under another system of jurisdiction than that applied hitherto in the few open ports on the sea coast. Public order and security require the application of the Territorial Law of Japan equally and uniformly to all who enjoy its hospitality, but it will at the same time be my endeavour to offer you such guarantees and exemptions in favour of foreigners as seem just and reasonable, and which will I trust remove all doubts from your minds as to the security they will enjoy under the proposed condition of things.

I shall hereafter in a special statement give you the fullest information regarding the measures proposed by the Japanese Government, which have been conceived with the greatest regard to the interests and safety of foreigners, to whom every

possible privilege as to jurisdiction will be granted.

In case we agree on these extensive changes, subject to the conditions alluded to above, I then propose the adoption of a period of transition extending over a few years, during which foreigners would be admitted to travel freely in the interior for purposes of trade. During this period, the Japanese Government would not claim jurisdiction to the extent they would eventually require when all the rights above mentioned should be conceded, but they would propose only to exercise it as far as they should deem necessary to maintain public order and security, and to ensure the practical administration of justice in civil and criminal matters arising between Japanese and foreigners in the interior. This period of transition would afford the Japanese Government time to complete its judicial and administrative systems, and it would also give foreigners an opportunity of preparing for the new order of things.

Gentlemen, the proposition of which the Imperial Government now places the general outline before this Conference opens an entirely new field for unrestricted and, it is hoped, mutually advantageous intercourse: it renders extensive markets more accessible to foreign imports, it tends to promote industry and commerce by rendering possible the introduction of foreign capital, and, it will, I trust, also strengthen the bonds of mutual friendship and common interest. It is in this spirit that I confidently submit this proposition to your friendly and enlightened appreciation."

九五　明治十年乃至十三年　在井上外務卿ヨリ各國公使宛

條約改正豫議會ノ經過通報ノ件

附屬書　十五年三月十一日附横濱在留外人建議書

遣外使臣ヘ機密信第

條約改正豫議會ヘ我政府ヨリ稅目案ヲ提出シ其後各國委員ヨリ之ニ對スル修正案ヲ差出シ終ニ我政府之ヲ致肯諾候迄ノ概略ハ第四回ヨリ第十回ニ至ル會議錄ニ有之候通ニ付既ニ御承知ノ事ト存候因テ今爰ニ右稅目豫定ニ關スル

實際ノ顚末ヲ錄シ以テ御報道ニ及ヒ候

我政府ヨリ提出セシ稅目案ノ綱領ハ拙官第四次會ニ於テ開陳セシ如ク增稅ノ本旨ハ專ラ財政稅ヲ課收シ其增額ヲ以テ第一不換紙幣ノ困難ヲ救濟スルノ資ニ充テ隨テ國內ノ利源ヲ養成シ內外ノ貿易ヲシテ後來一層旺盛ナラシムルノ主義ニ有之且一昨年我政府ニ於テ擬定シ發議ヲ試ミシ稅目案ノ如キハ或物品ニハ三割ノ高稅ヲ課シ其他ノ物品ニモ保護稅法ニ傾向スルノ嫌アルヲ以テ締盟各國ノ中ニハ固ク之ヲ拒絕スルノ意嚮有之候ニ付保護稅法ノ我邦方今ノ狀態ニ適切ナラサル旨趣ヲ說キ務メテ其等ノ誤解ヲ消除スルニ意ヲ用ヒ今般提出セシ稅率ハ卽チ最高額ヲ二割五分ニ止メ僅カニ贅澤奢侈ニ屬スル數品ニ之ヲ課シ其他ハ大抵一割乃至五分ノ低稅ヲ賦シ輒スク四百萬圓ノ輸入稅ヲ收得スルヲ目的トシ輕重ヲ參酌シテ其中ヲ執リ之ヲ編制シクルモノニテ洵ニ寬裕ノモノニ有之候然ルニ本案ノ議場ニ呈露スルニ方リ各國委員等ハ其物品ノ要否ト精粗ノ別ヲ問ハス概シテ其自國ノ製造物產ニ至低ノ稅額ヲ賦セン事ヲ主張シ英國ノ綿糸ヲ七步以下ニ減シ佛國ノ酒烟草其他ノ贅澤玩具ヲ英國ノ織物ニ比擬セン事ヲ望ミ西班牙ノ砂糖伊國ノ珊瑚等我擬定スル所ニ比スレバ殆ント半額ノ減稅ヲ要求シ米國ノ如キモ其石炭油ノ英國綿糸ニ比スレハ百步ノ高額ナル事ヲ苦訴スル等異論百出殆ント底止スル所ナキカ如シ此際我方ニ於テ彼ニ讓リ此ニ與ヘ各國ノ所望ヲ充タシメント欲スレバ到底稅目ヲ改正スルモ更ニ益スル所無キニ至ルヘク且各國殊別ノ利益ヲ綜合シテ平等均一ナラシムル事ハ實際行ハル可ラズ因テ我方ニ於テハ專ラ輸入稅四百萬圓ヲ收得スルヲ以テ必需トスルニ止マル旨ヲ述ヘ其賦課ノ方法及ヒ各國ノ利益ヲシテ彼此偏頗ナカラシムル等ノ細目ニ至ツテハ彼我ノ間ニ特ニ調查委員ヲ設ケ之ヲ調和團結セシメ候ハヽ可然ト思考シ其手續ニ依リ彼方ニ於テハ右審議ノ爲メニ英公使パークス及獨逸國副委員ザツベ兩氏其任ニ當リ各國委員ノ間ニ居テ熟議ニ從事シ我方ニ於テモ特別ニ擔當ノ委員ヲ設ケ豫議會ノ間日ヲ以テ雙方數回相會シ每品稅率ノ昂低輸入ノ多寡等ヲ審查討議セシメ候處各國委員ニ於テモ我要望ノ不相當ニアラサルヲ曉解シ當初彼ヨリ擬議セントスル對案ニ據レバ總計三百萬圓ナルヲ審議ノ末漸次ニ之ヲ增加シ最後ノ豫算卽チ三百三十萬圓之ニ諸雜費ヲ原價ニ合計スレハ大約三百六十萬圓ヲ收得スヘキ事ニ議決シ卽チ第九回會議錄ニ附屬

スル對案ノ通ニ有之候各國委員ノ間ニ於テ協議一致ノ際困難ナリシ事情ハ前陳ノ通各國利益ノ所關殊別ナルニ起因候處獨逸國委員ノ如キハ他ヲシテ協同セシメンカ爲メニ自國ノ物產ニ課スルニ他國ヨリ稍重稅ヲ以テシ專ラ和同ニ盡力シ漸ク熟議ノ運ニ至リ候尤右ハ單ニ稅率ノミヲ定メタルモノニ有之候尙右諸雜費及原價ノ當否等ハ目下雙方委員ニ於テ審查中ニ付追テ其報告ヲ得テ協定ノ稅目案ヲ編成スヘキ手筈ニ有之候右彼方ノ對案ヲ以テ我原案ニ比スレハ其收額ニ幾許ノ差違アリ且各品稅率ノ區別上稍妥當ナラサルモノモ有之候得共是等ヲ尙整理セント欲スルトキハ多少其收稅高ヲ減セサルヲ得ズ故ニ我要望ニ對シ充分ナルモノニハ無之候得共亦彼等協議上ノ事實ヨリ之ヲ視レバ該案ハ特別調查委員ニ於テ非常ノ盡力ヲ以テ漸ク此點ニ至リタルモノニ付拙者ニ於テモ此際數回各委員ト晤談ニ及ヒ今一層增進ノ事ヲ試ミ候得共强テ之ヲ主張スルニ於テハ折角此點ニ至リシ結果モ再ヒ破談ト爲リ委員ノ勞力ヲシテ徒爲ニ屬セシムルノミナラズ各國委員ノ內情ヲ揣摩スルニ反ツテ某物品ニ就テハ尙輕減ヲ請求スルノ次第ニ付此上數日ノ時間ヲ費ヤシ幾回ノ談判ヲ重ヌルモ却テ雙方ノ論勢ニ圭角ヲ生シ玉成ノ期無覺束右等ノ情狀ヲ深ク考察スルトキハ稍滿足ノ結果トモ可申モノニ付終ニ肯諾致候

此他燈臺稅ノ事ハ其綱領既ニ及協同候得共課收ノ方法ニ付目下雙方委員ニ於テ審查中ニ有之候此儀決定ニ至リ候得ハ現今ノ噸稅僅カニ二萬五千圓ニ有之處大約十五六萬圓ヲ收得スヘキ見込ニ有之候

將又本月十五日第十五回會議ニ於テ最惠國ノ條款及沿海貿易ノ二案ヲ提議ニ及ヒ候處最惠國互相特約ノ一案ハ既ニ協同ニ相成候沿海貿易ニ關スル一案ハ是ヨリ先キ在橫濱各國在留外國人ヨリ連署ヲ以テ別紙原譯ノ通建議ヲ駐劄國公使ノ席頭ニ差出シ該公使ヨリ議會ノ參考ニ提出有之候元來我政府ニ於テ今回沿海貿易ニ關シ各國ニ要求スヘキ要點ハ該權ヲ全ク我掌握ニ歸スヘキヲ目的トスルモノニ付右ノ如キ建案ハ固ヨリ直ニ採用スヘキモノニ無之然ルニ今回條約改正ニ於テ主眼トスル法權稅則ノ二論題中法權ノ方ハ其關係スル所最重大且各國公使中本國政府ヨリ充分ノ訓令ヲ受クルニ非ラサレハ其詳細ヲ論及スルニ至ラズ（英公使ハ本件ニ關シ輒モスレバ其詳細ノ曲折ノ事項ニ論及スルヲ欲セス蓋シ多少ノ異見ヲ吐露シテ以テ全體ノ實施ヲ阻格セント試ムルノ口吻ニ相見候ニ付我ニ於テハ細目ハ他日ニ讓ル旨ヲ以テ相應置候）各國協同ノ期ニ至ルハ尙本國政府ト數回

ノ往復談論ヲ重ネ一兩年ノ後ニ非ラサレバ完結ニ至ラサル事ト察シ候然則論ノ方ハ今ヤ既ニ雙方ノ議定スル所ト爲リタル上ハ其實施一日速カナレバ則我ニ一日ノ利アルハ論ヲ俟タズ故ニ我方ニ於テハ夫ノ法權論ノ結局ハ姑ク之ヲ後ニ讓リ先ツ稅則ヲ實施シ速ニ實益ヲ我ニ占有スル事得策ト致思考候然トモ彼方ニ於テモ我冀望ノ通直チニ承諾ハ致間敷必スヤ之ニ對スル報酬議與ト併行スベキヲ主張スルヘク夫ハ公使内地旅行其他ニ付有ル内一右一右ニノ意旨ヲ以テ外部ヘ談候處其ノ意ヲ猶人及商場ヘ及試メニノ爲

but fallow ground, exports no cereals, consequent upon the cost and insufficiency of the only available means of carriage. If this difficulty could be overcome, there would follow speedy and great improvement in the quality and quantity of Japanese grown cereals. To utilize these products, markets are the first necessity. Those markets are to be found outside of Japan, and may be availed of to infinite advantage, if cheap and abundant means of carriage are placed at the disposal of the people.

It is unnecessary for us to dwell at length upon the reasons which may be adduced in support of the wisdom of measures to relax the strict conditions which surround and close the coast trade. Stated briefly they are ;—

The great inadequacy, in number and tonnage, of seaworthy and sea-going vessels, under the Japanese flag, suitable for the coast-trade.

The available tonnage of the Mitsu Bishi, and other companies and private owners, fitted for safe, rapid, and insurable coast transport, does not, so

far as we can estimate exceed 50,000 to 75,000 tons.

This small quantity of shipping affords a marked contrast to the merchant navies of less populous and less favourable situated countries. Thus, according to the latest returns, Norway, with a population of 1,806, 900, possessed 8,125 vessels of 1,509, 477 tons, or fully twenty times the carrying capacity of the entire mercantile fleet of Japan, with a population of 35 millions.

The economic truth (embodied in the writings of the greatest political economists of all nations, tested and proved by long practical experience, and supporting the doctrine enunciated by Adam Smith) that commerce is the cause, not the effect, of navigation, cannot be disregarded without inflicting upon the nation which does so the inevitable evils inseparable from retarded circulation of commodities.

Japan is now suffering from the retarded circulation of her saleable commodities owing to restrictions on sea carriage, aggravated by the total absence of roads suitable for inland traffic connecting the producing districts with the sorts from which only exportation is permitted ; and even if this latter were to a material extent remedied, the insufficiency of horses, and the great distances to be traversed, are powerful and eloquent arguments in favour of the safe, cheap, and expeditious highway of the sea (which is within one hundred miles of any part of the country) being thrown open to the people of Japan.

The reports which reach us from various parts of the empire warrant the conclusion that large surplus crops of grain, principally rice, are stored in the producing districts. These surpluses may be either exaggerated or understated in quantity: but such reasonable estimates as seem justifiable and supportable point to a supply of rice alone beyond the requirements of the home consumer (and therefore a surplus supply) available for export, worth at least 30 millions of dollars in silver.

The very perishable nature of this commodity renders its early realisation an absolute necessity: and it is obvious that such realisation can only be effected by granting to native merchants or farmers facilities for placing this large surplus on a market, either here or abroad. From these facilities, if granted, many good consequences will flow. Farmers and others would find themselves in a position to utilize their surplus crops, and the instinct of gain would excite them to renewed and enlarged exertion, which in its turn would entail the cultivation of more land, the importation of foreign manures, implements, and seed corn ; the construction by private enterprise or otherwise of roads, railways and canals indispensable to the conduct of greater and increasing schemes of profitable industry. These are not the remote but the immediate consequences of a stimulus to agricultural production, which, in addition, would give an impetus to all branches of trade ; and a steadily increasing prosperity would be the result of the employment and utilization of labour, and of the vast tracts of land now lying untilled and unproductive.

Nor would this great stimulus to industry benefit the people alone. More exportation means greater importation; both together mean increased national wealth. Customs and excise duties would rapidly grow; the revenue would steadily increase by the addition of a larger sum of taxation freely payable by a people adding to their own material wealth; and, though last, a most important factor is the influence an enlarged commerce would exert upon the present seriously depreciated and fluctuating paper currency. More trade means a greater demand for a circulating medium of exchange; a demand which would have a direct tendency to raise currency to a near approach to, if not entirely to par, with specie. The increased income of the government would enable them to undertake a moderate scheme of redemption of currency with specie; and that, combined with the cheering influences of reviving commerce, would inspirit the people and exert a most beneficial influence upon the nation.

To ensure these wholesome and revivifying effects one measure is required by the people from the government. Whether, upon mature deliberation, that measure should be regarded as calculated to promote the interests of foreigners at the expense of the Japanese people; or as tending directly to promote the welfare of the Japanese in the first instance and improve the commerce carried on by foreigners in the next, will be sufficiently demonstrated, we think, when its nature is explained.

Upon the reasons here given we venture to suggest that the Government of Japan should be asked to permit the employment of foreign vessels in, to, and from the unopened ports of Japan, freely, without favour to persons, and subject to certain stated conditions. What these conditions should be is not a matter for us to decide: but we may for your information append an outline of those regulations which appear to us calculated to give the country the full benefit of cheap coast carriage without extending the concession too far. They are:—

1. The charter of a foreign-owned vessel for trade on the coast of Japan may be effected by any Japanese subject amenable to the laws of Japan.

2. A bureau shall be established in the capital, with branches in the principal cities and towns, authorized, upon compliance of the petitioner with the regulations enacted, to grant a permit for the charter of a foreign vessel to trade with the non-treaty ports of the Japanese empire.

3. The permit so granted may cover a period of time not exceeding four calendar months.

4. The permit shall be a pass-port issued in duplicate: the original to be deposited with the consul of the nation to which the chartered vessel belongs; and the duplicate, countersigned and sealed by the said consul, to form a portion of the "papers" of the chartered vessel.

5. The permit shall express, in clear and positive terms, the conditions under which it is granted, the regulations to be observed on entering, during the stay in, and on leaving port; the municipal, port, or harbour regulations to be followed and observed; the dues payable; and the distinguishing flag to be worn while employed in such service.

6. No person beyond the master, his officers, the chief engineer, the surgeon, and the supercago shall be permitted to go ashore in any non-treaty port, and then only for the business of their several departments; unless provided with separate passports obtainable in the usual course, or with the special permission of the local or other authorities.

7. The production of the permit and compliance with its conditions shall entitle the vessel therein named to all the hospitalities of the port to the full extent to which they would be enjoyable by a Japanese vessel: and for the furtherance of these purposes the permit shall be exhibited at all times on demand of any naval officer instructed for that object, or customs, harbour, or other qualified officials acting under the orders of the bureau.

8. The permit shall not be delivered to the applicant therefore until the fees specified therein have been paid.

9. Fees shall be levied either in the form of tonnage dues, or as licence for time, or in such manner and to such extent as the bureau may direct. Such fees to be fixed and not variable.

10. The breach of any of the conditions upon which the permit was granted shall constitute an offence punishable as may be agreed upon by the contracting powers.

11. A customs or other official may, at the option of the bureau, accompany each vessel engaged under this form of charter. He shall be provided with a free passage and suitable accommodation, food, and attention while on board; but no charge for his remuneration shall be made upon the chartered vessel.

Under conditions such as these, or with such other as may be desirable, embodied in a convention sanctiond and recognized by foreign governments as well as by that of Japan, a ready and cheap means of conveyance would be immediately opened to the people: with such conveniences of transport Japanese merchants would be able either to send their produce to an open port for sale there, to send it abroad directly on their own account, or to sell in the open ports for delivery at a non-treaty port against payment on delivery, or on other agreed terms.

There is no necessity to enlarge upon the advantages which would accrue to natives and foreigners by the grant of this conditional concession. They are manifest. We believe that when the arguments in support of the concession are pressed upon the attention of the Government of Japan, they will see, equally with ourselves and their own people, how important the question is in its relation to native trade.

If, moreover, yourself or the government desire further or more detailed information or explanations, a deputation of our body would be glad to be afforded the honour of an interview for the purpose of more fully explaining these views.

The second point of mutual benefit to the Japanese people and ourselves is a concession obviously calculated to extend our commercial relations. We have not presumed to ask for any power for ourselves to conduct trade with unopened ports, nor have we asked for any other than conditional powers in that respect to be conferred upon the Japanese people, and we equally refrain from asking for unconditional extension of the limits of the treaty ports; but we are of opinion that the permission granted to us to travel into the interior might be enlarged and modified in one respect.

The present form of passport, granted by the government to foreigners at the request of their ministers, contains certain "Direction to bearer", "Local regulations" and "Additional directions issued by request of the Japanese Government." In the last named, Clause VI, reads as follows:—

"The bearer, while in the interior is 'forbidden to shoot, *to trade, to conclude mercantile contracts with Japanese, and to rent houses or rooms for a longer period than his journey requires.*'"

The italicised passage, we venture to recommend, should be omitted from future passports.

Whether we may or may not trade with the people of the interior of the country through Japanese agents need not now be discussed. We are satisfied that the system of guilds and other trade combinations, over which the government have no apparent control, limits the number and class of Japanese who are entitled by the existing treaties and conventions to enjoy free and unrestricted commercial intercourse with us: and we believe that this most objectionable system can only be broken through by a government concession granting us conditional permission to travel into the interior to meet face to face with the real producers and consumers, there to arrange in person the terms and extent of our business without the intervention of third parties.

We submit that the Japanese people generally know nothing of foreign merchants except through the evil reports, false and exaggerated, circulated by those whose interests are best served by preventing that freedom of intercourse, social and commercial, expressly granted by their own government. Until some means are adopted to permit us

to know more of each other, it is impossible that the mutual feelings of respect entertained by respectable Japanese and foreigners can be manifested and strengthened; and until that takes place we must perforce distrust each other. As we are now placed we are compelled to remain ignorant of each others' wishes and requirements, and submit our commercial transactions and ourselves to the mercies of men who are the remnants of an evil past, when the native merchant was an outcast despised by every Japanese of education or social status; and the foreigner was regarded as occupying the same rank and entitled to no higher consideration.

The concessions on the part of the government asked for here, may be essayed as tentative measures only. If, after the lapse of a reasonable time, they are found to infringe upon the sovereign rights of Japan, to benefit unduly the foreigner at the cost of the native, to be distasteful to the people, or to work in any manner prejudicially to the common welfare of the nation, their rescission

should be provided for.

The concessions here set out appear to us to bear so closely upon the future commercial progress of the Japanese people, while they strike at the very foundations of the grievances of which foreigners justly yet vainly complain, that we have deemed them worthy of being brought specially to your notice.

We have the honour to be
Sir,
Your most obedient, humble servants.

九六　明治十五年七月十五日　井上外務卿ヨリ三條太政大臣宛

沿海貿易意見說明書進達ノ件

附屬書　沿海貿易意見說明書

條約改正豫議會ニ於テ沿海回漕ノ特許ヲ外人ニ付與スル議ニ付第十三號會議錄ニ登記致候本官演說ノ旨趣ニ關スル意見別紙ノ通リニ有之候間此段上申ニ及置候也

月　日

外務卿

太政大臣殿

十五年七月十五日達

附屬書

沿海貿易意見說明書

一現行我國ト輿地利洪喝利條約第十一十二條ニ依ル時ハ日本沿海貿易ノ權利ハ擧テ之ヲ外人ノ手ニ委ネタルモノヽ如シ故ニ今般ノ改正ニ臨ミ之ヲ回復セントノ目的ヲ以テ此後改正スヘキ新條約中ニ別ニ箇條ヲ設ケ沿海貿易ノ權ハ獨リ日本政府ニノミ存スルモノナル事ヲ明記シ舊條約即チ輿地利洪喝利其他各國條約中此條款アルモノハ悉ク之ヲ廢棄シ之ニ換フルニ前文新條約ノ旨趣ヲ以テセントス左スル時ハ國權上ニ於テ沿海貿易ノ專ハ全ク我政府ニノミ存有スルモノトス是レ即チ會議錄第十二號ニ演說セシ趣意ニシテ各公使ニ於テモ別ニ異論ナキ所ナリ

一然ルニ今內地ノ現況ヲ回顧スルニ僅々一二ノ運送廻船會社アルノミ我邦環海ノ地勢物產ノ豐饒ノ實況ヲ以テ之ヲ考察スレバ決シテ右ノ數會社ニ賴ツテ以テ滿足スヘキニ非ラズ彼ノ三菱社運送賃料ノ如キ至ル處高價ヲ訴ヘサルハナシ是レ運輸ノ具備ハラサルニ職由スルモノト云フヘシ故ニ今數年ヲ限リ我權利ヲ擧行セス卽チ此權利ヲ一時外人ニ貸與シ一ハ以テ外人ノ冀望ニ應シ一ハ以テ我カ沿海運輸ノ缺乏ヲ補足セント欲ス是レ十三號會議錄ニ述ル趣意ナリ

然リ而テ此會議錄ニ記載スル數年間トハ卽チ五年或ハ八年ノ期限ヲ終了スルノ後ハ直チニ條約面ニ揭ル如ク全ク我權內ニ歸シ再ヒ又之ヲ外人ニ許可スルニ及ハサル旨趣ナリ

一沿海貿易ト稱スルモノハ商估等貨物ヲ其船舶ニ載セ沿岸各港ニ立寄リ之ヲ販賣シ港ヨリ港ニ行商スルヲ云フナリ然ルニ今般我政府ヨリ許可スル所ノモノハ之ト異ナリ日本人ヲシテ外國人所有ノ船舶ヲ一時雇入ルヽニ止リ彼ノ歐米各國ニ於テ稱フル沿海貿易トハ其區境甚狹少ナルモノトス

一此ノ特許ヲ得テ日本人ニ雇ハルヽ外國船ハ其本國ノ旗章ヲ揭ケ其本國ノ船籍ヲ脫スル事ナシト雖モ被雇期限中ハ日本船同樣我政府ノ規則ヲ遵奉シ大體ニ於テ日本船ト別ニ異ナル事ナシ

一其積載スル貨物旅客ハ悉ク雇主日本人ノ命令ニ任セ其船ノ進退ハ凡テ雇主ノ權内ニアルモノニシテ被雇船主タル外國人ハ之ニ據テ以テ其自己ノ商業ヲ營ム事ヲ得ス

一通常外國船雇入ハ其賃銀ノ甚タ高價ナルが故ニ今政府ヨリ外國船雇入ヲ許可スルノ布告ヲ發スルトモ實際之ヲ雇入ルモノ少カルヘシ蓋シ之アルモ内國船賃ノ廉且便ナルニ如カズ故ニ實際彼等ノ競爭ノ爲メニ從前ノ航業ヲ廢滅スルニ至ラサルヘシ

右ノ如ク我邦人ニ於テ外國船ヲ雇入ル事少キトキハ或ハ日本人ノ名ヲ假リ自カラ貨物ヲ回漕スルノ弊害アルヘシト雖モ之ヲ許可スルノ際其資產及ヒ商業等ヲ質シ其疑ナキモノニ限リ之ヲ許可スル事トセバ輒其弊害ヲ防クベシ且此等ノ弊害ハ現今ト雖モ外人中暗ニ施行スル所ニシテ特ニ回漕船ヲ許可スルカ爲メニ釀生スルニ限ラサルヘシ

一法律ノ點ヨリシテ看下スル時ハ右等巧ニ法網ヲ脫スルカ如キ所業ヲ爲スハ實ニ惡ムヘシト雖モ又經濟上ヨリシテ看下スルトキハ敢テ嫌惡スヘキニ非ルノミナラス均シク又國ヲ利スルヲ免レサルモノナリ何トナレハ第一ニ幾分カ運漕ノ便ヲ助ケ次ニハ間接ニ物產ノ繁盛ヲ促スノ效アレハナリ

一從來我内國沿海行船ハ一旦開港場ニ來リ外國船同樣ノ手數ヲナシタル上ニ非レハ外國行ヲ爲ス事ヲ得サル規則ナレハ日本人ニ雇ワレタル外國船モ是ト同樣不開港場ヨリ直チニ外國ヘ向テ發行スルヲ得ス必ス開港場ニ來リ其國領事ヘ船書類ヲ預ケ置キ沿海行ノ約定期限ヲ果タシ再ヒ海外行ヲ爲サントスル時ニ當リ相當ノ手續ヲナシ右ノ船書ヲ受取リ始メテ外國ニ向テ發航スルヲ得ルモノトス故ニ密商等ノ恐ナカルヘシ

一前數條ノ理由ヲ以テ考フル時ハ名ハ外人ニ沿海貿易ヲ許可スト雖トモ實ハ日本人運送ノタメニ外國船ヲ雇入ルヽ事ヲ我人民ニ許可スルニ止マリ其利ノ厚薄ヲ論スレバ寧ロ日本人ニ厚キモ外人ニ厚キノ理ナカルヘク加フルニ雇入料ノ高價ナルト之カ約定ヲナスノ手續煩累ナルトニヨリ雇入ヲ望ムモノ少ナカルヘク又雇入ルヽトモ多クハ他ノ會社ノ競爭ニヨリ卒ニ全利ヲ得ル事難カルヘク到底此事タル殆ト有名無實ノ讓與ト云フモ不可ナキカ如シ然レ共外國商人等之ヲ熱望シ各國公使等モ之ヲ贊成シテ我ニ要求スルニ於テハ殆ト此ノ有名無實ノ讓與ヲナスモ我國

ノタメ更ニ患害ナキノミナラス却テ沿海ノ運送ヲ競爭セシメ爲メニ貿易ヲ興起スルノ媒助トナルヘシ

一然リ而シテ今之ヲ許可スルヲ以テ最モ緊要トスル所以ノモノハ往キニ提議スル海關稅增額及戻稅、燈臺稅等凡ソ貿易ニ關スルモノヲ他ノ法權ノ部分ヨリ分離シ先ツ之ヲ實行スルニ對スル讓與トシテ此特許ヲ彼ニ付與スルニ在リ蓋シ内地開通ノ要件ハ專ラ我民法商法等編纂ノ完成ニ關スル事ナレハ思フニ尙ヲ數年ノ後此法律ヲ頒布スルノ期ニ至ラサレハ實行ヲ見ル事難カルヘシ又各國公使之ヲ承認スルモ本國政府ニ於テ斯ノ如キ重大事件ヲ議スルニハ若干ノ日月ヲ要スルニ非レハ議決ニ到ラサルヘク又各國ノ内或ハ異議ヲ起シ我ヲシテ此上ニモ尙讓與ヲナサシメン事ヲ謀リ我ニ於テ之ヲ肯ンセサルニ於テハ卒ニ協議ニ到ラサルモ未タ知ル可ラス到底本題ハ今日ニ在テハ其成否ヲ豫定ス可カラザルモノタリ之ニ反シテ海關稅增額ノ一事ニ至テハ前既ニ述ル如ク今般ノ豫議會ニ於テ各議員全ク同意ヲ表シタレバ十中ノ八九其本國政府ニ於テ異議ナカルヘキハ更ニ疑ヲ容レス然ラハ則チ彼ニ與フルニ沿海回漕ノ特許ヲ以テシ我ニ稅目ヲ先行スルヲ得ルトキハ當ニ害ナキノミナラス收稅ノ利ト運輸ノ益トヲ併セテ我ニ掌握スルヲ得ベキナリ而シテ之ヲ實行スルハ稅目ヲ施行スルノ時ニ於テシ其期限ハ彼ノ望ム所十年ニアリト雖トモ我ヨリハ之ヲ兩樣ニ分チ稅目先行卽チ貿易條約ニハ五年乃至八年ノ期限ヲ定メント欲スルナリ

又タ貿易條約ヲ以テ改正ノ一部分ヲ遂ルトモ各國トノ舊條約中其事項ノ之ニ抵觸スルカ或ハ之ト同種ノ件アルモノハ悉皆之ヲ廢棄シ無效ノモノタル旨ヲ條約書中ニ明記シ置カハ決シテ新舊條款兩ナカラ行ハルヽカ如キ混雜難論ヲ來スノ患ナカルヘシ

九七

明治十五年一月二十九日　井上外務卿ヨリ三條太政大臣宛

條約改正豫議會始末上申案

附屬書一　條約改正豫議會議事要領（和、英）

二　同　解說

別　錄　條約改正豫議會始末

條約改正豫議會ハ明治十五年一月二十五日ヲ以テ外務省中ニ開設ス是ヨリ先キ各締盟國政府ハ我國ニ駐劄スル其公使

ニ令シテ明治十三年中日本政府ニ於テ起草セシ條約案ハ改正談判ノ基礎ト爲シ難キカ故ニ東京ニ於テ各國委員相會シ更ニ改正スベキ基礎ヲ豫定セン事ヲ決意シ英獨兩國之カ唱主ト爲リ我政府ノ本會ニ參列セン事ヲ照會セリ因テ我政府ハ右聯合ノ擧ヲ以テ後來ノ例規ト爲ス可カラサル旨ヲ陳ヘ各締盟國政府ノ招請ニ應シ各國委員ト共ニ談判ノ基礎ヲ定ムル事ニ同意シ卽チ一月二十五日ヲ期シ各委員外務省ニ參集ス是ヲ豫議會ノ第一回トス而シテ各國委員ハ日本政府ノ委員卽チ本官ヲ推薦シテ本會ノ會頭トス是ニ於テ明治二年中日本政府ト塙洪政府トノ間ニ締結セル條約ヲ以テ議事ノ基礎トナスヘキ事ニ議決ス蓋シ該條約ハ日本ト歐洲各國トノ間ニ締結セシ最後ノ條約ニ係ルヲ以テナリ而シテ議事ノ條項ハ右條約ノ每款ヲ遂フテ討議センヨリ寧ロ條中種類ヲ分ツ事ト爲シ又其種類ヲ分ツモ論理上聯絡アルモノハ務メテ條約中ノ序次ニ隨ヒ議事ノ部類序次ヲ豫定ス卽チ一曰領事特權二曰民事裁判權三曰刑事裁判權四曰行政規則五曰開港場居留規則及借地方附宗教六曰海關稅則貿易上ノ件七曰沿海貿易八曰燈臺港埠及船稅九曰惠國條款十曰外國船雇日本水夫十一曰難破船條約十二曰局外中立十三曰締約期限而

シテ右ニ豫定セシ議目ノ外彼我兩委員ヨリ臨時議場ニ提出セシ題目及建議ニ係ルモノアリ曰全國ヲ開通シテ裁判權ヲ收ムル事曰商標專賣免許及版權免許ヲ付與スル事曰橫濱居留地取締局開設ノ事曰北海道ニ於テ漁獵ノ取締ヲ爲ス事曰商業ノ連合ヲ止ムル事曰旅行券發行ノ方法ヲ改良スル事等ナリ各委員ハ右議題ニ就キ各討議ヲ盡シ議題中特別ノ委員ヲ設ケテ提理スヘキ事項卽チ稅目ノ原價諸雜費燈臺稅稅關規則拂戾稅倉庫規則ノ數項ヲ除キ他ハ皆議決ヲ經テ各委員ヨリ其本國政府ヘ申報シ其認否ノ訓令ヲ俟テ更ニ開談スヘキ事トシ七月廿七日ヲ以テ一旦本會ヲ閉鎖セリ本會議場ニ於テ公然談論ニ及ヒシ紀事ハ時々上申シ及ヒ會議錄ニ登記スト雖トモ論理ノ政略ニ關スルモノ及ヒ雙方委員議場外ノ談判若クハ交際上ノ方便ヲ以テ成績ヲ見ルニ至リシ等ノ事狀ハ公報ニ漏ルヽ所少シトセス故ニ議事ノ要領幷ニ實際觀察スル所ノ事狀及ヒ議目ノ說明等別冊ニ記載シ以テ通覽シ便ニ供シ併セテ此ニ本會始終ノ景況及ヒ後來ノ意見ヲ開陳ス

抑今回豫議會ノ目的ハ改正スヘキ基礎ヲ雙方委員ノ間ニ豫定スルマテニ止マルヲ以テ假令議場ニ於テ一旦各員ノ間ニ

協同スル所ト雖トモ之ヲ採用スルト否トハ各其本國政府ノ決裁ニ在ツテ毫モ約束ノ効力ヲ有セス故ニ結果執レニ歸着スルヤ豫メ測定シ難シト雖トモ全般ヨリ之ヲ通觀スレハ蓋シ間接ニ我ニ利益ヲ與ヘ又交際上ノ位置ヲ進メタル事不少卽チ其議事ノ實況ニ就テ之ヲ視ルニ開會ヨリ閉會ニ至ル迄終始我提議スル所ニ就キ彼レ等我ニ對シ難論ヲ以テ攻擊ヲ爲セシ事ナキノミナラズ我レハ常ニ主ト爲リ攻擊ノ位置ニ立チ彼ハ客トナリテ防守ノ地位ニ在リ且各委員中ニ於テモ彼等相互ノ間其利益ノ關スル所異ナルカ爲メニ從來外國公使等共謀連合シテ以テ我ニ當ルノ脅迫主義ヲ挫折スルノ好機會ヲ得又開國論ノ如キモ其事果シテ成ラザルモ從來外國ノ政府ガ我國ニ於テ外人ヲ居住セシムルニ狹隘ノ區域ヲ限ルヲ以テ寬裕ナラサルノ一證トシテ我邦ヲ未開視シテ之ヲ歐米各國ト併稱セサルノ誤見ヲ說破スルノ好理由ト爲スニ足ルノミナラズ却ツテ彼ヲシテ其治外法權ヲ拋棄セサルハ凌弱利己ノ主義ニ出ツルヲ反省セシムルノ益アリ而シテ爾後各國ノ交際上ニ於テモ幾分カ我邦ノ地位ニ斤量ヲ加フルノ効力アルハ疑ヲ容レス又後來ノ結果如何ンニ關シ今試ニ之ヲ推測スルニ各委員ノ申報本國政府ニ到達スルトキハ尙

各國政府ノ間商議ヲ盡シ我全體ノ要求ニ應スルヤ否ヲ談決スル事ナルベシ各國中今般ノ議會ニ於テ其關係ノ最モ重大ナルハ英國ヲ第一トシ佛國ヲ第二トス右兩國ノ政略ヲ察スルニ今般我政府ノ提議セシ開國幷ニ締約期限ノ論題ニ關シテハ頗ル異議ヲ容ルベキ口吻アリ到底今般ノ如キ要求ヲ容ルヽトキハ東洋一般ニ影響シ爲メニ東洋諸國ヘ對シ其政略ヲ一變セザル可カラザルニ至ルヘク兩國ニ取リテハ或ハ至難ノ事ト察セサル可カラズ又獨逸國ノ如キハ輓近東洋ニ向テ務メテ人望ヲ收攬シ以テ國威商權ヲ擴張セント欲スルノ政略アルカ如シ故ニ今回ノ會議ニ於テモ該國委員ノ如キハ英佛等トハ自カラ其意嚮ヲ異ニシ我要求ヲ贊成セシ事實不少是ニ因テ之ヲ視ルニ今回議會ノ結果ハ到底英獨佛三國ノ商議合スルト否トニ依リ其成否ヲトスルニ足ルヘシ而シテ英政府ノ主持スル論旨ニ同意スル各國多數ナルトキハ開國及ヒ廢約期限ノ論題ハ拒絕スル所ト爲リ現今條約ニ幾部分鎖末ノ改正（領事法權其他ノ件々）ヲ遂ケ其報酬トシテ幾千ノ讓與ヲ得ン事ヲ各政府ヨリ要請スルモ難測萬一如斯場合ニ至ルトキハ我政府ハ寧ロ現行ノ條約ヲ依然舊ノ儘尙三四年間之ヲ踐行シ內ハ以テ制度ヲ修整シ他日治外法權ヲ解キ外人ヲ管理

スルニ充分ナル豫備ヲナシ外ハ以テ外國政府ヲ勸誘シ我冀望ヲ達スルノ方便ヲ用ヒ再ビ改正ノ談判ヲ開クモ尚今日ノ主義ヲ固ク執ツテ動カズ到底我冀望ヲ達スルニ非ラサレバ已マザル事ニ決意スルノ外ナカルベキナリ尚本會ニ付各國政府ノ意見ハ追テ聽取スルニ隨ヒ上申スヘシ右豫議會ノ始末大略如此有之候因テ爰ニ別冊議事要領幷ニ解釋相副上申ニ及候也

附屬書一

條約改正豫議會議事要領（會議錄第十六拔萃）

會頭云ク六月二十九日ノ集會ニ於テ各委員ノ余ニ冀望セラレタル所ハ余素ヨリ其意ニテアリシ事ナレハ今ヤ本會ノ休閉ヲ告ルニ臨ミ其結果ノ綱領ヲ一目瞭然タラシメンカ爲メニ爰ニ議事顚末ノ提要ヲ略叙スヘシ

（會議錄第一）當豫議會ハ本年一月二十五日ヲ以テ東京外務省ニ於テ之ヲ開會シ先ツ集會ノ順序議事手續等ヲ議定シタル後チ二月一日ノ次會ヨリシテ卽チ條約改正豫議會ノ本務ニ着手ス（會議錄第二）

本會ノ當初ニ於テ先ツ左ノ事項ヲ議定シタリ

（會議錄第二、三、四）第一節　領事裁判權幷ニ特典ノ事

（イ）商業兼帶領事ニハ裁判權ヲ有セシム可ラス

（イ）訴訟幷裁判入費及其他一般ノ裁判手續ニ就テハ內外人ノ別ナク其出訴スル裁判所ノ成規ニ從ハシムヘキ事ニ議決ス

（ロ）日本國ニ在ル外國裁判廳ハ其管轄內ニ起ル民刑事件ハ其金額ノ多少、罪科ノ輕重ニハ拘ハラス實際ニ行ハレヘキ丈ケハ之ヲ初審スルノ權力ヲ有セシメサル可ラス

（ハ）日本國內若クハ日本國ニ接近ノ地方ニ外國控訴裁判所ヲ設置スヘキ事ハ其主義ハ外國各委員ニ於テモ甚タ可トスル所ナルモ概ネ各國ノ之ヲ實行スル事難カルヘシト爲セリ然レトモ兎モ角會頭ノ意見ハ各其本國政府ニ進達スヘキ事ニ同意ス

（ニ）日本ニ在ル內外人ハ總テ其供證ヲ要セラルヽトキハ五ヒニ內外裁判所ニ證據人トシテ出庭セサルヲ得サラシムヘシ

（ホ）民刑事件ニ於テ原告人タル者ハ內外人共ニソノ願書又ハ訴狀ヲ其筋裁判所ニ差出スニハ本人自國官吏ノ手ヲ經由スルモ若クハ直接ニ差出スモ妨ケ無ラシムヘシ

（ヘ）總テノ犯罪ハ成ルヘク其所犯ノ土地ニ於テ審斷セシムヘシ

（ト）外國裁判廳ニ於テ裁判權ノ缺失アルカ爲メニ罪科ヲ犯セシモノ其刑罰ヲ脫免スル事アル場合ニ於テハ條約未濟國人

本項ニ就テハ和蘭兼瑞典諾威及丁抹ノ委員ハ初メ之レニ不同意ナリシモ後チニ至リ其自國政府（和蘭）ニ於テハ專務領事ニ限リ裁判權ヲ有セシメント欲スル旨ヲ告ク

（會議錄第五）白耳義國委員ハ是等事項ノ討議ニハ其自國委員之レニ參與セサリシ事ナルヲ以テ當時出席各員ノ說述セラレタル意見ニ就テハ自分之ヲ遵守スヘキ義務ナシト思考スト丿旨ヲ後會ニ陳ス

（會議錄第十五）瑞西國委員ハ其自國政府ニ於テハ舊ニ依テ商業兼帶領事ヲ裁判官タラシメント欲スル旨ヲ後會ニ告ク

（ロ）商業兼帶領事ヲシテ他ノ尋常商民ト殊別ナル內地旅行ノ特典ヲ享有セシム可ラス

（ハ）總テ領事ハ何地駐劄トシテ認可狀ヲ得タル土地ニノミ限リ其公務ヲ執行ス可シ

（ニ）領事ハ一箇月ノ間ハ自ラ其代理ヲ任命スルヲ得ヘシ一箇月以上ニ至レハ外交官ヨリ其變更ノ旨ヲ日本政府ニ公報スヘシ

（ホ）總テ在日本ノ外國公使館幷領事館附ノ公任ヲ歷タル職員ハ全國ヲ通シテ自由ニ旅行スルヲ得セシムヘシ

（會議錄第二、三、四）第二節　民刑事裁判關係ノ事項

氏ト同樣ニ日本裁判所ニ於テ該犯ヲ審斷處罰スルノ權アルヘシ

（チ）我日本ノ國君又ハ政府ニ對シ外國人ノ犯セル罪科ヲ處罰スルノ適法ヲ設ル事（既ニ存立スルニアラサレハ）締約各國ノ義務タルヘキ事ヲ外國委員ニ於テ承認ス

（會議錄第五、六、九、十）第三節　稅率ノ事

（イ）收入概算年額大約四百萬弗ヲ得ヘキ輸入稅率案ヲ日本政府ヨリ指出ス爾後之ニ對シ外國委員（合衆國委員ヲ除キ）ヨリ平均一割ヨリ一割一分迄ノ從價稅ヲ輸入品課稅ノ基礎トセシモノニシテ大約三百三十萬弗（又タ諸雜費ヲ合算スレハ大約三百五十七萬弗）ノ收入概算額トナル稅率案ヲ提出シ日本政府ニテ之ヲ承諾シタルニ由リ乃チ各委員ヨリ該案ヲ締約各政府ニ勸告セリ（但シ合衆國委員ノミハ之ニ同意セス）

（ロ）輸入貨物ノ價格幷ニ收稅價格ニ助算スヘキ諸雜費ヲ計算シ又タ從量稅ヲ賦課スヘキ品類ヲ查定セシムルカ爲メニ聯合委員ヲ本會ニ於テ撰任ス

（會議錄第八、九、十、十一）第四節　貿易幷ニ航海ニ關スル其他ノ事項

（イ）日本政府ニテ從來建設維持セル沿岸諸燈標ノ爲メニ外國

船舶ヨリ噸稅ヲ徵收スヘキ事審議ノ上之ヲ至當ナリト議決ス日本政府ヨリハ將來燈標維持ノ要費年額ヲ殆ト補フニ足ルヘキ丈ケノ總額ヲ開示ス

(ロ)外國船舶ニ賦課スヘキ噸稅割合ハ本會ニ於テ聯合委員ヲ撰定シ其詳細ヲ調査セシム

(ハ)拂戻稅幷借庫ノ制ヲ設ル事ヲ日本政府ニ於テ承諾シ稅目調査委員ニ托シテ適宜ナル拂戻稅法ヲ起草シ且ツ之レカ須要ナル規則ヲ草定セシム

裁判權幷行政權ニ關スル豫定ノ諸事項ハ尙ホ未タ充分ニ審議ヲ盡サスシテ先ツ稅率幷其他貿易上ノ事項ヲ討議シタリシガ此際ニ當リ日本政府ハ外國人ノ自由ナル居住ト交際トニ各般ノ制限アルヲ除去スルカ爲メニ日本政府ノ寬大ナル意志ヲ實行セントスルノ方法ニ就テノ大問題ヲ充分滿足ニ融解スルハ到底領事裁判制ノ基礎ニ依テハ爲シ得ヘキ所ニアラサル事ヲ覺知シタルヲ以テ會頭ハ更ニ本會ニ告ルニ我政府ノ意見ニ於テハ今ヤ日本ニ在ル外國人ノ我政府及ヒ人民ニ於ケル交際全局ノ論題ヲ寬裕ナル方法ヲ以テ更正スヘキ一大計策ヲ提議スルノ時機方ニ到達セリト思考ストノ旨ヲ以テシ部チ（會議錄第七四月五日ノ集會ニ於テ其寬裕ナル點ニ就テハ

幸ニ曾テ異議アリシヲ覺ヘサル所ノ約束方法ニ依テ日本政府ハ全國ヲ各國人民ニ開通セント欲スルノ趣旨ヲ記述シタル覺書ヲ本會ニ朗讀セリ今該覺書幷其後六月一日本會ニ呈シタル細目案中ニ提議シタル其主趣ヲ略叙スルニ左ノ如シ（會議錄第十一）

一、日本政府ハ全國ヲ開通シ國內何地ニモ外國人ノ自由ニ旅行シ居住シ又ハ動產不動產ヲ所有シ且ツ日本人ト同一樣ノ振合ヲ以テ貿易其他ノ職業ヲ營マシム可シト明言シタリ而シテ唯タ本件ニ約束ヲ要スル所ハ內外人ノ別ナク均シク日本國ノ法律ヲ遵守セシメ又タ其法律ハ一般ニ日本國ノ行政幷司法官ニ於テ之ヲ施行スヘシトノ一事ニアルノミ

一、日本ノ法律幷其施行ニ關シテ日本政府ヨリ與ヘタル特別ノ保證ハ之ヲ略擧スルニ左ノ如シ

(イ)日本國ノ法律ト規則カ全ク西洋現時ノ法理ニ從ヒ完備ニ至ル上ハ少クモ一ノ歐文ニ正譯シ之ヲ頒布スヘキ事

(ロ)裁判上法律ノ適用ハ日本政府ニテ特別ニ採用スル外國判事ニ分任セシムヘキ事

又タ該判事ハ全ク不羈獨立ナラシメ而シテ其人物ハ適當ナル資格ト實際ノ經驗ヲ有スルモノタルヘキ事

(ハ)外國人被告タル事件ニ於テハ外國判事ヲ多數トナシ又タ

內外判事二名ニテ法庭ヲ開クトキハ外國判事ニ可否決ノ權ヲ有セシムヘキ事

日本人被告タル事件ニ於テハ內國判事ヲ多數トナシ若クハ之レニ可否決ノ權ヲ有セシムヘキ事

(ニ)東京、大阪、長崎、函館ノ控訴裁判所ニハ外國判事各二名ヲ置キ大審院ニハ三名（此外ニ必要ノ補缺員ヲ加フ）橫濱、神戶兩港ノ始審裁判所ニハ外國判事各一名ヲ置キ又タ右兩港ニハ外國治安判事各一名ヲ置クヘキ事

(ホ)金額百圓以上ノ訴訟ヲ直接ニ控訴裁判所ニ出訴スルノ特典ヲ外國原告人ニ享有セシムヘキ事

(ヘ)外國人違警罪以上ノ刑事ハ是レ亦控訴裁判所ニ於テ審斷セシムヘキ事

(ト)今後若シ我政府ニテ陪審ノ制ヲ採用スル事アル時ニ當テハ外國人被告タル事件ニ於テハ陪審官ノ一部ハ外國人ヲ以テ之ニ充タスヘキ事

(チ)總テ裁判所ノ審判ハ之ヲ公行スヘキ事

(リ)常ニ適能ノ通辯官ヲ備フヘキ事

(ヌ)代言人撰任ノ事ニ就テハ格外ノ特典ヲ外國人ニ許與スヘキ事

(ル)死刑罪ニ於テハ一層ノ保證ヲ與フル爲メニ一時特別ノ方法ヲ設クヘキ事

(オ)禁獄ニ處セラレタル外國人ノ取扱ニ於テモ亦特別ノ方法ヲ用フヘキ事

民事裁判權ニ關シテハ左ノ特別ナル條款ヲ提議セリ

(イ)甲乙國籍ヲ異ニスル外國人間ノ事件ハ日本裁判所ノ專轄ニ屬スヘシト雖トモ同國籍ナル外國人間ノ事件ハ本人等ノ意ニ任セ其所屬領事裁判廳ニ出訴スルヲ得セシムヘシ但シ其判決ノ執行ハ日本裁判所ノ權內ニ在ルヘキ事

(ロ)民法中專ラ各人身分上ノ權理ニ關スル一部分ハ之ヲ外國人ニ適用セサル事ヲ許スヘシ故ニ外國人此種ノ論件ハ苟モ日本人ノ利害ニ關涉スルモノニアラサルヨリ（外國裁判所若クハ領事ノ裁判ニ委スヘキ事

(ハ)宗教信仰ノ充分ナル自由ヲ外國人ニ保證スヘキ事

(ニ)一般ノ諸稅ヲ賦課スルハ內國人ト同一樣ナルヘシト雖トモ其他ノ非常臨時ノ負擔ハ之ヲ外國人ニ免レシムヘシ又タ參政權ハ固ヨリ許與スヘキ限リニアラスト雖トモ從來ノ居留地取締上ノ事務ニハ發議スルヲ得セシムヘキ事

以上ハ則チ日本政府カ新條約批准ノ日ヨリ若干期限ノ後ヲ

ニ至リ外國人ノ狀態ヲ改革セント欲スト陳述シタル所ノ概要ナリ

又タ日本政府ハ左ノ提議ヲナセリ

準備年限ヲ早ク始メ且ツ之ヲ條約批准ノ日ヨリ算シ五箇年ヨリ永カラシメサルヘキ事

此準備年限間ニ於テハ通商ノ爲メ外國人ノ當國内各地ニ旅行スルノ權利ヲ許シ又タ各開港市場從來ノ居留地ヲ擴メテ其區域内ニ外國人ヲ居住セシメ且ツ其不動產ヲ所有スルノ權利ヲモ許シ而シテ之ヲ許スニ就テハ現今ノ居留規程ノ内外ニ論ナク地租及ヒ地方ノ諸課稅等ヲ納メシムルハ内國人ト同樣タルヘキ事

又右許與ノ約束トシテ現今ノ條約期程外ニ於テ外國人ノ犯セル輕罪及ヒ其何地ニ於テ之ヲ犯セルニ拘ハラス一切ノ違警罪且ツ日本人ニ關係セル民商事件幷不動產ニ係ル一切ノ事件ハ日本裁判所ノ裁判ニ從ハシムヘキ事

行政規則違犯ノ處分モ亦日本裁判所ニ於テスヘシ尤モ條約面背戻ノ處分ハ準備年限内領事裁判廳ニ委スヘキ事

大體ノ策案ニ於テ外國判事ノ事及ヒ裁判所ノ組織權限等ノ事ニ就キ保證ヲ爲ス所ノモノハ總テ準備年限間ニモ之ヲ適用スヘキ事

右ニ概略ヲ述ヘタル緊要ナル改革ノ方案ハ本會過半數ノ嘉納スル所ナルモ本件ノ提議ニ就テハ外國委員ハ何等ノ訓令ヲモ奉セサル事ナルカ故ニ各其本國政府ニ右提議ノ儘ヲ進達スヘキ事ニ議決ス但シ委員過半數ハ之ヲ改正ノ基礎トナスヘク其本國政府ニ勸告スヘシト明言シ獨リ英國委員ノミハ熟考ノ上ナラテハ未タ遽ニ意見ヲ陳シ難シト說述セリ

新公使タル佛國委員「トリクー」氏ノ當國ニ來着セルハ此方案本會ニ提出後ニ係ルヲ以テ其後ニ意見ヲ述ヘ該法權ノ方案ハ未タ以テ裁判ノ善良ナルヘキ事ニ向テ充分ナル保證トナスニ足ラサルヘシトノ事ヲ陳出セリ

英公使モ亦タ七月十七日ノ集會ニ於テ氏カ日本政府ノ提案ニ同意セサルノ理由書ヲ本會ニ提出セリ

六月八日日本委員ハ日本政府ニ於テハ現行ノ輸出稅目ヲ變更スルノ意ナキ旨ヲ告ク

又タ同日ノ集會ニ於テ條約ニ附添スル貿易規則ハ稅目委員ニ其調查ヲ托シ該規則改正ノ意見ヲ本會ニ報告セシムヘキ事ニ議決ス

會頭ノ發議ニ依リ日本政府が新條約ニ挿入セント欲スル最

惠國條款ノ草案ヲ各政府ニ進達スヘキ事ニ議決ス但シ二三ノ委員ハ其各自ノ政府カ他國ト締結セル條約上ノ義務ニ關シテ或ハ該案中取捨スヘキ箇條之レアルヘキ旨ヲ陳述セリ

會議錄第十三　委員ノ贊成アリタル佛國委員ノ發議ニ對シ會頭ハ文學幷ニ美術上ノ版權、專賣權及ヒ商標保護ノ事ニ就テハ五相ノ主義ニ基キ特別ノ約定ヲ以テ之ヲ取極メント欲スル旨ヲ告述セリ

會議錄第十三　法權問題ノ論件ハ之ヲ熟議スルニ大ニ時間ヲ要スヘキ事ナレハ本件ノ確定ハ姑ラク之ヲ後ニシ先ツ稅率幷其他貿易關係ノ事項ダケヲ可成的速ニ確定セント欲ストノ會頭ノ發議ニ對シ米、佛兩國ノ委員異議ヲ述フ

會議錄第十四、十五　此發議ニ就テハ討論ノ末外國委員ニ於テ會頭ノ意ヲ其本國政府ニ進達スヘキ旨ヲ告述セリ但シ裁判權幷内地開通ノ件ハ敢テ之ヲ放棄スルニアラス追テ應ニ議スヘキ都合ニ至レハ亦タ速ニ議スヘキノ約束ナリ

會議錄第十三　英、獨人民ヨリ進呈セル二個ノ建言書ノ趣旨ヲ酌量シ日本政府ニ於テソノ會議錄第十五　本會ニ提出シタル草案中所協ノ特別制限ヲ以テ若干期限ノ間日本人ノ雇入レニテ外國船舶ノ不開港ニ回航スルノ特典ヲ許與スヘキ旨ヲ發議ス各委員皆ナ會頭ニ

陳謝シ而シテ篤ト該方法案ヲ熟慮スヘキ旨ヲ約セリ

會議錄第十六　其後英國委員ハ該制限ニ付キ異議ヲ述フ會頭之レニ對シ一二ノ答ヘヲナシ且ツ、其詳細ハ尙ホ審慮スヘキ旨ヲ約セリ

會議錄第十三、十五　サー、ハレー、パークス氏ハ豫定議目ノ第五類（開港場借地幷居住方法）ニ關繫スルモノトシテ横濱港居留地取締ノ件、同港下水ノ設置幷用水供給ノ劣惡ナル件及ヒ新潟港ニ於テ外國人借地方法ノ不完全ナル件ヲ本會ニ提出ス

會議錄第十三、十四　新稅目ハ長期若クハ短期ノ通知ニ依テ實施スヘキ乎トノ疑問ヲ委員中ニ發セシモノアリ各委員互ヒニ其意見ヲ異ニスルヲ以テ本項ハ尙ホ商業家ノ考證ヲ得タル上ニテ決定ス可シト議決ス

會議錄第十五　外國船舶乘組ノ日本人及ヒ日本船舶乘組ノ外國人所轄ノ裁判權ノ事ニ關シ會頭ヨリ簡短ナル意見書ヲ本會ニ提出ス右會議錄第十六　ニ付キ英、獨、米委員ノ陳說アリタル末各委員僉ナ該意見書ヲ其本國政府ニ進達スヘキ事ニ議決ス

會議錄第十五　日本委員ヨリ議目第十二類中ニ協示セル局外中立ノ件ハ關係ノ國々ト直接ニ之ヲ議定セント欲スル旨ヲ陳出ス

會議錄第十五　又タ日本委員ヨリ難破船ノ件ニ關シテハ既ニ英、米兩國ト締結セル約定ニ準シタル一條款ヲ各國トノ新條約中ニ挿入

セントヲ希望スル旨ヲ告ケ且ツ日本國北海ノ海豹幷鱒虎獵取締規則ヲ外國船舶ニ適守セシムヘキ條款ヲモ加ヘン事ヲ發議ス

各委員(第十五號)皆ナ該提議ヲ其本國政府ニ勸奏スヘキ事ニ議決ス

サー、ハレー、パークス氏ヨリ旅券ノ成規ニ就キ一通ノ覺書幷外國人ノ貿易ニ制限ノ存スルヲ愁訴スル今一通ノ覺書トヲ提出ス右兩件トモ一ト通リ討議ノ後チ日本委員之レニ答辯シ而シテ貿易制限ノ一項ハ之ヲ本會ニ議セスシテ寧ロ談判ノ處分ニ附セン事(第十六號)ヲ請求ス

最後ノ議目(第十三類)タル新條約期限ノ件ヲ議スルニ至リテ會頭ヨリ新條約(第十八號)ハ稅目、燈稅及ヒ其他ノ貿易事項ニ關シテハ八箇年其外ノ部分ニ關シテハ十二箇年ヲ以テ終期トシ終期ノ後チハ此條約ヲ再制スルカ又ハ廢棄トナスヘキ旨ヲ發議ス本件ニ就テハ頗ル論議アリテ其論議中會頭ハ此條款ハ日本政府ノ至重至要トスル所タル事ヲ說クニ特ニ力ヲ用ヒ又タ縱令廢約スル事アリトモ日本ハ其外交ニ於テハ必ス公法ノ通義ヲ守ルヘク而シテ如何ナル事情アリト雖トモ外國人ノ享有セル權理ヲ損傷スル事決テ之レ無カルヘキ事ヲ明言セリ

是ニ於テ各委員ハ衆ナ會頭ノ發議ヲ其本國政府ニ進達スヘキ事ニ議決ス

各委員悉ク上述ノ本會議事提要ヲ異議ナク承諾ス

英文 條約改正準備會議會議事要領

In compliance with the wishes of the Conference conveyed at the meeting of 29th June—an invitation which he said only anticipated his own wishes—the President begged, before pronouncing the Conference closed, to offer a brief Résumé of its proceedings, in order to show in outline the results arrived at.

The Conference commenced its sittings at the Ministry of Foreign Affairs in Tokio, January 25th of the present year, and after making all necessary arrangements for its meetings and mode of procedure, entered upon the actual business of Revision at the next meeting which was held on February Ist.

At the earlier meetings of the Conference the following points were substantially agreed on :—

(1) In connection with Consular jurisdiction and privileges.

a. Merchant Consuls should exercise no jurisdiction.

The Delegate for Holland, Sweden and Norway and Denmark dissented but subsequently announced the intention of his own Government (Holland) to reserve jurisdiction to Consuls *de carrière*. The Belgian Delegate, his country not having been represented at the discussion of these questions, afterwards stated that he did not consider himself bound by any views expressed upon them.

The Delegate for Switzerland subsequently stated that the Swiss Government wished to continue Merchant Consuls as Judges.

b. Merchant Consuls should enjoy no special privileges over other merchants in regard to travelling in the interior.

c. All Consuls should only exercise their official functions at the place for which they have received *exequatur*.

d. Consuls may themselves appoint a substitute for one month; after that time the Diplomatic Representative will officially inform the Japanese Government of the change.

e. All regular official members of the Foreign Legations and Consulates in Japan may travel freely throughout the whole country.

(2) In connection with matters of Civil and Criminal Jurisdiction.

a. It is understood that the rules of the court where a case is tried shall always apply to all persons appearing before it, with regard to costs and court fees, as well as judicial procedure generally.

b. Foreign Courts in Japan should as far as practicable be competent to adjudicate in first instance upon all civil and criminal cases arising within the sphere of their jurisdiction, irrespective of the amount involved or the gravity of the crime or offence committed.

c. The establishment of foreign appeal Courts in or near Japan was considered by the Foreign Delegates to be most desirable in principle, but not practicable for most of the Powers.

All however agreed to represent to their Governments the views placed before them by the President on this subject.

d. All foreigners and natives in Japan should be compulsorily liable to appear as witnesses before other courts as well as their own, where their testimony might be required.

e. Plaintiffs, native or foreign, may both in civil and criminal cases address their petitions or complaints to the competent court, either direct or through the medium of their own authorities.

f. All crimes and offences should if possible be tried at the place where they are committed.

g. Should there occur a lapse of jurisdiction on the part of foreign courts in the case of a crime or offence committed by a foreigner, the Japanese courts will have the right to try the case, and punish the offender in the same manner as if he were the subject of a non-treaty Power.

h. The foreign Delegates acknowledged the obligation of the Treaty Powers to provide laws (in case they do not already exist) adequate for the punishment of crimes or offences committed by foreigners against the Sovereign or Government of Japan.

(3) In connection with the Tariff.

a. An Import Tariff estimated to yield a revenue of about $4,000,000 per annum was proposed on the part of the Imperial Government. Subsequently a Tariff calculated to yield about $3,300,000 (or with charges about $3,570,000) on the basis of a mean *ad valorem* duty of 10 to 11 per cent on articles of importation was proposed by the foreign Delegates (except the Representative of the United States), and this Tariff being accepted by the Japanese Government was recommended to the Treaty Powers (the United States Delegate only dissenting).

b. A joint committee was appointed by the Conference to work out the values of the imports and the charges to be added in calculating the rates of duties; also to propose the articles for which specific duties should be fixed.

(4) In connection with other matters relating to Commerce and Navigation.

a. It was agreed upon considerations of justice, that the Japanese Government should levy tonnage dues from foreign ships for the coast lights it maintains, and such an aggregate amount was named as would nearly meet the annual expense of the future maintenance of the lighthouse establishment.

b. The rate of the dues to be levied on foreign vessels was left to be worked out in detail by a joint committee nominated by the Conference.

c. The introduction of a system of Drawbacks and Bonded Warehouses was accepted by the Japanese Government and the Committee charged with the Tariff calculations was requested to draw up a proper Drawback system and settle a draft of the necessary regulations.

The discussion of these questions of the Tariff and other Commercial matters had been entered upon before all the subjects set down for consideration in connection with Jurisdiction and Administration had been fully dealt with. At this stage of the negotiations the Japanese Government being impressed with the conviction that no throughly satisfactory solution of the great questions involved, in a manner realizing the liberal intentions of the Japanese Government towards the removal of all restrictions upon the free residence and intercourse of foreigners, could possibly be arrived at upon the basis of Consular Jurisdiction, the President declared to the Conference that in the opinion of the Japanese Government the time had arrived when a more comprehensive scheme should be proposed for settling in a liberal manner the whole question of the relations of foreigners in Japan to the government and people of the Empire.

Accordingly the President at the meeting of April 5th, read to the Conference a Memorandum expressing the views of the Imperial Government and the willingness of the latter to open the whole Empire to the subjects of all nations upon terms which the President is happy to think have not been called in question on the score of liberality. The proposals of the Imperial Government as contained

in this Memorandum and a subsequent document of greater detail laid before the Conference on June Ist may be very briefly summarized as follows:

The Imperial Government declared its readiness to open the whole country to foreigners, who should be free to travel to and reside in all parts of the Empire, to acquire both real and personal property, and to carry on trade and exercise any calling under the same conditions as Japanese subjects, upon the sole condition that the laws of Japan should be binding on all alike, and be applied generally by the Japanese authorities executive and judicial.

The particular guarantees offered by the Japanese Government in regard to the laws and their application were briefly:

a. Laws and Regulations of the Empire, when completed on all points in accordance with the principles of modern Western Jurisprudence would be authoritatively published and translated into at least one foreign language.

b. The udicial application of the laws would be entrusted in part to foreign judges, engaged for the purpose by the Japanese Government.

The judges would be perfectly independent and would have proper qualifications and practical experience.

c. In tne case of foreign defendants the foreign judges would be in the majority; or where two judges only formed a court, the foreign judge would have a casting vote.

In the case of Japanese defendants the majority or casting vote would be with the native judges.

d. The appeal Courts at Tokio, Osaka, Nagasaki and Hakodate would have 2 foreign judges each the Cour de Cassation 3 (with the necessary substitutes added).

Courts of first instance in Yokohama and Kobe would have one foreign judge each, and one foreign justice of the peace would also be appointed at each of the two places named.

e. Foreign plaintiffs would have the privilege of bringing their cases (above 100 yen) directly to the appeal Courts.

f. All criminal charges against foreigners above simple contraventions would also be tried by the appeal Courts.

g. If at any time the jury system should be adopted by the Japanese Government, juries would be partly composed of foreigners in cases where the defendants were foreigners.

h. All proceedings in the Court would be public.

i. Competent interpreters would always be provided.

j. Special and exceptional privileges would be granted to foreigners as to the appointment of counsel.

k. Exceptional arrangements would for a time be admitted, to afford additional security in capital Charges.

l. Exceptional arrangements would likewise be admitted in the treatment of foreigners sentenced to terms of imprisonment.

In regard to civil jurisdiction the following exceptional provisions were proposed:—

a. While cases between foreigners of different nationalities would be cognizable exclusively by the territorial courts, cases between foreigners of the same nationality might at their option be brought before their Consular court, the execution of the judgment being however reserved to the territorial courts.

b. Foreigners would be excepted from the application of that part of the civil law relating exclusively to personal status: such questions therefore affecting foreigners would remain with the foreign courts or Consuls, in cases where no Japanese interests should be involved.

c. Full liberty of conscience and the full exercise of their religion would be guaranteed to foreigners.

d. Foreigners, whilst liable to the same general taxes as natives would be exempt from other and extraordinary burdens: and whilst necessarily deprived of political rights, would yet have a voice in the municipal government of their former settlements.

Such was the general outline of the reforms

which the Japanese Government expressed its willingness to introduce in relation to the position of foreigners at an appointed time after the ratification of the new Treaties.

It further proposed a period of transition to commence at an earlier date and to last not longer than 5 years from the ratification of the Treaties.

During this period foreigners would have the right of travelling in all parts of the country for purposes of trade, and the right of residing and holding real property within certain larger limits at the open ports or cities, and either within or without the existing limits of residence, upon the same terms as natives in respect of land-tax (or ground-rent) and local rates and taxes.

At the same time, and as a condition, all delicts committed by foreigners outside the present "Treaty limits" and all contraventions wherever committed and all civil and commercial cases in which Japanese should be interested, as well as all matters relating to real property, would be brought before the Japanese Courts.

Obedience to administrative Regulations would also be enforced by the territorial tribunals, breaches of Treaty stipulations being for this period left to the Consular Courts. All the guarantees offered in the main proposal in regard to foreign Judges, constitution and competency of the Courts etc., would apply also during this period.

The important plan of reforms, the general outline of which is here given, was favourably received by the majority of the Conference.

As the Delegates had no instructions in regard to these proposals, all the foreign Delegates agreed to lay them before their Governments as they stood, the majority expressly recommending them as a basis for revision, and only the Delegate of Great Britain wishing time to consider them before expressing his opinion.

Subsequently Monsieur Tricou, the new Minister and Delegate for the French Republic, who had not arrived when this plan was laid before the Conference expressed an opinion that the scheme of jurisdiction as formulated did not offer sufficient guarantees for the good administration of justice.

The British Minister also at the meeting of July 17th laid before the Conference his reasons for not agreeing with the propositions.

On the 8th of June the Japanese Delegates declared that no change in the present export Tariff was contemplated by the Imperial Government.

At the same meeting it was decided that the Trade Regulations attached to the Treaties should be examined by the Tariff Committee, who should report to the Conference their recommendations for the revision of the same.

On the proposition of the President the Delegates agreed to lay before their Governments the draft of a "Most Favoured Nation Clause," which the Japanese Government wished to insert in the new Treaties.

Some of the Delegates at the same time intimated certain reservations respecting Treaty obligations of their respective Governments with other Powers.

On the proposition of the Delegate of France, who was supported by other Delegates, the President declared his readiness to conclude special arrangements on the basis of reciprocity on the subject of literary and artistic copy-right, patents and protection of trade marks.

The President's proposal to come to a final agreement as to the Tariff and other commercial questions as speedily as possible, and to leave the questions relating to jurisdiction, which might require more time to consider, for subsequent settlement, was objected to by the Delegates of the United States and France.

After some discussion all the foreign Delegates declared themselves ready to submit the wishes of the President on this point to their Governments with the understanding, that the question of jurisdiction and the opening of the country was not to be regarded in any way as abandoned but would be proceeded with, as soon as circumstances should admit.

On consideration of two Memorials presented by the British and German Delegates the Japanese

Government expressed its readiness to grant to foreign vessels the right to visit non-opened ports under Japanese charter for a limited time and under special conditions, which are embodied in a draft laid before the Conference. The Delegates thanked the President and promised their careful consideration of the details of the proposed measure.

The British Delegate subsequently presented the objections he had to make against the conditions, and the President after some reply promised that the details would hereafter be further considered by him.

Sir Harry Parkes put before the Conference, as being connected with Group V of the subjects appointed for discussion, ("Land Tenure and Conditions of Residence in open Ports") the question of the present municipal government of Yokohama, the bad drainage and water supply of that place, and the defective system of land tenure in the case of foreigners at Niigata.

The question whether the new Tariff should come into force at a short or a loug notice was

raised by some of the Delegates, and as opinions differed it was considered advisable not to decide this point before gathering more evidence from commercial quarters.

The President laid before the Conference a short draft embodying his views on the question of jurisdiction over Japanese subjects serving on foreign vessels and foreigners serving on Japanese vessels. After some remarks on the part of the British, German and United States Ministers, all the Delegates agreed to submit the same to their Governments.

The Japanese Delegates declared that in regard to the neutrality question named in Group XII, they would prefer to treat it directly with the interested Powers.

The Japanese Delegates intimated the desire of the Japanese Government to insert in the new Treaties with all Powers a clause relating to shipwrecks, based upon the conventions on that subject already concluded with Great Britain and the United States. They also proposed that provision

should be made for the observance by foreign vessels of regulations for the protection of the sea-otter and seal fisheries in the northern seas of Japan.

All the Delegates agreed to recommend these proposals to their respective Governments.

Sir Harry Parkes presented a Memorandum on the passport system and another complaining of the existence of restrictions on the trade of foreigners, to both of which, after a general discussion, replies were given by the Japanese Delegate, requesting that the latter question might be dealt with diplomatically outside the Conference.

The subject of the last Group XIII, namely duration of the new Treaties was then discussed. The President proposed that the Treaties should terminate, as to Tariff, Light dues and other Commercial matters in eight years, as to the other portions in 12 years; at the expiration of which periods it should be open to either party to remodel or terminate the Treaty. After some discussion in the course of which the President emphasized the great importance attached by the Imperial Japanese Government to this clause, whilst he declared that Japan even in case of an eventual termination of Treaties would conform to the principles of International law in its foreign intercourse, and that in no case the vested rights of foreigners would suffer, all the Delegates agreed to submit the President's proposition to their respective Governments.

The above Résumé of the proceedings of the Conference was unanimously accepted by the Delegates.

附屬書三

條約改正豫備會議會期續行ニ關スル

稅目及貿易諸規則

我政府ヨリ提出セシ稅目案ノ綱領ハ第四次會ニ於テ開陳セシ如ク增稅ノ本旨ハ專ラ財政稅ヲ課收シ其增額ヲ以テ第一不換紙幣ノ困難ヲ救濟スルノ資ニ充テ以テ國內ノ利源ヲ養成シ後來內外ノ貿易ヲシテ一層旺盛ナラシムルノ主義ニ在リ一昨年我政府ニ於テ擬定シ發議ヲ試ミシ稅目案ノ如キハ或物品ニハ三割ノ高稅ヲ課シ其他ノ物品ニモ保護稅法ニ傾

向スルノ嫌アルヲ以テ締盟各國ノ中ニハ固ク之ヲ拒絶スルノ意嚮アリ因テ保護稅法ノ我邦方今ノ狀態ニ適切ナラザル旨趣ヲ說キ務メテ其等ノ誤解ヲ消除スルニ意ヲ用ヒ今回提出セシ稅率ハ卽チ最高額ヲ二割五分ニ止メ而シテ僅カニ贅澤奢侈ニ屬スル數品ニ此ノ高額卽チ二割五分ノ稅率ヲ課シ其他ハ大抵一割乃至五分ノ低稅ヲ賦スノ要スルニ軋スク四百萬圓ノ輸入稅ヲ收得スルヲ目的トシ輕重ヲ參酌シテ其中ヲ執リ之ヲ編制シタルモノニテ曩日編制シタルモノニ比スレハ洵ニ寬裕ノモノト云ベシ然ルニ本案ノ議場ニ呈露スルヤ各國委員等ハ其物品ノ要否ト精粗ノ別ヲ問ワス概シテ其自國ノ製造物產ニ至低ノ稅額ヲ賦セン事ヲ主張シ英國ノ綿糸ハ一割ノ稅率ナルヲ七步以下ニ減シ佛國ノ酒煙草其他ノ贅澤玩具ノ稅率ハ二割五分ナルヲ英國ノ織物ニ課スル一割ノ稅率ニ比擬セン事ヲ望ミ西班牙ノ砂糖伊國ノ珊瑚等我擬定スル所ニ比スレハ殆ント半額ノ減稅ヲ要求シ米國ノ如キモ其石炭油ノ稅率一割五分英國綿糸ノ稅率八分ニ比スレハ殆ント二倍ノ高額ナル事ヲ苦訴スル等異論百出殆ント底止スル所ナキカ如シ此際我ヨリ彼レニ讓リ此ニ與ヘ各國ノ所望ヲ充タシメント欲スレハ到底稅目ヲ改正スルモ現今ノ稅率ト更ニ增減スル所無キニ至ルベク且ツ各國殊別ノ利益ヲ綜合シテ平等均一ナラシメント欲スルハ實際行ハル可カラス是ニ於テ我ハ專ラ輸入稅四百萬圓ヲ收得スルヲ以テ必要トスルニ止マル旨ヲ述ヘ其賦課ノ方法及ヒ各國ノ利益ヲシテ彼此偏頗ナカラシム等ノ細目ニ至テハ彼我ノ間ニ特ニ調査委員ヲ設ケ之ヲ調和團結セシムル事然ル可シト思考シ其手續ニ依リ彼ニ在テハ右審議ノ爲メ英公使パークス及獨逸國副委員サツベ氏其任ニ當リ各國委員ノ間ニ居テ熟議ニ從事シ我ニ在テハ調查委員トシテ鹽田外務少輔ヲ之ニ任シ豫議會ノ間日ヲ以テ彼我委員數回相會シ每品稅率ノ昂低輸入ノ多寡等ヲ審查討議セリ是ニ於テ各國委員我要望ノ不當ニアラザルヲ曉解シ當初彼ヨリ擬議セントスル對案ニ據レハ總計三百萬圓ナルヲ審議ノ末漸次ニ之ヲ增加シ最後ノ豫算卽チ三百三十萬圓之ニ諸雜費ヲ原價ニ合計スレハ大約三百六十萬圓ヲ收得スベキ事ニ議決シ卽チ第（註改）回會議錄ニ附屬スル對案ノ如シ各國委員ノ間ニ於テ協議一致ノ際困難ナリシ事情ハ前陳ノ如ク各國利益ノ所關殊別ナルニ起因スト雖トモ獨逸國委員ノ如キハ他ヲシテ協同セシメンガ爲メニ自國ノ物產ニ課スルニ他國ヨリ稍重稅ヲ以テシ專ラ協和

ニ盡力シ漸ク熟議ニ至ルヲ得タリ然トモ此熟議ニ至リシハ單ニ稅率ノミヲ定メタルモノニテ諸雜費及ヒ原價ノ當否等ハ目下雙方委員ニ於テ之ヲ審查ス追テ其報告ヲ得テ協定ノ稅目案ヲ編制スヘキ順序トス彼レノ對案ヲ以テ我原案ニ比スレハ其總額ニ幾許ノ差違アリ且ツ各品稅率ノ區別上稍妥當ナラザルモノアリト雖トモ是等ヲ尙整理セント欲スルトキハ多少其收額ヲ減セザルヲ得ズ故ニ我要望ニ對シ未タ充分ナルモノニ非サルモ亦彼等協議上ノ事實ヨリ之ヲ視レハ該案ハ特別調查委員ニ於テ非常ノ盡力ヲ以テ漸ク此點ニ至リタルモノニテ本官ニ於テモ此際數回各委員ト晤談シ今一層增進ノ事ヲ試ムト雖トモ强テ之ヲ主張スルトキハ折角此迄ニ至リシ結果モ再ヒ破談ト爲リ委員ノ勞力ヲシテ徒爲ニ屬セシムルノミナラス各國委員ノ內情ヲ揣摩スルニ反ツテ某物品ニ就テハ尙輕減セン事ヲ請求セント欲スル者アリ尙數日ノ時間ヲ費ヤシ幾回ノ談判ヲ重ヌルモ却テ雙方ノ論勢ニ圭角ヲ生シ玉成ノ期ヲ保チ難タシ右等ノ情狀ヲ深ク考察スルトキハ稍滿足ノ結果ト云ワザル可カラス終ニ本議ノ如ク決定セリ

燈稅港稅及ヒ船稅

現行條約ニ據ルニ日本政府ハ外國ノ船舶ヨリ一モ噸稅ヲ課收スル事ヲ得ズ唯稅關ニ於テ船舶入港ノ際其噸數ノ大小ニ拘ハラズ拾五弗出港ノ際ニ七弗ノ手數料ヲ課收スル事トナレリ而シテ其金額ハ明治十四年會計年度ノ報告ニ據ルニ一周年間ノ收額僅カニ壹萬四千圓餘トス然ルニ我政府ニ於テ從來燈臺建築其他修繕維持ノ爲メニ消費セシ金額ハ亡慮四百二十六萬餘圓ノ巨額ニ至レリ因テ今回ノ會議ニ於テ我政府ノ要求スル所ハ從來ノ手數料ヲ廢シテ歐米各國ニ於テ課收スル如ク每船其噸數ニ應シ噸稅トシテ凡ソ十七萬六千圓餘ヲ收メ之ヲ以テ各燈臺ノ修繕維持ノ費用ニ充テント欲スルノ目的ニ出ツル旨ヲ論述セシニ右課收ノ目的ニ於テハ各國委員皆之ニ同意ヲ表セリ但夕之ヲ實際課收スル方法ニ至ツテ日外ノ間較異見アリ今其大意ヲ擧クルニ日本政府ニ於テハ通常ノ商船ト定期郵便船トヲ區別シ定期郵便船ノ稅ハ四箇月間每噸五十錢トス其故ハ定期郵便船ハ他ノ商船ニ比スレバ幾分歟公益ノ爲メニシ且其出入港ノ度數頻多ナルヲ以テ之ヲ寬待スルニ在リ外國委員中我發議ニ同意スルモノアリト雖トモ之ニ反對スルノ論旨ハ商船ト云ヒ邦船ト云トモ均シク是燈明ノ利益ヲ共有シ而シテ多ク其利ヲ享有セシ

モノ（卽チ郵船ノ出入頻多ナルヲ云フ）ハ少ナク稅ヲ拂ヒ少ク其利ヲ享受セシモノ（卽チ商船ノ四箇月間ニ一度或ハ一年ニ一度ナルモノヲ指ス）ハ多クノ稅ヲ拂フヲ以テ不公平トスルモノナリ然ルニ我政府ニ於テ主眼トスル所ハ其方法ハ何樣ニ出ツルモ到底豫算ノ金額ヲ得テ以テ維持修繕ノ費ニ充ン事ヲ欲スルニ在リ故ニ此意ヲ以テ各委員中ニ於テ課收ノ方法ヲ審査シテ議會ニ報告シ然ル後ニ之ヲ議決スル事ト爲シ目下各委員ノ審査中ニ係レリ

沿海貿易

現行日本ト塊洪兩國ノ條約ニ據レバ外國船ハ日本國ニ於テ甲ノ開港場ヨリ乙ノ開港場ノ間ヲ回漕スルノ權ヲ有スルモノトス右回漕ノ權ハ卽チ沿海貿易ノ一部分トス故ニ今回改正セント欲スル目的ハ外國船ハ沿海ノ諸港ハ勿論甲乙ノ開港場ト雖トモ貨物ヲ搭載シテ回漕スルヲ得ザル事トシ沿海貿易ノ權ハ全ク日本政府ノ權內ニ貯存スベキ旨ヲ條約中ニ明載スルニ在リ然ルニ我政府ヨリ議場ニ提出セシ重要ナル論題卽チ稅目及裁判權ノ二者ノ內裁判權ノ論項ハ其事最モ重大ナルカ故ニ之ヲ譯定センニハ尙外國政府ニ於テモ充分ノ考案ヲ經亦我政府ニ於テモ其細目ヲ設定スルニ幾多ノ時

月ヲ要シ其間內外ノ間ニ數回ノ往復ヲ重ネザル可カラス假令各國ノ同意スル所ト爲ルモ之ヲ實施スルハ數年ノ後ヲ期セザル可カラズ但タ稅目ノ論件ハ今ヤ旣ニ雙方委員ノ同意スル所ト爲レリ故ニ其實施一日速ナレハ則一日ノ利アルハ論ヲ俟タズ因テ夫ノ法權論ハ姑ク之ヲ後ニ讓リ先ツ稅則ヲ實施シ速ニ實益ヲ我ニ占有スルヲ得策トス然トモ我之ヲ要求スレハ彼亦之ニ報スル利益卽チ讓與ト併行セン事ヲ請求スルニ至ルベシ現ニ英公使ノ如キハ右先行ノ報トシテ我ヨリ內地ニ方ケル一二ノ市場ヲ開キ外人ヲシテ通商ノ爲メニ旅行セシムル事ヲ冀望セシ旨ヲ私カニ本官ニ說話セシ事アリト雖トモ內地通商ノ事ハ其部分ノ廣狹ニ不拘全體ノ法權論ト密着スルカ故ニ一時增稅ノ爲メニ之ヲ讓與スル能ハザル事情ヲ述ヘテ之ヲ拒絕セリ因テ此他ノ事物ニ就キ右實施先行ノ報酬ト爲スヘキモノヲ撰擇スルニ是ヨリ先キ橫濱居留ノ外人ヨリ一通ノ建言書ヲ公使ノ筆頭英公使ヲ經テ本會ニ呈出シ日本政府ニ於テ日本人ノ外國ノ船舶ヲ賃雇シ沿海貿易ニ從事スルヲ許可セン事ヲ請求セリ抑今回改正ノ目的ニ於テ沿海貿易ノ事タル前旣ニ言フカ如ク全ク我國ノ權內ニ貯存スルニ在ルハ勿論ト雖トモ彼レ若シ我要求ニ應シ稅

目ヲ先行スル事ヲ同意スルニ於テハ我政府ハ右稅目ヲ實施スルト同時ニ五箇年ヲ限リ相當ノ規律ヲ設ケ我邦人ノ外國船舶ヲ雇使シ不開港場ニ出入スル事ヲ許可シ右期限後ハ全ク之ヲ我權內ニ歸スルモノトセバ夫ノ改正稅目實施ノ遷延ニ比スレバ曾ニ害ナキノミナラズ却ツテ通運ノ利ヲ賴ツテ以テ貿易ヲ增起スルノ媒助ト成ルベキナリ是ニ於テ我委員ハ此沿海貿易ノ事項ヲ以テ讓與ト爲サン事ヲ可トシ內閣ノ裁決ヲ請ヒシニ內閣ニ於テ始メ本件ニ關シ數項ノ異論アリト雖トモ說明ノ末終ニ裁可スル所ト爲レリ而シテ之ヲ議場ニ提出セシニ米佛兩委員ハ之ニ異議ヲ容レ法權論ト併行スヘキヲ主張シ殆ント行ハレ雖キノ論勢アリ蓋シ兩委員ノ如ク主張セシハ法權論ノ事件ハ永ク之ヲ遷延シテ實施セザル乎ノ誤見ヨリ出テタルモノト思考セラレ因テ我委員ハ法權ノ事項ハ敢テ放棄廢案トスルニ非ラズ問題重大ナルガ故ニ徐ニ審議スベキ旨ヲ答ヘ終ニ各員我發議ノ旨趣ヲ以テ各國政府ヘ申報スル事ニ議決セリ

輸出稅目稅關規規倉庫規則及拂戾稅

輸入稅目ハ各委員ノ同意スル事ト爲リ旣ニ其稅率ヲ議決セルヲ以テ外國委員中現行ノ輸出稅目ニモ變更ヲ加フルヤ否

ヤノ問議アリ我委員ハ之ニ答フルニ改稅ノ目的ハ專ラ不換紙幣ノ困難ヲ救濟シ力メテ金銀貨幣ヲ收入スルニ在ルヲ以テ先年改正ヲ發議セシ際輸出稅ハ廢止スルノ意アリト雖トモ今回ノ改正ニ於テハ現行ノ儘依然之ヲ存セン事ヲ冀望スル旨ヲ以テセシニ各員之ニ異議ヲ發スル者ナシ

稅關規則ハ卽チ現行條約ニ附屬スル貿易規則中ニ記載スル各款是ナリ現行ノ貿易規則ナルモノハ當初我邦ニ於テ外國通商ノ事ニ慣熟セザルノ際當時結約セシ外國委員等ノ起稿スル所ニシテ詳密ナラザルノミナラズ我事情ニ適セザルモノ往々アリ因テ今回改正スル所ノ規則案ハ大綱ヲ英米獨佛ノ稅關規則ニ則トリ開港以來ノ實驗ト我邦ノ事情トヲ酌量シテ制定シタルモノニテ現行ノモノニ比スレバ頗ル整備セシモノトス本案ハ旣ニ外國委員ニ交付シ目下彼我ノ委員中ニ於テ審議中ノ一項トス

倉庫規則及ヒ拂戾稅ノ項ハ前項ト同シク雙方ノ委員中ニ於テ審查中ニ係レリ現行ノ倉庫規則ハ之ヲ實際ニ驗スルニ弊害アルヲ見ズ故ニ目今ノ改正ニ於テハ變更セザルモ妨ケナキ見込ナリ但タ拂戾稅ハ現行許可スル所ハ稍過嚴ナリト云フベシ故ニ歐米各國ニ於テ普通許可スル所ノモノヲ取捨シ

幾分ノ餘裕ヲ付與スヘキ見込ナリト雖トモ自ラ倉庫規則ニモ關係スル所アルヲ以テ各委員ノ協議ヲ經テ議定セントス

領事特權　民事裁判權　刑事裁判權

右三項ハ豫議會開設ノ初メテ方リ豫定セシ題目ノ順次ニ隨ヒ數回各委員ト討論ヲ盡シ從前實施上不完全ナルモノハ之ヲ補足シ弊害アルモノハ之ヲ矯正シ以テ改正ノ基礎ヲ豫定セリ卽チ其詳細ハ載セテ第（註ㄙㄙ）號及ヒ第（註ㄙㄙ）號ノ會議錄ニ在ルガ如シ然ルニ此後我委員ハ第七次會及ヒ第十一次會ニ於テ全國ヲ通開シ適應ノ裁判管轄權ヲ掌握スルノ議ヲ提議ス蓋シ此提議ノ旨趣タルヤ殆ント現今ノ領事裁判法ヲ廢棄シ外人ヲ我法權ノ下ニ管理スルニ在リ故ニ此議果シテ各政府ニ於テ同意スルトキハ右領事特權其他ノ二項ハ殆ント無用ニ屬スルヲ以テ其論議ノ詳細ハ此ニ之ヲ省キ記載セス

全國ヲ開キ裁判權ヲ回收スル事

現行條約ニ據ルニ我邦ニ在留スル外國人ハ治外法權ヲ有シ民刑ノ裁判ハ勿論我行政警察ノ諸規則違犯ニ對スル處罰ト雖トモ外國ノ法庭ニ於テ處罰スル事トナレリ因テ現行ノ條約ヲ改正スルニハ宜シク我ニ法權ヲ掌握シ歐米各國ニ於ケル如ク互相對等ノ主義ニ基キ其土地ノ管轄裁判ニ服從セシムルニ非ラサレハ我ニ在テハ決シテ許スヘキニ非ラズ

但タ外人内地ニ在リテ通商シ若クハ居住ヲ許ルスハ管轄權ト密着スルノ主義ヲ以テ之ニ應セン事ヲ相當ト思考シ乃チ全國ヲ通開シ適應ノ裁判管轄權ヲ掌握スルノ發題ヲ以テ今回改正ノ大讓與ト爲シ彼等ノ將ニ我ニ向ツテ要問セントスルノ機ニ投シ我ヨリ先ツ之ヲ提議シ一ハ以テ我外交寬待ノ政略ヲ示シ一ハ以テ領事裁判及ヒ行政規則ニ關スル諸論題ノ未タ全カラザルモノヲ此一大議目ヲ以テ網羅シ盡サントス欲シ遂ニ内閣ノ決議ヲ經テ議場ニ提出セリ其詳細ハ載セテ會議錄第七第十一號ニ在ルガ如シ右提案ニ對シ各國委員中英佛委員ヲ除キ大低皆之ヲ贊成シ之ヲ其本國政府ニ勸告スベキヲ發言セリ佛公使トリクー氏ハ其先任公使ニ於テ既ニ我發議ヲ贊成シタルニ拘ワラス我政府ノ提出スル所ハ未タ以テ外人ヲ保護スルニ充分ナラズトノ說アリト雖トモ先任公使ノ既ニ同意スル所ナルヲ以テ其政府ヘ傳送スベキ旨ヲ述ベ英公使ハ其異論ノ諸點ヲ條列シ我政府ノ參考ニ呈セリ其論旨ハ各端アリト雖トモ要スルニ我邦未タ民法商法ノ編制ナク裁判官其人ノ如キ未タ其經驗ナキノ恐アリ故ニ内外交涉ノ訴件ハ外國判事ヲ多數トシテ判決セシムルニ非ラザルヘカラス然ラザレハ其主義ハ何程公正ナリト雖トモ其論旨ハ何程巧妙ナリト雖トモ彼之ヲ肯諾セス我亦之ヲ實施スル事能ハザルトキハ則チ改正ヲ發議スルモ其効ナク到ムル事ヲ要求スベキナリ然ト雖トモ右ノ如ク完全ノ裁判權ヲ要求スルハ我内政歐米ノ如ク整備スルヲ待テ初テ行フベキモノナルガ故ニ既ニ一昨年我政府ヨリ發議セル草案ニハ回收スベキ裁判權ニ制限ヲ立テ（違註罪罰金貳圓以下施政規則罰金五百圓禁獄三箇月以内ヲ限リ獨操ニ歸シ其他ハ從前ノ如キ領事裁判ニ委ス）之ヲ提出シ而シテ我ヨリ彼ニ對スル讓與ノ件ニ至ツテハ既ニ外人ニ内地旅行ヲ許可シ其他外人ニ許ス所ノ便利既已ニ不少故ニ此際已ムヲ得ザレハ一二ノ開港ヲ以テ之ニ充テント欲スル事ヲ豫定セシニ今回外國政府ヨリ先年ノ發題ヲ拒絕セシ意嚮ヲ察スルニ各開港場中現ニ長崎箱館ノ如キハ漸次衰微ニ赴キ新潟港ノ如キモ僅カニ數名ノ外人在ルノミ是ヲ以テ先キニ我豫定セシ一二ノ開港ヲ以テ讓與ト爲スガ如キハ決シテ彼ノ滿足スル所ニ非ラズ必スヤ其讓與トシテ内地通商ノ一事ヲ以テ要求スルニ至ルベキヲ探知セリ因テ今回ノ會議ニ於テハ我ニ於テモ曩日ノ圖ヲ改メ豫メ彼レニ讓與スベキ事件ヲ考究スルニ凡ソ外人ヲ現今定ムル所ノ規程外ニ出テシムルトキハ必ス之ヲ管轄スルノ權ヲ操ラザル可カラズ外國公使ノ冀望セシ增稅ノ爲メニ内地ニ通商スルヲ許ルスガ如キハ殆ント叅ケクシ

レバ未タ以テ信憑スルニ足ラス且ツ此ノ如キ未曾有ノ方法ヲ施行スルニハ一時ニ之ヲ實施セス漸次ニ着手スルヲ可トスル等ノ諸點ニ在リ將又本案ヲ議場ニ提出スル前ニ當リ内閣ニ於テモ其得失可否ニ關シ論議アリキ其要點ヲ約言スレバ第一開國ニ關シ我ニ完全無缺ノ裁判權ヲ掌握シ全ク英佛等ノ各國ニ於テ管理スルカ如キ互相對等ノ國權ヲ占メ毫モ寬假讓與スル所ナカルベシトノ理論ニ出ツルモノナリ第二ニハ外人ヲ内地ニ住居セシムルハ猶鷸鳥ヲ放ツガ如ク全國ノ利益ハ盡ク其攫收スル所ト爲ルベシトノ掛念ニ出ツルモノナリ右ノ論旨ハ洵ニ公正ノ理論ニシテ決シテ意外ノ想像ニ非ラス苟モ邦人タルモノハ其不羈獨立ヲ熱望セザルモノナリ況ンヤ外交官タル責任ヲ有スルモノニ於テハ固ヨリ其企圖ナカル可カラザルハ論ヲ俟タス然トモ談判上ニ於テ最モ熟慮計畫スベキ要點ハ之ヲ發議スルモ彼レ果シテ之ヲ容ルヽヤ彼之ヲ容ルヽモ我果シテ之ヲ施行シ能フベキヤ又之ヲ施行スルモ果シテ我邦開進ノ程度ニ適當スルヤ否ヲ考察セザル可カラス然ラザレハ其主義ハ何程公正ナリト雖トモ其論旨ハ何程巧妙ナリト雖トモ彼之ヲ肯諾セス我亦之ヲ實施スル事能ハザルトキハ則チ改正ヲ發議スルモ其効ナク到

底今日ノ如キ束縛脅迫ノ條約ヲ踐行スルノ外ナカルベシ今試ミニ議者ノ論旨ニ依リ對等ノ約ヲ以テ開國セン事ヲ擬議センカ決シテ其行ハレザルヲ知ルナリ何ントナレバ抑我國外國ト締約セショリ玆ニ二十五六年ノ久シキヲ經過ス而カモ之ニ廢棄ノ期限ナク所謂治外法權ナルモノハ外人ニ取テハ永久之ヲ享有スルモノ、如ク又內外其法ヲ異ニスルモ殆ント外人ノ慣習トナルモノ、如シ然リ而シテ我內地ノ狀況ヲ回顧スレハ多少ノ進歩ヲ見ルト雖トモ夫ノ刑法治罪法ノ如キモ其施行僅カニ數閱月ノ前ニ在リ裁判官其人ノ如キモ尙經驗ニ乏シク加フルニ民法商法ノ如キモ未タ其施行ノ期ヲ見ルニ至ラズ右等ノ實況ヨリ之ヲ觀察スレバ我邦諸法制ノ不完全ナル社會秩序ノ不整理ナル之ヲ歐洲各國ノ能ク整備スルモノニ比スレバ其差異アル論ヲ俟タス吾人スラ猶其不慣不備ノ疑ナキ能ハズ況ンヤ前述外人ノ如キ從來治外法權ノ下ニ生息スルモノヲシテ遽カニ其身命財産ヲ此ノ法權ノ下ニ委托セシメント欲スルニ於テヲヤ蓋シ言ベクシテ行フ可カラザルモノナリ行ハレザルトキハ從前ノ如ク不完全ノ條約ヲ踐行セザル可カラズ之ヲ行ハレシメント欲レバ不得已特別ノ制限ヲ設ケ外人ノ信憑スベキ丈ノ保證ヲ與ヘ又行スルモノニシテ特ニ其國籍ヲ證シ及ヒ保護ヲ與フルノ爲メニ非ラザル事情ヲ說キ其爲メ不平ヲ訴フルノ理由アルベカラズ又歐米各國ニ於テスルトハ其事情ヲ異ニスル所アリ乃チ本會ヘ既ニ提出セシ開國ノ策案ニ同意シ我裁判ニ服從スルニ於テハ外人等ニ於テ右等ノ不平無キハ勿論尙一層寬裕自由ノ便益ヲ享有スベキ旨ヲ以テ英國及ヒ佛國委員ノ建論ハ採用セザル事ニ決答セリ

外國貿易ニ對スル不法ノ聯合ノ件

本項ハ英國委員ノ提出スル所ナリ提議ノ旨趣ハ從來橫濱ニ於テ町會所其他ノ聯合會社ヲ建設シ內國商人ノ直チニ外商ト取引ヲ爲スヲ妨クルトノ事及ヒ外商ノ稅關ニ差出ス仕入書ヲ聯合商會ニ於テ私カニ知リ得ルトノ愁訴ナリ我委員ハ之ヲ駁スルニ英國委員ノ右ノ會社ニ不正ノ名ヲ下シ條約ニ背犯シタルトノ事ハ日本政府ヲ譏責シタルモノニ付之ニ答辨スルヲ謝絕シ且曰右等ノ結社ハ人民相互ノ利益ヲ謀リ設立セシモノニシテ政府ノ之ニ干與スベカラザルハ各國ノ通義ナリ故ニ此件ニ關シ特ニ愁訴スベキ事アレバ其事實ヲ明指シ議場外ニ於テ談判スルモ妨ケナシ改正ノ基礎ヲ定ムル議場ニ於テ討論スルヲ適當ト思惟セザル旨ヲ述ベ又官吏ヨリ仕入書ヲ私ニ他ノ商ニ示ス等ノ事ハ是亦其證ヲ擧ケテ告發アルニ於テハ相當ノ處分ヲ爲スベシ前項ト同シク議場外ノ外交談判ニ讓ルヲ相當トスル旨ヲ述ヘ之ヲ謝絕セシニ佛委員ハ英國委員ノ說ヲ贊成シテ論スル所アリト雖トモ遂ニ我政府ノ辨駁スル所ニ從フ事トナレリ

外國船雇日本水夫幷ニ日本船雇外國水夫ヲ處分スル件

本件ニ關シ日本政府ノ提議スル所ノ要旨ハ外國船ニ雇ワレタル日本水夫日本港內ニ在ルトキハ其外國船長若クハ外國領事官ノ管轄內ニ歸セズ其水夫犯罪ノ場合ニ於テハ日本ノ裁判官ニ於テ審判スベシ又日本船ニ雇ワレタル外國ノ水夫ハ前段ト同シク但タ其賃主ノ地位ヲ換ヘ其外國水夫犯罪ノ場合ニ於テハ其水夫所屬ノ領事官ニ於テ之ヲ處罰スル事ト爲シ從來幷ニ向後ノ困難紛議ヲ消除セント欲スル意ヲ以テセリ然ルニ英獨委員ハ本件ハ萬國公法上ノ難點ナルヲ以テ本國政府ノ決ヲ取ルベシト述ベ米委員ハ右日本水夫幷ニ外國水夫ノ犯罪處分ヲ日本ニ專屬スルハ同意ヲ表シ難キ旨ヲ述ベ其他ノ委員ハ皆本國ニ進達スル事ニ同意セリ

行政規則設立及ヒ施行ノ權

我ニ於テハ之ヲ施行スルノ責任ヲ盡ス丈ノ順序ヲ爲サヽルヲ得ス是理勢ノ已ムヲ得ザルモノトス畢竟小官ノ提出スル所ノモノハ內外實況ヲ酌量シ或ル年限中雙方實行シ得ベキ便法ヲ設クルモノニシテ固ヨリ其年限ヲ經過スレバ全ク此ノ制限ヲ廢シ始メテ歐洲各國對等ノ間ニ行ワルヽ完全ノ裁判權ヲ施行シ得ヘキ條約ヲ締結スルモ自由ナラシメントスルニ在ルナリ

旅行免狀ノ制ヲ改ムル事

本項ハ英國委員ノ發議スル所ニ係レリ發議ノ旨趣ハ從來日本政府ヨリ發行スル免狀ハ外人ノ旅行先ニ於テ起リ訴訟アルニ當リ其國籍ヲ證シ及ヒ地方保護ヲ乞フノ便ヲ得セシムルニ在リト假定シ外務省若クハ縣廳ヨリ授與スルヲ以テ迂遠ノ手數ト爲シ且ツ旅行先キニ於テ檢閱スルノ煩アルヲ以テ此制ヲ改メ領事ヨリ之ヲ付與シ縣廳ノ裏書ヲ乞ヒ携帶ノ期限ヲ永クシ旅行先ニ於テ檢閱等ノ煩ヲ省カン事ヲ要求シ歐米各國ニ於ケルガ如ク寬待自由ノ例ヲ引キ我政府ノ外人ヲ待ツニ嚴刻ナルヲ陳言セリ因テ我ハ之ヲ駁スルニ免狀ヲ付與スルノ旨趣ハ我邦ニ於テ內地旅行ヲ許可セシハ現行ノ條約ニ外人遊歩規程ノ制限アルヲ以テ寬裕ノ好意ヲ以テ發

本件ハ他ノ領事裁判權ノ諸件ト共ニ第一回ノ會議ニ於テ其議目ヲ豫定スト雖トモ內外交涉ノ全局ヲ寬裕セント欲スルニハ此件ヲ議スルモ未タ以テ充分ナラズ因テ全國通開ノ論ニ陟リ本題ハ之ヲ中止セリ

難破船取扱ノ事

本件ハ日本政府ノ提議スル所ナリ日本政府ハ既ニ英米兩政府トノ間ニ互相ノ約ヲ以テ取扱ノ方法及入費辨償ノ事ヲ締約セリ因テ各國ニ於テモ右兩國ト均シク特約ヲ結バン事ヲ欲スル旨ヲ述ベ各員之ニ同意ヲ表セリ

橫濱用水供給ノ事

本件ハ英國委員ヨリ外國人居住方法ノ一部分トシテ提議スル所ナリ本件ノ要旨ハ從來橫濱ノ用水淸潔ナラズ水道ノ敷設其宜ヲ得ザルヲ以テ之ヲ改良セント欲スルニ在リ我委員ハ之ヲ答フルニ本件ハ既ニ神奈川縣令ニ於テ其方法ヲ講究シ何レヨリ之ヲ引キ何等ノ法ヲ以テ賦課セン事ト考案中ナル趣ヲ述ブ佛國ヲ除キ他ノ委員ハ大抵本議ハ本場ニ於テ議スベキ件ニ非ラザルヲ以テ此議ニ預カルヲ拒絕セリ因テ本件ハ獨リ英國委員一己ノ發議ニ止マレリ

局外中立ノ件

本件ハ日本政府ヨリ二三ノ外國政府ニ海軍物置場トシテ土地ヲ讓與シタル所アリ萬一各國ノ間ニ交戰ノ際ニ方リ局外中立ヲ宣告スルノ妨碍トナラザル爲メ豫メ約束ヲ設ケントスルニ在リ故ニ右二三ノ國ト別ニ締約セントス一般ノ議題ト爲スニ及バザル事ヲ發議シ各員皆之ニ同意ス

北海道ニ於テ漁獵ノ規則ヲ設クル事

本件ハ豫定シタル議目ヲ追加スルモノナリ日本政府ハ近來外國船ノ北海道沿海ニ於テ竊カニ臘虎及海豹ノ漁獵スルモノアルヲ以テ更ニ規則ヲ設ケ條約中ノ一部分ト爲シ該船舶ノ之ヲ遵守セン事ヲ欲スル旨ヲ述フ各員之ニ同意ス

新潟縣下ニ於テ外國人ニ土地ヲ貸與セザル事ヲ政府ヨリ制スル事

本件ハ英國公使ノ提議スル所ニシテ其要旨ハ該港居留地約定書ニ外人ハ家屋土地ヲ借受クル事勝手タル旨揭載アリト雖トモ從來外人ヨリ借地ヲ出願スルトキハ輒チ縣廳ヨリ之ニ干涉シ許可ヲ付與セラレザルニ依リ條約面ノ旨趣實際行ハレズ此ノ如キ檢束制限ハ條約面ニ違背シ不都合ナリトシ該港居留外人ニモ他港同樣土地ヲ得ルノ便利ヲ許サレン事ヲ欲スト云フニ在リ而シテ各委員ノ內佛公使之ヲ贊成シ他

ノ開港場ト同シク居留地ヲ區畫セン事ヲ論述セリ我委員之ニ答フルニ本件ハ現行條約ニ據レハ借地勝手タルベシトノ條ニ地方官ニ願出スベシトノ箇條アレバ强チ縣官ノ干涉スルニ云ヒ難キ旨ヲ以テ之ヲ駁シ畢竟本件ニ關係シ外國領事ト縣官ト異見アルノ要點ハ借地年限ノ長短ニシテ外國人ハ借地ノ期ヲ百年ト定メン事ヲ乞ヒ我ハ五年乃至二三十ノ間ニ定メン事ヲ欲スルニ至リ蓋シ我ノ右年限ニ制限ヲ立ツルハ將來數年ノ間ニハ土地ノ價位及ヒ租稅等ノ制ニ多少ノ變更アレバ一定スルハ不可然ト思考スレバナリ又彼ニ於テハ堅牢建築ヲ爲スニ右ノ如キ過短ノ年限ニテハ充分ナラズトスルニ在リ右ノ如ク雙方反覆討論スルモ徒ラニ議場ノ時日ヲ費ヤスノミ其結局ヲ見ルノ期ナシ因テ本件ニ關シテハ議場外ニ於テ外交上ノ談判ニ付スル事ニ協議シ其局ヲ結べリ

日本破產法幷ニ日本上訴人其上訴裁判所ニ於テ原判認定ノ時ニ對シ豫メ保證金差出ノ件

本件ハ英國委員ノ提議スル所ナリ本件ノ要旨ハ日本破產處分法ノ怠慢ナルガ故ニ往々負債主身代限ノ處分ヲ受ルノ際控訴其他ノ辭柄ヲ設ケテ擅ニ財產ヲ處分シ若クハ欺隱シ裁判終審ニ於テ債主ハ空ク一物ヲ得ル能ワザル事アリ故ニ此ノ如キ場合ニ於テハ負債主ヲシテ豫メ保證金ヲ差出サシメ債主ヲシテ損害ナカラシメン事ヲ要求スルニ在リ我委員之ニ答フルニ道理上ヨリ看レバ或ハ其疑念ナキ能ワズト雖トモ我國ノ身代限處分法ハ自カラ一種ノ成規アリテ實際ニ於テハ右樣ノ奸策ヲ行フ能ワズ其手續スルヤ負債主債主ノ出訴ニヨリ身代限ノ處分ヲ受ル時ハ直チニ戶長ニ達シ負債主所有ノ財產ニ封印シ之ヲ其保管ニ付シ負債主ヲシテ私カニ其財產ヲ處分スルヲ得サラシメ又控訴ニ保證金ヲ差出サシムベシトノ件ハ我裁判上現ニ其慣例アルヲ以テ外人關係ノ訴訟ニ此ノ例ヲ適用スル事ハ敢テ支障ナカルベシ但タ右等方法ノ完備スルハ目下我政府ノ商法編制委員ニ於テ專ラ調査中ナルガ故ニ遠カラズ其整備ヲ見ルニ至ルベキ旨ヲ以テセリ

附言本件ニ於テ我裁判上實際右等ノ奸計ヲ豫防スルノ慣例アルベシト雖トモ成文例中ニ見ザル所ナルガ故ニ外人中往々ニ苦訴スルモノアリ我法律上ニ信憑ヲ措カシムルニ充分ナラズ因テ曾テ太政官ヘ上申セシ事アリト雖トモ當時其裁制ヲ得ザルヲ以テ尙又本議ヲ議場ニ提出ノ際再應上申ニ及べリ

速ニ相當ノ制法アラン事切ニ希望ス

締約期限ノ事

本項ハ從來外國ト締約セシ條約中ノ缺典ヲ補正シ今回提議スル所ノ稅目幷ニ開國ノ兩案實施ノ期限ヲ定ムルモノニシテ會議中主眼ノ條項トス卽チ我政府ハ改正條約ノ貿易ニ關スルモノハ之ヲ八年トシ裁判權ニ關スルモノハ之ヲ十二年トシ此期限ヲ終了スレバ兩約共無効ニ歸スルナリ蓋シ本項ノ可否ハ本會議了ノ諸件ヲ總括シ後來不羈獨立ノ條約ヲ自由ニ締結シ得ルモ特ニ此一項ニ存セリ故ニ我ニ於テ最モ意ヲ用ヒ各件議了ノ最後ニ之ヲ提出シ若シ本件ニシテ成ラザレハ他ノ件々モ之カ爲メニ徒爲ニ至ルモ不可知因テ提出ノ前豫メ英公使ニ面晤シ其意ヲ示セシニ果シテ大異論ヲ興シ本國政府ヘ傳達シ難キ旨ヲ斷言スル程ナリキ又議場ニ於テハ他各國ノ委員ハ格別ノ異議ナシト雖トモ英公使及ヒ佛公使ハ粗同一ノ意見ヲ取リ凡ソ條約ナルモノハ一方ノ意ヲ以テ廢スベカラザルモノトシ又我國ト外國トノ條約ハ永久ノ性質ヲ帶ブルモノナリトノ異論アリト雖トモ我政府ノ意ハ協議ヲ以テ廢約ノ期ヲ定ムルノ意ヲ述ベ且ツ東洋各國ト歐洲各國中廢約ノ期ヲ揭載スル實例ヲ擧ケテ之ヲ辨駁シ遂ニ埃勾國辨理公使　Hoffer von Hoffenfels（ホッフェル、フォン、ホッフェンフェルス）

佛國全權公使　Guillaume de Roquette（ギョーム、ド、ロケット）

獨國及瑞西全權公使　Von Eisendecher（フォン、アイゼンデッケル）

第二委員

領事　E. Zappe（サッペ）

英國臨時代理公使　J. G. Kennedy（ケネディ）

和蘭、瑞典、諾威、丁抹辨理公使　J. J. von der Pot（ポット、デル、フォン）

露國全權公使　C. de Struve（ド、スツルウエ）

西班牙國臨時代理公使　Don Luis del Castillo y Trigueros（ドン、ルイズ、デル、カスティヨ、イ、トリゲロス）

伊太利國臨時代理公使　E. Martin Lenciares（エンポテンシ、マルチン、レンシアレス）

各委員井上外務卿ヲ會頭ニ推薦埃國トノ條約ヲ改正豫議ノ基本トスルニ同意

書記八名ヲ撰定シ日英佛三國語ヲ以テ會議錄ヲ作製スルコトヽシ會議ハ每週水木ノ兩日午後三時開會ノ事トス但シ次會ハ英國全權公使「パークス」氏近日來着ニ付二月一日開會ノ事ニ決ス

第二回　會議錄第二　明治十五年二月一日

前回列席者ノ外英國全權公使　Sir Harry Parkes（サー、ハリー、パークス）氏出

席會議錄ノ編綴方法及ヒ各國委員ノ記名方法等ヲ定メ前會會議錄ニ記名ス

尙ホ英國公使ノ發議ニヨリ一週兩度ノ會議ヲ合シテ一個ノ會議錄ヲ編纂スルコトニ決ス

第三回　會議錄第二　明治十五年二月二日

露國公使歸國ニ付臨時代理公使　Baron Rnsen（バロン、ローゼン）委員トシ白耳義國ハ橫濱駐在領事　F. G. Seribe（エフ、ジー、スクリーブ）公使館事務代理ヲ命シ委員トシテ出席セシム

會議ノ便宜上左ノ通論題ノ區別表ヲ採用ス

部類

第一　領事特權

第二　民事裁判權

第三　刑事裁判權

第四　行政規則

第五　開港場居留規則及借地方　附宗教

第六　海關稅則貿易上ノ諸件

第七　沿海貿易

第八　燈臺港埠及船稅

第九　惠國條款

我提案ヲ以テ各委員ヨリ其政府ニ進送スル事ニ決セリ

（附紙）

ジュリスジクション及コースチングトレードノ提議ニ付內閣ニ於テ外務卿ヨリノ說明ハ長文ニ付之ヲ省ケリ又議場ニ提出セシ開國論ノ綱領並ニパークスノ答論ノコト等ハ議事錄ト重複スルヲ以テ此ニ載セサル方可然トノ鹽田少輔ノ說ニ付之亦之ヲ省キ記載セス尙高裁ヲ乞フ

別錄

條約改正豫議會始末

註　議事要領收錄サレタレバ重複ノ嫌ナキニ非ルモ會議ノ次第ヲ見ルニ便ナルヲ以テ採錄セリ

日本政府及歐洲締盟各國政府ハ現行條約ニ必要適切ナル改正ヲ加フル基本ヲ商議スルタメ各委員ヲ任命シ東京ニ於テ豫議會ヲ開催スルコトヽナリ明治十五年一月二十五日午後三時東京外務省ニ於テ其第一回ヲ開催セリ

第一回　會議錄第一　明治十五年一月二十五日

各國政府委員

日本外務卿井上馨

副委員

外務少輔鹽田三郎

第十　外國船雇日本水夫
第十一　難波船條約
第十二　局外中立
第十三　締結期限
部類第一ニ關シ會頭ヨリ商業兼帶領事ノ裁判權行使ハ好マシカラザル旨ヲ指摘シ商業兼帶領事ハ可成廢止セラレンコトヲ希望スル旨ヲ述フ但シ本問題ハ尚ホ考慮ヲ要スル點アル旨獨逸公使ヨリ發言セシヲ以テ次會迄宿題トス
部類第二ヲ左ノ五節ニ分類ス
第一節　訴訟入費及裁判所入費ノ支辨
第二節　內外交涉組合商業ノ裁判權
第三節　適當ノ權限ヲ有スル外國裁判所設置無之事
第四節　證據人出庭羈束ノ事
第五節　控訴上告裁判所ヲ缺フ事
第四回　會議錄第三　明治十五年二月八日
井上外務卿ヨリ領事特權ノ儀ニ關シ左ノ通再說ス
第一　商業領事ヲ任用スルトモ裁判權ヲ兼帶セザレバ別ニ異存ナシ此等ノ領事官ニ內地ヲ自由ニ旅行スルノ權ヲ享有セシムルハ不用ナルベシ

第二　專務ト否トニ拘ハラス總領事領事及副領事等ノ任命ハ何レモ其國ノ外交官ヨリ外務卿ヘ通知シ外務卿ハ直ニ認可狀ヲ宣達スヘシ裁判權ヲ有スル事務總領事領事及副領事ハ內地旅行ノ自由ヲ享有スヘシ雖然萬一夫等ノ領事官トシテ擅ニ其特典ヲ弄シ商業ニ從事スルモノアラハ其特典ヲ褫奪シ認可狀ヲ還納セシムヘシ
總領事領事及副領事ニシテ若シ自國政府ノ命ヲ待タズシテ他ノ開港場ニ住居ヲ移スニ至ラハ職位ニ附帶スル特權ヲ失ヒ併テ其認可狀ヲ還納セシムヘシ
第三　總テ一時ノ任命タリトモ其國ノ外交官ヨリ公正ニ外務卿ヘ通知スヘシ尤モ急遽ノ場合ニ於テハ領事ヨリ其代理ヲ命スルコトヲ得ヘク而シテ其國外交官及外務卿ニ上申シテ公認ヲ得ルノ猶豫アラシムル爲メ一箇月間ハ日本ノ地方官吏ニ於テ之ヲ認メ置クヘシ
右期限中公認ヲ得ルノ手續ヲ怠タル時ハ日本ノ地方官吏ニ於テ其代理者ヲ認メサルヘシ
墺佛獨英伊露西等ノ各公使外務卿ノ提議ニ同意ス
和蘭公使ハ商業領事ヲ有スル關係上辨明ノ爲メ意見書ヲ朗讀ス

部類第二民事裁判ノ件ニ移リ第一節民事訴訟及裁判入費ノ問題ニ入ル
第五回　會議錄第三　明治十五年二月九日
部類第二民事裁判ノ件ニ關シ前會ニ引續キ討議ス
部類第三ヲ左ノ六節ニ分類ス
第一節　外國裁判所ヘ直接出訴ノ事
第二節　捕縛ノ權
第三節　警吏人家ニ進入スルノ權
第四節　適當ノ權限ヲ有スル外國裁判所設置ナキ事
第五節　強テ證據人ノ出庭ヲ要スル事
第六節　控訴上告裁判所ノ設置ナキ事
第六回　會議錄第四　明治十五年二月十六日
白耳義國委員スクリープ氏臨時代理公使ニ任命セラレタル旨ノ報告アリ
二月八日ノ會議ニ於テ和蘭公使ノ朗讀シタル覺書ニ關シ井上外務卿更ニ商業領事ノ裁判權執行ハ好マシカラサルニ付可成專任領事ヲシテ裁判權ヲ執行セシムルヲ希望スル旨ヲ述フ
次テ部類第三刑事裁判ノ件ニ關シ討議ス

第七回　會議錄第五　明治十五年三月十六日
部類第六ニ移リ海關稅率改正ノ趣旨ニ關シ井上外務卿演說ス
第八回　會議錄第六　明治十五年三月二十三日
本日ヨリ米國全權公使 John A. Bingham 氏自國政府ノ訓令ニ依リ出席ス
井上外務卿ヨリ稅率案ニ關スル覺書ヲ提出ス
第九回　會議錄第七　明治十五年四月五日
佛國公使ロケツト氏近日出發歸國ニ付臨時代理公使タルベキ Tony Conte 氏同伴出席
井上外務卿前回ニ引續キ稅率案ヲ討議スル前各員ヘ披露スベキ件アリト述ヘ我國ノ維新以來泰西文明ヲ取入レ諸事改良進步ノ道程ニアル狀況ヲ說示シ且ツ法典ノ編纂裁判法ノ改正等着々進行シツヽアルヲ以テ外人ニシテ我法律ニ服從スル上ハ遠カラズ日本全國ヲ開キ內地雜居ヲ許可スベキ意嚮ナルコトヲ發表ス
各委員何レモ其發表ヲ稱贊ス
第十回　會議錄第八　明治十五年四月二十七日
井上外務卿病氣ノ爲メ缺席鹽田外務少輔ヨリ部類第八燈

稅港稅船稅ノ件ニ關シ說明ス

第十一回　會議錄第九　明治十五年五月四日

井上外務卿引續キ缺席、前回ニ引續キ部類第八ニ關スル件ヲ討議ス

英國公使ヨリ各委員ノ共同作製シタル稅率修正案ヲ提出ス

第十二回　會議錄第十　明治十五年五月十一日

井上外務卿ヨリ前田英國公使提出ノ稅率修正案承認ノ旨ヲ述ブ

輸入品原價ノ取極方竝ニ其諸雜費計算調査ノ爲メ委員四名ヲ選定ス

拂戻稅竝ニ借庫ノ件ヲモ前記委員ニ附托ス

第十三回　會議錄第十一　明治十五年六月一日

葡萄牙國特命全權公使 Dom Joacuim Jose de Graca（ドム・ジョアキム・ジョーセ・ダ・グラサー）

白耳義國特命全權公使 C. de Groote（ド・グロート）兩氏本會ヨリ出席從來白耳義國委員タリシ「スクリープ」氏解任セラル

佛國代理公使ヨリ燈稅ニ關スル覺書ヲ提出セリ

伊國代理公使ヨリ伊國產物ニ對スル稅率ニ關シ意見ヲ述フ

井上外務卿四月五日ノ會議ニ於テ發表シタル內地雜居許可及領事裁判撤廢ニ關シ詳細ナル提案ヲ朗讀ス

獨逸公使外務卿ノ所說ヲ稱贊シ本國政府ヘ勸說セント欲スル旨ヲ述ヘ各國公使多ク之ニ贊同ス

米國公使ハ自己ノ意見トシテ本件ノ頗ル當ヲ得タルモノナルコトヲ稱贊シ英國公使ハ尙ホ能ク深思熟考ヲ要スル問題ナル旨ヲ陳述ス

第十四回　會議錄第十二　明治十五年六月八日

貿易規則ノ審查ヲ稅率調查委員ニ附托ス

最惠國條款及沿海貿易ニ關スル件ヲ討議ス

第十五回　會議錄第十三　明治十五年六月十五日

井上外務卿ヨリ最惠國條款ノ文案ヲ提出シ各委員皆之ヲ其政府ヘ進達スヘキ旨ヲ述フ

次ニ井上外務卿ヨリ稅率ニ關スル件ハ可成速ニ決定實施シタキ旨ヲ述ヘ更ニ沿海貿易ノ件ニ移ル

佛國公使ヨリ出版權專賣權商標保護ニ關スル問題ヲ提出ス

英國公使ヨリ居留地ノ取締新潟ノ土地借入日本裁判所ノ緩漫等ニ關シ陳述スル所アリタリ

第十六回　會議錄第十四　明治十五年六月二十九日

佛國新任全權公使 Arthar Tricou（アルチュール・トリクー）氏着任ニ付「トニー コント」氏ニ代リ出席

井上外務卿ヨリ裁判權ニ關スル策案ヲ論究スルニハ尙ホ幾多ノ時日ヲ要スヘキニ依リ先ツ差當リ稅率ニ關スル件ヲ成ル可ク速ニ決定實施セント欲スル旨ヲ述フ之ニ對シ英米獨佛其他ノ委員ヨリ各々意見ヲ陳述シ結局是迄日本政府ヨリ條約改正ノ基本トシテ提出シタル事項ノ要略書ヲ作製シ會頭ヨリ之ヲ終期ノ會議ニ提出スルコト稅率其他貿易關係事項ヲ裁判關係事項ト切リ放シ先ニ實施スルヤ否ヤハ次回ノ問題トスルコトニ決定

第十七回　會議錄第十五　明治十五年七月六日

松田東京府知事死去ニ付弔意ヲ表スル爲メ本日休會ノ旨ヲ議決ス

第十八回　會議錄第十五　明治十五年七月十七日

井上外務卿御不快ノ爲メ缺席

英國公使ヨリ裁判權ニ關スル外務卿ノ提案ニ對シ覺書提出

貿易關係事項ヲ裁判關係事項ト切放シ先ニ取極ムル樣自

國政府ヘ勸說ノ件ニ關シ採決シタルニ佛米兩公使ノ外都テ同意セリ

鹽田外務少輔ヨリ沿海貿易ニ關スル覺書ヲ提出ス又タ外國船內日本水夫並ニ日本船內外國水夫ノ件ニ關シ覺書ヲ提出ス

獨逸公使ヨリ瑞西致府ハ向後モ仍ホ商業領事ニ於テ裁判權ヲ執ラシムルコトヲ特ニ希望スル趣議事錄ニ登載ヲ乞フ旨申出ツ

第十九回　會議錄第十五　明治十五年七月十八日

井上外務卿引續キ缺席

鹽田外務少輔ヨリ局外中立難破船約定臘虎及海豹漁獵ノ件ニ付陳述シ何レモ其主義ニ付承諾ヲ得次ニ英國公使ノ先ニ論述セシ日本破產法ニ關スル質疑新潟港ニ於ケル土地借入ノ件等ニ付辯明ス

第二十回　會議錄第十五　明治十五年七月十九日

井上外務卿條約期限ノ件ニ付陳述シ稅目其他貿易上ノ約定ハ八箇年其他ノ條約ノ部分ニ就テハ十二箇年ノ期限ニ依テ改正若クハ廢止シ得ルノ條項ヲ設ケ度キ旨ヲ述フ

英國公使反對意見ヲ述ヘシモ結局外務卿ヨリ其案文ヲ示

シ各國委員皆之ヲ自國政府ヘ申達スヘキコトヲ議決ス

第二十一回　會議錄第十六　明治十五年七月二十七日

此日特ニ午前開會

英國公使ヨリ內地旅行免狀ニ關スル件及外國貿易ニ對スル不法聯合ノ件ニ關スル覺書ヲ提出朗讀セリ

英國公使ヨリ沿海貿易ニ關スル外國船雇入ノ件並ニ日本船雇外國水夫及外國船雇日本水夫管轄ノ件ニ付陳述ス

井上外務卿六月二十九日ノ會議ニ於ケル各委員ノ希望ニ應シ本會議ノ議事綱領ヲ略叙シ承認ヲ求ム

本會ノ議事事項モ略々終了シタルヲ以テ本會ハ一先閉會スルコトヽシ調査委員ノ事務ハ日本政府ノ改正條約提案ニ付各國政府ノ回答アルヲ俟ツコトヽシ其迄ハ休止スルコトニ決定

井上外務卿ヨリ本會閉會ニ關スル挨拶アリ英國公使之ニ對シ答辭ヲ述ヘ會頭書記官其他關係諸氏ノ勞ヲ謝シ一先本會議ヲ閉會ス

九八

明治十五年七月二十九日　外務卿ヨリ三條太政大臣宛

改正條約ノ有效期限ニ關スル件

井上外務卿

太政大臣　三條實美殿

機密

條約改正豫議會ニ於テ議スヘキ諸件ハ逐次討論ヲ遂ケ本月廿七日ヲ以テ一ト先本會ヲ休閉シ他日各委員等本國政府ヨリ訓令ヲ受クルヲ俟テ更ニ臨時會ヲ開設スヘキ積ニ有之候然ルニ過般提議ニ及ヒ候締約ノ期限卽チ裁判ニ關スル事項ハ其施行期限ヲ十二年トシ貿易ニ關スル事項ハ其施行期限ヲ八年トスル條款ヲ設クル事ニ付テハ英佛公使ニ於テハ頗ル異論ヲ主張シ斷然之ヲ拒絕スルノ勢ニ有之候得共反覆辯論ノ末我發議ノ儘ヲ以テ本國政府ニ送致スル事ニ相成候抑本款ヲ設クルノ主趣ハ從來外國ト締約セシ條約中ノ缺典ヲ補正シ今回提議スル所ノ稅目幷ニ開國ノ兩案實施ノ期限ヲ定ムルモノニシテ本項ノ可否ハ本會議了ノ諸件ヲ總括シ後來不羈獨立ノ條約ヲ自由ニ締結シ得ルハ特リ此一項ニ存スル儀ニ付會議中ノ眼目ニ有之候去ナカラ後來ノ結果ヲ推考スルニ右英佛兩國異論ノ爲メニ右ノ條款ハ勿論開國及稅目ノ條款モ共ニ拒絕セラレ現行條約或部分ノ改正ヲ要求スル

ニ至ルモ不可測果シテ然ルトキハ我政府ハ一時ノ利便ニ繫縲セサルノ意ヲ明示シ我提議ノ如クナルニ非ラザレバ寧ロ現行ノ條約ヲ從前ノ通尙三四年間踐行シ內ハ以テ制度ヲ修整シ他日治外法權ヲ解キ外人ヲ管理スルニ充分ナル豫備ヲ爲シ外ハ以テ外國政府ヲ勸誘シ我冀望ヲ達スルノ方便ヲ用ヒ再ヒ改正ノ談判ヲ開クモ尙今日ノ主義ヲ固ク取ツテ動カズ到底我冀望ヲ達スルニ非ラザレバ止マザル事ニ方向ヲ取候樣御決定相成度此段及上申候也

十五年七月廿一日　起草

同　廿九日　發遣

九九

明治十五年十二月八日　井上駐佛公使ヨリ井上外務卿宛

豫議會ニ關スル佛國側ノ觀察ニ付內報ノ件

附屬書　十五年十一月三十日クラヴリー氏談話ノ大要

前便私報第三號を以てコント氏より外務卿へ歸報候終りに政務局長クラウリー氏へも詳悉に可申語との談緖に付きクラウリー氏の意見如何と爲相探候試候處別紙の通に有之是亦私考にして佛國政府果して然乎否は斷言不能候得共到底在東京委員の各其政府へ厚誼好情に戻りて我請求の條々を非儀致したる者を信用採取可致事と被察候仍ては其報告に基き各國相通議し我請求に對する決答は或は意外の惡結果を見るに至らん歟と深く痛心罷在候尤彼等の辭柄と爲す所の者は法權讓與と條約終了期限の二件を以て尤重なる者とし此事は今に當り再ひ不可動事に立到り候事と愚考仕候已に小生當國着任の後幾分歟現今の情實を察し明治十四年機密第三十一號を以申上置通新條約は期限を短縮し屢々修正して遂に其好所に達するを目的と致し度其外云々申上試候得共今已に一步遲し今日の情況に贅言は不要なり、乍去斯歐洲各國政府の豫會議に對する反動を看々捨置候も如何御座候哉其目的の達不達に不關曾て申上置候通我派出公使をして語默して事を待より我請求の理由を勉て辨解爲致尤今理由は專一樣にして重なる兩三の國へ說客を相用ひ度且つ當時の形況にては佛は英に同意を表し候歟とも被察候得共此邊は十分御熟察とは存候得共此に一言を贅し置申候マルシヤル等の朋友上談話に據りて同人の推察には迚も豫會議の結果は都度無効と申居候由には候得共愚考候には是亦各

已の私推量にして我請求は十の十を得る能さるも此豫會議をして無効ならしめさる様何分にも盡力致し試度乍去法權を幾年の後に回復する又は終了期限を立つの兩條は必定今の勢たる不能爲事と御斷念被下度つまり在東京派出の公使等の報告は其政府の眼目にして十二分に我々等の辨解を費し候共彼を是し此を非するは自然の情態一旦斯く惡報告を來し候上は如何とも殘念の至奉存候何分共今日迄四回の私報を以可然御洞察此上の御處分逐一に御敎示奉待候（中略）

先例公使差立候分も全くの私報にして閣下の賢考に參供文す耳可然御諒察被下度候　草々謹言

十二月八日

井田讓

井上公閣下

（追而書省略）

附屬書

十五年十一月三十日クラヴリー氏談話ノ大要

明治十五年十一月三十日佛外務省商務局長クラヴリー氏ト顧問格マルシヤルトノ談話

マルシヤル　東京會議ノ結果ニ付君ハ如何ノ考ヲ懷カルヽヤ極内々ニ君ノ考ヲ承ハレト井田公使ヨリ命セラレタリ

クラヴリー　此間ニハ余カ一己ノ考ノミニ非レバ答フル能ハス、佛政府ハ外國政府ト共議ノ後ニ同意或ハ不同意ヲ述ルヲ得ベシ余ガ一己ノ考丈ケハ隱ス可キ道理ナキ故今君ニ話スベシ

東京會議ハ滿足ノ結果ヲ生スベク見ヘス在東京ノ佛官員ヨリ差送リシ報告ハ余レ自ラ會議錄ヲ讀テ其結果ヲ想像シ居リシコトト毫モ違ウ事ナシ、日本ノ請求ヲ承諾シ得ベキ希望ハ余ニ於テモ亦甚タ尠シ

マルシヤル　改正ノ事ハ如何爲サヽルヽ見込ナルヤ又如何シテ會議ノ結局ヲ了セント思ハルヽヤ

クラヴリー　想像スルニ佛國ハ隣國ト共議ノ後ニ非レバ何事モ爲サヽルベシ、隣國トノ共議モ多少日時ヲ要スベシ乍去到底我政府モ日本政府ニ答フベシ、我政府ノ答ハ日本ノ請求ヲ全ク拒絕スルニアラン事ヲ恐ル

マルシヤル　如何ナル點ニ付全ク拒絕ノ返答ナラント思ハルヽヤ、會議中兩方殆ト同意セシケ條モ多シ就中稅則ノ一點ハ兩方共全ク同意ナリシ何故ニ同意ノ點丈ヲ直ク二改正セザルベキヤ

クラヴリー　其所以ハ余レニハ先ツ第一各國ノ所見ヲ知ラサルニ在リ、第二ニハ有體ニ云ハヽ會議ハ中途ニ於テ其性質ヲ變シタルニ在リ、初メノ間ハ協議ニ至ルベキ景況ナリシニ後ニ至テ日本政府ハ遽カニ發議ノ性質ヲ變ヘテ行ハレ難キ請求ヲ爲シタリ、余ハ君ニ心持惡キ事ハ少モ言ハント欲セサレトモ然レトモ會議ノ終リノ部分ハ眞ニ余輩ヲ驚愕セシ者ハ余輩ノミニ非ス東京ヨリノ報告ニ依レバ各國ノ委員モ亦會議ハ初メノ線路ヲ脫シ出處ト終末ト全ク豹變セシニ愕キシ由

マルシヤル　余ハ君ノ言フ所ヲ解スル能ハス、會議ハ改正ヲ調査スル爲メナリシ故日本政府ハ改正ノ爲メニ其見込ヲ述ヘタルニ過キス、然ラハ何ニ由テ初ノ線路ヲ脫セシト言ハルヽヤ

クラヴリー　脫線ノ證據ニハ重ナル二件ヲ揭ントス、日本ノ思ヒ寄ラサリシ二大件ヲ會議ニ提出シタリ第一ハ外國ノ裁判權ヲ廢止スル事、第二ハ條約重修ヲ請求セスシテ新條約ヲ締結スルト同樣ノ發議ヲ爲シタル事是レ也此二大件ハ會議既ニ央ハニ至リシ時ニ俄カニ顯出シタリ

乍併今日ハ改正ノ事ヲ詳論スル能ハス委ク論究スルニハ尙ホ暫ク待タサルヲ得ス、余ハ一般ノ感覺ヲ君ニ話スノミ而シテ一己ノ考ナリ、會議終末ノ結局ヲ生セサル間ハ此一般ノ感覺モ確實ナラス、竊カニ思フニ會議ハ毫モ結局ヲ生セサルヤモ知ル可カラス、今談話ノ事ハ全ク一己ノ考ナル故佛政府ニ關係セサル事勿論ナリ

一〇〇　明治十五年一月二十五日　井上外務卿ヨリ井田駐佛公使宛

豫議會ニ對スル佛國側ノ觀察ニ關シ回答ノ件

附屬書　コント氏談話要領

無號　私信

條約改正ニ付其政府ノ內情御探偵ノ模樣追々御報道有之承悉致候客歲十二月一日ノ御內信1中コント氏ヨリ其國外務卿ヘ歸報ノ始末致熟考候處佛外務卿幷ニコント氏ハ今回條約改正ノ議ヲ全ク不調ト視做候趣ニ候得共在英獨其他ノ公使等ヨリハ未タ右ニ付詳細ノ報知モ無之ニ付未タ談判不調ト斷言スルノ場合ニモ相至リ不申ト存候ニ付此際可及丈ハ我目的ヲ相達候樣方便ヲ用ヒ候積ニ御座候尙其上ニテ到底各

國政府ハ我提議ニ同意セス談判不調ト相成候共裁判權ヲ我ニ歸セスシテ通商ノ爲メニ內地ヲ開通シ從來各開港場ニ行ハルヽ所ノ治外法權ヲ內地ニ及ホシ候如キ不十分ノ條約ハ決シテ締結難致寧ロ暫ク現行條約ヲ其儘今兩三年モ差延シ他日改正ノ義相起候節ハ我政府ハ今般ト同一ノ主義ヲ固ク執テ不動左スレバ追々內治モ整理シ各政府協同ノ期モ至リ可申存候尙佛政府之內情御密報御座候樣致度冀望候又我政府ハ專ラ米人ノ甘言ヲ信シテ言フ可ク行フ可ラサル事ヲ主張スルノ弊ヲ免カレスト外國政府ニ於テ疑念アル樣子ニ相見ヘ候ヘ共我政府ハ決シテ米國ニ倚テ事ヲ成サントスルカ如キ意無之候尤米國政府ハ他各國政府ノ如ク治外法權ヲ主張スルコトモ無之且稅權ヲ我ニ歸スルノ意ナルヲ以テ彼我人民ノ交情ニ至ルマテモ自然親密ニ赴キ之ニ反シテ歐洲各政府ノ所爲ハ自ラ利己ノ主義ニ出ル事多キカ如クナルヲ以テ人民相互ノ交際ニ至ル迄モ何トナク猜疑ヲ挾ムカ如キ情態アルヲ免カレス此邊ノ事モ篤ト「マルシヤル」氏ヘ御話置相成候樣致度存候右貴答旁申進候也

十六年一月廿五日

井上馨

井田讓殿

註　1客歲十二月一日附井田公使ノ內信ナルモノ見當ラス

附屬書

十五年十二月一日附井田公使來信附屬コント氏談話要領

註　客歲十二月一日附井田公使來信本紙見當ラザルモ前揭井上外務卿書翰ニ「コント氏ヨリ其國外務卿ヘ歸報ノ始末熟考云云」トアルヲ以テ茲ニ收載ス

トニー、コント氏ト外務卿デュクレール氏ト談話ノ要領コント氏ヨリ「マルシヤル」ヘ內話ノ趣傳聞ニ付左ニ略記致シ候

外務卿デュクレール

日本ヨリノ公信等通覽セリ會議ノ結局ニ付キ君ノ思考ハ如何

コント

會議ハ無効ナリシ兩國ノ關係ハ會議前ト少モ變ル事ナシ

外務卿

然リ、トリクー氏モ其趣ヲ書送ラレタリ乍併日本條約ハ改正スル事能ハスシテ日本ハ依然內地ヲ外人ニ開カサル

事ト君ハ思ハルヽヤ

コント

余カ實見セシ所ニテハ日本ニ於テ條約ヲ改正スル事甚タ難シ又改正ハ出來ルニシテモ今度ノ會議ト同樣ノ樣子ニテハ改正ヲ遂ル事六ケ舖カルヘシ、併シ歐地ニ於テ會議セハ或ハ改正ヲ爲シ得ヘシト思フ

日本ニ於テ改正スルヲ難トシ却テ歐地ニ於テスルヲ容易トスル「コント」氏ノ考ハ漠トシテ未タ其眞意ヲ明解シ難ケレトモ推察スルニ日本ニ於テハ言ウ可クシテ爲ス可ラサル事ヲ主張スル米國人ノ說日本內閣ニ信セラルヽノ弊ヲ免レス夫レカ爲メ容易ニ改正ヲ遂ケ難シトノ意味ナラン歟（コノ一條ハ讓ノ想像ニ係ル）

外務卿

我カ佛國ハ日本ニテ改正ヲ商議スル事ニハ始終不同意ナリシ、併シ歐地ニ於テ改正スルニハ如何ナル方法ヲ用ント思ハルヽヤ

コント

佛國ハ英獨ト共ニ日本ヘ發議スヘキ條件ヲ協議セハ可ナラント思フ

外務卿

否、他國ニ先チ佛國ヨリ先キニ此事ヲ發議スルヲ欲セス、宜ク日本ノ發議ヲ待タサル可ラス、各國承諾ノ上歐地ニ於テ改正ノ商議ヲ開クハ余カ異論ニ非ス惣テ改正ノ事ニハ佛國ノ爲メヨリモ日本ノ爲メニ關係多シ若シ日本ヨリ發議スルニ方ラバ佛國ハ如何シテ改正ヲ承諾スヘキカノ方法ヲ商務局長クラヴリー氏ト共ニ議セラレヨ余ヨリモ「クラヴリー」氏ニ其議ヲ話シ置クベシ

一〇一　明治十六年二月二十六日　米國公使ヨリ井上外務卿宛

我提案ニ對スル米國政府ノ意嚮通報ノ件

第一九五〇號

以書翰致啓上候陳ハ客月十六日附ヲ以テ我國務卿ヨリ訓達有之卽チ「曩ニ貴下（拙者）第一五六八號書翰ヲ以テ具申相成候通リ合衆國ハ日本政府申出ノ約款ニ據テ該政府條約改正ノ考案ヲ承諾イタシ候ニ付此段閣下ヘ御報道可致旨」申來候間右欣然得貴意候

抑モ拙者曩ニ第一五六八號書信ヲ以テ我政府ヘ致開申候儀ハ最前送達ノ會議錄第一ヨリ第十六迄ノ總ヲ一ニ右會議錄

申現行條約ノ改正ニ關シ閣下ヨリ數回御差出被成候議案ノ
全體ニ注意有之度仍而玆ニ本會議事ノ提要（會議錄第十六英
文第十貳葉ヨリ十七葉迄）幷ニ共傍註ヲモ能ク熟閱アリ度
旨申遣候事ニ有之此段併テ玆ニ及御報候
豫議會ニ於テ拙者執ル所ノ主義ノ我政府ノ萬一等閑ニ看過
スル莫ラシメン爲メ乃チ第一五六八號書翰ヲ以テ會議錄第
十五（英文）第二十九葉三十葉ニ有之拙者ノ演述ニ其注意
アランコトヲ乞ヒ左ノ文言ヲ拔粹イタシ置候
「余ノ意見ヲ以テスレハ會頭井上氏ヨリ差出サレタル日
本政府ノ提議ハ（其總體ニ於テ）甚タ至當公正ニシテ必
ス世界各開明國ノ是認ヲ受クヘキモノナラント思考ス」
此上ヘ他ノ締盟各國ニ於テモ隆盛我政府ノ好例ニ倣ヒ豫議
會中日本政府提出ノ約款ノ總體ニ據テ現行條約ヲ改正スヘ
キ旨承諾相成其儀速ニ貴皇帝陛下ノ政府ヘ報道有之候樣致
希望候敬具

千八百八十三年二月十六日

東京　合衆國公使館

ジョン・エ・ビンガム

外務卿　井上　馨殿

（省原文）

No. 1950

United States Legation
Tokio Japan 26 Feb. 1883

His Excellency
Mr. Inouye Kaoru
His Imperial Japanese Majesty's
Minister for Foreign Affairs.

Sir:

It gives me much pleasure to acquaint you that by the Instruction of the Honorable the Secretary of State of date the 16th ultimo I am directed to notify Your Excelllency that "the United States consents to the proposal of the Japanese Government for the revision of the existing Treaties on the conditions proposed by Japan as set forth in your (my) no 1568."

It is proper that I should further inform you that in my No. 1568 I called special attention to all the Protocols from 1 to 16 inclusive and transmitted by me and especially to the entire scheme for revision of the existing Treaties as shown in your several statements in all the protocols citing particularly your résumé (Protocol 16 P. P. 12–17 inclusive English text) and also to the marginal notes thereto attached by you.

That the position maintained by me in the conference might not be over looked by my Government, I called attention in my No. 1568 to my remarks in Protocol 15 P. P. 29, 30—English text and quoted therefrom the following: that "in my opinion the proportions of this (the Japanese) government (in their entirity) as presented by Mr. Inouye were so reasonable and just it seemed to me they should command the approval of every civilized state on the globe."

Hoping that some or all of the other Treaty Powers may fallen (follow?) the good example of my government and speedily notify His Imperial Japanese Majesty's government of their consent to revise your existing Treaties with them on the conditions proposed by you in conference in their entirity.

I beg leave to renew to Your Excellency the assurance of my highest consideration.

John A. Bingham.

一〇二　明治十六年二月十三日　米非國上公外使務館卿ヨリ

我提案ニ對スル米國政府ノ意嚮ニ關スル件

公第五號

去月十六日附貴翰[1]致領收候陳ハ今般貴政府ハ閣下宛ニ第一千五百六十八號書信[2]ヲ以テ御開申ノ通リ我政府提出案ノ條款ニ據テ現行條約ノ改正ヲ御承諾相成候趣貴國々務卿閣下ノ訓達ニ依リ懇々御報知ノ段幷ニ他ノ各國ニ於テモ貴國ノ好例ニ倣ヒ右條款ニ從テ速カニ承諾有之樣御希望ノ旨其致了悉候

抑豫議會ニ於テ我政府提出ノ議案ハ內外人民ノ交誼ヲ益厚カラシメ貿易ヲ旺盛ニシ隨テ雙方ノ利益ヲ擴充スルノ目的ニ外ナラス當時幸ニ閣下ノ御贊成ヲ得深ク滿足ニ存候處今度貴政府御承諾ノ報道ヲ接シ欣然ニ不堪候貴政府今般ノ御決意ハ其平常我政府ニ對シ被表候好意ノ篤キニ出ルモノニシテ且ハ閣下豫議會ニ於テ御執被成候趣旨ヲ嘉納セラレ遂ニ此ニ立至リ候次第極メテ欣喜スル所ニ有之候今回閣下ノ

御報道ニ付我政府満足ノ感意ハ何卒閣下ヨリ貴國々務卿閣下ヘ御傳達被降度御依頼候只此上ハ他ノ締盟各國ニ於テモ皆ナ迅速貴政府ノ好例ニ倣フノ擧有之候樣御同前翼望此事ニ候右回答得貴意候敬具

明治十六年三月廿二日附

外務卿　非　上　馨

合衆國

特命全權公使　ジョン、エ、ビンガム閣下

註　1 前掲一〇一文書來翰參照
2「千五百六十八號貴信」ニ相當スルモノ見當ラス

一〇三　明治十六年五月十一日　非上外務卿駐佛代理公使ヨリ

英國政府ヘ廻狀ニ關スル件

附屬書　十六年五月一一日附マルシャル氏來翰

機密第十九號　六月二十三日到

條約改正一件ニ關シ英政府ヨリ歐洲各政府ヘ廻狀相發候趣聞及候ニ付キマルシャル氏ヲ以テ探偵爲致其大意及電報置候右ハ伊國參議不在滯留中ニ有之実意見ノ要領ハ承リ置候

同參議ヨリ閣下ヘ報道ノ趣モ可有之何分ノ御訓令御待居候也

明治十六年五月十一日

駐佛臨時代理公使　光妙寺三郎

外務卿　井上馨殿

本件ニ關シマルシャル氏ヨリ差出候書簡御閲讀被下度候也

註　廻狀ニ關スル電報寫見當ラズ
何英政府ノ廻狀問題ニ關シテハ對佛交渉二九二文書以下マルシャル氏報告及對獨交渉三六一文書以下參照アリタシ

附屬書

十六年五月十一日附マルシャル氏來翰

le 11 May 1883.

Dear Mr. Inouye,

I have the honour to inform Your Excellency that, on the 6th instant, I was informed of the substance of a new Circular letter, with reference to the revision of the Japan treaties, which was sent out to the Powers by the English Government on the 1st instant, and which was delivered to the French Government on the 3rd.

This Circular proposed to the Powers to agree to an increased tariff and to make a revised treaty to that effect, without touching other questions.

But it couples with this the condition that the new treaty shall be *unlimited in duration* (my informant added "like the China Treaty of 1858"), with no stipulation of revision, but with an indication of some kind that the treaty cannot be denounced and that it cannot be modified without the consent of both parties.

I am told that France will probably accept the increased tariff, *provided the export duties are suppressed* (she claims this because she is a large exporter of raw silk from Japan). Also that France is not unwilling to consider the propriety of admitting Japanese jurisdiction in the interior as the condition of opening the whole country to French subjects, with the civil rights of Japanese subjects, but that neither France, nor any other European Power, has manifested any disposition to abandon the present jurisdiction rights in the open ports.

Finally, my informant assures me that he has reason for believing that some of the Powers (he did not say which) will decline to increase the import duties at all unless they get advantages from Japan in exchange. He doubts, therefore, that the Circular will produce an agreement between the Powers.

I am, dear Mr. Inouye,
Your Excellency's faithful servant,
Frederick Marshall.

一〇四　明治十六年三月十一日　駐英井上外務卿ヨリ各帝國公使宛

佛國代理公使ト會談ノ件

附屬書一　十六年六月十八日外務卿佛國代理公使對話筆記
佛國政府ノ內約ニ關スル件
二　同　日附佛代理公使ヨリ臨田少輔宛來翰
三　同　二十六日ベルン到外務卿往電
四　同　二十八日ベルン發峰須賀公使來電

英第十六號獨第十六號伊第十三號

本月十八日條約改正一件ニ付別紙對話書ノ通リ佛國代理公使ト應接致シ候右ハ兼テ蜂須賀公使ヲ以テ佛政府ヘ内話爲及候處同政府我所望ニ同意シ他國ヘモ勸告スヘシトノ義ニ有之如斯佛政府好意ノ周旋ニ依リ英政府ノ反對論ヲ排却候義ニ付相運ビ候ハヽ尤モ好都合ノ義ニ有之候然ルニ佛政府今日斯ク恩誼ヲ我ニ表シ候ハ安南一件ヨリ御國ニ對スル策略上我ト連合ヲ要スルノ底意タルハ代理公使ノ口頭ニテ十分相分リ我國常ニ東洋ノ和局ヲ保持スル政略ニ反シ不相好義ニ候ヘ共今我ニ於テ佛政府ノ望ヲ阻絶スルノ意ヲ示シ候テハ改正談判上ニ不良ノ影響ヲ及ホシ候義ニ付不拒不容ノ間ニ於テ程好應對致シ置候義ニ有之候間御心得ノ爲此段申進候委曲ハ右對話書ニテ御了悉有之度候也

朱書　本文對話書ハ十六年八月廿九日發機密第貳拾號外務卿ヨリ榎本公使宛公信ニ附屬ス

附屬書一

佛國政府ノ内約ニ關スル件

明治十六年八月十八日外務卿官舍ニ於テ佛國代理公使ト對話筆記

一應挨拶畢

佛公使

先便本國政府ヨリ申越候件有之不取敢閣下ヘ申上度本日御面晤相願候儀ニ候右ハ他事ニ無之即條約改正一件ニ有之唯今其訓令書ヲ持參致候間右ヲ朗讀可致御聞取可被下候一體書中ヲ拔萃可差上筈ニ候ヘ共マダ機密ヲ要シ候儀ニ付外交官普通ノ習慣ニ依リ閣下ノ面前ニ於テ朗讀致候手續ニ止メ置度其御心得ニテ御聞取可被下候

其書ニ曰ク在巴里日本公使ヨリ先般公然トナク條約改正一件ニ付左ノ三條ノ趣旨通知アリタリ

第一、東京豫議會ノ議錄ニ載スル所ノ趣旨ニ基キ貿易事項ヲ他ノ論題ト分離シ別ニ約定ヲ取極ムル事

第二、法權ハ姑ラク從來ノ慣行ニ任セ置キ漸次之ヲ恢復スルノ目的ヲ以テ差向キ行政規則丈各國公使ノ干涉ナク日本政府ニ於テ施行シ得ヘキ事

第三、條約ハ貿易事項法權ノ部分トモ一定ノ期限ヲ立其期盡クルニ至ラハ全約消滅ニ歸スルノ主義タル事ヲ認定スヘシ但シ其期限ノ長短ハ追テ談判ノ上ニテ取極ムル事

右三項ノ趣旨ヲ熟考スルニ日本政府ノ詞旨至當ニシテ當改

府ノ深ク注意スヘキ要點ナリト思考ス其内貿易事項ヲ他ノ論題ヨリ引離シテ速カニ別約ヲ締結スルカ如キハ最モ同意ヲ表シテ差支ナキ事ナリ尤モ右ハ何レモ各同盟國政府ノ同意認可ヲ得タル上始メテ結果ヲ得ヘキモノナレバ我佛政府ハ此旨意ヲ體シ日本政府ノ爲メ他ノ各國政府ヲシテ同意セシムル樣誘導ニ勉ムヘシトノ旨ヲ日本公使ニ通知ニ及ヒタルニ同公使ニハ極メテ滿足ノ色ヲ現ハセリ今若シ其地（東京）ニ於テ足下ヨリ外務卿ニ面シ右ノ趣旨ヲ陳述セバ又同樣ニ感觸アラント信スルナリ云々

佛公使

我政府ノ盡力候事ハ右ニテ委細御諒知相成度一言ニシテ之ヲ云ハヽ佛政府ハ貴政府ノ爲メ他ノ同盟國ニ向テ取リモ直サス代言師ノ職ヲ執ルト申テ過言ニ無之候其邊篤ト御玩味被下度候

外務卿

委細拜聽貴政府改正一件ニ付斯ク迄我カ爲ニ御盡力相成御懇篤ノ段實ニ感銘ニ堪ヘス此事近日來ノ一大快報ニシテ欣喜ノ至リニ候就中貴政府ノ我ニ代リ他ノ政府ヲ誘導（イニシアティヴ）勸告御擔任被下候トノ一事別シテ深謝スル所ニ有之何トナレバ頃日來傳聞候處ニテハ英政府ハ現ニ各國ヘ回文ヲ移シ我所論ノ事項ヲ拒絶セント企圖致シ居候樣子然ルニ恰モヨシ其處ヘ持込ミ貴政府ヨリ更ニ發論アリテ他二三ノ政府ヲ左袒セシメ連衡ノ力ヲ以テ英政府ノ說ニ抵抗シ其策略ヲ破却スルニ至ラハ最モ妙ナリ今ヤ貴政府ノ力ニ賴リ我冀望ヲ達セン事難キニ非ルヘシト信ス故ニ此一義ハ別シテ感謝スル所ニ候

佛公使

御承知ノ通リ前任トリクー氏ハ最初貴國ヘ來着ノ頃ハ未タ貴國事情ニ通セス實ハ今日トハ餘程反對ノ考慮ヲ抱キ居候事ハ彼ノ豫議會ニ於テ閣下等ニ對シ動モスレハ抵抗論ヲ主張候一事ニテモ分リ居候然ルニ爾後漸次貴國ノ事情目擊實驗ノ効不少ヨリ大ニ前說ヲ變シ往々公平ノ論ヲ執リ候樣相成貴政府ノ爲頗ル御都合相成候事ト存候又本國政府ノ内情ニ於テモ爾後形勢一變セシ所モ有之旁以今日ノ如キ好都合ニ相運ヒ候儀ニ御座候

外務卿

成程貴說ノ如クトリクー氏ハ丁度豫議會開會最中當地ヘ到着致サレ其頃ハマダ迎モ我國ノ事情等熟知セラル、裕餘ト

テハ無之充分ノ好案ノ胸裏ニ浮マサルハ至極尤ノ事ニ候併シ引續キ我國情ノ實際ヲ目擊セラレ夫カ爲メ幾分カ新ニ發見セラレシ事モ少カラサルヘシ其邊ノ意見ヲ以テ貴政府ヘ報道セラレタルト又一ニハ貴下ヨリ引續キ好報ヲ貴政府ヘ呈セラレタルニヨリ今日ノ如キ好結果ヲ得ルニ至リシナラント拙者信用致候

佛公使

畢竟閣下御提出ノ論旨公平正確ナルノ處致ニシテ勢斯ニ至ラサルヲ得ズ我政府モ早ク斯ニ着眼致シ是認致シタル迄ノ事ニ候御承知ノ如ク現今我政府ノ內閣ハ自由主義ヲ以テ組織セシモノニ候ヘバ已前ノ佛政府トハ面目ヲ一變致候貴國亦東洋ニ在テ日進自由主義ノ一國ニシテ素ヨリ支那ノ如キ頑陋國ノ比ニ非ラサル事ハ勿論ナリ故ニ我國トハ自然意氣相投スルモノヽ如ク是又佛國ノ貴國ノ爲ニ謀ラサルヲ得サル一原因ニ御座候

外務卿

他事ナカラ序ヲ以テ謝詞申述度候先般我陸軍士官視察ノ爲メ安南地方ヘ派遣ノ儀ニ付貴政府ヘ依賴致候處速カニ御承諾御許可下サレ同人等モ彼地ニ至リ非常ノ懇待ヲ蒙リ大滿足ノ由申越候右ニ付テハ貴下最初ヨリ御盡力下サレ萬謝ニ堪ヘズ御序ノ節其筋ヘ可然謝辭御申傳下サレ度候

佛公使

承知致候元來貴國人ト佛人トハ氣質餘程近似候處有之其談笑往來ノ模樣ヲ見ルニ實ニ親和ヲ極メ候今度御派遣ノ貴陸軍士官ハ皆佛語ニ熟達ノ人ニ付別テ我國人ト親和シ恰モ同隊ノ士官ノ心地ニテ決シテ日本人トハ不思事ト存候佛公使又端ヲ改メテ曰ク我政府貴國ニ對シ改正事件ハ勿論其他百般ノ事ニ付別段懇親ノ意ヲ表シタル意嚮ノ充分ナルハ既ニ御了解ノ事ト存候夫ニ付一事不申上置テハ不相成事有之佛ノ鄙諺ニ云ク「事務ハ事務ト交換セヨ」ト申事有之我國ヨリ貴國ニ對スル情狀前述ノ通リニ候ヘハ貴國ノ我ニ對セラルヽモ亦必ラス同一ノ事ナルヘシト信用致候譬ヘハ佛國他邦ト緩急ノ事アルニ際シ貴國ノ援助ニ賴ラントスル事アラハ貴政府ハ我ト情ヲ共ニシ假令外面公然ニ非ルニモセヨ裏面情誼上ニ於テ御聲援可有之ハ不容疑事ト信用致候

外務卿

勿論ノ事ニ候但シ其時ト場合トニ至テハ如何樣ノ事出來スヘキ哉豫測スヘカラスト雖モ苟モ貴國ノ如キ懇親ノ國ニ對シ不懇親ナル擧動ハ人情ニ於テ決テ不能爲事ニ有之候ヘハ其邊必ラス御懸念無之樣致シ度候

是ヨリ談安南東京淸國ノ事情政略形勢論ニ渉ル

佛公使

貴說ヲ伺ヒ閣下ノ御定見卓然ナルニ感シ又卑見ニ取リ幾分ノ益ヲ得候兎ニ角佛國ハ安南ヲ征略シ永遠ノ計ヲ規畫候事ニ至テハ何等ノ艱難ニ遭遇スト雖決シテ屈撓セサルヘク所謂有進無退必至目的ヲ遂クヘシトノ決意ハ全國一定ノ與論（ママ）ニ有之左樣相成候上ハ隣邦ノ淸國ハ一種頑陋ノ國ニシテ共ニ談スルニ足ラス差詰メ何事アリテモ我情好ヲ通シ事ヲ與ニセント欲スルハ唯貴國アルノミ貴國モ亦將來淸國ニ對シ施ス所ノ政略ニヨリテハ其接境ナル我佛國ト氣脈ヲ通シテ事ヲ謀ラハ有益無害ナルヘシ是卽チ貴我兩國ノ利害同一ニシテ緩急相應シテ以テ東洋ノ開化ヲ提誘セサルヲ得ス是兩國ノ間密着ノ關係ヲ生スル所以ト存候

外務卿

貴說一々御尤ノ事ニ候拙者意見ニ於テモ貴見ト符合スル處不少別テ欣悅ニ堪ヘス猶改正一件ニ付テハ御序ノ節トリクレ氏ヘモ可然謝詞御申傳下サレ度及御依賴候

佛公使

承知次便可申遣候

外務卿

唯今改正一件ニ付貴訓令書御讀過ノ內御差支ナキ分丈ケ書取リ御遣シ下サレ候事ハ相叶間敷哉他日遺忘ヲ防キ候爲メ好都合ニ御座候

佛公使

承知

右書面翌十九日鹽田少輔迄差越タレトモ蜂須賀公使ヨリ申入タル三項ノミアリテ佛政府盡力云々ノ語不相見ニ付鹽田ヨリ右ヲ書加ヘ候方可然旨再應佛公使ヘ談示有之タレトモ外各政府ヘ遠慮アリテ何分書面ニテ遣ス事ハ迷惑ノ由申來レリ故ニ不得已右訓令書ヲ再度展覽其大主意ヲ此筆記ノ初メニ揭ケタリ

附屬書二

十六年八月十八日附佛代理公使ヨリ鹽田少輔宛來翰

在巴里日本公使館ヨリ我共和政府ノ外務省ヘ差出サレタル提議卽チ過日ノ御面談中ニ在テ其一部分ノ主眼ナリシ所ヲ簡說スヘキ樣井上公閣下ニ代ラレ御申越ノ趣敬承致候

日本皇帝陛下ノ代理者ハ其希望セル所左ノ三條ナル旨ヲ表明セリ

第一 條約至急ノ改正條ニ通商事項ニ限レル改正ハ東京豫議會ニ於テ熟議セラレタル旨趣ニ基キ再議ニ付セラレタキ事且ツ此項ニ付テハ他ト分離セル別約ヲ取極メラルヽニ至ラン事尤モ此別紙ノ畫期ハ今ヨリ定メラレサルト雖モ其年限ハ他日畫限セラルヽヲ得ヘキ主意ハ之ヲ承諾セラレテ此別約ヲ立ラレタキナリ

第二 其他ノ諸項（條ニ裁判權ノ項）即チ皆假リニ從前ノ儘ニ據置カルヽ所ノ諸項ニ關シテ日本公使ノ申出タル望ニハ我佛國ハ此項モ通商事項ト均シク條約ノ永久主義ヲ拋棄セラレタキコト尤モ該條約ノ廢滅ニ歸スヘキ年月ヲ定ムルコトハ後日ニ讓リテ所謂條約永久主義ヲ棄却セラレタキナリ

第三 外國人ニ適用スヘキ行政ノ諸規則ニ關スル事項ノ審議ハ其目的漸次日本政府カ外交上ノ干渉ヲ受ケスシテ諸規則法律ヲ制定シ且ツ之ヲ公布スルノ權ヲ收攬スルニ在ル所ナレハ之ヲ企テラレタキ事

右ハ近頃頻リニ我佛國政府ノ注意ヲ喚起シタルモノ也

敬具

八十三年八月十八日

ヨント・ラフアエル・ド・ヴキエル・カステル

臨田外務少輔閣下

（各個文）

Légation de France
au
Japon

18 Aout '83

Particulière

Excellence,

Vous avez bien voulu me prier aujourd'hui au nom de Son Excellence Mr. Inouye, de récapituler les propositions que Votre Légation à Paris a cru devoir présenter officieusement au Département des Affaires Etrangères du Gouvernement de la République et qui ont été l'objet d'une partie de notre entretien.

Le Représentant de Sa Majesté a manifesté le désir.

1. qu'une révision immédiate des Traités, mais une révision restreinte aux questions commerciales soit reprise sur les bases élaborées par la Conférence de Tokio, et qu'un arrangement séparé dont le terme ne serait pas fixé dès à présent mais dont il serait admis en principe que la durée pourrait être limitée ulterieurement, vienne à être conclu à cet effet.

2. En ce qui touche les autres questions (notamment celles de juridiction), pour toutes lesquelles le *statu quo* serait maintenu provisoirement, il a exprimé le vœu de nous voir, de même qu'en matière commerciale, renoncer au principe de la permanence du traité en renvoyant à une époque ultérieure la détermination de la date à laquelle celui-ci pourrait être dénoncé.

3. Il a enfin demandé que l'examen de la question des réglements d'administration applicable aux étrangères en vne de rendre graduellement au Gouvernement Japonais le droit d'établir et de promulguer des réglements sans intervention diplomatique, soit entrepris.

Tels sont les trois points sur lesquels Mr. Hachisuka a récemment attiré l'attention du Gouvernement Français.

Veuillez agréer, Excellence, la nouvelle expression de ma haute considération et de mes sentiments tout dévoués.

Comte Raphaël de Viel Castel

Son Excellence
Monsieur Shioda Saburo.

附圖書三

十六年八月二十六日ベルンヨン列蜂須賀公使宛外務卿往電

Arrivé à Berne le 25 Août 1883.

Relating to treaty revision I had an interview with French Chargé d'Affaires in Japan. He read me memorandum received from his government as to the proposal you have confidentially presented. French government has agreed to accept it and to induce other powers to do so. The substance of his conversation is almost similar to what you have communicated. He also touched Annam difficulty, saying that we have common interests with &c. &c. &c.

附圖書四

十六年八月二十八日ベルンヨン發蜂須賀公使來電

Sent from Berne the 28 August 1883
through Russia.

To Gaimukio,

Am glad to receive telegram regarding your conversation with the French Chargé d'Affaires and Marshall's request. I will follow your instructions about Annam. I send you text of French note per mail of 15 July and Belgian note of 5 August. Have obtained substance of German note. It is not reply to English circular, but communication for all powers; though analogous to Belgian note, a little more advantageous to us. It proposes to grant 8 years hence right of denunciation for which we asked, on condition that right shall not be used by us unless we open interior and are ready for administering justice to foreigners throughout the country in a satisfactory manner. I shall send by mail 2 September substance of German note.

Hachisuka.

外務卿 ビスマルク公如斯我國ノ利益ヲ計ラルヽ厚意ハ拙者深ク謝スル所ナリ通商條約ヲ先ツ取極ムル義ハ大略承知セリ然レトモ其他裁判權等ハ如何相成ル都合ニ候哉

公使 夫レハ先ツ通商條約ヲ訂定シタル後ニ於テ漸次之ヲ論定スヘキ積ナリ

外務卿 通商條約ノ終期條款ハ如何

公使 我政府ノ見込ヲ御推問ナレハ内々御話シ致シテ苦シカラス通商條約ノ期限ハ貴國草按中ニ記載シタル如ク先ツ向八ケ年ト定メ左ノ約束ニ因テ之ヲ實行致シ度趣ナリ即チ右八年間ニ貴國ニ於テ外國人ニ對シ全國ヲ開クノ用意全ク整ヒ右期限ニ於テ開國ヲ實行スルヲ得ルトキハ全條約ヲ廢止スル事ヲ得ヘシ若シ之ニ反シ右用意整ハサル時ハ之ヲ廢止スル事ヲ得スシテ更ニ再ヒ改正ヲ爲ス事ヲ得ルナリ

外務卿 右ノ約束ニテ期限ヲ定ムル事ハ我國ノ爲メニ頗ル難題ナリ如何トナレハ我國々政改良ノ度ヲ定ムルニ假令ハ我現ニ整頓セリト認ムルモ外國政府ハ認メサル等ノ事アツテ之ヲ論定スルニ苦シムヲ懼レヽナリ

公使 或ハ然ラン併シ先ツ通商條約ノ改締ニ對シ貴政府ヨリ如何ナル報酬ヲ各政府ヘ讓與セラルヘキヤ

外務卿 事件頗ル重大ナリ御即答ニ及ヒカタシ拙者之ヲ熟考スヘシ併シ此件ニ關シ貴國御所望ノ个條ヲ承知致シ置タシ

公使 我國政府ノ考ル所ハ貴政府ニ於テ内地旅行券ノ區域ヲ廣メ外國商人ヲシテ内地產出者ト直接ノ取引ヲ許ス事ナリ右ハ雙方ノ爲メ大ナル利益トナルヘシ何トナレハ直接ノ取引ハ當時開港場ニアル仲買ノ手ヲ借ル事ナク自然外國人ハ下直ニ日本產物ヲ購求スル事ヲ得ヘク内地產出者ハ高價ニ之ヲ賣渡ス事ヲ得ルヤ明ナリ又外國品モ同樣ナリ

外務卿 右ハ直チニ我裁判權ニ關係ヲ生スヘシ我國人ノ爲メニ不便利ヲ受ルニ似タリ例ヘハ仙臺地方ニ於テ甲ナル外國人乙ナル我國人ヨリ生糸ヲ買入レタルモノトセンニ若シ其取引上甲乙二者ノ内一方ニ於テ苦情ヲ生シ之ヲ法廷ニ訴ヘントセハ遠ク之ヲ横濱或ハ其他開港場ナル外國領事館ヘ告訴セサルヲ得ス故ニ甲乙何レヨリ告訴スルニ係ラス我國產出者原告又ハ被告トシテ遠路外國領事館ヘ出頭スル爲メ種々ノ損耗ヲ蒙ラサルヲ得ス若シ此訴訟ヲ

一〇五 明治十六年九月一日 井上外務卿 獨逸公使對話摘要

條約改正ニ關スル件

明治十六年九月一日獨公使館ニ於テ井上外務卿井同國公使デンボーフ氏對話摘要

公使 貴國條約改正ノ義ニ付英國政府ヨリ各國政府ヘ宛差出シタル廻章ハ御一覽アリタルヤ

外務卿 然リ該廻章ハ未タ閱讀致サス候ヘ共其旨趣ハ拙者既ニ了悉セリ

公使 今般ビスマルク公ヨリ拙者ヘ内密ノ訓令ニ據レハ方今貴我兩國ノ交際日ニ親密ヲ加ルニ際シ過般伊藤參議我國ニ來遊セラレ親シク同公ト面晤アリ同公ニ於テハ成丈ケ貴國ノ利益ヲ計ル誠心ニテ今般貴國條約改正ノ義ニ付英國政府ヨリノ廻章ヘ回答旁各國政府ヘ差出シタル我國意見書中ニ先ツ第一ニ通商條約改定ヲ主張シタリ右ハ海關稅ノ增額ヲ以テ貴國金融ノ路ヲ開キ紙幣ノ下落ヲ挽回シ以テ財政困難ヲ救成セントノ見込ナリ然ルニ若シ貴國於テ既ニ此利益ヲ得領セバ貴政府ヨリ各國政府ニ對シ幾分カ報酬ヲ讓與セサルヲ得ス因テ右ノ趣内密拙者ヨリ閣下ヘ開陳シ御意見回報スヘキ旨申來リタリ

シテ巨額ノ取引ヨリ生シタルモノトセハ其ノ損害モ或ハ堪ヘシト雖モ些少ノ取引上ヨリ斯ノ如キ費用ヲ招クニ至ラハ我國人民ノ困難實ニ堪ユヘカラサルニ至ラン又外國人内地ニ於テ犯罪ノトキニ於テモ大ニ官吏ヲ煩スノ不便アルヤ明カナリ故ニ此等ノ不利ト通商條約ヨリ生スルトコロノ利益ヲ詳細比較シタル上ニ非ラサレハ拙者決答ヲ爲シ難シ

公使　英國政府ハ貴政府ニ向ヒ沿海貿易ノ權ヲ請求スヘキ趣ナリ貴政府之ヲ承諾セラルヽヤ否ヤ

外務卿　此件ニ關シテハ拙者今玆ニ決答ヲ爲ス事ヲ得ヘシ請フ閣下我國ヲ見ヨ我國ハ一島國ニシテ四面皆海ナリ而シテ沿海運輸ハ我商人ノ一大重要事業ナリ故ニ若シ沿海貿易ヲ外國人ニ許シ夫ヲシテ海運ノ事務ヲ占有セシメハ我海運事業ノ衰ルハ必然ナリ此權ハ讓與シガタシ

公使　拙者一己ノ意見アリ二三ノ開港場ヲ增加セラルヽ事ナリ左スレハ現條約ノ主義ヲ只少シク擴張スルニ過キサルベシ

外務卿　夫レハ一種ノ御考案ナリ

公使　貴國草按中最惠國條款ヲ揭ケアレトモ英國其他ニ於テハ之ヲ承諾セザルヘキ趣ナリ

外務卿　貴政府ニ於テハ何歟御高案之アルカ

公使　我政府ノ考ニテハ貴國ニ於テハ其條約中千八百八十年獨清兩國間訂結シタル續約ト同樣ノモノヲ記載スルヲ得ハ然ルベシ

外務卿　然ラハ其續約ハ如何ナル性質ニ候哉

公使　只今通曉セス追テ取調ヘタル上通知スベシ

又曰今般特ニ閣下ヘ内密申入ヘキ旨ビスマルク公ヨリノ内訓ニ據レハ獨國ニ於テハ日獨兩國ノ交誼ヲシテ益々親密ナラシムル事ヲ希望スルニ付テハ成ル丈貴國ノ利益ヲ計ル事ヲ勉ムヘシト雖モ東洋ニ於ケル獨國通商事業ヲ英國ノ夫レニ比スレハ僅カ三分一ニモ當ラス故ニ今般貴國條約改正ノ義ニ付獨國ハ充分貴國ノ利益ヲ計リ其意見ヲ述フベシト雖モ結局英國ノ提案ニ對シ全ク反對ノ論ヲ主張スル事能ハザル事情アリ他ニ非ラス若シ獨國英國ニ向テ反對ヲ試ムルトキハ英國ハ必ラズ獨國ノ方今東洋ニ於テ漸ク盛大ニ赴カントスル通商事業ニ害ヲ加ルニ至ラン是獨國ノ最モ憂フルトコロナリ又獨國ハ歐洲大陸ニ在テ一大强國ナレハ其一言能ク他國ヲ感服セシムル勢力ヲ有

スト雖モ東洋ニ向テハ此勢力ナキカ故ニ今般獨國カ貴國ノ爲メニ主張スルトコロノ旨趣モ他國ヲ調和セシムルニ過キス故ニ此一事ハ特ニ御承知アラン事ヲ希望スル旨申越サレタリ

一〇六　明治十六年十月二十一日　井上外務卿ヨリ獨逸公使宛

條約改正ニ關スル意見覺書送付ノ件

附屬書　同覺書

譯文寫

機密信

獨逸公使宛　　井上外務卿

以書簡致啓上候陳ハ條約改正ノ儀ニ付頃日御面晤ノ節申陳置候通當政府ノ意見別紙覺書ニ相認メ内密差進候間貴政府ヘ御送呈相成樣致度及御依賴候且又右覺書ノ末文ハ本條約中ニ明記セサル樣致希望候

拙者於テ何分閣下ノ御勸說ヲ其儘御承諾難致ハ寔ニ遺憾ニ存候今日我邦外交上ノ事情ヲ觀察候得ハ條約改正ノ結果ヲシテ可成的我國ニ利益アラシムル樣拙者ニ於テ勉力致サヽルヲ得サル次第ニ候間此段閣下御了悉有之度候將又閣下我日本ノ爲メ被表候御懇切ノ友情ハ必ス本件ニ關シテ宜敷貴政府ヘ御申立相成滿足ナル結果ヲ生スルニ至ラシメン事拙者ノ毫モ疑ハサル所ニ御座候敬具

明治十六年十月二十一日

（右原文）

Strictly Confidential

Foreign Office, Tokio.
October, 21, 1883

My Dear Count Doenhoff,

Referring to our conversation relating to the Revision of Treaties, I beg to forward to you herewith inclosed a confidential verbal note containing the views of my Government on the subject, which I beg you will be so good as to bring to the notice of your Government. I wish further to say that any express mention of the concluding part of the note shall not be introduced in the body of the treaty.

I assure you that I exceedingly regret my inabili-

ty to follow your advice in entirety, but you well know that the circumstances which surrounded my country at present oblige me to exert my utmost power to render the result of the Revision as much favorable for Japan as possible.

I sincerely and confidently trust that your friendly feeling and sympathy toward Japan may enable you to make a favorable recommendation to your Government and bring about a satisfactory settlement of the pending question.

Believe me

Very truly Yours

Sig. Inouye Kaoru.

His Excellency

Count Doenhoff

H. I. G. M's Minister.

附屬書

十六年十月二十一日附獨逸公使宛曼書譯文

譯文寫

極機密

覺書

十一日北京ニ於テ日耳曼國ト清國トノ間ニ取結ヒタル追加條約中ニ掲載スル旨趣ヲ承諾スルコトニ於テハ異存無之候

外國人ニ内地通商ヲ許ス件ニ關シテハ日本政府於テ目下此議與ヲ爲スコトハ最モ困難ニ有之候何ントナレハ此權ハ裁判權ノコトニ切ニ關係ヲ有シ候故ニ日本政府ハ此議與ヲ許容セサル代リニ通商上ノ要地ト認ムル所ニ於テ二三ノ新開港場ヲ開クコトヲ許諾可致候

日本政府ハ日本人ニテ外國船舶ヲ雇入ルヽノ方法ニテ十ケ年間沿海貿易ノ特權ヲ讓與スルコトハ敢テ異議ナシ乍併十年ノ期限ハ假令如何ナル場合ニ際シテモ決シテ延期セサランコトヲ切望ス是レ前回ニモ既ニ辨明ニ及ヒタルカ如ク日本ノ地形ニテハ右ノ定期年限ヨリ以上ハ此特權ヲ外人ヘ許與スル事極メテ願シカラサル所ニ有之候

結局ニ臨ミ井上氏述テ云ク新定通商條約終期ニ至リ若シ日本ニ於テ條約ヲ廢棄スル能ワスシテ復ヒ改正ノ擧ニ出テサルヲ得サル事情差起ルコトモ之レアルトキハ其際又タ更ニ他ノ讓與ヲ爲スノ機會モ充分ニ之レアルヘシト日本政府ノ信スル所ニ候

（右原文）

一千八百八十三年九月一日幷ニ十月十九日ノ兩日ニ於テ日耳曼帝國特命全權公使カウント、ドヲーンホツフ閣下ト日本帝國外務卿井上馨氏ト對話中雙方協議ノ旨ニ隨ヒ井上馨氏ハ條約改正ノ件々ニ關スル日本帝國政府ノ意見ヲ日耳曼帝國政府ノ考按ニ供シ候

井上氏ハ日耳曼政府カ條約改正ノ論題ニ付既ニ懇切友誼ノ勘考ヲ與ヘラレ候ハ日本政府ノ深ク滿足スル所ナル旨ヲ此ニ陳述致シ候又日耳曼政府カ平常日本國ヘ對シ盡サレ候懇切ト好意ヲ今回更ニ證明セラレタルハ日本政府ノ甚タ感佩スル所ニ有之候同氏ハ又一步ヲ進メテ既往ニ於テ斯ノ如ク日本政府ヲ幇助シタルコト少々ナラサル此懇切好意ハ將來ニ於テモ均シク盡サレ且本文ニ述フル所ノ日本政府意見ヲ贊成セラレンコトヲ切望スル旨ヲ陳述ス

日本政府ハ通商上ノ事件ヲ他ノ事件ト分チ別ニ之ヲ議定スルコト及ヒ或ル約束ヲ以テ此條約ヲ廢止スルコト乃チ日本政府ハ新條約ノ滿期ニ於テ全國ヲ開クノ用意整フニ於テハ全條約ヲ廢止スルノ權ヲ有スルトノコトハ甚タ滿足スル所ニ有之候

特惠國ノ个條ニ關シテハ日本政府ハ一千八百八十年三月三

Strictly Confidential

Foreign Office, Tokio

In pursuance of an understanding arrived at during the interviews which took place on the 1st of September, and the 19th of October 1883, between His Excellency Count Doenhoff H. I. G. M's Minister and Mr. Inouye Kaoru, H. I. J. M's Minister for Foreign Affairs, Mr. Inouye begs to submit for the consideration of Imperial German Government touching certain points raised in connection with the subject of the Revision of Treaties.

Mr. Inouye avails himself at once of this opportunity to express the lively satisfaction which H. I. M's Government feel at the favorable and friendly consideration which H. I. G. M's Government has given to the question of the Revision of Treaties. Mr. Inouye desires to add, H. I. M's Government highly appreciate this fresh evidence of that friendly sympathy and cordial goodwill which H. I. G. M's Government has always manifested towards Japan. He desires further to express his earnest hope that the same friendly sympathy

and cordial goodwill which in the past assisted H. I. M's Government to a high degree, will also be extended in the future and that the views of H. I. M's Government here expressed may meet with a favorable consideration.

H. I. M's Government feel highly satisfied with the separate settlement of the commercial matters independently from other questions, and also with the terminability with the condition attached to it, that is to say, the Government of Japan to have the right of denouncing the whole treaty, provided they are prepared to open the whole country at the expiration of the new Commercial treaty.

With reference to the Favored Nation Clause H. I. M's Government have no objection in accepting the principles contained in the Supplementary Convention between Germany and China concluded at Peking on the 31st day of March 1880.

As to the question of foreigners freely trading in the interior, it would be extremely difficult for H. I. M's Government to make this concession at present, as it closely touches upon the subject of

jurisdiction. Instead of granting this concession therefore, H. I. M's Government are quite willing to open two or three new ports at such places as would be of commercial interest.

H. I. M's Government are quite prepared to concede the privileges of the Coasting Trade for the period of ten Years under a system of charters of foreign vessels by Japanese subjects. It is earnestly desired however that in no case the period of ten Years shall be extended. The Geographical position of Japan as was already explained on previous occasion renders it highly undesirable to grant this privilege to foreigners beyond a limited period.

In conclusion, Mr. Inouye desires to express the belief of H. I. M's Government that at the expiration of the New Commercial Treaty and upon the happening of the contingency requiring a resort to another revision on account of inability on the part of Japan of exercising the right of denouncing the treaty, sufficient opportunities would present themselves of making certain other concessions.

一〇七　明治十年十月七日　在非公使ヨリ外務卿宛

條約改正ニ關スルビスマルク公ノ内訓ニ關スル件

非上外務卿

花房公使殿
淺野公使殿
櫻田代理公使殿

内信

本邦駐劄獨逸公使カウント、ドンホツフ氏ヨリビスマルク公ノ内訓ヲ受ケ條約改正ノ件ニ關シ我國ヨリ他國ニ讓與ノ義ニ付別記ノ通リ拙官ヘ懇話アリタルニ因リ拙官ヨリ回答セシ點々ヲ別紙ノ通リ覺書ニ製シ秘密トシテ同公使ニ付與致置候就テハ獨逸政府ニテハ他各政府ニ向ヒ我政府ノ企望ヲ達セシメント周旋致候ハント存居候抑右ハ全ク獨政府ノ好意ニ出テシ義ニ付他日獨政府ヨリ右覺書中掲載ノ件々ヲ以テ先ツ各國政府ニ掛合ニ可及ト想像致居候其時ニ當テ其國政府ニ於テ非儀ナレハ已ニ當關下駐劄ノ公使ヨリ承及居ルト申條ノ事有之候テハ啻ニ獨逸政府ノ折角ノ好意ニ對シテモ不都合ニシテ且ツ此方ニテ獨逸政府ニ對シ右覺書ハ

極々秘密ナリト申入置テカラ先ツ他政府ニモ之ヲ承知スル者有之候テハ空言ニ歸スルノミナラズ獨逸政府ヲシテ不善ノ感覺ヲ生セシメ候恐有之候故關ヨリ貴官ヨリ右覺書ノ旨意ヲ以テ公然我外務卿ノ訓令ニテ我政府ノ意見ナリト御揚言被成候テ可然時機ノ到來セシ節ハ青木公使ヨリ拙官及貴官ヘモ通知可致答ニ付其時ヲ待テ始メテ任國政府ヘ向テ我外務卿ヨリ如此訓令アリト公然御發言相成候樣致度夫迄ノ間ハ其國政府ヨリ重修事件我國ヨリ他國ヘ讓與ノ點ニ付貴官ヘ何トカ御話及候テモ自分ノ考ニテハ此位ノ連迄ハ我政府ニテ承知可致ト思ヘ共如何ノ者ニ哉ト云フ位ノ語氣ニテ凡テ貴官一人丈ノ御見込ノ積ニテ模糊ト御話當相成候樣致希望候

一貿易章程ヲ裁判ノ點ヨリ離シテ先ツ取極ル事
一貿易章程取極リシ後續テ裁判權ヲ談判スル事
一條約ノ終期ハ左ノ「コンデシヨン」ヲ以テ承諾スルコト
假令ハ貿易章程ヲ八年トシテ其終期日本政府之ヲ取消シ得ルハ法律幷行政ノ改正整頓シ全國ヲ開クト同時タルベシ若シ終期マデニ內部ノ改正整頓セサル時ハ終期ヲ公布スルコトヲ得ス

一最惠國ノ個條ハ獨清間千八百八十年三月三十一日追加條約ノ主意ニ遵テ取極ル事

一行政規則幷地方ノ規則ハ幾部分カ現場ノ困難ヲ避ルニ要用ナル部分ダケヲ我政府エ取返ス事

右ノ各个條ハ重修事件ニ付談話有之候節御發言被成候トモ不苦候但シ我國ヨリ他國エ讓與ノ義ニ付テハ本信第一項ニ記載スル通リト御承知相成度候

（淺野公使ヘ八）

シイボルト氏伊國ニ出張貴官ニモ外務卿マンチニ氏エ御面晤重修事件ニ付御談判相成右會話書御送致有之逐一閱悉大ニ好結果ヲ得候段至極滿足致居候尚向後モ時々伊國ノ意嚮ヲ青木森蜂須賀公使等エ御報知相成同政府ヲシテ益々我國ノ企望ヲ可諾候樣御配慮相成度候

（花房公使ヘ八）

露國新任公使ダヴイドフ氏モ先般着任同氏ハ至極純良ノ人トナリニシテノ如此公使ヲ得候ハ實ニ拙官ノ幸福ト存居候

（以下省略）

右之件々以內信申進候也

註　1　千八百八十年三月三十一日獨清間追加條約

（抄出）

第一條

清國ノ特許

……獨逸國船舶ハ又江蘇省吳淞港ニ寄港シ商品ヲ積込ミ又ハ荷卸シスルコトヲ將來許可セラルヘシ必要ナル規則ハ上海道臺及權限アル當局ニ依リ作成セラルヘシ

獨逸國ノ特許

……

獨逸國臣民ニシテ清國政府カ別國又ハ該別國ノ臣民ニシテ特許スルコトアルヘキ特權特典又ハ優越利益ヲ本條ニ基キ要求スル場合ニハ右獨逸國臣民ハ右特許ニ關シテ協定セラルヽ規則ニモ亦從フヘシ

2　「シーボルト氏伊國ニ出張」以下ハ在伊、淺野公使ノミニ宛テタルモノナルコト明カナリ、原文ニ無キモ括弧ノ文字ヲ加ヘタリ

尙シーボルト伊國出張ニ關シテハ對獨交涉**三六五**文書及對伊交涉**三九九**文書參照

一〇八　輸入稅增額、條約廢棄權其他ノ問題ニ對スル新任英國公使ノ意向ニ關スル件

明治十七年四月九日　井上外務卿ヨリ在獨佛公使宛各帝國

以內信啓上仕候然レハ條約改正一條ニ付テハ客歲十二月十一日英國政府ヨリ差出候覺[1]書ハ在倫敦我公使館ヨリ及御送致置候筈ニ付既ニ御一覽相成候事ト存候其後同國新任公使プランケツト氏モ去月十五日ヲ以テ着京相成候ニ付爾來兩回會談同氏ノ意見及尋問候處右覺書ノ旨趣トハ大ニ相反シ其大要ヲ摘錄スレハ先ツ貿易上ニ關スル諸件ヲ議定シ別種ノ條約ヲ締結シテ之ヲ實際ニ施行シ然ル後其他ノ諸項ヲ決定スヘキ旨趣ニ有之輸入稅增額ノ儀ニ付テモ異論無之候得共我政府ヨリハ之レカ報答トシテ外國人ノ內地通商（パスポートシステムヲ以テ內地ニ通商スルヲ云）ヲ許ス歟然ラサレハ沿岸ニ於テ凡ソ六ケ所ノ港（アクセツシーヴポルト）ヲ開キ外人通商ノ道ヲ廣メン事ヲ請求致候趣ニ有之候則隱然沿海貿易ヲ占ムルノ一手段ニ候又廢約權ノ儀モ承認可致趣ニ有之候得共條約滿期前三年間若クハ其後同年間內地ヲ開キテ雜居ヲ許シ其間ニ於テ諸行政規則幷民刑法施行ノ當否如何ヲ實驗シ然ル上ニテ廢約權ヲ施行スルト否サルトヲ決定スル旨ヲ預約セントノ旨意ニ有之候

前述プランケツト氏ノ意見中沿岸ニ於テ凡ソ六ケ所ノ港ヲ開カントスルハ橫濱其他ノ開港場ノ如ク外國人居留營業ノ爲メニハ無之單ニ往來ヲ自由ニシテ輸出入ノ門路ヲ濶ムルト沿海貿易ヲ擴張セントスルノ目的ニシテ詰リ領事官ヲ派出スルカ如キ失費ヲ受ケスシテ通商ノ實益ヲ占メントスルノ旨意ニ有之又廢約權ヲ承認スルトモ之ヲ施行スルト否ラサルトハ行政規則等ノ當否ヲ實驗セル上ニテ之ヲ決定セントスルハ內地雜居ノ後ニ至リ事情ニ由リテハ廢約權ノ施行ヲ拒絕スルノ趣旨ニ可有之存候

然ル處拙者ノ意見ニテハ客歲十月廿一日當京駐劄獨逸公使ドヘンホフ氏ニ差送候覺[2]書中陳述致置候旨意ノ外ニハ讓與候儀難相成輸入稅增額ニ對スル報答トシテ外國人ノ內地通商ヲ許シ候儀ハ勿論得策ニ無之去トテ沿岸ニ於テ數ケ所ノ港ヲ開キ候時ハ外國人ノ居留ヲ許サヽルトモ商品ノ出入アルカ故ニ各地共稅關ヲ設置セサルヘカラス寧ロ新開ノ港ヲ三ケ處ニ減シテ居留營業ヲ許シ候方可然就テハ其旨意ヲ以テ今後談判仕候心得ニ有之候尤都合ニ依リテハ內地ヲ通商ノタメ開キ候ヨリモ其害少キニ付三ケ所ヲ四ケ所トナスモ妨ナキ樣相考ヘ候又廢約權ノ儀ハ假令之ヲ收握スルトモ前述ノ如ク英政府ニ於テハ約期ノ前後ニ當リ雜居ノ得失ヲ先

ツ實驗セントノ請求有之夫迄ハ其施行ヲ承諾セサル趣ニ付テハ一旦内地ヲ開テ外人ヲ容レ幾年乎雜居セシメ候後ニ至リ法權幷廢約權ノ施行ニ關シ異議申立候儀有之モ難測就テハ雜居法權及廢約ノ三件共同時協議スルニアラサレハ同意不致積ニ有之候

最惠國條款ハプランケツト氏ノ意見ニテハ從前ノ儘ニ差置變更セサル旨意ニ有之乍遺憾我目的ヲ達スルニ至ラサルモ難測尚今後盡力仕候心得ニ有之候尤行政規則制定ノ權ノ如キハ到底快復ヲ得ヘキ見込ニ有之候

改約再會議ハ重立タル條約國ノ諸公使ト協議ノ上開議ノ時日等決定スヘキ所存ニ有之候

獨逸公使ドヘンホフ氏ハ就任以來最懇親ヲ表シ改約ノ儀ニ付テハ大ニ盡力スヘキ心意ニ有之新任英公使ヘモ拙者ヨリ差送候覺書ノ旨意ニ據リ反覆陳說仕居候趣ニ有之候唯同公使ハ未タ本件ニ付本國政府ノ訓狀接手不仕趣ニ御座候

右件々爲御心得申進置候頓首

明治十七年四月九日

井上外務卿

青木周藏閣下

蜂須賀茂韶閣下

各通

註　1 二五一附屬書三參照
　　2 一〇六文書參照

第二項條約改正會議

一〇九　明治十七年四月十五日　井上外務卿ヨリ三條太政大臣宛

英政府意見覺書進達ノ件

寫一通及進達候尤モ右ニ付不日内閣之會議ヲ乞ヒ可申上存候ニ付夫迄ニ御熟閱相成リ度此段上申候也

附屬書

明治十七年四月十日英國公使提案條約改正ニ關シ英政府ノ見込書（第一覺書）

一、英國政府ハ曩ニ日本委員竝外國委員カ豫議會ニ於テ同意ナシダル改正稅目ヲ他ノ各國モ承諾スルニ於テハ欣然之ヲ其儘承諾スヘシ且又若シ日本或ハ他國ニ於テ右稅目中ヘ更ニ何等ノ修正變更ヲ加ヘント欲セハ是又英政府ニ於テ欣然其議ニ與カルヘシ但シ右ノ場合ニ於テハ英政府モ時宜ニ因リテ別自ニ修正變更ヲ申出スノ權ヲ保有セント欲ス

二、凡ソ關稅又ハ其割合ヲ變改スルトキハ其實施ニ先タチ須ラク相當ノ猶豫時日ヲ置キ前廣ロニ其事ヲ一般人民ヘ通知セシメサルヲ得サル事ハ勿論ナリトス

三、英政府カ關稅增加ノ靡ニ於テ右ノ讓與ヲ爲スハ左約款アル上ノ事トス卽チ日本於テモ外國人ニ貿易上竝ニ内地交通上ノ便利ノ增與スル事ニ同意シ以テ是迄外國商人カ唯四五ノ開港場ニ其貿易ヲ限ラレタルカ爲メ蒙リ居ル所ノ檢束ヲ向後ニ寬メラレ以テ今日外國貿易ノ妨害タル地方聯合ノ弊ヲ防キ外人ヲ保護スル事ニ同意アラン事是ナリ

四、英政府ハ「豫議會ニ於テ討議シタル他ノ件目ノ同意ヲ待タスシテ稅目ノ論題ヲ可成速ニ決定スベシ」トノ日本政府ノ發案ヲ欣然承諾スベシ

五、故ニ我英國公使ヘハ貿易條約ヲ討議締結スヘキ事ヲ委任シ且ツ之カ爲メ必要ナル訓令竝ニ全權ヲ付與セリ

六、英政府ハ稅關規則卽チ貿易規則、借庫規則、拂戻稅、港稅及ヒ燈稅ノ論題ヲ可成クハ稅目ト同時ニ議定スル事可ナリト思考ス然レトモ右件々ヲ貿易條約中ニ組入ルヘキヤ又ハ別約定ヲ以テスヘキヤノ點ハ在東京我英國公使カ日本大臣及ヒ各國公使ト相照會シタル末其裁決スル所ニ任スベシ

七、英政府ハ日本政府カ豫メ外國ト協議同意シタル約款ニ依リ其全國ヲ開キテ外國人ノ通商貿易竝ニ居住ヲ許シ且ツ内地ニ於テ不動產ヲ所有スルノ權ヲモ與ヘラルヽニ於テハ則チ日本カ關稅獨裁權ノ享有ヲ要求スル事至當ナルベシト認議セリ故ニ英政府ハ若シ他各國モ同意スルニ於

一〇九　明治十七年四月十五日　井上外務卿ヨリ三條太政大臣宛

英政府意見覺書進達ノ件

附屬書　十七年四月十日英國公使提案條約改正ニ關シ英政府ノ見込覺書（第一覺書）

親展

條約重修ニ付英政府意見覺書今般英公使ヨリ差出シ候ニ付

テハ「此條約批准ノ日ヨリ算シ十二ケ年ノ後ニ於テハ結約國ノ一方ヨリ十二ケ月前以テ報知ヲ與ヘナハ該條約ヲ終了セシムル事ヲ得ヘシ」トノ一ケ條ヲ新貿易條約中ニ挿入スル事ヲ肯諾ス而シテ右ハ何時其報知ヲナスヲ論セス其報知ノ日ヨリ算シ十二ケ月ノ後迄ハ該貿易條約ヲ依然施行スヘキ事勿論ナリトス但シ日本ニ於テ右貿易條約ノ終了ヲ告知スル事ヲ得ルニハ先ツ其日迄ニ「或ル豫定ノ年間（假令ハ兩三年）既ニ全國ヲ外人ニ開キタル上ノ事トス而シテ其開國ノ事ヤ締盟各國ノ承認ヲ經タル取極ニ依リ之ヲ行フモノニシテ且該取極ハ右ノ年間實地經驗ノ上發明スルニ從ヒ之ヲシテ百般必要ノ目的ニ適セシムル樣ノ變更改正ヲ加ヘ得ヘキモノナルヲ要ス英政府ニ於テハ此取極方ノ一點ヲ至極重要ノモノト見做ス所ニシテ而シテ日本政府ニ於テモ蓋シ亦右ノ如ク實驗ノ上必要ナリト發見スル變更ヲ右ノ取極中ヘ猶挿入スヘキ猶豫時間之アル樣某年間ヲ定置事ノ適當ナルヲ見認ムルナラント求望ス

ハ、英政府ハ懇親ノ精神ヲ以テ此等ノ讓與ヲ爲スカ故ニ日本政府ニ於テモ蓋シ此精神ヲ感應セラレ其報酬トシテ速於テ尙ホ不タ意見ヲ述ブヘキ時機ニ立至ラスト思考スル場合ナリ尤モ日本政府ハ熟知アル如ク英國政府ハ日本ニ於テ領事裁判法ヲ永存スルノ意ナク隨テ苟モ英國利益ノ正當保護ニ必要ナル年限ノ後迄モ該法ヲ保存セントスル意ハ更ニ之レナキ所ナリ乍去英政府ニ於テ如斯成丈ケ日本ノ意見竝ニ希望ニ應セン事ヲ欲スト雖トモ該議案ノ如キハ極メテ重大ノモノナルカ故右裁判所ニ於テ施行スヘキ新法律幷ニ裁判法ノ全ク整頓シテ且ツ其反譯ノ出來スル迄ハ何分之ヲ討議スルニ緣ナキナリ

十一、然レトモ日本政府ヨリ本件討議ノ爲メ必要ナル右法律等ヲ差出スノ日ニ至ラハ英政府ハ最友愛ナル精神ヲ以テ何時ニモ其協議ニ與カルヘシ

（右原文）

1. Her Majesty's Government are willing to accept the revised Tariff as agreed to at the Preliminary Conference by the Japanese and Foreign Delegates, provided all the other Powers do the same. Her Majesty's Government are also willing to consider any modifications if desired by Japan, or by the other Powers, but in that case they would reserve the right to suggest further modifications if advisable.

2. It is of course understood that previous notice of a reasonable length must be given to the Public before any change of Duties of Rates can come into effect.

3. Her Majesty's Government are prepared to make this concession as regards the raising of the Tariff, on condition that Japan would agree to give to Foreigners such increased facilities for trade and communication with the interior as may relax the restrictions at present imposed on foreign merchants through the limitation of trade to a few open ports only, and thus protect them from local combinations injurious to Foreign interests.

4. Her Majesty's Government are willing to accede to the proposal of Japan that the Tariff question should be settled as soon as possible, without waiting for an agreement upon the other points discussed in the Conference.

5. Her Majesty's Representative has accordingly been authorized to discuss and conclude a commer-

ニ内外人民ノ交通ヲ成ルヘク便利ナラシムル事ニ着手アルヘキ事ト信ス於是政府ノ日本政府ニ望ム所ノモノハ通行免狀ノ權限ヲ一層擴充セラルヽ事且外國船舶ヲシテ目下未タ外國人ニ開カサル諸港ニ往來貿易セシムルヲ許容セラルヽ事ニアリ依テ我英國公使ヘハ他年遂ニ一定ノ取極ニ依リ全國ヲ外人ニ開ク事ト成ル迄ハ右擴充シタル特權（若シ許與セラルヽナラハ）ノ施行ヲ管理スルニ要用ト見做スヘキ臨時ノ取極ヲ議スルノ權ヲ委任シ置ケリ

九、英政府ハ日本ト條約中最惠國待遇ニ關スル第二十三條ノ精神ヲ聊モ變更スル事ニ同意スル事ヲ欲セス且之ヲ保存スル事ニ付日本政府於テ毫モ差支アル間敷ト希望ス

十、專賣免許、商標、竝發明ヲ保護スル問題ニ關シ英政府ノ意見ハ若シ貿易條約中ニ於テ右等ノ箇條ヲ加設セントセハ之カ爲メ該條約締結ノ期非常ニ遷延スベシト思惟スルナリ併シ我英國公使ヘハ適當ノ時機生スルニ從ヒ何時ニモ右ノ問題ヲ討議シ得ヘキ權ヲ委任シ置ケリ

十一、東京豫議會ニ於テ日本國委員ヨリ提出シタル「外國人ヲ裁判官ニ任シテ組織スル裁判所ヲ置キ以テ外國人ヲ管スル裁判權ヲ施行セシムルノ議案」ニ關シテハ英政府

cial Convention, and has been furnished with the necessary instructions and Full Powers to this effect.

6. Her Majesty's Government consider the questions of Customs or Trade Regulations, Bonded Warehouses and Drawbacks, and Harhour and Light Dues, should, if possible, be dealt with at the same time as the Tariff; but they leave it to the discretion of Her Mojesty's Representative at Tokio, after communication with the Japanese Ministers and the Foreign Representatives, to decide whether these matters should form part of the Commercial Convention or be treated separately.

7. Her Majesty's Government recognize that the throwing open of the whole Empire of Japan to Foreign Commerce, Trade and Residence, with the right of holding real property there, on terms previously agreed upon, with the Foreign Powers, would justify Japan in claiming to be admitted to the enjoyment of Tariff autonomy, and they are therefore prepared, if other Powers also consent, to insert a clause in the New Commercial Convention, stipulating that after a term of years, (say 12), from the date of Ratification, either of the contracting Parties should be free to give twelve months notice of termination, it being understood that in any case the Commercial Convention should continue in force until twelve months after notice should have been given, whatever may be the date of such notice; provided, however, that, before Japan can give notice of termination of this Commercial Convention, she shall already have thrown open for a period to be agreed upon beforehand, (say, 2 or 3 years), the whole Empire to Foreigners, under arrangements which the Powers shall have accepted, and which shall have been subjected to such modifications and revision, with a view to their answering all required purposes, as a practical experience of their working for the above period may suggest. Her Majesty's Government are inclined to lay great stress on this point and they hope that the Government of Japan will also see the advisability of some period being fixed during which there will still be time to insert in these arrangements such changes as practical experience will have shown to be desirable.

8. Her Majesty's Government trust that the Japanese Government will appreciate the friendly spirit which dictates these concessions, and that they will, in return, at once do what is possible to facilitate greater intercourse between Japanese and Foreigners. With this view Her Majesty's Government ask the Japanese Government to give greater extension to the Passport System, and to allow foreign vessels to visit and trade at ports not at present open to Foreigners. Her Majesty's Minister has authority to consider the temporary arrangements which might be deemed advisable for controlling the exercise of these extended privileges when granted, pending the conclusion of the difinitive arrangements under which eventually the whole Empire will be thrown open to Foreigners.

9. Her Majesty's Government are not disposed to agree to any modification in the spirit of the XXIIIrd Article of their Treaty with Japan relating to most favoured nation treatment, and they hope that the Japanese Government will see no objection to maintaining it.

10. As regards the protection to be given to Patents, Trademarks and inventions, it appears to Her Majesty's Government that the conclusion of a commercial Convention would be unduly delayed if it was made to include provisions for this purpose; but Her Majesty's Minister has authority to discuss these subjects whenever a suitable opportunity arises.

11. Her Majesty's Government are inclined to think the moment has not yet arrived for expressing any opinion on the propasals made by the Delegates of Japan, at the Tokio Preliminary Conference, for the establishment of Courts with Foreign judges having jurisdiction over Foreigners. The Japanese Government are well aware that Great Britain has no desire to perpetuate Consular jurisdication in Japan, nor to continue it any longer than is necessary for the legitimate protection of British interests; but, with every readiness to meet the views and wishes of Japan, it is not possible

for Her Majesty's Government to discuss proposals of so much importance until the new Laws and Rules of Procedure under which these Courts are to act have been completed and translated.

12. Her Majesty's Government however, will be fully prepared to consider the matter in the most friendly spirit as soon as Japan is in a position to furnish this necessary basis for discussion.

一一〇 明治十七年五月七日 井上外務卿ヨリ 三條太政大臣宛

英政府ノ意見覺書進達ノ件

附屬書 條約改正ニ關シ英政府ノ見込覺書（第二覺書）

親展三十九號

本邦在留英國公使プランケツト氏ヨリ更ニ條約改正ニ關スル英政府之見込覺書差出候間右譯文一通進達候也

附屬書

明治十七年五月英國公使提案

條約改正ニ關シ英政府ノ見込覺書（第二覺書）

一、英國政府ハ嘗ニ日本委員竝ニ外國委員カ（以下第一覺書ト同文言）

二、凡ソ關稅又ハ其割合ヲ變改スルトキハ（同上）

三、英政府カ關稅增加ノ廉ニ於テ右ノ讓與ヲ爲スハ（同上）

四、英政府ハ「豫議會ニ於テ討議シタル他ノ件目（同上）

五、故ニ我英國公使ヘハ（同上）

六、英政府ハ稅關規則即チ（同上）

七、英政府ハ日本政府カ豫メ外國ト協議同意シタル約款ニ依リ其全國ヲ開キテ外國人ノ通商貿易竝ニ居住ヲ許シ且ツ同地ニ於テ不動產ヲ所有スルノ權ヲモ與ヘラルヽニ於テハ卽チ日本カ關稅獨裁件（ママ）ノ享有ヲ要求スル事至當ナルヘシト認識セリ故ニ英政府ハ若シ他各國モ同意スルニ於テハ「此條約批准ノ日ヨリ算シ十二ケ年ノ後ニ於テハ結約國ノ一方ヨリ十二ケ月前以テ報知ヲ與ヘナハ該條約ヲ終了セシムル事ヲ得ヘシ」トノ一ケ條ヲ新貿易條約中ニ挿入スル事ヲ肯諾ス而シテ右ハ何時其報知ヲナスヲ論セス其報知ノ日ヨリ算シ十二ケ月ノ後迄ハ該貿易條約ヲ依然施行スヘキ事勿論ナリトス但シ日本政府於テ右貿易條約ノ終了ヲ告知スル事ヲ得ルニハ先ツ其日迄ニ「英國人民ニ對スル裁判權ニ關シ」英

日兩國間ノ承認シタル取極ニ依リテ旣ニ日本全國ヲ外人ニ開キタル上ノ事トス

英政府ハ敢テ其領事裁判權ヲ日本ニ永存スルノ意ナク又英國人民ノ利益ノ正當保護ニ必要ナル年限後マデモ該裁判權ヲ保存セントスルノ意更ニ之レナキナリ

依テハ日本政府ハ假令ヒ貿易條約ノ最短ナル期限ヲ十二ケ年ト取極ムルニモセヨ之カ爲メ其都合次第何時ニモ「在日本領事裁判權ヲ終ニ廢棄スル事ニ關スル問題」ニ付英政府ニ向ケ談判ヲ請求スル事ハ決シテ妨ケナカルヘキ事勿論ナリトス乍併英政府ハ日本於テ民法、商法竝訴訟法ノ完備シ且其繙譯（ママ）出來ノ日迄ハ右談判ノ基礎タルヘキモノ果シテ存スルヤヲ疑フナリ而シテ外國人保護ノ爲メ示セル保證如何ガ果シテ十分ニシテ遂ニ「英國人民ヲ日本裁判權ニ服從セシムル事」ニ同意スヘキ時到レルヤ否ヲ判斷スル權ハ英政府親カラ之ヲ有セサル可ラス

八、英政府ハ懇親ノ精神ヲ以テ（以下「通行免狀ノ權限ヲ一層擴充セラルヽ事」マデ第一覺書ト同文書）外國人竝ニ其船舶ヲシテ目下未タ外國人ニ開カサル二三港ニ往來貿易スルヲ許容セラルヽ事且日本人民ヲシテ沿海貿易ノ爲メ英國船舶ヲ雇用スルヲ許容セラルヽ事ニアリ依テ我英國公使ヘハ他年遂ニ一定ノ取極ニ依リ全國ヲ外人ニ開ク事ト成ル迄ハ右擴充シタル特權（若シ許容セラルヽナラハ）ノ施行ヲ管理スルニ要用ト見做スヘキ臨時ノ取極ヲ議スルノ權ヲ委任シ置ケリ

九、英政府ハ日本ト條約中最惠國待遇（以下第一覺書ト同文言）

十、專賣免許商標並發明（同上）權ヲ委任シ置ケリ

註 「英政府ノ第二覺書」ト呼ハレタルハ本覺書ナリ 英公使ヨリ外務卿ニ本覺書ヲ手交シタルハ明確ナル日附ナシ尙前揭第一覺書參照

（右原文）

1. Her Majesty's Government are willing.....

.....

if advisable.

2. It is of course understood.....

.....

into effect.

3. Her Majesty's Government are prepared.....

.....
.....
.....Foreign interests.

4. Her Majesty's Government are willing.....
.....
the conference.

5. Her Majesty's Representative .....
.....this effect.

6. Her Majesty's Government consider .....
.....
.....
.....treated separately.

7. Her Majesty's Government recognize that the throwing open of the whole Empire of Japan to Foreign Commerce, Trade and Residence with the right of holding real property there, on terms previously agreed upon with the Foreign Powers would justify Japan in claiming to be admitted to the enjoyment of Tariff Autonomy, and they are therefore prepared, if other Powers also consent, to insert a clause in the new Commercial Convention stipulating that after a term of 12 years from the date of ratification either of the contracting parties should be free to give twelve months notice of termination, it being understood that in any case the Commercial Convention should continue in force until twelve months after notice should have been given, whatever may be the date of such notice; provided, however, that before Japan can give notice of termination of this Commercial Convention, she shall already have thrown open the whole Empire to Foreigners under such arrangements with regard to jurisdiction over British subjects as shall have been agreed upon between Great Britain and Japan.

Great Britain has no desire to perpetuate her Consular Jurisdiction in Japan, nor to continue it any longer than she may deem necessary for the legitimate protection of the interests of British subjects in Japan.

It is therefore well understood that Japan, by agreeing to fix the minimum duration of the Commercial Convention at 12 years, is in no way precluded from inviting Her Majesty's Government at any time to discuss the questions connected with the eventual abolition of Foreign Consular jurisdiction in Japan.

Her Majesty's Government, however, doubt whether any practical basis for discussion can be found until the new Civil Code, the Commercial Code and the Rules of Judicial Procedure shall have been completed and translated, and Her Majesty's Government must reserve to themselves the right of judging as to the moment when the guarantees furnished for the protection of Foreigners are such as will justify them in eventually consenting to the submission of British subjects to the Territorial Jurisdiction of Japan.

8. Her Majesty's Government trust.....
.....
.....
to allow foreign subjects and foreign vessels to visit and trade at some of the ports not yet opened to foreigners, and to allow Japanese subjects to charter British vessels in the coasting Trade. Her Majesty's Minister has authority to consider the temporary arrangements which might be deemed advisable for controlling the exercise of these extended privileges when granted, pending the conclusion of the difinitive arrangements under which eventually the whole Empire would be thrown open to Foreigners.

9. Her Majesty's Government are not disposed.....
.....
..... maintaining it,

10. As regards the protection .....
.....
.....
..... opportunity arises.

註 省略セル部分ハ四月十日ノ第一電書ト同文ニテアリ

一一一 明治十七年五月六日 米井上外務卿ヨリ

條約改正會議參加ニ付照會ノ件

Confidential

Foreign Office, Tokio.
The 6th, 5th Month,

17th Year, Meiji.

Sir:

Referring to our recent interview upon the subject of Treaty Revision, I have now the honour to inform Your Excellency that H. I. M.'s Government desire to enter, at the earliest practicable moment, upon such negotiations as are essential to the conclusion of Commercial Conventions with the Treaty Powers, as well as to a definite understanding with reference to other points embraced in the proposed revision. H. I. M.'s Government would, therefore, be pleased to learn that Your Excellency has been empowered to participate in the negotiations in question, and to conclude a Commercial Convention, as well as to arrive at such other understanding in the matter of Treaty Revision as may be agreed upon. As I understand that Your Excellency does not consider yourself authorized, without further instructions from your Government, to participate in the Final Conference which H. I. M.'s Government wish to assemble at an early date, I venture to request that Your Excellency will

telegraph to Your Government to obtain such authority for the purpose indicated as may be requisite.

It is hardly necessary for me to assure Your Excellency that H. I. M.'s Government will esteem your compliance with this request, and the prompt action of Government of the United States thereon, as another evidence of that cordial and friendly spirit which Your Excellency and the Government you so honourably represent have invariably manifested toward the Government of Japan.

I avail myself etc. etc.

His Excellency

John A. Bingham

&c. &c. &c.

一一一　明治十七年五月十二日　米公使ヨリ外務卿宛

條約改正會議ニ參加ノ旨回答ノ件

No. 2363

United States Legation,

Tokio, Japan.

12th May, 1884.

His Excellency,

Inouye Kaoru,

H. I. J. M.'s Minister for Foreign Affairs.

Sir:

It gives me much pleasure in reply to your note of the 6th instant to inform you that I am in receipt of a telegram from my Government authorrizing me to participate in the final Conference fo Treaty Revision, which you advice me will soon be commenced in this Capital by His Majesty's Government, and that I will presently be further instructed in regard there to by mail.

I pray, Your Excellency, to accept the renewed assurances of my highest consideration.

John A. Bingham

一一二　明治十七年五月十九日　非内上藤外務卿代理公使ヨリ

條約改正會議ニ米國公使參加ノ件

附圖書　十七年五月七日到内藤代理公使宛外務卿往電

機密第十號

本月七日別紙之通暗號電信致拜受候ニ付早速國務卿ニ面會イタシ可成速ニ在米公使ヲ條約改正會議ニ與カル可キ全權ヲ附與有之度旨内話致置候處去ル十日同卿ヨリ同公使ヲ該會ニ加列可致旨電達相成候趣國務大輔ヨリ私書ヲ以通知有之候尤右ハ疾ク同公使ヨリ閣下ヘ公然通知有之候儀ト存候得共爲念此段得貴意候也

十七年五月十九日

在米國
臨時代理公使　内藤類次郎

外務卿　井上　馨殿

附圖書

十七年五月七日到内藤代理公使宛外務卿往電
（條約改正會議ニ米國公使參加ノ件）

The American Minister has telegraphed for instructions to participate in Conference. Use every effort to have full power sent as soon as possible and telegraphic instructions at once.

Received May 7th 1884.

一一四 明治十七年五月三十八日 獨逸公使ヨリ井上外務卿宛

全權委員通知ノ件

六 號

拙者義以後帝國第二ノ委員タル總領事ツアツペ氏ト共ニ條約改正會議ニ加ハルヘキ旨帝國政府ヨリ命セラレ候ニ付此段及御通知候敬具

ゲ、ドエーンホフ

千八百八十四年五月廿八日於東京

外務卿 井上 馨閣下

（右原文）

No. 6

Tokio, den 28. Mai 1884

Euere Exzellenz habe ich die Ehre ganz ergebenst zu benachrichtigen, dass ich von der kaiserlichen Regierung angewiesen worden bin, gemeinsam mit Herrn General-Konsul Zappe, als zweitem Delegirten des Reichs, an den weiteren Konferenz-Verhandlungen Theil zu nehmen.

Genehmigen Euere Excellenz die erneute Versicherung meiner ausgezeichnetsten Hochachtung.

G. Doehnhoff

An

Minister des Auswärtigen

Herrn Inouye Kaoru

Excellenz

一一五 明治十七年五月三十一日 井上外務卿ヨリ獨逸公使宛

全權委員通知受領ノ件

獨逸公使宛 井上外務卿

本月廿八日附貴簡致披見候陳ハ閣下今般貴政府第二委員總領事ツアツペ氏ト共ニ以後條約改正會議ニ御參列可相成貴政府ヨリ御訓令ヲ領セラレ候旨御報知之趣致承知候此段回答得貴意候敬具

一一六 明治十七年七月十二日 井上外務卿ヨリ在獨佛露各帝國公使宛

條約改正ニ關スル英國政府ノ覺書及之ニ對スル帝國政府ノ覺書送附ノ件

條約改正ノ件ニ付英公使プランケツト氏本國政府ヨリ奉スル訓令ニ基キ別紙甲號ノ覺書（公然差出候前三四回内密談話ニ及ヒ改正ヲ加ヘタル部分不掛候）ヲ本官ニ提出ニ付右覺書ニ對シ別紙乙號ノ通我政府ノ意見ヲ記載セル覺書不日英公使ヨ差出シ尋テ其他各公使ヘモ可相示所存ニ有之候右ハ我方極度ノ讓與ヲ含有致居候モノニテ所謂 Ultimatum ト認メテ可然モノニ有之候間貴官ニ於テモ暗々中ニ此主意ヲ駐留國政府其筋ヘ貫徹致候樣御盡力相成度候何レ伯林公使館書記官小松原英太郎提スヘク候間委曲同氏ヨリ御聞取相成度候尚右覺書ヲ各公使ヘ差出シタル後ノ結果如何ハ追々御報道可及候也

註 1別紙甲號英公使ノ覺書ハ一一〇附屬書前出

2別紙乙號我覺書一一九附屬書後出

一一七 明治十七年七月十七日 井上外務卿提出

條約改正ニ關スル建議案

（朱書）「明治十七年七月 本書ヲ筆撮板ニテ數通ヲ印刷シ外務卿自カラ内閣ニ提出セラレタリ 德則」

「外務卿建議」

方今我邦外交上至緊至要トスル所ノモノハ我邦ト締盟各國トノ間ニ訂結セル條約ヲ改正スルニ在リ現行條約ハ實ニ我邦ノ獨立ヲ損スルモノナリ何ヲ以テ獨立ヲ損スト云フ曰ク現行條約ノ中ニ左ノ條款アリ

日本ニ對シテ法ヲ犯ス其外國人ハ其領事裁判所ニ於テ吟味ノ上其國ノ法律ヲ以テ處罰スヘシ

是所謂治外法權ナルモノヽ據リテ存スルノ條款ニシテ我國土ニ居住スル外國人犯罪ノ所爲アルトキハ卽チ外國領事裁判所ノ管轄ニ屬シ各自其本國ノ法律ニ依テ處罰セラレ我國ハ外國人ニ對シテ裁判權ヲ有セス又立法權ヲモ實際上或部分カ制限セラレタリ何ントナレハ外國人ハ各自其本國ノ法律ニ依テ處罰セラルヽ者ナレハ我ニ於テ法ヲ立ツルモ若外國公使ノ承認ヲ經テ其國ノ法律トナシ以テ其國人ニ布告セラルヽニ非ラサレハ法律ノ効力ヲ有セサレハナリ我既ニ立法及裁判ノ權ヲ外國人ニ及ホスヲ得ス是ヲ以テ夫ノ國家ノ秩序安寧ヲ保全スルニ最緊要ナル行政警察等ノ諸規則スラ眼前ニ之ヲ犯スモノアルモ相當ノ處分ヲ施スヲ得サルナリ是卽チ獨立ヲ損スルモノニ非スシテ何ソヤ凡ソ自主獨立ノ

國ハ其國土内ニ於テ立法司法行政ノ全權ヲ有シ毫モ他國ノ干渉ヲ容（サ）サルナリ是故ニ我帝國ノ面目ヲ全セント欲セハ必ス獨立ヲ回復シ立法司法行政ノ全權ヲ我ニ握有セサル可カラス蓋シ我國ノ獨立ヲ回復スルノ方法唯二アルノミ一ハ兵力ニ依リ一ハ平和ノ談判ニ依リ治外法權ヲ廢撤スル即是ナリ然トモ歐洲諸強國ヲ敵ト爲シ兵力ニ依リ我國ノ獨立ヲ回復セントスルノ不可行ノ事タルハ論ヲ俟タス然レハ則平和ノ談判ニ依リ治外法權ヲ廢撤スルヲ圖ルノ外他ニ我國ノ獨立ヲ回復スルノ方法無キナリ

抑條約改正ノ事タル明治四年岩倉大使歐米巡回ノ時ヲ以テ之ヲ各國政府ニ談判アリシト雖トモ當時彼我ノ意見妥協ニ至ラス遂ニ我東京ニ於テ之カ議ヲ開クニ決シタリ然ルニ爾後我國内多事ニ而政府事々此ニ從フニ暇アラス爲メニ荏苒數年ヲ經過シ明治十一年二月ニ至リ海關稅則ヲ主トシテ更ニ改正ノ議ヲ各國政府ニ提出シタレトモ是亦十分ノ好結果ヲ得ル能ハス明治十二年九月外務卿ノ更迭ニ際シ更ニ閣議ヲ定メ海關稅則改正ニ加フルニ漸次内地ヲ外人ノ爲メニ開キ以テ治外法權ヲ漸廢スルヲ以テ條約改正ニ付將來ノ目的トナスニ決シ各國政府ニ向ヒテ數回ノ論辨ヲ費シ終ニ我東京ニ於テ豫議會ヲ開キテ各國各個ニ條約ヲ改定スルニ先チ之カ改正ノ基礎ヲ論定スヘキニ論議調定シ明治十五年一月ヲ以テ該會ヲ開ニ至レリ而シテ我政府決定ノ旨趣ニ基キ爾來數回ノ談判論辨ヲ累ネ漸ク各政府其使臣ニ付スルニ訓令ヲ以テシ不遠シテ公然本議ヲ提論スルニ至レリ今ヤ本官將ニ各國政府ニ向テ我政府ヲ代表シ其責任ヲ盡サントスルニ方リ先ツ閣議ニ向テ切ニ請フ所ノモノアリ即チ我政府外交政略ノ義ヲ確然一定セラレ内ハ以テ官民ノ方向ヲ一ニシ外ハ以テ各國ノ信憑ヲ得ル是ナリ然ラサレハ決シテ我目的ヲ達スル能ハサルノミナラス遂ニ我ヨリ外交ノ和親ヲ破却シ名狀ス可カラサルノ患害ニ陷ルコト無キヲ保タサルナリ

熟ラ々々我邦輓近社會ノ情態ヲ觀察スルニ各地方ニ政黨ヲ團結シ官民漸ク其方向ヲ異ニスルモノアリト雖トモ概シテ之ヲ論スレハ單ニ内治ノ政策ニ止マリ未タ外交上ニ密接ノ關係ヲ有セサルモノヽ如シ然ルニ此ニ深ク慮ルヘキモノハ夫ノ政黨外一種ノ社會ヲ團結シ杞憂會護國會或ハ明教會ト唱ヘ宗教若クハ道學ヲ主張シ外教ヲ痛排激斥スルノ徒アリ今此等黨派ノ實況ヲ諦察スルニ各地ニ蔓延シ其徒亡慮十數萬ニ降ラス其勢漸ク將ニ制ス可カラサルニ至ラントスルモノアリ抑該會タルヤ名ハ則外教ヲ排斥スルニ在リト雖トモ實ハ則攘夷ニ外ナラス論スル所ハ教義ニ在リト雖トモ忌ム所ハ其人ニ及ハサルヲ得ス唱フル所ハ道德ニ在リト雖トモ行フ所ハ文化ヲ郤退セシムルニ外ナラス凡ソ其心志ニ存スル所ノモノ必ス外形ニ顯ハル、ハ是人情免ル可カラサルノ通理ナリ故ニ今政府彼徒ノ所爲ニ委シ其志ス所ヲ達セシメンカ鎖國攘夷ノ政略ニ出テサル可カラス開國ノ主義ヲ採リ獨立國ノ面目ヲ完全ナラシメント欲スルカ宜シク鎖國攘夷ノ感情ヲ一變シ苟クモ之カ誘原ヲ爲スヘキモノハ一切杜絶スル事ヲ勉メサル可カラス此二者決シテ並立ス可カラサルモノナリ故ニ我政府ノ其政略ヲ一定シ二者ヲ選擇セラル、ハ實ニ一日モ忽ニス可カラサルノ急ナリトス請フ先ツ從來我政府外交談判ノ要領ヲ叙列シ後來執ラサル可カラサルノ主義ヲ論スヘシ

抑我政府カ條約改正ニ關シ執ル所ノ主義岩倉大使歐米巡回以來多少ノ沿革アリト雖トモ一昨十五年内閣ノ議決ヲ經テ聖上ノ御宸裁ニ依リ決定セシ要旨ハ即チ左ノ如シ

第一　外國人若シ全ク我法律ニ服從スレハ外國人ノ爲メニ我全國ヲ開ク事

第二　我行政諸規則ニ服從シ警察規則及ヒ輕罪ニ係ル罪犯幷ニ民法上ニ係ル案件ニ付都ヘテ我裁判ニ服從スルニ於テハ内地通商ヲ許スヘキ事

又各國政府カ爾來殆ント二ケ年間我政府ト數回ノ談判ヲ經テ今既ニ其使臣ニ訓令ヲ付與シ將サニ提議セントスル要領ハ即左ノ如シ

一　豫議會ニ於テ日本委員幷ニ外國委員カ同意シタル改正稅目ハ他ノ各國ニ於テモ承諾スルナラハ其儘之ヲ承諾スヘシ尤右關稅增加ノ事ヲ承諾スル事ハ左ノ約束ニ依ルモノトス

日本ニ於テ外國人ニ貿易上幷ニ内地交通上ノ便利ヲ增加スル事ニ同意シ是迄外國商人カ唯四五ノ開港場ニ其貿易ヲ限ラレタル檢束ヲ定メラレ今日兩國貿易ノ妨害タル地方聯合ノ弊ヲ防キ以テ外人ヲ保護セラル、事

一　日本政府カ豫メ外國ト協議同意シタル約款ニ依リ其全國ヲ開キテ外國人ノ通商貿易幷ニ居住ヲ許シ且内地ニ於テ不動產ヲ所有スルノ權ヲモ外國人ニ與ヘラル、ニ於テハ「日本カ關稅獨裁權ノ享有ヲ要求スル事至當ナルヘシ」ト認識ス故ニ若シ他各國モ同意スルニ於テハ此條約

批准ノ日ヨリ算シ一定ノ期限（假ヘハ十二年）ノ後ニ於テハ結約國ノ一方ヨリ十二ケ月前ニ報知ヲ與ヘナハ該條約ヲ終了セシムル事ヲ得ヘシ」トノ一ケ條ヲ新貿易條約中ニ挿入スル事ヲ肯諾ス而シテ右ハ何時其報知ヲ爲スヲ論セス其報知ノ日ヨリ算シ十二ケ月ノ後迄ハ該貿易條約ヲ依然施行スヘキ事勿論ナリトス但シ日本ニ於テ右貿易條約ノ終了ヲ告知スル事ヲ得ルニハ先ツ其日迄ニ外國人民ニ對スル裁判權ニ關シ彼我兩國間ノ承諾シタル取極メニ依リテ既ニ日本全國ヲ外國人ニ開キタル上ノ事トス

一　外國政府ハ敢テ其領事裁判權ヲ日本ニ永久存スルノ意ナク又外國人民ノ利益ノ正當保護ニ必要ナル年限後マテモ該裁判權ヲ保存セントスルノ意更ニ之レ無キナリ依テハ日本政府ハ假令貿易條約ノ最短ナル期限ヲ十二ケ年ト聖極ムルニモセヨ之カ爲メニ其都合次第何時ニモ「在日本領事裁判權ヲ終ニ廢棄スル事ニ關スル問題」ニ付外國政府ニ向テ談判ヲ請求スル事ハ決シテ妨ナカルヘシ併ナカラ日本ニ於テ民法商法幷ニ訴訟法ノ完備シ且其翻譯出來ノ日迄ハ右談判ノ基礎タルヘキモノ果シテ存スルヤ否ヤヲ疑フナリ而シテ外國人保護ノ爲メニ示セル保證果シテ十分ニシテ遂ニ外國人ヲ日本裁判權ニ服從セシムル事ニ同意スヘキ時到レリヤ否ヲ判斷スルノ權ハ英國政府ニ之ヲ有セサル可カラス

一　畏親ノ精神ヲ以テ日本ノ爲メニ右等ノ讓與ヲ爲スカ故ニ日本政府ニ於テモ亦此精神ニ感應セラレ其報酬トシテ速ニ內外人民ノ交際ヲ成ルヘク便利ナラシムル事ニ着手アルヘキ事ト信ス是ニ依リ日本政府ニ望ム所ハ內地通行免狀ノ權限ヲ一層擴充セラルヽ事且外國人幷ニ其船舶ヲシテ目今未タ外國ノ爲メニ開カレサル諸港ニ往來貿易スルヲ許容セラルヽ事且日本人民ヲシテ沿海貿易ノ爲メ外國船舶ヲ雇用スルヲ許容セラルヽ事ニ在リ

我政府カ今日迄所執ノ主義ト外國政府ノ將サニ提出スヘキ論綱ハ概ネ右ノ如ク彼我ノ間多少ノ差異アリト雖トモ之ヲ約言スレハ我ハ則開國ノ主義ヲ言明シ彼ハ則治外法權ヲ永存スルノ意ナキヲ豫言スルモノナリ蓋シ外國政府カ此豫言ヲ爲スノ意ハ我邦ノ諸法律彼ノ國ト大差ナキニ至ラハ其法權モ亦廢撤スヘシト云フニ在リ其異同ヲ判定スル實ニ容易ナラスト雖トモ之ヲ從來外國政府カ治外法權ヲ視テ以テ金城湯池ト爲シ決シテ破毀ス可カラサルモノト固執セシ主義ニ比スレハ既ニ已ニ其幾歩ヲ我ニ讓リ我カ今日迄所執ノ政策ヲ隱然協賛セシモノト云フヘキナリ

抑各國政府カ斯ノ如キ感情ヲ起シ來リシハ但タニ曩日豫議會ニ於テ開國ノ主義ヲ提出シタルニ職由スルニ非ラス其誘原ヲ究ムレハ蓋シ維新以來意ヲ外交ニ用ユルト其方向ヲ改進ニ取ルトニ由ラサルハ無シ今又謹テ維新以來政略ニ關スル詔勅ノ主要ヲ按スルニ維新ノ初メ御誓文ヲ以テ廣ク會議ヲ起シ萬機公論ニ決スヘキ事舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クヘキ事智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘキ事等ヲ神明ニ誓ワセラレ以テ我國ノ進路ヲ定メ玉ヒ明治八年ニ至リ元老大審ノ二院及ヒ地方官會議ヲ開設セラル其詔ニ曰ク

朕卽位ノ初首トシテ群臣ヲ會シ五事ヲ以テ神明ニ誓ヒ國是ヲ定メ萬民保全ノ道ヲ求ム幸ニ祖宗ノ靈ト群臣ノ力トニ依リ以テ今日ノ少康ヲ得タリ顧ニ中興日淺ク內地ノ事將サニ振起スヘキモノ少トセス

朕今誓文ノ意ヲ擴充シ爰ニ元老院ヲ設ケ以テ立法ノ源ヲ擴メ大審院ヲ置キ以テ審判ノ權ヲ鞏クシ又地方官ヲ召集シ以テ民情ヲ通シ公益ヲ圖リ漸次ニ國家立憲ノ政體ヲ立テ汝衆庶ト共ニ其慶ニ賴ント欲ス汝衆庶或ハ舊ニ泥ミ故ニ慣ルヽ事莫ク或ハ進ムニ輕ク爲スニ急ナル事莫ク其能ク朕カ旨ヲ體シテ翼賛スル所アレ

其地方官會議院憲法頒布ノ詔ニ曰ク

朕踐祚ノ初神明ニ誓ヒシ旨意ニ基キ漸次ニ之ヲ擴充シ全國人民ノ代議人ヲ召集シ公議輿論ヲ以テ律法ヲ定メ上下協和民情暢達ノ路ヲ開キ全國人民ヲシテ各其業ニ安ンシ以テ國家ノ重ヲ擔任スヘキノ義務アルヲ知ラン事ヲ期望ス故ニ先ツ地方長官ヲ召集シ人民ニ代テ協同公議セシム乃チ議院憲法ヲ頒布ス各員其レ之ヲ遵守セヨ

又明治十一年ニ於テ府縣會ヲ開カレ遂ニ十四年十月ニ至リ斷シテ國會ヲ開クノ期ヲ定メサセラレ將ニ明治二十三年ヲ期シテ議員ヲ召シ國會ヲ開キ以テ維新更始ノ御初志ヲ成サセラレントス其詔曰ク

朕祖宗二千五百有餘年ノ鴻緒ヲ嗣キ中古紐ヲ解クノ乾綱ヲ振張シ大政ノ統一ヲ總攬シ又夙ニ立憲ノ政體ヲ建テ後世子孫繼クヘキノ業ヲ爲サンコトヲ期ス舊キニ明治八年ニ元老院ヲ設ケ十一年ニ府縣會ヲ開カシム此皆漸次基ヲ創メ序ニ循テ歩ヲ進ムルノ道ニ由ルニ非サルハ莫シ爾有

衆亦朕カ心ヲ諒トセン

顧ミルニ立國ノ體國各其宜キヲ殊ニス非常ノ事業實ニ輕擧ニ便ナラス我祖我宗照臨シテ上ニ在リ遺烈ヲ揭ケ洪謨ヲ弘メ古今ヲ變通シ斷シテ之ヲ行フ責朕カ身ニ在リ將ニ明治二十三年ヲ期シ議員ヲ召シ國會ヲ開キ以テ朕カ初志ヲ成サントス今在廷臣僚ニ命シ假スニ時日ヲ以テシ經畫ノ責ニ當ラシム其組織權限ニ至リテハ朕親ラ裒ヲ裁シ時ニ及ンテ公布スル所アラントス朕惟フニ人心進ムニ偏シテ時會速ナルヲ競フ浮言煽動シ竟ニ大計ヲ遺ル是宜ク今ニ及テ謨訓ヲ明徵シ以テ朝野臣民ニ公示スヘシ若シ仍ホ故サラニ躁急ヲ爭ヒ事變ヲ煽シ國安ヲ害スル者アラハ處スルニ國典ヲ以テスヘシ特ニ茲ニ言明シ爾有衆ニ諭ス

且又其實際施設スル所ヲ視ルニ軍制教育刑法治罪法其他鐵道電信郵便等ノ設置ニ至ルマテ皆以テ則ヲ泰西各國ニ採ラサルハナキナリ

是ニ由テ之ヲ觀レハ泰西各國カ我邦ニ對シ往々治外法權ヲ廢撤スヘシトノ感情ヲ起セシハ我邦カ維新以來漸次施設スル所ノ實據ヲ觀テ我邦ノ當初抱ク所ノ攘夷鎖國ノ感情ヲ一變シ漸ク其位置ヲ泰西ノ文明ニ進化シテ亞西亞洲中ニ泰西ク國家ノ大計ヲ熟慮セラレ斷然之ヲ禁スルカ然ラサレハ之ヲ許スノ主義ヲ取ルカ何レカ速ニ其主義ヲ確定セラルヘシ

（中略）

切ニ望ムラクハ深ク前述ノ利害ヲ察シ固ク維新ノ聖旨ヲ體シ速ニ本件ヲ處スルノ政略ヲ定メ以テ我國獨立ノ體面ヲ完全ナラシムルノ大計ヲ定メラレン事ヲ此ニ本件ノ議案ヲ附シ內閣ノ審議ヲ請ヒ謹テ

聖上ノ御宸裁ヲ仰キ候也

明治十七年六月

參議兼外務卿　井上馨

議目

第一　政府ハ維新以來御誓文ノ御旨意ヲ奉體シ開進ノ主義ヲ取リ外交政略ヲ確定スル事

第二　政府ハ耶蘇教ヲ禁制セサル趣意ニ依リ外交政略ニ確定スル事

第三　政府ノ外交政略確定セハ一體ノ官吏ヲシテ能ク政府ノ趣意ヲ體認セシメ苟モ之ニ背違ノ行爲ナカラシムル事

第四　一般宗教ノ取扱方法ヲ定ムル事

文明國同胞ノ一國ヲ造出セントスルニ至ルヘシトノ感覺ヲ起サシメルニ外ナラサルナリ事體此ノ如シ我邦獨立ノ法權ヲ完全ナラシメント欲スルカ愈詔令ノ本旨ヲ體認シ其方向ヲ誤ラス舊來ノ陋習ヲ破リ益文物制度ヲ改良シ我邦ノ位置ヲシテ彼ノ泰西各國ト大差ナカラシメ始メテ全然獨立ノ國權ヲ挽回スルヲ期スヘキナリ（中略）

然ルニ前陳ノ如ク教徒ヲ敵視シ暴行ヲ加フルノ事アリ萬一宣教師ヲ傷ケ又ハ暴殺スル等ノ事アラシメハ改正談判ノ目的ハ烏有ニ歸シ法權回復ノ望ハ斷絕スルニ至ルモ知ル可カラス且耶蘇教徒ノ關係ハ頗ル重大ニシテ若シ一度之カ處置ヲ誤マレハ如何ナル國難ヲ來サンモ測ル可カラス殷鑒遠カラス安南ニ在リ安南カ外國ノ爲メニ其國土ヲ削ラレ遂ニ今日亡國ノ辱ヲ招クニ至リタルノ原因ハ畢竟妄ニ耶蘇教ヲ排斥セント欲シ教徒ヲ虐殺シ或ハ王族及ヒ官吏等嗾カニ下民ヲ煽動シテ該宣教師ヲ暴殺セシメ佛人ニ暴行ヲ加ヘタルニ在ルナリ（中略）

本官ハ決シテ耶蘇教ヲ信奉シ該教ノ爲ニ言フニ非サルナリ唯國家ノ爲ニ慮リ且眼前職掌上ニ於テ若シ政府ノ主義確定セサレハ現ニ差閊アルヲ以テ敢テ此議ヲ發スルノミ故ニ宜

註　中略セル箇所ハ主トシテ耶蘇教ニ對スル我政策ノ矛盾ヲ論セルモノナリ

一一八

明治十七年七月二十四日　佛國公使ヨリ井上外務卿宛

佛國政府ノ希望條件覺書送付ノ件

附屬書　七月二十四日附佛國公使ノ覺書

（機密信）

外務卿　井上馨閣下　　佛國公使　シエンウヰツ

以書簡致啓上候陳者先頃閣下ニハ條約改正ノ問題ニ關シ各國ヨリ貴政府ノ提議ニ對シテ差出シタル回答書ノ趣意ヲ參酌セラレ一ノ覺書ヲ御起草中ノ趣御通知相成此法ニ依テ協議一致ノ基ヲ被爲立候御考案ハ誠ニ其當ヲ得タル事ト存候就テハ佛國政府カ現行條約ノ改正ヲ承諾スルニ付希望致候所ノ條件ハ先般來御面談ノ節既ニ開陳致置候ヘ共尚事ノ齟齬ヲ防ク爲メニ茲ニ之ヲ再陳スルハ無益ノ事ニ非サルヘクト存候依テ曾テ御話致候事項ノ要點ヲ摘撮シ數行ノ文字ニ收縮シタル所ノ覺書ヲ封入差進候間御落手有之度此段得貴意候敬具

千八百八十四年七月十四日　於東京

（佛文）

Tokio, 24 Juillet 1884

Confidential

Monsieur le Ministre,

Votre Excellence a bien voulu me faire connaître dernièrement qu'Elle préparait un mémorandum sur la Révision des traités, dans lequel Elle tientrait compte des réponses faites par les Puissances aux propositions du Gouvernment Japonais relatives à cette question. Elle a pensé, avec raison, arriver ainsi à établir les bases d'une entente.

Bien que, dans mes derniers entretiens avec Votre Excellence j'ai eu l'occasion d'exposer et de développer les conditions auxquelles le Gouvernement de la République serait disposé à consentir à la modification des traités actuels, je crois utile, pour éviter tout malentendu, de les Lui rappeler.

J'ai l'honneur, en conséquence, d'adresser, ci-joint, à Notre Excellence une note qui résume en quelques lignes les indications qui je Lui ai données de vive voix.

Veuillez agreer, Monsieur le Ministre, les assurances de ma très haute considération.

Sienkiewicz

Son Excellence
Monsieur Ino-ouyé,
Ministre des Affaires Etrangères

Tokio.

附屬書

十七年七月二十四日附佛國公使ノ覺書譯文

機密

一、共和政府ハ千八百八十二年ノ議會ニ於テ編製セラレタル關稅表ノ重モナル條項ヲ承諾ス

二、共和政府ハ兩國間ノ貿易條約ニハ燈明稅ノ件借庫ノ制ニ關スル件、還稅ノ件、貿易規則ノ件、日本人沿海使用ノ爲メ外國船借入ノ件及凡テ運輸ノ自由ヲ妨クベキモノヲ廢除ノ件等ヲ決定セサル可ラスト思量ス

三、共和政府ハ貿易條約ヲ其批准交換ノ日ヨリ起算シテ十年ニ限ルヲ承諾ス（尤別ニ約束ヲ改ムル事ヲ須ヒスシテ前約ヲ繼續シ得ベキノ款ヲ挿入スベシ）但日本政府ハ外國人ノ爲メニ全國ヲ開キタル後ニ非サレハ右條約ヲ廢止スル事ヲ得サルベシ

四、共和政府ハ貿易條約ノ調印ヲ了リタル上ハ直チニ日本國開通ニ伴フ所ノ司法行政上ノ問題ヲ審査スル事ヲ始ムベシ

五、此等ノ讓與ハ既ニ日本政府ニ於テ約束ナシ且利益アリト認メタル絹糸輸出稅（織物、生糸、屑糸、繭）廢止ノ事ニ從屬スルモノトス

六、最惠國ノ條款ニ付テハ佛國政府ハ現時ノ書振ヲ維持スル方可然ト思量ス

七、佛國政府ハ日本政府ノ希望ニ從ヒ難破船ノ事ニ關シ既ニ日本政府ト大不列顛及合衆國ト締結シアル特殊ノ約束ニ基キ同般ノ條項ヲ條約中ニ記入スル事ヲ承諾ス

八、佛國政府ハ外國人居留地ノ制度ニ改良ヲ加ヘラレン事ヲ希望ス

九、佛國政府ハ製造標、商標、工業上ノ計畫及雛形、商名其他意匠若クハ美術ヨリ成立タル物品ヲ保護センカ爲メニ可成的速ニ特約ヲ制定シ此等ノ物品ヲ保護スルノ確證ヲ設ケラレン事ヲ切望ス

（佛文）

Confidential

1. Le Gouvernement de la République accepte, dans les dispositions essentielles, le tarif douanier élaboré par la Conférence de 1882.

2. Il estime que l'arrangement commercial à intervenir devra statuer sur les questions de droits de phare, le régime des entrepôts et les drawbacks, les réglements commerciaux, l'affrétement par les Japonais de navires étrangers pour le service côtier, la suppression des entraves apportées à la liberté des transactions.

3. Il consent à ce qui la durée de l'arrangement commercial soit limitée à dix ans (avec clause de tacite reconduction) à partir du jour de l'échange des ratifications avec la réserve que le Gouvernement Japonais ne pourra exercer le droit de dénonciations que lorsqu'il aura déjà ouvert le pays aux étrangers.

4. Il est d'avis qu'immédiatement après la signature de l'arrangement commercial on pourrait aborder l'examen des questions d'ordre judiciaire et administratif qui se rattachent à l'ouverture du

Japon.

5. Ces diverses concessions sont subordonnées à la suppressions déjà promise et reconnue avantageuse par le Gouvernement Japonais, des droits de sortie sur les soies (c'est-à-dire sur les étoffes, soies brutes, déchets, cocons.)

6. En ce qui touche la clause de la nation la plus favorisé, le Gouvernement Français juge qu'il est préférable de maintenir la rédaction actuelle.

7. Il consent, conformément au voeu exprimé par le Gouvernement Japonais, à l'insertion d'une disposition concernant les naufrages et qui serait basée sur les conventions particulières qui ont déjà été conclues par le Japon avec la Grande Bretagne et les Etats-Unis sur ce sujet.

8. Il demande que les améliorations soient introduites dans l'administration des concessions étrangères.

9. Il insiste pour qu'il soit stipulé, dans un arrangement spécial à conclure le plus promptement possible, des garanties pour la protection de la propriété des marques de fabrique et de commerce,

今回我日本ト大不列顛國（他ノ公使ヘハ其國名）トノ間通商條約改正會議ノ基礎トシテ採用スヘキモノトセラレン事ヲ致希望候而シテ此覺書ハ固ヨリ兩國ノ好意ニ基キ候モノナレハ閣下ニ於テモ亦其主旨ヲ御賛成アルヘキ事ト拙者ハ確信致シ候間閣下ニ於テ速ニ本條約締結ノ目的ヲ以テ之カ細目ヲ御協議アラン事ヲ致希望候此段得貴意候敬具

明治十七年八月四日

井上馨

大不列顛國特命全權公使

ゼ、ヲノレーブル、エフ、アール、ブランケツト閣下

本信ハ他各國公使ヘモ送付セリ

附屬書

明治十七年八月四日各國公使ヘノ覺書

英政府覺書ニ對スル我意見書

（一）日本政府ハ條約改正ニ關シ英國政府ノ意見ヲ載セタル覺書ヲ熟考シ而シテ該覺書中ノ諸條項ニ對シ今左ニ我意見ヲ開示セント欲ス

（二）日本政府ハ豫議會ニ於テ同意ヲ得タル改正稅目ハ更ニ討議修正ヲ加ユル事ナク其儘之ヲ採用セラレン事ヲ

des dessins et modèles industriels, des noms commerciaux, des oeuvres d'esprit et d'art.

一一九　明治十七年八月四日　井上外務卿ヨリ英國公使外各國公使宛

條約改正ニ關スル覺書送付ノ件

附屬書　英政府覺書ニ對スル我意見書

別　錄　條約改正ニ關シ英政府ヘ達シタル我覺書ニ對スル寺島宗則提出ノ意見書

以書翰致啓上候陳ハ今般我日本國及ヒ西洋各國トノ條約改正ノ件ニ付我日本帝國政府ノ意見ヲ表シタル覺書ヲ閣下ニ致御送付候

閣下御覽ノ通此覺書ハ外國公使ノ一人ニ宛タル通知書ノ文體ニ有之候其故ハ曩ニ千八百八十二年ノ豫會議ノ結果トシテ去五月中閣下ヨリ（他ノ公使ヘハ英公使ヨリ）本件ニ付貴政府ノ意見書ヲ御送付相成候處我日本帝國政府ニ於テハ其回答ヲ爲スニ臨ミ寧ロ直チニ一般ノ覺書トシテ諸外國公使ニ示シ得ヘキ意見書ヲ起草致シ候事ヲ良方（カ）ト相考候故ニ有之候

此覺書ヲ閣下ノ御考案ニ供スルニ當リ拙者ハ閣下ニ於テ之ヲ望ム此稅目ハ各國ニ取リ自然ニ不同アル幾多ノ利益ヲ參酌シ互ニ相讓リ堪忍勉強ノ力ヲ以テ漸ク和合ヲ得タル者ナレハ若シ今其一部ヲ變更スルニ於テハ全體ノ再議ヲ要スヘク又從テ貴重ノ時日ヲ費サヽルヲ得サルニ至ルヘシ

（三）日本政府若シ關稅又ハ稅步ヲ變更スル事アルトキハ之ヲ實施スルノ前相當ノ時日（凡六ケ月）前ニ一般人民ヘ之ヲ豫告スルヲ要ストノ英政府ノ意見ニ同意ス且又稅關規則即チ貿易規則、倉庫規則、拂戻稅、燈稅、港稅、噸稅ノ論題ヲ稅目ト同時或ハ然ラサルモ成ルヘク速ニ之ヲ論決スル事ヲ必要ト思惟ス

（四）日本政府ハ全國ヲ開キ外國人ノ通商、貿易、居住ヲ許シ之レニ付與スルニ不動產ヲ領有スル權ヲ以テセハ又日本政府ヲシテ關稅自定權ヲ享有セン事ヲ要求シ得ヘシト云ヘル英政府ノ意見ニ對シ異存ナシト雖トモ關稅自定ノ權ト開國ト單ニ密着セシ物ト見做スカ如キ主意ニハ我政府ノ肯テ許容シ難キ所ナリ

（五）然リト雖トモ日本政府ハ關稅自定權收復ノ事ヲ以テ開國ノ事ニ附着スルモノト爲スハ敢テ異議ナシト雖ト

モ開國ノ目的ヲ以テ起ル所ノ結約條中ニ於テハ裁判權ノ問題ヲ以テ最モ重要ナルモノト信憑スルノ思考ハ之レヲ放棄スル事ナシ

（六）　日本政府ハ外國人貿易ノ爲メ吏ニ讓與ヲ爲シ又全國何レノ地ヲ問ハス外國人自由各處ニ來到スルハ其欣フ所ナルヲ各國政府ニ於テ明瞭承知セラレン事ヲ希望ス然リト雖トモ日本政府ノ之ヲ難スル所以ハ諸外國政府ニ於テ未タ其人民ヲシテ全ク我地方裁判所管轄ニ服從セシムル事ヲ承諾セサル事是ナリ蓋シ其主旨ノ承認ハ我政府ニ於テ全國ヲ開ク前必ラス不可缺モノトシテ尙之ヲ主張セサルヲ得サルモノナリ我政府ハ領事裁判權ノ全廢ト全國ニ外國人ノ通商居住ヲ許ス事トヲ同一時ニ施行スヘキモノトシ又國家ノ利益ト安全トヲ考慮スルニ於テモ此方法ヲ外ニシテ他ニ開國ヲ許シ得ヘキ方法ハ他ニ之レナキヲ確信ス

（七）　日本政府ハ一切ノ裁判權ヲ回復スルマテハ全國ヲ開カサルヘシトノ決心ヲ執ルト雖トモ漸次此ノ望マシキ變革ヲ行ハンカタメニ準備ヲナスヘキノ時期已ニ到レリトノ事ニ就テハ諸外國ト同意ナリ故ニ我政府ハ外國人ノ通商及ヒ雜居ノ爲メ貿易上ニ最モ見込アリト思考スル處ニ「アクセツシブル」港ヲ數ケ所（凡三四ケ所）ヲ設クルノ準備アルナリ

（八）　日本政府ハ英國政府及ヒ其他訂盟諸國ノ希望ニ應シ旅行免狀ノ新法ヲ設クヘシ就テハ外國人ハ皆其公使又ハ領事ノ申立ニ依リ十二ケ月ヲ超エサル期限内ニ通用スヘキ免狀ヲ直チニ開港場或ハ一ノ「アクセツシブル」港ノアル縣ノ長官ヨリ受取ル事ヲ得ルナリ此免狀ヲ携帶スル者ハ凡ソ正當ナル目的ヲ有スル以上ハ全國ヲ通行スル事ヲ得レトモ内地ニ於テハ如何ナル事情アリト雖トモ決シテ商業上ノ取引ヲ爲ス可カラサルモノトス

（九）　又日本政府ハ豫議會ニ於テ其正委員ノ提出シタル議案ニ基キ組成セル方法ニ從ヒ向フ十ケ年間限リ日本人民ヲシテ自由ニ外國ノ船舶ヲ雇入レ以テ國内諸港ヘ往來通商セシムル事ヲ肯諾ス

（十）　日本政府ハ通商條約ノ期限ヲ十ケ年ト定メ而シテ九ケ年目ノ終リ或ハ其後ニ至リ雙方ヨリ十二ケ月前ニ通知ヲ爲ス上ハ此條約ヲ廢棄スルノ權ヲ有スルモノト爲サントス

（十一）　英國政府ハ日本ニ對シ其領事裁判權ヲ永久保續スルヲ望ムニ非ラス又此裁判權ヲ漸次撤去スルニ最適當ナル方法ヲ時々我國政府ト討議セント欲スル旨ノ陳述ハ英國公使ノ公言セルアルニ由リ日本政府ハ彌々此權ヲ掌握シ各國ニ於テ果シテ其領事裁判權ヲ全廢スル事ヲ承諾スルニ至レハ又之レト同時ニ全國ヲ開クヘキヲ肯諾ス

（十二）　然リト雖トモ日本政府ハ十ケ年ノ終期ニ至リ目今先見シ能ハサル原因及事情ノ爲メニ此條約ヲ廢スル事ヲ得サル場合ニ於テハ經驗上得ル所ノ必要ナル改正ヲ之レニ加ヘ本條約ヲ重修スル事ヲ各國ニ於テ約諾セラレン事ヲ請求セサルヘカラス

（十三）　我政府ニ於テ現今準備セル所ノ讓與ノ性質如何ンハ卽チ我國人ヲシテ此讓與ニ付屬セル特權ヲ有益ニ享有セシムル事ヲ鞏固ナラシメンカ爲メニ裁判權ノ幾分ニ關スル取極ヲ爲サヽル可ラスト思考ス故ニ我政府ハ英國政府ニ於テ此提案ノ相當ナルヲ容易ニ洞見ス可ク又之ヲ實行センカ爲メ設クル所ノ方法ヲ承諾スルハ敢テ難キニ非ラサルヘシト確信ス

（十四）　日本政府ハ日本在留ノ外國人ヲシテ我行政規則警察規則竝地方規則ニ服從セシメ右諸規則ノ違犯アル時其處罰三十圓以下ノ罰金又ハ十日以内ノ拘留若クハ之ヲ併科スル場合ニ於テハ之ヲ日本裁判所ノ審斷ニ委スヘク若シ其制限以上ノ處罰ヲ超過スルトキハ犯罪人ヲ日本官吏ヨリ最寄開港場ノ其國領事ヘ引渡シ右ノ諸規則ニ照ラシ之ヲ糺問審斷セシメン事ヲ請求セサル可ラス

（十五）　日本政府ハ右諸規則ヲ實施スルニ當テ盡一ノ制規ヲ設クルニアラザレハ不便多カラン事ヲ信スルカ故ニ之ヲ現今ノ諸開港場ニモ施及セン事ヲ希望スト雖トモ又英國公使及其他公使ノ所說ニ讓リ且ツ我政府ニ於テ目下此論點ヲ主張セハ空シク通商條約ノ訂結ヲ遷延スルニ至ラン事ヲ恐ルヽカ故ニ之ヲ現在ノ開港場ニハ施及セサルヘシ併シ訂盟各國ニ於テ通商條約締結ノ後何時ニテモ本件ノ談判ヲ開ク事ニ同意シ且此事ヲ以テ現今ノ開港場居留ノ外國人ノ我國ノ行政規則、警察規則及地方規則ヲ遵守スルノ義務ヲ決シテ減殺スル者ニアラサルヲ了解セラレタル上ニテ日本政府ハ此便宜法ヲ

採用ス

（十六）　日本政府ハ國中何レノ處ニ於テモ罪ヲ犯シ若シ法律又ハ規則ヲ犯シタル外國人アレハ何等ノ場合ト雖トモ之ヲ捕拿スルノ權ヲ日本官吏ニ歸セシメン事ヲ望ム尤我政府ニ於テ此權ヲ施用スルトモ必ラス外國人ノ居住權ヲ尊重スルハ勿論其他凡テ此捕拿ノ權ヲ濫用セシメサル事ニ注意スヘシ

（十七）　日本政府ハ「アクセツシブル」港ニテ日本人ト外國人トノ取引上ヨリ起ル五百圓以下ノ民事訴訟ハ原告被告ノ國籍ヲ問ハス都テ之ヲ日本裁判所ノ審斷ニ任セン事ヲ望ム

（十八）　右數項ノ取極ハ日本政府ニ於テ秩序ヲ保持スルカ爲メ特ニ緊要ト爲スノミナラス又條約改正一般ノ企圖ヲ進達成効セシムルノ一助トナスナリ之ヲ實施スルニ於テハ一ニハ日本裁判所ヲシテ外國人ト關係アル事件ノ處分法ニ習熟セシムルヲ得ヘク一ニハ外國人ヲシテ日本ノ法律及ヒ其適用ノ方法ニ信用ヲ置カシムルヲ得ヘシ然ラハ卽チ此ノ取極タルヤ準備年限ノ間卽チ開國ト法權回復トノ前ニ於テ內外人民ヲシテ將來其進歩ヲ

順當平易ナラシムルノ位置ニ漸進スルノ一手段ナリ

（十九）　日本政府ハ開港場又ハ「アクセツシブル」港ニ於テ外國人ノ工業又ハ製造ニ從事スル者アルトキハ必ス日本人民ノ斯ル場合ニ於テ納ムル所ノモノト同一ノ免許料又ハ稅金ヲ拂ハシメン事ヲ望ム

（二十）　日本人ノ雇入レタル船舶ニ付屬スル外國人ハ未開港場ニ於テ商業ニ從事スルヲ得ス船中ニ於テハ其自國ノ法律及法權ニ服從シ陸上ニ於テハ他ノ居留外國人ト同一ノ地位ヲ以テ之ヲ論シ日本ノ諸規則ニ關シテモ之レニ同樣ノ取扱ヲ受クヘシ

（二十一）　日本政府ハ日本船外國船ノ別ナク且ツ其乘組員ノ國籍ニ拘ハラス船內取締ノ權ハ之ヲ其船長ニ屬セシムルヲ望ム

（二十二）　日本政府ハ各訂盟國ト協議シ居留地ノ取締法ヲ改良スル事現在ノ居留地及今後取定ムヘキ區域內ニ於テ外國人ノ不動產ヲ領有スル事及地稅法一般ノ制ニ借地料ヲ均一ナラシムルノ目的ヲ以テ之ヲ改正スル事等ニ關シ必要主當ナル百般ノ取極ヲ爲サン事ヲ勉ムヘシ尤此取極ニ因リ外國人土地所用ノ權ヲ得ルトキハ又從

テ日本ノ土地所有法ニ服從スヘキハ必要ナリ

（二十三）　又日本政府ハ外國人ノ日本人民ト商社ヲ結合シ或ハ日本ノ工業又ハ商業會社ノ株券ヲ所有スル事ニ付外國政府ト協議スル所アラントス尤モ右組合商社ハ日本人ニ屬シ單ニ日本法庭ノ裁判權ニ服從スヘキモノトス

（二十四）　日本政府ハ英國政府カ最惠國條款ニ關シ多少我政府ノ希望ニ應セントスルノ見込ヲ以テ發セラレタル其說ヲ再考セラレン事ヲ望ム

（二十五）　專賣免許商標又發明ノ保護方ニ付テハ日本政府ハ英國政府ノ所見ニ同意ス又此件ノ評議ハ都合ニ依リ通商條約締結ノ後マテ之ヲ遷延セシムルモ妨ケナシ

（二十六）　前述ノ條項ハ各訂盟國ノ聽容スル所ト爲リ且之ヲ以テ以上所說ノ各件ニ就キ互相ノ利益ト爲ルヘキ條約ヲ締結スルノ基礎ト爲スヲ得ヘキハ我政府ノ確信スル所ナリ

（右墨書英譯文）

Foreign Office, Tokio,
August, 4th, 1884.

1. His Imperial Majesty's Government having

given due consideration to the Memorandum embodying the proposals of Her Britanic Majesty's Government on the subject of the Revision of the Treaties, now desire to submit their own views with reference to the several matters therein set forth.

2. His Imperial Majesty's Government hope that the Revised Tariff agreed to at the Preliminary Conference will be adopted without further discussion or modification. It is a compromise of many interests, not always identical, arrived at after much patient study, and any disturbance of a part of such a bargain will probably entail a general reconsideration of the whole question, and consequently much loss of valuable time.

3. His Imperial Majesty's Government concur in the belief that previous notice of a reasonable length (say six months) should be given to the Public before any changes in duties or rates can come into effect. They are also of opinion that the question of Customs or Trade Regulations, Bonded Warehouses and Drawbacks, and Light,

Harbour, and Tonnage Dues should be dealt with at the same time as the Tariff, or at least as soon as possible.

4. While His Imperial Majesty's Government are willing to assent to the view of Her Britannic Majesty's Government, that the opening of the whole Empire to Foreign Trade, Commerce, and Residence, with the right of holding real property there, would justify Japan in claiming to be admitted to the enjoyment of Tariff Autonomy, they cannot admit the inference that Tariff Autonomy is the principal matter to be considered in connection with the opening of the Empire.

5. His Imperial Majesty's Government are, however, willing to make the resumption of Tariff Autonomy contingently dependent upon the opening of the Empire, but without relinquishing the belief that in any arrangements having the latter object in view, the question of jurisdiction must necessarily be paramount.

6. The Japanese Government wish Foreign Powers clearly to understand that they would willingly give further concessions to Foreign Trade, and would with pleasure welcome Foreigners freely to every part of the Empire, but the difficulty for Japan is that Foreign Powers will not yet accept the complete submission of their subjects and citizens to the territorial courts of Japan, the recognition of which principle the Japanese Government must still insist on as necessary before the complete opening of the Empire to Foreigners. They firmly believe that the entire relinquishment of Foreign Consular jurisdiction, and the opening of the whole Empire to Foreign Trade, Commerce, and Residence should be simultaneous, and considerations of national interests and security will not permit them to open the Empire under any other arrangement.

7. While, however, reserving their determination not to throw open the whole Empire until all jurisdiction has been surrendered, the Japanese Government agree with Foreign Powers that the time has come for taking some preparatory steps towards gradually bringing about this desirable change. They are, therefore, prepared to establish for Foreign Trade and Mixed Residence a certain number of *Accessible Ports* (say three or four) at such points as may be considered most desirable for commercial purposes.

8. His Imperial Majesty's Government desire to meet the wishes of Her Britannic Majesty's Government as well as those of the other Treaty Powers, and will inaugurate a new Passport System, whereby Foreigners may, on the recommendation of their Representatives or Consuls, obtain passports, good for any period not exceeding twelves months, directly from the chief authority of the Ken within which either the open or accessible port may be situated. These passports will permit the Bearers to travel throughout the Empire for all lawful purposes, with the single exception that the holders thereof shall under no circumstances enter into commercial transactions while in the interior.

9. His Imperial Majesty's Government are further willing that for a period of ten years Japanese subjects may freely charter foreign vessels to visit and trade at unopen ports, under a system framed in general accordance with the proposal made by the First Delegate of Japan at the Preliminary Conference.

10. His Imperial Majesty's Government propose that the duration of the Commercial Convention shall be ten years, and that at the end of nine years, or thereafter, either party shall have the right to terminate the same upon giving twelve months' notice to the other.

11. Taking note, however, of the declaration of Her Britannic Majesty's Minister, that Great Britain has no desire to perpetuate her Consular Jurisdiction in Japan, and of his statement that she will be willing from time to time to discuss with Japan the measures which may best lead to its prudent and gradual disappearance, the Japanese Government will agree that when they exercise this right, they will at the same time throw open the whole Empire to Foreigners, provided the Powers agree to the entire abolition of their Consular Jurisdiction.

12. His Imperial Majesty's Government, however, must ask the Foreign Powers to engage to revise

this Commercial Convention, in order to introduce in it such changes as experience may prove advisable, in case they are prevented by causes and circumstances not at present foreseen, from terminating the same at the expiration of the term of ten years.

13. His Imperial Majesty's Government consider that the concessions which they are now prepared to make are of such a nature, that certain arrangements touching jurisdiction in a limited degree must necessarily be made, in order to secure the advantageous enjoyment by foreigners of the privileges connected therewith; and they therefore trust that Her Britannic Majesty's Government will readily perceive the reasonableness of the plan proposed, and that they will not find it difficult to acquiesce in the arrangements for carrying it into effect.

14. His Imperial Majesty's Government must ask that Foreigners in Japan shall obey the Administrative, Police, and Local Regulations of the Country; that in cases of infringement of those Regulations, the punishment whereof does not exceed a fine of 30 yen, or imprisonment for 10 days, or both, the Japanese Tribunals shall adjudicate, while in cases beyond those limits the Japanese Authorities shall deliver the offender to the Consul of his nationality at the nearest open port for trial and adjudication according to those Regulations.

15. While His Imperial Majesty's Government believe that inconveniences would be felt, unless an uniform system for the enforcement of these Regulations be maintained, and therefore wish to extend it to the present open ports, in deference to the representations of Her Britannic Majesty's Minister, as well as to those of others, and fearing also that delay might be occasioned in the conclusion of the Commercial Convention if this point were presently insisted upon, they will not include the existing open ports in the above arrangement. They adopt this course, however, upon the understanding, that the Treaty Powers will agree to enter into negotiations upon the subject at any time after the conclusion of the Commercial Convention; and with the futher understanding that this exception in no way affects or lessons the obligations of Foreigners at the present open ports to observe Japanese Administrative, Police, and Local Regulations.

16. His Imperial Majesty's Government desire it well understood that the right of arrest of Foreigners committing any crime or offending against any laws or regulations in any part of the Empire shall, in cases, rest with the Japanese Authorities. In exercising this right the Japanese Government will of course respect the domiciliary rights of Foreigners, and otherwise be careful to avoid any abuse of the power.

17. His Imperial Majesty's Government further desire that civil cases involving amounts not exceeding five hundred yen, and arising out of transactions between Japanese and Foreigners at the accessible ports, shall be adjudicated by the Japanese Courts, without regard to the nationality of the plaintiff or defendant.

18. His Imperial Majesty's Government regard these arrangements as essential not only to the maintenance of order, but also as an aid to the successful advancement of the general plan of treaty revision. By their practical operation the Japanese Courts will, on the one hand, be enabled to accustom themselves to deal with foreign interests, while, on the other, Foreigners will gain confidence in Japanese law and its application. A means will thus be afforded, during the transitory period which will elapse before the entire opening of the Empire and the resumption of jurisdiction, of gradually placing Japanese and Foreigners in a position which will render further advances both natural and easy.

19. His Imperial Majesty's Government also wish it clearly understood that when Foreigners exercise or engage in any industrial or manufacturing business at the open or accessible ports, they shall of course pay the same license dues or taxes as Japanese subjects may be required to pay under similar circumstances.

20. Foreigners belonging to ships chartered by Japanese will not be entitled to trade at unopen

ports: while on board ship they will be subject to their national law and jurisdiction; on shore they will be in the same position as other Foreigners in Japan, and subject to like conditions as regards Japanese Regulations.

21. His Imperial Majesty's Government desire that the disciplinary power on board ship shall belong to its Captain, whether the vessel be Japanese or Foreign, and without regard to the nationality to the crew.

22. His Imperial Majesty's Government will endeavour, in concert with the Foreign Powers to make all necessary and reasonable arrangements with reference to the improvement of the municipal systems of the settlements, the holding of real property by Foreigners within certain limits, including the present settlements, to be hereafter determined, and the readjustment of rents therein, with the view to assimilate them with the general system of land taxation. In this connection, it is necessary to observe that in case Foreigners become entitled to hold landed property under the above arrange-

ment, they shall do so subject to the Japanese law of land tenure.

23. The Japanese Government will also be willing to discuss with Foreign Powers the admission of Foreigners to form Commercial Partnerships with Japanese subjects or to hold shares in Japanese Industrial or Commercial Companies, provided, however, that these Firms or Companies, shall be Japanese and subject solely to the jurisdiction of Japanese Tribunals.

24. His Imperial Majesty's Government still hope that Her Britannic Majesty's Government will reconsider the opinion they have expressed regarding the most favored nation clause, with the view to meet, to some extent, the desire of the Japanese Government on the subject.

25. His Imperial Majesty's Government concur in the views expressed by Her Britannic Majesty's Government with regard to the protection to Patents, Trade-Marks, and Inventions. They are also willing to defer the consideration of those subjects until after the conclusion of the Commercial Convention, if considered advisable.

26. His Imperial Majesty's Government trust that these proposals may commend themselves to the Treaty Powers, and may form a basis for a mutually advantageous agreement with reference to the questions involved.

別錄

條約改正ニ關シ英政府ヘ達シタル我覺書ニ對スル寺島宗則提出ノ意見書

此書ハ條約改正ニ關シ明治十七年八月四日英公使ヲ初メトシテ日本在留各國公使ヘ送付セシ日本政府ノ意見覺書ニ對シ寺島宗則意見書ナリ

明治十八年十一月

註　右ハ清記終ノ際ノ記入ナルヘク實際提出サレタル日附ハ不明ナリ　假ニコヽニ收錄ス

條約改正ニ關シ英政府ヘ達シタル我覺書ニ對スル意見

（第四章）初段ニハ全國ヲ外人貿易ノタメニ開通シ不動產所有ノ權ヲ外人ニ與ヘ其住居ヲ許可スルニ非レハ日本政府ハ海關稅自理ノ權ヲ實行セサルヘシトテ開國論ト海關稅權トノ關係ヲ直接ニ密着セシムル事ニ付別ニ異議ナキカ如ク後段ニ於テハ開國論ヲナスニ當リ稅權ヲ以テ主眼トスルハ不間遠ナリトノ趣旨ヲ說起セリ文意少シク明晰ナラストノ

雖之ヲ要スルニ其意蓋シ圓滑ノ字句ヲ用ヒテ隱然我論旨ヲ維持セントスルモノヽ如シ然レトモ苟モ斯ノ如キ大體論ニ渉ルトキハ寧ロ關稅自理ノ權ハ開國論ニ附着セシムヘキモノニ非ラス開國ノ論題ト直接ノ關係ヲ有スルモノハ唯法權アルノミト斷然明言スルノ優レルニ若カサルヘシ

（手ヘル）

（衍）「斷然明言」ノ一點ニ於テハ當シ能ク意旨ヲ熟讀セハ明言ノ上ニモ明言ヲ加ヘタル事ヲ知ルヘシ而シテ其言振ニ至テハ自カラ常時談判ノ事情モアリ又本覺書ニ對スル英政府ノ覺書ノ文字如何モアレハ非常局者ノ能ク排議スルトコロニアラス　齋藤修一郎

（第八章）族籍授與ノ新法ヲ設ケ外人ヲシテ商○賣○取○引○ノ○禁○制○ノ○外○ハ○凡○テ○法○律○ニ○違○ハ○サ○ル○目○的○ノ○タメニ內地旅行スル事ヲ許可スヘシト云フニアリ去リナカラ此旅券ヲ帶有シテ內地ニ入ラントスル外國人ノ目的ハ既ニ獨逸政府ノ說ノ如ク現ニ商賣取引ヲナサヽルモ其自國ノ製造物品ノ模本ヲ携帶シ其性質價格ヲ遍ネク我內地人民ニ知ラシメ賣買契約ヲ取結ハントスルニアルヤ明ケシ從來ノ慣行ニヨル時ハ唯學術研究又ハ病氣養生ノタメニノミ旅行ヲ許可シ其他ノ目的ハ凡テ之ヲ許可セル事ナシ是則旅券ヲ與フルハ條約ノ權理ニ

據ルモノニ非スシテ特ニ我政府ヨリ與フル所ノ一種ノ恩惠ナレハナリ而テ其之ヲ與フルト與ヘサルトハ全ク我權内ニ在テ存スルナリ然ルヲ一旦條約ヲ以之ヲ定ムル時ハ忽チ外人ノ權理トナリ我ニ於テ之ヲ許否スルノ權ナシ故ニ是ニ假定スル所ノ趣旨ヲ以テ漠然法律ニ背反セサル目的ノ一語ヲ附シテ之ヲ許可スル時ハ外商等機ニ投シ種々辭柄ヲ構ヘ巧ニ其制限束縛ヲ脫シ容易ニ其企圖ヲ達スルニ至ルヘシ然ラハ則チ名ハ商賣取引ヲ禁制スルトモ其實ハ公然商賣取引ヲ許可スルト何ソ異ナラン只其商賣禁止ノ制ハ徒ラニ紙上字句ノ間ニ存スルノミニシテ實際ハ内地行商ヲ許可スルト同一ナリ外人ニシテ若シ此權理ヲ得ハ内地通商ノ十中九ヲ占領シタルモノト云フモ決シテ過言ニ非サルヘシ他日法權恢復ト内地開通トヲ彼我互相ノ讓與トシテ交換ニ充テントスルモ彼ニ於テハ既ニ先ニ許可セラルヽ所ノ内地旅行ニ依テ過半商賣ノ實益ヲ獲索シ得ル上ハ他日我提出論ニ對シ容易ニ應諾セサルヘキハ事理ノ睹易キモノナリ加之此旅券ヲ有シ内地ニ赴ク外人ニシテ商賣禁止ノ制限ヲ犯シタルモノ及ヒ其他諸般ノ常事犯行政規則地方規則等犯則者ノ罰法就中旅券ヲ帶有セスシテ規程外ニ出タル者ノ處分ノ如キハ最モ

下ケ札二

注意ヲ要シ豫メ條款ヲ設ケテ約定スヘキ事ナルニ一言ノ是ニ及ハサルハ遺漏ト云フヘキカ抑又別ニ趣旨アリテ揭ケサル乎說明ヲ要ス

〔參照〕

千八百八十四年四月廿八日ノ英韓條約第四條ノ六項ニ旅券ヲ携帶セスシテ規程外ニ出タル者ハ罰金百弗及ヒ一ケ月ヨリ多カラサル禁獄ニ處スヘシトアリ（日墺條約第三條ト同シ）

（下ケ札二）

（朱書）從來ノ内地旅行ハ「特ニ我政府ヨリ與ル所ノ一種ノ恩惠ナレハナリ而シテ其之ヲ與ルト與ヘサルトハ全ク我權内ニ在テ存スルナリ」ト記者果シテ今日之ヲ廢止シ一切外人ヲ内地ニ入レサル事ヲナシ得ルヤ否ヤ若シ爲シ得サレハ是一片ノ空論ノミ固ヨリ「條款ヲ設ケテ約定スル」ナリ本覺書中「一言ノ是ニ及ハサルハ」唯本覺書ハ改正談判ノ要領ノミヲ示シタルモノナレハナリ　齋藤

（第九章）日本人ヲシテ外國船舶ヲ雇入レ不開港場ノ間ヲ航行セシムル事ヲ許可スヘシトノ趣旨ナレトモ此事タルヤ其實ヲ推ス時ハ我國ノ主權ニ屬スル沿海貿易ノ權ヲ外人ニ讓與スルニ外ナラサルナリ元來我國ノ如キハ四方環海ノ島

國ニシテ加フルニ天然好良ノ艦材ニ富ミ工手賃銀ノ如キモ歐米ニ比スレハ遙カニ低廉ナルヲ以テ何レノ點ヨリシテ論スルモ到底海軍ニ據テ以テ振興スヘキ國柄ナリ然ラハ則チ沿海貿易ノ如キ要件ニ至テハ之ヲ外國人ノ手ニ委ヌルハ決テ得策ニ非ルハ素ヨリ論ヲ俟ス政府宜シク大ニ造船ノ術ヲ奬勵シ早ク將來ノ策ヲ定メサル可ラス斯ク論シ來ラハ外國船舶雇入レノ件ハ殆ント許可シ難キモノヽ如クナレトモ如何ンセン此事已ニ業ニ先年ノ豫議會ニ於テ政府ノ許可スル所トナレリ且各國政府ニ於テ大ニ熱望スルノ一事件ニシテ我カ讓與中ノ第一ニ居ルモノナレハ今更論ヲ改ムル能ハサルヘシ然レトモ凡ソ我國人ノ外國船ヲ雇ヒ沿海航行ノ事業ヲ起サントス欲スルモノハ先ツ我政府ノ許可ヲ得ルニ非レハ其業ヲ始ムル能ハサルハ勿論ナルヲ以テ如斯事業ノ請願人アリトモ場合ニヨリテハ或ハ之ヲ許可セサル事アルヘシ其場合及ヒ事情ノ如何ヲ判定シ之ヲ許否スルハ素ヨリ政府ノ權内ニ在テ存セサル可ラス若シ或ハ此許否ノ權ヲ我ニ有セスシテ各國政府ノ冀望ニ從ヒ願人アル毎ニ必ラス許可セサルヲ得サル事ト假定センカ我沿海貿易ノ權漸次去テ外國人ノ手ニ歸スルハ自然ノ勢ナルヘシ竊カニ各國政府此讓與ヲ

冀望スルノ主旨ヲ考察スルニ決シテ前述ノ如キ附約アル規程ヲ以テ滿足スヘキニ非レハ獨逸政府ノ覺書ニ記載スル所ヲ以テ略其意嚮ヲ知ルニ足レリ故ニ各國政府要求ノ趣旨ニ依循シテ之ヲ許諾セハ我タメニ不利ナルハ論ヲ俟ス又我權利ヲ失ハサラント欲セハ彼ニ對シ讓與タルノ效驗自ラ脆薄ニ歸セン二者兩立ス可ラサルノ勢アリト云ハサルヲ得ス今本書ヲ通覽スルニ此一點ヲ明確ナラシムルノ字句アルヲ見ス且以上述フル如キ重要ノ理由アルニモ拘ハラス期限短縮ノ事及ヒ終期ニ至リ再ヒ讓與延期セサルヘシトノ決意ヲ示メシ置カサリシハ頗ル遺憾ヲ覺ユ

下ケ札三

（下ケ札三）

（朱書）沿海貿易ニ付テノ議論頗ル的切ナリ當局者ニ於テモ終始同案ニシテ當初豫議會前已ニ論辨セルトコロアルモ如何セン各國ノ希望隆ニシテ之ヲ打消ス事能ハス遂ニ漸ク雇入ノ方法ニマテシタルナルノミナラス豫議會ニ於テ十分我國ノ地形ヲ論辨シ僅ニ許諾シタルナリ

「讓與延期セサルヘシ」ノ事ハ已ニ獨逸政府ヘモ申入レ各國ノ承認スルトコロニシテ本條約ニモ採用スル積ナリ　齋藤

（第十章）貿易條約ハ期限ヲ十ケ年ト定メ其第九年目ニ至リ卽一年前豫告ヲナシタル上ニテ締盟國ノ雙方ニ於テ之ヲ

廢止スルノ權理ヲ有スヘシトノ意ニシテ稍々妥當ナルカ如シト雖モ第十二章ニ至リ十年ノ期限終了ニ至ルノ時豫期セサルノ事故到來シ之カタメ消約ノ權理ヲ施行スル能ハサルカ如キ事アラハ其時ハ實驗上必要ト見做スル所ノ變更ヲナサンカタメ此貿易條約ヲ改正スル事ヲ今ヨリ各國政府ヘ豫メ請願シ置カサルヲ得スト云フニ至テハ穩當ヲ缺クノ最モ甚シキモノト云ハサルヲ得ス何トナレハ前ニハ條約ノ期限十年ヲ經過セハ之ヲ終了スルノ權理アリト斷言シ後ニハ萬一豫想外ノ事故到來セハ唯纔カニ改正ノミヲ行フテ滿足スヘシト云ヒ後段ヲ以テ前段ノ決意ヲ消除シタルカ如キ感覺ナキヲ保シ難ケレハナリ

通例斯ノ如キ場合ニ於テ我ノ爲シ遂ケント欲スル所ヲ簡明ニ放言シ其決意ヲ示シ置カハ夫ニテ充分ナルヘシ然ルニ其斷言ノ終ルヤ否直チニ又之ヲ打消スカ如キ反對ノ意ヲ明言スルハ人ヲシテ「斯クハ云フモノヽ實ハ左迄ニモ及ヌ表向ハ條約終期ヲ主張スレトモ內實ハ改正丈ケニテ滿足スル下心ナリ」トノ感覺ヲ惹起サシムルノ嫌アルヲ免レス

（下ケ札四）

（朱書）議論一理アリ乍併本章ハ當局者ニ於テハ固ヨリ深ク考察シタルモノニシテ「條約ノ終了ハ全國開通ノ事ニ密着スル」事ヲ考レハ記者モ自カラ當局者ノ眞心ヲ了解スル事アラン如何トナレハ我レ開國スヘシト申立ルモ彼曰否日本國ノ制度文物尙以テ十分ナラサレハ吾邦人ヲシテ未タ其裁判權ニ委任スル事能ハスト」十年ノ後ニ於テ若シ不幸ニシテ此事アッテ第十二章ノ猶豫ナクンハ尙從來ノ條約ヲ續行スルニ至ルヘシ當局者之ヲ避ケント欲シ（虫入不明）ヲ付ケタリ　齋藤

（第十四章）在日本外國人ハ我行政規則警察規則及ヒ地方規則ヲ遵守スヘシトアリ然レトモ其罰法ニ至テハ罰金三十圓禁獄十日ヲ越ヘサル限ハ日本裁判所ニ於テ處分シ此制限ヲ越ユルモノハ在開港ノ犯罪者本國ノ領事ニ附シテ此規則ニ從テ處分セシムヘシトアリ、治外保權ノ弊ハ措テ論セス只其實際ノ一班ニ就テ之ヲ云ハヽ各國政府モ亦此事ノ一大缺點タルヲ知ラサルニ非スト雖モ急遽之ヲ醫スルノ術ナキノミナラス他ヲ害シ己ヲ利スルノ要具タルヲ以テ恬然之ヲ改ムルノ色ナシ獨リ英國ノ如キハ內閣（オルドナンシンシル）樞密議院ノ議決ヲ以テ其在外使臣ニ制法ノ權ヲ授與ス卽チ罰金五百圓禁獄三ケ月ヲ以テ罰法ノ權限トス故ニ在我國英公使ノ如キ我カ政府ヨリ英國人民ニ施行セン事ヲ必要トスル所ノ法律ニシテ英公使別ニ異議ナキモノハ前文ノ權限ニ據リ我法律ヲ一變

シ英國ノ法律ニ改制シ之ヲ其人民ニ布告シ犯者アレハ英國ノ法庭（コート）ニ於テ之ヲ實行セシムルヲ得ルナリ獨逸政府ニ於テハ未タ英國ノ如キ制法ナシ故ニ已ヲ得ス英國ノ制法ヲ假用ス其事記シテ先頃同政府ヨリ送達シタル覺書中ニアリ然ラハ則チ前文所謂其領事ニ附シ我規則ニ從テ處分セシム云々ト云フカ如キハ只一ノ虛文ニ外ナラス何トナレハ既ニ論述スル如ク外國ノ法庭ニ於テハ我法律ヲ實行スル能ハス若シ之ヲ行ハシメント欲セハ其國ノ公使ニ依賴シ一應彼國ノ法律ニ改制シタル後ニ非ラサレハ其國人ニ對シテハ法律ノ效力ヲ有セサレハナリ若シ或ハ偶々我法律ヲ直チニ實行シタルカ如キ形跡アル事アルモ是ハ之レ其國ノ法律中偶然我法律ト符合セシモノアルヲ以テ之ヲ擧行シタル迄ニシテ其實ハ卽チ我法律ニ拘ハラス單ニ其國ノ法律ヲ施行（ほどこ）シタルニ過キサルナリ是ニ因テ之ヲ觀レハ本書立案ノ趣旨卽チ日本政府發行ノ行政其他ノ規則ニシテ其罰法禁獄十日罰金三十圓ノ區域內ニ係ルモノハ日本ノ法律トシテ我裁判所ニ於テ之ヲ實行シ其區域外ニ係ルモノハ外國法律トシテ外國法官ノ處斷ニ任スト云フニ在リト雖モ其區域外ニ係ルモノハ前述ノ如ク既ニ外國ノ法律トナリタル後始メテ外國ノ法庭ニ於テ之ヲ執行シ得ルモノナレハ何ヲ以テカ我規則ニ從テ處分セシムルトイフヲ得ンヤ況ンヤ其區域內ト雖モ我立法權ノミニテ造レル法ヲ以テ外人ニ施コス能ハサルニ於テヲヤ是獨逸政府ノ覺書ニ獨逸政府ノ認可ヲ經テ始テ獨人ニ行ハルヘキ日本法律ト云フニ過キスト明言セシニ由テ知ルヘシ

（下ケ札五）

（朱書）是レ字句ノ論ノミ一邦ノ裁判所カ他國ノ法律ヲ施行スルヲ得サルハ皆知ル所ナリ然レトモ各國政府ニ於テ條約ニ依テ本章ノ旨趣ヲ承諾スルニ於テハ卽其國ノ裁判官（ジュージ）ハ我諸規則ヲ施行セサル事ヲ得サルヘクシテ我國ノ諸規則ニ據テ云ヒ我國ノ諸規則ヲ承諾シ各其國ノ諸規則トシテ施行スト云モ兩ナカラ字句ノ差アルノミニシテ實際ト體面上ノ利益ニ於テ大差アリトス　齋藤

（第十五章）右ニ揭クル諸規則ノタメ一樣ノ方法ヲ施行セサレハ不都合ヲ生スヘクニ付各開港場ヘモ同樣施行セシメンコト企望スト雖モ各國公使ヨリ申立ノ趣モアリ且强テ此一點ヲ論シ居ル時ハ貿易條約締結ノ運ヲ遲緩ナラシムルノ恐アルニヨリ差向キ現今ノ開港場ハ此取極ノ內ニ加ヘサルヘシトノ意ニシテ其末段ニ至リ然リト雖モ在開港場外國人ニ於テモ我行政其他ノ諸規則ヲ遵守スルノ義務ハ之カタメ減少スルニ非ストアルヲ見レハ是ニ至リ復タ我諸規則ヲ遵

守セサル可ラスト云フ意味ナルヘシト雖モ能ク我規則ノ罰法ヲ實行セント欲セハ各國公使ト協議シ其政府ノ准允ヲ經テ其國ノ法律トナシタル上ニ非ラサレハ遵守ノ本旨貫徹セサルヘシ本意ノ字句前後撞着ノ嫌アルノミナラス文意極メテ分明ナラス

（下ケ札六）

（朱巻）文意ハ稍ヤ分明ナラサルカ如クナレ共原文エンフヲスメントノ一字大ニ力アツテ之ヲ分明スル事ヲ見ルヘシ又「罰法ヲ實行」スルニハ條約ニ締結スレハ「公使ト協議シ其政府ノ准允ヲ經テ其國ノ法律トスル如キノ手順ヲ要セス　齋藤

（第十七章）寄留港ニ於テハ日本人ト外國人トノ間ニ起ル民事訴訟ノ金額五百圓ヲ超過セサルモノハ其何國人タルト原被ノ何レタルトヲ問ス凡テ日本裁判所ニ審判スヘシトアリ

抑々現行條約ニ據ルニ外國人ノ日本人ニ對シ我法庭ニ出訴スル民事訴訟ニ付テハ其金額ノ多寡ニ於テ素ヨリ定限アル事ナシ然ルニ此立案ノ旨趣ニ據レハ日本人被告タルノ場合ト雖モ其金額五百圓已上ニ至ルトキハ寄留港ニアル我裁判所ハ之ヲ受理スルノ權ナク原告外國人ニ於テハ直チニ之ヲ

外國裁判所ニ訴フルニ至ルヘシ何ヲ苦シンテ元來我政府ニ固有ノ權理ヲ殊更ニ自ラ好テ減殺セサルヲ得サルカ果シテ此立案ノ如クナラシメハ金額五百圓已上民事訴訟ノ被告日本人民ヲシテ不得已外國裁判所ノ審判ニ服從セシムルノ結果ニ至ルヲ免レス是レ蓋シ筆者ノ誤謬ニ出ルモノナランカ說明ヲ要ス

（下ケ札七）

（朱巻）從來領享シタル固有ノ權ヲ放擲シタルニモアラス又筆者ノ誤ニモアラス　齋藤

（第十九章）工作製造ヲ以テ職業トナス外國人ハ日本人同樣營業免許鑑札ヲ受ケシメ租稅ヲ拂ハシムヘシトノ意ナルヘケレトモ此免許ヲ受ケスシテ竊カニ其營業ヲナスモノ及ヒ租稅怠納者アル時ハ何レノ法ニ據リテ處分スルカ假令罰金三十圓禁獄十日ノ例ニ照ラシテ處分シ得ルトスルモ金額其上ニ出テ身代限公賣處分ヲナサヽルヲ得サル者ハ其領事ニ附シテ結局ノ處分ヲナサシムルトノ意ナルカ果シテ然リトスルモ此特別法ハ唯寄留港ニノミ行ハレテ他ノ開港場ニハ行ハレサルモノヽ如ク見ユ文明晰ナラス

（朱巻）本章ノ事項ハ貿易章程締結ノ後ニ取極ル熟議ナレハ未タ詳細ノ審議ヲ遂ケス　齋藤

（貼紙）

（朱巻）記者能ク第十三章ノ意ヲ味ウヘシ日本在留ノ外國人ハ其開港場ニアル否トヲ問ハス普ク我行政諸規則等ヲ遵守スヘキ筈ナリ唯其責罰ノ輕重如何ンニ依テ彼我ニ裁判管轄權ヲ區分シアルノミ外國領事其國人規則違犯ノ所業ヲ處罰スルニ方テハ均シク我規則ノ罰例ヲ適用スル事トナレリ是レ何ソ寄留港ニ限リ行ハルヽノ意ナランヤ余ハ齋藤氏ト同案ナリ　栗野慎一郎

（第二十章）日本人ニ雇ハレタル外國船乘組ノ外國人ハ不開港場ニ於テ商賣ヲ營ム事ヲ許サス其本船ニアル間ハ其本國ノ法律ニ服從スヘク陸上ニ在テハ他ノ外國人同樣日本ノ諸規則ヲ遵守スヘシトアレトモ其趣旨甚タ分明ナラス他ノ外國人同樣云々トハ何ヲ指シテ云ヒシモノナルヤ陸上ニ在ル他ノ外國人ト雖モ我立案假定ノ便方ニヨルトキハ外人中三種ノ區別アリ（第一）從來開港場居留地ニアルモノ（第二）旅券ヲ得テ內地ヲ旅行スルモノ（第三）寄留港ニ居留スルモノ等ナリ此內我假定ノ便方卽チ罰金三十圓禁獄十日ヲ以テ我法庭ニ於テ處分シ得ルモノハ第三種卽チ寄留港ニアル外人ノミニシテ他ノ第一種第二種ノ外國人ハ我法律ノ施及セサルモノヽ如シ然ラハ則チ本章ニ揭クルモノヽ如キハ此三種ノ內何レノ種類ニ照ラシテ處分スルノ意ナルヤ說明ヲ得サルハ分明ナラス

（下ケ札九）

（朱巻）本章分明ナラストノ事ハ「我法庭ニ於テ處分シ得ル外人ハ第三種卽チ寄留港ニアルモノヽミ」ナリトノ誤解ヨリ生シタルモノニシテ決シテ右ノ（義）ニアラス我裁判權ハ同シク第二種ノ外人卽內地旅行ノモノニモ及フナリ依之他ノ外國人トハ卽チ陸上ニ在ル外人卽內地旅行ノ外國人ト云事ナリ　齋藤

（第二十二章）現今ノ居留地全體ヲ改良センノ目的ヲ以テ外國人ニ不動產所有ノ權ヲ與ヘ其地租ノ如キモ日本人同樣ノ額ニ低減スヘシ但シ外國人ノ不動產ヲ所有センスル者ハ日本ノ土地規則ヲ遵守スヘシトアリ然レトモ元來不動產ヲ所有スルハ人權中ノ最重大ノ事ナルニ外國人ノ未タ我法律ノ全部ニ服從セサルノ前ニ先チ纔カニ地所規則ナル法律ノ一小部分ヲ遵守スレハトテ土地占有ノ權ニ付テハ日本人ト同一ノ地位ニ立タシメ之カ權理ヲ有セシメントスルハ

抑々又前後ノ順序ヲ誤リ權衡ヲ失フノ甚シキモノト云ハサルヲ得ス

（下ケ札十）

（朱書）是レ最モ程限アル區域内ニ於テ擧行スル事ナレハ一部分タリトモ漸次法權恢復スル點ヨリ視レハ左迄權衡ヲ失フノ甚シキモノトハ斷言シ難シ　齋藤

（下ケ札十一）

（朱書）本章ノ如ク約定セントスル主旨ハ先方ノ希望ニ投シ漸次法權ヲ恢復セントスル策ナラン　齋藤

（第二十四章）惠國條款ニ付テハ英政府ハ最初ヨリ不同意ヲ表シタレトモ獨逸政府ハ之ニ拘ハラス大體我要求ヲ容レ只纔カニ字句ニ付テ異論アルノミ則チ千八百八十年清國ト締結セル新條約ニ載スル條款ニ倣ヒ立案スル事トセハ別ニ異論ナシト云フニアリ此條款ハ我提出案ト其趣旨ニ於テ大同小異ナルモノナレハ我ニ於テ之ヲ承諾シテ妨ナキカ如シ然ルニ今此二十四章ノ文意ヲ見ルニ單ニ英政府ニ向テ「何卒日本政府ノ趣旨ニ適愜スル樣今一應再考アリタシ」ト冀望ノ意ヲ揭ケタル迄ニシテ文勢極メテ脆弱ニ失ス既ニ獨逸政府ノ同意ヲ得タル上ハ我提出案ノ不當ニ非ルヲ證スルニ足ルヘシ又之ヲ以テ他ノ各國條約ニ照ラスモ決シテ辱ル處ナシ然ルニ論旨是ニ出スシテ單ニ「不同意トアラハ最早致ス方ナケレトモ何卒今一應再考ヲ試ミラレタシト」ノ如キ恰弱ノ語氣ヲ顯ハシタルハ最モ惜ムヘキ事ナリ

（下ケ札十二）

〔參照〕

米韓條約第十四條ノ第一項ニ報酬約諾アルモノハ之ヲ履行シテ後其殊典特例ノ益ニ均霑スヘシトノ文字ヲ揭ク

畢竟前文論述スル類項ノ要旨ヲ採摘スレハ左ノ如シ日本ヨリ各國政府ニ向テ要求スル條件

（第一）貿易上ノ事項ヲ他ノ條約ヨリ分離シテ貿易條約トナシ速ニ之ヲ締結スル事

但シ稅目ハ豫議會ニ於テ假定シタル平均一割ノ稅額ヲ定メタルモノ

（第二）凡テ在日本外國人ヲシテ我行政、地方、警察ノ諸規則ヲ遵守セシムル事

此項可言而不可行モノニ屬ス其故ハ我法律ハ外國政府ノ認可ヲ經サレハ外人ニ及ホス能ハス其事既ニ前文ニ論悉ス

（第三）宿留港ニアル外國人中行政、地方、警察ノ諸規則ニ對シ犯罪者アル時ハ其罰法禁獄十日罰金三十圓ヲ越ヘサルモノニ限リ日本裁判所ニ於テ審判處斷スヘシ

（下ケ札十三）

（第四）前項諸規則ノ現行犯者ヲ逮捕スルノ權

（第五）宿留港ニ於テ外國人及ヒ日本人トノ間ニ起ル民事訴訟裁判權金額五百圓ヲ限リ之ヲ日本裁判所ニ於テ審判スル事

（下ケ札十四）

（第六）諸工作製造ヲ職業トスル外國人ヘ營業稅ヲ課スル事

前數項ニ對シ各政府ヨリ我ニ向テ要求スル條件左ノ如シ

（第一）宿留港トシテ二三ノ海港ヲ開ク事（此事英獨兩政府ノ覺書中請求アルヲ見ス但シ我ヨリ報酬トシテ提出シタル新案ト思ハル）

（第二）日本人ニ外國船舶ヲ雇ハシメ期限ヲ十年ト定メ沿海航行ノ業ヲ營マシムル事（卽チ沿海貿易權ヲ云フ）

（第三）內地旅行ノタメ施券ノ制限ヲ寬裕ニシ商品ノ模本ヲ携帶スル等ノ所業ヲ外商ニ許可スル事

（第四）稅關又ハ貿易規則、倉庫規則、港則、戾稅、捻稅、等ノ諸項ヲ稅目ト同時ニ各國委員ト協議決定スル事

（第五）貿易條約十ケ年ノ終期ニ至ラハ之ヲ全廢シ海關稅自理ノ權ヲ實行スヘシトノ一議ニ付テハ其事開國法權ノ兩論ニ交涉セサルヲ得ス而シテ其之ヲ實施スル便法ニ至テハ隨時協議ニ附シテ決定ニ至ルヘシト雖モ要スルニ民法刑法商法訴訟法等頒布ノ上之ヲ外國語ニ飜譯シタル後ニ非サレハ之ヲ議定スル能ハス且外國人ヲシテ卒ニ此諸法律ニ服從セシムル事ヲ承諾シテ顧慮スル處ナカルヘシト思惟スルニ至ルカ如キ外國人保護ノ保證果シテ存立スルヤ否又其時期果シテ到來セシヤ否ヲ判定スルノ權ハ英國政府獨之ヲ握有スルモノトストノ意ヲ明言セル事

〔參照〕

明治十七年四月中英韓ノ間ニ締結セル條約ノ末尾ニ附添スル議定書中第一條ニ「他年ニ至リ朝鮮政府ニ於テ諸法律ヲ改制シ現下英國人ヲシテ朝鮮ノ法律ニ服從セシムルノ障礙クル諸件ヲ除

去シ朝鮮ノ法官等英國ノ法官ト同樣ナル法律上ノ資格及獨立ノ地位ヲ占領シタリト英政府ニ於テ認定シタル時ハ此條約ニ揭クル英國人民ノ治外保權ハ廢棄ニ歸スヘシ」トアリテ字句異ナリト雖モ其主意ニ於テハ我ニ對シテ主張スル所ト更ニ異ナル事ナシ

已上彼我ノ要求諸件ニ付其精神ノアル處ヲ詳密ニ考究スル時ハ我要求ノ六項中稅目改定ノ一項ニ對シ各政府ニ於テ略略同意ヲ表シタルノ外其他ハ縱令彼ニ於テ承諾スルト見做スモ其事項ノ性質ニ付テ之ヲ考察スル時ハ第二項ヨリ第六項ニ至ル迄大率皆有名無實ニ屬スルモノニシテ其然ル所以ハ前上既ニ細論シタレハ是ニ之ヲ贅セス之ニ反シ各國政府ノ我ニ向テ要求スル五項ニ悉ク貿易上ノ實益ヲ獲索セントスルノ計畫ニ出ルモノニシテ名ハ小ニ似テ其實ハ大ナリト云ハサル可ラス殊ニ第五項ノ如キハ全論中樞要ノ重權ヲ彼ノ手ニ掌握シ殆ント之ヲ永遠無期ニ及ホシ已レノ意ニ適セサレハ何時迄モ允諾スルニ及ハスト云フカ如キ情狀ヲ呈出スルノミナラス朝鮮ヲ以テ我國ニ對比シテ優劣ナキモノトス其意果シテ公平ニ出ルナルカ將タ之ヲシモ友誼厚シト云テ可ナランカ請フ他日ノ輿論ヲ待テ再ヒ之ヲ評セン

日清條約ハ明治四年七月ヲ以テ締結シ爾後十ケ年ヲ以テ改正ノ期限ト定ムト卽チ去ル十四日其時期ニ當レルヲ以テ其筋ニ於テハ旣ニ着手アリシ事ト思ハル而シテ清國トノ條約モ其大體ニ於テハ之カ基礎ヲ歐米條約ノ改正ニ取ラサル可ラサルモノアルニ似タリ果シテ然ラハ前文列出スル條項モ亦直チニ清國ニ向テ適用スル所アラントスルハ必然ノ勢ニシテ清國人ノ我人民ニ對スル關係ニ付テハ宜シク別ニ詳密ノ考慮ヲ要スヘキナリ論次聊カ一言ヲ附シテ以テ備考ニ供ス

（下ケ札十二）

（朱書）
我提出案ト獨逸案トハ大差アルノミナラス獨逸案ハ現行條約中ノ最惠國條款ト文句ノ差アルノミニシテ實際ノ差アル事ナシ故ニ本章ノ如ク記載シ各國政府ノ意向ヲ探ルナリ　齋藤

（下ケ札十三）

（朱書）
第二十章齋藤氏ノ附箋ニテ此ノ誤解ハ明瞭セリ　栗野

（下ケ札十四）

（朱書）ノ
我政府ノ覺書ヲ看ヨ逮捕ノ權ハ普ク諸犯罪ニ及ホスノ意ナリ
栗野

一一〇

明治十七年八月五日乃至十月二十四日　在本邦各國公使ヨリ井上外務卿宛

條約改正ニ關スル日本政府ノ覺書領收ノ件

一　英國公使來翰

第四十三號

英國公使　エフ・アール・ブランケツト

外務卿伯爵　井上　馨閣下

以書翰致啓上候陳ハ昨日拙者宛御差越相成候貴翰落手致披見候處西洋諸國ト日本國トノ間條約改正ノ事ニ付日本政府ノ御意見ヲ記入シタル覺書壹通封入御差越相成致接手候右貴翰竝覺書ノ寫ハ早速拙者ヨリ我政府へ廻送可致候

先般口上ヲ以テ閣下へ申陳候細條ハ或ル添削ヲ加ヘラルヘキ筈ニ付此ヲ外ニシテハ右覺書ハ談判ノ基本ト可相成モノト存候就テハ拙者欣然此意ヲ以テ我政府へ可申送候他國ノ代表者ノ用意相整候ハヽ何時ニテモ會議ニ於テ本件ヲ商議致度存候此段得貴意候敬具

千八百八十四年八月五日

（岩原文）

No. 43.

H. B. M's Legation
Tokio, August 5, 1884.

Monsieur le Ministre,

I have the honour to acknowledge receipt of the Note which Your Excellency was so good as to address to me yesterday, enclosing a Memorandum embodying the views of Japan upon the subject of the proposed Revision of the Treaties between the Western Powers and this Country.

I shall lose no time in forwarding to my Government a copy of Your Excellency's communication and Memorandum.

Subject to certain reserves, and modifications, as to details already explained verbally to Your Excellency, I consider the Memorandum furnishes an acceptable basis for negotiation. I shall therefore have much pleasure in expressing myself in this sense to my Government, and shall be willing to discuss the matter in Conference whenever the Representatives of the other Powers are prepared to do so.

I avail myself of this opportunity to renew to Your Excellency the assurance of my highest consideration.

F. R. Plunkett
H. B. M's Minister.

His Excellency
Count Inouyé Kaoru
&c. &c. &c.
Foreign Office.

二　獨逸公使來翰

第十號

以書簡致啓上候陳ハ本月四日付貴簡ヲ以テ西洋諸國ト日本國トノ間現行條約改正ノ儀ニ付貴政府ノ意見御記載相成一般ノ覺書壹通恭ク御差越相成致接手候右覺書ノ儀ハ早速拙者ヨリ我政府へ廻送シ其承納ヲ慇懃致置候我政府ニ於テ右覺書ヲ以テ通商條約改正ニ付キ此先キノ談判ノ至當ナル基本ト思惟可相成ト拙者信用致候

右ノ次第ニ候間御來示ノ如ク該條約ノ速ニ結了候樣御冀望ノ趣ハ拙者ニ於テモ眞實御同感ニ有之候此段得貴意候敬具

千八百八十四年八月五日

獨國公使　ガラーフ、フォン、デンホーフ

外務卿伯爵　井上　馨閣下

（右譯文）

No: 10.　　Tokio, August 5, 1884.

Sir.

I had the honor to receive the letter of the 4th instant by which Your Excellency has been good enough to communicate to me a general Memorandum embodying the views of His Imperial Japanese Majesty's Government upon the subject of the proposed revision of the existing Treaties between the Western Powers and Japan.

I shall lose no time in forwarding and recommending this document to my Government, trusting that it will be considered by the latter as a suitable basis of further negotiations for the proposed Revised Commercial Convention.

In this sense & cordially sympathize with the wish expressed in Your Excellency's note with regard to the early conclusion of the Convention and avail myself of this opportunity to renew to Your Excellency the assurance of my highest consideration.

G. Doenhoff.

His Excellency
Hakushaku Inouye Kaoru
H. I. J. M's Minister for Foreign Affairs. Tokio

三　露國公使來翰

第五十壹號

拜啓陳者昨日付貴翰ヲ以テ條約改正ニ關スル貴帝國政府ノ意見ヲ明載セル覺書ヲ御送付相成致入手候其節御申越相成候ニハ露日兩國間ニ於テ新ニ通商條約ヲ締結スル時ニ當リ該覺書ヲ以テ其談判ノ基礎ト被定度ニ付拙官ニ於テ此義ヲ承諾シ且條約ノ締結ヲ速カニセンカ爲メ細目ノ討議ヲ開クモ拙官ニ於テハ何モ差支無之哉御尋ノ趣致敬承候依テ拙官ハ御送付被成候覺書ヲ熟讀致候處該書中御陳述ノ旨趣ハ全ク我政府ヨリ拙官ニ付與セシ所ノ訓令ノ基礎ト爲スヘキ主意ニ符合セルモノト確信致候

右ニ付テハ爰ニ拙官ヨリ口述致候通即チ閣下ニ於テ通商條約ノ締結ニ關スル談判ヲ開クニ好時機ト思考セラルヽトキハ直ニ之レニ着手スルノ準備ハ拙官ニ於テ缺業ニ相整居申候尙又該覺書ハ我政府へ遞送シ且其指令ハ電報ヲ以テ被差越候旨我政府へ可申送候敬具

千八百八十四年七月十四日（八月五日）

ア、ダヴキドウ

外務卿伯爵　井上　馨閣下

（右譯文）

Légation Impériale de Russie.　　Tokio, le 5 Août 1884.

N. 51.

Monsieur le Ministre,

J'ai eu l'honneur de recevoir la note en date d'hier par laquelle Votre Excellence a bien voulu me transmettre un mémorandum contenant un exposé des vues du Gouvernement Impérial du Japon sur la question de la révision des traités.

En me communiquant le mémorandum en question Vous exprimez l'espoir, Monsieur le Comte, qu'il me sera possible de l'accepter comme base de Négociation pour la conclusion d'une nouvelle convention commerciale entre la Russie et le Japon et que je serai disposé à entrer en discussion sur les questions de détail, afin de hâter la conclusion de

cette convention.

Je m'empresse d'informer Votre Excellence qu' après mûr examen de la pièce importante qu'Elle m'a fait l'honneur de me communiquer, j'ai été à même de constater que les principes qui y sont développés ne se trouvaient pas en désaccord avec ceux qui forment la base des instructions que m'a fait parvenir le Gouvernement Impérial.

En conséquence, je crois pouvoir Vous réitérer, Monsieur le Ministre, ce qui a déjà été l'objet d'une communication verbale antérieure de ma part, que je suis prêt à aborder les négociations au sujet de la conclusion d'une convention commerciale aussitôt que Vous le jugerez opportun.

Je me ferai un devoir de soumettre au Gouvernement Impérial le Mémorandum que Votre Excellence a bien voulu me communiquer et de solliciter en même temps une réponse télégraphique.

Veuillez agréer, Monsieur le Ministre, l'assurance de ma haute considération.

A. Davidow

Son Excellence

Monsieur le Comte Inouyé Kaoru.

四 米國公使來翰

第二四六三號

以書翰致啓上候陳ハ本月四日附貴翰ヲ以テ日本現行條約改正ノ儀ニ付英國政府ノ覺書ニ對スル回答トシテ貴政府ノ意見ヲ載セラレタル覺書壹通封入御差越相成致接收候

右御封入ノ覺書ハ現行條約改正ノ儀ニ付貴政府ノ意見ヲ述ヘラレタルモノニ有之旨御申添相成且拙者カ右覺書ヲ承納シテ日本米國間ノ改正通商條約ニ付談判ノ基本ト致候樣御囑望被成候趣（中略）又拙者カ右條約ヲ速ニ結了セシメン爲メ細目ノ商議ニ取掛候樣被致度旨御申越ノ趣致承知候右談判ノ結果ハ異日最後ノ考案及ヒ認可ヲ得ル爲メ拙者ヨリ我政府ヘ可伺出義ニ候得共今日ニ當リ拙者ハ先ツ右覺書ヲ承納シテ日本合衆國間改正通商條約ニ付テノ談判ノ基本ト可致候

右ノ如ク御依賴ノ旨ヲ承諾スルニ當リ左ノ趣ヲ閣下ニ申進置候儀至當ニ可有之存候卽チ縱令我政府ハ日本政府ノ滿足スル事ナレハ何等ノ取極ヲモ承納スル事アルヘキモ我政府ニ於テハ日本カ其獨立ノ主權ヲ十分ニ執行セラレンコトヲ望候從來ノ持論ヲ一歩モ退クノ意ハ決シテ無之候右回答得貴意候敬具

千八百八十四年八月七日

米國公使 ジョン・エ・ビンガム

外務卿伯爵 井上 馨閣下

（右原文）

No. 2463. United States Lagation,
Tokio, Japan, Aug. 7th 1884.

His Excellency
Count Inouye Kaoru,
His Imperial Japanese Majesty's
Minister for Foreign Affairs.

Sir:

I have the honor to acknowledge the receipt of Your Excellency's Note of date the 4th instant enclosing a memorandum of the views of His Imperial Majesty's Government in reply to the Memorandum of Her Britannic Majesty's Covernment on the subject of the Revision of the Existing Treaties with Japan. Being adviced that the enclosure with Your Excellency's note in the expression of the views of Your Excellency's Government on the subject of the Revision of the existing Treaties with Japan, and observing Your Excellency's remark, that "the undersigned" (Your Excellency) hopes that you (I) will find it (the enclosed memorandum) such as you (I) can accept as a basis of negotiation for the proposed Revised Commercial Convention between Japan and the United States, ... and that you (I) will be able to enter upon the discussion of the details with a view to the early conclusion of the convention"; I beg leave to say in reply, that I accept the memorandum as the basis of negotiation for a Revised Commercial Convention between Japan and the United States, reserving, however, to my Government, the result of our negociations for its final consideration and acceptance.

In thus acceding to your request, I deem it proper to acquaint you, that although the Government of the United States may accept any agreement which may satisfy His Majesty's Covernment, it has no desine to recede from any position it has hereto-

fore taken favoring the fullest exercise by Japan of the attributes of independent Sovereignty.

I avail myself of this occasion to renew to Your Excellency the assurance of my highest consideration.

John A. Bingham.

五 佛國公使來翰

本月四日付貴翰ヲ以テ條約改正ニ關スル日本政府ノ意見ヲ明載セル覺書ヲ御送附相成其節御申越ニハ右覺書ハ英國公使ニ宛タルモノニ候ヘ共其實英政府ヘ回答シ又其他各國ノ提議ニ答ヘタルモノナル趣ヲ以テセリ拙者ハ右覺書ノ體裁ニ付更ニ異存ハ無之ノミナラス英政府ニ宛タル文書ヲ英文ニテ御認メ被成且之ヲ以テ次會々議ノ基礎ト被成度御決心ハ至當ノ事ト存候殊ニ條約改正ノ事ニ關シテハ英佛日ノ文孰レモ公際上ノ性質ヲ有スル事ハ拙者ニ於テ丁知不致義ニハ無之候右ノ次第ニ付キ拙者ハ可成速ニ閣下ヨリ本月四日ノ貴翰ト共ニ御交付相成候書類ハ我政府ヘ猶送可及候然ルニ其前拙者ノ切望スル所ハ既ニ閣下ト屢々討究セシ特別ナル問題即チ去ル七月十四日ノ拙翰ヲ以テ更ニ閣下ノ御注意ヲ引起タル問題ニ付御回答ヲ要セン事是ナリ此問題ハ今一應爲念玆ニ可申述候即チ生絲ノ輸出稅廢止ト工業上ノ所有權保護ノ事ニ關シ候モノナリ該件ニ付拙者ヨリ閣下へ是迄申出タル處ハ一々御採用相成候樣ニ考居候得共何分覺書中此事ヲ論述セル部分何レニ在ルカ甚タ了解ニ苦候間該件ニ付御說明被下候ハヽ大幸ノ至ニ存候敬具

千八百八十四年八月八日

シンキウイツ

外務卿伯爵 井上馨閣下

(右原文)

Tokio, le 8 Août 1884.

Monsieur le Comte,

En m'adressant, par une lettre en date du 4 de ce mois, un memorandum où sont exposées les vues du Gouvernement de S. M. le Mikado concernant la révision des Traités, Votre Excellence veut bien me faire observer que si ce document est adressé à S. Exc. le Ministre de la Grande-Bretagne, c'est qu'il a pour objet de répondre au memorandum du Gouvernement Britanique un même temps qu'aux propositions émanant des autres Puissances

Je m'empresse, Monsieur le Comte, de déclarer à Votre Excellence que je n'ai rien à redire à la forme qu'Elle a cru devoir donner à son memorandum. J'apprécie même le sentiment de délicatesse qui l'a déterminé à rédiger en anglais un document adressé au Ministre de la Grande-Bretagne, et qui semble destiné à constituer une des bases de la Conférence prochaine. Je n'ignore pas, en effet, que les langues Japonaise, française et anglaise ont un caractère également officiel en ce qui touche spécialement la révision des traités.

Je me ferai donc un devoir de faire parvenir à mon Gouvernement, aussi promptement qu'il me sera possible, le document qui accompagnait la lettre de Votre Excellence du 4 de ce mois. Je désirerais, toutefois, obtenir auparavant une réponse aux questions spéciales que j'ai eu, à plusieurs reprises, l'occasion d'examiner de concert avec Votre Excellence et que j'ai eu l'honneur de lui rappeler encore par ma lettre du 24 Juillet dernier. Ces questions, les seules sur lesquelles il me semble utile de revenir, en ce moment, sont relatives à la suppression des droits de sortie sur les soies et à la protection de la propriété industrielle.

Votre Excellence a toujours accueilli d'une manière si favorable les propositions que je Lui ai faites à ce sujet qu'il m'est difficile de saisir la portée de la partie du memorandum où il leur est fait allusion d'une manière, d'ailleurs, très indirect.

Je serai fort obligé à Votre Excellence de vouloir bien m'éclairer à ce sujet.

Veuillez agréer, Monsieur le Comte, les assurances de ma très haute considération.

Sienkiuviz

Son Excellence
Le Comte Ino-Ouyé Kaorou,
Ministre des Affaires Etrangères.

六 伊國代理公使來翰

泰西諸國ト日本トノ間ニ現存スル條約改正ノ事ニ付貴政府ノ意見ヲ包含シタル覺書ト共ニ本月四日附ヲ以テ御送付ノ貴翰ハ下名帰戸ヨリ歸京シテ領收仕候

貴政府ニ於テ右覺書ヲハ外國公使各自ニ宛テ送シテ其中ノ一人タル英國公使ニ宛タル書翰ノ體裁ニ致サレタル理由ヲ貴翰ノ冒頭ニ御開陳相成且又各公使ハ右英國公使ニ宛タル

如キ書翰ヲ以テ各國ニ對スル一般ノ覺書ト認ムヘキヤ御
希望ノ趣致承知候又貴翰ノ終ニ至テハ下名者右書類ヲ熟
閱ノ上之ヲ以テ伊太利ト日本トノ間ノ通商條約ヲ起草スル
協議ノ基礎トセン事ヲ冀望被致若シ承知ナレハ急ニ細目ノ
討議ニ着手シ以テ速ニ條約ノ締結ニ至ルノ地ヲ爲サン事ヲ
冀望セラルヽ旨縷述相成候

下名者ハ右覺書ヲ本國政府へ廻送スルニ付前述ノ體裁ニテ
差支ヲ發見不致候ニ付該件ノ重要ニ對シ充分ノ注意ヲ以テ
之ヲ閱覽仕候

日本政府カ將ニ行ハントスル讓與ノ交換トシテ請求スル所
ノ事ハ下名者ヲシテ日本政府ノ所見ハ中正ニシテ正理ニ基
キ其懇懃ノ趣意伊日兩國間ニ締結スヘキ通商條約ノ基礎ト
ナシ承諾スルニ足ルノ深キ感情ヲ起サシメタリ

然レトモ下名者ハ精密ナル訓令ヲ受ケサルヲ以テ玆ニ明言
シ得サルヲ憾ム增シテ我政府カ貴政府ニ對シテ友愛ノ情誼
ヲ抱ク非ハ下名者ノ熟知スル所ナレハ若シ訓令ニシテ遷延
セスンハ或ハ細目ニ至テハ同意シ難キ事アルヘキモ其大體
ニ於テハ今日本政府カ覺書中ニ開陳シタル請求ヲ以テ通
商條約協議ノ一般ノ基礎トナス事ニ同意ノ旨御回答ヲ得
ルヤ必然ナリト思ハハ下名者ノ遺憾ハ勘キヲ得サルナリ
細目討議ノ事ニ至テモ右ト同一ノ理由ニ依リ御希望ニ應シ
難シ但下名者ニ於テ訓令ヲ受ケサルカ爲ニ(是レハ外國公
使ト同樣ナレトモ)條約締結ノ期ヲ後レシムル段ハ實ニ痛
ムヘキノ至ニ候

然シ下名者ハ委任權ノ狹隘ナル範圍ニ於テ我政府ノ胸襄ニ
存スル事ヲ知ル所ノ友誼ノ徵證ヲ閣下ニ示サンカ爲ニ覺書
中ニ開陳シタル御意見ヲ以テ通商條約協議ノ一般ノ基礎ト
ナス事ハ下名者ノ誓テ斷言スル可ナリ尤モ該覺書ハ早速我
國外務省ヘ送付シ同時ニ友誼厚情ノ眼ヲ以テ之ヲ査閱スヘ
キ事ヲ上稟セリ

但下名者ハ右ノ言ヲナスト雖トモ本國政府ノ許可アルニ非
サレハ一切行爲ノ自由ヲ得サルニヨリ止ムヲ得ス其時ヲ待
テ更ニ御照會可致候

右斷言ト他日ヲ待ツ事トハ閣下ニ於テ其實價ヲ知ラレン事
下名者ノ確信スル所ナリ顧ハクハ閣下下名者ノ此際ノ擧動
ヲ以テ日本政府ノ爲ニ覺書提出ノ職任ヲ繼續セシントノ念ニ
出ルモノト見做サレン事ヲ又我代表スル所ノ政府ニ於テモ
此擧動ヲ贊賞セン事下名者ノ切望スル所ニ御座候敬具

千八百八十四年八月十日

エ、マルクン、ランチャレス

外務卿伯爵 非上 馨閣下

(右原文)

Tokio, 10 Août 1884.

A Son Excellence Monsieur le Comte Inouyé Kaoru Ministre des Affaires Etrangères du Japon.

Monsieur le Ministre,

Le soussigné reçu, à Son retour de Kobe, la note que Votre Excellence lui a fait l'honneur de lui adresser sous la date du 4 courant pour accompagner le Mémorandum renfermant les vues du Gouvernement de Sa Majésté Impériale au sujet de la révision des traités existants entre les Puissances occidentales et la Japon.

V. E. a bien voulu des l'abord expliquer au soussigné les motifs qui ont induit le Gouvernement Impérial à adopter pour le memorandum la forme d'une communication faite à l'un des Représentants Etrangers, le Ministre d'Angleterre au lieu de l'adresser à chacun d'eux.

V. E. a ajouté que son désir etait que la note telle qu'elle a été remise au Représentant de la Grande Bretagne, fut considérée comme un mémorandum général adressé à toutes les Puissances Étrangères.

La note de V. E. terminait enfin en formulant l'espoir que le soussigné, après avoir examiné le document en question, voudrait bien l'accepter comme base des négociations pour l'élaboration d'une convention commerciale entre l'Italie et le Japon, et dans ce cas, procéder au plutôt à la discussion de détails afin d'arriver le plus promptement possible à la conclusion de la convention.

Le soussigné, n'ayant aucune difficulté à accepter la forme adoptée pour porter à la connaissance du Gouvernement Italien le mémorandum en question, a examiné cette pièce avec l'attention qu'elle méritait, vu son importance.

Les demandes formulées par le Gouvernement Impérial, en échange des concessions qu'il est disposé à faire, ont fait naître dans l'esprit du soussigné la conviction profonde que les idées et les vues du

Gouvernement Japonais par leur modération et le sentiment d'equité auxquelles elles ont été inspirées pouvaient, en principe, et dans leur ensemble servir comme base des négociations futures pour une convention commerciale à conclure entre l'Italie et le Japon, et comme telles qu'elles devraient être acceptées.

Le soussigné regrette cependant vivement que l'absence d'instructions précises ne lui permette pas d'être plus explicite, et il le déplore d'autant plus que, connaissant, comme il les connait, les instructions bienveillantes dont le Gouvernement du Roi est animé envers celui de Sa Majésté Impériale, il est presque sûr que si ses instructions n'etaient pas en retard, il aurait été aujourd'hui à même d'accepter en thèse générale, mais sans réserve, comme base de negociations pour une convention commerciale les demandes formulées par le Gouvernement Impérial et convenues dans le mémorandum en question.

Pour les mêmes raisons il est tout-à-fait impossible au soussigné d'adhérer an désir exprimé par Votre

Excellence quant à la discussion des détails, tout en déplorant cependant le retard qui, vu son manque d'instructions, qu'il a du reste commun avec d'autres représentants, pourrait faire subir à la conclusion de la convention.

Désirant cependant dans les étroites limites assignées à sès pouvoirs pour ainsi dire discrétionnaires, donner à Votre Excellence une preuve de la sympathie qu'il sait être dans les idées du Gouvernement du Roi, le soussigné croit pouvoir prendre sur lui d'accepter en thése générale comme base de negociations pour une convention commerciale les vues exprimées dans ce mémorandum qu'il s'est du reste empressé d'envoyer au Ministère Royal des Affaires Etrangères en le recommandant à son amical et bienveillant examen.

Le soussigné est cependant forcé, en faisant cette déclaration, qui ne saurait se passer de l'approbation du Gouvernement italien, de réserver à ce dernier toute sa liberté d'action.

Le soussigné aime à croire que Votre Excellence appréciera à leur juste valeur et la déclaration et la réserve, et il serait heureux que Votre Excellence n'y voie que le désir sincère de faciliter au Gouvernement Impérial la tâche qu'il s'est imposée en lançant le mémorandum auquel il a l'honneur de répondre.

Et dans l'espoir que sa conduite rencontre en cette circonstance l'approbation du Gouvernement qu'il a l'honneur de représenter, le soussigné saisit avec plaisir cette occasion pour renouveler à Son Excellence le Ministre des Affaires Etrangères du Japon les assurances de sa plus haute considération.

E. Martin Lanciarez

七　墺國公使來翰

第三四四號

以書簡致啓上候陳ハ拙者去ル八月九日旅行先ヨリ歸館致候處不在中到着セシ同月四日附ノ貴簡ヲ後見致候ニ付其後間モナクロ上ニテ閣下ヘ及御報道候通リ右來書ハ取急キ拙者ヨリ我政府ヘ廻送致置候此段御所望ニ應シ陳述致シ候敬具

千八百八十四年十月廿四日

墺國公使　ヨントシャールサリュスキ

外務卿伯爵　井上馨閣下

(譯文)

No: 344　　Tokio, October 24, 1884.

Monsieur le Comte,

In complying with the wish expressed to me in Your Excellency's namé, I have the honor to state, that on the 9th of August, the day of my return from a journey, I found Your Excellency's communication dated the 4th of the same month, awaiting me, and that I hastened to transmit it to my Government, as I had shortly afterwards the opportunity to inform Your Excellency verbally.

I beg to offer You, Monsieur le Comte, the renewed assurances of my highest consideration.

Zaluski.

His Excellency, Count Inouye, Kaoru.

&c.　&c.　&c.

一一一　明治十年八月十五日　佛非上公外使館ヨリ

綿輸出稅廢止並ニ工業所有權保護ニ關スル件

公第二十二號

本月八日附貴翰1落掌去四日拙簡2ニ付シ及御送達候條約改正

ニ關スル我政府ノ意見覺書ハ貴政府ヘ御進達可被成段ハ深ク謝スル處ニ御座候然ル處去月廿四日附貴翰ヲ以テ御申越被成候生糸竝ニ絹類ノ輸出稅廢止ノ件竝ニ工業上ノ所有權保護ノ件ニ關シ拙者ノ回答御切望被成候趣致領承候

生糸絹類輸出稅廢止ノ儀ニ付テハ既ニ屢次御內話ニ及候通リ我政府ノ難タンズルトコロノ點ハ他國政府ヨリ亦タ輸出入稅ノ內減額セント企望スル傾向有之ノ卽チ先月廿九日英公使館ニ於テ閣下及英獨兩公使ト拙者ヨリ差出タル覺書ニ就キ內會議致候節モ英獨兩公使ノ意見ニ若シ我政府ニテ他國ヘ其輸出入品減稅ノ事ヲ許與スル場合ニ於テハ自分等モ各自ノ土產品減稅ノ件ニ付發論可致樣其政府ヨリノ訓令中ニ記載有之候ニ付其節ハ不得止發議可致云々ハ閣下御承知ノ通リニ有之元來千八百八十二年豫議會ニ於テ提出シタル稅目ハ其精神全ク經濟上ノ論點ヨリ陳述シ數次論究決定セシ者ニシテ已ニ先般差進候覺書中ニモ申述候通リ各國ノ利益ヲ調合シ互相ノ讓與ヲ以テ漸ク調和ヲ得タル者ナレハ右ノ稅目ハ我政府最初希望ノ通リ其決果ヲ得タル者ニアラサル事ハ御了知ノ事ト存候唯我政府ニ於テハ實行ノ主義ト調和ノ精神トヲ以テ改正ニ致從事候儀ニ付假令十分ノ意ヲ達スル能ハサルモ尙右ノ稅目ニ同意致候儀ニ有之且當時貴國政府ノ委員ニ於テモ御同意被成候次第ニ付閣下ニ於テモ尙御再考被下度冀望ノ至ニ不堪候

前述ノ如ク各自ノ讓與及調和ノ精神ヨリ成立チタル稅目中多少ノ變更ヲ加フルハ甚タ難事ニシテ其一部ヲ動カセハ忽チ他ノ部分ニ差響キヲ生スルハ防ク可ラサルノ儀ニシテ到底更ニ貴重ノ時日ト勞力トヲ費スニ至ラン事ヲ深ク所恐ニ有之候閣下御承知ノ通リ既ニ多數ノ年月ヲ費シ漸ク當今斯クマテ都合好ク捗取リタル事務ノ完結ヲ遷延セシムルハ實ニ遺憾ノ至ト云ハサルヲ得サル次第ニ有之候間前述ノ事情委ク貴政府ヘ御報告被下候ハヽ貴政府ニ於テモ右覺書ニ御同意相成遂ニ前會議定ノ稅目其他悉皆御協同可相成事ト信用致候

且又工業上ノ所有權保護ノ儀ニ付テハ今般此等ノ事項ヲ評議セントスルトキハ爲メニ通商條約全體訂結ノ期ヲ意外ニ遲延セシムルノ恐アルベシトノ義英政府ノ意見ニテ我政府於テモ尤ノ事ト存候付他各國公使ニ於テ御同見ナレバ此等諸件ハ通商條約訂結ノ後ヲ待テ商議セントスルノ主意ニシテ敢テ此緊要ノ問題ヲ等閑ニ付スルノ次第ニハ無之候

之ヲ要スルニ條約改正ニ關スル諸問題ハ何レモ各國ノ利益ニ對シ多少ノ關係有之候ニ付テハ平生貴政府ノ我國ニ對シ表章セラルヽカ如キ友情ニ訴フルニアラサレハ其了解ヲ得難キ儀ニ有之候間閣下ニ於テモ此際貴政府ニ向テ右ノ理由ヲ御上申相成可成速ニ本件ヲ完了致候樣御盡力有之度希望致候此段得貴意候敬具

明治十七年八月十五日

外務卿伯爵　井上馨

佛蘭西國特命全權公使

ジ、ア、シエンキエウキツ閣下

註　123夫々一一〇附屬書五、一一九、一一八文書參照
尙絹輸出稅廢止問題ニ關シテハ對佛交涉三一五文書以下參照アリタシ

一二三　明治十七年八月二十日　佛國公使ヨリ　井上外務卿宛

絹輸出稅廢止竝ニ工業所有權保護ニ關スル件

本月十五日附貴翰落手陳ハ我政府ヨリ請求致候生糸絹類輸出稅廢止ノ事ハ閣下ノ御意見ニテハ我希望セル所ノ結果ニ至リ難カラントノ理由ヲ御通知被成殊ニ其引證トシテハ該件ニ關シ閣下ト御內談ノ節ニ御主唱被成候御考論ヲ被述加之去ル七月廿九日ノ內會議ニ於テ閣下ノ覺書ノ考究ヨリ生セシ所ノ御氣付ヲモ喚起被致候

右ノ內會議ニ基因セル御論ハ拙者ニ於テハ唯閣下ノ御起草ニ係ル改正案中ニハ最初ヨリ我政府ノ請求ヲ載セラレサルヲ以テ我同僚ニ於テ之ヲ贊成セサリシモ敢テ驚ク可キニ非サル事ヲ證明スルニ止マルモノト存候乍去右ノ請求ハ閣下ニ於テ極メテ簡略ナル概論ヨリ生セシ諸說ヲ判斷シ斯クト御信用ナサルヽ程斷乎タル異議ヲ惹起シタルモノニ無之固ヨリ右問題ハ閣下ニモ御承知ノ通リ深ク之ヲ討議セシニ非ス只其表面ニ觸タルノミノ事ニ御座候

又閣下ト御內談致候儀ニ付テハ閣下ニ於テ此事ニ說キ及ボサレタル已上ハ拙者ニ於テモ玆ニ其全體ヲ說明スルヲ以テ肝要ト存候抑モ拙者ノ日本ニ到着後初メテ閣下ト條約改正ノ問題ヲ審議スル事ニ着手致シ又生糸絹類輸出稅廢止ノ事ヲ發議致候ハ實ニ去年十二月三日ノ事ニ御座候此義ニ付テハ今喋々スルヲ要セサルナリ其際閣下ニ於テハ現ニ我カ請求ヲ以テ正當ナリトシ且ツ其請求ハ日本製產家ノ利益ニ全ク適應スルモノナリト快ク公言セラレ候

當時閣下ニ於テ御表示相成爾來拙者ニ於テ亦タ證明スル
機會アリタル右ノ最良ナル御意向ハ早速拙者ヨリ我政府ヘ
通報（ニ）ヲヨビ候處我政府ニ於テモ之ヲ以テ條約改正ノ
事業ヲ進捗セシムル奬勵ト認メ申候
然ルニ頃日ニ至リ閣下ハ道理上ニ於テハ依然生糸ノ問題ヲ
是認セラレナカラ實際上ハ覺書ニ明證セラルヽ如ク此問題
ニ付前ト觀察ヲ異ニセラルヽ事ハ敢テ怪マサル所ナリ然
レトモ閣下ニ於テ再ヒ御熟考ノ上最初ノ御意見ニ戻ラレ次
回ノ會議ニ於テ一ノ方法ヲ主張セラレン事希望ニタヘサル
ナリ此方法タル何等重要ノ拒障ヲ招カサル可ク且ツ何人ノ
害トモナル事ナク反テ日本製産家ノ將來ヲ安固ナラシメ併
セテ外國人ノ利益ヲ助ク可キモノト信シ候工業上所有權ノ
問題ニ至テハ一層簡單ナルモノ也即チ去月廿九日ノ內會議
ニ於テ我政府ノ提議ニ對シ起リタル唯タ一ノ障碍ハ日本政
府ニ於テ未タ發明特許ノ法律ナキ事是レナリ此障碍ヲ除却
スルノ容易ナル事ハ閣下ニ於テモ拙者ト御同意ノ事ト存候
既ニ貴政府ニ於テ商標條例ノ公布アリタリ此上ハ只新ニ一
ノ法律ヲ設ケテ之ヲ完全ナラシムルノ一事ナリ況ヤ拙者ノ
信スル所ヲ以テセハ右新法律ノ編制ニ供スヘキ材料ハ業已

ニ蒐集セラレタル事ト存候又工業上所有權ノ保護ヲ目的ト
セル特別條約書ノ認メ方ニ付テ要スル所ノ研究ノ爲メニ會
議ノ事業ニ妨得ヲ來サントノ御掛念ハ拙者ニ於テ御同意難
致義ニ有之候
本翰ノ主眼タル右二問題ハ改進ノ途ニ進行セル各國政府ニ
於テ許用セル經濟主義ニ全ク適合セル事ハ定メテ閣下ニ於
テモ御認メ有之候義ト確信致候
我共和政府カ獨リ率先ト云フニハ非ルモ率先者ノ一人トナ
リ友誼ヲ以テ日本政府ノ條約改正ヲ目的トシテ提出セル論
議ヲ贊成セシモ全ク日本カ泰西各國ニ行ハレタル改進ノ轍
ヲ履ムニ熱心ナル事ヲ感スルニ是レ由ルナリ
我政府ノ日本ニ對スル感情ハ終始一シテ變セス今後尙ホ
聊カモ變替スル事ナカルヘキハ拙者ノ確信スル所ニ御座候
此段得貴意候敬具
千八百八十四年八月廿一日
シエンキエウキツ
外務卿伯爵　井上馨閣下

註　1 前號文書ヲ參照

（右原文）

Tokio, 21 Août 1884.

Monsieur le Comte,

Par la lettre qu'Elle m'a fait l'honneur de m'adresser le 15 de ce mois, Votre Excellence veut bien me faire connaître les motifs qui, dans son opinion, semblent s'opposer à ce que la demande formulée par mon Gouvernement relativement à la suppression des droits de sortie sur les soies, aboutisse à un résultat favorable. Elle invoque notamment les considérations qu'Elle a fait valoir dans les entretiens privés qu'Elle a eus avec moi sur cette question; Elle rappelle, en outre, les observations auxquelles a donné lieu l'examen de son memorandum au cours de la conférence préparatoire du 29 Juillet dernier.

En ce qui concerne l'argument tiré de la Conférence, je me bornerai à constater que le projet de révision rédigé par Votre Excellence ayant écarté, de prime abord, la demande de mon Gouvernement, il n'est pas étonnant qu'elle n'ait point été soutenue par mes collègues. Elle n'a point, toutefois, provoqué de protestations aussi absolues que Votre Excellence paraît le croire, jugeant des opinions émises par l'aperçu très sommaire qui Lui en a été donné la question n'a d'ailleurs été qu'effleurée comme ne l'ignore pas Votre Excellence.

Quant aux entretiens privés que nous avons eus, je pense qu'il est utile, du moment que Votre Excellence y fait allusion, d'en retracer l'ensemble. Or, c'est le 3 décembre dernier que j'eus, pour la première fois depuis mon arrivée au Japon, l'honneur d'aborder avec Elle l'examen de la question de la révision des traités et de proposer la suppression des droits de sortie sur les soies. Je n'eus pas à insister sur ce point. Votre Excellence s'empressa, en effet, de déclarer que notre demande était juste, et qu'elle répondait entièrement aux intérêts des producteurs japonais.

Ces excellentes dispositions, manifestées alors par Votre Excellence, et que j'eus encore, dans la suite, l'occasion de constater, je m'empressai d'en faire part à mon Gouvernement, qui, de son côté, y trouva comme un encouragement à favoriser l'oeuvre de la révision des traités.

Il est vrai que, dans ces derniers temps, Votre Excellence, tout en continuant, en principe, à apprécier de la même manière la question des soies, l'a envisagée différemment, en fait, comme son mémorandum en témoigne. Mais, je me plais à espérer qu'après nouvel examen, Votre Excellence revenant à ses intentions premières, voudra bien appuyer, pendant les travaux de la prochaine conférence une mesure contre laquelle aucune objection sérieuse ne peut être élevée, et que, loin de nuire à qui que ce soit, est de nature à assurer l'avenir des producteurs Japonais tout en servant les intérêts étrangers.

La question de la propriété industrielle est plus simple. L'unique objection qu'on ait faite pendant la conférence du 29 Juillet, à la proposition dont elle est l'objet de la part de mon Gouvernement, c'est que le Gouvernement japonais n'a pas encore de lois sur les brevets d'invention. Votre Excellence m'accordera qu'il est aisé de faire disparaître cette objection. Déjà une loi sur les marques de fabrique a été publiée. Il n'y a qu'à compléter l'oeuvre par du Japon n'ont, d'ailleurs, jamais varié, et j'ai l'intime conviction qu'ils ne se modifieront point dans l'avenir.

Veuillez agréer, Monsieur le Comte, l'assurance de ma très haute considération.

signé: Sienkiewicz

Son Excellence

Monsieur le Comte Ino-ouye, Ministre des Affaires Etrangères Tokio.

一一三 明治十七年一月二十日 露國公使ヨリ外務卿宛

我覺書ニ基キ條約改正交渉開始方承諾ノ件

第六十四號

手紙ヲ以テ啓上致候陳ハ去ル八月四日附御書翰ニ添ヒ條約改正ノ儀ニ付貴國政府ノ所見ヲ述叙（セ）シ所ノ覺書ヲ御送リ越シ且右覺書ノ趣意ハ貴國ト我國トノ間ニ貿易新定約書ヲ取リ結ブタメ此度開クベキ談判ノ基據ニ相成ルベキト御信用ノ邊ヲ同時ニ御申越成サレ候

右閣下ノ御書翰及ヒ覺書ヲ共節不取敢我外務卿ヘ了閑ノタメ差遣シ申候處今般宰相ギリス氏ヨリ電信ヲ以テ我政府ニ於テハ右覺書ノ趣意ヲ此度開クベキ談判ノ基ニスル事ヲ承諾セシ旨ヲ申越候依テ右ノ趣ヲ閣下ヘ申進候且又右ノ談判ニ關スル委任狀モ近日ノ中ニ我レノタメ到着可致ト存候敬具

明治十七年十月二十日

露國特命全權公使
アゲヤキドフ

外務卿 井上 馨閣下

註 本譯文ハ露國公使來翰ニ添付シ來リタルモノヲ露文原文省略ス

一一四 明治十七年一月二十四日 露國公使ヨリ外務卿井上宛

來翰受領ノ件

本月十日付第六十四號貴簡接收披見候陳ハ去ル八月四日付ヲ以テ差進候條約改正ニ關スル我政府ノ意見ヲ叙述セル所ノ覺書ヲ右拙簡トモ早速貴政府ヘ御進達被下候處貴政府ニ於テハ右覺書ノ趣意ヲ此度開クベキ會議ノ基礎ト爲ス

une loi nouvelle dont les éléments, comme j'ai lieu de le penser, sont déjà renuis. Je ne puis, d'ailleurs, partager la crainte que marque Votre Excellence de voir les travaux de la Conférence entravés par les quelques études que nécessiterait la reduction d'une Convention spéciale ayant pour object de protéger la propriété industrielle.

Votre Excellence reconnaîtra, j'aime à le croire, que les deux questions qui font l'objet de cette lettre sont absolument conformes aux principes économiques adoptés par toutes les Puissances qui suivent la voie du progrès.

Et c'est précisément parce que le Gouvernement de la République apprécie, comme ils le méritent les efforts que fait le Japon pour s'assimiler tous les progrès accomplis par les Puissances occidentelles qu'il a été l'un des premiers, si ce n'est même le premier, à accueillir avec un sympathique empressement les ouvertures faites par le Gouvernement de Sa Majesté le Mikado en vue de la révision des traités.

Les sentiments de mon Gouvernement à l'égard

事ニ御承諾相成候旨貴國外務卿閣下ヨリ御電報有之候趣竝右會議ニ關スル御委任狀モ近日御接手可相成趣御通知相成致了承候此緊切ノ問題ニ付貴政府ニ於テ右樣迅速ニ御承諾相成候段我政府ノ深謝スル所ニ有之畢竟閣下ノ御盡力不渺儀ト存候此段不取敢及御回答候敬具

明治十七年十月廿四日

外務卿伯爵　井上馨

露西亞國特命全權公使

アレキサンドル、ダウヰドフ閣下

一一三五　明治十八年三月九日　佛國公使ヨリ井上外務卿宛

商標保護條約案送致ノ件

附屬書　右條約案

外務卿伯爵　井上　馨閣下　　シエンキウヰツ

敬啓然ハ本日御面晤ノ榮ヲ有シ候節貴政府ニ於テ工商標保護ノ儀ニ付我國政府ト一ノ條約ヲ締結可相成御企圖ニ有之候趣御通話相成依テ右ニ付別紙條約案供御高覽候小官ニ於テハ該案ハ貴我兩國政府ノ目的ニ相叶候モノト被存候

閣下ニ於テモ御賢察相成ルベキ通リ該案ハ互相ノ主義ニ基キ候儀ニ有之候

右ノ次第ニ付該案ハ果シテ閣下ノ認許ヲ得ベキヤ否ヤ何分至急御申越相成候樣致希望候敬具

東京　千八百八十五年三月九日

（右原文）

Tokio, le 9 Mars 1885.

Monsieur le Comte,

Votre Excellence ayant bien voulu me faire connaître, dans l'entretien que j'ai eu l'honneur d'avoir avec Elle aujourd'hui, que le Gouvernement de S. M. le Mikado était disposé à conclure un arrangement avec le Gouvernement de la République concernant la protection des marques de fabrique ou de commerce, je m'empresse de Lui communiquer, ci-joint, un projet du déclaration qui me paraît répondre aux vues des deux Gouvernements.

Votre Excellence remarquera, en effet, que ce projet d'arrangement repose sur le principe de la réciprocité.

Je prierai donc Votre Excellence de vouloir bien me faire savoir, le plus tôt qu'il lui sera possible, si le projet que j'ai l'honneur de lui soumettre, a obtenu son approbation.

Veuillez agréer, Monsieur le Comte, les assurances de ma très haute considération.

Sienkiewicz.

Son Excellence

Le Comte Ino-ouyé Kaoru

Ministre des Affaires Etrangères.

附屬書

商標保護條約案

佛蘭西共和國政府竝ニ皇帝陛下ノ政府ハ兩國人民ノ工商業ヲ充全ニ保護セン事ヲ欲スルヲ以テ之レガ爲メ適正ニ委任ヲ受ケタル下名ノ者等ハ左ノ條々ヲ約定ス

第一條

日本國ニ在ル佛蘭西人及佛蘭西國ニ在ル日本人ハ工商標ノ所有權ノ事ニ關シテハ自國人民同樣ノ保護ヲ受クベシ

第二條

前條ニ定メタル工商標ノ保護ヲ受ケントスルニハ日本國ニ在ル佛蘭西人ハ農商務省ニ於テ佛蘭西ニ在ル日本人ハ「セーヌ」裁判所ノ書記局ニ於テ條約國ノ法律規則ニ定メタル條件ト法式トニ適從シテ其標ノ登記ヲ受クベシ

此條約ノ適用スベキ工標又ハ商標ハ彼我各國ニ於テ本國ノ法制ニ從フテ其占有者ニ適正ニ得有セラレタルモノタルベシ言ヲ替テ云ヘハ卽チ佛蘭西ノ工商標ノ性質ハ日本ニ於テハ佛蘭西ノ法律ニ從フテ判定シ之レト同シク日本ノ工商標ノ性質ハ佛蘭西ニ於テハ日本ノ法律ニ從フテ判定スベシ

右ノ確證トシテ下名ノ者等ハ云々……

（右原文）

Projet de déclaration.

Le Gouvernement de la République Française et le Gouvernement de S. M. le Mikado, désirant assurer une complète et efficace protection à l'industrie et au commerce des nationaux des deux pays, les soussignés, dûment autorisés à cet effet, sont convenus des dispositions suivantes:

"Art. 1er—Les Français au Japon et les Japonais en France jouiront, en ce qui concerne la propriété des marques de fabrique ou de commerce de la même protection que les nationaux.

Art. 2.—Pour assurer à leurs marques la protection stipulée par l'article précédent, les Français au Japon, devront en effectuer le dépôt au Ministère de l'Agriculture et du Commerce, et les Japonais, en France, au greffe du Tribunal de Commerce de la Seine, en se conformant, d'ailleurs, aux conditions et formalités prescrites par les lois et réglements des Etats contractants.

Il est entendu que les marques de fabrique et de commerce auxquelles s'applique le présent arrangement sont celles que, dans chacun des deux pays, sont légitimement acquises à leurs possesseurs, conformément à la législation d'origine; c'est-à-dire que le caractère d'une marque française doit être apprécié au Japon d'après la loi française, de même que le caractère d'une marque japonaise doit être jugé en France d'après la loi japonaise."

En foi de quoi, les soussignés, etc.

一二六　明治十八年四月二十五日　伊國公使ヨリ　井上外務卿宛

商標保護條約案領收ノ件

以書翰啓上候陳者先年東京ニ開設相成候條約改正豫議會ニ於テ御調製相成候稅目案中ニ指示有之候輸入稅ニ關シ是非二三ノ修正ヲ請求致度理由有之旨ハ過日御面晤ノ節閣下ニ申述置候

拙者ハ右ニ付可成丈ケ談判ノ再開竝ニ其好結局ニ至ルノ妨害無之樣希望致居候ニ付拙者ノ請求スル所ハ單ニ三ケ條即チ珊瑚幾那及ヒ食用ヲリーブ油ニ限リ申候若シ右ノ請求ヲ御承諾相成候ヘハ其他ノ物品ニ關スル輸入稅減少ノ義ハ要求致シ申間敷決意ニ御座候旨モ既ニ閣下ニ開陳致置候

右ノ如ク該稅目案ノ變更ヲ三品ニ限リ候ハ我々ノ貴帝國政府ニ對スル友誼ノ一證ヲ貴政府ニ向ヒ更ニ表示致度存意ニ有之候右ノ變更ハ我々ニ於テ至當且緊要ト見認ムルモノニ有之候即チ右ノ精神ヲ以テ前述拙者ノ發議ヲ玆ニ確證シ且

外務卿伯爵　井上　馨

佛國公使　シヱンキウキツ閣下

本月九日付貴信接手致拜讀候貴我兩國間工商標保護ノ儀ニ關スル條約按御送付相成正ニ領收該案ハ互相ノ主義ニ基候旨御申越致承知候御差越ノ草案ハ篤ト熟考ノ上當方ノ意見可申進候此段一應及回答候敬具

一二七　明治十八年四月二十一日　井上外務卿ヨリ　佛國公使宛

商標保護條約締結方ノ件

以書翰啓上候陳ハ貴我兩國間工商標保護ノ儀ニ付本年三月九日附貴翰[1]ヲ以テ條約案相添御照會ノ趣ニ付テハ同月十四日付ヲ以テ一應ノ回答[2]申進置候處該條約ハ互相ノ主義ニ基キ候故貴我兩國ノ爲メ有益ノ事ニ可有之我政府ニ於テ至極御同意ニ付今般條約改正案中ニ書加候樣致度候此段更ニ回答申進候敬具

註　1 2 夫々前掲一二五、一二六文書

一二八　明治十八年四月二十五日　伊國公使ヨリ　井上外務卿宛

珊瑚外二品ノ稅率變更方ノ件

外務卿伯爵　井上　馨閣下

伊國特命全權公使　エルド、マルチーノ

以書翰致啓上候陳者先年東京ニ開設相成候條約改正豫議會ニ於テ御調製相成候稅目案中ニ指示有之候輸入稅ニ關シ是非二三ノ修正ヲ請求致度理由有之旨ハ過日御面晤ノ節閣下ニ申述置候

拙者ハ右ニ付可成丈ケ談判ノ再開竝ニ其好結局ニ至ルノ妨害無之樣希望致居候ニ付拙者ノ請求スル所ハ單ニ三ケ條即チ珊瑚幾那及ヒ食用ヲリーブ油ニ限リ申候若シ右ノ請求ヲ御承諾相成候ヘハ其他ノ物品ニ關スル輸入稅減少ノ義ハ要求致シ申間敷決意ニ御座候旨モ既ニ閣下ニ開陳致置候

右ノ如ク該稅目案ノ變更ヲ三品ニ限リ候ハ我々ノ貴帝國政府ニ對スル友誼ノ一證ヲ貴政府ニ向ヒ更ニ表示致度存意ニ有之候右ノ變更ハ我々ニ於テ至當且緊要ト見認ムルモノニ有之候即チ右ノ精神ヲ以テ前述拙者ノ發議ヲ玆ニ確證シ且拙者ハ我至尊ナル皇帝陛下ノ政府ニ代リ我政府ニ於テハ右稅目案中左ニ細記セル改正ヲ除クノ外渾テ他各國ト同一ノ約定ニテ之ヲ承諾致候旨今謹テ閣下ニ及御通知候

輸入稅最高額

珊瑚　一割マテ

幾那　五分マテ

オリーブ油　五分マテ

右ニ付可賜御回答ニ對シ前以テ鳴謝致置候此段得貴意候敬具

一千八百八十五年四月二十五日

（右原文）

Tokio, le 25 Avril 1885.

Monsieur le Comte,

J'ai eu l'honneur de faire part a Votre Excellence, dans les conversations que nous avons eues ensemble, des raisons impérieuses qui m'obligent à demander quelques modifications aux droits d'importation qui sont proposés dans le Projet de Tarif élaboré pendant les conferences préliminaires qui ont eu lieu à Tokio pour la révision des Traités,

· Avec le désir de n'apporter, dans la limite du possible, aucune entrave à la reprise des négotiations et à leur heureuse conclusion, j'ai déclaré à Votre Excellence que je me bornais à trois articles (le Corail, le Chinine, et les Huiles d'olive pour table), et que je renoncerais, si ma demande était accueillie favorablement, à formuler d'autres demandes de réduction sur différents autres articles.

En limitant ainsi les corrections du Projet susdit de Tarif, corrections que nous jugeons équitables et qui nous sont nécessaires, nous avons voulu donner encore une fois au Gouvernement Impérial une preuve de nos sentiments envers Lui. Et c'est dans ce même esprit, Monsieur le Comte, qu'en vous confirmant aujourd'hui mes déclarations précédentes, j'ai l'honneur de vous informer, au nom du Gouvernement du Roi, mon Auguste Souverain, que nous acceptons le Projet de Tarif, dont il est question, aux termes et aux conditions des autres Puissances ; mais avec les modifications de detail qui suivent.

Corail maximum du droit d'importation : 10 pour cent

正海關稅則中珊瑚、幾尼泥及橄欖油ノ輸入稅ハ珊瑚ノ分ヲ一割ニ他ノ二品ノ分ハ各々五分ニ低減アラン事ヲ貴政府ニ於テ御希望相成候趣ニ有之候然ルニ過日來本件ニ付御面晤ノ際既ニ充分陳述致シ置候通去ル明治十五年豫議會ニ於テ承諾相成候輸入稅ヲ何レノ項目タリトモ今更ラ低減スル事ハ我政府ニ於テ甚困難トスル而已ナラス殆ト成シ克ハサルトスル理由有之候義ニシテ其理由ハ必ス閣下ノ御記憶相成候通二樣ニ有之候即チ第一改正海關稅則ハ豫議會ニ加列シタル各國ノ利益ヲ折衷シタルモノトシテ我政府於テ確ト之ヲ承諾致候事實アルト第二若シ右確定シタル稅目中何レノ項目タリトモ諸締盟國中一國ノ望ニ應シテ之ヲ低減スルニ於テハ他ノ條約國モ亦必ス同樣ノ讓與ヲ得ント要求スルニ至リ竟ニハ許多ノ時日勞力ヲ費シテ得タル結果モ全ク無効ニ歸スヘキ恐アル事トニ候今般閣下ヨリ御申越ノ儀ニ對シ右ノ異論ハ妥當ナリトノ事ヲ閣下ニ於テハ長詳ノ辯明ヲ待タズ御了解相成事ト拙者敢テ思考致候閣下モ千萬御承知ノ通最初我政府ヨリ豫議會ヘ提出シタル輸入稅目ノ原案ハ我國ニ於テ關稅ヨリ收納セサル可ラサル歲入額ヲ適度公平ニ見積リ之ヲ基本トシテ調製シタルモノニ有之候然ルニ我政

Chinine 〃 〃 〃 5 pour cent
Huiles d'olive 〃 〃 〃 5 pour cent

En offrant à Votre Excellence mes remerciments anticipés pour la réponse qu'Elle voudra bien m'adresser, je saisis cette occasion, Monsieur le Ministre, pour vous renouveler d'assurance de ma plus haute consideration.

R. de Martino

A Son Excellence
Monsieur le Comte Inouye
Ministre des Affaires Etrangeres
etc. etc.
Tokio

一二九　明治十八年五月九日　井上外務卿ヨリ伊國公使宛

珊瑚外二品ノ稅率引下方ニ關シ回答ノ件

外務卿　井上　馨

伊太利國特命全權公使
コンマンドール、レナート、ヅ、マルチノ閣下

以書翰致啓上候陳ハ先月廿五日附ノ貴翰接手致披見候處改

府提出ノ原案ハ各國委員ニ於テ承諾相成ラサル廉モ有之隨テ右委員ヨリ更ニ稅目對案ヲ提出セラレタル次第ニ有之而シテ該對案中ノ稅率ハ原案ニ比シ餘程低額ノモノニ有之候テ假令我政府ハ其原案中曾テ過度ノ稅率ヲ提出セリトハ毛頭自認致サス候得共單ニ條約改正中本項ヲ確然決了致シタキ見込ヲ以テ乃チ右ノ稅目對案ヲ其儘承認致シタル次第ニ有之候斯ク迄讓與ノ精神ニ基キ既ニ其原案ヲ修正シタル儀ニ有之候ヘハ今右ニ付キ再審ヲ開キ又ハ既ニ我國ノ利益ニ關シ堪ル丈充分ノ低減ヲ爲シタリト信スルノ稅率ヲ尙ホ此上低減スル事ニ同意スルハ固ヨリ我政府ノ好マサル所ニ有之候將又輸入稅率ヲ苟モ變更スルニ於テハ其低減ト增加トヲ問ハス總テ之ヲ以テ再ヒ稅則ノ全體ヲ覆議シ且各々自國ノ爲メ讓與ヲ要求スル充分ノ理由ト視做スヘキ旨條約國ノ數者ヨリ我政府ニ申越有之候儀閣下ニ御通知致シ候ハヽ我政府於テ御來意ニ應スル事ヲ好マサルハ理由實ニ大ナリト直ニ御會得可相成ト信用致候若シ前條ノ如キ事ト相成候ハハ條約改正ノ終結モ大ニ遷延可致候ニ付我政府於テハ御申越ノ低減一件ヲ謹テ謝絕致候外無之儀ハ閣下ニ於テ御了解可相成候我政府ハ貴政府ノ常ニ我國ニ對シ表示セラルヽ友

誼信懇ノ精神ヲ恃ミ玆ニ本件ニ關スル措置ノ誤解セラルヽ事ナク閣下及貴政府ニ於テ前條御來意ニ應シ難キ所以ノ心底ヲ御酌量有之度敢テ希望致シ候實ニ若シ御來意ヲ反スヘキ萬已ムヲ得サル理由無之候ハヽ我政府ノ常ニ欣然應諾ヲ致サントスル貴政府ノ御所望ニ應スルノ心底ヲ以テ猶豫ナク御申越通リ承諾可致儀ニ有之候此段得貴意候敬具

註　珊瑚稅問題ニ關シテハ對伊交涉四一〇文書以下參照

一三〇　明治十八年六月十三日　井上外務卿山田司法卿ヨリ三條太政大臣宛

行政規則改正方上請ノ件

附屬書　行政規則取調意見書

親展第百七十號

今般締盟各國ト條約ヲ改正セントスルニ方リ我國在留ノ外國人ヲシテ先ツ我行政上ノ諸規則ヲ遵守セシムヘキ主意ニ他國政府粗同意有之候處右規則中或ハ甲乙矛盾抵觸シ或ハ現今歐米諸國ノ規則ト太タ權衡ヲ失シ候モノ有之候テハ甚以不都合ノ至ニ付曩ニ外務司法兩省ノ間ニ於テ委員ヲ設ケ夫々取調候處別冊ニ詳記スル如ク改正ヲ要スヘキ規則有之候例出版條例是ナリ蓋シ新聞條例罰則中印刷器ヲ沒收シ又ハ社主編輯人印刷人ハ新聞ニ關スル事項ニ付總テ共犯ヲ以テ論シ又行政官ノ認定ニ因リ發行ヲ禁止若クハ停止スルカ如キハ一二ノ國ヲ除クノ外歐米各國ノ法ニ於テ其類例ヲ見ル事甚タ稀ナリ其他各國ノ法ニ比較シテ多少過嚴ノ箇條アルヲ免カレス故ニ之ヲ改正シ且各國ノ體裁ニ倣ヒ出版條例中ニ新聞ノ事ヲ包括セシメ出版條例中版權ノ事ハ別ニ條例ヲ設ケラレン事ヲ要ス

次ニ集會條例ハ世人ノ喋々スルニ似ス各國ノ法ニ比較シテ非常ニ權衡ヲ失シタル者ニ非ラス唯十五年第廿七號布告ヲ以テ嚴酷ヲ加ヘ內務卿ノ認定ニ因リ結社集會ヲ禁止シ演說者ニ對シ若干ノ期限內演說ヲ禁止スルカ如キハ聊カ穩當ナラサルニ非ラスト雖トモ其適施ノ注意ニ因リ紛議ヲ生スヘキニ非ラス他日ヲ待テ改正スルモ可ナラン

次ニ行政處分ニ屬シタル賭博犯密賣淫ノ如キハ當分施行ノ處分規則ヲ廢止シ刑法ニ從ヒ司法處分ニ復セサル可ラス然ラサレハ實際ノ適施ヨリモ法律ノ體面ニ付テ一言ノ下ニ擯斥セラルヽ事ヲ免カレス就中賭博ハ骨牌骨子等ノ具ヲ以テ金錢物品ヲ賭シテ輸贏ヲ爭フモノヲ指ス義ナルヘシト雖トモ是等ハ法律上明ニ義解ヲ示シ歐米各國ノ法律ヲ參酌シテ犯罪ノ區域ヲ限定セサルトキハ歐米各國ニ行ハルヽ所ノ諸遊戲中之ニ類スルモノ少カラサルヲ以テ往々賭博ニアラサルモノヲ視テ賭博ト爲シテ處分スル等ノ不都合ヲ釀スヘク且此犯罪ノ如キ行政處分ニ屬シタルト刑ノ過嚴ナルト取押手續ノ疎略ナルト總テ各國ノ法ト權衡ヲ均フセサル所ナリ以上陳述スル所ノ如シト雖トモ新聞條例等ノ壓力ニ因リ過激暴論僅カニ迹ヲ收メ賭博犯處分規則等ニ因リ兇惡無賴漸ク業ニ就カントスルノ傾向アリ今也俄カニ是等ノ處分ヲ寬ニスルトキハ他ニ豫防ノ方法ナキニ非ラサル可シト雖トモ幾分カ其弊害舊ニ復スルノ恐アリ故ニ內治上未タ是等ノ規則ヲ廢スヘカラスト認メラルヽトキハ暫ク外國人ハ之ヲ遵守スルノ限ニアラスト定メラレン事ヲ希望ス

其他ノ行政規則中少シク改正ヲ要スヘキモノアリ

第一明治十六年十二月　第五十號布告古物商取締條例第六條中ニ一月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ三十圓以上三百圓以下ノ罰金ニ處ストアルヲ罰金三十圓以上五百圓以下ニ處スト改正アラン事ヲ要ス

（理由）刑法第四百一條ニ依レハ詐取ノ財物ナルヲ知

是等ハ皆今日ニ在テ豫メ改正增損ヲ爲シ置カサルトキハ會議開場ノ節諸規則等ヲ各委員ニ明示セサルヲ得サルノミナラス尙外國人ニ施行スルノ日ニ至リ我諸規則歐米各國ト大ニ權衡ヲ失シアル時ハ殆ント之ヲ實施スル能ハス苦情百出遂ニ外國ヨリ異議ヲ唱ヘ如何樣ノ困難ヲ生スヘクモ圖リ難ク頗ル懸念ニ堪ヘサル儀ニ有之候依テ別冊進呈仕候間至急御詮議ノ上其筋ニ於テ右規則改正增損ノ手續相成候樣致度此段上請候也

明治十八年六月十三日

外務卿伯爵　井上　馨

司法卿伯爵　山田顯義

太政大臣公爵　三條實美殿

（以下朱書）

上請ノ趣別紙意見書ノ旨趣ニ依リ改正案起草差出スヘシ

明治十八年九月十一日　太政大臣三條實美印

附屬書

行政規則取調意見書

行政規則中現行ノ儘ニシテ最モ外國人ニ適施シ難キハ新聞

テ故買スル如キモ十一日以上一年以下ノ重禁錮ニ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加スルニ過キス而シテ故物商條例ニ於テハ詐欺取財等ノ刑ヲ受ケタル者ヨリ賍物ニ非ラサル物件ヲ買取スルモ右第六條ニ依リ處斷スルニ至レリ其犯罪ノ情狀ヲ考フレハ賍物タルノ情ヲ知リテ買取等ヲ爲ス者ハ重クシテ其情ヲ知ラサル者ハ輕シト謂ハサル可ラス然ルニ其刑ハ之ニ反セリ殊ニ此條例ハ雇人之ヲ犯スモ雇主ヲ罰スルモノニシテ其體刑ヲ科シ又ハ罰金ニ處スルモ裁判官ノ見込ニ從フ可キモノナルニ雇人ノ犯罪ニ係ル場合ニ於テ雇主毫モ其情ヲ知ラサルモ亦體刑ヲ科セラルヽニ至ラン我邦ノ諸規則中他ニ斯ノ如キ不適當ノ例アルヲ見ス歐米各國ニ於テモ雇人ノ犯罪ニ係ルモ雇主ニ罰金ヲ科スル如キハ例規ナキニ非ラザルヘシト雖トモ雇主ニ體刑ヲ負擔セシムル事ナカルヘシ故ニ外國人ニ此條例ヲ適用セントスルハ甚タ不都合ナルヲ以テ其體刑ヲ削除セサル可ラス然レトモ古物商ハ一攫千金ノ利ヲ得可キ者ナキニ非ラサルヲ以テ其罰金ノ額ヲ增加セサルトキハ實際或ハ取締ノ道立タサルノ恐レナキニ非ラス因テ體刑ヲ削除シ罰金ノ最多數三百圓トアルヲ五百圓ト改正スルヲ適當ト考量ス

第二明治十三年一月第一號藥品取扱規則第六條中ニ三十圓以上五百圓以下ノ罰金若クハ一月以上一年半以下ノ懲役トアルヲ十圓以上百圓以下ノ罰金ト改メ又一圓以上二十五圓以下ノ罰金若クハ一日以上二十五日以下ノ懲役ヲ科シトアルヲ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處スト改メ其他刑法第二百五十五條ノ正條アルカ爲メ自然消滅シタル文字ヲ削除セサル可ラス且該規則ニ違背シテ毒藥劇藥ヲ販賣シタル者ハ刑法第二百五十四條ニ依リ處分ス可キノ明文ヲ揭ケン事ヲ要ス

（理由）規則ニ違背シテ毒藥劇藥ヲ販賣シタル者ハ刑法第二百五十四條ニ依リ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處セラルヽモ規則ニ違背シテ注意藥ヲ販賣シタル者ハ藥品取扱規則ニ依リ三十圓以上五百圓以下ノ罰金若クハ一月以上一年半以下ノ體刑ニ處セラルヽニ至ルノ不權衡ヲ生スルニ付刑法ニ準シテ其刑ヲ改メサル可ラス又第一條但書第三條第四條但書ニ違背シタル者ノ罰例ノ如キモ亦從テ改正セサレハ甚不都合ナリ又刑法ニハ販賣ノミヲ擧ケテ授與ノ點ヲ揭ケサルヲ以テ是亦權衡ヲ刑法ニ取リ其罰例ヲ改メサル可ラス

第三明治十一年八月第二十一號布告藥用阿片賣買製造規則第十六條ニ此規則ニ違犯スル者ハ云々百五十圓ヨリ五百圓以下ノ罰金ニ處ストアルヲ第八條第九條第十二條ニ違背シタル者ハ五十圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處シ第六條第十條第十一條ニ違背シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處スト改正アラン事ヲ要ス

（理由）藥用阿片ハ一種ノ劇藥タルニ過キサルヲ以テ規則ニ違背シテ之ヲ販賣スル者ハ刑法第二百五十四條ノ刑ヲ適用セサル可ラスト雖トモ抑藥用阿片ハ阿片烟ニ變製スルノ恐アル等通常ノ劇藥ト異ナリ從テ其罰例モ一層嚴ナラサレハ取締ノ道立チ難キニ付總テ該規則ノ罰例ヲ適用スルヲ允當ナリトス然レトモ事ノ輕微ニ屬スルト重要ナルトヲ區別セス一概ニ百五十圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處スルハ過嚴ナルノミナラス權衡上ニ於テモ不當ヲ免カレサルヲ以テ犯情ノ輕重弊害ノ多少ニ從ヒ刑ヲ二樣ニ區別セサル可ラス而シテ其重要ノ事件ニ係ルモ總テ百五十圓以上ノ罰金ヲ科セントスルハ實際或ハ犯情ニ適セサル者アラン故ニ其最寡數ヲ五十圓ト改メ最多數ヲ從前ノ通五百圓ト定メ其輕微ナル條件ニ違背シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ止ムルヲ允當ナリトス

第四明治十二年七月第二十九號撿疫停船規則第一條第二條第三條ニ開港場トアルハ海港ト改正シ明治十五年六月第三十一號布告虎列刺病流行地方ヨリ來ル船舶檢查規則ヲ廢止セラレ右檢疫停船規則ヲ專施セラレン事ヲ要ス

（理由）檢疫停船規則ハ外國ニ於テ傳染病流行スル時開港場ニ於テ之ヲ施行シ虎列刺病流行地ヨリ來ル船舶檢查規則ハ內地ニ於テ該病流行スル時內地各港ニ於テ之ヲ施行スル爲メ設ケラレタルヘシト雖トモ此區別ナク一體ニ檢疫停船規則ヲ施行セラレスシテ船舶檢查規則ヲ施行セラレタルハ外國ヲシテ服從セシムルノ難キト莫大ノ經費ヲ要スルトニ原因シタル者ナルヘシ然ルニ船舶檢查規則ハ完全ナラサル所アルヲ以テ實際豫防ノ道充分ナラス今ヤ條約ヲ改正シ諸規則ハ外國人ヲシテ遵奉セシムルニ於テハ檢疫停船規則モ亦同シク遵守セシムル時機ヲ得タル者ナレハ此際ニ方リ船舶檢查規

則ヲ廢止セラレ檢疫停船規則ヲ實施ス可キ者トナスハ甚タ必要ナリ然レトモ開港場ニアラサル通常ノ海港ニ此規則ヲ施行セサルトキハ流行病ノ蔓延ヲ防ク能ハサル可シ故ニ此規則ハ通常ノ海港ニ於テモ施行ス可キ者ト爲サヽル可カラス因テ第一條第二條第三條ニ開港場トアルヲ海港ト改メラレン事ヲ要ス

第五明治九年四月第五十六號布告遺失物取扱規則第八條中若シ以下ヲ削除シ第十四條中逸走畜類ニ係ル罰例ハ刑法遺失物條ニ準シ改正アラン事ヲ要ス

（理由）遺失物取扱規則第八條ニ逸走畜類他人ノ財產ヲ毀損スルトキハ二圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ストアルモ元來逸走畜類ノ器物ヲ毀損スルカ如キハ所有者ノ故意ニ出デタル者ニ非ラサルヲ以テ之ニ罰金ヲ科スルハ允當ナラサルニ付其罰例ヲ削除シ損害賠償ニ止メン事ヲ要ス又通常ノ遺失物ヲ得テ所有主ニ返還セサルト逸走畜類ヲ得テ所有主ニ返還セサルトハ其情狀彼此輕重ナシ故ニ本則第十四條ハ刑法第三百八十五條ト同一ノ罰例ヲ設ケサル可ラス

第六行政規則罰例ノ總則ヲ設ケラレン事ヲ要ス

（理由）諸規則ノ罰例ニハ雇入ノ所爲ニ係ルモ雇主ヲ罰シ若クハ再犯加重數罪俱發等刑法ノ總則ヲ適用ス可カラサル者アリ然ルニ同種類ノ規則ニシテ刑法ノ再犯加重例等ヲ適用セサルノ正條ヲ揭ケタル者アリ或ハ之ヲ明示セサル者アリテ彼此ノ權衡平ヲ失スル者アリ抑刑法ト諸規則トハ概ネ其性質ヲ異ニスルヲ以テ其總則モ亦之ヲ異ニセサレハ不都合ノ結果ヲ生スルノ弊アリ然レトモ各規則ニ總則ヲ揭ケントスルハ繁雜ニ堪ヘス別ニ諸規則ノ總則ヲ設クルニ非サレハ到底不都合ヲ免カルヽ能ハス或ハ諸規則中ニ其總則ヲ適用シ難キ者ナキニ非サル可シト雖トモ其取除法ヲ揭クヘキ規則ハ刑法ノ總則ヲ適用シ難キ者ヲ揭クルニ比スレハ其條件甚タ尠ナキヲ以テ誤脫ノ憂モ亦尠ナカル可シ假令其誤脫アルモ刑法ノ總則ヲ適用セサルノ正條ヲ誤脫スルカ如ク甚シキ不權衡ヲ生スル事ナシ尤明治十四年第七十二號布告アリト雖トモ是亦完全ノ規則ニアラス且其布告以後ニ頒布シタル諸規則ニ及ホス事ヲ得サルヲ以テ實際不都合ヲ免レサルニ付之ヲ改正セサル可ラス因テ司法省ニ於テ諸罰則ノ總則ヲ取調上申セン事ヲ欲ス

一訴訟規則等至急頒布セラレン事ヲ要ス

（理由）我邦ノ訴訟手續等ハ完備セサルヲ以テ內國人ノ訴訟ニ付テモ尙ホ不都合ヲ免レス今ヤ日本裁判所ノ管轄ニ屬スヘキ內外人民交涉ノ民事訴訟ニツキ外國ニ對シ從來ノ訴訟手續等ヲ其儘施行セントスルトキハ之カ爲メ紛議ヲ生スル等ノ弊アラン故ニ其手續等ヲ改正若クハ制定シテ不備ナキヲ期スルハ甚タ必要ナリ而シテ訴訟手續ノ如キ裁判所ニ於テモ少シク習熟ノ猶豫ヲ要シ且施行ノ準備ヲ爲サヽル可ラス依テ曩ニ司法省ヨリ上申シタル行政裁判手續及使吏規則ハ至急頒布セラレン事ヲ要ス

又訴訟規則財產差押規則民事期滿免除規則竝身代限規則改正案ハ現今其筋ニ於テ取調中ニ係ルヲ以テ追テ上申アル可キニ付是亦急速頒布セラレン事ヲ要ス

一民事ノ契約ニ關スル規則及會社條例ヲ至急頒布セラレン事ヲ要ス

（理由）民事ノ契約ニ關スル規則及ヒ會社法ノ如キハ我邦未タ成文ノ規則ヲ概ネ慣例ニ因リ其慣例ナキモノハ條理ニ依レリト雖トモ今般條約ヲ改正セラルヽトキハ外國人ニ於テモ之ニ從ハサル可ラス然ルニ外國人ハ我邦ノ慣例ヲ熟知セサルヲ以テ甚タ困難ヲ極ムヘシ又內國人ニ於テハ舊慣ニ因襲シ契約等ヲ疎略ニシ不慮ノ損失ヲ被ムルニ至ル等內外人民共ニ不都合ヲ免ル能ハサルニツキ成文ノ規則ヲ設ケ其遵守スル所ヲ知ラシメサル可ラス因テ民法編纂局ニ於テ着手セル民法中ノ契約編竝ニ太政官ニ於テ取調ヘラレタル會社條例ハ至急頒布セラレン事ヲ要ス

一警察ニ屬スル法律規則竝ニ其施行方法ヲ編纂シテ之ヲ一全書ト爲シテ刊行セラレン事ヲ要ス

（理由）從來警察ニ屬スル法律規則ノ頒布セラレシモノ少ナカラス頗ル多岐ニ涉リ一見之ヲ了知シ難ク且之等ノ法制ハ國々其宜ニ從ヒ其制ヲ異ニスルモノナルニ依リ外國人ノ如キハ最モ詳ニ我警察法ノ如何ヲ知ラシメサルヘカラス故ニ先般外務內務司法ノ三省ニ於テ委員ヲ設ケテ警察全書ノ編纂ニ着手セシメタレハ其完了ニ及ヒテ速ニ刊行シテ之ヲ內外人民ニ告示セラレン事ヲ要ス

一三一　明治十八年七月十一日　井上外務卿ヨリ在外各帝國公使宛

歐米各國ノ連合政策打破方ニ關シ訓令ノ件

九鬼公使
田中公使
青木公使
河瀬公使
蜂須賀公使
花房公使

井上外務卿

歐米各國カ從來我國ニ對シテ執レル所ノ政策ハ所謂ル協同連合ノ政策ニシテ之ヲ確ムルニ條約中最惠國條款ヲ以テシタルカ故ニ此最惠國條款ノ存セン限ハ我國ハ條約國中ノ一國ニ許シタル權利ハ其 Conditional and Reciprocal ト否トヲ問ハス一併之ヲ他ノ條約各國ニモ許サヽルヘカラサル義ニ有之候抑國勢人情各國互ニ相同シキヲ得ス隨テ其政策通商ノ利害モ亦各異同ナキ能ハス然ルニ今之ニ對スル彼是一樣ノ法ヲ以テシ曾テ其異同ヲ問ハストセハ彼我共ニ以之有益ノ方法トスル事ヲ得ス依是觀之最惠國條款ノ不便ハ多ク辨スルヲ待タス候

尤モ最初我國カ各國ト條約ヲ結ヒタルノ時ニ方テハ我國政策ノ方向尚鎖國ノ餘習ヲ帶ヒ開明ノ度未タ未開ノ域ヲ脫スル能ハサリシヲ以テ歐米諸國カ連合ノ政策ヲ執リシハ彼ニ取リ已ヲ得サルニ出タルナルヘクシテ又有益ノ事ト雖トモ其時ヨリシテ今日ニ至リ既ニ二十餘年ヲ經過シ而シテ此間我國開明ノ度ハ進歩シテ止マス外交ノ事亦繁雜ヲ加ハヘタルハ各國ノ共ニ承認スル所ニ有之候開明ノ度漸ク進ミ外交ノ事益々活潑ナルニ從ヒテ政策通商ノ利害各國益々逕底アルニ至ルハ自然ノ勢ニ有之故ニ最惠國條款ノ不便ハ今日ニ至テ彼我雙方ニ取リ益甚數ヲ感スルニ立至候

蓋シ今日ニ在テ彼我ノ間其起スヘク設クヘキノ事項固ヨリ甚タ多シ但タ之ヲ或ル一國トノ間ニ設ケテ利アリトスルモ之ヲ各國ニ及ホストキハ却テ害トナルモノアルヲ以テ我國ハ其起スヘク設クヘキ必要事件ニシテ已ムヲ得ス放擲シテ顧ミサルモノ往々少ナカラス候今ヤ歐米諸國大ニ植民政策ヲ擴張シ競テ東洋ニ着手ス誠ニ東洋多事ノ日ト云ハサルヲ得ス此時ニ方テ我國ノ地位猶從來ノ檢束ヲ免ルヽ能ハスンハ國家將來ノ隆否ニ於テ其關係スル所決シテ少ナカラスト存候

以上陳述スルカ如キ事情ナルヲ以テ今日我國ニ於テ切ニ希望スル所ノモノハ歐米諸國カ從來ノ連合政策ヲ捨テヽ各自獨立シテ我國ト交際セン事ニ有之候

且ツ願ミテ歐米諸國ノ爲メニ計ルモ亦タ連合ノ政策ヲ今日ニ維持スルノ必要無之ト相信シ候蓋シ彼我ノ間其起スヘキ者モ未タ之ヲ起サス設クヘキ者モ未タ之ヲ設ケサルハ連合政策ノ結果タル事上院ニ開陳シタル通ノ次第ニ有之今ヤ各國競テ東洋ニ着手ノ時ニ際シ其起スヘキ者ハ速カニ起シ設クヘキ者ハ速カニ設ケ以テ各自其占有スヘキ利益ヲ占有スルハ今日ノ急務ナルヘク然ハ則チ連合ノ政策ハ之ヲ今日ニ維持スルノ必要無之ノミナラス之ヲ廢スルハ却テ時機ニ適スル者ト可申候

然シナガラ今回ノ條約重修ニ際シテ直チニ最惠國條款ヲ變更シ純然タル Conditional and Reciprocal ニスル事ハ各國ノ承認ヲ得カタキ事ト存候ヘ共既ニ今回ノ改正案中ニモ本邦開明ノ進歩ニ應シ時勢之ヲ必要トセハ右條約ニ一定ノ期限アルニモ拘ラス追時適當ノ改正ヲナスヘシトノ明文アレハ終期ヲ待タスシテ變更ノ案ヲ提出スルノ機會ナシトスヘカラス固ヨリ今日ニ在テ能ク之ヲ斷言シ得ヘキ事ニハ無之候ヘ共我國從來ノ進歩ニ依テ之ヲ徵スレハ三五年ノ後其達スル所ノ開明ノ度ハ蓋シ豫想ノ外ニ出ルモノアルヘシ而シテ歐米諸國ノ東洋政策モ敢テ今日ノ地位ニ躊躇スル事ナカルヘシ此時ニ至ラハ最惠國條款ノ不便ヲ感スル事益切ニシテ彼我雙方ノ利益遂ニ之ヲ廢棄セン事ヲ求ムルヲ不可知ト存候本邦在留ノ各國公使ニ對シテハ既ニ拙官ヨリモ屢々之ヲ開陳シ而シテ其中一二公使ハ稍々悟ル所アルモノヽ如ク或ハ本國政府ニ向テ建議シタル向モ有之哉ニ相聞ユ候ヘ共貴官ニ於テモ此機ヲ失セス駐留國政府ニ在ル適當ノ人々ニ接シ前陳ノ論旨ヲ說述シ連合政策ノ只我ニ於テノミナラズ彼ニ取リテモ不利ナル所以ヲ縷述相成豫メ他日最惠國條款變更ノ地歩ヲ存シ候樣御盡力相成度候（青木公使ヘ本件ニ付ロスラル氏ヲシテ起草セシメタル最惠條款案及其說明書爲御參考差進候尤モ右ハ十分ナルモノニ無之候間其念ニテ御閱讀有之度候）

右申進候也

註　青木公使ヘノロスラル氏ノ最惠條款案及其說明書見當ラス

九鬼隆一公使ハ米國、田中不二麿公使ハ伊國、青木周藏公使ハ獨逸、河瀨眞孝公使ハ英國、蜂須賀茂昭公使ハ佛國、花房義質公使ハ露國駐劄ナリ

一三二　明治十八年九月十一日　井上外務卿ヨリ　蜂須賀駐佛公使宛

西班牙交渉ニ關シ稅率變更ニツイテ帝國政府ノ所見通知ノ件

附屬書一　十八年八月十九日附西班牙代理公使來翰
二　同三十一日附同公使ヘノ回答
三　同二十二日附同公使來翰
（全權委任狀添付）
四　同九月七日附同公使ヘノ回答

機密第四十二號

在佛特命全權公使蜂須賀茂韶殿

外務卿伯爵　井上　馨

條約改正豫議會ニ於テ決定シタル稅目中ニ修正ヲ加ヘ度義ニ付去ル八月十九日附機密信ヲ以テ本邦駐劄西班牙臨時代理公使ヨリ甲號ノ通申出有之候ニ付乙號ノ通回答致候就テハ右我政府ヨリノ回答ノ旨趣ヲ體認相成貴官同國ヘ御出張相成候節ハ同國外務卿ヘ御面會ノ上ニ而我政府ノ旨趣充分徹底致候樣御說明相成此際同政府ヘ稅目變更ヲ主張相成候而ハ佗ノ各國ニ於テモ同樣ノ事ヲ要求スルニ至リ折角今日ノ豫議モ徒爾ニ屬スベキ趣懇切ニ御辨解相成必我輩望ノ相

通リ候樣御盡力可被成候又同公使ハ不遠東京ニ於テ開クヘキ條約改正會議ニ參列スル爲メ其全權委員ヲ被任候旨丁號ノ通其委任狀譯文添通報有之候間丙號ノ通リ回答致置候此段爲御心得別紙書類相添及御通知候也

甲號　八月十九日附西班牙代理公使來翰
乙號　八月三十一日附同公使ヘ回答書簡
丙號　八月二十二日附同公使來翰委任狀譯文共
丁號　九月七日附同公使ヘ回答

附屬書一

甲號　明治十八年八月十九日附西班牙代理公使來翰
輸入稅率改訂ニ關スル件

機密

外務卿伯爵　井上　馨閣下

西班牙代理公使

アニユエル、ハストル、イ、ベドアイヤ

以書翰致啓上候陳者來回ノ東京各國會議ニ於テ確定可相成稅目中我政府ニ於テ修正差加度希望致候條項昨日御面會之節御協議之旨ニ從ヒ玆ニ以書回致開陳候

昨日閣下ニ於テモ御自證相成候通稅目對案之義ニ付貴國副

委員鹽田氏ト屢々御內話之末日本政府ニ於テ右對案御認容相成候マテニハ外國委員ノ間ニ種々異議有之候事ハ閣下之能ク記臆セラルヽ所シテ特ニカスチヨ氏カ珈琲葡萄酒煙草及最モ砂糖ニ課セラレタル新稅ニ關シ不同意ヲ抱キシ事ハ鹽田氏之御記臆相成候義ト存候故ニカスチヨ氏ハ西班牙國政府ハ新稅ニ同意スマシク確信スル旨申述候ヘ共同僚輩之懇請ニ依リ公然會場ニ於テ反對之說ヲ吐露候義ハ絕念致候ヘ共其サー、ハルリー、ペアクス氏ニ寄セタル書翰中ニ於テ西班牙國ヨリ來ル所ノ物品ニ關スル同氏之意見ヲ申述有之候此書翰ハ曾テ委員會議ニ於テ朗讀相成候

右之次第ニモ拘ハラズデルカスチヨ氏ハ曾ニ本國政府ヘ稅目案ヲ送附致候ノミナラス又該案之各國熟議ニ出テタルヲ以テ西班牙政府ニ於テモ之ヲ認容アランコトヲ懇望致候然ルニ今般西班牙國政府ハ右稅案ニ關シ新ニ訓令ヲ拙者ヘ差越候處同政府ハカスチヨ氏先見之通煙草葡萄酒火酒及特ニ砂糖ニ課セラレタル稅目ニ付不同意ニ有之候唯今閣下ニ此書ヲ進呈致候ハ卽右件ニ付會議ノ節公然我政府之希望ヲ陳述致候ヨリ寧ロ豫メ今日ヨリ其次第ヲ開陳シテ何トカ御協議致度存候故ニ御座候

大抵各員委否寧ロ稅目ニ付修正ヲ加ヘント希望スル各政府ノ其委員ニ與ヘタル訓令ハ閣下皆御承知相成候處熟レノ國モ他國ニ於テ異存無之以上ハ貴政府之御說ニ從フヘキ覺悟ニ有之候趣致承知候

且拙者ニ日本政府カ彼對策ヲ認容シタル前例ニ鑒ミ其幾何調和ノ精神ヲ持シタルヤ且此後ト雖モ尙幾何調和之精神ヲ持セントスルヤヲ推察シ及各國委員ニ許シ得サルコトハ之ヲ其中ノ一人ニ許シ得サルコトヲ斟量可致旨極メテ懇切之御辭ヲ以テ御依賴相成不堪感謝候

尙又閣下御說明之旨趣拙者ヨリ我政府ヘ開陳ニ及ヒ此上稅目修正ノ希望ヲ固執スルニ於テハ到底兩國ノ利益トナルヘキ條約ハ議シ得ザルニ付向後右ノ希望ヲ主張セサル樣請願可致旨御依賴相成致承知候

就テハ右之御主意何卒書面ヲ以テ御差越相成度閣下ヨリ御申越トアレハ拙者ノ申立ヨリ勢力可有之候貴我兩國ノ利益ヲ調和候義ハ素ヨリ拙者ノ切望スル所ニ候此段得貴意候敬具

千八百八十五年八月十九日

附屬會二

乙號　明治十八年八月三十一日付西班牙代理公使へ回答書簡

輸入稅率改訂ニ應シ難キ旨回答ノ件

機密公第十八號

西班牙國臨時代理公使

ドン、マニユエル、パストル、イ、ベドヤ貴下

外務卿伯爵　井上　馨

本月十九日附貴東ヲ以テ前日御面晤ニ及候旨趣ヲ御引用相成日本政府ニ於テハ明治十五年ノ豫議會ニテ取極メタル改正稅則ヲ今更變更ス可カラズト信シ居候理由ヲ御書送可致旨且右ハ貴政府ヘ御報告ノ爲ニ有之趣貴政府ノ御意見ニテハ右稅則中就中煙草葡萄酒火酒幷ニ砂糖ニ課スヘキ稅率ヲ多少修正被致度トノ趣ニ有之候義御申越相成致領承候

右貴東中ニ示サレタル友愛ノ御旨趣ト本件ニ付日本政府ノ意見ヲ說明スルノ機會ヲ拙者ニ與ヘラレタル儀ニ對シ先ツ玆ニ致鳴感謝候

過日御話致候通豫議會ニ於テ取極メタル稅目案ヲ更ニ討議致候事ナク又修正スル事ナク其儘採用スル儀ハ締盟各國一般ニ其意志有之候乍去此所謂採用ハ畢竟締盟各國均シク之ニ同意スルニ於テ存スル事ニシテ今ハ然シ其內一國ノ望ニ應シテ右ノ稅目案ヲ多少變更スルニ於テハ他ノ諸國ハ必ズ其業既ニ決了シタル取極ヲ最早守ルヘキ義務無之ト思惟スルノ運ニ立至ルベク候右之次第ニ候間若シ日本政府ニ於テ改正稅則ヲ苟モ變更スル儀承諾致候ハヾ許多ノ日子ト勞力ヲ費シテ獲タル豫議會ノ結果ハ多分盡ク無効ニ屬スル事ニ可立到候

當初日本政府ハ輸入稅ヨリ收ムヘキ歲入ヲ至當公平ナル割合ト自信スル處ニ基イテ計算致シ以テ輸入稅目案ヲ調製シ之ヲ豫議會ニ提出セシ所締盟各國ノ委員ハ該案ヲ其儘ニテ承諾セズ多少ノ修正ヲ加ヘ更ニ對案ヲ差出サレタルガ其稅率ハ日本政府ノ原案ニ比スレバ著シク低減シタルモノニ有之候而シテ日本政府ニ於テハ其提出セシ原案中苟モ過當ノ稅率アリトハ決シテ思考致サス候得共之ニ拘ハラス右ノ對案ヲ其儘採用シタル所以ハ他ナシ全ク條約改正ノ此部分ヲ修結セシメントノ一心ニ出テタル次第ニ有之候我政府ハ右之通リ其原案ノ變更ヲ懇親上讓與之精神ヲ以テ承議致シタル事ニ候得ハ我政府ニ於テ今ヤ其業既ニ日本國ノ利害如何ニ照シテ充分低減シタル稅率ヲ此上聊モ減省サルヽ事ニ同意スルヲ好マサルハ自然ノ情勢ニ有之ハ貴下ニ於テモ御洞

察ニ相成ト存候

抑モ煙草葡萄酒火酒幷ニ砂糖ニ各二割五分ノ從價稅ヲ課ス可シトハ當初我政府ヨリ豫議會ヘ提出セシ所ニ有之候然ルニ對案ニ於テ右諸品ノ稅ニ就キ改正シタル所ハ原案ニ比シテ二割乃至六割迄ノ減稅ニ當リ例ヘハ煙草ノ改正稅ハ僅ニ從價一割ニ止マリ甚タ輕稅ニ有之殊ニ內國產ノ煙草ヲ製造販賣スルニハ營業稅ノ賦課アル事ヲ顧ミル時ハ右ハ餘リ輕稅ト見做サヽルヲ得サル義ニ候又葡萄酒幷ニ火酒ニ於ケル改正稅ハ從價一割ヨリ二割迄ニ有之而テ西班牙葡萄酒ノ過半ハ多分右最下ノ稅率ヲ課スル種類ニ屬スト存候右諸品ハ殆ト全ク贅澤物ニ屬スルモノナルニ右ノ如キ稅率ハ實ニ充分輕減ノ者ト謂ハサルヲ得サルコト貴下ニ於テ御觀察有之度候又砂糖ニ至リテハ改正稅ハ從價二割ニ有之候抑モ該品ハ日本產ノモノ無之ニ付其稅ヲ增加スルモ之カ爲メ敢テ輸入高ヲ減損シ內國ノ產出ヲ奬勵スルコトハ有之間敷候故ニ我政府ノ定說ニ於テハ該品ニ右ノ稅率ヲ課スルモ能ク之ニ堪ヘ決シテ貿易上ノ妨害損失ヲ來スコト無カルヘク殊ニ當初我提出シタル稅率ニテモ又其最後ニ承諾シタル稅率ニテモ此ヲ他國ニ於テ同品ニ課スル輸入稅ノ割合ニ比セハ寧ロ低下ナルモノニ有之候間右ノ損害ヲ致スコト敢テナカルヘシト存候

右ノ次第ニ有之且既ニ上文ニ於テ說明セシ如ク一旦決定シタル稅目ヲ今苟クモ變更スルトキハ必ス條約改正ノ期ヲ遷延セシムルヲ免カレサルニ付貴爾中御記載アリシ稅率變更ノ議ハ我政府謹テ之ヲ拒絕スルノ外他ニ處置ナキコトヲ貴下御了解可相成ト存候

前顯ノ趣貴下ヨリ貴政府ヘ御傳達相成候樣致度隨テ我政府カ對案中ニアル稅率ヲ其儘維持セント欲スルノ意ハ他ナシ則チ彼ノ締盟各國ノ利益ヲ一モ傷害セスシテ其全體双方ニ有益タル可キ樣調理シタル稅目ニ賴リ相當ノ歲入ヲ輸入品ヨリ收メント希望スルニ外ナラサルコトヲ貴政府ニ於テ充分御了解可相成儀ト拙者信用致候

貴皇帝陛下ノ政府ハ我國トノ交際上常ニ慇懃友愛ノ精神ヲ御表示相成候ニ付此際我政府幷ニ締盟各國一般ニ保持スル所ノ志望卽チ豫議會ニ於テ決定シタル改正稅目ヲ今更ラ討議變更スルコトナクシテ其儘採用セントノ志望ニ貴政府必ス御同意可相成儀ト拙者期圖スル所ニ有之候右回答得貴意候敢具

附屬書三

丙號　明治十八年八月二十二日附西班牙公使來翰
全權委任狀譯文差進ノ件
附　委任狀譯文

外務卿伯爵　井上　馨閣下
西班牙國代理公使
マニュエル、パストール、イ、ベトヤ

以書翰致啓上候陳ハ今般東京會議ニ於テ改正可相成條約ニ付討議調印ヲ爲スタメ去ル六月十四日附ヲ以テ西班牙國皇帝陛下ヨリ拙者ヘ下附相成候全權御委任狀ノ譯文玆ニ差進候間御落手有之度候敬具

千八百八十五年八月二十二日在日本横濱西班牙公使館ニ於テ

附　委任狀譯文

天佑ヲ保有シ西班牙國立憲君主タル朕ドン、アルフホンス第十二世ハ日本國ト他ノ諸國トノ現行條約ヲ改正スルニ付特別ノ約定ヲ締結スル爲メ東京ニ會議ヲ開クヘキ時期ノ到達セルヲ以テ朕ノ信任ヲ得タル者一名ニ全權ヲ附與スルノ必要ヲ慮ハカリ該帝國ニ駐劄スル卿西班牙國代理公使ドン、マニュエル、ハストル、イ、ベドヤノ能ク其任ニ適スヘキヲ察シ此書ヲ以テ卿ニ朕カ全權委員ノ性質ヲ帶ヒテ會議ニ參與シ日本皇帝ノ指命スヘキ全權委員ト凡ソ卿ニ於テ最モ適宜トスル所ノモノヲ談判スルコトヲ委任ス而シテ卿カ談判議決調印スル所ノ事ハ恰モ朕親カラ其事ヲ爲シ調印シタルカ如ク今日ヨリ其事ノ存在且決定セルモノト見做サン是ニ因テ朕今卿ニ授クルニ決律上許ス所ノ最モ廣博ナル範圍ノ全權ヲ以テス即右確證トシテ朕親ラ名ヲ署シ朕カ外務卿國璽ヲ鈐シ且之ニ副署シタル此書ヲ附與ス

千八百八十五年六月十八日馬德里府ノ宮中ニ於テ

アルフホンス

奉勅　ジョゼ、エルデュアエン

附屬書四

丁號　明治十八年九月七日附西班牙公使ヘ回答
西班牙國臨時代理公使
ドンマニュエル、パストル、イ、ベドヤ貴下

外務卿伯爵　井　上　馨

去月二十二日附貴翰落手致候陳者不遠東京ニ於テ相開キ候條約改正會議ニ列セラレ其議決之條項ニ御調印被成候爲メ貴國皇帝陛下ヨリ貴下ヘ御附與相成候全權御委任狀譯文相添御報知之趣致承知候貴我兩國ニ存在セル重要之問題ニ付貴國皇帝陛下ニ於テ貴下ヲ其全權委員ニ御撰定相成候ハ我政府ノ欣喜スル所ニ有之候此段回答得貴意候敬具

一三四　明治十八年七月六日　佛國公使ヨリ井上外務卿宛

反譯佛文草案領收ノ件竝ニ正文ニツキ照會

Tokio, le 6 Juillet 1885.

Monsieur le Comte,

Je reçois à l'instant le texte français du projet de convention dont Votre Excellence a bien voulu dernièrement me communiquer, à titre confidentiel et privé, le texte anglais. Je remercie Votre Excellence de cette communication.

Je crois devoir, toutefois, appeler l'attention de Votre Excellence sur ce fait que le mot translation se trouve imprimé en gros caractères au dessus du titre de mon exemplaire. Or, comme le texte Japonais du projet de convention ne m'a pas été communiqué, le seul texte reçi et authentique auquel je puisse me référer est nécessairement le texte français.

L'erreur qui a été commise est grave; elle ne saurait être que le résultat d'une simple inadvertance.

Veuillez agréer, Monsieur le Comte, les assurances de ma très haute considération.

Sienkiewicz.

註　本年四月二十五日內示シタル英文條約案佛譯ヲ交付セルナリ

別錄

明治十八年四月二十五日井上外務卿ヨリ各國公使ヘ內示シタル英文草案

DRAFT

REVISED CONVENTION

His Imperial Majesty the Emperor of Japan and ....., equally desirous of maintaining the relations of good understanding which happily exist between them by extending and increasing the

intercourse between Their respective States; and being convinced that this object cannot better be accomplished than by revising so much of the Treaties between the two Countries as relates to Commerce and Navigation, have resolved to complete such a revision, based upon principles of equity and mutual benefit, and, for that purpose, have named as Their Plenipotentiaries, that is to say: His Imperial Majesty the Emperor of Japan, ... ; and..... ....., ... who, after having communicated to each other their full powers, found to be in good and due form, have agreed upon and concluded the following Articles:—

ART. I.

After due notice shall have been given, all the duties on imports to Japan hitherto paid and collected shall cease to be so paid and collected, and, in lieu thereof, the schedule of import duties hereunto annexed and made a part of this Convention shall be enforced and shall be binding upon the High Contracting Parties and Their subjects respectively.

The due notice herein provided for shall be held to mean the notification given to the Public by the High Contracting Parties, respectively, of the tariff schedule hereunto annexed, immediately upon the conclusion of this Convention, and shall comprise the time elapsing between the signature hereof and the exchange of ratifications.

ART. II.

It is understood by the High Contracting Parties that the Japanese Government is free to maintain at the rates already provided for by treaty, to decrease, or to remove altogether any or all of the duties upon exports from Japan hitherto paid and collected.

ART. III.

The High Contracting Parties have agreed to the Regulations which are hereunto annexed and made a part of this Convention, providing for the control and management of the Customs and Bonded Warehouses, and for the establishment of a system of Light and Tonnage Dues.

The scales of fees, dues, and fines contained in the said Regulations shall not be altered, nor shall the Regulations not be altered, nor shall the Regulations be otherwise changed, except by mutual agreement of the Contracting Parties.

ART. IV.

From the date of the exchange of the ratifications of this Convention, and upon the conditions hereinafter named, the Japanese Government will open three new ports, namely....., ..., and ....., (to be styled accessible ports in order to distinguish them from the existing open ports), wherein.....subjects may reside, lease and own real estate, and carry on all lawful avocations.

The limits within which these privileges are granted shall be as follows:—

At.....such and such limits

" " " " "

" " " " "

.....subjects shall also be entitled to travel without passports certain distances beyond the above mentioned limits, the exact restrictions upon such travel to be determined and announced by the Japanese Government at the time when this Convention shall go into effect.

ART. V.

It is understood and agreed by the High Contracting Parties that.....subjects in Japan are under obligation to observe and obey the general law of the Empire; and it is further understood and agreed that the Administrative, Local, and Police Regulations issued by the Japanese Government are binding upon.....subjects in Japan, and that for every violation thereof they shall be liable to trial and punishment.

In all cases of infringement of the said Regulations by.....subjects in any part of Japan, except at the ports already open by treaty to.....trade and residence, the Japanese Courts shall have jurisdiction to try and to punish the offender, provided the punishment of the offense does not exceed a fine of 30 yen, or imprisoment for 10 days, or both. If the offense is of such a nature as to entail punishment in excess of these limits, the offender may be

arrested by the Japanese Authorities and transferred to the custody of the nearest tribunal of his country, to be dealt with in accordance with the provisions of the Regulations he has violated.

All fines, penalties, and forfeitures incurred by .....subjects on account of the infringement of Japanese Administrative, Local, and Police Regulations shall belong to the Japanese Government.

ART. VI.

It is further stipulated by the High Contracting Parties that all civil cases in which.....subjects at the accessible ports are defendants, and in which the amount involved, exclusive of costs, does not exceed 500 yen, may be adjudicated by the appropriate Japanese Courts at those ports.

ART. VII.

The exercise of the jurisdiction conferred upon Japanese Courts by the two preceding Articles shall be subject to the Regulations for carrying into effect the jurisdictional stipulations hereof, which regulations are hereunto annexed and made a part of this Convention.

ART. VIII.

To secure the systematic enforcement of the Administrative, Local, and Police Regulations of Japan, and to establish the civil jurisdiction provided for in Article VI, irrespective of the limits designated in that Article and in Article V hereof, it is further agreed that negotiations for the extention to the existing open ports of the limits jurisdiction of Japanese Tribunals over infringements of those Regulations and over civil cases of the kind specified in Article VI hereof, shall be entered into at any time after the conclusion of this Convention, upon notice to that effect being given by either Party to the other.

ART. IX.

In order to improve and to systematize the municipal governments of the existing open ports, including the holding of real property by.....subjects within certain limits thereat, and the assimilation of the rents therein with the national system of land taxation, the High Contracting Parties agree that the Japanese Government, after consultation with the.....Government, shall put into operation at the aforesaid ports such municipal regulations as, in the judgment of both Governments, will best secure these results.

It is further stipulated that either of the Parties hereto may at any time after the conclusion of this Convention ask and obtain from the other such consideration and discussion of the questions involved, as may be necessary to the establishment of the arrangement contemplated by this Article.

ART. X.

It is distinctly understood and agreed by the High Contracting Parties that any privileges which may be conferred upon.....subjects by this Convention, or by Regulations or Arrangements made in pursuance of the terms hereof, granting to them extended rights with reference to the acquisition and holding of real property, are so conferred on condition that they shall conform to and observe the Japanese law of land tenure, as well as all other laws and regulations enacted by the Japanese Government in that behalf; and on the further condition that in all cases relating to real property in Japan jurisdiction is exclusively reserved to the appropriate Japanese Tribunals.

ART. XI.

The Japanese Government undertake to prepare and to put into operation, immediately upon the exchange of the ratifications of this Convention, Regulations by virtue of which.....subjects shall be allowed to form commercial partnerships with Japanese industrial, and to hold shares in Japanese industrial and commercial companies, on condition that they shall be subject to the Japanese laws and regulations governing such firms and companies and to the jurisdiction to the Japanese Courts.

ART. XII.

It is understood by the High Contracting Parties that, when.....subjects engage in any manufacturing business in Japan, they shall first obtain the usual license and pay the same dues and taxes as Japanese subjects are required to pay under similar circumstances.

It is also stipulated that.....subjects engaged in

business and professional occupations of all descriptions at the accessible ports shall be subject to the same taxation which is applied to Japanese subjects engaged in like pursuits. And when the Japanese Government shall have carried into effect the changes contemplated by Article IX hereof, and..... subjects shall, in consequence, have been placed upon an equal footing with Japanese subjects in respect of rents and dues on real property, it is further stipulated that the provision of the clause immediately preceding shall also be applicable to .....subjects engaged in business and professional occupations at the existing open ports.

ART. XIII.

Should it occur that the.....Judicial Authorities decline, on the ground that they have no jurisdiction, to entertain any civil or criminal action brought against a.....subject in Japan, on account of liabilities incurred or an offense committed by him in Japan, it is agreed by the High Contracting Parties that, in such event, the Japanese Courts shall have jurisdiction.

The same understanding shall be held to apply to cases wherein.....subjects are defendants at any of the open ports where there is no competent..... Tribunal to hear and determine them. But nothing contained in this Article shall be understood to vest in Japanese Courts jurisdiction over actions against.....subjects, for the judicial settlement of which the.....Government have provided adequate means; or with refence to which another Power having treaty relations with Japan can rightfully claim and is prepared to exercise jurisdiction.

ART. XIV.

It is understood by the High Contracting Parties that the right to arrest.....subjects committing crimes and misdemeanors within the territorial jurisdiction of H. I. J. Majesty rests, in all cases, with the Japanese Authorities.

ART. XV.

If the detection or prevention of offenses, the maintenance of the public peace, or the apprehension of offenders necessitates the entry or search of premises occupied by.....subjects, the Japanese Authorities shall refrain, except in cases of the most urgent necessity, from making such entry or search, unless provided with a warrant from the competent Authority.

ART. XVI.

The High Contracting Parties agree that any counterfeiting in one of the two countries of the trade marks affixed in the other on merchandize to show its origin and quality shall be strictly prohibited, and shall give ground for an action for damages in favor of the injured party, to be prosecuted in the Courts of the country in which the counterfeit shall be proven. The trade marks in which the subjects of one of the two countries may wish to secure the right of property in the other, must be recorded, to wit: the marks of Japanese subjects at.....; and the marks of.....subjects at the Department of Agriculture and Commerce in Tokio. It is understood, however, that if a trade mark has become public property in the country of its origin, it shall be equally free to all in the other country.

ART. XVII.

Supplies of all kinds for the use of the.....Navy may be landed at the open ports of Japan and stored in warehouses in the custody of.....officers. But if any such supplies are sold to foreigners or Japanese, the purchasers shall pay the proper duty to the Japanese Customs Authorities.

If, however, there should be war between.....and any Power with which Japan is at peace, the Japanese Government may suspend this privilege during the continuance and until the termination of hostilities. And all supplies which at the time of the outbreak of hostilities as aforesaid may happen to be stored by the.....Authorities in accordance with the provisions of this Article at any one of the open ports of Japan shall be removed from Japanese territory by the said Authorities, upon request to that effect being made by the Japanese Government. If such supplies are not so removed within one month after notice shall have been given, they shall be placed in the charge of the Japanese Customs Authorities, and shall remain in their custody, at the risk and expense of the.....Government, until peace

shall have been declared.

ART. XVIII.

For the period of ten years from and after the exchange of the ratifications of this Convention, ...subjects shall have the right to charter vessels owned or controlled by them to Japanese subjects, and vessels thus chartered may be freely employed in visiting and trading at all Japanese ports.

The exercise of this priviledge shall be subject to the observance of Regulations issued by the Japanese Government.....subjects on such chartered vessels, when on board ship, shall be subject to the laws and jurisdiction of..... ; when on shore, they shall have the same legal status as all other.....subjects in Japan, and shall, in like manner, rest under the obligations imposed by the several Articles of this Convention.

ART. XIX.

The Japanese Government agree to inaugurate immediately upon the exchange of the ratifications of this Convention a passport system, whereby..... subjects will be enabled to visit any part of Japan

for all lawful purposes except trade.

The issuance and use of such passports shall be governed by the regulations in that behalf promulgated by the Japanese Government.

ART. XX.

It is agreed that, as the necessity for previous treaty stipulations and agreements between the High Contracting Parties giving a legal tender character to foreign coins in Japan no longer exists, Article .....of the Treaty of.....and all other provisions and arrangements of a like nature and intent between the Parties hereto are hereby expressly repealed and annulled.

ART. XXI.

It is further understood and agreed that from and after the date when this Convention shall go into effect all provisions of existing treaties and agreements between the High Contracting Parties, which may be in conflict with, or contrary to any stipulation or provision of the present Convention, shall cease and determine.

ART. XXII.

The High Contracting Parties agree that in all matters relating to travel through, or residence in all places and parts of their dominions, any privilege, favor, or immunity which either Contracting Party has actually granted, or may hereafter grant to the Government, subjects, or citizens of any other State, shall be extended immediately and unconditionally to the Government of the other Contracting Party.

ART. XXIII.

The present Convention shall go into effect immeditely upon the exchange of the ratifications.

Either Contracting Party shall have the right when eleven years shall have elapsed from the date of the exchange of the ratifications hereof, or at any time thereafter, to give twelve months' notice to the other Party of the intention to terminate this Convention ; and thereupon, at the expiration of the said twelve months, this Convention shall cease and be of no effect.

It is, however, understood that when the Japanese Government give notice of their intention to terminate this Convention, they will open the whole Empire to.....trade and residence, provided the..... Government at the same time relinquish the jurisdiction which they at present exercise over..... subjects in Japan.

ART. XXIV.

In order that the changes involved in the opening of the whole Empire by Japan, and the entire surrender of jurisdiction over.....subjects in Japan by .....may be effected in the manner most advantageous to the interests of both Contracting Parties, it is agreed by them that at any time before the expiration of this Convention either of them may request the other to discuss and determine what measures are needful to carry those changes into effect.

ART. XXV.

In the event that the High Contracting Parties are prevented by causes and circumstances at present unforeseen from terminating this Convention absolutely, as provided in Article XXIII hereof, it is agreed that at the expiration of ten years from the date hereof, or at any time thereafter, either Con-

tracting Party shall have the right, upon giving six months' previous notice to the other, to demand the revision of the present Convention.

ART. XXVI.

This Convention shall be ratified by H. I. M. the Emperor of Japan, and by.....
.....under their hands and seals; and ratification shall be exchanged at.....within six months from the date hereof.

In witness whereof the respective Plenipotentiaries have signed and sealed this Convention in quadruplicate, two copies being in the Japanese and two copies in the.....language. All of these copies have the same meaning and intent, and both the Japanese and the.....texts shall be considered to be originals.

Done at the City of Tokio this.....day of the .....month of the.....day of Meiji; corresponding to the day of.....in the.....year of the Christian Era.

ハ拙者ニ於テ利用可致心得ニ有之候右得貴意候敬具

千八百八十五年十一月二十六日

註　1前號文書參照

2條約正文トナルヘキ佛文草案ヲ請求セルナリ

（右原文）

Tokio, le 26 novembre 1885.

Monsieur le Comte,

En me remettant, le 25 avril dernier, le texte anglais d'un projet de convention commerciale, Votre Excellence avait bien voulu me donner l'assurance qu'Elle me ferait parvenir très prochainement le texte français et(sic) de cette convention et de divers autres projets concernant les réglements de commerce, les droits de navigation, etc— etc—.

Des considérations dont il m'est difficile de me rendre compte ont modifié, parait-il, les intentions de Votre Excellence. Non seulement ses promesses n'ont pas été suivies d'effet, mais j'apprends que de nouveaux projet sont actuellement l'objet de discussions suivies.

Privé des moyens de faire connaître mon opinion sur les projets qui ont été ou qui sont à l'étude,

一三四　明治十八年十二月三日　非佛上國公使外務卿ヨリ往

新條約佛文草案請求ノ件

以書翰致啓上候陳ハ去ル四月中五日閣下ヨリ通商條約草案ノ英文御交付有之候節近日ノ中右條約ノ佛文竝ニ其他貿易規則航海稅等ニ關スル草案ノ佛文御送付可相成旨御約束有之候

然ルニ何事カ拙者ニハ了解難致理由アリテ閣下ノ御所存ヲ變セシメタル事ト相見當ニ右約束ノ實施無之ノミナラス又現今ニテハ新草案ノ御審議最中ト承知致候

既ニ御審議相濟ミタル草案ニ付テモ又現今御審議中ノ草案ニ付テモ拙者ニ於テハ意見ヲ吐露スヘキ方法無之ニ付拙者カ保護ヲ委任セラレタル利益モ遂ニ損傷ヲ蒙ムルニ至ラン カト掛念致候ハ至當ノ事ト存候右ノ次第ニ付拙者ハ條約改正ノ件ニ付他日ニ至テ何等ノ異議申出候哉モ難圖候間此儀御含置相成度候

閣下ハ去ル七月六日本件ニ付拙者ヨリ進呈致候書[1]翰ニ回答スル事ヲ適宜ト御認無之尚又今回ノ書[2]翰ニモ或ハ御回答無之歟ハ不存候ヘ共此二書ハ時宜ノ之ヲ必要スルトキニ至ラ

j'ai tout lieu d'appréhander que les intérêts que j'ai pour mission de sauvegarder ne se trouvent lésés.

Je me vois donc dans la nécessité de faire les réserves les plus formelles relativement à la marche que suit l'affaire de la révision des traités.

Votre Excellence n'a pas jugé à propos de répondre à la lettre que j'ai eu l'honneur de Lui adresser à ce sujet le 6 Juillet dernier. Elle pourra également ne pas répondre à celle—ci. Les deux lettres n'en constituent pas moins des documents que je me réserve d'utiliser lorsque les circonstances l'exigeront.

Je saisis, d'ailleurs, avec empressement cette occasion de renouveler à Votre Excellence les assurances de ma très haute considération.

Sienkiewicz.

Son Excellence
Monsieur le Comte Ino-ouyé
Ministre des Affaires Etrangères.
Tokio.

一三五　明治六年二月四日　井上外務卿ヨリ佛國公使宛

新條約佛文草案送付方ニ關スル件

明治十八年十二月十四日

外務卿伯爵　井上　馨

佛蘭西國特命全權公使

ジー、ア、シエンキエウキツ閣下

公第七十一號

去月廿六日附貴簡ヲ以テ去ル四月中機密私際上ノ取扱ヲ以テ閣下ヘ及御送附候條約改正ニ係ル草案書類ノ佛文御送附可致旨御申越ノ趣承知致候本件ニ付去ル七月六日附[1]ヲ以テ閣下ヨリ御申越有之候儀ニ對シ拙者ニ於テハ未タ御回答不致樣御申越有之候然ルニ拙者ニ於テハ曩ニ拙者ノ書記官及ヒ十月十日附私信[2]ヲ以テ申進置候辨解ニ由リ別ニ公然貴簡ニ對シ回答スルヲ要セサル義ト存居候次第ニ御座候處閣下ニ於テハ右樣御思考不相成義今度ノ御書簡ニテ致承知候抑モ前日各公使ニ差出候草案書類ハ固ヨリ未定不完ノモノニシテ之ヲ閣下竝ニ御同僚ヘ及御送附候ハ此書類ニ付閣下竝ニ御同僚ノ御意見ヲ內々承知致シ之ニ基キテ將ニ開カントスル會議ヘ提出スヘキ完全最終ノ議案ヲ起草スル心算ニ有之候然ルニ拙者ニ於テハ佛文ヲ解兼候間英文ヲ以テ此草案ヲ起草致候ニ付本草案ノ佛文ニ飜譯ノ文字ヲ附候モ只此一點ニ止候又閣下ノ英文ニ御熟達ナルハ拙者ノ夙ニ承知致居候所ナレハ不取敢英文ノ草案ヲ差出候マテニテ別ニ他ノ意味有之義ニアラサルハ閣下宜ク御諒承相成候樣致希望候尤先ニ閣下ヘ差出候草案書類ノ內裁判權說明書偕庫規則書及輸入稅目ノ外ハ佛文モ亦已ニ出來致候ヘハ閣下ニ於テ御入用ニ候ハヽ反譯ノ文字ヲ取除何時タリトモ差進可申候間閣下ノ御都合御申越相成度候此段回答迄得貴意候敬具

註　1 一三三文書ナルニ付參看

2「十月十日附辨解ノ私信」ナルモノ見當ラズ

一三六　明治六年二月二十一日　佛國公使ヨリ井上外務卿宛

新條約佛文草案ニ關スル件

於東京

外務卿伯爵　井上　馨閣下　　シエンキエウキツ

以書翰致啓上候陳ハ本月十四日付貴翰[1]ヲ以テ條約改正ニ關シ御準備相成居候重モナル草案ノ佛文御送付可相成旨御通知旁該草案ハ漠然且ツ不充分ナルモノト呉々御斷ノ趣致承知候

右ノ如ク閣下ニ於テ御明言相成候上ハ拙者ニ於テモ該草案ハ不充分ノ者ト可認候得共大體上丈ナリトモ日本政府ノ御意見承知致度モノト被存候ニ付右書類何卒御送付相成該會開會ノ節拙者ニ於テ必要ト認ムル修正案ヲ提出シ得ル樣都合ニ被成候ハヽ大幸ノ至ニ候此段回答得貴意候敬具

千八百八十五年十二月廿一日在日本佛國公使館ニ於テ

註　1 前號文書

（右原文）

Tokio, le 21 Décember 1885.

Monsieur le Comte,

En m'informant, par la lettre qu'Elle m'a fait l'honneur de m'adresser le 14 de ce mois, qu'Elle tient á ma disposition le texte français des principaux projets qui ont été préparés par ses soins en vue de la révision des traités, Votre Excellence croit devoir insister sur ce que ces projets ont de vague et d'incomplet.

Je veux bien admettre, du moment que Votre Excellence l'affirme, qu'ils laissent quelque peu à desirer: ils n'en doivent pas moins faire connaître, ne serait ce que d'une manière générale, les vues du Gouvernement de S. M. le Mikado. Je serais donc particulièrement reconnaissante à Votre Excellence si Elle voulait bien me donner communication des documents en question et me mettre, ainsi, mieux en mesure de formuler, lorsque la conférence sera réunie, les modifications qu'ils me paraîtraient devoir comporter.

Veuillez agréer, Monsieur le Comte, les assurances de ma très haute considération.

Sienkiewicz.

Son Excellence

Monsieur le Comte Ino-ouyé,

Ministre des Affaires Etrangères,

Tokio.

一三七　明治六年二月二十一日　井上外務卿ヨリ佛國公使宛

佛文諸條約案送付ノ件

佛蘭西國
特命全權公使　ジー、ア、シエンキウキツ閣下

外務卿伯爵　井上　馨

公第七十二號

本月廿一日附貴翰[1]ヲ以テ條約改正ニ關シ嚮ニ英文ニテ指上候諸草案佛文御回送可致旨御申越ノ趣承知致候卽チ旣成ノ分別紙目錄ノ通差進候間御査收有之度右回答得貴意候敬具

註　1前號文書

一、條約草案　佛文　第壹號
一、貿易規則草案　佛文　第壹號
一、貿易規則追加　佛文　第壹號
一、港則草案　佛文　第壹號
一、外國船雇入規則　佛文　第壹號
一、旅券規則草案　佛文　第壹號
一、裁判權規則　佛文　第壹號
一、噸稅規則　佛文　第壹號

以上

註　議案省略ス

Tokio, le 22 décembre 1885.

Monsieur le Comte,

Votre Excellence a bien voulu me donner l'assurance formelle, par sa lettre en date du 14 de ce mois, qu'Elle m'adresserait, sans la mention traduction, le texte français des projets concernant la révision des traités.

Les projets en question viennent de me parvenir, mais j'ai le regret de constater qu'ils portent le mention que Votre Excellence m'avait déclaré ne devoir point exister, et il m'est, dès lors, impossible de les accepter.

Votre Excellence objectera peut-être que si le mot traduction est parfaitement lisible, on remarque toutefois, qu'il est surchargé de trois traits à l'encre rouge. Je devrais alors lui rappeler que ce n'est pas précisément au sujet de traits de plume plus ou moins nombreux que je Lui ai écrit le 6 Juillet et le 26 novembre, et que j'ai encore l'honneur de Lui écrire aujourd'hui.

Veuillez agréer, Monsieur le Comte, les assurances de ma très haute considération.

Sienkiewicz.

Son Excellence
Monsieur le Comte Ino-ouyé
Ministre des Affaires Etrangères
Tokio.

一三八　明治十八年十月三十日　佛國公使ヨリ井上外務卿宛

改正條約佛文草案ニ關スル件

佛國公使

外務大臣伯爵　井上　閣下　　シエンキエウキツ

以書翰致啓上候陳者閣下ニハ翻譯ノ文字記入無之條約改正佛文草案ヲ御送附可相成旨本月十四日附貴翰[1]ヲ以テ明カニ且確カニ拙者ヘ御申越有之只今右草案拙者ヘ到達候處申スモ甚タ遺憾ニハ候ヘ共嚮ニ閣下カ記入無之筈ト明言相成候文字記入有之候ニ付何分領收致兼候

或ハ閣下ニ於テハ成程翻譯ノ文字ハ明瞭ニ讀ミ得ヘキモ朱墨ヲ以テ三個ノ線ヲ其文字ノ上ニ引キタリトノ御說モ可有之候ヘ共左スレハ拙者ニ於テハ七月六日[2]十一月廿六日[3]竝今日玆ニ差進候拙簡ハ全ク多少ノ線ニ關係候儀ニ無之旨御答申サヾルヲ得サル事ニ有之候此段得貴意候敬具

千八百八十五年十二月二十二日

註　1 一三五文書往翰參照
2及3夫々一三三及一三四文書來翰參照

（右原文）

一三九　明治十八年十二月三十日　井上外務大臣ヨリ佛國公使宛

改正條約草案送付ノ件

公第七十三號

外務大臣伯爵　井上　馨

佛蘭西國特命全權公使
ジー、ア、シエンキウキツ閣下

昨日附貴簡落手致披見候陳者去ル廿一日拙官ヨリ及御送附候條約改正諸草案[1]ハ單ニ朱線ヲ以テ翻譯ノ文字ヲ抹殺候ノミニ付御領收相成兼候趣致承知候依テ右文字全ク消除ノ上差[2]進候間右ニテ御滿足相成候樣致希望候此段回答得貴意候敬具

註　1 一三七文書往翰ヲ以テ送付ノ草案

2次號參照

一四〇 明治十九年二月五日 非佛國公使ヨリ

貿易規則草案修正方ノ件

附屬書 貿易規則案ニ對スル佛國公使ノ修正意見

佛國公使

外務大臣伯爵 井上 馨閣下 シェンキェウキッ

答啓十二月二十一日附ヲ以テ條約改正諸草案御送付相成拙者ニ於テ審閱可致樣御申越ノ趣致承知候拙者ニ於テハ先ツ貿易規則草案ヲ査閱致候處此草案ハ文辭明晰且立案ノ順序其宜シキヲ得タル事ヲ相見候右ニ付三ノ修正ノ議別冊ノ餘白ニ記入致候間閣下ノ御同意ヲ得度致希望候敬具

千八百八十六年二月五日

（右原文）

Tokio, le 5 février 1886.

Monsieur le Comte,

En me communiquant, sous la date du 21 décembre dernier, divers documents concernant la révision des traités, Votre Excellence a bien voulu me demander de les examiner.

Le projet de règlements de commerce sur lequel mon attention s'est tout d'abord portée, me paraît rédigé clairement et avec méthode. Quant aux quelques amendements que j'ai notés en marge de l'exemplaire qui accompagnent cette lettre, je me plais à penser qu'ils auront l'agrément de Votre Excellence.

Veuillez agréer, Monsieur le Comte, les assurances de ma très haute considération.

Sienkiewicz.

Son Excellence

Monsieur le Comte Ino-ouyé

Ministre des Affaires Etrangères

Tokio.

附屬書

貿易規則案ニ對スル佛國公使ノ修正

（括弧内カ修正文）

PROJET

DE

RÈGLEMENTS COMMERCIAUX

RÉVISÉS

PRÉAMBULE

1° Dans les Règlements qui suivent: le mot "port" employé sans autre indication particulère sera compris dans le sens de "port ouvert au commerce étranger."

2° Les mots "navire ou vaisseau" signifieront les navires nationaux faisant le commerce entre le Japon et les ports étrangers et tout navire étranger.

3° Le most "capitaine (d'un navire)" indiquera celui qui a ou prend actuellement la charge ou le commandement du navire, abstraction faite de son titre réel.

4° Le mot "marchandises" s'appliquera à tous les biens se trouvant à bord d'un navire, à l'exception des "bagages des passagers" et "des provisions du navire"; les "bagages des passagers" comprennent tout ce qui est à leur usage personnel, et "les approvisionnements du navire" s'entendent des objets de subsistance et de consommation à bord.

5° Le mot "importateur" sera pris comme indiquant aussi bien les propriétaires des marchandises importées que les consignataires ou leurs agents respectifs, et le terme "exportateur" sera pris comme indiquant les propriétaires des marchandises exportées aussi bien que les expéditeurs ou leurs agents respectifs.

6° Dans les Règlements qui suivent, quand un délai est exprimé par une limite d'heures ou de jours, les jours fériés observés par la Douane ne sont pas compris dans le délai; ils le sont, au contraire, quand on compte par mois on par année.

RÈGLEMENT

ARTICLE

Le capitaine de tout navire doit, à son arrivée dans un port, répondre à toutes les questions relatives au navire, à la cargaison, aux passagers, à l'équipage ou au voyage, qui peuvent lui être adressées par le Préposé de la Douane venu à bord muni d'un registre spécial dont le capitaine devra

remplir les blancs, sous peine d'une amende de 25 yen, pour refus de satisfaire à l'une ou à l'autre de ces réquisitions.

ARTICLE II.

Les Préposés de la Douane peuvent se rendre à bord de tout navire arrivant dans un port et y rester jusqu'au debarquement complet des marchandises ou jusque'au départ dudit navire. Ils auront un libre accès dans toutes les parties du navire avec faculté de fermer à clef ou par des scellés les écoutilles ou ouvertures de la cale, et aussi de mettre sous clef ou sous scellés, marquer ou mettre autrement en sûreté les marchandises qui se trouveront à bord. Si quelque obstacle est mis à ce que le Préposé puisse s'acquitter de sa charge à bord, ou si le capitaine du navire à bord duquel un Préposé est posté néglige ou refuse de fournir audit Préposé un logement d'une commodité suffisante, il sera passible d'une amende de 25 yen pour chaque infraction. Ces dispositions s'appliquent en tous points à tout navire, ponton et gabare destiné à l'emmagasinage de la cargaison.

ARTICLE III.

Tout navire doit, à son arrivée dans un port, être enregistré en Douane, dans les 48 heures de son mouillage, de la manière suivante: le capitaine remplira les blancs sur la feuille d'entrée et présentera aux autorités de la Douane le manifeste des importations qui composent la cargaison du navire, ainsi qu'un récépissé signé du Consul de la nation à laquelle le navire appartient, savoir: le registre du bord ou un autre document qui en tienne lieu et l'acte d'expédition en Douane à la sortie qui lui a été délivré au port d'où il est venu. A défaut de Consul, les papiers du navire seront déposés à la Douane.

Le manifeste mentionnera le nom du navire, sa description, sa nationalité, le nom du capitaine, le tonnage, le nom du port d' où il est venu, le jour où il est parti, le jour et l'heure de son arrivée, les marques, les numéros, le nombre et la nature des colis dont se compose le chargement, les noms des expéditeurs, le nom du port de destination et les noms et adresses des consignataires de la cargaison.

Le capitaine certifiera et affirmera que le manifeste est exact et le signera ainsi qu'une liste des provisions, du bord qui sera dressée d'après le manifeste. S'il y a deux ports de déchargement ou davantage, le manifeste contiendra des listes séparées des marchandises à décharger à chaque port. Les dispositions précédentes seront applicables à tout navire qui n'aura pas quitté le port dans les 48 heures de son mouillage, bien qu'il n'y eût été opéré aucun déchargement ou chargement de cargaison.

ARTICLE IV.

Si le capitaine manque à faire l'expédition requise en Douane, dans le délai prescrit à l'Article III, il payera une amende de 100 yen et si cette négligence continue, il payera la même amende par chaque période de 24 heures, pendant tout le temps où il manquera à remplir cette formalité.

ARTICLE V.

Si des marchandises se trouvent omises sur le manifeste ou ne pas y correspondre, le capitaine payera une amende d'une somme égale à la valeur de marchandises omises ou inexactement décrites.

Néanmoins cette amende ne sera pas encourue, s'il est prouvé, à la satisfaction du Surintendant des Douanes, que l'omission ou la discription inexacte provient d'une erreur.

Dans ce cas, l'omission sera réparée ou l'erreur corrigée, avec payement de 3 yen de frais pour chaque correction. (Les rectifications ou omissions devront être faites ou réparées dans le délai de 24 heures.)

ARTICLE VI.

Lorsqu'un navire aura été dûment expédié en Douane à l'entrée, comme il est prescrit par l'Article III, le Surintendant des Douanes délivrera un permis d'ouvrir les écoutilles, lequel sera mis sous les yeux du Préposé de la Douane à bord, à qui l'on demandera que les sceaux de la Douane soient enlevés des écoutilles et de tout autre endroit contenant de la cargaison sous clef ou scellés. Si les serrures ou sceaux sur les écoutilles ou autres parties du navire contenant de la cargaison ont

été ouverts ou détachés, avec ou sans intention frauduleuse, ou sans la permission des autorités de la Douane, (et que l'intention frauduleuse ait été démontrée,) le capitaine payera une amende de 200 yen par chaque infraction quel qu'en soil l'auteur.

ARTICLE VII.

Il n'est pas permis de rien charger, décharger ou transborder, les dimanches ou jours fériés, ni entre 6 heures du soir et 6 heures du matin du 1er Mars au 1er actobre, ou entre 5 heures du soir et 7 heures du matin du 1er octobre au 1er Mars, sauf par permission spéciale du Surintendant des Douanes.

Aux jours et heures ci-dessus désignés, l'entrée de la cale et toutes les autres parties du navire où se trouvera de la cargaison, seront fermées à clef ou scellées par les Préposés des Douanes.

Si les serrures ou les sceaux viennent à être ouverts, brisés ou enlevés, avec ou sans intention frauduleuse, ou sans la permission des autorités de la Douane, (et que l'intention frauduleuse soit démontrée,) le capitaine payera une amende de 200 yen par infraction, quel qu'en soit l'auteur.

ARTICLE VIII.

L'importateur des marchandises désirant les débarquer devra, pour obtenir un permis à cet effet, adresser une demande à la Douane, ladite demande sera accompagnée de la facture des marchandises en duplicata et du connaissement. (pourra être accompagnée de la facture originale.) Sur la présentation du permis au Préposé des Douanes à bord du navire sur lequel les marchandises se trouvent embarquées, celles-cipourront être déchargées, et après que chaque colis aura été examiné et dûment timbré à la Douane, l'importateur pourra en prendre livraison après avoir acquitté les droits de Douane, conformément au Tarif des importations. Le duplicate de la facture sera retenu à la Douane. Dans le cas où il n'y aurait pas de connaissement, un certificat de propriété délivré par le capitaine ou l'agent du navire sera présenté en son lieu et place. (La facture originale sera rendue à l'importateur dès que les opérations en douane auront été achevées et le paiement des droits effectué.)

ARTICLE IX. (全條削除)

La facture dont il est question dans l'Article précédent a dû, avant le chargement, être produite à l'Officier consulaire ou à l'Agent commercial du Japon, au port d'embarquement ou à celui qui en est le plus proche et la vérification en être attestée au moyen de son certificat sous sceua y endossé ou attaché. S'il n'y a pas d'Officier consulaire ni d'Agent commercial du Japon au lieu d'embarquement ou dans le voisinage, la vérifacation peut être faite par l'Officier consulaire d'un pays en paix et amitié avec le Japon, ou par deux négociants notables résident dans le port.

Observation.— Le système développé dans cet article est une source d'ennuis et de dépenses pour les négociants.

Ladite facture doit présenter une entière désignation du temps et du lieu où les marchandises qui y sont énumérées ont été achetées ou fabriquées, ce qu'elles ont coûté dans ce lieu ainsi que les frais d'emballage, de commission, d'assurance maritime, de fret et de tous autres débourses. La facture doit être signée par le propriétaire de ces marchandises, si celles ont été achetées présentement ; sinon, par le fabricant, le propriétaire ou l'expéditeur, ou par le mandataire dûment autorisé desdits acheteur, manufacturier, propriétaire ou expéditeur.

ARTICLE X. (末尾=附加)

Il ne sera permis sous aucun prétexte de faire passer en Douane des marchandises non accompagnées d'une facture, à moins que le défaut de facture ne soit expliqué à la satisfaction du Surintendant des Douanes, par l'importateur ou l'exportateur, suivant le cas, et que la quantité et la valeur n'en aient été déterminées par les Préposés compétents et qu'on n'en ait acquitté les droits de Douane. Dans aucun cas, il ne sera fait, par la suite, de réduction des droits ainsi payés.

A ajouter :

(Si, par suite de circonstances exceptionnelles, le déclarant se trouve dans l'impossibilité d'énoncer la quantité à soumettre aux droits, la douane pourra lui permettre de vérifier lui-même, à ses frais, dans un local désigné ou agrée par elle, les poids, la

mesure ou le nombre ;—après quoi l'importateur sera tenu de faire la déclaration détaillée de la marchandise.)

ARTICLE XI. (下文削除)

Les droits d'importation *ad valorem*, seront calculés d'après le coût des marchandises au lieu où elles ont été achetées, produites ou fabriquées, en y ajoutant les frais de transport, d'assurance, de commission, d'embarquement, d'emballage et tous autre frais, depuis le lieu d'achat, de production ou de fabrication jusqu'au port de déchargement. La somme ainsi obtenue sera considérée comme la valeur des marchandises sujette aux droits et sur laquelle seront payés les droits de Douane prescrits dans le Tarif.

Observation.— L'adjonction des frais d'emballage, qui ne touchent, du reste, que les articles ad valorem, constitue une innovation que nous ne pouvons admettre.

ARTICLE XII. (全條修正)

Si le Surintendant des Douanes considère comme insuffisante la valeur des marchandises sujette â des droits *ad valorem*, telle qu'elle a été déclarée par

l'exportateur ou l'importateur, il requerra l'importateur ou l'exportateur de payer les droits sur la valeur déterminée par une évaluation du Commissairepriseur de la Douane : mais, si l'exportateur ou l'importateur n'est pas satisfait de cette évaluation, il en donnera ses raisons par écrit, dans les 24 heures, au Surintendant de la Douane, et nommera lui-même, avec l'approbation du Surintendant de la Douane, un expert pour faire une nouvelle évaluation et déclarer la valeur des marchandises ainsi déterminée de nouveau. Sur quoi, le Surintendant de la Douane sera libre ou d'imposer les droits d'après la valeur déterminée par cette nouvelle évaluation ou, dans les 7 jours de la date où la valeur a été déterminée par le Commissaire-priseur de la Douane, d'acquérir de l'exportateur ou de l'importateur lesdites marchandises, au prix déterminé par la nouvelle expertise avec addition de cinq pour cent.

(Si la douane Japonaise juge insuffisante la valeur déclarée, elle pourra faire procéder à l'estimantio de la marchandise par des experts dont l'un sera nommé par elle et l'autre par l'importateu. En cas de partage des deux arbitres experts, le President du tribunal du ressort nommera un tiers arbitre. Si l'expertise constate que la valeur de la marchandise ne dépasse pas de 10% celle qui est déclarée par l'importateur, le droit sera perçus sur le montant de la déclaration et les frais d'expertise seront supportés par la douane. Dans le cas contraire, ce droit sera augmenté de 50%, à titre d'amende, et les frais d'expertise seront supportés par le déclarant.)

Observation.— Ce système a pour objet de supprimre les abus et les complications auxquels la présomtson donne lieu eu tous pays.

ARTICLE XIII. (末尾=附加)

Tout payement des droits de Douane sera opéré en yen d'argent. Lorsque la valeur facturée des marchandisies, augmentée des frais, d'après laquelle on doit payer les droits, est portée en monnaie étrangère, les droits sont calculés sur le prix de facture ramené au yen d'argent, au taux courant du change.

A ajouter :

(Le taux du change sera fixé le 1er et le 15 de chaque mois. Il sera celui du papier de banque à vue.)

ARTICLE XIV. (全條修正)

La désignation et la qualité de toutes les marchandises seront sujettes à la décision des autorités de la Douane, sur l'examen desdites marchandises, sans avoir égard à la désignation ou à la qualiteé attribuée à ces marchandises par l'importateur ou l'exportateur.

(En cas de contestation sur la désignation et la qualité des marchandises, ou suivra la même procédure que celle qui a lieu lorsque la douane et l'importateur ne sont pas d'accord sur la valeur desdites marchandises.)

ARTICLE XV. (全條削除)

S'il y a dissentiment de la part de l'importateur ou de l'exportateur, à l'égard de la décision des autorités de la Douane, quant à la désignation ou à la qualité des marchandises, il déposera, dans les 10 jours suivants, entre les mains du urintendantS de la Douane, un appel adressé au Ministre esd

Observation.— L' art. XV devient inutile.

Finances ; mais au cas où il désirera que les marchandises lui soient délivrées en attendant la décision du Ministre des Finances sur son appel, il payera les droits demandés. Si la décision du Ministre des Finances est favorable à son appel, l'excédant des droits ainsi payés sera remboursé à l'importateur ; au cas contraire, ils seront acquis aux Douanes.

ARTICLE XVI. (數語附加)

Si un importateur désire une réduction de droits pour cause d'avaries (pour cause d'avaries, de coulage ou de détérioration quelconque) éprouvées par ses marchandises pendant le voyage, il doit, avant d'en prendre livraison à la Douane, déclarer les faits de la cause au Surintendant des Douanes. Les Préposés de la Douane examineront les marchandises, apprécieront la proportion de l'avarie (du coulage et des détériorations) et une réduction correspondante des droits sera accordée.

ARTICLE XVII.

Si l'importateur de marchandises n'en fait pas la déclaration à la Douane dans les 30 jours de l'arrivée du navire sur lequel elles sont chargées, ou si, ayant fait cette déclaration, il ne les a pas débarquées dans les 30 jours de cette déclaration, ou ultérieurement, dans le cas où le Surintendant des Douaes l'aurait autorisé, les officiers de la Douane peuvent faire déposer ces marchandises dans un entrepôt, et si elles n'ont pas acquitté les droits à la Douane dans les 3 mois du jour de cet emmagasinage ou dans un délai plus long que le Surintendant des Douanes aura pu désigner, et si tous les frais de déplacement, de transport et de magasinage ne sont pas payés, ces marchandises peuvent être vendues et le produit affecté à l'acquittement des droits de Douane, de transport et des autres frais. L'excédant, s'il y en a, sera remis au propriétaire des marchandises, sur sa demande.

Si les marchandises sont d'une nature explosive, inflammable ou sujettes à se détériorer ou à périr, ou si elles consistent en bétail, elles seront vendues sans délai et le produit de la vente sera employé de la manière ci-dessus prescrite.

ARTICLE XVIII.

Il ne sera pas permis de débarquer ou d'embarquer les merchandises d'une nature explosive ou autrement dangereuses, si ce n'est aux endroits désignés à cet effet, de temps en temps, par le Surintendant des Douanes.

ARTICLE XIX. (全條削除)

Les navires étrangers ne s'emploieront pas au cabotage : néanmoins, un navire chargé dans un pays étranger d'une cargaison destinée à deux ou plusieurs ports du Japon, peut décharger une partie de sa cargaison dans un port et continuer son voyage jusqu'à l'autre ou aux autres ports de destination, dans le but d'y décharger le reste de sa cargaison d'origine, mais il ne pourra pas décharger d'autres marchandises, qui auront pu être prises dans les susdits ports.

Observation.— Une erreur a dû évidemment se glisser dans la rédaction de cet article.

ARTICLE XX.

Lorsqu'on voudra transborder une cargaison d'un navire sur un autre, la demande d'un permis de transbordement sera adresée à la Douane et, sur l'exhibition de ce permis aux Officiers de la Douane préposés à bord desdits navires, le transbordement pourra s'effectuer en conformité avec ce permis.

ARTICLE XXI.

Lorsque des objets hors de service appartenant à des vaisseaux de guerre seront vendus, l'acquéreur payera les droits de Douane d'après le Tarif.

ARTICLE XXII.

Les merchandises prohibées qu'on aura importées ou exportées, ou qu'on aura tenté d'importer ou d'exporter, seront saisies et confisquées par les autorités japonaises.

ARTICLE XXIII.

Tout l'opium se trouvant à bord d'un navire à son arrivée dans un port, en dehors de celui qui est en transit ou employé comme médicament à bord du navire (dont la provision, dans ce cas sera limitée à 3 catties) sera saisi et confisqué par les autorités japonaises.

S'il se trouve, à bord d'un navire, de l'opium en transit, le capitaine en fera le rapport par écrit à la Douane, et les Préposés à bord mettront cet opium sous scellés et en prendront la garde, jusqu'à

ce que le navire quitte le port.

Tout l'opium passé en contrebande sera confisqué et, outre cette confiscation, toute personne qui passera ou tentera de passer de l'opium en contrebande payera une amende de 20 yen par chaque catty ou fraction de catty qu'elle aura ainsi passé ou tenté de passer.

Le Gouvernement japonais a le droit exclusif d'importer de l'opium pour les besoins médicaux.

ARTICLE XXIV. (下文削除)

Les exportateus de marchandises présenteront à la Douane la demande d'un permis d'exportation, accompagnée d'une facture en double des marchandises, lesquelles pourront être embarquées, après examen et sur le payement des droits, conformément au Tarif des exportations, et sur la délivrance du permise demandé, après que chaque colis aura été timbré et le permis exhibé aux Préposés. Le duplicata de la facture restera à la Douane.

Observation.— L'obligation de déposer à la douane un double des factures n'est qu'une mesure vexatoire qui ne se justifie point..... Le duplicata de la facture restera à la Douane.

ARTICLE XXV. (下文削除)

Les Préposés peuvent examiner, en tout ou en partie, les marchandises passées en Douane pour l'exportation ou l'importation; ils peuvent aussi en vérifier la quantité, en les pesant, les mesurant ou les jaugeant, en totalité ou en partie, ou ils en peuvent prendre de petites quantités comme échantillons, s'il y a lieu.

Observation.— Le droit qu'il s'agirait de donner à la douane de prendre des échantillons peut devenir une source d'inconvénients. Il ne se justifie point.

ARTICLE XXVI.

Aucun bateau, véhicule ou porteur ne sera employé, pour le débarquement et le chargement des marchandises passées en Douane pour l'importation, l'exportation ou le transbordement, ni pour l'embarquement ou le débarquement des passagers des navires et aucun navire, ponton ou gabare ne sera employé pour l'emmagasinage des marchandises. sans y avoir été dûment autorisé par le Gouvernement japonais.

Tous bateaux, véhicules et autres moyens de transport et tous pontons et gabares ainsi employés sans permission seront saisis et confisqués par les autorités japonaises.

Toute personne s'employant au transport ou à l'emmagasinage devra observer tous les Règlements qui s'y appliquent.

ARTICLE XXVII.

Seront saisies et confisquées par les autorités japonaises toutes marchandises dont on aura effectué ou tenté d'effectuer le chargement, le déchargement ou le transbordement, sans un permis préalablement obtenu de la Douane; il en sera de de même de toutes les marchandises qu'on aura enlevées ou tenté d'enlever, par bateaux ou par flottage, de l'enceinte de la Douane, sans que les droits aient été dûment acquittés et les timbres apposés et aussi de toutes les marchandises qui, sans la permission du Surintendant des Douanes, auront été débarquées ou flottées ou qu'on aura tenté de débarquer ou de flotter dans un autre endroit que dans celui désigné par le Surintendant des Douanes.

ARTICLE XXVIII. (末尾ニ附加)

Si dans un colis on trouve cachés des objets prohibés ou soumis aux droits de Douane et non portés sur la facture, ils seront confisqués ainsi que le colis et la totalité de son contenu.

A ajouter:

(à moins qu'il ne soit démontré qu'il n'y a pas eu intention frauduleuse.)

ARTICLE XXIX.

Toute personne qui présentera à la Douane une pièce quelconque portant une description ou une déclaration fausse relativement à la quantité des marchandises ou toute autre déclaration, au moyen de laquelle le payement de la totalité ou d'une partie des droits de Douane pourrait être éludé, payer, en outre des droits requis, une amende égale à la valeur desdites marchandises.

Néanmoins, cette amende ne sera pas due s'il est prouvé, à la satisfaction du Surintendant des Douanes, que cette déclaration inexacte provient d'une erreur. Dans ce cas, l'inexactitude pourra

être réparée par le payement de 3 yen pour chaque correction.

ARTICLE XXX.

Les provisions des navires ne peuvent être débarquées ni embarquées qu'après qu'on en a obtenu la permission, sur une demande faite à la Douane et après le payement des droits établis.

ARTICLE XXXI. (一部修正)

Il n'y a pas à faire de déclaration à la Douane pour les effets des passagers, qu'on pourra débarquer ou charger à bord, après que les Préposés les auront examinés. Mais si parmi les effets d'un passager, il s'en trouve que les Préposés jugent n'être pas nécessaires pour le voyage, ils payeront les droits établis, et (Si, parmi les bagages des passagerd trouvent des articles sujets à des droits, ces droits seront perçus conformément aux tarifs d'importation ou d'exportation.) s'il s'y trouve des marchandises prohibées ou sonstraites aux droits, elles seront saisies et confisquées par les autorités japonaises.

ARTICLE XXXII.

Le capitaine de tout navire qui désire partir doit, au moins 24 heures avant de quitter le mouillage, faire sa déclaration de sortie dans la forme requise et produire son manifeste d'exportation. Les autorités de la Douane lui remettront le récépissé du Consul relatif aux papiers de bord déposés à la Douane et ledit navire sera libre de quitter le port après avoir obtenu son permis de départ. Les papiers déposés chez le Consul ne seront rendus au capitaine qu'après qu'il aura produit le permis de départ délivré par les autorités douanières du port dans lequel le navire a été reçu à l'entrée. Si un navire venait à quitter le port sans être autorisé à sortir, comme il est dit plus haut, le capitaine, le propriétaire ou l'agent de ce navire payerait une amende de 200 yen.

ARTICLE XXXIII.

Si on désire charger ou décharger une cargaison après que le navire aura été autorisé à sortir, conformément à l'Article précédent, le navire devra être de nouveau admis à l'entrée, et quand il sera prêt à partir il devra de nouveau y être autorisé.

Les bateaux-poste ne sont pas soumis à cette règle.

Lorsqu'un navire qui a été autorisé à sortir ne pourra pas quitter le mouillage dans le délai ci-dessus désigné, le capitaine fera un rapport circonstancié à la Douane, en vue d'obtenir du Surintendant la permission de rester dans le port.

Si un navire reste indûment dans le port sans que cette permission ait été obtenue, le capitaine payera une amende de 15 yen par chaque 24 heures pendant lesquelles ce navire restera après l'expiration dudit délai.

ARTICLE XXXIV.

Le permis de sortie ne sera pas accordé tant que les droits n'auront pas été payés ou garantis par une personne agrée du Surintendant de la Douane ou assurés par le dépôt d'une somme d'argent jugée suffisante par ledit Surintendant.

Si une accusation d'infraction aux Règlements de la Douane se trouvait portée contre un navire devant un tribunal, le Surintendant de la Douane ne lui accorderait pas la sortie, à moins qu'il ne fût officiellement informé par le juge saisi de l'affaire que des garanties suffisantes, soit personnelles soit consistant dans un dépôt, comme il est dit plus haut, ont été fournies audit tribunal.

ARTICLE XXXV.

Les bateaux-poste peuvent être expédiés en Douane, à l'entrée aussi bien qu'à la sortie, le Même jour ou au même moment. Dans le manifeste des importations il suffit d'énumérer les objets à débarquer ou à transborder dans un port quelconque de l'Empire. Lorsque le capitaine ne se trouve pas en situation de présenter lui-même à la Douane le manifeste d'exportation, il est permis à l'agent de la compagnie des bateaux-poste de le faire dans les 24 heures du départ du navire. La permission n'est pas requise pour le transbordement de marchandises d'un bateau-poste à une gabare appartenant à la compagnie ; mais lorsque ces marchandises seront sur le point d'être déchargées de la gabare, on devra observer sous tous les rapports les Règlements de la Douane, et les heures de débarquement seront limitées comme il est prescrit à l'Article XVII.

ARTICLE XXXVI.

Lorsqu'un navire, par suite du mauvais temps ou d'un danger quelconque, est obligé de relâcher dans un port, le capitaine doit, dans les 24 heures de son arrivée, faire un rapport des circonstances au Surintendant des Douanes et, sur la permission de celui-ci, il ne sera pas nécessaire d'expédier ce navire en Douane à l'entrée ni à la sortie.

ARTICLE XXXVII.

Si les réparations du navire dont il est question à l'Article précédent nécessitent le déchargement de le cargaison, elle ne sera pas soumise à ces Règlements; cependant le capitaine en fera un rapport à la Douane, et la cargaison pourra être emmagasinée dans les entrepôts ou sous les hangars de la Douane et soumise au payement du magasinage ainsi qu'aux autres frais qui pourraient avoir lieu. Si une partie de la cargaison vient à être vendue, ou si d'autres marchandises sont chargées à bord dudit navire, les Règlements relatifs à l'expédition des navires en Douane à l'entrée et à la sortie ainsi qu'à toutes autres matiéres en ce qui concerne cette cargaison ou ces marchandises seront observés.

ARTICLE XXXVIII.

L'entrée d'un navire dans un port non ouvert du Japon est interdite, excepté s'il s'y trouvait forcé par suite d'un gros temps ou d'autres dangers, ou s'il en avait obtenu la permission spéciale du Gouvernement japonais. Cette entrée, dans tous les cas, sera soumise aux ordres des autorités locales. Tout navire qui violerait cette prohibition sera passible d'une amende de 1000 yen, et toutes les marchandises déchargées, débarquées, chargées ou transbordées ou qu'on aurait tenté de décharger, de débarquer, d'embarquer ou de transborder seront confisquées, ainsi que les bateaux, véhicules et moyens de transport dont on se serait servi pour le déchargement, le débarquement ou le transbordement de ces marchandises.

ARTICLE XXXIX.

Les frais de transport des marchandises au lieu où elles doivent être examinées et tous autres frais semblables seront à la charge de l'exportateur ou de l'importateur.

ARTICLE XL.

Dans le cas où il y aurait insuffisance ou excédant dans le payement des droits, la Douane peut exiger le versement de ce qui manque ou l'autre partie peut réclamer le remboursement de l'excédant, suivant le cas, dans le délai d'une année à partir de la date du payement; mais il ne sera accordé à l'importateur ni à l'exportateur, aucun remboursement de droits, pour cause d'avarie, après que les marchandises auront été passées en Douane.

ARTICLE XLI.

Toutes demandes, tous rapports et autres documents requis par ces Règlements seront écrits sur des formules préparées en conformité avec celles rédigées par les Douanes, et seront signés par la personne faisant la demande ou le rapport.

ARTICLE XLII.

Pour chaque autorisation d'ouvrir les écoutilles et pour chaque permis de sortie, de débarquement de chargement, de transbordement ou pour tout autre document de la nature d'un permis, ainsi que pour chaque copie d'un tel document, il sera payé un droit de 50 sen, et pour tout acte spécial ou pour la copie dudit acte, un droit de 3 yen.

ARTICLE XLIII. (全條削除)

Les Officiers des Douanes peuvent procéder à des recherches sur les personnes se trouvant à bord des navires dans les limites du port, ou de toute personne quittant le bord ou s'y rendant, si lesdits Officiers ont de sérieuses raisons de soupçonner lesdites personnes d'avoir caché sur elles des marchandises prohibées ou soustraitès aux droits: et lesdites marchandises qu'on trouverait sur elles seront saisies at confisquées par les autorités japonaises. Avant qu'on ne procède à de telles recherches, celui qui est menacé d'en être l'objet peut requérir qu'on le conduise, aussi promptement que possible, devant le Surintendant des Douanes, lequel, s'il ne voit pas de raison suffisante pour la recherche, l'en exemptera; mais, autrement, il ordonnera les

Observation.— Les art. 53 et 54 ne pourront être l'objet d'un examen que lorsque la réforme générale de l'organisation judiciaire actuelle sera à l'ordre du jour.

recherches sur la personne.

ARTICLE XLIV. (全條削除)

Si un Officer des Douanes a de sérieuses raisons de soupçonner que des marchandises prohibées ou soustraites aux droits sont recueillies, gardées ou cachées dans une maison ou ailleurs, ledit Officier peut être autorisé, par mandat obtenu de l'autorité compétente, à y entrer, à y faire perquisition et à saisir et emporter les marchandises prohibées ou soustraites aux droits qu'il aura pu y trouver, et, dans le cas où il éprouverait de la résistance, il aura le droit de forcer l'entrée et de lever tout empêchement ou obstacle à l'entrée, à la perquisition ou à la saisie susmentionnées.

ARTICLE XLV.

Toute infraction à l'une ou l'autre des dispositions de ces Règlements, à laquelle aucune peine spéciale n'est attachée, peut être punie d'une amende qui ne sera pas inférieure à 20 yen ni supérieure à 200 :

ARTICLE XLVI.

Toutes amendes et pénalités encourues par l'effet de ces Règlements appartiendront au Gouvernement japonais.

ARTICLE XLVII.

Toutes amendes et pénalités encourues par l'effet de ces Règlements dans les ports de ....., ..., et de ..... peuvent, en cas de défaut ou de refus de payement, être recouvrées par les autorités de la Douane de ces ports devant les tribunaux japonais compétents desdits ports.

ARTICLE XLVIII.

Les heures réglementaires de la Douane sont de 10 heures du matin à 4 heures de l'après-midi, excepté les samedis où les bureaux sont fermés à midi.

Avis des jours fériés observés par la Douane sera donné chaque année à chaque Douane.

ARTICLE XLIX. (下文附加)

Le Gouvernement japonais peut adopter de temps en temps, (après s'être concerté ou préalable avec les Représentants étrangers) pour empêcher la contrebande dans chaque port, les mesures nécessaires qui ne sont pas prescrites dans ces Règlements.

貿易規則追加案ニ對スル佛國公使ノ修正意見

Amendements proposés par le Ministre de France.

ARTICLE SUPPLÉMENTAIRE A INSÉRER DANS LES RÈGLEMENTS DE COMMERCE.

§ 1er. Les objets de production ou de fabrication étrangère réimportés au Japon après en avoir été exportés payeront les droits d'importation en conformité avec le tarif, bien que le droit puisse avoir été payé sur lesdits objets lorsqu'ils ont été originairement importés.

§ 2. Les objets de production ou de fabrication japonaise rapportés de contrées étrangères au Japon payeront un droit *ad valorem* de cinq pour cent (5 %).

§ 3. Les objets de production ou de fabrication étrangère exportés du Japon seront admis à passer francs de droits d'exportation, pourvu que le qualité et la condition en soient restées sans changement depuis la date de l'importation et que trois ans ne se soient pas écoulés depuis qu'ils ont été importés, et pourvu aussi que celui qui les exporte produise le permis d'importer et prouve, à la satisfaction du Surintendant des Douanes, l'indentité desdis objets avec ceux qui sont décrits dans le permis.

Et lorsque des objets de la nature de ceux qui sont désignés dans la clause précédente seront, dans le délai d'un an (de deux ans) après la date de leur importation, exportés du Japon dans un pays étranger, après avoir été enlevés de la garde et du contrôle de la Douane, celui qui les a importés, outre la permission de passer de tels objets francs de droits d'exportation, sera en droit de recevoir un drawback de quatre-vingt-dix pour cent (90 %) de tous les droits payés pour ces objets, pourvu :

1°) que tous les frais dus à la Douane sur lesdits objets aient été payés,

2°) qu'ils soient, de bonne foi (bona fide), exportés dans un pays étrange,

3°) qu'ils soient ainsi exportés dans les barils,

caisses, boîtes, coffres ou ballots dans lesquels ils ont été originairement importés, sans avoir été ouverts ou déballés depuis leur importation, (à l'exception des articles qui demandent absolument à être déballés pour la vente.)

4°) qu'ils soient au moment de leur exportation soumis à l'examen et à l'inspection que les autorités de la Douane estimeront nécessaires pour déterminer leur identité avec les objets désignés dans le permis d'importation,

5°) et enfin, qu'aucune restitution semblable des droits ne soit payée à personne autre qu'à l'importateur desdits objets ou à son agent.

Après l'exportation de tous objets désignés ci-dessus, celui qui les a importés ou son agent obtiendra un permis d'exportation sur la présentation duquel il aura la faculté de recevoir le montant du droit de drawback sur lesdits objets.

Si les objets ainsi exportés sont débarqués ou si on tente de les débarquer dans aucune partie du Japon, sans le payement des droits (d'importation), ils seront confisqués sommairement par le Gouvernement japonais, et, en outre, le double du montant des droits restitués sera payé à la Douane par l'importateur ou son agent.

Des formules de demandes pour les drawbacks et les autres pièces nécessaires en vertu de cet article seront fournies sur demande par le Surintendant des Douanes.

一四一　明治十九年三月八日　露國上野代理公使ヨリ

條約改正會議ニ列席ノ件

Tokio, le $\frac{24\ février}{8\ mars}$ 1885.

Monsieur le Ministre,

J'ai reçu par télégraphe l'autorisation du Ministre des Affaires Etrangères de Russie de prendre part à la conférence pour la révision des traités qui va se réunir prochainement à Tokio et je m'empresse d'en informer Votre Excellence.

Veuillez agréer, Monsieur le Ministre, l'assurance de ma plus haute consideration.

Speyer.

Son Excellence
Monsieur le Comte K. Inouyé.
&c. &c.

一四二　明治十九年三月八日　露國上野代理公使ヨリ

來翰受領ノ件

送第二七四號

本月八日附第二十四號貴翰ヲ以テ頃日東京ニ於テ開設可相成條約改正會議ニ參與スベキ旨貴國外務大臣ヨリ電令相成候趣御通知有之欣然致承知候此段回答得貴意候敬具

明治十九年三月八日

外務卿伯爵　井上　馨

露國臨時代理公使　スペイヤ貴下

一四三　明治十九年三月六日　各國公使ヨリ

條約改正會議開會通知ノ件

一　英米公使宛

The Department of Foreign Affairs,
Tokio, the 26 day, the 4th Month of the 19th Year of Meiji.

Sir,

I have the honor to state to Your Excellency that the necessary preparations having now been completed it will afford much satisfaction to His Imperial Majesty's Government to have the final Conference for the pending Revision of the Treaties assembled at an early date.

I trust therefore that Your Excellency will find it convenient to accept the invitation which I now beg to extend to you to meet at the Department for Foreign Affairs on the first May next at two o'clock p. m. for the purpose of inaugurating the Conference.

I avail myself &c.

二　各國公使（英米ヲ除ク）宛

No. 158

26e Jour du 4eme Mois de la 19e Année de Maiji.

Monsieur le Ministre,

J'ai l'honneur d'informer Votre Excellence (ou vous) que les préparatifs nécessaires étant complétement terminés, le Gouvernement de Sa Majesté Impériale sera très satisfait si la Conférence définitive pour la Révision des Traités pendante jusqu' aujourd'hui peut être ouverte prochainement.

En conséquence, j'espère que Votre Excellence (ou vous) ne verra (ou ne verrez) aucun inconvénient à accepter l'invitation que je me permets de lui (ou vous) adresser, par la présente, de se (ou vous) rendre au Ministère des Affaires Etrangères le Ier mai prochain à deux heures de l'après midi afin de constituer la Conférence.

Je saisis cette occasion, Monsieur le Ministre, pour renouveler à Votre Excellence (ou vous) l'assurance de ma plus haute considération.

S. E.

M.....

E. E. & M. P. de S. M. l'Emp. ou Roi &c.

一四四 明治十九年四月二十七日 英國公使ヨリ外務大臣宛

條約改正會議出席受諾ノ件

一 英國公使回答

Tokyo
April 27th, 1886.

Monsieur le Ministre,

I have the honour to acknowledge the receipt of Your Excellency's note of yesterday's date, in which you inform me that the preparations for the Conference for the Revision of the Treaties have now been completed, and invite me to attend at the Department for Foreign Affairs on the Ist May, for the purpose of inaugurating the Conference.

In reply I beg to assure Your Excellency of the pleasure it will give me to attend at the Department of Foreign Affairs, on the day named, in response to Your Excellency's invitation.

I avail myself of this opportunity to renew to Your Excellency the assurance of my highest consideration.

F. R. Plunket

His Excellency
Count Inouye Kaoru

&c. &c. &c.

二 米國公使回答

No. 101

United States Legation
Tokio Japan, April 27, 1886.

His Excellency,
Count Inouye Kaoru
H. I. J. M's Minister for Foreign Affairs.

Sir:

I have the honor to acknowledge receipt of Your despatch of the 26th instant announcing the readiness of His Imperial Majesty's Government to meet the Representatives of the Treaty Powers in a Conference to consider revision of the existing treaties at an early date.

I have further to acknowledge Your invitation to meet the Representatives of Japan and my colleagues of the Diplomatic Corps at the Foreign Office, at 2 o'clock P. M. on the 1st day of May proximo, to inaugurate said Treaty Conference.

I have the honor to accept said invitation for the time and place and purpose designated.

I have pleasure in renewing the assurances of my highest consideration.

Richard B. Hubbard

三 獨逸公使回答

No. 57

Tokio, le 27 Avril 1886

Monsieur le Ministre,

J'ai eu l'honneur de recevoir la lettre que Votre Excellence a bien voulu m'écrire en date d'hier et par laquelle Elle m'a informé que les préparatifs nécessaires étant terminés le Gouvernement de Sa Majesté Imperiale s'est decidé d'ouvir la Conférence definitive pour la Révision des Traités. En consequence Votre Excellence invite les Délégues de se réunir au Ministère des Affaires Etrangères le Ier Mai à deux heures de l'après-midi afin de constituer la Conférence.

En acceptant avec empressement cette invitation dans ma qualité de Délégué de l'Empire Allemand et de Délégué de la Confédération Suisse, je prie Votre Excellence d'agréer les assurances réitérées de ma plus haute considération.

Holleben

Son Excellence
Monsieur le Comte Inouye Kaoru
Ministre des Affaires Etrangères.

四 墺國公使回答

No. 116.

Tokio, le 27 Avril 1886.

Monsieur le Comte,

J'ai l'honneur d'accuser réception de la Note par laquelle Votre Excellence a bien voulu m'informer, à la date d'hier, que les travaux préparatoires d'une Conférence définitive pour la révision des traités du Japon avec les Puissances étrangères étant achevés, le Gouvernement de Sa Majesté le Tennô désirerait voir la Conférence en question se constituer le Ier Mai prochain.

Prêt à concourir au but que poursuit Votre Excellence, j'accepte avec plaisir l'aimable invitation qu'Elle m'a adressé à ce sujet, et forme des voeux sincères pour la réussite de cette oeuvre intéressante de paix et de progrès.

Laissez-moi saisir cette occasion, Monsieur le

Ministre, de Vous réiterer les assurances de ma plus haute considération.

Zaluski

Son Excellence
Monsieur le Comte Inouyé Kaoru
Minstre d'Etat et Ministre des Affaires
Etrangères de Sa Majesté l'Empereur du Japon
etc. etc. etc.

五 佛國公使回答

Tokio, le 27 Avril 1886.

Monsieur le Comte,

En m'exprimant, par la lettre qu'Elle m'a fait l'honneur de m'adresser le 26 de ce mois, le désir qu'a le Gouvernement de Sa Majesté Imperiale de voir se constituer prochainement la conférence pour la révision des traités, Votre Excellence me demande de me rendre au Ministère des Affaires Etrangères, dans ce but, le Ier Mai, à 2 heures de l'après midi.

Je m'empresse d'informer Votre Excellence que j'accepte son invitation.

Veuillez agréer, Monsieur le Comte, les assurances de ma très haute considération.

Sienkiewicz

Son Excellence
Monsieur le Comte Ino-ouyé
Ministre des Affaires Etrangères
Tokio

六 伊國公使回答

Tokio, le 27 Avril 1886.

Monsieur le Comte,

Je suis heureux d'apprendre par la Note que Votre Excellence a bien voulu m'adresser en date d'hier que, les préparatifs nécessaires étant complètement terminés, rien n'empêche désormais l'ouverture de la Conférence définitive pour la révision des Traités.

J'aurai l'honneur de me rendre au Ministère des Affaires Etrangères le Ier Mai prochain à 2 heures de l'après midi, ainsi que Votre Excellence m'en a aimablement adressé l'invitation.

Je saisis cette occasion pour Vous renouveller, Monsieur le Comte, les assurances de ma tres haute considération.

R. de Martino

A Son Excellence
Le Comte Inouyé
Ministre d'Etat pour
les Affaires Etrangères
etc. etc. etc.

七 露國公使回答

No. 43

Tokio, le 15/27 Avril 1886

Monsieur le Ministre,

J'ai eu l'honneur de recevoir la note de Votre Excellence en date d'hier par laquelle Vous voulez bien m'informer que l'ouverture de la Conférence pour la révision des traités est fixee au Ier Mai prochain.

Je m'empresserai de me rendre à l'heure indiquée par Votre Excellence au Ministre des Affaires Etrangères et Vous prie en attendant de vouloir bien agréer l'assurance de ma plus haute consideration.

Speyer

Son Excellence

Monsieur le Comte K. Inouyé &c. &c.

一四五 明治十九年四月二十七日 英佛上公使ヨリ外務大臣宛

條約改正會議書記依頼ノ件

I 英國公使宛

Foreign Office, Tokio.
April 27, 1886.

Dear Sir Francis,

It will afford me a great satisfaction if Your Excellency will allow me to secure the services of John H. Gubbins Esq., the Acting Japanese Secretary to H. B. M's Legation, as one of the secretaries to the forthcoming Conference for the Revision of the Treaties ; and in case you comply with my request you will much oblige me by ordering Mr. Gubbins to be present at the Foreign Office at half past twelve o'clock on the Ist May next.

I beg to remain, Sir,

very faithfully yours,

Inouye Kaoru

His Excellency
The Honourable Sir Francis Plunkett

II 佛國公使宛

Tokio, le 27 Avril 1886

Cher Monsieur Sienkiewicz,

Ce sera pour moi une grande satisfaction si Votre Excellence veut bien me permettre d'utiliser les services de Monsieur de Lucy Fossarieu, interprète à la Légation de France à Tokio, comme un des secrétaires à la prochaine Conférence pour la Révision des Traités ; et dans le cas où ma demande serait acceptée, vous m'obligeriez beaucoups si vous vouliez bien donner l'ordre à Monsieur de Lucy de se presenter au Ministère des Affaires Etrangères le Ier Mai prochain à midi 30.

Veuillez agréer, Monsieur le Ministre, l'assurance etc.

(signé) Inouye Kaoru

Son Excellence
Monsieur A. Sienkiewicz
Env. Ext. et Minis. Plen. de France.

一四六 明治十九年四月二十七日及二十八日 非佛上公使ヨリ外務大臣宛

會議ノ書記委託ノ件

I 佛國公使回答

Tokio le 27 April 1886

Mon Cher Comte,

Votre Excellence me fait l'honneur de me demander, par une lettre en date de ce jour, d'autoriser M. de Lucy Fossarieu, interprète de ma Légation, à le mettre au service de la Conférence pour la révision des traités, en qualité de Membre du Secrétariat.

Je m'empresse d'informer Votre Excellence que je me fais un véritable plaisir de déférer au désir qu'Elle a bien volu m'exprimer conformément à ses indications, M. de Lucy se présentera au Ministère des Affaires Etrangères, le I-er Mai prochain à midi et demi.

Je saisis cette occasion de renouveler à Votre Excellence l'assurance de ma plus haute considération.

Sienkiewicz

Son Excellence
Monsieur le Comte Ino-ouyé
Ministre des Affaires Etrangères à Tokyo.

II 英國公使回答

Tokyo
April 28/'86.

Dear Count Inouyé

In reply to your kind letter of yesterday, I hasten to assure Your Excellency of the great pleasure it affords me to place the services of Mr. Gubbins, the Acting Japanese Secretary of this Legation, at your disposal, to act as one of the Secretaries to the forthcoming Conference for the Revision of the Treaties.

I beg further to state that, in compliance with Your Excellency's request, I have directed Mr. Gubbins to attend at the Imperial Foreign Department at half past twelve on Saturday the I-st of May.

I beg to remain,

Yours faithfully,

F. Plunkett

His Excellency
Count Inouyé Kaoru
&c.　&c.　&c.

一四七　明治九年四月三十日　井上外務大臣ヨリ伊藤總理大臣宛

條約改正會議發會ニ關シ上奏ノ件

附屬書　上奏案
別　錄　條約改正會議記事

親展

内閣總理大臣伯　伊藤博文殿

外務大臣伯　井上　馨

來ル五月一日ヨリ條約改正會議發會之儀ニ付別紙之通上奏候間上奏方可然御取計相成度候也

附屬書

條約改正會議發會之儀ニ付上奏

來ル五月一日ヨリ條約改正會議發會致候此段謹テ上奏ス

年　月　日

外務大臣伯　井上　馨

註　條約改正會議ノ詳細ハ別卷議事錄參照

別　錄

條約改正會議記事

一　會議錄日附及各國全權委員
二　十九年五月一日井上外務大臣ヨリ各國全權委員ヘ送附シタル諸案目錄竝改正條約案
三　十九年五月二十九日井上外務大臣ヨリ閣議ヘ提出ノ條約改正意見書
四　裁判權條約案（内閣修正定案）
五　十九年六月十五日第六回會議ニ提出セラレタル英獨合案條約書
六　二十年四月二日迄ニ議決シタル條款
七　二十年四月二十二日議定シタル裁判權條約案
八　裁判權ニ關スル井上伯ノ改正經過

一　會議錄日附及各國全權委員

年次	月	日	會議錄
一九、五、一			一
	二	二	二
	二	八	三
	三	一	四
	六、	八	五
	一五		六

年次	月	日	會議錄
一九、	六、	二九	七

（十月六日稅目調查委員報告實易規則案交付）
（十月十六日佛公使意見書提出）
（十月二十一日稅目調查案委員

報告倉庫規則案交付）

一九、一〇、一〇	八	
一一、一九	九	

（十一月十日露公使意見書提出）

一五	一〇
二二	一一
二九	一二
一二、一四	一三
一八	一四

（十二月二十一日倉庫規則案再交付）

二二　一五

（二十年一月三日裁判所構成法草案交付）

二〇、一、八　一六
一五　一七

各國全權委員

日本	外務大臣	井上　馨
	外務次官	青木　周藏
佛國	全權公使	J. A. Sienkiewirz.
埃洪國	全權公使	Charles Zaluski.
英國	全權公使	Francis R. Plunkett.
伊太利國	全權公使	Renato de Martino.

二〇、一、二五	一八
二、二	一九
一二	二〇
二三	二一
三、一一	二二
一八	二三
三一	二四
四、二	二五
二二	二六

（四月二十三日最惠國約款ニ關スル通牒）
（五月十九日裁判管轄ニ關スル條約草案交付）
（七月三日通商事項取調委員報告通商條約案交付）
（七月十六日正誤通知）

二〇、七、一八	二七

白耳義國	全權公使	George Neyt.
亞米利加	全權公使	Richard B. Hubbard.
獨逸國	總領事	Theodore von Holleben.
		Edward Zappe.
和蘭、瑞典	辨理公使	J. J. van der Pot.
諸威、丁抹		
西班牙	辨理公使	José Delvat.
葡萄牙	代理公使	José de Silva Lourirs.
露國	代理公使	Alexis de Speyer.
		Theodore von Holleben.
瑞西國	總領事	A. Wolf.

二　十九年五月一日井上外務大臣ヨリ各國全權委員ヘ送附シタル諸案目錄竝改正條約案

第一　改正條約案
第二　裁判實施規則案
第三　貿易規則案
第四　改正輸入稅目
第五　官設倉庫規則
第六　私設倉庫規則
第七　庫租目錄
第八　噸稅及ヒ燈稅規則案
第九　港　則
第十　外國船雇入規則案
第十一　旅券規則案

第十二 我政府提出

註 之修訂案ハ後年大隈改正案ノ原案トナリタルモノニシテ第三卷第三十三文書附屬書參照

第十二 日第一回改正會議ニ提出セラレタル條約案

DRAFT

REVISED CONVENTION.

Preamble. His Majesty the Emperor of Japan and....., equally desirous of maintaining the relations of good understanding which happily exist between them, by extending and increasing the intercourse between their respective States; and being convinced that this object cannot better be accomplished than by revising certain portions of the Treaties between the two countries, have resolved to complete such a revision based upon principles of equity and mutual benefit, and for that purpose, have named as Their Plenipotentiaries, that is to say: His Majesty the Emperor of Japan ....., and.....,

who, after having communicated to each other their full powers, found to be in good and due form, have agreed upon and concluded the following Articles:—

ARTICLE I.

Tariff. It is agreed by the High Contracting Parties that from....., next, in lieu of the duties hitherto levied and collected, the duties specified in the tariff hereunto annexed, may be levied by the Japanese Government on all products and manufactured goods on importation into Japan. The Japanese Government, however, reserves to itself the right to prohibit or restrict the importation of any articles which may, on account of the prevalence of epidemic diseases abroad, endanger the lives, health, or property of persons in Japan, or which may tend to endanger or disturb the peace or tranquillity of the Realm.

ARTICLE II.

Compensatory Taxes and Duties. It is understood by the High Contracting Parties that the Japanese Government, in the event it imposes or augments any internal tax or duty upon any article of domestic production or manufacture, such as *sake, mirin, shoyu*, or tobacco, may impose a compensatory duty on like articles imported into Japan, provided, such compensatory duty, with the customs duty added, shall not exceed the internal tax or duty.

ARTICLE III.

Accessible Ports. From the date of exchange of the ratifications of this Convention, and upon the conditions hereinafter named, the Japanese Government will open three new ports, namely, *Shimonoseki, Yokkaichi*, and *Onnagawa*, (to be styled "accessible ports," in order to distinguish them from the existing open ports), wherein..... subjects, under the terms and conditions of this Convention, may reside, lease and own real estate, and carry on all lawful avocations.

The limits within which these privileges are granted shall be as follows:

At *Shimonoseki*, (such and such limits.)

At *Yokkaichi*, (such and such limits.)

At *Onnagawa*, (such and such limits.)

.....subjects shall also be entitled to travel without passports, within a distance of five *ri* beyond the above mentioned limits.

It is expressly understood and agreed by the High Contracting Parties, that the privileges which shall be conferred upon.....subjects at the accessible ports, with reference to the acquisition and holding of real property, are so conferred on condition that they shall conform to and observe the Japanese law of land tenure, as well as all other Japanese laws and regulations in that behalf, and on the further condition that in all cases relating to the acquisition and holding of such real property, jurisdiction is exclusively reserved to the Japanese Authorities.

ARTICLE IV.

Passports. The Japanese Government agrees to confer, under the conditions contained in the Passport Regulations hereunto annexed, on all.....subjects, the liberty of travelling and sojourning in Japan, outside the present treaty

limits, and also outside those limits which have been determined by Article III. of this Convention.

ARTICLE V.

Charter of Ships.

For a period of ten years,..... subjects shall be entitled to charter to Japanese.....ships, and such chartered ships may visit all Japanese ports, and the charterers are at liberty and permitted to trade there by means of such vessels, subject however, to the observance of the Regulations which have been agreed to in that behalf, and are hereunto annexed.

.....subjects on board such ships are to be treated in conformity with Article XXIII.

ARTICLE VI.

Commercial Partnerships.

The Japanese Government will be prepared hereafter to discuss measures by virtue of which..... subjects shall be allowed to form commercial partnerships with Japanese subjects, and to hold shares in Japanese industrial and commercial companies, upon the understanding however, that so far as such partnerships and companies are concerned,.....

.....partners and shareholders, together with the whole of the partnership or company property, shall be subject exclusively in all cases, to the Japanese laws and to the jurisdiction of the Japanese Courts.

ARTICLE VII.

Trade-Marks.

The High Contracting Parties agree that with regard to trade-marks, ...subjects shall enjoy in Japan and Japanese subjects shall enjoy in....., the same protection as native subjects.

The trade-marks in which the subjects of one of the two countries may wish to secure the right of property in the other, must be recorded at the proper office, in conformity with the conditions and formalities prescribed by the laws and regulations of the country in which such record is made.

The exclusive right to use a trade-mark in the other country cannot exist for a longer period than that fixed by the law of this country for native trade-marks. If a trade-mark has, however, become public property in the country of its origin, it shall be equally free to all in the other country.

CRIMINAL JURISDICTION.

ARTICLE VIII.

Applicable Japanese Law

The High Contracting Parties agree that:—

(I.) The written laws of Japan, which have been or shall hereafter be enacted for the internal government of the country, shall, subject to the stipulations hereinafter contained in this Convention, be binding on.....subjects in Japan, provided such laws are by their nature applicable to aliens, and provided also, they have the following for their object:

(*a*) The police of public security, that is to say, the prevention of dangers to common safety;

(*b*) Matters relating to agriculture, forestry, mining, pursuit of game, fishing, transports or conveyances on Japanese land and waters, including harbour police and shipwrecks;

(c) All measures of the financial administration providing for the accurate valuation and assessment of taxes and dues payable by..... subjects, and

(d) All institutions and mediums of circulation, exchange, and public credit in Japan, which are created, authorized, or permitted by the State, and the acquisition, possession, use or enjoyment of which are subject to certain principles of internal government.

(II.) Subject to the same reservation as in the preceding paragraph contained, the fourth book of the Japanese Criminal Code on police contraventions shall be binding upon.....subjects in Japan.

(III.) The common criminal law of Japan shall, under the same reservation, be binding upon..... subjects in Japan, within and without the present treaty limits, to the extent, that for every infraction thereof, the Japanese Authorities may, according to the provisions of this Convention, (Articles XV., XVI., XVII.) make arrests, seizures, and domiciliary visits.

ARTICLE IX.

The Limit of Penalties.

However, it is well understood that the laws of internal govern-

ment referred to in Paragraph I., a-d, of the last preceding Article, which have penalties attached, shall only be binding upon.....subjects in the event such penalties do not exceed a maximum of one thousand (1,000) *yen* fine (either principal or accessory,) or imprisonment for five (5) years, or both such fine and imprisonment, and the minimum of such penalties does not exceed the amount of thirty (30) yen fine, (either principal or accessory,) or ten (10) days' imprisonment, or both such fine and imprisonment.

ARTICLE X.

Source of Law.

So far as the validity or binding force of the laws mentioned in Article VIII., Paragraph I., a, b, c, d hereof, are concerned, it is immaterial whether they are issued in the form of law, or depend upon Imperial, Cabinet, or Ministerial ordinances, or regulations of competent local authorities, or emanate from any other legal source.

ARTICLE XI.

Foreign Regulations.

To the extent the Japanese Laws of internal Government, in conformity with Article VIII., Paragraphs I. and II., of this Convention, become binding upon.....subjectis, the regulations hitherto issued by..... authorities, shall cease to be operative, and to the same extent, the powers of the said authorities to issue such regulations hereafter, shall cease.

ARTICLE XII.

Limit of competency in criminal cases.

In cases of offences committed by ..... subjects against Japanese laws of internal government which are binding upon them, according to the preceding Articles, or against conventional regulations which have been agreed upon by the High Contracting Parties in this Convention, and which have penalties attached, the competency of Courts to inquire into and adjudge such cases shall be determined as follows:—

1. If the offences are committed within the present treaty limits the ..... Courts shall have jurisdiction.

2. If the offences are committed outside the present treaty limits, and

(a) The maximum of the penalties attached do not exceed thirty (30) yen fine, (either principal or accessory,) or ten (10) days' imprisonment or both such fine and imprisonment;

(b) If the offences are committed against the trade, harbor, passport, charter, or bonded or public warehouse regulations, or the regulations on lighthouse or tonnage dues which are hereto annexed, the Japanese Courts shall have jurisdiction.

3. In all cases other than those mentioned under (a) and (b) of the last preceding paragraph, the Japanese Courts shall be competent to inflict punishments to the extent of thirty (30) yen fine, (either principal or accessory,) or ten (10) days' imprisonment, severally or jointly; and in respect to all higher punishments,..... Courts only shall be competent to inflict the same.

In cases falling within the jurisdiction of Japanese Courts as above determined, they shall also be competent to decree the confiscation of articles of conviction, as well as articles used in the commission of offences, irrespective of value.

All fines and confiscations pronounced in consequence of offences against the penal Japanese Laws, shall belong to the Japanese Government, notwithstanding such offences might, at the same time, constitute infractions of the penal Laws of....., and might be punished accordingly.

ARTICLE XIII.

Application of milder penalties. *Ne bis in dem.*

Whenever an offence committed by a.....subject, against Japanese laws of internal government, which is not justiciable by a Japanese Court, would at the same time be punishable by.....law, the Court adjudging the case shall impose the milder penalty of the two laws.

After a final sentence has been given in a case according to the national law of the offender, he shall not again be tried for the same offence according to Japanese penal law.

ARTICLE XIV.

Consular jurisdiction.

The jurisdiction over.....subjects, not reserved by this Convention to Japanese Courts shall, without prejudice to the national rules of competency, be exercised in Japan by *consules missi*.

The competency of Consuls, in respect of offences committed against Japanese Laws, shall be determined by the nationality of the offenders, except in cases where the offenders belong to ships of war, in which event, the nationality of the ships shall be conclusive. In the absence of a decision to the contrary by the Consul, the personal declaration of the offenders as to their nationality shall be decisive.

Should the said Consul or the Consul of another nation who shall become competent by such decision of the Consul first named, refuse in any case to exercise jurisdiction, or in the event the nationality of offenders cannot be determined in the manner above specified, then the Japanese Courts shall assume jurisdiction.

ARTICLE XV.

Seizures.

The Japanese authorities are only authorized, (the special provisions of this Convention excepted,) to seize articles in the possession of..... subjects, without orders of the competent Courts, under such circumstances as would justify the arrest of a.....subject, or entry into his dwelling-house. Such seizure, however, can only be made for the purpose of securing the articles seized as means of conviction, or to prevent dangers which would arise from the possession of such articles and which dangers could not be otherwise prevented.

In the event the seizure is effected within the present treaty limits, the articles seized shall be placed immediately at the disposal of the..... Consul, and when demanded they shall be delivered to him.

ARTICLE XVI.

Arrests.

The right of arrest rests generally with the Japanese Authorities. But it is understood that in the absence of warrants from the competent courts, such right shall not be exercised except in the following cases :—

(I.) Within the present treaty limits, when the offender is caught *in flagranti*, and to prove his identity only.

(II.) Outside the present treaty limits :—

(a) When the offender is caught *in flagranti;*

(b) In case of suspicion of flight after the commission of an offence;

(c) In case a person is suspected of having committed a crime.

If the arrest is made within the present treaty limits, the person arrested shall be dismissed immediately after his identity is proved at the police station. In the event, however, his identity cannot be immediately proved upon his declaration, or in case of crime, the offender is to be brought at once before the competent Consul. (Article XIV.)

If the arrest is made outside the present treaty limits, the person arrested shall within 24 hours or as soon as the means of transport will permit, as the case may be, be brought before the Consul having jurisdiction in the case, or if that cannot be effected or if the Japanese Courts are competent, before the competent Japanese Court or Public Prosecutor of the place.

ARTICLE XVII.

Inviolability of Domicile.

The Japanese authorities shall not be authorized to enter houses occupied by.....subjects, without orders from the Court having jurisdiction over the occupants, unless such occupants consent thereto, except for the following purposes :—

(*a*) In order to prevent an actual danger to the body or life of an inmate, or to prevent an actual danger to others resulting from the condition of the house;

(*b*) In order to ascertain facts immediately on the commission within the house of a punishable act;

(*c*) In order to pursue immediately and arrest a fugitive offender who takes refuge in the house.

CIVIL JURISDICTION.

ARTICLE XVIII.

Civil Jurisdiction.

The Japanese Courts outside the present treaty limits, shall, in addition to the jurisdiction already secured to them by the existing treaties or by other provisions of this Convention, have jurisdiction to hear and adjudicate all claims for money or its equivalent, brought by Japanese against ..... subjects, provided the amount, exclusiveof interest and cost, does not exceed five hundred (500) silver *yen*.

The introduction of a suit in a Japanese Court for a portion of a claim, the total amount of which already due, exceeds five hundred (500) silver *yen*, shall only be admissible with the consent of the party defendant.

ARTICLE XIX.

Applicable Law in Civil Cases.

In the decision of such civil cases, (Article XVIII.) the law of the place where the contract is to be performed shall be applicable, and in the absence of a designated place of performance, and in cases not arising out of contract, the law of the place where the defendant resides shall be applied.

It is further understood, that the applicable law, shall, in cases where.....subjects are to perform obligations within the present treaty limits, be the law of....., and in cases where they are to perform obligations in Japan, outside the present treaty limits, the Japanese law shall apply, so far as it is by its nature applicable to aliens.

ARTICLE XX.

Executions.

The execution of judgments and sentences rendered by Japanese Courts against.....subjects, belongs respectively to the Japanese Courts and the Public Prosecutors in respect of persons and property outside the present limits.

In respect, however, of..... subjects or their property, being or situated within the present treaty limits, the.....Consuls shall be applied to, to execute such judgments and sentences, and such .....Consuls cannot decline to comply with the applications, if all the formalities are in order, except it appears from the judgments and sentences that the Japanese Courts had no jurisdiction in the cases.

ARTICLE XXI.

Regulations for the execution of jurisdictional stipulations.

The Regulations hereto annexed, providing for the execution of the above jurisdictional stipulations, shall be observed.

ARTICLE XXII.

Discipline of and jurisdiction over Seamen.

The High Contracting Parties recognize the disciplinary authority of the masters of vessels over the persons belonging to the crews thereof, without reference to nationality. The detention, however, by the master on board a vessel of a member of the crew, belonging to the..... nationality, is only justifiable until the vessel arrives at the next port where the offender can be tried by the proper authority or delivered to the competent Court.

However, ...subjects serving on board a Japanese ship in Japanese waters, shall, in questions of jurisdiction, be treated like.....subjects in the open ports, when the ship is within the open ports, and like.....subjects in the accessible ports, when the ship is outside the open ports ; and Japanese seamen on board..... ...ships in Japanese waters remain exclusively under Japanese law and jurisdiction.

ARTICLE XXIII.

Jurisdiction over foreigners travelling on board Japanese vessels.

.....subjects, other than those designated in Article XXII hereof, being on board of Japanese vessels, within Japanese waters outside the open and accessible ports shall be considered, under this Convention, when travelling from one open port to another open port, as within the present treaty limits, but in all other cases they shall be deemed to be in the accessible ports.

ARTICLE XXIV.

Applicability of taxes and dues to..... ..... subjects.

Respecting the requirements of concessions or licenses for undertaking any industrial or commercial business or occupation, at the accessible ports, as well as in respect of the payment of taxes and dues and license fees thereon, the

High Contracting Parties agree, that.....subjects shall be placed on the same footing as Japanese subjects.

At the open ports the same rule shall prevail, excepting that it shall be limited to manufactures, fabrications, and preparations of articles for Japanese consumption, such as fish, *sake*, tobacco, *shoyu*, and *mirin*. .....subjects shall also, when they sell wine, beer, and other spirits at retail, be obliged to pay the respective license fees.

At the accessible ports, ...subjects shall pay the same general and local taxes and dues as Japanese, so far as such taxes and dues are applicable to aliens.

ARTICLE XXV.

Collection of taxes and dues.

The taxes, dues, and license fees payable by.....subjects to the Japanese Government, in conformity with this Convention, shall be collected directly by the Japanese Authorities.

In case.....subjects refuse or neglect to pay the taxes, dues, or license fees aforesaid, after having been duly notified so to do, the following rule shall be observed :—

(I.) If they reside within the present treaty limits or possess property therein liable to attachment, the competent Japanese authorities shall through the medium of the Kenrei communicate a certified statement of the amounts due to the respective Consuls and request the collection of the same.

(II.) If any property of the debtors outside the present treaty limits is to be attached for the purpose of enforcing payment as aforesaid, the competent Japanese authorities, shall in conformity with the rules of attachment in administrative matters, which shall be provided for by law, take the necessary coercive measures directly without the interference of the.....Consul.

ARTICLE XXVI.

Regulations concerning the municipal affairs in the open ports.

In order to reform the municipal administration of the present open ports, and to bring it into harmony with the existing local Japanese administration, including as were the right of.....

.....*subjects to hold real property* within certain limits thereat, and the assimilation of the rents therein, with the system of land taxation of Japan, the High Contracting Parties agree that the Japanese Government, shall, after due discussion of the subject with the.....Government, put into operation at the aforesaid ports such measures as will best secure those results.

ARTICLE XXVII.

Abrogration of legal tender of foreign coins and introduction of Japanese coinage.

It is agreed that, as the necessity for previous stipulations between the High Contracting Parties, giving a legal tender character to foreign coins in Japan no longer exists, Article..... .....of the Treaty of.....,and all other provisions and arrangements of a like nature and intent, between the Parties hereto, are hereby expressly repealed and annulled, and all duties, charges, taxes, fines, and penalties payable by.....subjects in Japan, shall be paid in Japanese silver coin of one *yen* denomination.

ARTICLE XXVIII.

Stipulations of the existing treaties which are remain in force.

The stipulations of the existing treaties shall remain in force so far as they are not modified by this Convention.

ARTICLE XXIX.

Most favoured nation clause.

The High Contracting Parties agree that in all matters relating to Commerce and Navigation and to travel through, or residence in their dominions, any privilege, favour, or immunity which either Contracting Party has already granted, or may hereafter grant to the Government, subjects, or citizens of any other State, shall be enjoyed immediately and unconditionally by the Government or subjects of the other Contracting Party.

ARTICLE XXX.

Gradual development of the Convention and Revision.

In order that the changes involved in the opening of the whole Empire of Japan, and the entire surrender of jurisdiction over..... subjects in Japan by....., may be effected gradually and in the manner most advantageous to the interests of both Contracting Parties, it is

agreed by them that at any time hereafter, either of them may request the other to discuss and agree to such measures, looking to the gradual development of the scheme of territorial jurisdiction and a corresponding extension of privileges to..... subjects, as may be needful to secure the desired object.

The High Contracting Parties also agree that every four years, either Contracting Party shall have the right, upon giving six months' previous notice to the other, to demand the revision of the present Convention, excepting those portions relating to the tariff and to commercial privileges.

ARTICLE XXXI.

Renunciation.

Either of the High Contracting Parties shall, eleven years after the ratification of this Convention, have the right to renounce the same by giving one year's notice, and thereupon at the expiration of the aforesaid term of one year, this Convention shall cease to be in force.

On the part of the Japanese Government this right of renunciation with the said effect, can only be availed of in case, before the expiration of the aforesaid terms of renunciation, an understanding has been effected between the High Contracting Parties, with reference to the opening of the whole Japanese Empire to.....subjects, with liberty of trade and residence, and their subjection to the jurisdiction of the Japanese Government.

ARTICLE XXXII.

Revision of the Convention.

It is further agreed that in the event the understanding mentioned in Article XXXI, with reference to the opening of the Empire, and the jurisdiction of the Japanese Government can not be effected, either of the High Contracting Parties shall after giving a previous notice of six months, have the right to demand the revision of the present Convention.

ARTICLE XXXIII.

Annexed Regulations.

The High Contracting Parties agree that the regulations annexed to this Convention, and especially the Trade, Public and Bonded Warehouse, and Tonnage and Light Dues Regulations, shall be regarded as forming a portion of the same. The same shall be the case in respect of those regulations the agreement concerning which has been reserved herein.

Accordingly, such regulations whatever may be their purport cannot be altered except by mutual agreement. It is understood, however, that mutual agreement shall not need a formal ratification, and the conclusion and signature of the Representatives of the respective Governments to such alterations or amendments shall be sufficient.

ARTICLE XXXIV.

Ratification.

The present Convention shall come into force immediately after exchange of the ratifications.

The ratifications shall be exchanged at..... within six months from the date hereof.

In witness whereof, the respective Plenipotentiaries, have signed and sealed this Convention in quadruplicate, two copies being in the Japanese and two copies in the.....language.

All of these copies have the same meaning and intent, and both the Japanese and.....texts shall be considered to be originals.

Done at the City of Tokio, this.....day, of the .....month, of the.....year of Meiji, corresponding to the.....day of....., in the year of the Christian Era.

註 草案ハ夫々專門ノ調査委員會ノ審議ニ付シ定案ヲ得ルニ至ッテ本會議ニ議シタルモ二十年七月偶々改正會議無期延期トナリ成立ニ至ラズ

三 明治十九年五月二十九日井上外務大臣ヨリ閣議ヲ提出ノ條約改正意見書

卽今旣ニ條約改正ノ會議ヲ開キタルヲ以テ今日ノ形勢ヲ審ニシ且將來ノ政策ヲ檢定査究センカ爲メ舊ニ溯ホリ其談判ノ沿革ヲ尋繹スルハ蓋シ須要ノ事項ナリ抑モ本大臣ニ於テハ此ノ重大ナル國事ノ處辨ニ付辱ナクモ我 皇帝陛下ノ信任ヲ奉スルヲ以テ曾ニ其目的ヲ達スヘキ最良ノ方法ニ依リ外國政府ト商議ヲ爲スノミナラス外交上ノ談判ヲ以テ我帝國ノ爲メ法律行政及ヒ經濟上自由ニ國權ヲ執行シ國際法ニ遵ヒ萬國ト交通シ以テ遂ニ純然タル不覊獨立ノ地位ニ達スルカ爲メ必要ナリト思量スル所ノ内地ノ政策及ヒ立法ノ諸件ニ付本大臣ノ確信外國公使ト直接ノ談話ニヨリ本大臣カ得タル經驗トニ據リ漫ニ辭ヲ飾ラス忠實ニ其事情ヲ 皇帝

陛下ノ叡聞ニ達シ併テ之ヲ閣議ニ提出スルハ本大臣ノ本分ナリトス

夫レ明治十五年即西曆千八百八十二年ノ會議ハ外交政策ノ新路ニ就キタル發端ナリシヲ以テ各人尚ホ常ニ之ヲ記臆スヘキハ本大臣ノ毫モ疑ヲ容レサル所ナリ蓋シ此政策ハ曾テ外國ノ督促ニ出テタルニ非ス全ク我　皇帝陛下ノ聖旨ニ基ケリ而シテ同年四月五日及ヒ六月一日兩度ノ會議ニ於テ外國公使ヘ左ノ事項ヲ報道シタリシハ實ニ本大臣ノ快然タル職務ナリキ

外國人民ニ於テ自今日本國ノ法律及ヒ裁判ニ服從シ以テ從來我帝國ノ進歩ニ恰好セス及ヒ我國民ノ銳意熱心シテ改革ニ從事スル精神ニ反對ナル彼ノ異常ノ情況ヲ改正スルトキハ我　皇帝陛下ノ政府ハ其自由ノ權内ニ於テ斷然各外國人民ヘ住居貿易及ヒ不動產ノ所有權ヲ讓與スヘシト

本會ノ會議錄ニ由リ判然ナルカ如ク我政府ノ要求ニ付テハ曾テ一人ノ之ヲ不當ナリト唱道シタル者ナク又外國代表者ノ演說ニ徵スルモ帝國政府ノ高尚ナル政策ヲ稱揚感嘆セサル者殆ント之レナシ是ニ於テ爾來外國人カ我國ニ對シ日本ヲ包含シ得ヘキ通商條約ヲ別ニ約定スルヲ承諾スルコト

（第五）自今十二年ノ後新ニ議定ニ付スヘキ取極ニ據リ日本全國ヲ開キ玆ニ於テ外國人ノ貿易住居及ヒ不動產ヲ所有スルコトヲ許容スルニ付テハ日本政府ハ自由ニ海關稅權ヲ有スルヲ得ヘキコト

蓋シ裁判管轄ノ問題ニ付テハ左ノ一節ヲ錄スルコト甚タ緊要ナリ同覺書ニ曰ク「大不列顚國ハ其在日本領事裁判管轄ヲ持續スルハ在日本英國人民ノ利益ニ付正當ノ保護ヲ爲スニ於テ必要ナル時限外ニ之ヲ繼續スルノ意ナシ」ト又曰ク「故ニ通商條約ノ最短期ヲ十二年トスルモ英國政府ハ外國領事裁判權ノ廢止ニ關スル問題ヲ日本政府ト何時ニテモ討議スルニ付故障セサルヘキヲ承諾セリ」ト

斯ノ如ク英國ト雖モ其領事裁判權ヲ廢止スル問題ニ付テハ日本ニ於テ何時タリトモ之ヲ評議ニ提出スルノ權アルコトヲ承認セリ蓋シ明治十五年即千八百八十二年ノ前ニ於テ英國公使ノ主持シタル說ニ比スルトキハ本大臣ハ千八百八十二年ノ會議ヲ以テ道德上ノ點ヨリ論スルトキハ到底好結果ヲ致セシモノト認メサルヲ得ス

政府尚ホ舊政略ヲ維持スルノ名ヲ負ハシムル能ハス或ハ外國人ノ待遇其宜キヲ得スト謂フ者アルヲ聞カサルニ至レリ而シテ本大臣ハ同僚各大臣モ亦爾來以テ今日ニ至ルマテ確乎トシテ此新政略ヲ執ラルルコトヲ信スルナリ

明治十五年即千八百八十二年ノ會議幷ニ裁判官轄ニ關シ本大臣ノ計畫シタル重大ノ改正案ハ之ヲ實施スルコトヲ得サリキ蓋シ是レ一二外國政府ニ於テ其代表人ノ報告ニ信憑シ且日本ニ在リ貿易ニ從事スル其臣民ノ妄言ニ驚愕シ日本政府ノ要求ニ應スヘキ時未タ至ラスト思惟セシニ由緣セリ

締盟國ニ於テ暫ラク協議ヲ遂ケタル後在伯林我公使館ノ斡旋ニ依リ獨逸政府ハ先進シテ各國ヲ慫慂シ終ニ其議論漸ク確定シ我企望ニ對シ較々友誼ヲ表明スルニ至レリ是レ即チ明治十七年即千八百八十四年五月英國公使ヨリ本省ヘ左ノ主意ヲ登載スル覺書ヲ送付スルニ至リタル所以トス

（第一）他ノ締盟國ニ於テ千八百八十二年ノ會議ニ提出セシ改正稅目ヲ承諾セハ我亦之ヲ承諾スヘキコト但其實施前充分ノ通知ヲ要スルコト

（第二）貿易ニ付一層ノ便利ヲ要求スルコト

（第三及ヒ第四）英國公使ノ意見ニ據リ關稅及ヒ貿易規則ノ此覺書ノ出ルヤ本大臣ト英國公使及ヒ其他ノ公使トノ間久シキニ渉レル困難ノ談判ヲ經タリ就中商業上ノ讓與ニ係ル問題ハ其議論殊ニ甚シク爲メニ英國公使ハ特約開港場六箇所以上ヲ開キ尚ホ內外人組合商業且貿易旅券ノ方法ニ基キ內國ニ於テ貿易ヲ爲スノ許可ヲ受ケンコトヲ要求スルニ及ヘリ然レトモ已ニ議定シタル政策アルヲ以テ本大臣ハ彼ニ對シ裁判管轄ニ付均等ノ要求ヲ爲サスシテ廣大ナル商業上ノ讓與ヲ爲スコト能ハサリキ乍去明治十七年即千八百八十四年八月四日ノ親書ニ登載シタルカ如ク幾多ノ困難ヲ侵シタル後漸ク相互ニ了解シタリ蓋シ此內議ハ我ニ於テ主トシテ行政法及ヒ行政處分ニ關スル管轄權ヲ領收スルニ付我レ亦彼ニ讓ルニ限アル商業上ノ便利ヲ以テスルニ在リ而後英公使覺書ニ對スル我政府覺書ヲ作リ其中主トシテ左ノ要求ヲ揭載セリ

（第一）千八百八十二年會議ニ於テ各全權委員ヨリ提出シタル稅率ヲ變更セス六月前ノ通知ヲ以テ之ヲ實施シ其他商業上ノ問題及ヒ通商條規モ亦同時ニ之ヲ處理スルコト

（第二）日本全國ヲ開クトキハ我政府ハ稅權ヲ有シ裁判管

轄權モ亦我政府之ヲ領收スヘキコト

此事項ニ付右覺書中左ノ明文アリ

日本政府ハ外國貿易ニ關スル讓與ヲ爲スコト及ヒ外國人ノ帝國各部ニ隨意入進スルコトヲ欣喜スルト雖モ玆ニ一ノ故障アリ卽チ外國政府ニ於テ其臣民ノ日本裁判權ニ悉ク服從スルヲ許容セサルコト是ナリ而シテ日本政府ノ外國人ニ對シ悉ク帝國ヲ開クニハ外國政府ニ於テ先ツ此主義ヲ承認セサルヘカラサルノ必要アル旨彼ノ政府ヲシテ判然領知セシメンコトヲ勉メサルヘカラス云々」ト

（第三）同時ニ三四箇所ノ特約開港場ヲ外國貿易及ヒ雜居ノ爲メニ設定スルコト

（第四）新旅券規則ヲ設ケ商業事務ヲ除クノ外法律ノ許容スル目的ヲ以テ旅行スルヲ許スコト

（第五）日本人民十年以內ノ期限ヲ以テ外國船ニ雇入ルコト

（第六）通商條約ハ十年ノ後之ヲ廢止ス但此時期ニ至リ外國ニ於テ領事裁判權ヲ全廢スルニ於テハ日本全國ヲ開クヘキコト又右廢止ノ行ハレ難キトキハ通商條約ノ改正ヲ爲スヘキコト

（第七）外國人行政規則警察規則及ヒ地方規則ヲ遵守スヘキコト但罰金三十圓或ハ禁錮十日ニ過キサル罰ハ日本裁判官ニ於テ之ヲ判決シ及ヒ判決ヲ執行スヘシ然レトモ此範圍ヲ超過スルモノハ領事裁判所ニ於テ日本諸規則ニ遵ヒ處分シ及ヒ執行スヘキコト開港場ハ姑ク之ヲ治外法權ノ下ニ置クモ向後何時ニテモ本件ニ付談判ヲ爲スヲ得ヘシ又在開港場外國人ト雖モ前陳ト諸規則ヲ遵守スルノ義務アルヘキコト

（第八）逮捕權ハ日本政府ニ於テ之ヲ掌握スヘキコト

（第九）在特約開港場外國人ト日本人トノ間ニ起ル五百圓以上ノ民事訴訟ノ審判ハ日本裁判所ニ於テ之ヲ管轄スヘキコト

（第十）開港場若クハ特約開港場ニ於テ工業又ハ製造ニ從事スル外國人ハ日本人民ト同一ノ稅ヲ納ムヘキコト

（第十一）雇外國船乘組ノ外國人ハ貿易ヲ爲スヲ得サルコト

（第十二）船舶乘組海員ノ懲戒權ハ船長ニ於テ之ヲ有スヘキコト

（第十三）居留地取締方法ノ改良ハ向後ノ談判ニ由リ之ヲ議定スヘク又從前ノ居留地ヲ一層擴伸セル區域內ニ於テ不動產ノ所有ヲ許可スルコト但外國人不動產ヲ所有スルトキハ土地所有ニ關スル我法律規則及ヒ稅則ヲ遵守スヘキコト

（第十四）日本政府ハ外國人カ日本人ト組合商業ヲナシ及ヒ工業會社幷ニ商業會社ノ株券ヲ所有スルコトヲ免許センカ爲メ嗣後之ヲ議定スルノ準備ヲ爲サント欲ス但シ此等特殊ノ免許ヲ與フルニ就テハ組合商業ヲ營ミ若クハ工業又ハ商業會社ノ株主タル外國人ハ其商業上若クハ株券及ヒ不動產等ノ事ニ付總テ日本政府ノ法律及ヒ裁判ニ服從ス可キコト

（第十五）日本政府ハ最惠國條款ノ修正ヲ企望スルコト

（第十六）今後外國ノ商標及ヒ專賣特許ノ保護ヲ議定スルコト

右ノ諸項ハ各締盟國ニ於テ條約改正ノ基礎ト爲スコトヲ承諾シタル覺書ノ概要トス尤モ佛國政府ハ此覺書ヲ以テ爾後談判ノ起點ト爲サンコトヲ明言シ生糸又ヒ絹物ニ對スル輸出稅ヲ廢止センコトヲ特別ニ請求シタリ

此覺書ノ要旨ハ明治十五年卽チ八百八十二年ノ發議トハ實際稍々相違セリト雖モ其精神ハ全ク右發議ヨリ生シタルニ外ナラス但タ談判權ノ如キ其一部分ヲ日本裁判所ニ收メ他ノ一部分ヲ外國裁判所ニ屬シ以テ之ヲ分離セサルヲ得サルニ至リシハ本大臣ニ於テ固リ遺憾トスル所ナリ何トナレハ之ヲ實施スルニ當リテ警察官等カ其權限ノ果シテ如何ナル點ニマテ及フ可キカヲ判別スルハ頗ル困難ナル可ケレハナリ然レトモ右ハ今日マテ各國公使トノ談判ノ結果ニシテ萬々止ムヲ得サルニ出タルモノトス然レトモ又一方ヨリシテ觀察スルトキハ縱令ヒ一部分ニモセヨ我裁判權ヲ回復シ得ルハ卽チ治外法權ノ制已ニ其破潰ノ端ヲ開キタルヤ明白ナリトス

夫レ此ノ裁判權ヲ彼我ニ分離スルハ實際長ク之ニ因ルコトヲ得サル所ナリ治外法權ノ制ハ正ニ其破潰ノ端ヲ開クノ機ニ至レリ本大臣ハ敢テ此ノ半途ノ改正ニ安ンセス嗣後尙ホ巧ミニ談判ヲ遂ケ從來商業上禁止ノ件ヲ外國人ニ許與スル割合ニ應シ我裁判權ヲ彼ヨリ漸次回復シ終ニ外國ヲシテ純然タル不羈獨立ノ地位ニ至ラシメンコトヲ期ス

本大臣ハ該覺書ノ主意ニ基キ條約改正案ヲ起草シ公然其會

議ヲ開クニ先タチ豫メ各外國全權委員ノ意見ヲ質サンカ爲メ明治十八年即千八百八十五年六月中私信ヲ以テ內密ニ之ヲ各國全權委員ニ通牒シタリ而シテ各委員ハ腹臟ナク種々ノ異見ヲ陳述セシヲ以テ復タ幾多ノ參考ヲ加ヘ本年即千八百八十六年五月第一回ノ條約改正會議ニ於テ公然提出シタルモノナリ

右草案ハ其體裁宜シキヲ得且精密ナル點ヨリ考案ヲ下スト雖モ其大要ハ尙ホ明治十七年即千八百八十四年八月起稿シタル覺書ニ準據シタルモノナリ

今右改正案ヲ此ニ詳記スルコトハ殆ント徒勞ニ屬スヘシ故ニ其之ヲ起草シタル主意大要ヲ擧ケテ足レリトス

（第一）貿易及ヒ船舶規則ニ關シ外國人ノ有スヘキ權利ハ彼ヨリ我ニ裁判管轄權ヲ割與シタル割合ニ應スル部分ニ過キス卽チ

（イ）特約開港場ノ規定ヲ立ツルコト

（ロ）日本人民ニ外國船舶ノ雇入ヲ爲スコトヲ許可スルコト

（ハ）外國人民ト日本人民トノ間ニ組合商業ヲ許可セントスルコト（但其細則ハ追テ制定スヘシ）

（第二）右ノ讓與ニ對シ日本政府ニ於テ海關稅ヲ增加シ及ヒ新ニ噸稅等ヲ課スルノ外左ノ諸件ヲ請求セリ

（イ）外國人ニ對シ日本帝國各所ニ於テ普ク日本行政規則ヲ適用スルコト

（ロ）新旅券規則ニ依リ內地旅行中及ヒ特約開港場ニ於テ外國人ニ對スル裁判權ノ一部ヲ有スルコト卽チ刑事ニ付テハ罰金三十圓以內禁錮十日以內民事ニ付テハ金額五百圓ニ達スル迄日本裁判所ニ於テ其裁判權ヲ有スルコト但シ其不動產ニ關スル事件又ハ內地旅行中起リタル訴訟事件ニ付テハ何等ノ制限ヲ置カサルコト

（ハ）在特約開港場外國人ニ課稅ヲ爲スノ權ヲ有スルコト又從來ノ開港場ニ於テハ何程迄カノ點ヲ限リ課稅スルヲ得ヘキヤノ取極ヲ爲スコト

抑現今我國ニ於テ外國人カ一種例外ノ地位ニ立ツ所以ハ左ニ列記スル三箇ノ特典ヲ有スルニ因レリ

（一）刑事上民事上及ヒ行政上ノ事件ニ付日本法律ヲ適用スルヲ得サルコト

（二）日本裁判所ノ管轄外ニ在ルコト

（三）其他總テ行政官吏ノ所爲ニ對シテ其管轄外ニ在ルコト

然ルニ草案ノ計畫ニシテ果シテ外國政府ノ承諾ヲ受クルニ於テハ日本行政規則ハ今後我裁判所ニ限ラス尙ホ外國裁判所ニ於テモ外國人ヲシテ之ヲ遵守セシムルノ効力ヲ有シ且ツ我刑法ヲ犯ス者アルトキハ其犯人ヲ我警察官ニ於テ逮捕シ其本國裁判所ニ於テ處刑ヲ受シムル迄ハ外國人ニ對シ我刑法其効力ヲ有スヘキノ主意ヲ領知セシメ以テ前文第一ノ障礙ヲ除クヲ得ヘシ又第二ノ點ニ付テハ日本裁判所ハ特約開港場及ヒ內地ニ於テ禁錮十日罰金三十圓迄處罰ノ權ヲ有スヘク又第三點ニ付テハ捕縛差押家宅搜索ノ權ヲ有スヘキカ故ニ我行政權ハ少クトモ其一部分ヲ適用スルヲ得ルノ原則ヲ設定スヘシ且ツ民事裁判權ハ通常五百圓ヲ定度トシ例外ノ場合ニ於テハ此定度ヲ置カサルヘシ

改正會議ニ於テハ未タ草案ノ本題ヲ議スルニ至ラスト雖モ既ニ左ノ順序ニ依リ問題ヲ討議スヘキノ手續ヲ定メタリ

（一）海關稅ノ增加及ヒ商業上ノ事項（二）之ニ對スル日本政府ノ讓與（三）管轄權

然ルニ英國公使ヨリ本大臣ヘノ內談ニ由レハ日本政府ニ於テ貿易ニ關スル區域ヲ今一層擴伸スルコトヲ許容スルニ非サレハ右裁判權ニ關スル廣大ナル許容ヲ爲スコトハ承諾スルコトヲ得ストノコトナリ假令英公使ニ於テ日本政府ノ發議ヲ承諾スルモ日本在留英國人民ハ之ニ承服セス從テ彼等ヨリ其本國ノ議院ニ反對論ヲ提出シ條約ノ批准ヲ故障スルモ計リ難キトノ處ヲ抱持セリ

本大臣ノ英國公使及ヒ日耳曼公使ヨリ聞キタル所ニヨリ考察スルトキハ貿易上ノ讓與ニ關シ英公使ノ提出スヘキ條項三箇アルカ如シ（尤日耳曼公使ニ於テハ本件ニ付甚タ懇篤ナル仲裁ヲ爲シタリ）卽其要求ニ係ル條項ハ左ノ如シ

（第一）寬大ノ趣意ニ基キ日本人外國人ノ組合商業ニ關スル規則ヲ直ニ制定スヘキコト

（第二）特約開港場條規ニ準シ東京府內ハ何所ヲ問ハス特約開港場ト同樣外國人ヲ住居セシメ貿易ニ從事シ及ヒ不動產ヲ所有スルノ權ヲ附與スルコト

（第三）內地貿易特許券ヲ設ケ自由ニ內地ニ於テノ貿易ヲ許スコト

乍去兩全權委員ハ若シ日本政府ニ於テ右ノ要求ニ付滿足ナ

ル承諾ヲ爲サハ亦之ニ對當スヘキ方法ニ據リ日本政府ノ管轄權ヲ擴充スルコトヲ承諾スヘキ旨本大臣ヘ陳述セリ

本大臣ハ之ニ應ヘテ日本帝國政府ハ明治十五年即千八百八十二年ノ宣言ヲ以テ確實明白ニ表示シタルカ如ク常ニ最モ自由ナル政策ニ熱心セルコトヲ辯明セリ蓋シ目今考案ニ付シタル讓與ハ日本政府ヨリ發言シタルニ非スシテ是レ本大臣カ數回談判ヲ經タル後本會議ノ根規トセサル可ラサル覺書ニ包含シタル締盟國ヨリ要求ノ結果ナリ尤モ明治十五年即チ千八百八十二年本大臣ノ提出ニ係ル考案ヲ外國政府ニ於テ排斥スルニ立チ至リタル理由ハ敢テ之ヲ質疑セサリキ本大臣ハ管轄ノ全權ヲ日本ニ於テ享受スル時ニ至ラサレハ直接又ハ間接外國貿易ノ爲メ日本ノ內地ヲ開キ以テ彼カ商業上ノ特權ヲ擴充スルコトヲ許諾セサル義ヲ英吉利及ヒ日耳曼公使ニ悟ラシメンコト最モ肝要ナルヲ思量シタリ

過日提出シタル議案ノ外更ニ一部ノ讓與或ハ一層裁判管轄權ヲ分割スルコトハ固ヨリ本大臣ノ考量スルヲ得サルモノニ付苟クモ其全部ヲ附與スルカ否ラサレハ現今要求ノマヽニ置カサルヘカラサル旨ヲ陳述シタリ

抑本大臣ニ於テ此宣言ヲ爲シタル理由タル他ナラス即チ英國公使カ希望スル如キ組合商業ヲ新條約ト同時ニ直ニ施行スルヲ許可スルトキハ外國人ノ商業ニ付唯表面ニ於テハ內地ヲ開カサル迄ニシテ其實此組合商業ナルモノハ外國人カ豫ネテヨリ熱心希望スル內地通商特許券ノ讓與ヲ爲スト其結果ヲ同シク即チ一般ニ內地通商ノ特殊權ヲ讓與スルト其結果ヲ異ニスルコトナカル可シ故ニ若シ今遽ニ之ヲ許スト キハ帝國政府ハ他日充分ナル裁判管轄權ヲ得ンコトヲ要求スル場合ニ至リ我ヨリ讓與スルノ區域最早空手トナル可キノ虞アルコトヲ確信シ遂ニ此宣言ヲ爲サヽルヲ得サルニ至レリ抑條約改正事務ノ全局ヲ按シテ約言スレハ貿易上彼ニ讓與スヘキ權利ノ交換トシテ我裁判權ヲ回復スヘキコト必要ナルニ付テハ本大臣ハ必勝ノ算アリト確認スルニアラサレハ其讓與中最價値アル內地通商若クハ之ト其結果ヲ同クスヘキノ虞アル事件ヲ容易ニ放擲スルコト能ハサルナリ

前顯ノ問題ハ從來機密ノ通牒及ヒ懇話ニ由テ之ヲ領シタレトモ獨リ英吉利公使ノミナラス其他ノ全權委員ニ於テ亦爾後ノ集會ニハ何時ニテモ公然之ヲ會議ニ提出スルヲ得ヘク又多分之ヲ提出スルニ至ルヘシ

目今ノ談判果シテ成就スヘキヤ否全ク疑問ニ屬スレトモ本

件タル實際我外交政策ノ全問題ニ波及シ其性質甚タ重大ナリ故ニ最モ肝要ナル左ノ諸項ニ對シ豫シメ我　皇帝陛下ノ勅許ヲ請ヒ奉ンカ爲メ之ヲ閣議ニ提出セサル可カラサルノ議トナレリ

第一　條約改正會議ニ於テ商業ニ關スル讓與ノ不充分ナルヲ根基トシ現今ノ草案ヲ終局スル能ハサル場合ニ臨ミ若シ他ノ委員ヨリ明治十五年即千八百八十二年ニ於テ提出シタル懸議ノ主意ニ同樣ナル議ヲ提出スルコトアラハ則チ千八百八十二年ノ提出案ノ幾多ヲ改良シテ我裁判管轄ノ全權ヲ挽回シ之ニ換フルニ充分ナル商業上ノ自由ヲ與フヘキノ準備ヲ爲シ本大臣ヲシテ各國全權委員ニ向ヒ確然之ヲ明言スルコトヲ得セシムヘキヤ

第二　帝國政府ハ裁判所組織ノ改正及ヒ法律編制或ハ諸行政區域權限順序ヲ制定スル等ノ事業ヲ迅速ニ決行スルノ決意ヨリシテ本大臣ヲシテ第一項ノ宣言ヲ爲スコトヲ得セシムルニ至レハ我政府ハ一層更ニ勵精シテ常ニ撓ムコト無ク又中止スルコト無ク必ラス右等ノ事業ヲ擧ケ他日外國公使ヨリ萬一ニモ本大臣ニ向ヒ右ノ宣言ニ付云々セシムルコト無キヲ保スルヲ得ラル可キヤ

我外交政略ノ全體ニ就テ之ヲ論スレハ右問題中第一項ハ實際施行セラレ然ルヘキ理由アルヤ明ナリ故ニ帝國內閣ノ此政策ヲ認可セラレンコトヲ本大臣ニ於テハ寸時モ猶豫セス熱心慫慂スル所ナリ然ルニ第二項ニ至リテハ本大臣既ニ明治十五年閣議ニ提出シ當時已ニ決議ヲ領シタルモノナレハ今日更ニ復タ閣議ヲ經ルニ及ハスシテ決行スルニ妨ケナキモノト雖モ其事體重大ナルヲ以テ鄭重ノ上ニ尙鄭重ヲ加ヘ更ニ確乎不拔ノ決議ヲ請ハント欲スルナリ否ラスシテ一個人ノ資格トシテハ勿論日本帝國外務大臣トシテモ妄リニ過分ノ責任ヲ一身ニ集ムルハ決シテ甘心セサル所ナリ

而シテ前顯外國全權委員中民法、商法、訴訟法裁判所組織等ニ關シ日本法律編制ノ現狀如何云々ヲ以テ本大臣ニ質問スル者アランニ現況ニ徵スレハ本大臣ハ不幸ニモ右委員ハ明治十五年即チ千八百八十二年ノ回答即チ「右ハ準備中ナリ」ト回答スルヲ得ルノミ是ニ於テカ右全權委員或ハ更ニ本大臣ニ對シ「貴政府ハ法律及ヒ訴訟法改正ニ付大イニ準備ヲ爲シタリト雖モ千八百八十二年後ノ進歩ハ果シテ當時ノ會議ニ於テ外務大臣ノ宣言シタルカ如キ結果ナルコトヲ保證シ得ルヤ」ト質問セハ則チ本大臣ハ準備年限中ニ我政

府必ス其責任ヲ負擔シ充分ノ準備ヲナシ得ヘシト確答セサルヲ得ス然ル時ハ其答言タルヤ一個人ノ私言ニ非ス卽我政府ノ公言タル勿論ナリ

本月一日改正會議ヲ開クニ方リテヤ本大臣ハ自己ノ職務ヲ體シ帝國政府ニ於テ其裁判權ノ一部ヲ挽回シ實施スルニ關シテハ充分責任ヲ負擔スル覺悟ナリト確言シタリ而シテ往々會議ヲ重ヌルニ際シ商議ノ情況ニ由リ若シ全體ノ管轄權ヲ挽回領收セサル可ラサルニ至ラハ帝國政府果シテ此責任ヲ負擔スト確言スルヲ得ヘキヤ否ニ至リテハ敢テ帝國內閣ノ決議ヲ乞ハサル可ラス

尙又爰ニ爭フ可ラサル一大事實アリ卽チ日本帝國ノ開明事業年一年進步スルヤ亦タ言ヲ俟スト雖モ歐羅巴各國ノ政府モ亦姑息ニ安セサルヤ明カナリ故ニ吾々若シ之ニ追及セントヲ希望セハ一層勤勉勞苦セサル可ラス故ニ吾々ニシテ之ニ追及スルニ非サレハ如何程賢明ナル外務大臣及ヒ如何程ニ鍛鍊セル外交官アルモ亦某外國政府ニ於テ如何程厚意ヲ表スルモ到底吾人ノ希望スル目的ヲ達スルヲ得サルヘシ本大臣ハ假令ヒ歐羅巴各國政府勵精ノ勞ヲ千百スルモ必ラス之ニ追及シテ以テ我々ノ目的ヲ達センコトハ獨リ本大臣カ畢生ノ力ヲ以テ切ニ期スル所ナルノミナラス實ニ我皇帝陛下聖旨ノ在ル所ナルコトヲ信シ謹ンテ玆ニ之ヲ奏聞シ帝國內閣ノ議ヲ請ハントス欲ス

右謹ンテ上奏ス

明治十九年五月二十九日

外務大臣伯爵　井上馨

四　裁判權條約案（內閣修正定案）

裁判（權）管轄條約（註　枠線內削除ノ部分、括弧內ハ訂正追加）

第一條（六箇月）

日本帝國政府ハ本條約批准書交換後二ケ年內ニ永ク……國臣民若クハ人民ノ爲メ日本帝國ヲ全開スルコトヲ擔任ス

第二條

日本帝國政府ハ日本　皇帝陛下ノ臣民ノ享有スル權利及ヒ特權ハ萬國公法ノ通義ニ從ヒ總テ之ヲ……國臣民若クハ人民ニ附與スルコトヲ約ス

（二）
第三條

（日本帝國ヲ開キタル日ヨリ）……國臣民若クハ人民カ日本ニ於テ應ニ受ク可キ（權）待利及（定メサル）（之ヲ）遇ニシテ本條約ニ於テ之ヲ缺ク（定メサル）モノハ本條約同日附ノ通商及ヒ航海條約ノ約款中ニ載明ス

（三）
第四條

日本帝國政府ハ泰西主義及本條約ノ約款ニ從ヒ帝國ノ司法組織ヲ定メ及ヒ左ノ諸法律ヲ制定スルコトヲ擔任ス

一　刑法
二　治罪法
三　民法
四　商法（破產法幷商船及ヒ爲換手形ニ關スル法律ヲ包含ス）
五　訴訟法（商事ニ關スル訴訟手續ヲ包含ス）

又警察ニ關スル現行ノ法律規則ハ可成丈集輯類別ス可シ

原註「此末項ハ之ヲ削除シ會議錄中ノ宣言トナス可シ」

（四）
第五條

日本帝國政府ハ前條ニ列擧シタル諸法律ヲ第一條ニ定メタル期限內ニ頒（發）布スヘシ且ツ第一條ニ定メタル期日ヨリ少（箇）クトモ八ケ月前卽チ本條約批准交換後十六箇月以內ニ其ノ英文正本ヲ……國政府ニ通知スルコトヲ擔任ス

又日本帝國政府カ此等法律ニ付キ擬議スル諸改正ハ該改正ヲ實施スル八ケ月前ニ同ク亦……國政府ニ通知スルコトヲ擔任ス

（五）
第六條

……國領事裁判ノ（ハ）帝國ヲ外國人ニ開クノ日ヨリ三ケ年間仍ホ東京、橫濱、神戶、大阪、長崎、新潟及ヒ函館ノ條約界限內ニ存在ス可シ但シ日本行政規則幷警察（法律及）（附約ノ第一條及第二條ニ依リ商定シ）規則ニシテ別ニ約ヲ立タル者ハ領事裁判所之ヲ施行ス可シ

（六）
第七條

右期限中領事裁判所及ヒ日本裁判所ノ權限及ヒ前揭（項）ノ各地ニ於テ裁判管轄上滿足ノ情形（スヘキ形狀）ヲ定ルコトニ關スル細則（目）ハ附約ヲ以テ之ヲ規定ス可シ

日本裁判所、一名若クハ數名……國臣民若クハ人民

「何等ノ資格ヲ以テスルニ拘ハラス」ニ交渉セル民事又ハ刑事ノ案件ヲ審判スル場合ニ於テハ左ニ列揭スル約款ヲ照守ス（ルヲ要ス）（ヘシ）若シ此約款ニ違フトキハ其裁判ノ手續及ヒ判決ハ總テ無効タル可シ

（第一項　地方裁判所控訴院及ヒ大審院ノ組織ニ於テハ右裁判所ニ於テ一事件ヲ審判スヘキ裁判官ノ多數ハ歐米ノ法律家中ヨリ選任シタル裁判官タルヘシ）

第一項　地方裁判所控訴院及ヒ大審院ハ左ノ如ク組織ス可シ卽チ其裁判官ノ多數ハ外國籍ニ係ル者タル可シ

右各裁判所ノ判決ハ法律ヲ以テ設ケタル定員ヨリ少キ裁判官ヲ以テ之ヲ下スコトヲ得ス

控訴院ノ各部ハ地方裁判所ヨリモ其裁判官ノ數ヲ多クシ以テ之ヲ組織シ大審院ノ各部ハ更ニ控訴院ノ各部ヨリモ其ノ裁判官ノ數ヲ多クシ以テ之ヲ組織スベシ

第二項　凡ソ上訴ノ事件ヲ裁判スル場合ニ於テハ前ニ下等裁判所ニ於テ同事件ノ判決ニ關シタル裁判官ハ上等裁判所ノ一員トシテ之ニ列スルコトヲ得ズ

第二項　判事一名ニテ掌管スル裁判所ノ民事及ヒ違警罪ノ（本條ノ第一項ニ依リ組織シタル裁判所）判決ニ對シテハ法律上及事實上ノ點ヲ以テ地方裁判所（ヘ）上訴スルヲ得

控訴院ハ之ヲ左ノ地ニ設置ス可シ

一　東京

二　大阪

大審院ハ之ヲ東京ニ設置ス可シ

（第四項）（歐米ノ法律家中ヨリ選任シタル裁判官ノ各地方裁判所ニ勤務スルモノハ之ヲ控訴院ノ裁判官中ヨリ之ヲ特選スルモノトス）

第七項　各地方裁判所詰メ外國籍ニ係ル裁判官ハ其ノ控訴院詰メ外國籍ニ係ル裁判官中ヨリ之ヲ選フモノトシ每司法年度中ニ大審院長及ヒ同院裁判官二名「抽籤ヲ以テ定メタル」ヨリ成立チタル委員會ニ於テ豫メ次年度ニ之ヲ命ス可キ者ヲ選フ可シ

右外國籍ニ係ル裁判官ノ繰替ハ左ノ方法ヲ以テス可シ卽チ控訴院詰メ外國籍ニ係ル裁判官ハ皆各々輪番ニ各地方裁判所詰ヲ命セラル可シ

外國籍ニ係ル裁判官中相互ノ協議ヲ以テ派遣地ヲ交換セントスルコトハ之ヲ本裁判官分遣ヲ管スル委員會ニ請求スルコトヲ得但シ此請求ハ當該年度裁判官分遣前ニ於テ之ヲ爲ス可シ

（五）
第八項　……國臣民若クハ人民ニ交渉スル民事訴訟ニシテ其直接或ハ間接ニ爭訟ニ係ル金額若クハ物件ノ價額滿百圓以上ノモノハ地方裁判所ニ於テ之ヲ審判ス可シ

金額未定ノ訴訟若クハ價額未定ノ物件ノ要求ニシテ其額百圓ヲ超過ス可キ者ハ地方裁判所ニ於テ審判ス可シ

第九項　刑事ニ關シテハ地方裁判所ハ拘留滿十日ヲ超ヘ若クハ罰金滿三十圓ヲ超ユル兩刑併科スヘキ諸犯罪ノ訴ヲ受理ス可シ

地方裁判所ノ權限ハ輕罪及ヒ重罪ヲ包含ス可シ

（六）
第十項　諸犯罪ノ豫審ハ總テ（歐米ノ法律家中ヨリ選任シ）外國籍ニ係ル裁判官一名ヲ（タル）以テ掌理セシム可シ

第十一項　總テ檢察官ノ干預ヲ要スル場合ニ於テハ帝國檢察官ノ職務ハ外國籍ニ係ル日本官吏ヲシテ之ヲ行ハシム可シ

第十二項　公判ハ「該裁判所始末書ニ登錄セラル可キ理由ニヨリ該法廷ガ之ヲ公開ス可ラズト決スルノ外ハ」總テ公開ノ法廷ニ於テス可シ

（七）
第十三項　（イ）前各項裁判所（裁判）ノ公用語ハ日本語タルヘシ

（ロ）英語ハ日本ニ於テ最モ廣ク通用スル外國語タルヲ若シ法律適用錯誤ノ故ヲ以テスルトキハ更ニ控訴院ノ審判ヲ請フコトヲ得ヘシ但シ此場合ニ於テハ控訴院ノ判決ヲ以テ終決トス

第四項　地方裁判所ノ判決ニ對シテハ法律上及ヒ事實上ノ點ヲ以テ控訴院ヘ上訴スルコトヲ得可シ

第五項　控訴院ノ判決ニ對シテハ法律適用錯誤ノ故ヲ以テスルトキハ大審院ニ上告スルヲ得ベシ

（三）
第六項　地方裁判所ハ之ヲ左ノ各地ニ設置ス可シ

一　横濱

二　函館

三　新潟

四　神戸若クハ大阪

五　京都

（五）
六　山口

（六）
七　長崎

（七）
八　名古屋

但シ右裁判所ノ位置ハ若シ實驗上其變更ヲ要スルトキハ便宜之ヲ行フコトヲ得

以テ之ヲ（本條第一項ニ載セタル）右裁判所用ノ外國語ト宣布ス可シ

（ハ）但シ爾餘ノ外國語モ亦タ之ヲ右裁判所ノ書類幷ニ往復文書等ニ用ルコトヲ許容承認セラル可シ

（ニ）右裁判所ノ宣告書、命令書、判決書及ヒ意見書其他右裁判所ヨリ發スル一切ノ書類ハ總テ英語ヲ以テ其正文ト爲シ之ヲ關係人ニ交付ス可シ

（ホ）前項ニ揭クル所ノ書類ヲ交付スルニハ訴訟人若クハ刑事被告人ヲシテ其最モ能ク解シ得ル外國語ヲ指定セシメ右書類ヲ正確ニ該國語ニ飜譯シ之ヲ添ルヲ要ス

（ニ）（裁判手續ハ）

（ヘ）裁判所詰メノ外國籍ニ係ル裁判官及ヒ訴訟人共英國若クハ米國以外ノ者タル場合ニ於テハ一同協議ノ上其選定シタル他ノ歐羅巴語ヲ以テ審判ヲ爲スコトヲ得然レトモ其判決ヲ宣告シ及ヒ之ヲ高等裁判所ニ送付スルニハ仍ホ英語ヲ用ユヘシ（之ヲ行フ但）

（ホ）（本條第一項ニ載セル）

（ト）右各裁判所ニハ宣誓シタル堪能ノ通辯人及ヒ飜譯官ヲ備フ可シ

（チ）右各裁判所ハ何レノ歐羅巴語ヲ以テ認メタル書類ト雖モ總テ之ヲ受付ルコトヲ擔承シ關係人ニ英譯要求スルヲ得ズ其英譯ハ裁判所ノ費用ヲ以テ之ヲ辨ス可シ

（リ）各裁判所間ノ公用往復文ハ英語ヲ用ユ可シ

（八）

第十四項　……國臣民若クハ人民ハ裁判官（一名ノ裁判官ヲ以テ裁判ヲ掌ラシムル）只一名アル裁判所及ヒ地方裁判所ヘ自身出廷スルノ權ヲ有ス可シ

（本條ノ第一項ニ載ル各）前各項　裁判所ニハ（成ルヘク丈）裁判所用ノ國語ニ熟達シタル日本代言人ヲ附（屬セシム）ス可シ……國臣民若クハ人民ハ其代言人ヲ選フコトニ付充分ノ自由ヲ有シ總テ該裁判所ノ所在地若クハ其ノ性質ニ拘ルコトナカル可シ……國臣民若クハ人民、輕罪或ハ重罪ノ告訴ヲ受ケ自ラ其代言人ヲ選（ハサル）フコトヲ欲キタル場合ニ於テハ無報酬ニテ裁判所用ノ國語ニ熟達セル代言人ヲ給（附）ス可シ

此代言人ハ日本籍或ハ外國籍ノ代言人中ヨリ選ハルルコトヲ得

（九）

第十五項　日本代言人（議會）組合ハ外國籍ノ（ノ免）係ル各代言人ガ其組合ニ入ルコトニ付之ヲ許否決ス可シ（且ツ）之ニ對シテ懲戒ノ權ヲ行フ可シ（ヲ可）

外國籍ニ係ル代言人ハ右代言人（議會）組合ノ議決ニ對シ之ヲ（歐米法律家中ヨリ選任シタル）外國籍ニ係ル裁判官ヲ懲戒スルノ權ヲ委セラレタル裁判所ニ控訴スルノ權ヲ常有ス可シ

（十）

第　項　重罪ノ告訴ヲ受ケタル……國臣民若クハ人民ハ何等ノ人（即チ）代言職業外ノ者ト雖モ若シ其裁判所ニ於テ故障ナキ者ナレハ（其擇ム所ノ人ヲ以テ）之ヲ擇ンテ其辯護人トナスコトヲ得

（十一）

第十七項　若シ日本政府、陪審官ヲ置クノ裁判所ヲ設（ク）ケタル（コトアル）トキハ其陪審官ハ……國臣民若クハ人民カ告訴ヲ受ケタル場合ニ於テハ外國人ノ多數ヲ以テ之ヲ組織ス可シ

（十二）

第十八項　……國政府ハ其臣民若クハ人民ニシテ日本帝國裁判所ヨリ死刑ノ宣告ヲ受ケ而シテ其刑ヲ輕減セラレサル者ノ引渡ヲ請求スルコト隨意タル可シ

右ノ情由ニ因リ其本國ニ引渡サレタル……國臣民若クハ人民ハ……國法律ニ從ヒ（公）起訴裁判セラル可シ

締盟兩國ハ領事裁判制度ノ繼續期限ノ終ルマテニ死刑ニ關スル新規約ヲ定ム可シ

（十三）

第十九項　外國囚人（籍ニ係ル）ノ繫獄ニ關シテハ特別ノ方法ヲ設ク可シ且監獄及ヒ懲治監等ノ組織ニ關スル規則ハ第（三）四條ニ揭ケタル法律ト同時ニ……國政府ニ通知ス可シ

爾後右等ノ諸規則中其改正ヲ必要トスル者アル場合ニ於テハ遲滯ナク之ヲ在東京……國公使ニ通知ス可シ

（七）

第八條

日本帝國政府ハ第七條ニ約定シタル（程限ニ從ヒ歐米ノ法律家中ヨリ裁判官ヲ選任）丈ケノ外國籍ニ係ル裁判官及ヒ檢察官ヲ任命ス可シ

（一）（歐米ノ法律家ヨリ選任シタル裁判官）外國籍ニ係ル裁判官及ヒ檢察官ハ其本國ニ於テ裁判官……及檢察官若クハ代言人タリシ者ニシテ且ツ其本國ニ於テ法律上一切瑕疵ナキ者タルヲ要ス（タルノ資格ヲ具ヘ）

（二）右裁判官及檢察官ハ少ナクトモ四ケ年ノ期限ヲ定メテ之ヲ聘用ス可シ

（三）同一裁判所ノ裁判官ハ總テ同額ノ俸給ヲ受ク可シ

（四）右裁判官及ヒ檢察官ハ俸給ヲ受ク可キ一切他ノ職務ヲ執ルヲ得ス

（二）

（五）外國籍ニ係ル裁判官ハ懲戒裁判所ノ申立ニ依ルノ外其聘用期限內ニ之ヲ罷免スルヲ得ス該裁判所ハ大審院ノ外國係籍裁判官ヲ以テ組織ス可シ此裁判官ハ匿名投票ヲ以テ他ノ外國係籍裁判官三名ヲ選擧シ之ヲ其員ニ加フルノ權ヲ有ス凡ソ外國係籍裁判官ハ右懲戒裁判所裁判官三分ノ二ヨリ小ナカラザル多數ノ判決ニ依ルノ外ハ罷免セラルヽコト無ル可シ

（貼紙朱書）
歐米法律家中ヨリ選任シタル裁判官ニ對シ懲戒權ヲ行フコトヲ委セラレタル裁判所ハ左ノ如ク組織ス可シ卽チ歐米法律家中ヨリ選任シタル裁判官ノ多數ヲ以テ之ヲ構成ス可シ

（第八條）
（日本ノ裁判權ハ日本臣民ノ利益ニ關渉スルモノヲ除クノ外身分ニ關スル訴訟ニ及ホサヽルヽモノトス）

第九條
以上各條ニ從ツテ設定スル司法上ノ制度ハ第一條ニ示シタル期日ヨリ十五个年間其効力ヲ有ス可シ此制度中各事項ノ變更ハ……國政府前以テノ同意ニ因ル可シ

第十條
……國領事裁判所ハ……國臣民ノ身分ニ關スル事件ニ就キ仍ホ其權ヲ存ス可シ、

（貼紙朱書）
「其日本臣民ノ利益ニ關係スル場合ヲ除クノ外」ニ延及セザルモス

第十一條
若シ……國臣民若クハ人民、本條約批准ノ交換後直ニ本條約中ニ許與スル權利ヲ受ケント欲望スルトキハ右ノ如ク爲スコトヲ得但シ其日本臣民事上裁判管轄ニ服從スルコトヲ要ス

（貼紙朱書）
（日本帝國ヲ開クコトニ關シ若シ）、、、、、國臣民若クハ人民、本條約同日附ノ通商條約ノ第一條及第二條ニ依リ日本ヲ開クコトニ關シ許與シタル（スル）權利ヲ本條約施行前ニ受用セント欲スルトキハ何等ノ制限ナク日本民事上裁判權ニ服從スルニ於テハ不動產ノ所有ヲ除クノ外之ヲ受用スルコトヲ得然レトモ日本帝國ヲ開クコトニ關シ本條約ノ第一條ニ指定スル期限內ニ本條約ヲ施行セサルコトアルトキハ其何等ノ事由ニ出テタルヲ問ハス、、、、、國臣民若クハ人民ニ許與シタル權利ハ（消滅スル）其效ヲ失フモノトス

第十二條
日本政府ハ日本帝國司法ノ制ニ關シテ若シ他ノ外國ト從前已ニ他ノ方法ヲ約シタルカ或ハ將來ニ他ノ方法ヲ約スルコトアリテ何時タリトモ……國政府之ヲ欲望スルノ意ヲ明言スルトキハ卽時ニ且附約ヲ加ヘシテ之ヲ……：國政府及ヒ……國臣民若クハ人民ニ及ホス可キコトヲ約ス

（貼紙朱書）
第十一條
日本ニ在ル、、、、、國臣民若クハ人民ニ裁判權ヲ施行スル事ニ關シ、、、、、條約ノ明條ハ本條約ニ保持セサル限リハ廢止ニ屬スルモノトス

（二）
第十三條
本條約ハ批准ノ交換後十七年（六箇月）間其効力ヲ有ス可シ右交換ハ之ト同日附通商條約批准ノ交換ト同時ニ之ヲ行フ可シ
本條約批准交換ハ其調印後一箇年內若シ成ルヘクンハ之ヨリ更ニ早ク東京ニ於テ之ヲ行フ可シ

附錄
第六條　附錄約款
第一款
日本裁判所及領事裁判所間ノ管轄區域ハ左ノ原則ニ依リ之ヲ定ム可シ
第一　刑事事件ニ付テハ犯罪地ニ因テ其裁判管轄ヲ定ム若シ其犯罪人、公訴前「或ハ公訴中」ニ逃亡シタルトキハ其逮捕地ニ因テ之ヲ定ム
第二　民事事件ニ付テハ左ノ方法ニ依リ其裁判管轄ノ區域

ヲ定ム可シ

（イ）契約書中履行ノ地ヲ明記スルトキハ其履行地ニ因テ之ヲ定ム

（ロ）契約履行ノ地ヲ指定セサル場合幷ニ其他一切、對人件ノ訴訟「何等ノ原因ヨリ起リタルヲ問ハス」ニ付テハ總テ其被告人定住地ニ因テ之ヲ定ム其定住地ナキ場合ニ於テハ訴狀送達ノ時該被告人ノ寄留セル地ニ因テ之ヲ定ム

（ハ）對人件ノ訴訟ニシテ被告人數名アル場合ニ於テハ原告人カ其中ニ就キ選ム所ノ一名ノ定住地ニ因テ之ヲ定ム若シ其定住地ナキ場合ニ於テハ訴狀送達ノ時該被告人ノ寄留セル地ニ因テ之ヲ定ム

（ニ）會社ニ係ル事件ニ付テハ其會社本店所在ノ地ニ因テ之ヲ定ム但シ其支店ノ業務ヨリシテ生スル事件ハ右支店所在ノ地ニ於テ之ヲ出訴スルコトヲ得

（ホ）死亡者遺産ニ關スル事件ニ付テハ其最後ノ定住地ニ因テ之ヲ定ム

（ヘ）不動産ニ關スル事件ニ付テハ該不動産所在地ノ裁判所ニ出訴ス可シ

右手續ハ不動産ノ所有若クハ使用ニ關スル對人件ノ訴訟ニモ亦タ同シク適用ス可シ

從前外國人カ不動産占有權ヲ享受シタル地ノ界限外ニ在ル不動産ニ關スル訴訟ハ日本裁判所ノ管轄ニ專屬ス可シ

第二款

民事及ヒ商事ニ關シ日本裁判所ニ於テ言渡シタル判決ニシテ確定トナリタルモノハ條約界限地内ニ於テモ其効力ヲ有ス可シ但シ相當領事裁判所ニ於テ略式言渡判決ノ手續ニ依リ右日本裁判所ノ判決ハ執行ス可キモノナルコトヲ宣言スル迄ハ之ヲ執行スルヲ得ス此略式言渡判決書ニハ右日本裁判所ノ判決ハ相當司法官ヨリ言渡サレタルコト、其召喚狀ハ親シク各關係人ニ送達セラレタルコト、各關係人ハ法律ノ如ク代表セラレタルコト若シクハ法律ニ照ラシ欵席裁判ヲ言渡サレタルコト、及ヒ辨護ノ權理幷ニ上訴ノ權理俱ニ看保セラレタルコトヲ擧ク可シ

刑事事件ニ付テハ條約界限地内ニ在ル相當ノ外國裁判所若ハ領事裁判所ニ於テ宣告ヲ執行スルノ前、又ハ宣告執行ノ爲メ向キニ之ヲ言渡シタル裁判所ヘ該犯罪人ヲ引渡スノ前ニ於テ前項擧列シタル方式及條件ヲ照守スルヲ要ス

右日本裁判所ノ判決ハ英語ヲ以テ領事裁判所ニ通告ス可シ

貼紙

（貼紙朱書）

判決ノ執行ニ付テハ現行方法ヲ保續ス可シ

（二）

第三款

領事裁判所及ヒ日本裁判所ハ判決執行ノ外相當ノ照合ニ由リ相互ニ司法上「特ニ事實ノ取調及ヒ釋明ニ付」（裁判執行）ノ助ヲ與フ可シ

此規則ハ一方ノ管轄區域内ニ住居スル證人ヲシテ他ノ一方ノ管轄區域内ニ在ル他國裁判所ニ出廷シ其證據ヲ供セシムルカ爲メ相互ニ之ヲ召喚スル場合ニモ亦タ適用スヘシ

（三）

第四款

逮捕權ハ普通ニ日本官吏ニ屬ス但シ現行條約界限地内ニ於テ相當裁判所ノ令狀ナクシテ……國臣民ニ對シ此權

日本裁判所ニ於テモ亦タ領事裁判所ノ言渡シタル判決ハ執行ス可キモノナルコトヲ宣言スルノ義務アルモノトス此場合ニ於テハ日本裁判所ハ總テ前各項ニ明揭スル領事裁判所カ日本裁判所ノ判決ニ於ケル場合ト同樣ノ方式及ヒ條件ヲ照守ス可シ但シ領事裁判所ヨリ其判決ヲ通知スルニハ其自國語ヲ用ユ可シ

ヲ行フハ現行犯人ヲ逮捕スル場合ノミニ限ルモノトス

右逮捕セラレタル者、警察署ニ於テ該犯人卽チ是ナルコトヲ證驗セラレタル後ハ直ニ釋カル可シ但シ其申立ニヨリテ直ニ該犯人卽チ是ナルコトヲ證驗スルコトヲ得サルカ或ハ其重罪ヲ犯シタルカ若クハ逃亡ノ虞アル場合ニ於テハ直ニ該犯人ヲ管轄領事若クハ司法官ニ引渡ス可シ

日本官吏ハ現住居人ヲ管轄スル裁判所ノ命令ナクシテ……國臣民ノ住居スル家宅ニ入ルコトヲ得ス但シ左ノ目的ノ爲メニスルハ此限ニ在ラス

（イ）家屋住居人ハ身體若クハ生命ニ關スル實在ノ危險ヲ防止スル爲メ

（ロ）家屋内ニ於テ罪ヲ犯ス者アルニ方リ直ニ其事實ヲ查明スル爲メ

（四）

第五款

裁判管轄條約第六條ニ定メタル期限未タ訖ラサル前ニ領事裁判所ニ於テ審判ニ取掛リタル民事及ヒ刑事事件ニ就テハ該裁判所ノ管轄權ハ右事件ノ終決ニ至ルマテ仍ホ存在ス可シ

右期限内ニ起始シタル强制執行ハ從前ノ手續ニ從ヒ之ヲ完

結ス可シ

約款第一條第二條サー、フランシス、プランケット提出案（明治十九年十二月十四日即チ西暦千八百八十六年十二月十四日ノ會議ニ於テサー、フランシス、プランケット之ヲ提出シ同月十八日ニ於テ本會後日ノ議ニ附ス可シト議決シタルモノ

第一款

日本行政法律規則ニシテ其目的ノ保安警察衛生ノ施設及ヒ……國臣民ノ納ム可キ租稅ニ關シ精確ナル評價幷ニ賦課ヲナスカ爲メニ定ムル財政上ノ施設ニ在ルモノハ……

（前項ノ）保安警察及ヒ衛生施設ニ關スル法律規則ニシテ若シ其罰則ヲ附スル場合ニ於テハ其罰則ノ最高額罰金五百圓或ハ禁錮三ケ月若クハ右兩刑ノ併科ヲ超越セサル者ノミニ限リ……國臣民ニ對シテ其効力ヲ有ス可シ

租稅ニ關シ其正確ナル評價及ヒ賦課ヲ爲スカタメニ設ケタル財政上ノ規則ニ對スル犯罪ノ罰例ハ其最高限保安警察若クハ衛生施設ニ對スル犯罪罰例ノ最高限ニ超越セサル可シ

第二款

日本ノ法律規則ヲ條約界限內地ニアル……國臣民ニ適用スル爲メニハ前以テ其英譯ヲ官報ニ揭ケ公布スルコトヲ要ス若シ其法律規則ニシテ一地方ニ止マルモノナレハ豫メ指定スル該地方ノ新聞紙ヲ以テ右同樣之ヲ公布ス可シ

五　明治十九年六月十五日第六回會議ニ提出セラレタル英獨合案條約書

提案理由書

下ニ署名シタル大不列顚國及ヒ獨逸國ノ兩委員ハ左ノ議案ヲ本會ニ提出ス抑條約改正ニ關シ目下帝國日本政府ヨリ提出アリタル草案ハ永遠ニ亙リテ解紛スルニ足ルノ原素ヲ有セス又大ニ變更ヲ加フルニ非サレハ假令ヒ一時ノ便法トスルモ之ヲ以テ實際行ハルヘキモノト爲スノ見込ナキコトハ日本國全權委員及ヒ玆ニ會合スル我同僚諸君モ多クハ余輩ニ同感ナルヘシト信スルナリ

然リト雖モ余輩ハ此事實ニ付日本政府ヲ非難スルノ念慮曾テ之ナキ而已ナラス却テ日本政府カ勤勞ト才能トヲ以テ各國種々ノ意見中其細目ニ渡リ自カラ五ニ相抵觸スル所ノモノヲ調和セント計リタルコトハ余輩ノ欣然承認スル所ナリ

トス

故ニ余輩若シ唯タ此一點ヨリ見解ヲ下ストキハ右草案ハ充分余輩ノ稱贊ヲ受ルニ足ルモノナリ

蓋シ右草案ヲ提出セラレタルハ全ク事實上ノ困難ヲ解除スルノ目的ニアラスシテ唯タ遷移期限ヲ經過スル爲メ一路ヲ開カントスルニ過キサルヘシ

此問題ニ就キ其ノ包含スル所ノ錯雜困難ナル種々ノ案件ヲ普ク熟考スルニ若シ目下討議中ノ經畫ヲ採用セハ之ヲ實施スルニ當リ誤解ヲ生シ且容易ナラサル權限ノ抵觸ヲ致スコト必然ナルハ殆ント疑ヲ容レス

此所見アルニ係ラス余輩ニ於テ本會ニ提出セラレタル議案ノ審査ヲ今日マテ繼續セシハ新條約ハ唯タ遷移時期ヲ設クルノ趣意ニシテ試ニ之ヲ採用スルモ敢テ重大ノ關係アル變更ヲ致スコトナカルヘシト思考シタルカ故ナリ

余輩ハ各委員モ亦更ニ一層緊要ナル最上ノ目的ヲ有スルヲ確信ス卽チ日本帝國ヲ擧テ之ヲ外國人ニ開キ同時ニ之ヲ泰西邦國ノ位班ニ列スルコトヲ是認スルコト是ナリ

故ニ只此高尙ナル目的ヲ達スヘキ滿足ノ經畫ヲ成就シタル場合ニ於テノミ余輩ハ始メテ余輩ノ事業ヲ實際ニ永遠ニ成シ遂ケタリト謂フコトヲ得ヘシ

已ニ日本政府ハ千八百八十二年ノ會議ニ於テ司法制度ヲ改良シ外國裁判官ヲ任用シ以テ前陳ノ目的ヲ達センコトヲ勉メタリシモ斯ノ如キ廣濶ノ方法ハ當時尙ホ採用セラルヽノ時機未タ至ラスシテ該議案ハ一般ノ贊成ヲ受クルコト能ハサリシナリ併シ余輩ノ見ル所ヲ以テスレハ四年前ニ於テ時期未タ熟セスト爲セシモノモ今日ニ至リテハ之ニ多少ノ改正ヲ加フレハ以テ目下ノ問題ヲ好ク完結セシムルニ足レリトス本會議開設ノ當初ヨリ我同僚モ亦千八百八十二年ノ議案ヲ追懷シ之ヲ以テ今日ノ議案ニ優レリトセルハ余輩ノ信スル所ナリ而シテ今日余輩ノ本會ニ提出スル議案ニシテ從前伊太利委員ノ常ニ勸奬アリタルハ余輩ノ欣喜ニ堪ヘサル所ナリ

其他歐洲一大國ノ委員モ亦今回談判ノ初メニ當リ意見ヲ吐露シテ曰ク今回ハ通商條約ヲ締結スルニ止メ裁判權ノ項ニ關シテハ遷移時期ヲ設クルコトナク寧ロ全問題ヲ確然議定シ豫定ノ期日ニ及ンテ之ヲ實施スルコトニ取極ムルヲ得策ト爲スヘシト

今ヤ余輩ノ勸告スル改革ノ如キハ其ノ事體重大ナルヲ以テ

世人或ハ謂ハン此擧何時ヲ俟テ之ヲ實行スルヲ得ヘキ乎ト然レトモ余輩ハ須臾モ躊躇セス之ニ應ヘテ曰ハン余輩ノ所見ニテハ日本現今ノ情態タルヤ充分此事ヲ實行シ得ル時期已ニ到レリト確信ス

迅速ニシテ聰明ナル日本ノ進歩及ヒ充分泰西ノ思想ニ通曉シ之ニ則リテ勤勉不撓ナル帝國ノ內閣カ鄭重ナル政務ヲ處理スルノ二事ハ余輩ヲシテ當然且ツ故障ナク千八百八十二年ノ提出ニ係ル經畫ヲ實行セシムルニ足ル充分ノ保證ナリ

或ハ異論ヲ唱ヘテ謂ハン前二年間ニ於ケル帝國日本立法ノ進歩ハ割合ニ急速ナラサリシヲ如何セント併シ此原由タルヤ千八百八十二年間某々外國人ノ吐露セル異見ヨリシテ遂ニ日本政府ヲシテ其裁判管轄ノ事項ニ付望マシキ改正ヲ速ニ實行シ得ヘキヤ否ヲ自ラ疑フニ至ラシメタル事ト信ス卽チ同政府カ今回余輩ノ前ニ提出シタル草案ノ不充分ナルモ亦多ク此事由アルカ爲ナリ

余輩ハ日本政府カ今回ノ議案ヲ取消シ更ニ四年以前廢棄セラレタル經畫ニ復歸スルノ困難ナルコトヲ推察スルヲ以テ余輩ハ今敢テ此議案ヲ本會ニ提出スルノ責任ヲ取レリ

余輩ハ現今一般委員ノ間ニ存在スル好意ハ裁判管轄上ノ改正ヲ遠カラサル內ニ成シ遂ルタメ一ノ經畫ヲ提出スル好機ヲ與フルモノト信シ且果シテ此經畫ニ因ランニハ目下提出ノ草案ニ載スル如キ遷移時期ヲ設クルノ必要ナキヲ信ス故ニ余輩ハ余輩ノ提出ニ係ル議案ヲ以テ交涉諸國ニ利益アルヘキモノトナシ心實ニ其採用ヲ勸告ス

右ノ理由ニ基キ余輩ハ別紙條約案ヲ提出シ玆ニ參集ノ委員諸君親シク熟議アランコトヲ乞フ尤モ本案ハ唯タ條約ノ概要ノミヲ揭載スルニ過キサル者ナレハ余輩ハ我同僚諸君ト友情ヲ以テ之ヲ討議シテ最後ノ體裁ヲ定メントス又本案ハ千八百八十二年間帝國日本政府ノ提出案ニ基クト雖モ其諸項ニ至テハ當時之ニ下シタル觀察ヲ參酌シテ改竄ヲ加ヘ又其後實際ニ必要ナリト思考シタル事項ニ付テモ固ヨリ注意ヲ加ヘタルモノナリ

余輩ノ所見ニ從ヘハ須ラク二箇ノ條約ヲ締結シ一ヲ通商條約トナシ一ヲ裁判管轄條約トナシ同時ニ之ニ異名シ兩條約相互ノ關係ヲ有シ最惠國條款ト條約期限條款トハ均シク兩條約ニ適用スヘキニ在リトス

余輩ハ今此陳述ヲ終ルニ臨ミ我同僚諸君ニ望ムコトアリ卽チ諸君誼厚情ヲ以テ此議案ヲ熟考シ其ノ結果ヲシテ條約改正ノ事業ニ關係スル諸大國ノ名ヲ羞シメサルニアルナリ

千八百八十六年六月十五日　於東京

エフ、アール、ブランケツト自署

ホ　ル　レ　ー　ベ　ン自署

英獨合案條約書和譯

第一條

帝國日本政府ハ本條約批准後二箇年內ニ全國ヲ外國人ニ開キ而シテ本條約若クハ嗣後訂立スヘキ條約中本條ト相反スル事項ヲ包含スルニ非ルヨリハ諸事ニ付外國人ヲ內國人同樣ニ置クコトヲ訂約ス

第二條

帝國日本政府ハ第一條ニ揭クル期限內ニ於テ泰西ノ主義ニ從ヒ且ツ本條約ノ條款ニ據リ帝國裁判所ノ章程ヲ制定シ並ニ左記法典ノ編制ヲ實施ス可キコトヲ約ス

法典

一、刑法
二、治罪法
三、民法
四、商法、海上法及ヒ爲替手形ニ關スル法律
五、訴訟法
六、第四項ニ揭クル事件ノ訴訟法
七、身代限法

警察ニ關スル現行ノ法律規則ハ可成的之ヲ輯案ス可シ

第三條

帝國日本政府ハ第一條ニ定メタル期限前六箇月卽チ本條約批准後十八箇月ヨリ晚カラサル前ニ於テ第二條ニ揭クル裁判所ノ章程及ヒ諸法典ノ官譯英文ヲ……政府ヘ送付シ又帝國日本政府ニ於テ右等ノ法典ヲ變更セントスルコトアラハ其之ヲ實施スル六箇月前ニ右同樣之ヲ……政府ニ通知スルコトヲ約ス

第四條

第一條ニ揭クル期限以後ハ……國政府ハ其領事裁判權ヲ東京橫濱神戶大阪長崎及ヒ函館ノ條約規程內ニ限リ執行セシムルモノトシ右規程外ニ在ル……國臣民ハ總テ日本ノ裁判權ニ服從スルモノトス

第五條

前ニ揭ケタル條約規程外ニ在ル……國臣民ハ原告人

若クハ被告人トナリテ關係スル民事ノ訴訟及ヒ右條約規程外ニ在ル……國臣民ノ告訴、告發ヲ受ケタル犯罪ニ付テハ左ニ列擧スル特別ノ條款ヲ實行セラルル可シ

（イ）……國臣民ハ訴訟ニ係ル金額又ハ物件ノ價格百圓ヲ超過シタル民事ノ訴訟ニ付テハ直ニ控訴院ニ出訴スルノ特權ヲ有ス可シ

（ロ）前項ノ例規ハ……國臣民カ輕罪又ハ重罪事件ニ付告訴告發セラルヽ場合ニ於テモ同シク適施セラルヘシ

（ハ）右（イ）及ヒ（ロ）ノ場合ニ於テ裁判權ヲ執行スル裁判所ハ外國ノ籍ニ屬スル裁判官ノ多數ヲ以テ組織ス可シ右民事訴訟ノ審問又ハ右刑事ニ關スル豫審ハ外國屬籍ノ裁判官ノ指揮ノ下ニ在ル可シ

（ニ）右裁判所ノ公用言語ハ日本語ノ外英語タル可シ

（ホ）若シ陪審官設置ノ時ハ……國臣民ヲ審問スルニ際シ多數ノ外國人ヲ以テ陪審官ヲ組織ス可シ

（ヘ）審判ハ之ヲ公行ス可シ

（ト）各高等裁判所ニハ堪能ナル通辯官ヲ置ク可シ

（チ）……國臣民犯罪事件ニ付告訴告發ヲ受ケタルトキハ當該裁判所ハ辯護ノ爲メ之ニ附スルニ裁判所ノ言語ニ通スル代言人ヲ以テス可シ

（リ）前項ノ場合ニ於テハ該特別ナル目的ノ爲メ命セラレタル一個ノ外國人檢察官ノ職務ヲ行フ可シ

（ヌ）其他各裁判所ニモ堪能ナル代言人ヲ備フルコトニ注意ス可シ

（ル）死刑及ヒ其執行ニ關スル事項ハ特別ノ取極ニ讓ル可シ

（ヲ）外國人ノ繫獄ニ關シテハ特別ノ規則ヲ制定シ第二條ニ揭載シタル法典ト同時ニ之ヲ……國政府ヘ通知ス可シ

（ワ）前諸項ノ約款ニ適ヒ言渡シタル判決ニ對シテハ總テ大審院ニ控訴スル事ヲ得

（カ）控訴ヲ受理判決スル裁判所ノ組織及ヒ裁判ノ手續辯護人幷ニ檢察官ニ關シテハ控訴院ノ爲メニ定メタル約款ヲ同樣適用ス可シ

（ヨ）大審院ノ判決ニ對スル法律上ノ問題ニ於テハ更ニ該院裁判官ヲ以テ組織セル特別ノ裁判所ヘ上告スルコトヲ得但シ控訴院及ヒ大審院ニ關スル約款ヲ以テ同樣此特別

裁判所ニ適用ス可シ

第六條

帝國日本政府ハ外國屬籍ノ裁判官及ヒ檢察官數名ヲ嗣後日本及……國雙方ノ間ノ議定ニヨリテ撰任ス可シ但シ日本政府ハ一一ニ自國ニ於テ判事タルコトヲ得ルノ資格ヲ備ヘタル外國人ヲ撰ヒ之ヲ任用スルコトヲ約ス

第七條

外國屬籍ノ裁判官ハ一定ノ時期ヲ限リ任用セラルル可シ而シテ右期限內ニ於テハ外國屬籍ノ裁判官ノミヲ以テ組織セル懲戒裁判所ノ請求アルニ非サル外ハ免職及ヒ罷任セラレサル者トス

第八條

外國屬籍裁判官任用ノ方法幷ニ第二條第三條及ヒ第五條ニ適ヒ政府ニ通知ス可キ規約ハ前條ニ記載セル法典ト共ニ十五年間其効力ヲ有ス可シ依テ右期限內ニ於テケル該法典變更ハ總テ……政府ノ協意ニ職由セザル可ラサルモノトス

第九條

……國ノ領事裁判權ハ本條約實行ノ日ヨリ三年間尙ホ保存ス可シ嗣後雙方ノ間ニ訂約シタル日本警察法及ヒ行政法ハ此時限間……國領事裁判所ニ於テ之ヲ執行ス可シ

第十條

……國臣民ノ身分ニ關スル事件（卽チ相續、結婚、離婚、遺言事件及ヒ丁年事項ノ類）ニ就テハ……國領事裁判所ハ其管轄權ヲ有スル事尙ホ舊ノ如クナル可シ

第十一條

若シ……國臣民本條約實施前本條約ノ付與スル權利ヲ利用セント欲スルトキハ日本民事裁判權ニ服從シ始メテ之ヲ利用スル事ヲ得

第十二條

本條約ハ其批准ノ日附ヨリ十七年間其効力ヲ有ス可シ又其廢棄ハ本日締結スル所ノ通商條約第……條ニ左右セラルルモノトス

（右原文）

DRAFT CONVENTION

ARTICLE I.

The Imperial Japanese Government agrees to open the whole Empire to foreigners within two years after ratification of this Treaty, and to place them on the same footing as natives in every respect, unless the present Treaty or subsequent Conventions, which may hereafter be agreed upon, should contain anything to the contrary.

.....subjects shall enjoy the right to travel freely in the Empire, to reside there, to carry on commerce and industry, and to acquire and hold real and personal property.

ARTICLE II.

The Imperial Japanese Government agrees to organize the constitution of the law courts of the Empire in accordance with Western principles and the provisions of this Convention, and to carry into effect the following codification by the time named in Article I.

These Codes are :—

1) Criminal Law.
2) Criminal Procedure.
3) Civil Law.
4) Commerce, Shipping, and the Law of Bills of Exchange.
5) Civil Procedure.
6) Procedure in the questions contained under No. 4.
7) Bankruptcy Laws.

Moreover, the Police Laws and Regulations actually in force shall be, as far as possible, collected.

ARTICLE III.

The Imperial Japanese Government agrees to remit to the.....Government the authorized text, in the English language, of the constitution of the law courts and of the codification enumerated under Article II, not later, than 6 months previous to the term fixed in Article I, namely 18 months subsequent to the ratification of the Treaty. In the same manner the Imperial Japanese Government agrees to bring to the knowledge of the..... Government all alterations intended in these Laws 6 months before they come into force.

ARTICLE IV.

From the time named in Article I, the.....Government will confine their Consular Jurisdiction to the Treaty Limits of Tokio, Yokohama, Kobe, Osaka, Nagasaki and Hakodate, and all.....subjects outside are subjected to the Japanese jurisdiction.

ARTICLE V.

In respect to the civil law suits in which..... subjects outside the above named Treaty Limits take part as plaintiff or defendant, and in respect to the criminal offences with which.....subjects outside Treaty Limits may be charged, the following special stipulations shall come into force.

a).....subjects shall have the privilege that their civil law suits, in which the amount involved, or the value of the object in dispute exceeds 100 yen, shall at once be brought before the Courts of Second Instance.

b) The same rule shall apply in all cases where .....subjects are charged with a delict or crime.

c) In the cases under *a*) and *b*) the Court exercising jurisdiction shall be composed, in numerical majority, of judges of foreign nationality.

The institution of such a civil action, or the preliminary examination of such a criminal process, shall be under the direction of a judge of foreign nationality.

d) The official language of these Courts, besides Japanese, shall be the English language.

e) In case courts with juries are introduced, the cases where.....subjects are prosecuted shall be conducted with a jury composed of a majority of foreigners.

f) The trial must be conducted in public.

g) In every Superior Court competent interpreters are to be provided.

h) Whenever a.....subject is charged with a criminal offence he shall be provided with an advocate conversant with the language of the Court.

i) In such cases a foreigner appointed for this special purpose shall exercise the functions of

public prosecutor.

k) Care shall also be taken that every Court shall be provided with competent advocates.

l) The subjects of capital charges and execution shall be reserved for special arrangements.

m) Special provisions for the confinement of foreign prisoners shall be made, and communicated to the.....Government at the same time as the Codes mentioned in Article II.

n) There shall be an appeal to the highest Court from all decisions given in pursuance of the above stipulations.

o) In respect to the composition of the Court (which decides upon the appeals) and as regards procedure, defence, public prosecution etc., the stipulations made for the Courts of Second Instance shall be equally applicable,

p) From the decisions of the highest Court there shall be an appeal on questions of law to a special Court composed of judges of the highest Court. The stipulations with regard to Courts of Second Instance and Appeal shall be equally applicable to this special Court.

ARTICLE VI.

The Imperial Japanese Government shall appoint judges and public prosecutors of foreign nationality to the extent that may be agreed upon. The Japanese Government, however, binds itself to make choice only of such persons as have, in their own countries, acquired the qualification for judgeship.

ARTICLE VII.

Judges of foreign nationality shall be engaged for a fixed time, and shall be, during that time, irremovable, except upon the demand of a Disciplinary Court composed entirely of judges of foreign nationality,

ARTICLE VIII.

The system of judges of foreign nationality, the stipulations of which are, according to Articles II, III and V, to be communicated to the.....Government with the Codes mentioned above, shall remain in force for a period of 15 years. Every previous alteration of this system is dependent on the consent of the.....Government.

ARTICLE IX.

The.....Consular Jurisdiction shall still remain in force for the period of 3 years from the time that this agreement enters into operation, but such Japanese Police and Administrative Laws, as shall have been agreed upon, shall in the meantime be enforced by the.....Consular Courts.

ARTICLE X.

The.....Consular Courts shall remain competent for.....subjects in questions of personal status.

ARTICLE XI.

In case.....subjects should desire to make use of the rights granted by this Convention even before the same enters into operation, they may do so, provided they submit themselves to Japanese Civil Jurisdiction.

ARTICLE XII,

This Convention shall remain in force for 17 years from the date of its ratification, and, with reference to its denunciation, shall be governed by Article.....of the Commercial Convention of this date.

六 明治廿年四月二日迄ニ議決シタル條款

ARTICLES, AMENDMENTS, AND PROPOSITIONS ADOPTED BY THE CONFERENCE UP TO THE 2nd OF APRIL, 1887.

Articles of Draft Jurisdictional Convention agreed upon by the Conference.

ARTICLE I.

Voted by the Conference at the meeting of the 9th November, 1886.

The Imperial Government of Japan undertakes to open completely and forever the Empire to foreigners within two years after the exchange of the ratifications of the present Convention.

ARTICLE II,

The Imperial Go vernment of Japan undertakes to grant to foreigners, in conformity with the general principles of international law, all the rights and privileges enjoyed by subjects of His Majesty the Emperor of Japan.

Voted by the Conferense at the meeting of the 9th Novanber, 1886

ARTICLE III.

The treatment which.....subjects or citizens shall enjoy in Japan is, in so far as not foreseen by the present Convention, laid down in the special stipulations of the Treaty of Commerce and Navigation of even date.

Vted by the Corference at töe meeting of the 9th November, 1886

ARTICLE IV.

The Imperial Japanese Government undertakes to establish, in accordance with Western Principles, and with the stipulations of the present Convention, the judicial organization of the Empire and the codifications hereinafter specified, namely :—

Voted by the Conference at the meeting of the 9th Novemder, 1886

Amended at the meeting of 31st March, 1887.

1. Criminal Code ;
2. Code of Criminal Procedure ;
3. Civil Code ;
4. Commercial Code (including bankruptcy laws and laws relating to shipping and bills of exchange) ;
5. Code of Civil Procedure (including the procedure to be followed in commercial matters),

Moreover, the Police Laws and Regulations actually in force shall be, as far as possible collected and classified.

ARTICLE V.

The Imperial Japanese Government will promulgate the laws and regulations enumerated in the preceding Article within the time fixed by Article I ; and undertakes to communicate to the.....Government their authentic text, in English, not later than eight months before the time fixed in Article I, namely, within sixteen months after the exchange of the ratifications of the present Convention. In the same manner the Imperial Japanese Government undertakes to bring to the knowledge of the.....Government all alterations intended in these laws eight month before the said alterations come into force.

Voted by the Conferences at the meeting of 22nd November, 1886.

Amended at the meetings of 22nd December, 1886, and 31st March, 1887.

ARTICLE VI.

For the period of three years from the date of the opening of the Empire to foreigners the..... Consular Jurisdiction shall still remain in force within the treaty limits of Tokio, Yokohama, Kobe, Osaka, Nagasaki, Niigata, and Hakodate. But the.....Consular Courts shall enforce such Japanese Police and Administrative Regula- tions* as shall have been agreed upon.

Voted by the Conference at the meeting of the 14th December, 1886.

The competency of the Consular Courts and that of the Japanese Courts during the said period, as well as the particulars in respect to the establishment of a satisfactory state of jurisdiction in the above mentioned places, shall be regulated by the annexed stipulations :—

I,

The territorial limits of jurisdiction between the Japanese and Consular Courts shall be regulated according to the following principles :

Voted by the Conference at the meeting of the 8th January, 1887.

I.—In criminal matters the jurisdiction shall be determined by the place of commission ; but in the event of the offender escaping before (or during) the opening of proceedings, by the place of his arrest.

II.—In civil cases the local jurisdiction shall be determined in the following manner :

(a) By the place of performance of contracts as shown by the contracts themselves, when those contracts are in writing ;

(b) In case no place of performance is designated and in all other personal actions, from

* Amended at the meeting of 8th December, 1886.

whatever cause arising, by the domicile of the defendant; and, in case the defendant has no domicile, by the place of his sojourn at the time when the writ of action is served;

(c) In personal actions where there are several defendants, by the domicile of any one of them, at the choice of the plaintiff, and if such defendant has not domicile, by the place of his sojourn at the time whent he writ of action is served;

(d) In cases where associations are concerned, by the district in which the association which is defendant in the case has its head office; but any claim arising out of the business of a branch office may be brought at the place of such branch office;

(e) In matters relating to deceased estates, by the place of (last) domicile of the deceased;

(f) In cases where real property is concerned, the action shall be brought before the court of the place where the real property in question is situated; the same rule shall apply to personal actions which relate to the ownership or usufruct of real property. Actions concerning real property situated outside the limits in which foreigners have hitherto had the right of holding real property shall come under the exclusive jurisdiction of the Japanese Courts.

2.

The judgments delivered by Japanese tribunals, relating to civil and commercial matters, shall have effect within treaty limits when they have become final. judgments. Nevertheless, the said judgments cannot be executed until after the competent Consular Court shall have declared them to be executable by means of a judgment pronounced in a summary manner by that court, in which it shall be stated that the judgment in question has been pronounced by the competent judicial authority; that the summons to the parties have been served personally;* that the parties have been legally represented; or that judgment has been legally given in their absence; and that the right of defense and the right of appeal have been observed.

In criminal cases the form and conditions above enumerated shall be observed before the sentence is executed by the competent Foreign or Consular Court within treaty limits, or before a convicted criminal is handed over to the court which has sentenced him for the execution of the sentence.

The judgments of the courts mentioned above must be communicated in the English language to the Consular Court.

Japanese tribunals shall, on their side, be bound to declare executable the judgments pronounced by Consular Courts, observing in this respect the form and the conditions above enumerated in the case of Japanese judgments, except that they will communicate their judgments in their own anguage.

3.

Besides the execution of the judgments, the Consular and Japanese Courts have, upon due application, to render each other further legal aid, especially for the determination and elucidation of facts.

This applies equally to the summoning of witnesses who are residing in the respective districts, to give evidence before the court of the other State in that district.

4.

The right of arrest rests generally with the Japanese Authorities. But it is understood that in the absence of warrants from the competent courts, such right shall, within the present treaty limits against.....subjects, only be exercised when the offender is caught in flagranti.

The person arrested shall be released immediately after his identity is proved at the police station. In the event, however, that his identity cannot be immediately proved upon his declaration, or in case of crime, or of suspicion of flight, the offender is to be brought at once before the

* In the Italian Treaty the words, "the summons to the parties have been served personally," will be replaced by the words, "the parties have been summoned to in appear in regular form."

competent Consular or Judicial Authority.

The Japanese Authorities shall not be authorized to enter houses occupied by.....subjects without orders from the court having jurisdiction over the occupants, except for the purpose:

(a) Of preventing actual danger to the body or life of an inmate;

(b) Of asceratining facts immediately on the commission of a punishable act within the house.

5.

In respect to those civil and criminal actions which are in litis pendence in the Consular Courts before the expiration of the period fixed in Art. VI of this Convention, the jurisdiction of the said Courts shall remain in force till the final decision of such cases.

Coercive executions commenced during the said period shall be settled in conformity with the laws of procedure hitherto in force.

ARTICLE VII.

When Japanese jurisdiction has to take cognizance of a case, either civil or criminal, in which one or more.....subjects or citizens are concerned, in whatever capacity, the stipulations hereinafter enumerated shall have effect, on pain of nullity of all of the proceedings and of the judgment. Voted by the Conference at the meeting of 12th February, 1887.

1, The Courts of First Instance (Chiho-Saibansho), the Courts of Appeal (Koso-in), and the Supreme Court (Daishin-in) shall be so constituted that a majority of the judges in each of the said courts shall be of foreign nationality. Voted by the Conference at the meeting of 12th February, 1887.

No judgment of a lower or higher court shall be rendered by a number of judges less than that fixed by law.

Nevertheless, each branch of a Court of Appeal shall be composed of a number of judges larger than that of a Court of First Instance; in the same way, each branch of the Supreme Court shall contain more judges than a branch of a Court of Appeal.

2. No judge who has taken part in the decision of a lower court shall sit in appeal in the same case as a member of a higher court. Voted by the Conference at the meeting of 12th February, 1887.

3. The judgments of a court presided over by a single judge in civil matters and in contraventions shall be subject to appeal, on questions of law and fact, before a Court of First Instance, and to a further review, on ground of error in law (*pour toute violation de la loi*), before a Court of Appeal. There shall be no further appeal. Voted by the Conference at the meeting of 2nd March, 1887.

4. There shall be an appeal, on questions of law and fact, from the judgment of a Court of First Instance to a Court of Appeal. Voted by the Conference at the meeting of 2nd March, 1887.

5. From the judgment of a Court of Appeal there shall be an appeal, on ground of error in law, to the Supreme Court. Voted by the Conferenec at the meeting of 2nd March, 1887.

6. A Court of First Instance shall be established at each of the following places, namely:— Voted by the Conference at the meeting of 12nd March, 1887.

1. *Yokohama;*
2. *Hakodate;*
3. *Niigata;*
4. *Kobe;*
5. *Kioto;*
6. *Yamaguchi;*
7. *Nagasaki;*
8. *Nagoya.*

A change may be made in the seats of the above Courts, should experience render it desirable.

A Court of Appeal shall be established at each of the following places, namely:—

1. *Tokio;*
2. *Osaka.*

The Supreme Court shall sit at Tokio.

7. The judges of foreign nationality sitting in the Courts of First Instance shall be chosen Voted by the Conference at the meeting of 2nd March, 1887.

from amongst the members of the Courts of Appeal; they shall be selected in the course of each judicial year, for the ensuing judicial year, by a Committee composed of the Chief President of the Supreme Court and two judges of the same Court, who shall be designated by lot.

This alternation of judges shall be arranged so that all the members of foreign nationality of the Courts of Appeal shall sit, in their turn, in a Court of First Instance.

An exchange of posts by mutual agreement between judges of foreign nationality may be authorized by the Committee charged with the distribution of judges; but any request for exchange of posts must be made before the distribution of judges for the year.

8. Civil suits to which..... subjects or citizens are parties, and in which the amount directly or indirectly involved, or the value of the object directly or indirectly in dispute, exceeds yen 100, shall be heard by Courts of First Instance.

Voted by the Conference at the meeting of 2nd March, 1887.

Any claim for an indefinite sum, or an object of indefinite value which shall exceed yen 100 shall be heard by the above mentioned Courts.

9. In criminal matters the Courts of First Instance shall take cognizance of all offences the penalties for which exceed imprisonment for ten days, or a fine of thirty yen, or both.

Voted by the Conberence at the meeting of 2nd March, 1887.

The competency of the said Courts shall extend to delicts and crimes.

10. The preliminary examination of all criminal cases shall be conducted by a judge of foreign nationality.

Voted by the Conference at the mceting of 2nd March, 1887.

11. In all cases in which the intervention of the Public Prosecutor is required the duties of Imperial Prosecutor shall be performed by an official of foreign nationality.

Vrted bg the Conference at the meeting of 2nd March, 1887..

12. Trials shall be conducted in open court, except when the court otherwise determines for reasons to be stated in the minutes of proceedings.

Voted by the Conference at the meeting of 2nd March, 1887.

13. *a.*) The official language of the said courts shall be the Japanese language.

Voted by the Conference at the meeting of 22nd November, 1886.

b.) The English language, as the language in most extensive use in Japan, shall be declared to be the foreign judicial language of these courts.

c.) Other foreign languages shall, however, be admitted and recognized in the documents and correspondence of the courts.

d.) The sentences, decrees, judgments, opinions, etc, as well as all other documents emanating from the courts, shall be delivered and communicated to the parties in the authentic English text.

e.) In the communication, however, of the documents mentioned in the preceding paragraph, such documents must be accompained by a correct translation in the foreign language which the parties to the suit or the accused shall specify as the language with which they are most familiar.

f.) When the judges of foreign nationality of a court and the parties to a suit belong to nationalities other than English or American, the proceedings may be conducted in that European language which is chosen by common consent. The English language shall, however, remain the language which must be used in the publication of decisions, and for their eventual communication to a higher court.

g.) Every court shall be furnished with competent interpreters and officially appointed translators, who shall be sworn in.

h.) The courts shall be bound to accept all documents which may be addressed to them in any European language whatsoever, and cannot require the parties to present an English translation, which must be done by, and at the expense of the courts.

i.) The official correspondence of the courts between themselves shall be conducted in the English language.

14.....subjects or citizens shall have the right to appear in person before judges sitting alone and before Courts of First Instance. Voted by the Conference at the meeting of 18th March, 1887.

There shall be attached to all the courts Japanese advocates conversant with the language of the court.....subjects or citizens shall have full liberty to choose their advocates, without reference to the locality or nature of the court.

When.....subjects or citizens are charged with delicts or crimes, they shall, in case they have not selected advocates, be provided gratuitously with advocates conversant with the language of the court. These advocates may be chosen from among advocates of Japanese or foreign nationality.

15. The Council of the Japanese Bar shall decide upon the admission of advocates of foreign nationality, and shall exercise disciplinary power in regard to them. Voted by the Conference at the meeting of 18th March, 1887.

Foreign advocates shall always have the right to appeal against the decisions of the Council to the court charged with the exercise of disciplinary power with regard to judges of foreign nationality.

16. Any.....subject or citizen accused of a crime may select as counsel for his defense any person he chooses, even though the person in question may not be an advocate by profession, provided he be acceptable to the court. Voted by the Conference at the meeting of 18th March, 1887.

17. In case the Japanese Government establishes courts with juries, the juries shall, when.....subjects or citizens are prosecuted, consist of a majority of foreigners. Voted by the Conference at the meeting of 18th March, 1887.

18. The Treaty Powers shall have the option to claim the surrender of any of their subjects or citizens condemned by na Imperial Japanese Court to capital punishment, whose sentence shall not have been commuted. Voted by the Conference at the meeting of 31st March, 1887.

It is well understood that.....subjects or citizens, who may have been surrendered under the above circumstances, shall be prosecuted and judged in conformity with the laws of.....

Before the expiration of the period for which Consular jurisdiction remains in force the High Contracting Parties will enter into a new arrangement in respect to capital punishment.

19. Special provisions for the confinement of foreign prisoners shall be made, and the regulations concerning the organization of prisons and penitentiaries shall be communicated to the.....Government at the same time as the Codes mentioned in Article IV. Should any change be found necessary in these regulations, it shall be communicated, without delay, to the..... Minister at Tokio. Voted by the Conference at the meeting of 18th March, 1887.

ARTICLE VIII.

The Imperial Japanese Government shall appoint judges and public prosecutors of foreign nationality to the extent agreed upon in Article VII. Voted by the Conference at the meeting of 2nd April, 1887.

In the appointment of judges and public prosecutors of foreign nationality, the Imperial Japanese Government will observe the following stipulations :—

1. Judges and public prosecutors of foreign nationality must have acted in their own country as judges, public prosecutors, or as advocates, and must be free from all legal disabilities in their own country.

2. They shall be engaged for a fixed term of at least four years.

3. All the judges of the same court shall receive the same salaries.

4. No judge or public prosecutor can exercise any other functions for which a salary is

provided.

5. Judges of foreign nationality cannot be removed from their offices during the period of their engagements, except at the instance of a Disciplinary Court. This court shall be composed of them members of foreign nationality of the Supreme Court, who shall have power to add to their number, by secret ballot, three other judges of foreign nationality. No judge shall be removed, except upon the judgment of a majority of not less than two-thirds.

ARTICLE IX.

The judicial system established in conformity with the preceding Articles shall remain in force for a period of 15 years from the time named in Article I. Every alteration of this system is dependent upon the previous consent of the..... Government.

Voted by the Conference at the meeting of 2nd April, 1887.

ARTICLE X.

The.....Consular Courts shall remain competent for.....subjects or citizens in questions of personal status.

Voted by the Conference at the meeting of 2nd March, 1887.

ARTICLE XI.

In case.....subjects or citizens should desire to make use of the rights granted by this Convention immediately after the exchange of ratifications they may do so, provided they submit themselves to Japanese civil jurisdiction.

Voted by the Conference at the meeting of 2nd April, 1887.

ARTICLE XII.

This Convention shall remain in force for 17 years after the exchange of ratifications, which shall take place at the same time as the exchange of the ratifications of the Commercial Convention of even date herewith.

The exchange of ratifications shall take place at Tokio within one year after the signature of this Convention, or sooner if possible.

Voted by the Conference at the meeting of 2nd April, 1887.

PARAGRAPHS 1 AND 2 OF THE STIPULATIONS OF SIR FRANCIS PLUNKETT, WHICH THE CONFERENCE, AT THE MEETING OF THE 18th DEC., 1886. agreed to Reserve for Future Consideration, and for Insertion as an Additional Article in the Convention.

§ 1.

Japanese Administrative Laws and Regulations shall be enforced by.....Courts, provided they have for their object the police of public security, sanitary measures and measures of the financial administration, regulating the accurate valuation and assessment of taxes and dues payable by..... subjects.

Laws and regulations referring to the police of public security and sanitary measures, when they have penalties attached, shall only be binding upon.....subjects in the event such penalties do not exceed a maximum of (500) five hundred yen fine, or imprisonment for (3) three months, or both such fine and imprisonment.

Regarding penalties for offences against measures of the financial administration regulating the accurate valuation and assessment of taxes and dues, the highest penalty to be inflicted shall not exceed the highest penalty for offences against the public security and sanitary measures.

§ 2.

In order that the Japanese laws and regulations may become applicable to.....subjects within the aforesaid treaty limits, they must have been previously published in the English language in the Official Gazette, and if they are of a local chracter, in the same manner, also, in a local newspaper previously designated for the purpose.

十 明治二十年四月二十二日會議ニ於テ議定シタル裁判權條約案

註 本文省略ス 前項議定ノ裁判權條約ノ條項參照（下線ノ部分ハ今回訂正）

CONFIDENTIAL.

JURISDICTIONAL CONVENTION.

ARTICLE I.

The Imperial Government of Japan undertakes to open completely and forever the Empire to..... subjects or citizens within two years after the exchange of the ratifications of the present Convention.

ARTICLE II.

The Imperial Government of Japan undertakes to grant to.....subjects or citizens, in conformity with the general principles of international law, all the rights and privileges enjoyed by subjects of His Majesty the Emperor of Japan.

ARTICLE III.

The treatment which.....

ARTICLE IV.

The Imperial oh Japan undertakes.....

ARTICLE V.

The Imperial Government of Japan will promulgate the laws.....

ARTICLE VI.

For the period of three years.....
The competency of the.....Consular Courts..... shall be regulated by the annexed stipulations.

（以下附錄）

ARTICLE VII.

When Japanese jurisdiction has to take cognizance of a case,.....
.....
.....

18. The.....Government shall have the option to claim the surrender of any.....subject or citizen condemned by an Imperial Japanese Court to capital punishment, whose sentence shall not have deen commuted.
.....

ARTICLE VIII.

The Imperial Government of Japan shall appoint judges ....

ARTICLE IX.

The judicial system established in conformity..... ....

ARTICLE X.

The.....Consular Courts shall remain.....

ARTICLE XI.

In case.....subjects or citizens should desire.....

ARTICLE XII. （追加）

The Japanese Government, moreover, agrees that any other arrangements which it may have already made, or may hereafter make, with any Foreign Power in regard to the administration of justice in Japan, shall be immediately and unconditionally extended to the.....Government and to.....subjects or citizens, should the.....Government at any time express a wish to that effect.

ARTICLE XIII. （十二條ヲ十三條トス）

This Convention shall remain.....

ANNEX （六條末尾ヨリ）

STIPULATIONS ANNEXED TO ARTICLE VI.

1.

The territorial limits of jurisdiction.....

2.

The judgments delivered.....

3.

Resides the excuuion of judgments,.....

4.

The right of arrest rests.....

5.

In respect to.....

Paragraphs 1 and 2 of the Stipulations proposed by Sir Francis R. Plunkett at the meeting of the 14th of December 1886, which the Conference agreed on the 18th of December to reserve for future consideration and for an additional article.

§ 1.

Japanese Administrative Laws and Regulations shall be enforced by.....courts,.....

§ 2.

In order thet the Japanese laws.....

ハ 裁判權ニ關スル井上伯ノ改正經過

千八百八十七年（明治二十年）七月諸條約國ニ提出セシ條約案ハ即チ左ノ如シ

民事裁判權ハ現今ノ儘ニ存シ置クコト但シ內外人交涉ノ商業組合ニ關スル事件ハ日本裁判所ノ管轄ニ屬スベシ

刑事裁判權ハ現今ノ儘ニ存シ置クコト但シ日本臣民ニ對シ違警罪ヲ犯シタル外國人ニ關シテ日本裁判所ハ之ヲ審判シ二圓以內ノ罰金ヲ科スル權限ヲ有スベシ又國家ニ對スル犯罪（警察及行政規則ニ對スル犯罪並ニ條約違反等ヲ包含ス）ニシテ其罰例ノ最高限五百圓以內ノ罰金若クハ三ケ月以內ノ禁錮ナルトキハ外國裁判所ハ日本刑法ヲ適用スベシ此提議ハ諸條約國ノ排斥スル所トナレリ

（朱書明治十五年）千八百八十二年一月二十五日條約改正豫議會ヲ開設シ塙匈條約ヲ以テ改正ニ關スル豫議ノ基礎ト爲セリ

同年六月一日井上伯ハ領事裁判權ヲ廢止シ日本裁判所ニ外國法官ヲ任用セントスル新案ヲ提出セリ而シテ其條項ハ左ノ如シ

外國人交涉ノ民刑事件ニシテ外國人被告ナルトキハ其裁判官ノ多數ハ外國法官トシ日本人被告ナルトキハ其裁判官ノ多數ハ日本法官タルベシ同一ノ國籍ニ屬スル外國人間ノ民事訴訟ニ關シテハ領事裁判所ハ裁判權ヲ繼續スヘシ、五年間ノ遷移期限ヲ設ク而シ此期限間ハ商業ノ爲メ

內地ニ旅行スルコトヲ外國人ニ許ス

遷移期限間ハ日本裁判所ハ左ノ事件ニ關シ裁判權ヲ有セズ

一　重罪ニ關スル公訴

二　外國人遊步規程內ニ於ケル輕罪ニ關スル公訴

三　人事ニ關スル事件

四　條約違犯ニ關スル事件但シ特ニ委托セラレタル場合ハ例外トス

五　外國人間ニ於ケル動產ニ關スル對人權

諸條約國ハ前述ノ新案ヲ採用セスシテ豫議會ヲ延期セリ

（朱書明治十七年）千八百八十四年八月英國公使ト覺書ヲ交換シ裁判權ニ關スル基礎ヲ定ムルコト左ノ如シ

一　外國人ハ日本ノ行政警察及地方規則ヲ遵守スルコト

二　前項諸規則ノ違犯ニシテ三十圓以內ノ罰金若クハ十日以內ノ拘留ニ處シ又ハ此兩刑ヲ併科スベキモノハ日本裁判所ノ管轄タルベキコト

三　特設開港ニ於ケル內外人交涉ノ取引ヨリ起ル訴訟ニシテ其金額五百圓ヲ超過セザルトキハ日本裁判所ハ其關係外國人ニ對シ裁判權ヲ有スルコト

（朱書明治十九年）千八百八十六年五月一日改正會議ヲ開設セリ

此會議ニ於テハ（朱書十七年）千八百八十四年ノ考案（卽英國公使ト意見ヲ交換セシモノ）ヲ以テ成立セシムルノ見込ナキモノトシ多少討議ノ後之ヲ廢棄セリ而シテ英獨公使ハ六月十五日ニ至リ所謂英獨合議案ナルモノヲ提出セリ

會議ニ於テハ該合議案ニ大ニ修正ヲ加ヘテ遂ニ之ヲ採用セリ而シテ其條項ハ左ノ如シ

日本ハ全國ヲ開通シ外國人ニ對スル裁判權ヲ回復スルコト

外國人ノ關係スル民刑訴訟ニ於テハ其關係ノ資格如何ヲ問ハス其裁判官ノ多數ハ外國籍ニ屬スルモノタルヘキコト

日本裁判所ニ於テ死刑ノ宣告ヲ受ケタル外國人ニ關シテハ其所屬國政府ハ自國ノ法律ニ照シ處斷スヘシトノ約束ヲ以テ右犯罪人ノ引渡ヲ要求シ得ベキコト

裁判權ハ日本ニ專屬スベキコト（尤モ條約案ニハ外國法官ノ任免裁判所ノ構成等ニ關シ細案ノ規定ヲ設ケタリ）

外國裁判官ノ外ニ外國檢察官數名ヲ置クコト

英語ヲ以テ裁判用ノ外國語ト爲スコト

諸法典ハ各條約國ニ送附シ而シテ之ニ改正ヲ加フルトキハ其都度實施ノ期日ヨリ八ケ月以前ニ各條約國ニ通知スルコト

領事裁判所ハ人事ニ關スル事件ニ付引續キ裁判權ヲ有スルコト

外國囚徒ノ監禁ニ關シ特別ノ規定ヲ設クルコト幷ニ日本監獄則ヲ各條約國ニ送附スルコト

一四八

明治二十年五月四日　井上外務大臣ヨリ在歐各公使、代理公使宛

外國籍判事採用ノ件

附屬書　二十年五月四日附在外各公使へノ廻文

明治二十年五月四日

在歐公使、臨時代理公使　外務大臣

送第四四五號

今回貴官等へ及訓令候別紙廻文ハ最モ機密ヲ要スル義ニ有之候ニ付其旨篤ト御瞭得ノ上各々訓令ノ實行ニ御盡力有之度候

佛國公使シエンキエウイツ氏ハ從前我ニ對シ一種ノ政略主

義ヲ維持スル都合ニ有之候故改正事件商議ノ際前後ノ樣ノ感銘ヲ懷キ居候處今寂同公使歸國ノ上ハ自己ノ策略ヲ防禦スル爲メ自然佛國政府ヘ我ニ取リテハ不利ノ感覺ヲ起サシムヘキモ難計致思考候ニ付原臨時代理ヘ致附與候本大臣ノ訓令中裁判官分配ノ義ニ關シテハ殊ニ其注意ヲ要シタル義ニ有之候條各々其旨モ御了悉有之度候

西[1]、中村、原ヘ

追　啓

小松原臨時代理公使ヨリ前件ノ義ニ付キ獨逸政府ヨリノ確答或ハ協議相整タル旨通知無之間ハ（西ヘハ瑞典諾威）（中村ヘハ丁抹）（原ヘハ西班牙、葡萄牙、瑞西、白耳義）ノ政府或ハ其代理者ヘ裁判官配分主義ノ本旨御洩被成間敷候

小[2]松原臨時代理公使

追　啓

裁判官配分之義ニ付獨政府ヨリ何トカ確答有之候ハヽ其旨直ニ瑞典諾威兼勤ノ西公使、丁抹兼勤ノ中村、西班牙、葡萄牙、瑞西、白耳義兼勤タル原代理公使ヘ（但シ佛國ニ關シテハ此ノ限ニ非ス）御通知可被成候且本件ニ關シテハ西、中村、原公使ヘノ內訓爲ト御承知可被成候

註　1 駐露公使西德二郎駐獨代理公使中村雄次郎駐佛代理公使原敬ナリ
　　2 駐獨代理公使小松原英太郎ナリ

附屬書

二十年五月四日附在外各公使ヘノ廻文
（外國裁判官雇入ノ件）

Strictly Confidential

Tokio, May 4 1887.

The moment has arrived to put you in possession of the facts respecting an important question connected with the negotiations for the Revision of the Treaties.

You will have understood from the previous communications of this Department, that the Imperial Government in consenting to the appointment of foreigners as Imperial Japanese judges had reserved to itself full freedom of choice, both as regards nationality and person.

However the Imperial Government could not remain indifferent to the representations made to it by different foreign Diplomatic Representatives, that the question of the nationality from which judges would be Chosen, was one affecting their interest, and even national dignity. Although the Imperial Government are of opinion, that judges cannot be supposed to have any political position or influence, as they are simply the agents which interpret and apply the laws; unfortunately there exists in Japan as elsewhere a certain rivalry between the different foreign nationalities, and therefore dissatisfaction and remonstrations would have arisen, if the Imperial Government had insisted upon following freely its inclinations or predilections in choosing the judges from any nationality without some determined previous arrangement. Thus arose the necessity for providing a system, which would equally safeguard our own interests, and be satisfactory to the various Powers in question.

The problem to be solved offered many difficulties, for which was to be the guiding principles? The number of the Residents of each nationality? The extent of their commerce? The position of the respective Powers in Europe?

Upon due consideration however we decided upon the adoption of the following solution, as offering the fewest objections.

Considering that the foreign judicial language of the Courts is to be the English, and as the commercial interests of the English speaking nationalities are the most extensive in Japan, it was decided to divide the judges amongst the different nationalities in the following manner:

There would be choeen from Great Britain and United States of Ameriea.

.....together 10 pidges.

From the five other European Great Powers there would be taken 3 each thus:

France	3
Russia	3
Germany	3
Austria	3
Italy	3
mekes	51

adding those from England and America (10), makes total 25, as it is proposed to appoint in all 35

foreign judges and public prosecutors, there would after deducting the above 25 still remain 10 judges to be appointed. These appointments it is proposed to serve to the Imperial Government to be taken freely from one or more of the Powers *not already included* in the above distribution; (namely outside of the 6 European Great Powers and America.) Our present intention is, to choose these from the neutral Powers in Europe, from Belgium and Switzerland.

By this arrangement some of the Treaty Powers would not be included, and their lawyers would not be called to our Courts. These States will in all probability be Spain, Portugal, the Netherlands, Sweden and Norway, and Denmark.

From the delicate nature of the question I was from the beginning desirous to prevent its introduction into the Conference; for as the interests of the foreign Powers were in the opinion of some of their Representatives of a conflicting nature, a public discussion would have produced in all probability only negative results.

In order to bring about in time an understanding outside the Conference, I had already as far back as November 1886 instructed our Minister at Berlin to request the good offices of the German Government, to obtain a solution by means of their direct negotiations with the Cabinet of St. James and the other Great Powers.

Here follows for your information the principal telegrams exchanged between the Foreign Department and His Majesty's Legation at Berlin;

Telegram. Aoki to Shinagawa.

Nov. 9 1886.

Strictly Confidential.

"Serious apprehension caused byq uestion of choice of foreign judges as England and United States of America seem disposed to claim that half the judges be of their nationality. We insist upon previously claimed freedom of selection in regard to person and nationality. Should definition of nationality be unavoidable we prefer to limiting it to Neutral States Switzerland and Belgium. If this principle not acceptable we eventually agree to select ourselves freely one half of the judges from Great Powers and America and one half from said Neutal States. See Berchem Reichardt request German Government's intercession in above sense with Great Powers as a German suggestion in order to arrive at understanding before question is introduced at Conference. Report result of German action."

The German Government was fortunately disposed to undertake this negotiation after an exchange of views, our Legation was able to report on January 24th that the German Government was ready to undertake the desired mediation with the foreign Powers and that they strongly recommended leaving the question out of the Conference.

Telegram. Komatsubara to Aoki.

Jan. 24. 1889.

"In a private conference with Berchem in regard to your telegram of January 9th he said that German Government would agree with every form of selection of foreign judges you propose, but to obtain the approval of other Great Powers Berchem says Japan would not obtain entire freedom of choice. Shall be obliged to make certain concession. England at first as Berchem held conference with British Ambassador to Germany seems on German representation to be satisfied with third(sic) of judges included (including) America. Therefore German Government proposes as follows:—

Previously separation of the question about choice and repartition of judges from General Conference in order to be negotiated between the Powers directly; and German Government will be ready to act directly in conciliatory spirit; and very confidentially told England too will be ready to this separation; besides German Government can use the influence better out of Conference than in Conference. Therefore German Government now wants to know exactly if you consent to separation and exactly your wishes. Answer immediately."

In a telegram to the Japanese Chargé d'Affaires at Berlin on the 26th January this Department fully explained the views of the Imperial Government and placed before the German Government the proposed scheme of selection.

Telegram. Aoki to Komatsubara.

Jan. 26, 1887.

Confidential.

"Inform Berchem that we agree to let questions of selection of judges be treated outside of Conference. We propose therefore to appoint altogether thirty judges and five public prosecutors, of these shall be selected ten in England and America and fifteen among five Great Powers namely: three each. The rest we reserve to ourselves to select freely from any country in Europe. In all cases however the individual choice to be left to us. Request German Government to employ their good offices to bring about consent of Great Powers on above basis. The result of understanding to be presented by us to Conference in the form of a declaration. As this question may be before Conference in one of our next meeting a previous early understanding as above is desirable."

From later replies received it appears that the object of the German Government was naturally to come to an understanding, first with the British Government and afterwards with the other Great Powers.

Some difficulty arose at first by England claiming 12 judges together with America instead of ten, as proposed by us, but according to the last telegram received from Berlin on the 15th March last, the understanding between Germany and Great Britain seems secured. England consented to have with America only 10 judges that is 6 for England and 4 for America and the German Government is now negotiating with the other Great Powers and hopes to meet no opposition.

Telegram. Komatsubara to Aoki.

March 15, 1887.

Strictly Confidential

"With regard to judges England has consented to have with America 10 that is 6 for England 4 for America. German Government will now act with other Great Powers; hopes will meet no opposition. German Government request you to keep strictly confidential."

In Japan itself the matter took a very smooth course. After a previous confidential understanding with the Representatives of Germany, Great Britain, France and Italy who were to a certain extent informed of our proposed scheme of distribution, we agreed with them not to introduce the question at the Conference and to make a declaration to that effect.

At the Conference of the 31 March the discussion of Article VI of the Anglo-German Project (now VIII) came up at the Conference.

This Article was as follows:

"The Imperial Japanese Government shall appoint judges and prosecutors of foreign nationality to the extent that may be agreed upon. The Japanese Government, however, binds itself to make choice only of such persons as have in their own countries acquired the qualification for judgeship."

The President make thereupon (see Protocol No. 24) the following declaration:

"Before entering on the discussion of the Article we have the honour to state that in respect to the choice and appointment of judges of foreign nationality we propose to communicate our views through our Diplomatic Agents abroad to the Cabinets of Europe and America and come to a direct understanding with them on the subject before the signing of the Treaties.

In connection herewith we propose that Article VI (now VIII) should remain as it is with small modifications which are necessitated by the Article already agreed upon."

In the discussion which followed on the 2 April (Protocol No. 25) the question of the nationality of the judges was happily avoided and the Article adopted. (See Article VIII of the Draft Jurisdictional Convention.)

I must also mention here that upon a subsequent reclamation of the American Representative here I asssured him that America would be treated in respect to the choice of judges in the same manner as Great Britain. It is probable therefore that the last arrangement entered into by Germany with England will suffer some slight modification.

Thus the matter seems at a very fair way to arrangement thanks to the efforts of the German Government in Europe and the manner in which the delicate matter has been treated by the Conference.

It will now be the general duty of our Diplomatic Agents abroad to use their best efforts to prevent any disturbance of the plan proposed and to calm as far as possible the apprehensions of the Cabinets of the countries from which no judges are to be chosen.

You should therefore point out first of all that the fact of the appointment of a judge from one or the other nationality had no political significance, nor any bearing on the respective commercial interests. Besides as the object of the introduction of foreign elements in our Courts was to give guarantees for good justice, this object would be secured by the appointment of honorable and capable foreign judges irrespective of nationality.

A Danish or a Belgian subject would therefore evidently not run any risk on account of being judged by a judge of British or French nationality. Moreover it might be pointed out that the more the number of nationalities in the Courts with all the consequences of different languages would be increased, the less would become the guarantees for an effective and easy administration of justice. Besides there is a material difference between the system adopted in the proposed Convention and that prevailing in Egypt. Whilst in Egypt the judges are actually chosen and to a certain extent delegated by the foreign Governments, but the Imperial Japanese Government has reserved itself full freedom of choice and is only limited to persons possessing the necessary capability. (See Art. VIII, Draft of Convention.)

The Imperial Government does not consider itself bound to go, for this purpose through the usual official channels, or to demand the approval or a recommendation from the foreign Governments. It stands to reason however that if the individual to be chosen is at the time in the active service of a foreign Government, that the usual steps which take place also in case of the engagement of any other foreign official, must be also taken, for instance the obtaining of leave etc., but this constitutes not by any means, any analogy with the system of the mixed Courts in Egypt. For its own interests the Imperial Government will not neglect to take the most minute precautions to secure propper and able judges.

I shall give to the agents accredited in Spain, Portugol, the Netherlands, Sweden and Norway, and Denmark special instructions but the above arguments might on favorable occasion be employed by our Diplomatic agents particularly when an opportunity arises of a conversation with a Diplomat belonging to the above states.

Those Agents accredited with the Great Powers will not fail to point out that every consideration has been shown to their interests as our choice of judges is limited to the Great Powers and that those reserved to our own choice will be chosen only from the Neutral States.

It is however well understood that if our negotiations in Europe should fail we regain our complete liberty of action as we always have declared that the choice of judges of foreign nationality is an action of our own Sovereignty.

別紙 二十年五月四日附在佛原代理公使ヘ訓令

Tokio, May 4, 1887.

Sir,

You will have received by this mail copy of a Circular which I have addressed to our Diplomatic Representatives abroad on the subject of the mode to be adopted in the choice of the judges among the different foreign nationalities.

It is scarcely necessary to point out to you that the information contained therein is of a very confidential kind and that you should excercise great discretion in this respect in your relations with the French Foreign Office. In connection herewith I should inform you that Monsieur Sienkiewicz, the French Minister, returned by the mail of 23 ultimo to France, and will probably be in Paris on or about the time you will receive this despatch. His opinions as expressed to me before

his departure are not in favour of the scheme of division of judges which we have proposed to Great Powers. In his opinion there should be a distinction made between the number of judges to be selected from France and Germany, and those selected from the Great Powers who have less interests in Japan. By his proposition the number of judges to be selected in France should be greater than those selected, for instance, in Italy, Austria, and Russia.

In fact it would tend to creat a new division among those Great Powers which we have sought to place on the same footing with each other, with the exception of England and America whose claim to a privileged consideration are founded on reasons of practicability, namely language and the interests which are represented by their preponderance in commerce. Neither one or the other reason exists in the case of France, and we would evidently seriously offend the other Great Powers by a proposal tending to establish an altogether uncalled for discrimination in the treatment of the Great Powers.

You will therefore lose no time in seeing the French Minister for Foreign Affairs and explain to him my views on the subject and if he should not have yet heard from M. Sienkiewicz you will try and predispose him in favor of my proposal, which I have reason to believe is on the point of being accepted by the other Great Powers. You will point out that excepting England and America, France is treated on the same footing as the other Great Powers (one of which has even greater commercial interests than France) and that any attempt to obtain a greater concession from us would necessarily destroy the whole combination. In such a case of course the Japanese Government would resume its own freedom of action, that is the right to choose the judges from any nationality without limitation.

As you are also accredited in Spain and Portugal, you will take some steps to prepare by means of confidential conversation with the Representatives of those Powers the ground in the sense of the Circular above mentioned.

You will point out that even if it was possible to find in their country judges with the required condition of a complete knowledge of the English language (as foreign judicial language of the Courts in Japan) it would surely complicate matters by introducing so many nationalities, whilst the guaranty sought and obtained by the new arrangements would be amply secured by the engagement of judges of as few nationalities as possible. The Imperial Japanese Government was obliged to take into account the legitimate claims of Great Britain and America in this respect, and the number of judges left to be divided among the other Powers (named in the Circular) is very limited, but if all the Treaty Powers were included, there would be scarcely more than one judge for each Power left, unless Japan gave up the few it had reserved for its own free choice.

Under these circumstances we count on the friendly dispositions of Spain and Portuga not to complicate matters which are already uery difficult of settlement. As regards Belgiuma nd Switzerland, matters are somewhat different, for as you will have observed in the Circular, we have some idea of appealing to Belgium and Switzerland, as Neutral States, for a supply of judges.

But you should only for the present in your conversations with the Belgian Minister for Foreign Affairs or with the Envoy of the Swiss Confederation in Paris be careful to mention this fact only as a scheme and add that in regard to this, we can for the present take no engagement whatsoever.

In conclusion I need scarcely point out to you that whilst in fact there has been in our scheme a difference made between the Great Powers and those states which do not belong to the Great Powers (the Neutral States excepted) you should be most careful to avoid any expressions which would make this distinction felt by the Smaller Powers in any manner offensive to their dignity.

You will in the above delicate negotiations make use of Mr. Marshall's services, whom you may, if you deem it expedient, send to Brussels to explain

matters.

The communications which you are by the above instructions authorized to make to the Government of Belgium, and to the Representatives of Spain, Portugal and Switzerland shall only take place after you have received from our legation at Berlin a notice that the negotiations are so far advanced as to permit you doing this.

一四九　明治二十年五月十日　井上　毅　ボアソナード對談筆記

改正條約案ニ關スル件

寒煖ノ挨拶終テ

ボアソナード氏　云足下近來ハ多忙ナリト察シ態ト見舞ヲ怠リタリ

余　云足下コソ頃日來外務ノ事ニ非常ニ盡力サレタリト聞ク近ロハ稍閑暇ヲ得ラレシ乎

又　云足下ノ我國ノ爲ニ盡サレタル事件ニ付其結果ハ如何

ボ　其事ナリ條約改正ハ意外ノ結局ヲ得タリ予カ感覺スル

所ニ依レハ此事若實行セラレナハ日本國民ハ再タヒ二十年前ノ變動ヲ起スナル可シト想像ス

余　云足下若シ予カ秘密ヲ守ル事ヲ信用サルヽナラハ願クハ予カ爲ニ其詳細ヲ語ラレヨ足下ノ不滿足トセラル、點ハ何々ノ條件ナルヤ

ボ　云足下ハ予カ日本國ニ於テ平素其忠勤ナルコトヲ信スルノ中ノ一人ナリ予ハ此ノ事ニ付予ノ感慨ヲ足下ニ吐露スルコトノ機會ヲ得ルヲ喜フ予ハ曾テ予ノ持論ヲ外務大臣幷ニ青木次官及シヤボルト氏ニ向テ屢々切直ニ陳述シタレトモ予ノ意見ハ一モ採用サレズシテ今日ノ結果ニ至リタルハ予ノ甚タ遺憾トシテ日本國ノ爲ニ深ク哀痛スル所ナリ予ハ又栗塚省吾氏ヲ仲人トシテ司法大臣ニ意見ヲ述ヘタレトモ司法大臣ヨリハ「其當務ニ非ス且談判ノ模樣ハイツモ筆記ニテ承知スルノミナリ」トノ意味ヲ以テ答ヘラレタリ予ハ日本ノ大臣タル人ノ「エネルヂー」ナキ事ヲ驚嘆セリ若シ歐羅巴ノ政事家ナラシメハ予カ說ニ同意ナラハ必ス奮テ內閣ニ向テ一ノ問題ヲ提出サルヽナルヘシ

予ハ自然ノ道理ヲ以テ感情トシ此事ニ付日本ノ爲ニ深ク忠實ナル意見ヲ以テ外務省ニ助言シタルカ故ニ佛國公使ヲ初トシテ各國公使ヨリ甚シキ嫌忌ヲ蒙レリ佛國公使ノ出發ノ折、予ハ新橋停車場ニ見送リタルニ佛國公使ハ別ニ臨ミ予ニ向テ苦澁ナル一言ヲ吐カレタリ、曰「足下ハ、予ニ向テ多少ノ困難ヲ與ヘタリ」ト此ノ時意太利公使、傍ニ在テ佛公使ニ向ヒ「否、ボアソナド氏ハ當然ノ理ヲ以テ日本政府ニ助言サレタルナリ」ト、謂テ予ノ爲メニ寬辭サレタリ蓋墺國意國ノ二公使ハ予ト感情ヲ同クスル人ナリ

予カ不滿足トスルハ改正ノ總テノ個條ナレトモ就中三ツノ重要ナル點ナリ

第一　外國裁判官ヲ用ヒ且組織中ノ多數トスル事ナリ此ノ裁判ハ公平ナルヘシト信スル事ヲ得ル歟其親近ナル所ニ偏庇スルハ普通人心ノ短所ナレハ通常此ノ裁判ハ日本人ノ爲ニ不利益ナルヘシ訴訟ノ件ニ付看ス〳〵不公平ノ裁判ヲ得、不利益ノ結果ヲ蒙リタル日本人ハ外國人ヲ怨ムルヨリモ寧ロ政府ノ國民ニ對シ此ノ如キ境遇ヲ與ヘタル事ヲ怨ムルナルヘシ舊條約ニ從ヘハ原告タルトキニ限リ外國ノ裁判ヲ受ケ其被告タルトキハ仍本國ノ裁判權ニ從屬シタルヲ以テ日本人ノ不利益ノ區域ハ狹隘ノ部分ニ過ギザリシモ改正草案ニ依レハ原告タルト被告タルトニ拘ラズ總テ日本人ハ外國裁判官ノ勢力ノ下ニ從屬セザルベカラズシテ其不利益ハ一般ノ部分ニ波及シタリ

余　問裁判長ハ亦外國人ナルヤ

ボ　答、草案ニ裁判長ノ事ヲ明言セズ然シナガラ外國裁判官既ニ多數ナル上ハ裁判ノ決着ハ必外國裁判官ノ所見ニ傾クナルベシ此時ニ於テ裁判長ハ其勢力ヲ恃ム事能ハザルベシ

余　又問外國裁判官ヲ任用スルノ組織ニハ年期アリテ一時ノ便法ニハアラサルカ

ボ　云十五年間ハ隨分長キ歲月ナリ今日ノ日本人民ハ稍ヤ才覺ヲ發達シタレハ十五年間ノ屈辱ヲ忍フ事ハ能ハサルヘシ縱令屈辱ヲ忍フトモ政府ハ此レカ爲ニ深重ナル怨望ヲ招キ到底舊幕ノ外國交際上ニ弱點ヲ示シタルカ爲ニ全國ノ變動ヲ引起シタル覆轍ニ倣フ事ヲ免レサル可シ

第二ハ違警罪ノミ外國人民モ日本裁判官ノ裁判ニ從フ

ト雖モ、他ハ重罪輕罪、共ニ外國裁判官多數ノ組織ナル裁判所ニ於テ裁判シ幷ニ違警罪及百圓以下ノ訴訟ノ日本裁判官ノ裁判權ニ專屬スル者モ亦彼ノ特別裁判所ニ控訴ヲ許ス事ナリ外國人民ハ通常日本裁判官ノ裁判ニ服セスシテ其上ノ裁判所ニ控訴スルナルヘシ控訴ノ場合ニ於テハ日本人民ノ爲ニ初審ニ於テ利益ナリシ裁判モ多クハ飜テ敗訴トナルノ結果ヲ招クナルヘシ違警罪ニ於テモ亦同樣ナルヘシ

第三ニハ條約ノ實行期ヨリ八個月前ニ日本各種ノ法律案ヲ以テ外國政府ニ通知スル事ナリ此事ハ草案ノ趣意ハ單ニ通知（コミニケシヨン）ニ止マリシナルヘケレトモ外國公使ハ此條ヲ以テ外國政府ノ「エキザミネーシヨン」ニ掛クル事トシテ解說シタリ卽チ日本ハ其立法ノ權ニ付外國ノ制縛ヲ受ケ左右ニ動搖サルヽノ意外ノ結果ヲ來スナルヘシ此事ハ尤不吉ナル重要ノ件ナリ予ニシテ若シ今二年間日本ノ爲ニ勤務スルナラハ此ノ法律通知ノ期ニ於テ「此ノ法律ハ日本國ノ主權ニ據リ發行スル所ニシテ他ノ外國ノ干涉ナカルヘシ」トノ確定ノ意義ヲ以テ外國政府ニ通報スヘキ事ノ意見ヲ述ヘントス

スル事能ハス日本人ノ中ノ忠實ナル人々ヲ結合シテ責テハ天皇ノ批准ヲ與ヘラレズシテ寧ロ舊條約ヲ保存セラル、事ヲ願フノ一路ヲ取ラントス、足下ハ高等ノ位地ニ在リ、且平生ノ志操ハ予ノ信用スル所ナリ本國ノ爲ニ古今未曾有ノ危急ニ際シ何等ノ盡力ヲモナサヾル乎（此等ノ言語ヲ吐クトキニハボアソナード氏ノ顏色勃然トシテ憤怒ノ色アリ）且云予ハ今日ホド激切ノ言語ヲ吐キシ事ナシ

余　云足下ノ意見ハ伊藤伯ニ話サレタル乎

ボ　云未嘗テ話サス想フニ伊藤伯ハ外務大臣ト同一意見ナルヘシ

余　云予ハ前ニ秘密ノ約束ヲナシタレトモ此事、國ノ大事ナルヲ以テ足下ノ許可ヲ得テ今日ノ問答ヲ伊藤伯ニ報道セントス

ボ　云何ノ差支モナシ

又　云足下ノ爲ニ思慮スルニ足下若シ未タ條約談判ノ明細筆記ヲ見サルナラハ伊藤伯ノ秘書官ニ請ヒ其一部ヲ借リ得テ予ト之ヲ對讀シ詳細ニ其不利益ノ點ヲ了解シテ然後ニ又予ノ意見書ヲ一讀アリ十分ニ此事ノ始末ヲ呑込ミ其上ニテ足下ノ意ヲ以テ忠告アリテハ如何

余　云其邊ハ都合次第ニスヘシ

右一段ノ說話終テ

ボ氏突然予ニ問テ云　足下ハ伊藤伯ノ「プアンシボール」ニ赴カレシ乎

予　答、偶々病氣ノ故ニ辭シタリ

又　問、鳥井坂邸ノ芝居ニハ赴カレシ乎

答　又病ヲ以テ辭シタリ

ボ氏云　足下ハ定メテ予ト同感ナル故ニ態ト辭セラレシナルヘシ予ハ近日宴會ノ席ニ行ク事ヲ好マス日本國ハ外ハ權利ヲ減シ內ハ進歩稅（アンポープログレシフ）ヲ徵收シ前途暗黑哀痛（ソンブルトリスト）ノ境界ニ沉淪セントスルノ時ニ當リ東京ノ都府ハ建築土木ト宴會トヲ以テ太平ヲ樂メリ予ハ今日ハ贅澤（リュクス）ノ時ニ非スト信スルヲ以テ各大臣ノ宴會ハ都テ之ヲ謝絕スルナリ

予ハ再會ヲ期シテ握手シ別ヲ告ケタリ

別ニ臨ミ戶外迄送リ來リ「ボアソナード」氏ハ又云　若シ伊藤伯ニ於テ予ニ面會ノ機會ヲ與ヘラルヽノ幸ヲ得ハ通辯ハ栗塚省吾氏ヲ用ヒラレタシ外務省ノ人ヲ用ヒラ

余　問、足下ハ舊條約ト新草案トノ比較ニ於テ何レカ優レリトセラル、乎

ボ　答新草案ノ舊條約ニ劣レル事甚タ著シ何トナレハ舊條約ノ害ハ區域狹少ナレトモ新草案ハ不利益ヲ一般全國ニ流セハナリ

猶此ノ外ニ擧クヘキ事アリ外國人組織ノ裁判所ハ全國八個所ニ限ルヲ以テ日本人ハ外國人ニ對シ原告タルト被告タルトヲ問ハス訴訟ノ爲ニ遠隔ノ地方ニ在ル所ノ裁判所ニ呼出サレサルヲ得ス例ヘハ沖繩ノ人民モ海ヲ越エテ長崎ヘ呼出サル、事アルヘシ、此レ亦日本人民ノ爲ニハ不利益ノ一事ナリ

余　問、然ラハ足下ノ高案ニテハ舊條約ヲ存スルニ在ルカ

ボ　答、否、予ハ刑事ハ重罪ノミニ限リ外國人ハ外國裁判ノ下ニ在ラシメ輕罪ハ日本裁判所ニ於テ裁判シ民事ニ至ツテハ何等ノ約束（コンチシヨン）モナシニ專日本裁判ノ管轄ニ歸セシムヘキ事ヲ提出シタリ

予ノ稿案ハ採用サレスシテ今日ノ結局ニ至リタルハ日本ノ爲ニ哀ムヘク痛ムヘク嘆クヘキノ極度（エキステレム）ナリ

予ハ今日ニ在リテ仍日本ノ爲ニ此ノ如キ不利益ヲ傍觀

ルヽ事ヲ望マス且云若シ仍ホ盡力ノ機會アラハ等閑ニスル事勿レト

予ハ通辯杉田氏ニ向テ秘密ノ約束ヲ懇示シテ立去レリ

右明治二十年五月十日朝

井上毅

一五〇　明治二十年五月　山田司法大臣意見書

裁判權ニ關スル件

條約改正按中裁判權ニ關スルノ部各國委員ノ會議結了シタルヲ以テ其草按ヲ閱讀シ而テ我委員ノ其間ニ立テ百方斡旋シ或ハ○晩○兎トナリ或ハ處女トナリ十六虎狼ノ如キ强敵ヲ引受ケ奇正變轉靈妙ノ動作ト堅忍ノ精神トヲ以ヲ一壘ヲ拔キ又一城ヲ落シ終ニ今日此結果ヲ成スニ至リタルハ實ニ未曾有ノ劾蹟ニシテ賞感啻ナラサルナリ然ルニ之ヲ將來實際ニ施行スルニ方リ其任重且大ナル者ハ司法大臣ナリ顯義不肖辱ク其職ニ在リ善ク既往ノ得失ヲ稽ヘ將來ノ難易ヲ慮リ廣ク各國ノ成蹟ニ徵シ遍ク內外人民ノ狀況ヲ比照シ之カ豫備計畫ヲ爲シ千難萬苦モ凌駕シ得サルヘカラス因テ左ニ維新

以降今日ニ至ル迄ノ利害竝ニ條約改正後ニ逢遇スヘキ得失ヲ列記シ對照セリ

	現今	未來
	利　害	得　失
一、外人ヲシテ公然內地ニ入リ又ハ住居シ財產ヲ有セシメサル事	彼我法律並ニ裁判所ヲ異ニスルノミナラズ領事ノ裁判ヲ受クル事	我國ノ法律ヲ外國人ニ及ボス事ヲ得ル事
二、外人ヲシテ商業ノ自由ヲ得セシメサル事	國民ニ在リテ控訴上告ハ費用ニ堪ヘサルヨリ常ニ恨ヲ呑ムノ狀アリ其名アリテ其實ナシ	泰西ノ原則ニ依リ法律ヲ制定スルヲ以テ萬機公平ニ歸スル事
三、外人ヨリ日本人ニ係ル訴訟ハ日本ノ裁判所ニ出訴セシムル事	稅則其他諸規則ノ違犯者ヲ制スル道ナシ	他國政府ノ我政權ニ立入リ法律ヲ以テ萬機公平ニ歸スル事
四、居留地外ニテ起ル事件ハ審究シ易キ事	日本人ニ名ヲ藉リ竊ニ土地其他財產ヲ所有スル事	泰西ノ原則ヲ基トスト雖其原則ハ亦限ナシ
五	金錢貸借ニ名ヲ藉リ竊ニ內地ニ雜居シ內地ノ商工業者ニ損害ヲ與フル事	名義ノ如何ヲ問ハス外人ニ關スル訴訟ハ外國法官在ノ裁判所ニ於テ裁判スル事
	司法官ヲ始メ其他ノ官吏ハ外國法官ノ爲メニ切磋セラレ奮勵スル事	外國法官多數ニ因リ國民ニ不利ナル事
	法律ノ改正容易ナラサルヲ以テ朝改暮變ノ憂ナキ事	外國人ヲ我司法官トナス事
	諸學術者ヨリ農工商ノ實業者ニ至ル迄總テ奮發興起スル事	泰西ノ原則ヲ基トスト雖其原則ハ亦限ナシ

六	居留地內ニ國標ノ及ハサル事
七	外國人ニ關スル訴訟ハ常ニ遠隔ノ裁判所ニ出テサルヲ得サル事 名勝又ハ樞要ノ地ヲ購買セラレ其他土地所有權ノ漸次彼ニ移轉スル事

表中烜ノ如ク燎然トシテ其不完全ヲ感シ且ツ不測ノ變ヲ生スヘキヲ懼ルヽ者ハ泰西ノ原則ヲ基トスルノ語ナリ其他表中ニ就キ學理ニ匡シ實際ニ徵シ其最モ深慮スヘキ者ヲ列記シ之カ救濟ノ方ヲ求メント欲ス

第一　泰西ノ原則トハ何ソヤ現今歐洲各國ニ於テ行ハルル所ノ法律ノ精神ナラン然レハ其範圍ヲ出テサル法律規則ハ泰西ノ原則トシタル者ニシテ疑ヲ容ルヘキノ限ニアラサルヘシ

譬ハ日本裁判所ニテ陪審ヲ用ヒサル事又ハ吸亞片烟ノ禁ノ如キハ泰西ノ原則ニ悖ルト爲スカ特ニ日本ニ於テハ必用ト爲スカ

豫メ前二項ノ理ヲ論究決定シ置サレハ各國皆所見ヲ異ニシ人々論旨ヲ別ニスヘシ遂ニ馬ヲ指シテ人ト云フモ則ルヘカラス宜シク會議ニ於テ議定スヘシ

第二　法律規則ノ成按幷ニ其改正按ヲ外國政府ニ通知シ外國政府若シ原則ニ適セスト爲シ其意見ヲ述フルニ際シテ外交談判ヲ以テ其適否ヲ決スル事ハ至難ノ業ニシテ殆ント爲シ能ハサル事ナラン

第一ノ場合ニ揭クル原則ナル者ノ定規アラサレハ前項ノ適否ヲ以テ判セン猶尺度ナクシテ長短ヲ測ラント欲スル如シ外交談判ハ其名ノミニシテ其實弱ハ强ノ肉タルヘシ長谷川評定官ノ報告中埃及國總理大臣兼外務大臣ヌーベルパシヤノ言ヲ載セテ云瑞典人ノ裁判官多病ニテ絕テ法衙ニ出ツル能ハス因テ瑞典政府ニ其旨ヲ通シ交換ヲ促シタルニ瑞典政府ハ答テ曰ク裁判官某ハ病人ニ非ラストノ一言ニテ如何トモスヘカラスト斯言以テ殷鑒タルヘシ又外國政府ヨリ意見ヲ陳ヘ外交談判トナリ其末雙方意見ノ合セサル時ハ如何ナル結果ヲ生スルヤ是亦會議ニテ論定スヘシ

第三　外國人ヲ以テ裁判官檢察官ト爲スニ方リ彼等純然

タル外國人ノ資格ヲ有シ日本天皇陛下ニ忠勤スヘキ宣誓ヲ爲シ得サル者ヲ以テ我司法官トナスヘカラス

因テ豫メ法律ヲ以テ（憲法制定前ナルヲ以テ）外國人ニシテ日本政府ノ高等官吏トナル者ハ其期限内ハ歸化人ニ準スル旨布告ヲ要ス

第四　原被告ノ如何ヲ問ハス外國人ニ關スル事件ハ總テ外國裁判官多數ナル裁判ヲ受ケサルヲ得サレハ國民ニ取リテ從前ノ手續ヨリ甚タ不利ナリ

廿年來實施シ更ニ不都合ヲ見サル所ノ慣行ヲ一變シ一層利益ナルカ又ハ對等ナル點ニ趣カシムルハ然ルヘキモ其不利益不對等ニ導クハ忍ヒサル所ナリ

因テ會議ニ要求シ從前ノ慣行ヲ繼續シ被告外國人ナル時ノミ外國裁判官ノ多數ヲ用ユル事ニ改正スヘシ

第五　何ノ名義ヲ問ハス外國人ハ外國裁判官所在ノ裁判所ニ訴出ツルヲ得ル事是亦國民ニ取リテハ從前ノ慣行ヨリ不幸且ツ不利益ナリ

何ノ名義ヲ問ハスト云ヘハ證據人ニテモ引合人ニテモ一人外國人アレハ無論遠隔ノ裁判所ニ出テサルヲ得ス加之外國裁判官多數ノ判決ヲ受ケサルヘカラス其權利ヲ害シ費用ヲ損スル事實ニ大ナリト云フヘシ

是亦從前ノ慣行ヲ改メス證據人引合人ノ如キハ孰ノ裁判所ニテモ關係シタル原被告人ノ出ル所ニ出頭セサルヘカラサル事ニ改正スヘキ旨ヲ會議ニ要求スヘシ

若シ閣議之ヲ容レ各國委員會議之ヲ可トシ草按ヲ改正スルヲ得ハ比較表中ノ失點ヲ減スルヲ得治外法權ヲ回復シ國民ノ幸福ヲ增加スル事期シテ待ツヘキモノナリ之ニ反シ會議之ヲ否トシ救濟ノ道ヲ得サレハ外國政府ハ他ニ一種ノ異心ヲ抱藏スル者ト假想スヘクシテ其害實ニ測ルヘカラス或ハ內亂トナリ或ハ交戰トナリ又ハ外人內政ニ關涉シ遂ニ言フヘカラサルニ至ルモ亦知ルヘカラス凡ソ人ノ事ヲナスヤ至テ難シ之ヲ評スルヤ極メテ易シ其至難ナルヲ知リ徒ラニ之ヲ評スルハ肯テ爲サス然レトモ國家榮辱ノ關スル所安危ノ岐ル所一身責任ノ重且大ナル者ハ虛氣平心以テ深究極論セサルヘカラス謹テ冀クハ

陛下親シク內閣ニ臨ミ衆議ヲ盡サシメ然後聖斷ヲ賜ヒ異日不測ノ變ニ遭遇スルモ閣議確固內外ニ對シ毫モ間隙ナク誓

テ各必死盡忠破堅排難セン事ヲ顯義味死誠恐誠恐白

一五一　明治二十年五月十九日　井上外務大臣ヨリ在歐米各帝國公使宛

裁判管轄條約案送付ノ件

送第四八二號

在外各國公使宛　　井上外務大臣

條約改正會議ニ於テ議決相成候裁判權ニ關スル條約書佛英文各壹部御廻申候條御落手有之度候也

明治廿年五月十九日

註　一四七文書別錄六井七參照

一五二　明治二十年七月十八日　第二十七回改正會議席上

井上外務大臣條約改正會議延期ノ宣言

余ハ今左ノ通知ヲ爲スノ目的ヲ以テ本會ニ對シ演述セント欲スルモ躊躇スル所ナキニ非ス然レトモ毫モ余ノ發意ニ係ラス亦曾テ豫期セサリシ事情ニ因リ帝國日本政府ハ本會ニ代表セラレタル諸政府カ今現ニ行フ所ト同一ノ權利ニ據リ裁判管轄條約ニ就テ變更ヲ加フル事ニ決定セシヲ玆ニ告陳スルハ誠ニ止ヲ得サル所ナリ然レトモ余ハ直ニ進ンテ云ハントス是等ノ變更ハ決シテ此大事業ノ基本タル主義ニシテ本會ノ已ニ決定セシ所ノモノヲ左右スルニアラサル事ハ余ノ確證スル所ナリト余ハ本日ノ會議ニ於テ日本政府ノ希望セル變更如何ヲ諸君ニ通知スル能ハス且時方ニ盛夏ニ際シ秋季前更ニ會議ヲ開クヘカラサルヲ以テ余ハ右ノ通知ヲ成ル可ク速ニ諸君ノ許ヘ牒述スヘシ

余ハ諸君ノ好意以テ該通知ヲ受領シ且ツ之ヲ本國政府ニ轉送スルニ方リ泰西諸國カ恒ニ日本帝國ニ對シ表示シタル寬大ナル公平心ヲ以テ之ヲ考察セン事ヲ諸君ヨリ慫慂セラレン事ヲ固ク信スルナリ

此書類ヲ諸君ノ熟察ニ供シ且ツ本事項ニ就キ各貴國政府判定ノ公示ヲ得ル迄ニ充分ナル時間ヲ貯ヘンカ爲メ余ハ來ル十二月一日ニ於テ次會ヲ開カン事ヲ發議ス

一五三　明治二十年七月二十日。井上外務大臣ヨリ各國公使宛

條約改正會議無期延期通牒ノ件

以書翰啓上候陳者下名者最近ノ會議席ニ於テ皇帝陛下ノ政府ハ裁判管轄條約案ニ對シ變更ヲ發議セン事ヲ欲スル旨竝ニ右發議ノ趣ハ不遠內各全權委員ニ御報道可申旨御告知申上候

右裁判管轄條約案ハ帝國內閣ニ於テ精細審議ノ上之レニ首要ナル變更ヲ加ヘ且ツ更ニ辨辯ヲ附スル事全ク必要ナリトノ事ニ決定相成候尙ホ帝國內閣ニ於テ特ニ異見ヲ抱キ候ハヽ第五條ノ約款ニ於テ日本ノ編成法典ハ之ヲ外國政府ノ檢閱ニ供シ其允諾ヲ經ヘキ趣有之處ニ候素ヨリ該條ノ文面ニテハ右ノ如キ語氣無之候得共爾後之ニ附シタル解釋ニ據レハ是レ卽チ其眞主眼ナリト內閣ニ於テ判定相成候

是ニ因テ內閣ニ於テハ日本帝國ノ面目ヲ維持スルニハ先ツ右法典ヲ編成スルニ如カスト一同決定候何トナレハ此ノ如ク法典完成相成時ハ右裁判管轄條約ヲ以テ示セル如ク法典ヲ各締盟國ノ檢閱ニ供スルノ必要無之事充分判然ナルヘシトノ事ニ有之候

右ノ次第ニ付キ下名者ハ政府ノ命ニ依リ日本全權委員ヨリ法典編成ノ結果ヲ本會ニ提出スル事ヲ得ルノ日マテ期日ヲ定メス本會ヲ延期スル事ヲ尊重ナル各全權委員ニ御告知申上候右法典編成ノ事業ヲ以テ行政及ヒ法律ニ於テ泰西ニ則ラントスルノ眞意ハ我政府ノ造次顚沛ニモ之ニ於テスル事ヲ徵彰致度候

此事業成就ト帝國開通ノ兩事ハ密着シテ相離レサル事ナレハ本會ノ從事セル大事業ノ爲メ各締盟國ノ厚意以テ此事業ヲ翼贊アラン事ヲ確信候右得貫意候敬具

明治二十年七月(二)十九日　東京ニ於テ

井上馨

各國公使閣下

一五四　明治二十年七月二十日　非英上佛露公使ヨリ外務大臣宛

條約改正會議無期延期ノ通牒ニ對シ回答ノ件

I　英公使回答

Toky

July 30th 1887

Monsieur le Ministre,

I have the honor to acknowledge receipt of your note which Your Excellency addressed to me yesterday, informing me that the Conference had been adjourned sine die.

I leave it to my Government to reply to this communication should they deem it proper to do so.

I avail myself of this opportunity to renew to Your Excellency the assurance of my highest consideration.

W. J. Plunkett

II　佛國公使回答

Tokio, le 30 Juillet 1887.

Monsieur le Comte,

J'ai l'honneur de vous accuser réception de la note que Votre Excellence a bien voulu m'adresser hier pour me faire savoir qu'Elle est autorisée par Son Gouvernement à déclarer l'ajournement de la Conférence sine die jusqu'au moment où les délégués Japonais seront en état de lui présenter ler travaux de codification actuellement en préparation.

Je vais m'empresser de porter la communication de Votre Excellence à la connaissance de mon Gouvernement.

Veuillez agréer, Monsieur le Comte, les assurances de ma très haute considération.

Sourgurel (?)

Son Excellence

Monsieur le Comte Ino-ouyé,

Ministre des Affaires Etrangères

Tokio.

註　署名者ハ代理公使ナラン

III　露國公使回答

N. 125.

Tokio, le $\frac{18}{30}$ Juillet 1887.

Le soussigné, Envoyé Extraordinaire et Ministre Plénipotentiaire de Sa Majesté l'Empereur de toutes les Russies, a l'honneur d'accuser réception de la note que Son Excellence le Ministre des affaires Etrangères de Sa Majesté l'Empereur du Japon a bien voulu lui adresser en date du 29 juillet ct., relativement à l'ajournement de la Conférence pour la révision des Traités et s'empresse de L'informer qu'il se fera un devoir d'en soumettre la teneur à l'appréciation du Gouvernement Impérial de Russie.

Le soussigné prie Son Excellence, le Ministre des Affaires Etrangères, de vouloir bien agréer l'assurance de sa plus haute considération.

Schévitch.

Son Excellence
le Comte Inouye.
etc etc

一五五　明治二十年七月二十九日　在墺上野外務大臣ヨリ帝國公使宛

條約改正會議無期延期ノ件

一　七月二十九日往電

From Inouye to Japanese Ministers in Europe.

Inform Minister for Foreign Affairs careful examination, to which draft of jurisdictional convention was submitted by the Imperial Cabinet, proved the necessity of essential modification and additional interpretations. Particular objection was taken to stipulation of Article V by which Japanese Codification is to be submitted to approbation of the foreign Powers. Although the wording of the Article is not expressed in these words, Cabinet assumes from subsequent debates that this was meant. Cabinet in this respect is of the opinion that it would be in conformity with national dignity if the laws were completed in the first instance, because this would prove that submission was unnecessary. By authorization of Japanese Government, I declared to-day adjournment of Conference sine die until Japanese Government will be able to show result of Codification. Explain to Minister for Foreign Affairs that whilst regretting the necessity of this interruption of Conference, our object is not to relinguish in the work of progress but, on the contrary, to pursue it in a manner compatible with our national dignity. If desired, leave a copy of this telegram with Minister for Foreign Affairs.

July 29, 1887.

二　七月三十日往電

From Inouye to Japanese Ministers in Europe.

Take cautious steps to make newspapers of the country to which you are accredited to represent adjournment of the Conference not in the light of a retrogressive movement of Japan but one founded on the apprehension that the projected jurisdiction scheme might, like in Egypt, injuriously affect national dignity. Therefore Japanese Government have resolved to complete first with greatest energy codification and court organization and then to negotiate with Foreign Powers for the opening of Empire.

July 30, 1887.

一五六　明治二十年八月六日　在墺上野外務大臣ヨリ帝國公使宛

條約改正會議無期延期ノ件ニ付訓令ノ件

附屬書一　裁判管轄權條約ニ對スル井上外務大臣ノ意見書
二　二十年六月一日ボアソナード提出意見書
三　二十年　月各處商務大臣提出意見書
四　二十年七月九日井上外務大臣提出意見書

外務大臣伯　井　上　　馨

河瀬(眞)特命全權公使殿
田中(不二麿)特命全權公使殿
西(園寺公望)特命全權公使殿
中(島信行)(ドイツ國ヘ轉勤)村(田保)辨理公使殿
棚(橋之助)臨時代理公使殿
九(鬼隆一)特命全權公使殿
井(上毅)臨時代理公使殿

此度條約改正會議ヲ無限ニ延期シタル事ニ付貴官ハ左ノ次第ヲ心得ラレン事ヲ要ス

本大臣等ハ昨年以來引續キ條約改正會議ヲ開キ側ラ私會ヲ催シ條約改正ノ問題ヲ討議シ殆ント言語ニ盡シ得サルノ困難ヲ當メタル末途ニ本年五月十九日附ヲ以テ貴官ニ送致シタル如キ裁判管轄條約案ヲ訂立シタリ此案ハ固(もと)ヨリ未タ雙方ノ調印ヲ經サリシカトモ各國全權委員ハ已ニ之ヲ基本國政府ニ送リテ將ニ其允准ヲ乞ハントスルノ次ニ進ミ居タリ尤モ本大臣ハ該案某々ノ約款ニ關シテハ或ハ困難ヲ生シ議論ヲ招ク可キ事ヲ豫期シ（附錄第一ニ於テ之ヲ詳ニシタル如ク）之ヲ豫防センカ爲メ只タ好機會ノ到來スル事ヲ待チ居タリ左レハ若シ果シテ此機會ヲ得テ右困難ヲ未然ニ防クヲ

ノ便ヲ得タリシナラハ此案ハ遂ニ定案トナリタルモノナル可シ

然ルニ恰モ此頃即チ五月中頃ヨリシテ朝野共ニ稍々此案ニ驚駭スルノ色ヲ見ハシ司法省元老院等ヲ初メトシ新聞紙上ニ於テモ漸ク異議ヲ聞ク事トナリ或ハ政府ハ條約改正ノ目的（我國人カ從來切望シタル）ヲ達センカ爲メ締盟國ニ過大ノ讓與ヲナシタリ或ハ第四條及ヒ第五條ノ約款ノ如キハ我國ノ面目ヲ虧損スル者ナリ或ハ第七條第十三項ノ約款ノ如キハ實施上甚タ困難ナル者ナリト議スルニ至レリ（此等異議ハ附錄第二「ボアソナード」氏カ司法大臣ニ呈シタル意見書中ニ尤モ詳ナリ）會々谷子（干城）歐洲ヨリ歸朝シ亦タ條約改正ヲ非トスルノ意見書（附錄第三）ヲ呈シタリ抑モ本大臣等ハ何故ニ我カ切望スル所ノ目的即チ治外法權ノ制ヲ廢除シ我カ帝國ヲ泰西各國對等ノ地位ニ進メンカ爲メ右等ノ讓與ヲナス事ヲ要シタルカト云フノ理由ハ具ニ本大臣カ内閣ヘ提出シタル意見書（附錄第四）ニ述ヘタリ本大臣ハ今マ此場合ニ於テ右等讓與ハ果シテ已ムヲ得サル者ナル歟否ヲ論スル事ヲ要セス只タ朝野ノ人心益々動搖シタル事ハ當時ノ事實ニシテ若シ此時ニ方リテ本大臣等右改正案ヲ必ラズ採用セン事ヲ主張シ内閣亦タ之ニ同意シタルナラバ人心激動ハ其極ニ達シ遂ニ現政府ノ危急ヲ釀シ因テ却退ノ反動ヲ生シタル事ハ殆ント疑フ可ラザル程ナリキ剜ンヤ若シ人心ノ激動不幸ニシテ一旦此極ニ至ラバ縱令ヒ右條約案ハ批准ヲ經ルトモ我政府ハ竟ニ右條約ニ於テ擔承スル所ノ約款ヲ實踐スル事ヲ得ザル可ク其結果ハ遂ニ破約若クハ條約無効ニ歸ス可カリシヲヤ

於是テ政府ハ此等内治上ノ急ヨリシテ右裁判管轄條約案ニ猶ホ多少ノ修正ヲ要スル事ニ一決シ以爲ラク若シ裁判管轄及ヒ審判手續ニ關スル事項（當然ニ國内立法ノ限内ニ在ル可キモノ）ハ總テ條約ニ關セズ之ヲ自主制定スルモノトシ該案第四條及ヒ第五條ハ（若シ其解釋ヲ誤リ其適用ヲ誤ルトキハ立法上他ノ干渉ヲ容ルヽノ虞アルモノ）ハ悉皆削除スル事ヲ得ルモノトセバ其帝國ノ面目ニ於ケルモノ大ニ相愈ル可シト而シテ政府ハ右修正ノ目的ヲ達スルガ爲メ又タ左ノ二者ノ中ニ於テ孰レカ其一ヲ擇バザル可ラザル事トナリタリ即チ（第一）ニ各國政府ヲシテ空白ノ紙ニ調印スルト同樣ノ信用ヲ我ガ改良進歩ノ勉力ニ置ク事ヲ肯ンゼシムル事即チ各國政府ヲシテ我ガ將來制定ス可キ法律ハ果シテ

何樣ノモノタル可キカニ前以テ一看セズシテ之ニ其國人ヲ服從セシムル事ヲ甘諾セシムル事（第二）條約改正會議ヲ右諸法律（帝國政府ガ多年其力ヲ泰西主義ニ從ヒ之ヲ制定スル事ニ用ヒタル）ヲ制定シ訖ルマテ無定限ニ延期スル事即チ各國政府ハ此ノ仕方ニヨリテ其自國臣民ヲシテ服從セシム可キ所ノ日本法律ハ果シテ何樣ノモノタルカヲ前以テ親ク驗スル事ヲ得可シ

斯ク政府ハ二者ノ中ニ擇ンテ遂ニ右第二ノ方法ヲ取ル事ニ決シタリ（附錄第五參看）何ントナレハ若シ我ガ政府ガ右第一ノ方法ヲ取リテ該案第四條及ヒ第五條ノ約款（各國政府ガ之ヲ目シテ若シ此條件ヲ缺ケバ全案モ亦タ無可シトナシタル）ヲ削除スル事ヲ強テ主張セシナラバ其當ニ全ク會議ノ破裂ヲ釀シタル事疑ナキノミナラズ我政府ハ殆ンド各國政府ノ實ニ能ハザル所ロ即チ空白ノ紙ニ調印スルニ類スルノ要求ヲナシタルモノトナル可カリシナレバナリ若シ不幸ニシテ一旦我レヨリ斯ニ次第ニヨリテ之ヲ破リシナラバ向後二十年乃至三十年ノ間ニ於テハ再ヒ條約改正ノ談判ヲ開ク事能ハザル可シ而シテ其間ニ於テ我ガ帝國ガ夫ノ治外法權ノ弊ヲ承ル者ハ日ニ一日ヨリ甚シキ事ヲ致ス可キナリ（附錄第四參看）然ルニ我カ政府ハ右第二ノ方法ヲ取リタルノ故ニヨリテ猶ホ從前談判ト將來之ニ關スル施設トノ間ニ於テ其關係ヲ聯屬セシムル事ヲ得タリ蓋シ此方法ニヨリテ法律ノ制定ヲ先キニスルトキハ啻ニ諸法律ヲ各國政府ニ前以テ通知スル事ヲ要セザル事トナル可キノミナラズフテ現改正案中ノ他ノ約款モ亦タ不用トナルモノ多カル可シ是レ我ガ政府ガ無定限ニ會議ヲ延期シタル所以ナリ左レバ此度條約會議ヲ延期シタルハ惟タ法律制定ヲ條約改正ヨリ先キニセント欲スルガ故ノミニテ決シテ我ガ政府ガ從前執リタル政略ヲ變シタルガ故ニアラズ剜ンヤ其ノ此ニ托シテ鎖國固陋ノ政略ニ復セント欲スルガ如キノ事ヲヤ我ガ政府ハ此ヨリ益々鋭意シテ專一ニ其力ヲ法律ノ制定ニ用ヰ成ル丈ケ短近ノ時日ノ間ニ於テ其功ヲ終ル事ヲ勉メ以テ我カ帝國ヲ外國人ニ開得ルノ日ヲシテ甚タ遠キニ在ラザラシム可シ本大臣ハ猶ホ之ヲ反覆センニ帝國ヲ全開スル事ハ我ガ千挫萬折ニ遇フテ撓マザルノ志ナリ但ダ今ヤ我ガ政府ハ斯志ヲ達スルニ付其尤モ順當安全ノ路ヲ取ル事トナシタルノミ即チ條約改正ヲ先キニシテ泰西主義ニ從ヒ諸法律ヲ制定スル事ヲ以テ其約款ノ一トナシタル代リニ法律制定ヲ先キ

ニシテ而シテ後チ條約ヲ改正スルノ手續トナシタルノミニシテ惟タ此ノ先後ノ異ニ過キザルナリ

故ニ貴官ハ能ク右ノ旨趣ヲ領シ貴駐劄國朝野ノ有力ノ政事家及ヒ官吏其他有名ノ士ニ接スル毎ニ其談話ノ公私ニ關ラス充分ニ意ヲ用ヒ力ヲ盡シテ右ノ情由及ヒ意思ヲ明ニスル事ヲ勉メ決シテ彼ヲシテ我ガ此度ノ事ヲ誤解シ以テ反動却退ノ政略ヲ取リタルモノヽ如クナサシムル事勿レ何ントナレバ若シ不幸ニシテ彼等ヲシテ斯ル誤解ヲナサシメンニハ我カ條約改正ニ關スル將來ノ施設ハ忽チ其路ヲ塞カル可ケレバナリ且ツ貴官ハ貴官ノ勢力ヲ駐劄國ノ新聞紙ニ用キ之ヲシテ善ク我カ此度ノ毒實ヲ載明セシムル事ヲ勉ム可シ我カ政府ハ實ニ成ル丈ケ速ニ我帝國ヲ開ク事ヲ欲望スルナリ此欲望ハ決シテ前後ニ於テ變スル事アラズ貴官ハ須ラク成ル丈ケノ力ヲ盡シテ駐劄國有力家ガ此度ノ事ヲ誤解シテ日本ハ昔日ノ政略ニ復セント欲スル者ナリト云フガ如キノ惑ヲ抱カシムル事ヲ防ギ之ヲシテ充分明白ニ我ガ此度條約會議ヲ延期シタルハ惟ダ現改正案ノ如ク甚ダ我ガ立法上及ヒ司法上ノ施設ヲ束縛セラルヽ事ヲク自ラ我ガ帝國ヲ開ク事ヲ得ルノ日マデ暫時延引シタルニ過ギザルノ事實ヲ悟了セシメ且ツ右ノ時日モ亦タ甚ダ遠キニ在ラザル可キ事ヲ信ゼシムル樣斡旋ス可シ

斯ク本大臣ハ此度延期ノ始末ニ關シ成ル丈ケ之ヲ言明スル事ヲ勉メタレトモ然ルニ紙上ニ於テ詳ニ其事情ヲ盡スハ終ニ做シ得可キ事ニアラズ故ニ本大臣ハ「バロン、ヴヲン、シーボルド」ニ密命ヲ帶ビシメ之ヲ各國ニ派遣スル事ニ決シタリ（訓令ハ後ニ附ス參看セラレヨ）貴官ハ同氏ヨリ之ニ關スル細大ノ事情ヲ聽取セラレ須ラク同氏ト成ル丈親密ノ關係ヲ結ビ何事ニヨラズ同氏ヲ助ケテ之ヲシテ其帶往スル使命ヲ果ス事ヲ易スカラシメヨ但シ此使命ノ事ハ秘密中ノ秘密トナシ尤モ其漏洩ヲ防ク可シ若シ此事洩ルヽトキハ本大臣ガ將來ノ計畫ヲ敗了スルノ懼アル可シ故ニ貴官ハ善ク之ニ注意シ公使館員ト雖モ成ル丈ケ右使命ノ事由ヲ曉ラサラシムル事ヲ要ス可シ

右申進候也

註　附錄第五級込ナシ

バロンシーボルトヘノ訓令ハ後出一五七文書

附屬書一

二十年八月六日附在歐米各帝國公使宛往信附屬

裁判管轄權條約ニ對スル井上外務大臣修正意見

何月何日集會ニ於テ余ハ日本政府ノ爲メニ修正案ヲ提出スルノ權理ヲ留取シタリ余ハ今マ右ノ權理ニヨリ閣下ニ裁判管轄條約修正案ヲ送呈スルノ榮ヲ有ス願クハ閣下之ヲ貴政府ニ通知セン事ヲ此修正案ハ帝國政府ノ緊急トスル事情ニ起因シタルモノニシテ決シテ本條約案基礎トスル大主旨ト相觸ルヽモノニアラス故ニ余ハ閣下カ之ヲ貴政府ニ送致シテ宜シク其同意アル樣勤メラレン事ヲ冀望ス余ハ閣下ニ告ク可シ日本政府が以テ須要トスルノ修正ハ實ニ此案ニ於テ之ヲ竭盡シタリ然レトモ左ニ列スル諸點ニ付明白ニ之ヲ定ムルノ勞ヲ以テ敢テ閣下ヲ煩スル余カ甚タ痛心スル處ナリ原案第四條及第五條ヲ以テ日本法律ノ外國人ニ適施スル事ヲ得ルト否トハ其泰西主義ニ適合スルカ否ニ在リトセラレタリ然ルニ斯ル泰西主義ト云フ語ノ用例ハ萬國公法ニモ未タ曾テ見サル所ニシテ普通ニ認了セラレタル明白ノ定義ヲ有セス是ヲ以テ日本政府ハ之レニ關シ將來萬々一ノ疑ヲモ生セサル樣其意義ヲ定ルヲ以テ甚タ重要ノ事トス

夫レ歐洲各國ニ於テモ曾ニ國各々其法ヲ異ニスルノミナラス一國内ト雖モ遠隔ノ地方ニ於テハ頗ル互ニ異同アリテ眞ニシテ其法ヲ同クスルハ僅々小地方内ニ限ルモノハ是レ實ニ立法上固有ノ性ニシテ殊ニ家族法及ヒ財產相續法等ニ於テ然リトス是故ニ所謂ル泰西主義ヲ以テ我帝國將來立法ノ標準トナス場合ニ於テモ決シテ之ヲ解シテ其特ニ歐洲各國中一國ノ樣式ニ倣フ事ヲ謂フモノナリトナス事ヲ得ス豈啻タ然ラサルノミナラン日本政府ハ該約款ハ只タ左ノ定義ヲ有シ左ノ意味ヲ言明スルモノト信ス卽チ日本帝國ノ法律ハ歐洲各國カ立法全體ノ本トナス所ノ精神ニ照ラシテ制定セラルルモノト爲ス可シ日本政府ハ此ノ解釋ヲ以テ會議中彼此ノ間ニ於テ屢々言明シタルノ意見ト全ク一致スル事ヲ信スルナリ然ラハ則チ日本帝國將來ノ立法ハ恰モ泰西各國ノ法律ノ如ク充分ニ帝國一種特別ノ要用及ヒ帝國ノ情況其歷史上ノ由來幷習慣法ヲ（譬ヘハ家族法、相續法若クハ阿片取締法ノ如キ）參酌ス可シ

日本政府ハ前述意味ニ隨ヒ該約款ヲ履行スル事ヲ勉ム可シ然レトモ他日或ハ日本政府ハ本條約ノ効力ヲ生セシムルガ爲メ善ク此約款ノ條件ヲ履行シタルヤ否ト云フガ如キノ問題ヲ生セン事モ亦タ未全ク其必無ヲ保ス可ラス斯ル萬一ノ事、卽チ各締盟國ガ日本將來立法ノ泰西主義ニ合フタルカ

否ニ關シ五ニ其意見ヲ異ニス可キ事ハ固ヨリ萬々之レナカル可キ筈ナレトモ然ルニ亦タ以テ竟ニ發シ得サルノ事トナス事ヲ得ス若シ萬一ニモ斯ル場合ヲ生シ一方ニ於テ某締盟國ニ對シテハ此度改正ノ條約其効力ヲ有スルモノトナリ他ノ一方ニ於テハ他締盟國ニ對シテハ効力ナキモノトナランニハ

（第一）　此條約ヲ承認シタル締盟國ハ或ハ改正條約ノ最惠國條款ニ付左ノ如キ釋解ヲ主張ス可シ卽チ右締盟國ハ其臣民ヲシテ改正條約ノ許與スル諸權理及ヒ特權ニ加ヘテ吏ニ此改正條約ヲ承認セサル他ノ締盟國ノ臣民カ現行條約ニ因テ從前情態ノ儘ニ許與セラレタル諸權理及ヒ特權ヲ享受セシムル事ヲ請求スル事モアル可シ

又他ノ從前ノ情態ヲ保チタル締盟國ハ現行條約ノ最惠國條款ヲ執リテ其臣民カ從前享受シタル諸權理及ヒ特權ノ上ニ吏ニ此改正條約ヲ承認シタル他締盟國臣民ガ之ニ因テ享受スル諸權理及ヒ特權ヲ許與セラレン事ヲ請求スル事モアル可シ

（第二）　假リニ最惠國條款ハ前述ノ如ク其說ヲ牽强シ得ラレストスルモ若シ締盟國中ノ若干國ハ新條約ヲ有効ト承認スル場合ニ於テ他ノ若干國ハ從前ノ情態ヲ保チ得ルモノトスレバ後者ニ屬スルノ臣民ハ仍ホ舊稅則ヲ以テ其貨物ヲ輸入スル事ヲ得ル側ラ前者ニ屬スルノ臣民ハ新稅則ニ因テ高率ノ稅ヲ拂ハサル可ラサルモノト成ル可シ是レ豈ニ我國輸入商業ノ上ニ於テ自然ニ反スルノ變態ヲ釀致セサル事ヲ得ン哉

斯ル不公平ナル結果ノ隨生ス可キ萬一ノ事ヲ預防スルハ泰西各國ニ於テモ猶ホ我政府ノ之ヲ冀望スルガ如クナル可シ故ニ日本政府ハ之ニ關シ左ノ如ク承知セラル可キ事ヲ信シ且ツ欲望ス卽チ我法律ノ善ク泰西主義ニ適合スルカ否ノ問題ニ付若シ各締盟國ノ間ニ於テ其意見ヲ異ニシ遂ニ締盟一國若クハ數國カ改正條約ヲ無効ナリト宣言スル場合ニ遇ハヽ日本政府モ亦何ノ締盟國ニ向テモ該條約ヲ實踐スル事能ハサル可シ斯ク此點ニ於テハ彼我俱ニ其利益ヲ同フスルモノナレハ余ハ之ニ關シ彼此共ニ便ニシテ且ツ將來ノ誤解ヲ防止ス可キ協議ヲ遂ケ得ル事敢テ難事ニアラサル事ヲ信ス故ニ余ハ敢テ前述ノ主旨ニ從ヒ宣言書ヲ作ル事ヲ請ハント欲ス卽チ若シ締盟一ケ國若クハ數ケ國ガ改正條約ヲ無効ナリト宣言スルトキハ日本政府ハ因テ締盟國總體ニ對シ該條約ヲ實踐スルノ義務ヲ免ル可シ此宣言書ハ條約調印ノ時ニ於テ本條約ニ附シ本條約同樣ノ式ヲ以テ彼我雙方ニ於テ之ヲ批准スル要ヲ要ス

現行條約ニシテ右改正條約ニ因リ其効力ヲ繼續セサル以上ハ此改正條約期限經過ノ後ニ至リ日本政府ハ充分ニ自主行爲ノ權理ヲ復ス可キ事卽チ外國人ニ對シ裁判權ヲ行ヒ及ヒ海關稅則ヲ設クル事等ニ付自主行爲ヲ得ル事勿論ト雖トモ若シ此事實ヲ明白ニ記載シ萬一ノ疑ヲモ容レサル樣ナス者ナランニハ日本政府ハ大ニ之ヲ滿足ト爲ス可シ

以上述ヘタル諸點ニ就キ何等ノ樣式ヲ以テ雙方ノ協議ヲ載明ス可キカト云フノ問題ニ至テハ尙ホ後來ノ商量ニ讓ル可シ

註　本修正意見ハ發表ノ機會ヲ得ザル儘ニ改正會議ハ無期延期トナリタルナリ

附屬書二

二十年六月一日ボアソナード提出意見書

裁判權ノ條約草按ニ關スル意見

井上外務大臣時代　條約改正會議　一五六

閣下予ニ命スルニ條約改正ノ部分トナルヘキ裁判權ノ條約草按ニ付テ意見ヲ述ヨト予ノ幸榮之ニ過キサルナリ

閣下如斯予ヲ信任スルノ厚キハ感佩ノ至リナリ是レ特リ予ヲシテ鄙見ヲ述フルノ榮ヲ賜フヲ以テ此ク云フニ非ス佛國ノ利益日本ノ利益ト相背馳スルノ問題ニ於テ予ノ公平無私タルヲ疑ハサレハコソ予ヲシテ此貴問ニ係ルヲ得セシメタルナリト思ヘハ愈閣下ノ信任ノ厚キヲ感スルナリ

又鄙見ヲ述フルニ閣下予ニ充分ノ自由ヲ付與セラレシヲ感謝ス予モ亦尊意ニ乖カス公平ニ此自由ヲ使用スルノ覺悟ナリ

予ハ此草按ヲ採用セラレタル日本委員ノ勳功ト性質ニ對シテハ深ク之ヲ尊重スルニモ不拘論題ノ重要ナル點ニ於テ其事業ヲ駁擊スルノ不得止ニ遭遇スヘシ而シテ之ヲ駁擊スルノ任タルヤ危險窮迫ナリト信スル日本ノ利益日本ノ面目日本ノ安全ナル三者ヲ先ニシ一私人ノ好惡ヲ顧ミルノ暇ナキノ地位ニ立ツニ非サレハ殆ント堪ユヘカラサルノ任ナリ

先ツ最初ニ注意スヘキ事アリ裁判權條約ノ事タル今日ニ於テハ大ニ捗取タルニモセヨ未タ彼我相方ノ間ニ一ノ約定ナキ事是ナリ卽チ豫定ノ調印モ又未必ノ調印モ未タ交換セサ

ルナリ

外國公使等ハ全權公使ノ名稱ハ帶フレトモ各其政府ヨリ特別ノ許可ヲ得ルニ非レハ裁判權條約案ニ調印スルノ權アリトハ信セサルヘシ既ニ公使等ハ特許ヲ其政府ニ請求シタリ日本ノ委員モ亦內閣ノ許可ヲ待タス調印スルノ念慮アリトハ思ハレス調印濟シタレハトテ尙條約全體ニ對スル天皇陛下ノ批准ヲ得ルヲ要ス右ノ次第ナレハ予ノ今日述ル所ノ意見駁撃ハ未タ遲シトセス無用ニ非ラサル事ヲ得ヘシ日本ニ居留スル外國人ノ爲メニ草按ノ定ムル如キ特許裁判權ヲ設クルニ於テハ前ニモ述シ如ク日本國ノ利益、面目、安全ノ三目的ヨリ見ルニ日本ノ位置ハ現今ヨリ一層惡シト斷言スルヲ憚ラサルナリ

今ヨリ追次論述スルニハ卽此三者ヲ目的トス

第一　日本ノ利益ト云フ條項ニハ外國人混交裁判所ノ管轄ノ事ヲ論スヘシ卽チ訴訟人ノ迷惑ニシテ其私權ヲ害スル慘カラス及國庫ノ負擔ス可キ費用ノ莫大ナル事ヲ論スヘシ

第二　日本ノ面目ト云フ條項ニハ外國人混交裁判所ノ構成權限ヲ論シ又法律及法律ノ改正ヲ豫メ外國政府ニ通知スル事ヲ論スヘシ

第三　日本ノ安全ト云フ條項ニハ國民ノ憤怨ヨリ內亂ノ生スル恐レアル事及外國ノ干涉ノ危害ナキヲ保タサル事

予ハ草按ノ不充分ナル點ヲ摘示スルニ止マラス末文ニ於テ如何ニ之ヲ修正否置換ユ可キモノナルヤヲ論スヘシ

第一章　草按ノ總論

予ハ現今日本ニ於テ居留外國人ノ享有スル特權ノ何モノタルヲ論スルノ必要ヲ見ス今日ノ治外法權ナルモノハ外國人ノ裁判官ハ領事ナリ領事ハ日本ニ於テ其本國政府ノ名ヲ用ヒテ裁判權ヲ行ヒ日本ニ於テ其本國ノ法律ヲ適用スルヲ云フ

此有樣ニテハ日本ノ面目ハ汚サル然レトモ日本ノ利益ハ害ヲ蒙ル其些少ナリ何トナレハ外國人ノ居住シ得ル所又土地ヲ所有シ得ル所ハ日本帝國ノ甚タ狹隘ナル區域內ニ過キス外國人ハ內地ニ於テ商業ヲ營ムヲ得ス內地ニ旅行スル事アルモ公然之ヲナスニアラス卽外國人ニ對シテハ鎖國ナリ國ヲ開カサルナリ是レ外國人ノ日本法律ヲ守ラス日本裁判官ニ服サヽル所ヨリ生スル至當且必要ノ結果ナリ

又外國人ノ治外法權ノ利益ヲ有スルト云フモ單タ外國人被告人ノ位置ニ立ツタル場合ニ限ルナリ

之ニ反シ外國人原告トナリ日本人被告トナルノ場合ニ於テハ其爭ヲ制スル法律ハ日本ノ法律ナリ又法律ヲ適用スルハ純粹ナル日本ノ裁判官ナリ而シテ其手續及ヒ言語モ日本ナリ

今新條約案ノ制定スル所ヲ見ヨ

先ツ日本全國ヲ外國人ニ開ク事（第一條）而シテ國ヲ開クハ特リ外國人旅行ノ爲ノミナラス居住ノ爲ナリ商業ノ爲ナリ土地所有ヲ許ス爲ナリ（第二條）日本ハ毫厘モ貯フル事ナク讓與シ能フモノハ讓與スルナリ

其返禮トシテセメテハ外國人日本人ノ法律及日本ノ裁判所ニ服從スル乎如何

外國委員ハ此返禮アリト主唱シ日本委員ハ返禮アル事ト信セルニ似タリ

然レトモ此法律タルヤ外國政府ノ承諾（英語アクセプタンス）アルヲ要シ此新裁判所タルヤ外國人ノ多數ヨリ組織スヘキナリ事實既ニ如此而シテ尙ホ是レ日本法律ナリ日本裁判所ナリト謂フ可キ歟

此點ハ日本ノ面目ニ關スルヲ以テ第二項ニ於テ論スヘシ先ツ日本ノ利益ヨリ論セン

第一項　日本ノ利益

訴訟人ノ私益ト其政府卽チ國庫ノ公益トヲ別タサルヘカラス

第一　訴訟人ノ利益ヲ害スル事左ノ三箇ノ點ニ在リ

（一）日本人被告トナルトキ卽チ外國人ヨリ告訴ヲセラレシトキ固有ノ裁判官（ジユヂユナチユレール）卽チ日本ノ裁判官ノ裁判ヲ受クルノ權ヲ失フ事是ナリ此權タルヤ今日ニ於テハ裁判所階級ニ拘ラス訴訟事件ノ大小輕重ヲ問ハス日本人ノ享有スル所ナリ

（二）日本人原告タルトキモ又被告タルトキモ甚遠隔ナル地ニ往クニ非レハ訴訟ヲ爲スヲ得サル事是ナリ何トナレハ外國人多數ノ始審裁判所ハ八ケ所ニシテ外國人交涉ノ事件ニ付テハ其人ノ資格原告人被告人參加人ノ何タルヲ問ハス之ヲ審判スル爲メ帝國ノ八裁判區畫ニ分ツヲ以テナリ

（三）日本人ハ外國語ヲ以テ訴訟ヲ爲サヽル可カラサル事之レナリ而シテ訴訟人ハ訴訟ノ如何ニ受理サレ審判サレ裁判サレシカヲ知ラスシテ手續ノ爲メ代言人ノ

爲メ莫大ナル費用ヲ拂ハサル可カラス

此等ノ困難ヨリ生スル所ノ訴訟人ノ怒氣ハ豫知スヘキナリ特リ訴訟人ノミナラス訴訟ニ關係ナキ者ト雖トモ此有樣ヨリ生スル結果ヲ目擊スル者ハ必スヤ心ニ不滿ヲ抱クヤ必セリ

第二　新裁判所ヲ設定スルニ付テハ國庫ノ負擔容易ナラサルヘシ何トナレハ外國裁判官ノ俸給ハ甚昂貴ナル事疑ナケレハナリ英國ノ裁判官ハ其國ニ於テ貴重ノ俸給ヲ受クルヲ以テ外國ニ出ルトキハ一層高キ俸給ヲ請求スルハ必然ナリ而シテ獨、米、白、佛、伊、及其他ノ裁判官ハ假令其本國ニ於テハ薄給ナルニモセヨ日本ニ於テハ英國ノ裁判官ヨリ寡額ノ俸給ヲ拂フ事ハ爲シ能ハサルヘシ

此項ニ付テノ費用ノミニテモ稅關條約案ノ新稅ヨリ生スル豫算收入ノ純益ヲ以テ支辨スルヲ得サルヘシ

如此過度ナル外國裁判官ノ俸給ト同シ裁判所ニ在ル日本裁判官ノ俸給ト懸隔ノ甚シキハ最モ苦シキ次第ナリ且日本裁判官ハ日本人ノミニ係ル事件ヲ審判スルヲ得レトモ外國裁判官ハ此勤務ナキヲ以テ日本裁判官ヨリ閑隙多キ理ナリ是レ尙ホ俸給ノ差異不權衡ヲ一層大ナラシム

國庫負擔ノ重キハ單ニ裁判官ノ給料ノミナラス而モ巨大壯麗ノ裁判官殿ヲ建築セサルヘカラス外國人ニ向テ常ニ親切丁寧ナル日本ハ定メシ外國人カ裁判シ外國人カ裁判サル、裁判所ノ事故隨分贅澤ニ之ヲ設置スル事ヲ希望スルナラン利益ノ點ニ付キ終ニ一言セン條約ニ從ヘハ通辯及譯官ノ給料ハ裁判所ノ負擔ナリ其通辯譯官ハ英語ノ爲ノミナラス尙ホ新裁判所ニ於テ使用ヲ許可セシ總テノ外國語ノ爲メニモ之ヲ供ヘサルヘカラス（第七條ノ十三項B GHヲ見ルヘシ）

第二項　日本ノ面目

外國ノ裁判官ノ多數ヨリ編制セル裁判所ハ日本ノ裁判所ナリト謂フハ是レ則チ假言ナリ日本國民ハ此假言ニ惑ハサルヘシ

日本ノ國庫ニテ外國裁判官ノ給料ヲ拂ヒ且高ク拂フタリトテ此人等ヲシテ日本ノ國民トモナサス又帝國ノ臣民トモセシニ非ス若シ外國ノ裁判官多數ヨリ組織セルニモセヨ日本ノ裁判所ナリト云ハ假言ニアラス眞實日本ノ裁判所ナリト做スモノアラハ草案ハ何故單純ニ外國裁判官ノミニテ此裁判所ヲ編制セサリシカ何故此裁判制度ヲ無期年間許サヽリシカ

外國委員ノ此事ヲ請求セサリシハ故アルナリ好シ又之ヲ請求セシニモセヨ日本委員ノ之ニ合意セサリシハ必定ナリ假令外國裁判官ノ給料ハ外國政府ニテ拂フヘキモノトスルモ日本委員ハ此事ヲ承諾セサリシヤ必定ナリ

又說ヲナスモノアリ曰ク外國ノ裁判官ト雖トモ裁判ヲ下スニハ日本天皇ノ名ヲ以テス故ニ日本ノ裁判ナリト然シ天皇ノ名ヲ以テ裁判スルハ最モ貴尊ナル式ナレトモ是レ單タ式ニ過キス書類ノ稱號銘酒ノ名稱ハ其書其酒ノ有セサル品質ヲ與ヘサルナリ

抑日本天皇ノ名ヲ用テ事ヲ執ルニハ日本帝國ノ臣民タル事ヲ要サヽルヤ如何

日本天皇ハ外國人ヲ其使臣ニ親任セラルヽカ如何外國人タルモノ日本ニ於テ官職ニ就ク事即チ官ノ權力ノ一部ヲ行フ事ハ今回ヲ始トス實ニ日本ハ二十年以來國家ノ進步ヲ促ス爲メ多クノ外國人ヲ雇ヒタルハ他國ニ於テ其例ヲ見サル程ナレトモ今日迄ハ陸軍ニセヨ海軍ニセヨ行政ニセヨ敎育ニセヨ雇外國人ニハ顧問又ハ敎師ノ名稱ヲ附スニ止マリ決シテ固有ノ權ヲ與ヘス日本帝國ノ臣民ニ對シテ直接ニ官民ノ

關係ヲ有スヘキ公ノ權力ヲ與ヘタルノ例ヲ見ス

何レノ國ニ於テモ官ニ立チ官權ヲ行フハ國民ノ特權ナリ公權ナリ

裁判官ハ一國ノ尤モ貴重ナル官ナリ其職タルヤ官權ノ尤モ貴重ナル施行ノ一ナリ此官職ヲ以テ外國人ニ委任スルヲ得ス

我輩知ル所ノ例外ハ立會裁判所ニ關シテ埃及國ニ存ス然レトモ埃及國ハ日本ノ如ク獨立不羈ノ國ニ非ス土耳格ノ附庸國ナリ而シテ土國已ニ埃及國ノ秩序ヲ保持スルノ力ナク英國ノ占有ヲ妨クルニ至ラス故ニ埃及國ノ例ハ決シテ倣フヘカラス若シ日本ヲシテ埃及ノ制ニ似スルノ議アラハ是レ實ニ國家ノ凶兆ニシテ向來該國ノ如ク萬國ノ侮辱ニ罹ルハ期スヘキナリ

此點ニ付テハ次項ニ於テ更ニ論ストシ唯之ニ一言セントス

獨立ノ帝國ナル土耳格ハ今外國政府等ノ日本ニ向テ要求スル所ニ均シキモノハ其國ニ於テ容サヽリキ且之ヲ要求スルト假想スルモ必ス承諾セサルヘシ

外國人混合ノ裁判所ト純粹ナル日本裁判所トノ間ニ權限ノ區別ヲ置シ事アリ是レ又日本ノ面目ヲ害スル事僅少ナラス

純粹ナル日本裁判所（卽チ區裁判所）ハ細少ノ事件ノ外審判スルヲ得ス其權限民事ハ百圓以下刑事ハ拘留十日以內科料ノ拾圓以下ノ違警罪ニ止マルナリ以テ日本裁判官ノ獨立及學識ヲ信用スルノ僅少ナルヲ徵スルニ足ル然レトモ委員等ハ日本裁判官ノ終身官ナル事ヲ知リ其登庸ハ嚴肅ナル試驗ニ依ル事ヲ知レリ

尙ホ言フヘキ事アリ今玆ニ問題トナレル區裁判所ノ權限ナル些少ノ事件ハ始審終審上告ヲ問ハス純粹ナル日本裁判權ノ管轄ニ屬スルモノト人皆信スルナラン

然ルニ然ラス區裁判所ノ裁判ニ對シ地方裁判所ニ控訴センストスルトキハ外國人混交ノ裁判所ニ之ヲ爲サヽルヲ得ス又法律ノ乖戾ノ爲メ上告ヲナサントスルトキハ外國人混交ノ控訴院（大審院ニ代リ）ニ之ヲ爲サヽルヲ得ス

玆ニ至リテ條約草案ハ日本面目ヲ汚スノ外普通ノ條理ニ乖クト云ハサルヲ得ス如此制定ヲ要求セシ人モ亦之ヲ承諾セシ人モ共ニ法律家ノ敬服セサル所ナリ

是ヲ以テ純粹ナル日本裁判所ノ權限ハ假令巳ニ僅少ナルニモセヨ到底確實ナリトノ信ヲ得サルナリ其證據ニハ日本ノ訟訴人日本裁判官ノ前ニテ敗訴セシ場合ニ限リ外國裁判官ノ管轄ヲ免ル事ヲ得ルナリ

之ニ反シ日本人區裁判所ニ於テ勝訴ナルトキハ對手外國人ノ控訴ノ爲メ遠路ヲ旅行セサルヲ得ス何トナレハ前ニ言ヒシ如ク日本全國ニ僅々八箇ノ外國人混交裁判所アルノミナレハナリ

該裁判所ニ至レハ英語ニテ諸事ヲ辨セサル可ラス從テ手續ノ困難アリ時日ト金錢ヲ徒費スルノ患アリ農家ノ細民訴アルモノヽ如キハ實ニ憫然ノ仕合ナリ

日本ノ利益及面目ノ毀損ハ以上論セシ如クナレトモ抑モ最初ノ頃ニハ此損失ニ對シテ差引勘定ノ立ツ筈ナリキ是レ他ニ非ラス日本ニ居住シ又ハ土地ヲ所有スル外國人ニ對シテ日本法律ノ適用是ナリ民法商法、行政法、加之刑法ヲモ外國人ニ適用スル權ヲ有セリ

草案ヲ見ルニ日本政府ハ左ノ三箇條ヲ約セリ

第一　泰西ノ元則ヲ基トシ帝國裁判構成及現今起案ニ依ル五成典ヲ制定スル事（第四條）

第二　條約批准ノ後二年內ニ此法典ヲ頒布スル事（第五條）

第三　此法典實施八ケ月前卽チ批准交換ヨリ十六ケ月內ニ其正條ヲ英文ニテ外國政府ニ通知スル事（第五條）

第一ノ約束ハ最モ履行シ易シ日本政府ハ條約改正ヲ待タス旣ニ泰西ノ法典ニ則トリ實驗ヲ參酌シテ法律制定ニ着手シタリ

第二ノ約束ハ大早計ナリ日本委員ノ此事ヲ認諾サレシハ驚クヘキナリ元來法律ノ起案ハ家屋ノ建築ニ於ケルカ如ク最長期ヲ定メ其期限內ニ成効ヲ約シ得ルノ事業ニ屬セス最短期ヲ定ムルニ如カサルナリ卽起案ニ充分ナル期日ヲ定ムルヨリ寧ロ必要ナル期日ヲ定ムルコソ至當ナリ

日本ノ法典ハ條約批准ヲ延期スルニ非サレハ批准後十六ケ月內ニ成効セサルヘシ然レトモ第十三條ニ從ヘハ批准ハ全權委員調印後一年內ニ之ヲ爲スヘキ筈ナルヲ以テ批准ヲ延期スルニハ先ツ調印ヲ延期セサル可カラス但シ全ク調印ヲ爲サヽレハ格別ナリ

第三ノ約束ハ最モ重大ナル困難ナリ

外國政府ニ日本ノ法律ヲ通知スルノ目的及其通知ノ性質ハ何ナル歟

條約ニ何等ノ事ヲモ言ハス

初度ノ議事中第五條ニ係ル議事錄（九、十一、十）ヲ見ルニ法律ヲ通知スルニ用ユヘキ國語ノ事ニ付キ議論アリタル際三回

左ノ說ヲ爲セシモノアリキ

「外國人ハ條文ヲ解シ得サル法律ヲ遵守スルノ義務アルヲ得ス」（議事錄第九ノ十一葉）

「何國ノ語ニテ外國人ハ日本ノ法典ヲ閱シ得ルヤヲ知ルハ甚切要ナリ」（議事錄第十ノ六葉）

「英語ニテ通知ヲ爲スニハ八ケ月ハ必要ナリ」（議事錄第十一ノ葉）

是レ當然ノ氣付ナリ又半ハ公務上ノ談話ニ於テモ「外國裁判官日本ノ新法ヲ適用スル前之ヲ學ヒ之ヲ識ルニハ充分ノ時間ヲ要スヘシ云々」ノ說モアリタリ

此時迄ハ外國委員ニ於テ日本政府ヲ信シ日本ハ外國人ニ對シ日本法律ヲ適用スル事ヲ得ヘク又日本ハ泰西ノ元則ニ則トルノ約束ヲ確守スルモノト見做セリ何トナレハ此時マテハ日本法律ノ泰西ノ元則ニ適フヤ否ノ鑒査（コントロール）若クハ吟味（ヴィフィカシヨン）ヲ爲ス等ノ事ヲ論セサリキ然ルニ三月十八日ノ會議席ニ於テ突然監獄規則ノ通知ノ事ヨリ議論起リ外國公使等ハ皆ナ日本法典ノ通知ニ全ク他ノ目的ヲ指示セリ曰ク「法典ノ通知ハ日本政府法典成効ノ約ヲ遂ケシヤ否ヲ調査スルノ爲ニアラス其法典ハ能ク泰西ノ元則ニ適合セシムルノ約ヲ守リ

シヤ否ヲ調査スルノ手段タラサル可カラスト」此解譯ノ意議ヲ擴張シテ左ノ說ヲ主唱セシモノ多カリキ「若シ泰西ノ元則ニ基クノ約束ヲ精密ニ履行セサルニ於テハ條約ハ假令批准ノ後ト雖トモ無効タルヘシ」豪毅ニ且明瞭ニ左ノ陳述ヲ爲シタリ「我政府ハ此通知ヲ爲スハ單ニ外國ニ告知スル爲メナリキト解セリ」（議事錄第廿三ノ十四葉）

此點ニ付テ外國委員ハ一同ニ異議ヲ唱ヘ條約ハ實施ノ前早既ニ破裂セントセリ

玆ニ最モ奇ナルハ外國委員等ノ發セル一言ナリ泰西ノ元則ニ適合スルヤ否ノ目的ニテ日本ノ法律ヲ鑒査スル權アリト云フ如キ說ヲ主唱シツヽ外國委員ハ日本委員ニ對シ立法ノ事項ニ付テハ日本國ノ獨立不羈ノ權ヲ崇敬スト明言セリ自語相違ノ最モ甚シキモノナリ

伊太利國ノ委員ハ他ノ場合ニ於テ日本ノ委員ヲ贊成セシモ此點ニ於テハ全ク日本委員ヲ離レ同僚ノ解釋說ニ基キ決定案ヲ出セリ（議事錄第廿三ノ十八葉）

日本第一委員ハ此點ニ付公然ノ陳述ハ次會ニ延期スルコトヲ請求セリ

人皆條約改正會議ハ破裂ニ傾キタリト信セリ加之ニ日本政府ハ會議ヲ撤スルノ意アリ單ニ口實ヲ待ノミナリト謂ヒシモノアリキ外國委員等一般ニ畏懼ノ念アリタルハ疑フヘカラス彼等日本ニ爲セシ要求ハ既ニ極度ニ達セシヲ覺知セシナラン然ルニ日本ヲ愛スル者（少クトモ予ハ）是レ實ニ日本ノ爲メニハ此不當ナル且承諾スヘカラサル位置ヲ脫スルノ好機會ナリト思ヘリ

不幸ニモ其事ナカリキ而テ予ハ日本第一委員ノ招待ニ應シテ日本ノ國權ト面目ヲ回復スル爲メ至當ノ陳述書ヲ起草シ其論旨能第一委員ノ意見ニ恰好セルニ似タルモ十五日間會議ヲ開カス其間外國委員中ノ最モ勢力アル人等ト相談アリテ終ニ陳述書ヲ朗讀セス三月三十一日ノ會議ニ於テ（議事錄第廿四）日本委員ハ殆ント謝辭ヲ述ヘテ伊太利國委員ノ議案ヲ承諾シタリ此議案タルヤ法典通知ノ性質ヲ變更セルモノナリ

是ニ於テ此通知ハ日本第一委員ノ明言セシ如キ告知ニアラス承諾若クハ認可ノ請求トナリクリ

故ニ泰西ノ元則適否ノ論アリ議合ハサルトキ條約ハ批准ノ後ト雖トモ「實施ニ至ラサルヘシ」（議事錄第廿四ノ二葉）

此等ノ論點ノ定マリシ後ニ於テ既ニ必用ナキモ日本委員ハ

言語ヲ改メ「日本帝國政府ノ爲メ立法ノ事項ニ付テハ自治ノ權利ヲ自由ニ且充分ニ施行スル權」ヲ（同上二葉）回復セリ

若シ玆ニ云ハント欲スル所日本人ノミニ行ハル法律ニ對シテハ外國政府ノ干涉スヘキモノニアラスト云意ナレハ是レ勿論ノ事ナリ外國人ニ及ハサル法律ナレハ外國政府ハ干涉スルノ念慮毫モアル筈ナシ然レトモ日本ノ法律ハ先ツ外國政府ニ於テ此法ヲ調査シ認諾シ承認スルニ非サレハ外國人ニ適用スルヲ得スト云フ以上ハ日本政府ハ立法ノ事項ニ付キ自治ノ權ナキナリ

故ニ日本委員ハ前ニ外國委員ノ爲シタル自語相違ヲ更ニ反對ニ主唱スルモノナリ

外國委員ハ日本ノ立法權ヲ毀害シツヽ日本ノ自治ヲ崇敬スルト云ヒ日本委員ハ國權ノ毀害ヲ承諾シツヽ自治ノ權アリト主唱ス外國ノ承諾及認諾ヲ經ヘキモノハ特リ帝國ノ法律ニ止マラス此法律ノ變更モ亦實施八ケ月前ニ通知セサルヘカラス（第五條）

日本第一委員ハ法律ノ變更ニ付テハ帝國政府ハ外交官異議アルニ拘ラス之ヲ實施スルノ權アリト主張セリ（議事錄第廿四ノ三葉）

然ルニ英國委員ハ日本法律ノ變更ニ付テモ外國政府之ヲ鑒査スルノ權アリト論シ獨リ佛、伊國委員ノ贊成ヲ得タルヨリ終ニ日本委員ハ自己ノ解釋ニ反スル英國委員ノ解釋ヲ承諾セリ（同上七葉）故ニ日本法律ヲ外國人ニ適用スルニ付キ得ル所ヲ以テ日本ノ利益日本ノ面目ニ付キ損失スル所ヲ相殺スルトハ云フ可ラス何トナレハ法律ノ通知ハ反テ日本ノ面目ヲ毀損スル一ノ多キヲ加ヘタルナリ而シテ此毀損ハ最モ重大ニ最モ國民ノ感動ヲ惹起スルノ虞アルモノナリ

第三項　日本ノ安全

條約草案ハ日本ノ利益日本ノ面目ヲ毀損スルヲ以テ勢ヒ國民ノ不滿ヲ來タスノ虞アリ

今日ニ於テハ國民未タ該草案ニ付キ確乎タル事ヲ識ラス今ヨリ六ケ月前倫敦ニ於テ英獨議案ヲ公告シ日本ノ英字新聞ニモ之ヲ揭載シタリ（日本新聞ニ揭示セシヤ否ヲ知ラス）シカ甚シク公衆ノ感動ヲ起サヽリキ何トナレハ該草案ハ眞ノ未定稿ニシテ其ノ結果ノ如キハ日本政府ノ決心剛強ナルト軟弱ナルトニ從ヒ好結果トモナリ惡結果トモナルヘケレハナリ

然レトモ日本國ノ利益及其面目ノ保護ハ國民一々日本ヲ代

表ス委員ニ任シテ餘念ナキナリ又英、獨、二國ハ此事業ニ付テ日本ノ計畫ニ助力ヲナスヘキ好意ヲ表シタリト信セシムルモノアリ條約會議ノ最初ニ於テ英獨二國ノ全權公使ハ尋常ナレハ條約決定ノ後ニアラサレハ與ヘサル所ノ帝國最高ノ榮譽ナル賞典ヲ得タリ

日本政府ハ今日草案ノ公布ヲ忌ム事ト予ハ信スルナリ是レ他ナシ草案能ク國民ノ滿足ヲ得ルヤ否ニ付キ疑アルヲ以テナリ而シテ予ノ見ル所ニテハ是得策ニアラサルナリ

政府若シ國民ノ利益ト面目ノ爲メニ一步ヲ進メタリト認ムルニ於テハ其進步ノ基本ナル草案ヲ國民ニ知ラシメテ可ナリ

政府若シ思慮ノ善良ナルニモ拘ラス次第ニ退步シ議場ニ敗北ヲ取リタルニ於テハ敢テ損害ノ不治病トナルヲ待タス輿論ノ贊助ヲ得豫定ノ調印ヲ拒絕スルニ然カス二箇ノ場合孰ニテモ今日公然ト國民ニ草案ヲ知ラシメテ可ナリ

然レトモ今日之ヲ公衆ニ知ラシムルニ於テハ政府ノ反對者此機ニ乘シ國亂ヲ來タスノ危險ナキニアラス然トモ早晩之ヲ公布セサル可ラス而シテ刊行ノ自由今日ヨリ寬ニ駁擊ノ論鋒今日ヨリ尖キノ時ニ當リ之ヲ公告セシニ比セハ今日之

ヲ公布スルノ危險ハ稍尙ホ小ナラン若シ夫レ全權委員ノ調印濟タル後反亂ヲ避ケンヲ欲シテ批准ヲ拒ム如キハ實ニ重大ノ事ナリ而テ一旦批准ノ濟タル上ハ損失危害救正スル能ハサルナリ何トナレハ日本ハ海外十六ケ國ニ對シ拘束セラルヽヲ以テナリ

國權ヲ損スル事既ニ救治スヘカラサルニ至レハ國民ノ之ヲ感スル事稍薄カルヘシト思フ可ラス帝國ノ臣民中憂國忠君ノ者ハ外國ニ對シテ君主ノ獨立ヲ毀損シタルノ罪大臣ニアリ許スヘカラスト主唱スヘシ

日本法律改正ノ效ヲ奏シ之ヲ帝國ニ實施スルノ日ニ至リ外國人ニ對シテハ未タ之ヲ行フ能ハス通知ノ爲メ八ケ月ヲ待チ默諾ニモセヨ其認諾ヲ待ツノ事情ヲ國民ノ見ルニ於テハ其憤懣ノ氣一層強キヲ致スナラン

自今三年ノ內ニハ日本ハ國會ヲ有スヘシ其議員タル者ハ概ネ從順軟弱ナルモノト假想シ得ルモ又自由主義ノモノナキニアラサルヘシ而シテ其論旨ノ國民ヲ感動スルカノ新聞紙ノ比ニアラサルヘシ

國民ノ心ニ憤懣アリ外國人ニ對シ之ヲ發表スルノ危險ナキヲ期スヘカラス外國使臣ヲ侮辱スルモノナキヲ保タス外國

政府ハ其國民ヲ保護スルヲ口實トシ日本ノ隙ヲ窺ヒ國權ニ干涉スルノ機ヲ索メテ日本獨立ノ安危ニ關スル問題ヲ惹起スノ虞アルヘシ

此時ニ於テハ軍艦ヲ增加シ兵備ヲ盛ニシ海防ヲ嚴ニスルノ必要アルヘク從テ財政困難ヲ來シ終ニ獨立自治ノ國體ヲ失フニ至ラハ是卽チ前ニ論セシ如ク埃及國ノ位置ト同一ナリ

今ヲ距ル二十年前外國人ノ交通ヲ許シタルヲ不當トシテ革命ノ亂ノ起リシナリ

今日外國人問題ニ付キテ國亂ノ起ルトキハ其危害一層大ナルヘシ何トナレハ倒スヘキ幕府ナク　天皇ノ威權ニ嚮ヲ及ホスノ恐アリ

予ハ今ヨリ以上陳ル如キ災害ヲ未發ニ豫防スルノ方法ニ付テ鄙見ヲ述ントス

第二章　變更ノ見込

既ニ成リシモノヲ攻擊スル人ハ將サニ其爲ス可キモノヲ指定ス可シ是レ當然ナリ

若シ夫レ事業今日ノ如ク進步セサルニ於テハ救正ノ途容易ニシテ更ニ之ヲ一變スルト云フ如キ過激ノ方法ヲ用フルニ

及ハサルナリ日本ノ委員ハ內閣ニ近キヲ以テ議事困難ノ際外國委員ノ抑壓甚シキ時ハ內閣ノ意見ヲ問ヒ更ニ答フヘシト云フテ可サリキ而シテ內閣ニ相談スレハ外國委員ニ對シ更ニ抵抗スル力モ得可ク又一ニハ自己ノ責任ヲモ盡セシナリ

日本委員ハ內閣ニ相談スル代リニ英獨議案ノ立案者ニ相談セリ而シテ此人等ハ外面ヨリ見ルトキハ左ナキモ實ハ日本ノ敵手ナリ

日本委員ハ顧問外國人ニ其意見ヲ問フノ榮譽ヲ賜ヒシ事アレトモ其說ヲ採用セス予委員ノ招待ヲ辱フセシ時ハ必ス我良心ニ問ヒ今日ノ如ク諸點ニ付テ毀害ヲ受ケタル日本ノ利益及日本ノ面目ヲ救ハント欲シテ充分ノ意見ヲ述タリ然而テ予ノ意見ハ了解サルヽト雖モ採用サレサルヲ見一ハ喫驚シ一ハ悲嘆セリ

單ニ一回日本委員ハ予ノ意見ヲ取リ外國委員ノ說ヲ排擊セル事アリ夫レ死刑ニ處セラレタル外國人ニ特赦ヲ許ス事項ニ係レリ此事項ニ付テモ驚タルハ外國委員ノ主唱セシ說ナリ尙又驚キタルハ日本委員ノ之ヲ議サシメシ事ナリ

草按中不都合（デフロラーブル）ナル箇條多クハ既ニ廢棄サレタリト雖トモ尙

存スルモノ少シトセス

若シ日本委員英獨議按ヲ採用スル前予ノ意見ヲ述フルノ榮ヲ賜ヒシニ於テハ今日ト雖モ請フ所ノ變更ヲ請ヒシナラン不幸ニモ英獨議案ハ千八百八十六年六月十五日ニ於テ採用セラレタリ而テ予ノ之ヲ識リタルハ漸ク同年八月ニシテ裁判所構成法取調ノ委員トナリシトキナリ而シテ此時ト雖モ該案ニ付意見ヲ問レシニ非ス唯裁判構成法ノ之ニ抵觸セサル爲メ參考トシ示サレタルナリ

此時ニ於テモ亦今日ニ於テモ予ノ變更ヲ請ハント欲スルモノ左ノ如シ

第一　外國人混交裁判所ノ權限ハ外國人民刑ノ被告人タル場合ニ限ル事

是レニテモ尚ホ外國ニ幾歩ヲ讓ルナリ予ノ充分ナル考ヲ謂ヘハ外國人ハ（現今條約規程外ノ地ニ於テハ）民事商事及ヒ行政ノ訴訟ニ付キ始審控訴上告ノ別ナク又被告人タルトキト雖モ純粹ナル日本裁判ニ服從スル事ヲ予ハ欲スルナリ

第二　外國裁判官ヲ置ク事ハ控訴院（七ケ所）及ヒ大審院ニ限ル事從テ始審ニ於テハ被告外國人純粹ナル日本裁判所ノ管轄ナル事

是レ外國人ノ保護ヲ剝クニ當ルト云フ者アラン決シテ然ラス外國人始審ニテ勝訴ナルトキハ夫ニテ可ナリ始審ニテ敗訴スルトキハ外國裁判官前ニ控訴スルヲ得ヘシ此如ナストキハ外國人ノ爲メ日本ヲ八始審裁判所ニ區分スルノ必要ナク從テ遠路ヲ往キ冗費ヲ負ヒ困難ニ逢フ如キ日本訴訟人ノ迷惑モナク又外國裁判官ヲ多人數食フ如キ重大ナル國庫ノ負擔ヲ免ルルナリ

此仕組ニ依レハ民事ニ關スル細小ノ訴訟（百圓以下）及違警罪ハ始ヨリ終マテ卽チ區裁判所ニ於テ始審地方裁判所ニ於テ控訴控訴院ニ於テ上告ヲ審理スルハ總テ日本裁判官ノミトナスヘシ

第三　原告被告ヲ問ハス裁判ノ一段階ヲ越ヘ最初ヨリ控訴院ニ訴ヘ一時ニ始審終審ノ裁判ヲ受クルヲ得セシムル事

此方法ハ日本委員ニ向ヒ說明シタリ加之ス伊、澳兩國公使ノ贊成ヲ得タリ予ハ尚ホ此方法ヲ以テ特リ外國人ノ特權トナスヘカラサルヲ論シ日本人相互ノ爭ニモ之ヲ適用スヘシト主唱セリ此方法ニ付テハ格別

ノ是ト云程ノ異議ナク反テ訴訟人ノ爲メニハ費用ト時日ヲ節約スルノ大利益アリ

第四　檢察官ハ悉ク皆日本人タル可キ事

草按ニハ外國人ニ係ル刑事ニ於テハ檢察官外國人タルヘシト云フ條アレトモ是レ甚不當ナリ外國委員ハ檢察官ノ性質及職權ノ何モノタルヲ知得セサルナリ檢察官ハ裁判所ニ對シ自國ノ政府ヲ代表シ其機關トナルモノナリ恰モ代言人ハ訴訟人ノ代理タリ機關タル如キナリ

第五　法律及法律ノ變更ヲ豫メ通知スルハ日本ノ第一委員ノ論セシ如ク外國政府ニ告知スル爲メノミナル事

若シ日本ノ國權ヲ損スル事ナク此通知ヲシテ稍大節ナルモノトナス事ヲ欲セハ佛國委員ノ云ヒシ如ク（此時ハ未タ眞理ノ中ニ在リシ時ナリ）「通知ノ用ハ日本ノ法律ヲ外國人ニ適用スル前之ヲ知ラシムル（コンネートル）ニアリ卽チ『何人ト雖トモ法律ヲ知ラスト見做サレス』ト云元則ヲ證明スルニアリ」ト云フヲ得可シ

通知ノ爲ニハ實施前六ケ月ニテ充分ナル事

其他ニ條約批准後法律編纂ヲ終ル爲メ十八ケ月ノ猶豫アルヘシ

茲ニ通知ノ事アルヲ以テ更ニ今外國政府ノ法律通知ノ此大問題ヲ提出シ論セントス

外國委員等ノ日本ニ命セシ通知ニ付テハ既ニ其不當ヲ述タレトモ尚ホ駁擊スヘキ點夥多シナリトス然レトモ假ニ該委員等ノ解釋ニ從フトモ左ノ困難アルヲ如何セン

第一　外國委員ノ欲スル所ハ此通知ニ依リ其政府日本ノ法典能ク泰西ノ元則ト適合スルヤヲ確認シ得ルニアリ然ルニ日本ノ法典ハ其元則ニ全ク適合（コンホルム）スルヲ得ス

先ツ泰西諸國ニ於テ鴉片ノ製造輸入ニ對シテ刑罰アリヤ若シ英國政府此點ニ付日本ノ刑罰（以テ前ニ比スレハ餘程寬ニナリタルニモ不拘）ヲ爭ハヽ如何

又日本法律ニハ刑事ニ陪審ノ制ヲ許サス又公用土地買上規則ニモ陪審ヲ許サス若シ此等ノ陪審ヲ許セル國（泰西ニ多シ）ヨリ其國民ノ爲メ日本ニ此制ヲ設ケラレン事ヲ請求スルトキハ如何

又金錢ノ貸借ニ付キ泰西諸國ハ利足自由ノ元則ヲ許セリ日本ニテハ利足自由ノ弊害アルニ拘ラス此元則ヲ採用セサル可ラサルヤ

此等ノ點ニ付日本ヨリ外國政府ノ認諾ヲ請求スルニ當リ外國政府ハ之ヲ拒絶セサル可シトハ必シ難シ若シ認諾セサルニ於テハ日本政府莫大ナル金ヲ費シ國ヲ開キ新裁判所ヲ組織シタルノ事業一朝ニシテ水泡ニ屬スルナリ是レ實ニ許容ス可ラサル事ナリ

第二　今玆ニ或ル國ハ日本ノ法律ヲ承諾シタルニ他ノ或ル國ハ條約會議ニテ附與セル權利ヲ使用シテ之ヲ承諾セスト假想セン

第二ノ國トノ關係如何又第一第二ノ國相互ノ關係如何外國委員ハ此重大ナル困難ニ付議席ニ於テ一言モ發論セス又此難問ノ起リシ場合ニ處スル方法モ豫定セサリキ

日本委員ハ此處ニ思慮ヲ止メ異議ヲ述ルノ根據トシテ此難問ヲ提起スルコソ緊要ナリキ陳述書ノ案中第一章ニ於テ既ニ此兵器アル事ヲ提示シタリキ

前條ニ述ル如キ不同意ノ國アリタルトキハ其結局如何一國或ハ數國ノ不同意アルカ爲メ他ノ同意セル國ノ條約ヨリ得ル所ノ利益ヲ失ハシムル事ヲ得ルカ

又一方ニ於テ不同意ノ國ハ條約ノ要件ヲ守ラスシテ日本開國ノ利益ヲ享有シ得ルカ又此國ハ治外法權ノ維持ヲ主張シ該權ヲ拋棄セル國ノ利益ヲ要求シ得ルカ

草案第十二條ハ此諸項ヲ許スニ似タレトモ如此キ不條理ノ甚シキ結果ヲ生スルノ請求ヲ爲スモノナキコソ希望ス可キナリ一國正當ノ理由モナク特リ條約ヲ脫シテ其責ヲ負ハス其利ヲ占ムルヲ得可キトハ實ニ不正ノ極ト云ハサルヲ得ス

第三　日本ノ法律泰西ノ元則ニ適フヤ否ニ付キ深ク信用ヲ置カサル外國委員ハ如何ニ第十一條ヲ解釋スルカ其不信ノ心情ト該條ノ精神ヲ如何ニ調和セシムルカ

第十一條ノ定ムル所ニ從ヘハ條約批准ノ後直ニ雜居セント欲スル外國人ハ日本ノ民事裁判權ニ服從スルニ於テハ雜居スルヲ得可シトアリ

附言玆ニ日本ノ裁判權トアルハ卽チ日本ノミノ裁判所ヲ指稱スルナリ外國人多數ノ裁判所ヲ指シテ日ク裁判所ト見做サヽル識據ナリ

雜居ヲ許サレシ外國人ハ特リ刑事ニ付テハ日本裁判權ノ外ナリ何トナレハ其國法若クハ條約ヲ以テ定メタル刑法ノ外他ノ刑法ニ服從スルノ自由ヲ有セサレハナリ故ニ二年間ハ其國法其領事裁判ニ服スルモノト知ルヘシ

然リト雖トモ民事商事及行政ノ訴訟ニ付テハ外國ノ委員其

國民ノ利益ニ關シテ恐ルヽ所ナキヤ然ラハ此日本法律ハ野蠻若クハ苛毒ノ法ニアラスヤ然ラハ此日本ノ裁判官ハ無議（ママ）若クハ使役サルヽモノナラスヤ

二年ノ時期ニ先タチテ其信用ヲ與フル所ノ外國人ニ關シテハ條約ノ實行ヨリ如何ナル結果ノ生スヘキヤ其外國人ハ更ラニ條約ノ適用ニ入ルヘキヤ其外國人ハ外國人混交裁判所ノ管轄ニ屬スヘキヤ是レ眞ニ怪異ニシテ且ツ倫理（ママ）ニ適セスト云フヘシ

此外國人ハ常ニ純粹ナル日本裁判所ノ管轄ニ屬シテ他ノ外國人ト異ナリタル位地ニアレハ又等シク怪異ナリト云フヘシ

然レハ此條約ノ草案ハ支牾牴觸決スヘカラサルノ困難ヲ載セタル稀有ノ文書ナルヘキノミ

是正理及自然ノ條理外ニ在テハ唯專横亂暴及ヒ雜淆ノミナルコトノ至良ナル證ナルヘシ

此第十一條ニ付テハ毫モ討議論難アリタリト見ヘス若シ余カ未タ其議事錄ヲ一讀セサル所ノ第二十五回ノ會議ニアラサルヨリハ

若シ日本ノ委員カ此第十一條ヲ熟考シタルニ於テハ爲ニ條約ノ半ヲ省略スルヲ得タルナルヘシ卽チ總テ民事商事及ヒ行政ノ事件ニ付テハ日本ノ法律及裁判管轄ハ外國人ニシテ日本帝國ニ雜居スルヲ得タルノミヲ以テ當然其外國人ニ適用サルヘキナリ日本政府ハ之ニ付キ別ニ條約ノ要ヲ有セサリキ

日本政府ハ日本ノ法律及ヒ裁判所ニ服從スルヲ承諾スル者ニハ國內ニ入ル事ヲ許シタリキ

條約ノ他ノ半部ニシテ獨リ必要ナルモノハ刑事ノ法律及裁判管轄ニ屬セル獨（ママ）リ之ニ付テハ一時又ハ單ニ控訴（ママ）ニ關シ外國人タル裁判官ヲ立入ラシムヘキ事アルノミ

以上ヲ論決スルカ爲メニ余ハ草案全部ヲ排斥シ全ク其新ナルモノヲ更ニ起草スヘキ事ヲ勸告セス

草按全部ヲ排斥シ全ク其新ナルモノヲ更ニ起草スルハ最モ可ナルヘキヤ必セリ然レトモ斯クスルトキハ日本委員及ヒ外國委員ヲシテ共ニ不快ノ意ヲ懷カシムヘシ

然レハ余ハ草按ノ十三箇條ニ付キ緊要ナラサル細節ハ之ヲ措キ其重（ママ）モナル變更ヲ勸告スヘシ

草按ニ爲スヘキ變更

第一條第二條及第三條ハ草按ノ通

第四條ハ刑事ノ二法典（刑法及治罪法）ニ通知ヲ限ル事

但此通知ハ告知ニ止ルヘシ

第五條ハ八ケ月ヲ六ケ月ニ短縮スル事（以前ノ如ク）

第六條ハ新裁判所ノ管轄ヲ刑事ニ限ル事且ツ之モ單ニ控訴（控訴院）及上告（大審院）ニ限ル事英語ヲ保存スル事

減輕セラレサル死刑ニ關スル第十八項ヲ保存スル事

第八條ハ檢察官ナク

第九條ハ草案ノ通

第十條ハ草案ノ通

第十一條ハ草案ノ通

第十二條ハ條件ナクシテト記セスシテ同一ノ條件ヲ以テト記スル事

第十三條ハ草案ノ通

結論

達スヘキノ目的ハ草按ニ付キ大ナル變更是ナリ然レトモ其君主ニ調印スル權ヲ請ヒタル外國委員ヨリ最早一歩ヲモ讓ルヘキ事ヲ希望スヘキニアラス

然レトモ内閣ニ請ハサルヘカラサルモノハ草按全部ノ拋棄

卽チ棄却ナリ

右ニ付キ最モ穩當ナル方法ハ外務大臣躬ラ之ヲ請ハルヽニアルヤ明ナリ

此方法ハ内閣中ニ毫モ爭權、分離、辭職、ノ結果ヲ生セス何トナレハ勝者モナク又敗者モアラサレハナリ

日本第一委員其人ニシテ躬ラ其參與シタル事業ヲ躬ラ難駁スル以上ハ内閣中誰アリテ之ニ對シ言ヲ發シテ攻擊スル者アルヘカラス

予ハ素ト日本ノ第一委員ニ此意見書ヲ呈セント欲シタルナリ然レトモ此意見タルヤ既ニ之ヲ陳述シ右委員長及ヒ其同僚タル次官ニ達シタルモ其効ヲ奏セサリシヲ以テ更ニ予ヨリ陳辯スルモ採用スヘキ事由アリト觀察セラルヽノ幸機ナカルヘシ

之ニ反シテ若シ此意見ニシテ外務大臣ノ同僚中其職務上草按ヲ討議スルカ爲メ最モ權アリ最モ管轄ナル人ニ至當ナリト見ヘ又其同僚タルヤ日本ノ第一委員ノ親友ナルニ於テハ此第一委員ハ其事業ノ瑕瑾アル所及ヒ其事業ノ固キ（ママ）爲メニ生シ得ル憂フヘキノ結果ヲ會得シテ躬ラ草案棄却ノ發意ヲ爲スヘキヲ承諾セラルヽアラン事ヲ希望スルヲ得ヘシ

日本ノ第一委員カ其内閣ノ同僚ニ對シテ左ノ如クニ陳ヘラルヽハ實ニ其人ニシテ高見アリト云フヘシ諸君ハ外國政府ノ委員ト我日本國ノ利益ヲ討議スルカ爲メニ十分ナル擧動ノ自由ヲ我國ノ會議委員ニ任與スル事ヲ欲シタリキ然ルニ會議中我等ハ外國委員ニ歩ヲ讓ラサルヲ得サル事往々ナリキ何トナレハ我等ハ特ニ我日本ノ法律ヲ外國人ニ適用スル事ニ至ラン事ヲ欲シタルカ故ナリ然ルニ最後ニ至リ外國ノ委員ハ外國政府ニ爲ス我法律ノ通知ニ付キ我日本ノ威嚴ヲ傷フヘシト我等ノ認ムル趣旨及ヒ程度ヲ附セン事ヲ主張セリ然ル以上ハ我等躬ラ草按全部ヲ拋棄セン事ヲ勸告スルナリ

外國委員カ其事業ニ調印スルノ免許ヲ其政府ニ請フニ際シ我等ハ此權ヲ我等ニ拒絶セン事ヲ諸君ニ請フナリ

外國政府ノ委員カ我等ノ豫見スルヲ得サルノ懼アル不信用ヲ我國ニ對シテ表示スル以上ハ我日本ハ未必條件付ノ條約ヲ爲ンヨリ寧ロ我國ノ法典ヲ完了シ之ヲ頒布及ヒ實行スルノ時ヲ待チ而テ其時ニ到リ雙方互ニ事狀ヲ十分ニ了知シ加之ナラス今日ニ異ナル條件ニシテ且完全ナル同等ニ近接シタル條件ヲ付シテ締約スル甚簡易ナルニ如カス而テ我等ハ

二年内ニ我刑事及ヒ民事ノ法律ニ外國人ノ循フヘキ事及ヒ民事、商事、及行政事件ニ付キ階級ノ別ナク又外國人ノ被告人タルト原告人タルトニ別ナク我裁判所ニ於テ外國人タル裁判官ノ立入ヲ許スヘキハ唯我刑法ヲ適用スヘキ時ニ限リ又此外國人タル裁判官ノ立入ルヘキ裁判所ハ單ニ控訴院及ヒ大審院ニ限ルヘキナリ

若シ日本ノ第一ノ委員ヨリ此發論ヲ爲シタルトキハ此發論ハ内閣ニ於テハ一致シテ之ヲ認容セラルヽヤ疑ナシ

夫迄ハ此事ニ付キ外國委員中ノ誰タルヲ問ハス之ト私ニ些少ナル討議ヲモ爲スヘカラサルヤ言ヲ俟タス日本委員カ常ニ其便益ヲ失フタルハ蓋シ外國委員中ノ者ト私ニ討議ヲ爲シタルニ依ルナリ

内閣ニ對スル第一委員ノ發論ハ其決議ニ到ルマテハ之ヲ秘密ニ措カサルヘカラス

日本ノ第一委員カ内閣ニ此發論ヲ爲スニ至リタルトキハ是レ第一委員ニ取リテ失敗ヲ爲シタルニアラス却テ外國ト爲スヘキ將來條約ニ關シ國ノ信用ヲ受クヘキ新ナル一原因トナルヘシ

若シ之ニ反シテ第一委員ヨリ草案ヲ認許セン事ヲ内閣ニ發

議シ其發議ニシテ拒絶セラルヽトキハ該委員ハ内閣ヨリ辭セサル事ヲ得サルニ至ルヘシ

若シ又内閣ニ於テ草案ヲ認許スルトキハ草案ヲ攻撃シタル者ハ内閣ヨリ辭スルヲ得サルニ至ルヘシ日本ノ爲メニ國辱ナリト發言セシ草案ヲ内閣ニ於テ認許シタルトキハ之ヲ攻撃シタル者ハ内閣ニ止マル事難キカ如シ又其同僚ヨリモ一層重キ責任ヲ負フヘキナリ何トナレハ其同僚ハ草案ヲ認容シテ國辱ト爲ルモノト認メサル者ナルヘケレハナリ余ハ草案ノ棄却ハ日本ノ第一委員ノ發議ニ出ツル事最モ希望スヘキ事ナリト決論ス然ルトキハ内閣ハ毫モ分離スルニ至ラス又日本ハ向來ニ於テ甚タ恐ルヘキ内閣ノ交迭ヨリ生スル不幸ヲ免カルヽヲ得ヘシ

千八百八十七年六月一日東京ニ於テ

ゼ、ボアソナード

附屬書三

二十年　月農商務大臣谷干城ノ伊藤總理大臣宛提出ノ意見書

註　提出ノ日附ハ伊藤家文書ニヨレバ七月三日ナリ

干城命ヲ奉シ歐米ヲ視察シ本邦將來ノ事ヲ思フテ憂慮ニ堪ヘサルモノアリ茲ニ聊鄙見ヲ陳述シ以テ内閣諸公ノ清覽ニ供セント欲ス然レトモ思フ所多クシテ述ヘントスル所繁ク

一朝一夕ノ能クス可キニ非サルヲ以テ先ツ其大要ヲ書スルノミ夫道能ク之ヲ用ヰル時ハ百里ノ地以テ獨立ス可ク以テ殷富强盛ナル可シ希臘瑞西白耳義ノ如キ是ナリ若シ能ク之ヲ用ヰサルトキハ千里ノ地敵國ノ爲ニ役セラレ衰頽傾覆ヲ免ルヽ能ハス印度波蘭土耳其ノ如キ是ナリ故ニ國家ノ大鈞ヲ秉ル者豈深ク愼マサル可ケンヤ蓋邦家施政ノ事案タルヤ遠大ヲ期シ周匝愼密ヲ加ヘ以テ其方鍾ヲ定メサル可カラス而シテ事ニ緩急ノ別アリ業ニ輕重ノ差アリ緩ナレトモ重大ニ急ナレトモ輕少ナルモノアレハ又最此ニ注意セサル可カラサルナリ今ヤ干城我國百事百業ノ中ニ就キテ之ヲ考フルニ論ス可キモノ實ニ多シ而シテ最重ク且最急ナルノミナラス興廢存亡ニ關スルモノアルヲ見ル何ソヤ條約改正其一ナリ

條約改正ハ維新以來當局者ノ夙夜從事シテ十五六年ノ星霜ヲ經ルモ未其功績ヲ見ル能ハサリシ所ナリ然ルニ近者傳ル者アリ曰ク多年國人ノ心ヲ苦メ思ヲ焦シテ熟望シタル條約改正モ略其局ヲ結ヒ今ヤ締盟諸國皆將ニ治外法權ヲ廢シ我カ法律ニ服從セントスルノ氣運ニ向ヘリト豈國家人民ノ慶賀ス可キノ事ナラスヤ然レトモ又聞ク所ニ因レハ曰ク我カ

從來ノ法律規則ハ外國人ニ不適當ナルモノ多ケレハ外人ノ服從セサルハ固ヨリ其所ナリ故ニ務メテ外人ニ適當ナル法律規則ヲ作リ以テ外人ノ歡心ヲ買ハント欲スト嗚乎此說ヲシテ果シテ眞ナラシメンカ干城ハ我カ國政ヲ目シテ獨立ノ精神無キモノナリト謂ハサルヲ得ス何トナレハ法律規則ナルモノハ一國ノ建國歷史及人民ノ風俗習慣敎法等ヨリ發生造作セルモノニシテ畢竟スルニ自國ノ安寧幸福ヲ保全セントスルノ意ニ外ナラス而ルニ今外人ノ爲ニ此法律規則ヲ更革セントスルアラハ獨立ノ精神ナキニ非スシテ何ソヤ抑我カ法律規則ニシテ不善ナルモノアラハ之ヲ改正スル事最希望スル所ナリ唯建國歷史ニ暗ク習慣風俗ヲ殊ニセル者ニ協議シ習慣風俗ヲ殊ニセル者ニ諮詢シ習慣風俗ヲ殊ニセル者ノ意ニ滿ツルノ法律規則ヲ改制シ以テ其歡心ヲ需メント欲スルアラハ是則獨立ノ大權ナル立法ノ範圍ニ他人ノ干涉ヲ許スモノニシテ國家衰廢ノ階梯ヲ作ルモノト斷言セサルヲ得ス蓋國家ノ法典ハ外人ノ爲ニ作ル約束ニ非スシテ自國人民ノ安寧幸福ヲ增進セント欲スルニ外ナラス而ルニ此ノ如キ實アリテ談判ノ極今日外人ノ爲ニ枉ケテ一步ヲ讓リ明日又枉ケテ一步ヲ讓リ漸々延及シテ遂ニ外人ヲシテ口ヲ立法

ノ權ニ容レシムルノ端緒ヲ開カハ其害豈鮮少ナランヤ古人曰ク名ト器トハ以テ人ニ假ス可カラスト今夫國家獨立ノ重權ナル立法ノ範圍ニ外人ノ干涉ヲ受クルハ焉ソ亡國ノ兆ニ非スト謂ハンヤ

且夫條約改正ノ事タル建國以來未曾有ノ大事ニシテ一タヒ之ヲ行ヘハ容易ニ復タ變更スル事能ハサル者ニシテ一伸一縮ハ皆國家ノ聲譽ニ關セサルナク其宜キヲ得ハ以テ三十年來ノ恥辱ヲ雪ク可ク其宜キヲ得サレハ以テ百年ノ大患ヲ遺シ國家傾廢ノ禍階タルモ知ル可カラス夫ノ始メテ締結セル幕府ノ條約ヲ見スヤ當時ノ趣章者ハーリス氏カ我國ノ爲ニ好意ヲ以テ之ヲ結ヒタルニモ關ハラス幕府カ事情ニ明ナラサルヨリ一タヒ治外法權ノ約ヲ結ヒタルカ故ニ我國ヲ苦惱セシムル茲ニ三十餘年ニ非スヤ亦以テ今日條約改正ノ最愼マサル可カラサルヲ見ル可キナリ

論者或ハ曰ク開港ノ始メニ當リテ幕府及其任ニ當ル者既ニ已ニ國權ヲ傷ケ自治ノ大權ヲ失ヘタル(マヽ)カ故ニ今日尙其餘毒ヲ被リ之ヲ改正スル事能ハス其罪實ニ幕府ニ在リト謂フ可シト然レトモ公平ノ眼ヲ以テ明ニ當時ノ實況ヲ追想シ又今日ノ大勢ヲ觀察スレハ必シモ幕府ヲ責ム可カラス又改正ノ

望ム可カラサルニ非サルモノヽ如シ抑幕府三百年昇平ノ後ヲ承ケ士風萎靡日ニ文弱ニ流レ海外諸邦ノ形勢ヲ知ラス治外法權ノ何物タルヲ解セス通商ノ法海關ノ稅皆利害ノ關スル所ヲ詳ニセス所謂五里霧中ニ彷徨シ內ニハ不平ノ浪士雷同シテ攘夷ノ暴論ヲ唱ヒ（マヽ）外ニハ兵威ヲ以テ締盟ヲ劫迫シ實ニ左顧右眄周章狼狽當時ノ勢固ヨリ外人ヲシテ我カ法律ニ屈從セシムル事能ハス其條約ノ如キモ止ムヲ得サルニ出テタルモノナレハ必シモ痛責ス可カラサルヲ知ルナリ今日ハ則然ラス大ニ海外ノ大勢ヲ明ニシ外交ノ道ニ熟シ治外法權ノ弊害ヲ詳ニシ海關稅ノ輕キカ爲ニ我カ財政ヲ傷ケ我カ工藝ヲ害スル事ヲ明ニシ內ニ恐ル可キノ諸侯伯ナク又攘夷ノ暴說ヲ主張シテ殘暴ヲ逞フスルモノナク全國ヲ擧ケテ皆條約ノ改正ヲ望ミ外ハ諸外國ノ兵威ヲ觀シン我ヲ劫スモノアルニ非ス我カ彼ニ求ムル所ヤ正我カ彼ニ說ク所ヤ公曰ク從來ノ條約ハ舊幕府ノ結フ所ニシテ未外交ノ事理ニ通セサル時ニ在リ今ヤ國開ケ民進ミ法律ヲ改良シ規則ヲ一定シ復昔日ノ日本ニアラス故ニ昔日ノ條約ハ互ニ相適セサル事明ナリト實ニ今日ハ全力ヲ條約ノ改正ニ盡スヘキノ好時機ナランカ故ニ今日ノ大勢ヲ觀察スレハ條約改正ノ必シモ望ム可カラサルニ非サルヲ知ルナリ此好機運ニ際シ此好時勢ニ會シ而シテ且頃日聞ク所ノ如キ條約改正ヲナサハ天下後世ノ禍害ヲ遺シ天下後世ノ痛責ヲ被ル事豈啻舊幕府ノ今日ニ於ケルカ如キノミナランヤ

論者或ハ將ニ謂ハントス曰ク今日ノ條約改正ハ未吾意ニ充タサルモノ有リト雖亦之ヲ甘セサル可カラス彼ヲシテ治外法權ヲ廢止シ我カ法律ニ服從セシメントセハ大ニ斟酌讓與シテ以テ其歡心ヲ買フニ非サレハ彼必ス承諾セサルナリト又曰ク從來我國ハ獨立ノ名アルモ獨立ノ實權ナク今日此改正ヲナスニ及ヒテ初メテ對等ノ權利ヲ復シ獨立國ノ體面ヲ作シ歐米各邦ト竝立スルヲ得ルモノナリ夫ノ區々タル法律ヲ歐風ニ改良シ外人ヲシテ多少立法ノ權ニ參與セシムルカ如キハ吏ニ惜ムニ足ラサルナリト夫レ然リ豈其レ然ランヤ凡ソ事ニ名實ノ別アリ名美ニシテ而シテ實然ラサルモノアリ名甚美ナラスシテ實亦甚惡カラサルモノアリ故ニ名ニ見テ而シテ其實ヲ斷ス可カラス實ニ見テ而シテ其名ヲ廢ス可カラス我カ治外法權ノ如キハ名實倶ナカラ恥ツ可キモノナレハ固ヨリ廢止セサル可カラスト雖內實之ヲ視察スレハ實利上ノ害ハ名譽上ノ惡キカ如ク甚シカラス卽之カ爲ニ國家

ノ獨立安寧ヲ妨害スル事少シ故ニ是レ名甚美ナラスシテ實猶恕スヘキモノナリ之ニ反シテ今日傳フル所ノ條約改正ニ至リテハ名實全ク相戾ルモノアリ夫ノ治外法權ヲ廢シ國家ノ名聲ヲ恢復スルハ其名譽タル實ニ大ニシテ且美ナルモノト謂フ可シト雖然レトモ之カ爲ニ外人ヲシテ內治ニ多少ノ口ヲ容レテ政務ニ干涉スルノ端緒ヲ開カハ其實利上ノ害謂フニ忍ヒサルモノアリ是則名美ニシテ而シテ實否ラサルモノナリ嗚乎天下ノ大勢ニ當ルモノ名ヲ取ランカ將タ實ヲ取ランカ一時ノ名譽ヲ貪リ百年ノ大害ヲ顧ミス後世ノ志士ヲシテ誰カ中原ヲ陸沉セシムルノ嘆ヲ發セシムルハ豈內閣諸公ノ苟モ爲ス可キ所ナランヤ

論者又將ニ謂ハン曰ク畢生ノ力ヲ盡シ畢生ノ智ヲ勞シ而シテ今日漸ク談判ノ結局ニ向ハントセリ是ニ優ルノ條約改正ハ國民擧テ從事スルモ到底望ム可カラサル所ナリト干城ハ固ヨリ局外ニ立ツ者ナレハ其眞ニ果シテ何ノ點ニ論及シ何ノ利害ヲ關議シ何事ヲ決シ何事ヲ決セサルヤ其機密ニ至リテハ之ヲ明知スル事能ハサレトモ歐米各邦ヲ周遊シ幾多ノ碩學卓偉ノ士ヲ敲キ條約改正內地雜居等ノ大體ニ就キ諮詢スル所少カラス然レトモ現今我國ノ如ク秘密ヲ主トシ之ヲ外務ニ放任スルモノ有ルヲ見聞セス又決シテ得策ニ非ス賀スヘキモノニアラスト說カサルハナシ蓋歐米諸國何レノ邦國タルヲ論セス此ノ如キ國家重大ノ事ヲ決スルニ當リテハ先ツ各省ノ長官ヲ集メ廣ク意見ヲ問ヒ詳ニ利病得失ヲ論究決定シ而シテ後之ヲ外務ニ移スモノニシテ外務ハ唯之ヲ轉達スルニ過キサルナリ若夫然ラスシテ外務ニ一任スル事今日我國ノ如クナラハ外務如何ニ外交ニ巧ニ又如何ニ萬事ニ通曉スト雖豈ニ百般ノ事實ヲ詳ニシ百般ノ利病ヲ明ニスル事各省主任者ト協議討論決定スルカ如キヲ得ンヤ今其一例ヲ擧ケンカ我カ農商務ノ如キハ條約改正ノ爲ニ利害得失ノ關スル最大ナルモノアリ卽海關稅ノ輕重ハ內國工業製造ノ盛衰ニ關シ通商ノ可否ハ商業ノ盛衰ニ內地雜居ハ農業鑛業ニ關スルカ如キ亦以テ知ル可シ然ルニ外務獨リ任シテ又事ヲ他方ニ計ラス豈策ノ得タルモノナランヤ嗚乎條約改正ハ百年ノ興廢ニ關シ億兆ノ休戚ニ係ル而シテ之ヲ僅々數人ノ手ニ放任シ以テ充分ノ好結果ヲ見ント欲ス豈危殆ナラスヤ若此一着ヲ誤ラハ明治二十年ノ內閣ハ上天子ヲ誤リ奉リ下人民ヲ誤ルモノナリ之ヲ切言スレハ我カ明治天皇ヲシテ三千七百萬人ノ罪人タラシムルモノナリ祖

宗百代ノ罪人タラシムルモノナリ國家ノ名譽ハ重シ內閣諸公ノ責ヤ大ナリ諸公豈熟慮深思セサル可ケンヤ

以上ノ如ク說キ來ラハ條約改正ハ之ヲ今日ニ如何ス可キヤ甚惑ナキ能ハサルモノヽ如シ然レトモ干城歐米ノ各邦ヲ巡視シ諸大家ト討論シテ意ニ得心ニ決シタル意見ニ至リテハ大ニ我カ當局者カ實施シ來リタル政略ト異ナルアリ請フ左ニ之ヲ略陳セン

條約改正ハ固ヨリ斷行セサル可カラス然レトモ之ヲ今日ニ行フハ策ノ得タルモノニアラサルナリ然ラハ則之ヲ何レノ日ニ行フ可キカ曰ク明治二十三年現政府ノ組織ヲ一變シ立憲公議ノ新政ヲ施行セル後ニ至リテ始メテ斷行ス可キナリ蓋此ノ如キ大事ヲ提出スルニ當リテハ他ヲ顧ミスシテ斷然決行スルノ勇氣無カル可カラス顧フニ此議ニ對シテハ歐洲一二ノ邦國ハ或ハ異議ヲ唱ヘテ不服ヲ表スル者アラン又或ハ虛喝ヲ示シ劫迫ヲ行ハントスルモノアラン又時ニ或ハ軍艦ヲ發シ兵威ヲ觀スモノアラン然レトモ是決シテ恐ル可キニアラス歐米諸邦ノ勢我ニ敵スルモノアラハ亦必我ニ同盟スル者アリ抑歐米現今ノ人民ハ概皆立憲公議ノ風ニ慣レ輿論ヲ以テ事ヲ決スルニ浸染セルモノニシテ彼ノ最憚ル所ハ

公議輿論ニ若クモノナシ故ニ我ノ彼ニ對スルモ亦其方ヲ求メサル可カラス禮ヲ厚フシ信ヲ表シ親密ノ交ヲ求ムルハ最務ム可キ所ナリ然レトモ依賴主義ハ彼ノ大ニ卑ム所却テ輕侮ヲ招ク可ク以テ敬愛ヲ求ムル所以ニ非ス外交ノ談判ハ往々秘密ヲ要スルモノナリ然レトモ縱ニ秘密主義ヲ取ルハ又彼ノ取ラサル所ニシテ我カ威重ヲ損シ以テ狹量ヲ示シ以テ疑惑ヲ牽ク可シ是亦此ニ用ユ可キ所以ノ方策ニ非サルナリ然ラハ則宜ク之ヲ如何ス可キ曰上下專ラ擧動ヲ愼ミ上天皇陛下ハ一ニ人民ノ公議ニ從フヲ旨トシ下人民ハ謹テ聖意ヲ奉載シ上下一致內結外競ノ志操ヲ奬勵シ其改正案ノ如キモ凡ヘテ天下ノ人民ニ謀リ公議輿論ヲ假リテ以テ是非ヲ世界ノ公判ニ訴ヒ侃々諤々誓テ斷行スルヲ期ス可キノミ方今士耳其ハ秘密主義ヲ以テ歐米諸國ノ指斥スル所タリ然レトモ猶其國權ヲ爭フニ至リテハ深ク計リ遠ク慮リ兵ヲ執リテ動カズ大ニ依賴主義ニ自甘スルモノト異ナルアリ且小國ノ大國ノ間ニ存在スルハ纔ニ大國ノ庇陰ニ依ルモノヽ如ク謂フモノアレトモ決シテ然ラス皆自衛自强ノ力ニ依ラサルハナシ我國豈亦鑑ミル所ナカル可ケンヤ蓋歐米ヲ動カスハ公議輿論ニ若クモノナシ而シテ公議輿論ヲ養生培植スルモ

ノハ新聞演說ニ若クモノナシ故ニ之ヲシテ盛ナラシメサル可カラス卽此諸條例ノ寬大ニセサル可カラサルヲ見ルナリ

惟其レ此ノ如ク公議輿論以テ彼ヲ動カス可シ然レトモ歐人豈利己主義ノ爲ニ正理ヲ顧ミス切迫ノ暴策ヲ行フ者ナカラン ヤ故ニ又之ニ備フルノ軍兵ナカル可カラス卽又國防軍備ノ必要欲ク可カラサルヲ見ルナリ（國防ノ事ハ別ニ意見ヲ述フ可シ）今夫立憲政體設立ノ後ニ至リ外交官ハ天皇陛下ノ聖意ヲ奉戴シ立法官ノ決議ニ基キ更ニ天下人民ノ輿論ニ據リ條約改正ノ談判ヲ開キ揚言シテ曰ク是レ我カ天皇陛下ノ直意ナリ立法官ノ決議ナリ行政官ノ希望ナリ又闔國人民ノ輿論ナリト更ニ內外ノ新聞演說ノ力ニ賴リ大ニ之ヲ主張シ而シテ彼猶我カ言ヲ聽カス不正不理ノ擧動ヲナサハ斷然身命ヲ國家ノ犧牲ニ供シ成否ヲ兵馬ノ間ニ決スルノ志操ヲ示サハ彼豈我カ說ヲ容レサラン ヤ且歐米諸國今日ノ狀ヲ見ルニ我カ條約改正ノ爲ニ兵ヲ萬里ノ外ニ出スナキヤ必セリ（其說別ニ述フル所アルヘシ）故ニ兵備ノ如キハ之ヲ今日ニ要セサルカ如クナレトモ然レドモ兵ハ百年ニシテ用ユスト一日モ亦備ヘサル可カラス方今歐ノ諸國皆外交操縱ノ道ニ長シ屢々虛喝ヲ以テ弱國ヲ劫迫スルノ例アリ故ニ我カ國若シ前ニ輿論ノ應援ナク後ニ兵馬ノ備ナクンハ決シテ其望ヲ遂クル能ハサルナリ嗚乎兵備ハ一日モ怠ル可カラス國ヲ爲ムル者萬一ニ僥倖シ敵ノ來ラサルヲ頼ミ俄然其襲撃ニ會フテ敗ルヽモノ近日歷山港ノ如キモノアリ內閣諸公豈熟慮スル所無カル可ケンヤ

農商務大臣　谷　干城

內閣諸公閣下

附屬書四

二十年七月九日井上外務大臣ヨリ內閣ヘ提出ノ意見書

惟ルニ今ヤ宇內ノ形勢ハ將ニ何等ノ運ヲ成シ我國ヲ何等ノ地位ニ置カントスルモノナル乎本大臣ハ請フ試ニ之ヲ陳セン夫レ泰西各國ガ其力ヲ展開シテ新地ヲ外ニ求ムルハ一朝一夕ノ事ニアラズ殊ニ第十九世紀ノ初メヨリ以來卽チ七八十年以來歐洲各國ノ間ニテハ事物整頓シテ妄リニ憾動ス可ラザル事トナリシヨリ此等各國ハ益々其力ヲ殖民拓地ノ政略ニ專ニシ孜々トシテ今日ノ勢ヲ致シタリ卽チ印度、東蒲塞、交趾、ノ如キハ弱肉已ニ强食トナリタル者ナリ然レトモ本大臣ガ今特ニ各大臣ノ注意ヲ喚ント欲スル者ハ歐洲各國ガ三四年以來更ニ一層其力ヲ亞細亞、亞非利加、ノ間ニ

展開シテ將ニ東洋ノ表ニマテ其勢力ヲ震ハシメントスルニ至リタルノ事實ナリ嗚呼今ヤ亞細亞、亞非利加ノ兩大洲ハ將ニ歐洲各國カ逐鹿ノ場トナラントセリ而シテ其ノ此等ノ場ニ於テスルノ馳驅ハ各自本國ノ艱難安危ヲ釀スノ虞甚タ少キモノナレハ各國ハ甚タ他顧ノ憂ナクシテ力ヲ此ニ用ル事ヲ得テ互ニ呑噬ノ權ヲ競ヒ殆ンド現今歐洲各國一定ノ國是トナレリ卽チ獨乙ハ其今日占メタル高地位ヲ維持センガ爲メ更ニ殖民政略ニヨリテ其國力ヲ伸ベン事ヲ勉メカメロン、ザンヂバアル、ニユウギニイ、マーシヤル群島等ハ先ツ之ガ肉トナリテ獨乙大宰相ノ外政上ノ精神ノ在ル所ヲ證シタリ又タ北獨逸ロイド會社ニ巨額ノ保護金ヲ下付シテ航海ノ事業ヲ開カシメタルカ如キ該大宰相ノ殖民政略ハ實ニ獨乙人民ノ心ヲ得タル事ヲ見ル可キナリ佛郎西モ亦タ同シク活潑ニシテ曩キニ已ニ安南ヲ伐テ其保護國トナシタリ暹羅ノ如キモ早晩其肉トナル事ヲ免レザル可シ唯其能ク存シテ今日ニ至ルモノハ常ニ佛軍カ東京ニ於テ甚ダ振ハザリシニ由ルノミ英國モ亦タ袖手シテ隣邦ノ擧動ヲ傍觀スル事ヲ得ズ遂ニ兵ヲ進メテ上緬甸ヲ併セ更ニ東向シテ一時亘文島ヲ占據シタリ又タ埃及及ヒ蘇西運河ノ如キハ實際已ニ英國ノ手裏ニ落チタリ伊太利モ亦タ近ゴロ拓地ノ政略ヲ執リ先ツ地中海ノ對蹠ヨリシテ之ヲ始メ乃チマツソーヲ略取シタリ而シテ此等各國ガ亞細亞亞非利加等ニ殖民地ヲ拓キタルノ擧動ハ旋テ復タ露西亞皇帝ヲ刺衝シ露國皇帝ニハ西志比里亞ヲ開拓シ之ヲシテ繁榮ノ土地ト爲サシメントシ卽チ中央亞細亞ニ鐵道ヲ布設スルノ計ヲ定メ遂ニバロン、コルフ氏ノ奏請ニ依リ此三年間ニ聖彼得堡ヨリ志比里亞全國ヲ貫キテ浦潮斯德港ニ鐵道ヲ布設シ運河ヲ開鑿スベキノ勅令ヲ發シタリ縱令ヒ右鐵道ハ三四年ノ間ニハ成ラザルニモセヨ十年乃至十五年ノ間ニハ遂ニ其功ヲ竣ル可ク而シテ一旦其成ルニ至レハ露國ハ聖彼得堡ヨリ西志比里亞ヲ經テ浦潮斯德港ニ軍器兵糧ヲ僅々數日ノ中ニ輸送シ得ルモノトナラン

試ニ此等各國ガ從前所領ニ加フルニ右新領ノ地ヲ以テスルトキハ世界地圖上餘ス所ハ復タ幾ハクカアルヤ卽チ（第一）亞非利加洲ノ全部ハ殆ント歐洲雄國ノ掌中ニ歸シタリ（第二）亞細亞洲諸國モ亦タ大抵歐洲雄國ノ併呑スル所トナリ今日ニ至テ眞ニ獨立ノ地位ヲ保ツ者ハ唯二國アルノミ但シ本大臣カ玆ニ獨立ト云フ者ハ正理ニ於テモ又實際ニ於テモ獨立國ノ體面ヲ保ツモノニシテ卽チ日本支那兩國ヲ云フナリ夫ノアフガニスタン、キユバ、ボクハラ、カフキリスタン及ダルジスタンノ如キハ實ニ猶存スレトモ皆ナ多少其獨立ノ體面ヲ欽キ其ノ英ニアラザレバ則チ露國ノ有ニ歸スルハ遠ニアラザルベシ其他彼斯、暹羅、朝鮮ノ如キモ皆ナ能ク泰西雄國ノ殖民政略ニ抗シ得ルノ力ヲ有セズ茫々タル亞細亞中只我日本及ヒ支那ノ二帝國ノ獨立スルアルノミ（第三）大洋洲諸島ハ總テ歐洲諸國ノ領地トナリタリ

左レバ今日日本帝國ヲ環テ國スル者ハ只タ支那ト歐洲諸國ノ殖民地アルノミ殊ニ歐洲諸國ガ右等ノ領地ニ於ケルハ徒ニ其地ヲ領スルノミヲ以テ足レリトセズ之ヲ鞏固ニシ之ヲ改良スルガ爲メニハ數百萬ノ人ト雖モ數百萬ノ財ト雖モ之ヲ費シテ曾テ惜マズ各國ノ國會ハ年々互ニ新保護金ヲ給スルノ多少ヲ競ヒ實ニ殖民拓地ハ近時歐人一種ノ特性トナリ內閣更替ノ如キ一時ノ事情ニヨリテ乃チ變換スルモノニ非ラサルヲ見ルナリ卽チ獨逸ガ北獨逸ロイド會社ニ保護金ヲ給シテ亞細亞地方ニ定期航海ノ事業ヲ開カシメタルガ如キ偶然特出ノ事ニアラズ此例證ハ近年歐洲ニ往來シタル我國人ハ皆ナ親シク目覩シタル所ナル可シ卽チ明治十五年ノ頃歐洲ニ赴キ昨年或ハ本年ニ至テ歸朝シタル者ハ必ラス其經歷シタル各殖民地ノ改良進步ノ甚タ捷速ナルニ驚ク可シ馬車ナリ鐵道ナリ電信ナリ鐵道馬車ナリ其他近世文明ノ事物ニシテ前ニハ一モ見サリシ所ノ者ハ今ハ到處トシテ具ハラザル事ナク其人口ノ如キモ頗ル衆ヲ加ヘタル事ヲ認ム可シ是豈ニ偶然ノ結果ナラン哉嗟乎歐洲各國ハ特ニ此等ノ殖民地ヲ改良シ其威ヲ此等ノ地ニ震フノミヲ以テ足レリトスル乎特ニ其力ヲ此等領地ニ劃シテ復タ他志ナキ乎是レ本大臣ガ甚タ恐ル、所ナリ

故ニ歐洲各國ハ一タビ機會ニ遭遇セハ必ラス之カ利ヲ收ムル事ヲ失ハザル可シ若シ暗君庸相ノ政府アリテ一タビ之ニ其罪ヲ鳴ラスノ口實ヲ與フルトキハ必ラス之ニ乘シテ充分ノ利ヲ收ムル事ニ遑疑セザルベシ而シテ是モ亦タ彼ガ各々其國ノ爲ニスル所以ンナリ左レハ今日幸ニ亞細亞洲中ノ暫ク安キモノハ決シテ以テ恃トナスニ足ラス歐洲各國ハ俄ニ拓地ノ志ヲ變シタルニアラズ又タ其乘ズベキノ機會ナキガ故ニアラズ蓋シ昨年六七月以來（暗憺カ）慘澹タル黑雲歐洲ヲ掩ヒ全歐ノ戰爭旦夕ニ迫リタルガ如キノ勢トナリシヨリ各國ハ暫ラク其暇ヲ得ザルノミ若シ此ノ黑雲終ニ風雨ヲ捲起セズシテ消スルカ或ハ遂ニ一大戰爭ヲ經テ事復タ定ルノ後ニ至ラ

バ其ノ力ヲ倍シテ雄ヲ亞細亞ノ局面ニ爭フノ政略ニ復スル事ハ決シテ疑ヲ容レザルナリ亞細亞ノ邦國ハ豈ニ酣歌熟睡ヲ得ルノ時ナラン哉矧ンヤ各國鯨呑狼噬シテ雄ヲ爭フノ勢ハ駸々トシテ日ニ我ニ迫ルモノアルヲヤ議者或ハ謂ハン若シ東洋事アルノ日ニ至ラハ我日本帝國ハ宜シク局外中立ヲ守ル可キノミト然レトモ亦タ安ンゾ各國ノ中其兵力ヲ我ニ試ムル者ナキ事ヲ保セン何ントナレバ我レ能ク自ラ我進歩ヲ速ニシテ今日ノ運ニ適合スル事ヲ致スニ非ラザルヨリハ各國ニ其ノ乘スベキノ隙ヲ與フル事ハ決シテ必無ヲ期シ得ザレハナリ且ツ琉球事件ノ如キ支那ハ猶ホ未タ全ク之ヲ爭フノ念ヲ絕タズ若シ各國ノ中鷸蚌ノ爭ヲ利トシテ之ヲ挑撥スルモノアラバ應ニ何等ノ事トナルベキ歟本大臣ハ各大臣ノ能ク今日内外ノ大勢ヲ達觀シテ萬世不拔ノ基ヲ立テラレン事ヲ望ムナリ

本大臣ハ請フ本大臣ガ之ニ處スルノ意見卽チ此等ノ患ヲ未然ニ防ク所以ノ意見ヲ陳セン蓋シ本大臣ハ以爲ラク之ニ處スルノ道惟タ我帝國及ヒ人民ヲ化シテ恰モ歐洲邦國ノ如ク恰モ歐洲人民ノ如クナラシムルニ在ルノミ卽チ之ヲ切言スレバ歐洲的一新帝國ヲ東洋ノ表ニ造出スルニ至ルノミト夫レ一國人民ハ其分子タル各國人民ガ先ツ勇敢活潑ノ人民トナルニアラサルヨリハ獨リ其强大ヲ致ス事能ハス卽チ日本人民ノ自治ノ制ト活潑ノ行動トハ日本國民ノ强大ヲ致シ日本政府ノ强盛ヲ致スニ於テ萬欽ク可ラザルモノトス何ントナレハ我政府ハ固ヨリ我國民ヲ代表スルニ止ルモノナレハナリ然ラハ卽チ如何ニシテ此敢爲ノ氣象此獨立自治ノ精神ヲ我三千八百萬人民ノ腦裡ニ注入スルヲ得ベキ歟本大臣ノ所見ヲ以テスレバ我人民ヲシテ歐洲人民ト觸撃シ各自ニ不便ヲ感シ不利ヲ悟リテ泰西活潑ノ知識ヲ吸取セシムルニ在ルノミ卽チ我國人ガ各自ニ文明開化ニ要スル活潑ノ知識敢爲ノ氣象ヲ具フルニ至テ我帝國ハ始メテ眞ニ文明ノ域ニ躋ル事ヲ得ベキナリ本大臣ハ我

皇帝陛下ノ威靈ニ賴リ各大臣ト倶ニ誓フテ此ノ新帝國ヲ東洋ノ表ニ造出セント欲スルナリ若シ夫レ其手段ニ至テハ亦實ニ内外人ノ往來交通ヲ自由自在ナラシムルニアリトス之ニ反シ今ヤ外國貿易自由交通ハ萬國交際上特出ノ形象トナリタルノ秋ニ方リテ我帝國ハ其一部分ヲ除クノ外之ヲ外國人ニ閉鎖シテ其内地ニ入ル事ヲ許サヾルハ曾ニ固陋背理ノ事タルノミナラズ實ニ外國人ニ其苦情ヲ鳴ラスノ口實ヲ與フルノ虞アルモノトス然ルニ議者或ハ謂ハン今俄ニ我國ヲ外國人ニ全開スルトキハ大ニ我國ノ經濟ヲ害スルモノ有ルベシト本大臣ハ其然ラサル所以ンヲ示ス可シ

試ニ我國今日ノ狀況ヲ把テ之ヲ三十年前ノ事ニ比セヨ其間商業社會ニ於テハ種々ノ苦情ヲ鳴ラシタル事アルニモ拘ハラス日本ノ國富ハ爾來大ニ增殖シタル事ヲ認ム可シ卽チ我各種ノ產物殊ニ絲茶其他ノ輸出品ハ三十年前ニ比シテ大ニ其產出額ヲ增加シ同時ニ貨物分送ノ便卽チ運輸ノ便モ大ニ進ミ汽船鐵道電線ノ如キ三十年前ニ在テハ我國人カ曾テ夢視セサルノ物モ今ハ縱橫ニ我海陸ニ飛翔架設シ我商人ハ頗ル顧ミテ昔日ノ不便ヲ悟ルノ知識ヲ開キタリ而シテ此等ノ進歩ハ實ニ泰西有爲ノ人民ト往來觸撃ノ結果ナリトス豈啻是ノミナラン我國全體ノ改良進歩ハ皆全ク泰西人ト往來交際ノ刺衝ニ由リテ之ヲ致シタルナリ嗚呼現行條約ノ外國人ニ許シタル掌大ノ居留地内ヨリシテ發射シタル刺衝ノ効力ノ大ナル事猶且ツ如此シ矧ンヤ全國ヲ放開シ我國人ヲシテ所在ニ外國人ト相觸撃セシムルニ於テヲヤ其刺衝ヲ受ルノ効ハ應ニ何如ナルヘキ歟本大臣ハ惟タ此利益ノミヲ以テ充分ニ全國ヲ放開スルノ價値アリトスル也

議者又曰ク今マ我國ヲ外國人ニ放開スルトキハ外國人ハ其優等ノ知識ト巨額ノ資本及ヒ敢爲ノ氣力ニ依リテ遂ニ我國人ノ競爭者ヲ工業商業ノ市場ヨリ驅リ出スニ至ル可シ又タ我帝國ノ土地モ數年ヲ出スシテ盡ク外國人ノ所有トナルヘシ假リニ議者ノ言ノ如ク現今我國人所有ノ土地ノ大半ハ外國人ノ手ニ歸スルトスルモ此等外國人ハ徒手ニ之ヲ取ル事能ハス必ラス相當ノ代價ヲ拂フヘシ卽チ我國人ハ自ラ之ヲ耕作スルト之ヲ賣渡ストノ利益ヲ比較シテ或ハ賣リ或ハ否ス可シ又タ此等ノ土地ハ縱令ヒ其所有主ヲ變換スルモ外國人ハ固リ之ヲ其國ニ攜帶シ得ヘキニ非ラス其之ニ卸シタルノ財本幷ニ之ニ施シタル改良ハ適々我日本ノ國富ヲ增殖スルモノトナル可シ工業ノ如キニ至テハ外國人ハ或ハ内地ニ於テ大ナル製造所ヲ創設シ我國未タ有ラサルノ工業ヲ起ス事モアラン然ルニ此場合ニ於テ最モ其利益ヲ受ク可キモノハ何人トスル歟我國人ノ消費者ハ因テ其需用品ヲ從前ヨリ安キ代價ヲ以テ買フ事ヲ得從前ヨリ其費用ヲ減スル事ヲ得可シ卽チ差引其贏餘貯蓄ノ分ヲ增シ我カ財本ヲ增殖スル事ヲ助ク可シ故ニ此場合於テ我國ハ實ニ財本增殖ノ二源ヲ得ルモノトス

（一）輸入資本

（二）物品價格ノ低減シタルニヨリ消費者ノ嚢中ニ生スル資本ノ增加

又タ外國人ハ實ニ優等ノ知識及ヒ氣力ヲ有スルトスルモ我國モ亦タ一種特性ノ模擬ノ長ヲ有スル事ハ固リ爭フ可ラス左スレハ譬ヘハ斯ニ一外國人アリテ本年「レース」製造所ヲ某地ニ建設シタリトセンニ我國人ノ中ニハ一年ヲ待タスシテ必ス之ニ倣ヒ同シク「レース」製造ノ業ヲ試ミル者ヲ輩出スヘシ加之右外國人カ創設シタル工場ニ雇ハルヽノ勞働者モ皆ナ我國人タルヘケレハ（第一）我勞働者ハ從來曾テ識得セサル所ノ工業ヲ學習シ外國傳來ノ工業上新知識ヲ全國ニ弘ムル可ク（第二）日本勞働者ノ賃銀ヲ增加シ漸次其生活ノ度ヲ進ムルニ至ルヘキナリ且ツ外國人カ此等ノ事業ヲ起スヨリシテ我國人ニ及スノ利益ハ特ニ勞働者ニノミ止マラス其間接ニ我事業家ニ與フルノ利益モ亦タ大ナル可シ何ントナレハ我事業家ハ外國人カ其事業ヲ管理指揮スルノ仕法ヲ觀テ大ニ其ノ自家ノ事業ニ裨益スル事アル可ケレハナリ蓋シ我事業家ハ是レマテ歐米ノ仕組ニ倣フテ新事業ヲ始メ又ハ其從前營ミ來リタル事業ノ規模ヲ擴張スルノ場合ニ於テ往々失敗ヲ免レサリシモノハ之ヲ要スルニ此等大規模ノ事業ヲ管理指揮スルノ方法ヲ知ラサリシカ故ナリ然ルニ一旦外國人カ內地ニ於テ大規模ノ事業ヲ起スニ至レハ該事業ハ一個人ニテ經營スルニモセヨ又ハ組合或ハ會社ノ方法ヲ以テ經營スルニモセヨ我事業家ハ必ラス之ヲ管理指揮スルノ方法ヲ覽觀スル事ヲ得テ因テ大ニ其事業上ノ知識ヲ進ムル可シ故ニ本大臣ハ曾ニ外國人カ新事業ヲ內地ニ起スヲ以テ害トナサヽルノミナラス寧ロ其我國人ノ利タル事ヲ疑ハサルナリ

若シ夫レ日本固有ノ物產卽チ絲、茶、漆器、各種ノ日本酒類及ヒ醬油等ノ事業ハ本大臣決シテ容易ニ外國人ノ手ニ移ラサルヘシトナスナリ此等事業ニ就テハ今ヨリ十年乃至十四年間ハ外國人ハ迚モ我製造家ト其競爭ヲ試ル事ヲ敢テセサル可シ何ントナレハ此等事業ハ我國人一種固有ノ知識、技巧、及ヒ練熟ヲ要スルモノニシテ外國人カ容易ニ學習シ得ル所ニアラサレハナリ但シ本大臣モ亦タ外國人ノ中行々此等ノ事業ヲ企ル事ナキヲ保セス其ノ日本ニ永住シ善ク人情、風俗、言語ニモ通ズルノ後ニ至ラバ或ハ多少此等ノ事業ニ着手スル者モアル可ケレトモ其レマテノ間ニハ我國人

ノ知識氣力モ同樣比例ニ開發シ多ク外國人ニ讓ラサル事ヲ致ス可ケレハ斯ル後年ノ事ハ今日ヨリ預シメ無用ノ懸念ヲナス事ヲ要セサル可シ故ニ本大臣ハ此項ニ關シテ今ヨリ十年乃至十四五年間ハ決シテ議者ノ云々スルカ如キノ虞ナカルヘシト斷言スルヲ以テ充分トナス也

斯ク本大臣ハ經濟上ノ利害ヲ辨シ置キ此ヨリ復タ主タル問題ニ歸ランニ本大臣ハ更ニ前ノ斷言ヲ反覆シテ以テ之ヲ提起ス可シ我帝國ヲ化シテ歐洲的帝國トセヨ我國人ヲ化シテ歐洲的人民トセヨ歐洲的新帝國ヲ東洋ノ表ニ造出セヨ只タ能ク如此ニシテ我帝國ハ始メテ條約上泰西各國同等ノ地位ニ躋タル事ヲ得可シ我帝國ハ只タ之ヲ以テ獨立シ之ヲ以テ富强ヲ致ス事ヲ得ベシ而シテ此大目的ヲ達スルガ爲ニハ實ニ現行條約ノ改正ヲ以テ第一著歩トス故ニ本大臣ハ任ニ外務ニ當リシヨリ以來夙夜懈タルニアラズ誓フテ治外法權ノ辱ヲ洗雪セン事ヲ期シ幸ニ我　皇帝陛下ノ威靈ニ賴リテ漸ク各國政府ヲシテ改正ノ議ニ一致セシメタリ然レトモ我ガ今日條約上ノ地位ヨリシテ直チニ一躍シテ充分完全ナル對等ノ地位ニ超上スル事ハ實際終ニ做シ得ベカラザルノ事ナルヲ以テ本大臣ハ姑ラク左ノ讓與ヲ以テ已ムヲ得ザルモノトナシタリ

第一　法典ノ編制ニ就テハ

イ　條約批准十六ケ月內ニ法典ヲ編制スル事

ロ　泰西ノ主義ニ基キ諸法典ヲ編制スル事

ハ　日本國ノ法律ヲ外國人ニ適用スル時ヨリ八ケ月以前ニ其英語正文ヲ外國政府ニ送付スル事

第二　司法裁判所ノ制ニ關シテハ

イ　外國屬籍ノ人ヲ我司法官ニ任用スル事

ロ　裁判所ニ於テ英語ノ使用ヲ許ス事

ハ　特別ニ管轄裁判所ヲ定ムル事

右諸項ハ實ニ締盟十六ケ國ヲシテ治外法權ヲ廢去セシメンガ爲メニ之ヲ讓與シタルモノニシテ實ニ已ムヲ得ザルノ事情ニヨリタルナリ本大臣各大臣ガ右諸項ノ讓與ヲ以テ現行條約治外法權ノ我面目ヲ辱メ我利益ヲ害スルモノト比較シテ善ク之ヲ察セラレン事ヲ冀望スルナリ然ルニ且或ハ輕々ニ治外法權ノ害ヲ看過シ却テ此讓與ヲ重ンズル者ナキニアラズ本大臣ハ請フ爲メニ治外法權ノ害ヲ詳言セン

夫レ治外法權ノ制ハ外國政府ニ日本帝國ノ版圖內ニ於テ其法律ヲ實施シ其人民ヲシテ之ヲ遵奉セシメ其君主ノ名ヲ以

テ自國ノ裁判權ヲ執行スル所ノ裁判所ヲ設置スルヲ許シ以テ我ガ國辱ヲナシ我國人ガ外國人ヲ被告トスル訴訟ハ該外國人ヲ管轄スルノ領事裁判ヲ仰ガザル可ラス此裁判ヲ受ルガ爲メニハ巨額ノ訴訟入費幷ニ代言人料ヲ拂ハザル可ラズ若シ此裁判ヨリシテ控訴セント欲スレハ遙ニ之ニ該被告本國ノ相當裁判所ニ送ラザル可ラス而シテ此等ノ不便ハ實際我國人ガ外國人ニ對スル訴權ヲ奪フモノトス各開港場居留地ハ外國人ヲ庇護スル一種ノ城壁トナリ凡ソ此内ヨリスルトキハ新聞雜誌若クハ無賴ノ徒如何ニ我政府人民ヲ惡口雜言スルトモ我政府ハ之ヲ奈何ントモスル事能ハス及ヒ若干ノ地所ヲ外國政府ニ貸與シテ其海軍ノ用ニ供シ曾テ其使用ノ場合ヲ限ラズ外國政府ハ以テ戰時ノ用ト爲ス事ヲモ得ベク尤モ危急危險ノ措置トス凡ソ此等ノ事實ハ皆ナ我帝國ノ面目ヲ辱メ我帝國ノ利益ヲ損シ我帝國ノ安寧ヲ害スルノ大ナルモノニシテ朝野議者ノ具ニ知ル所ナリ故ニ此等ノ垢辱此等ノ危害ニ就テハ本大臣ハ必ラズシモ明日張膽シテ急言詭論スル事ヲ要セズ更ニ現行條約ガ三十年來實際如何ナル方向ニ向フテ其精神ヲ進メタルカヲ觀察ス可シ抑モ安政：：ニ結ヒタル最初ノ條約ニテハ下田一港ヲ開クニ止マリ

タリシガ已ニシテ兵庫港ヲ開テ三港トナシ遂ニ五港ヲ開クニ至レリ是レ開港ノ箇所ニ於テ已ニ最初ノ精神ヲ保ツ能ハザリシナリ又タ現行條約ノ明文ニ從ヘハ外國人ハ公使館員及ヒ領事官員ヲ除クノ外ハ總テ遊歩規程外ニ出ル事ヲ得ザルモノナルガ二十年前ヨリシテ健康保養若クハ學術取調ノ爲メ内地ニ旅行セント欲シ其國公使ノ保證ヲ得テ外務省ニ出願スル者ニハ旅券ヲ下付シテ之ヲ許ス事トナシ今日ニ及ンテハ殆ント一種ノ例規ヲ成シ如何ナル外國人モ皆ナ之ヲ受ケテ内地ニ旅行スル事ヲ得即チ明治：：年中内地ニ旅行シタル外國人ノ數ハ：：：：人同：：年ニハ：：：：人ノ衆ニ至レリ固リ此等外國人ノ中ニハ絲茶出產ノ地方ニ至テ直ニ出產人ト之ガ取引ヲ約シ其他種々商業上ノ取引ヲ約スル者アリ而シテ表面ハ皆居留地内ニ於テ之ヲ履行スルノ方便ニ假託スルモノナレハ法律モ亦タ之ヲ如何トモスル事能ハズ其他或ハ番頭ノ名義ヲ以テ内地ニ派出シテ各種商業上ノ取引ヲナサシメ或ハ我國人ニ雇ハルヽノ名義ヲ以テ實際ニ組合營業ヲナスガ如キ皆ナ法律ノ奈何トモスル事能ハサル所ナリ故ニ現行條約ハ一方ニ於テハ外國人ヲ治外法權ノ下ニ庇護シ而シテ一方ニ於テハ之ニ全國ヲ放開スルト其間殆ン

ト幾ハクナキノ結果ヲ致スモノトス

又タ我開港場及ヒ開市場ニ在ル外國人ハ我行政上ノ法律規則ニ遵ハズ酒類醬油等ヲ製造スル事アルモ我政府ハ之ヲ奈何ントモスル事能ハズ何ントレバ現行條約ハ總テ外國人ヲ我法律ノ外ニ置クモノナレバナリ然レトモ若シ斯ル場合ニ於テ我政府ハ外國人ノ爲ス儘ニ任セテ棄置クトキハ其害タル事應ニ如何ナルベキ歟固ヨリ此等ノ製造ニハ我國人ハ外國人ニ優ルノ知識經驗ヲハ有スレトモ造石稅營業稅ノ有無ハ迚モ右ノ優劣比較ヲ以テ其利益ヲ差引スル事ヲ得ス勢必ラズ外國人ガ無稅ヲ以テ費少ク製造シ價安ク賣出スノ品獨リ市場ノ利ヲ擅ニスルニ至ル可シ然ニ是迄外國人中一二此等ノ製造ヲ試ミタル者アルニモ關ラス幸ニ右ノ如キノ結果ヲ實驗スルニ至ラザルモノハ一ニ外國公使等ノ好意ニヨリ其都度纔ニ起業者ヲ說諭シテ之ヲ輟メシメタルニ由ルナリ決シテ現行條約カ我ニ與ヘタルノ權理ヲ以テシタルニハアラズ又外國船カ石炭ヲ外國ニ輸出スルノ場合ニ於テハ常ニ該船航海中ノ用ニ充ルノ名義ニ托シテ輸出シ一錢ノ輸出稅ヲモ拂ハザレトモ我政府ハ外國船ヲ管轄スルノ權ヲ有セザルヲ以テ同ク亦之ヲ奈何トモスル事ナキナリ又郵船會社等ニ雇ハル、外國屬籍ノ船長及ヒ船員等ノ景況ヲ看ヨ彼等ハ果シテ我ガ懲戒法ニ服從スル乎彼等ハ航海上其任ヲ怠リ或ハ過ツ事アルモ我政府ハ之ヲ責罰スル事能ハザルナリ又現行條約ニテハ居留地内ト雖モ外國人ニ不動產ノ所有主タル事ヲ許サズ然ルニ今日外國人ノ中ニハ我國人ノ名義ヲ假リテ不動產ヲ居留地外ニ所有スル者ナキ乎現ニ外國人ガ此ノ手段ニ因リテ東京府内目貫キノ場所ニ於テ不動產ヲ所有セルノ例ハ尠シトセズ否彼等ハ天街紫陌ノ間ニ於テモ之ヲ所有スル者アルナリ其他外國人カ此手段ヲ以テ箱根、熱海、江ノ島及ヒ日光等ノ地方ニ於テ不動產ヲ所有スル者ハ實ニ枚擧スルニ遑アラズ想フニ今日ヨリシテ十年ヲ經過セハ日本全國到ル處トシテ外國人ガ不動產ヲ所有セザルノ地ナキニ至ラン而シテ斯ク歲月ヲ經過スル間ニハ自ラ默許同樣ノ慣習ヲ成シ我政府ハ德義上此ノ事實ヲ認メテ之ガ處分ヲナサヽルヲ得ス即チ遂ニ之ニ法律上ノ所有權ヲ許スカ若クハ我政府ハ爲メニ悉ク此等ノ土地ヲ買上ケザルヲ得ザルニ至ル可シ嗚呼今ニ及ンテ速ニ此不幸ナル治外法權ヲ廢去スルニアラズンハ本大臣ハ其遂ニ如何ナル危害ヲ馴致スヘキカヲ前言スル事能ハザルナリ何ントナレハ若シ右外國人カ土

地ヲ所有スルノ事實一タヒ公認セラレ外國人ハ我法律ニ遵ハズ我裁判所ノ管轄ニ屬セズシテ日本人民ト同一ノ特權ヲ享受スル事ヲ得ルノ日ニ至テハ我政府ハ縱令ヒ如何ニ熱心シテ條約ヲ改正セントスルモ時已ニ晩ル可ク此時ニ及ンデハ外國人ハ決シテ埃及立會裁判所ノ例以上ノ裁判管轄權ヲ我ニ復スル事ヲ承認セザル可ク卽チ今日我カ以テ殷鑒トスル埃及立會裁判所ノ制ハ徒ニ我ニ先例ヲ示ス者トナル可ケレバナリ故ニ我政府ハ速ニ現行條約ヲ改正シ治外法權ヲ廢去シ以テ我カ自主不羈ノ權ヲ保テ我カ面目利益ヲ護スルニ足ルノ新條約ヲ訂立スル事ヲ勉メサル可ラズ是レ實ニ今日ニ於テ一日モ緩クス可ラザルノ事トスルナリ

今ヤ本大臣ハ幸ニ我　皇帝陛下ノ威靈ニ賴リテ條約改正會議ヲ開ク事已ニ二十九回ニシテ略々裁判管轄條約ヲ議決スル事ヲ經タリ然ニ未タ一躍シテ直ニ相互對等ノ條約ヲ訂立スル事能ハズ猶ホ若干ノ讓與ヲナサヾル事ヲ得ザルモノハ豈ニ啻ニ本大臣ノ憾ノミナラン然レトモ是實ニ我今日內外事情ノ實際已ムヲ得ザル所ニシテ各大臣ハ必ラス善ク之ヲ諒セラルベキナリ何ントナレハ苟モ泰西ニ航シ其文物制度、美、文明開化ノ盛ヲ目覩シタル者ハ我國ガ三十年來

力致シタルノ進歩ハ實ニ東西古今始ント未曾有ノ事トスルモ之ヲ泰西各國文物開化ノ度ニ比スレハ其猶ホ未タ相及ハザル者アルヲ認ム可ク此事實ハ卽チ泰西各國ガ今日ニ至ルマデ治外法權ヲ我國ニ維持シタル所以ニシテ今日若干ノ讓與ヲナサヽル事ヲ得ザル者モ亦只タ此事實アルガ故ナレバナリ請フ本大臣ハ各大臣ト試ニ我今日立法上及ヒ司法上ノ景況ヲ一看セン

今夫レ我國ニ於テ諸法典ノ已ニ制定セラレタル者ハ果シテ幾バクアル乎民法、商法、訴訟法ノ三法典ハ已ニ備リタル乎夫ノ一切苟且ノ慣習法ノ如キハ決シテ不成文法律トナシテ此等法典ニ代用シ得ルモノニアラズ何ントナレバ我國今日ノ制度ハ多ク維新以來造出セラレタル者ニシテ其齡尙ホ弱ク未タ以テ眞ニ慣習法トナルニ足ルノ力ヲ有セズ又タ其舊幕時代ヨリシテ傳來シタル者ハ大抵今日文明人民ノ所要ニ適セサレハナリ左レバ我法典ノ泰西主義ニ適合シタル者ハ只タ明治十三年ニ於テ公布シタル刑法治罪法ノ二法典アルノミナルガ此二典モ早已ニ多少ノ不完全ヲ見ハシ現ニ法律取調委員會ニ於テ「ボアソナード」氏ガ修正中ナリ又タ我行政法ノ中ニハ內外法律學士ノ其過嚴ヲ議スルモノモ亦

タ少ナカラズ之ニ加ルニ我維新以來進歩ノ速ナル事ハ動モスレハ內外人ヲシテ其反動ノ或ハ劇ナラン事ヲ恐ルノ情ヲ生セシムル者ナキニアラス此等ノ事實ヲ合シテ之ヲ觀ルトキハ各國全權委員ガ輒チ右刑法治罪法ヲ以テ我カ將來制定スベキ他ノ三典ノ見本トナス事ヲ承諾セス條約案第四條ニ於テ特ニ其ノ泰西主義ニ從フ可キ事ヲ約スルヲ要シタルモ亦必ラスシモ甚タ謂レナキノ請求ニハアラザル歟

次ニ我裁判所ノ景況ヲ一看センニ我裁判官ガ外國裁判官ノ如ク素ヨリ法學ヲ習ヒ兼テ實際經驗ニ富ミ其相當資格ヲ具フル者ニアラザル事ハ復タ爭フ事ヲ得サルモノトス然ニ是モ亦タ怪ムニ足ラズ我ガ刑法治罪法ノ實施セラレタルハ纔ニ明治十四年一月以來ノ事ニシテ未ダ我裁判官ニ充分ノ經驗ヲ與フルニ足ルノ歲月ヲ經過セズ殊ニ我裁判官ハ若干取除ケノ外ハ皆ナ泰西各國裁判官ノ如ク試驗及第シテ登用セラレタル者ニアラズ其能ク外國裁判官ノ如キヲ得ル事ハ固リ望ム可ラサルノ事ナリ且ツ歐洲各國ニテハ裁判官ヲ以テ終身官ト爲シ以テ裁判官ノ獨立ヲ保スルノ法トナセドモ我裁判官ハ斯ル安心ナキガ故ニ其原被告ノ是非曲直、犯罪ノ有無輕重ヲ判決スルニ當テモ或ハ往ケテ行政官ノ指揮內訓

等ニ從フモノ少カラス是レ我國人ノ猶且ツ往々其例ヲ擧ケテ非難攻擊スル所トス之ヲ要スルニ我裁判官ハ未タ充分ニ外國人ノ信用ヲ得ルニ足ルノ資格ヲ具ヘザルナリ又現今我裁判所ノ組織モ亦タ往々泰西主義ト相矛盾スルモノナカラズ左レバ各國全權委員ガ特ニ條約ニ於テ外國人ヲ管轄スル裁判所ハ外國屬籍ノ裁判官ノ多數ヲ以テ組織スベシトノ條款ヲ載スル事ヲ要シタルモ亦タ必ラズシモ無理ナル事ニアラズ本大臣ハ縱令ヒ外國人ヲ雇ハザル事ヲ得ザルモ苟モ右裁判官ガ我裁判所ニ於テ我

皇帝陛下ノ御名ヲ以テ我帝國ノ法律ヲ執行スルト爲ス以上ハ右ノ請求ヲ以テ容易ニ拒ミ得ザルモノトスル也

試ニ地ヲ易ヘテ之ヲ察セヨ試ニ我國ハ已ニ泰西各國カ今日占ル所ノ地位ニ達シタルノ日ニ於テ朝鮮ハ正ニ我後ヲ逐フテ恰モ我國ガ今日泰西各國ニ對スルト同樣ノ地位ニマデ進歩シ我ニ向フテ日韓條約ヲ改正シ治外法權ノ制ヲ廢去セン事ヲ要求スルトセヨ此場合ニ於テ我政府ハ何等ノ約款ヲモ附セズ直ニ我人民ヲシテ朝鮮政府ノ法律、朝鮮政府ノ裁判管轄ニ服從セシムル事ヲ承諾ス可キ乎抑モ泰西各國ガ現ニ我ニ要請スルガ如ク充分ニ我人民ノ利益ヲ保護スル保證ヲ

得ルニアラザレハ輒チ之ヲ承諾セザル可キ乎本大臣ハ我政府モ亦夕必ラス泰西各國カ我ニ於ケルノ例ニ倣ハザル事ヲ得ザルヲ信ズル也

夫レ我帝國進歩ノ度尚ホ未タ泰西各國ト並馳スル事ヲ得ズ尚ホ未タ外國人ヲシテ何等ノ約款ヲモ附セズ直ニ其利益ヲ日本政府ノ保護ニ委セシムルニ足ルガ如キノ信用ヲ有セザルハ本大臣ガ誠ニ浩嘆ニ堪ヘザル所ナリ此條約ニ於テ當ニ適當ニ外國人ノ取扱ヲナス事ヲ保スルノミナラズ多少仍ホ之ニ特權ヲ與フルハ固ヨリ全ク之ナキニ如カズ此等讓與ノ多少其弊アル事ハ固ヨリ議者ノ言ヲ俟スシテ之ヲ知ルナリ然レトモ今日ノ場合ニ於テハ本大臣等ハ單ニ一ハ純ニ利タリ一ハ純ニ害クルノ間ニ擇ブ事能ハズ寧ロ比較的利害ノ擇ヲナサヽル可ラズ卽チ右等ノ弊ハ（第一）將來生スベキ一層更ニ大ナルノ弊害ヲ免レンガ爲メ（第二）十七ケ年ノ後ニ至テ充分ノ自由充分ノ不羈自主ヲ得ンカ爲メ之ヲ今日ニ忍バサル可ラザルモノトス抑モ此條約ノ繼續ハ僅ニ十七ケ年ニシテ又右等ノ讓與ハ僅ニ十五ケ年ニ止リ苟モ此期限ヲ過レハ各締盟國ハ我カ行爲上充分ノ自由ヲ承諾スル事勿論ナレバ畢竟此等ノ約款ハ特ニ一時ノ事タルニ過キズ卽チ十五年ノ後ニ至レハ我帝國ハ復夕此條約中何等ノ字句ノ爲ニモ束縛セラルヽ事ナキモノトナリ只萬國公法ノ通義ヲ以テ內外交際ノ條規トナシテ乃チ足ルモノトナル可シ卽チ他語ヲ以テ之ヲ言ヘバ今ヨリ十五ケ年ノ後ニ至レバ我日本帝國ハ眞ニ泰西各國ト同等ノ地位ヲ占ムル事ヲ得ベシ又新通商條約ノ如キハ其期限更ニ短ク僅ニ十二ケ年ヲ以テ限トナシ此期限ノ後ニ至レハ我政府ハ海關稅規則ヲ制定スルニ付全ク亦夕自主ノ權ヲ有スル事トナル可シ嗚呼此ノ十五年ノ間ハ卽チ治外法權ノ暗夜ヨリシテ充分ナル不羈自主ノ旭旦ニ達スル將曙ノ時トスルナリ本大臣ハ豈ニ若干ノ讓與ヲ吝ム事ヲ得ン哉

然レトモ凡ソ非常ノ業ハ惟夕聖主賢相乃チ能ク斷シテ之ヲ行フ所ニシテ學士ハ規々ノ見ニ拘リ庸人ハ區々ノ慮ヲ懷キ以テ謗議ヲ逞クスルハ東西古今其情ヲ同クスル所ナリ矧ンヤ我今日ノ如キノ場合ニ於テヲヤ內外學士ハ或ハ其學フ所ロ英獨佛米ノ流ヲ異ニシ已レヲ主トシ彼ヲ奴トシ先入ノ見ニ交ルニ猜忌嫉妬ノ情ヲ以テシ又夕議者論客ハ暗ニ人ノ喙カス所トナリテ其心ニ於テ實ハ以テ是トスル所モロニ於テハ故ラニ之ヲ非トシ各々其爲メニスル所ヲ吠ヘ以テ私計ノ

地ヲナシ又夕況ンヤ現改正條約案ノ如ク實ニ彼我相互ノ讓與ヲ以テ本トナシ理論ニ由テ獨リ行フ事ヲ得ザルモノヲヤ其或ハ議者ノ云々スル所トナルハ當ニ必然免レサルノ事ノミナラズ本大臣ハ却テ其言ヲ聞クノ尚ホ少キヲ怪ムナリ故ニ今ヤ本大臣ガ謹ンデ現改正條約案ノ始末ヲ具シテ之ヲ內閣ニ呈スルモノハ決シテ謗議ヲ排シ讒說ヲ辨センガ爲メニアラズ謹ンテ　皇帝陛下ノ宸覽ヲ願ヒ奉リ且ツ各大臣ガ其可否ヲ　皇帝陛下ニ進言セラルヽ前ニ於テ充分ニ之ヲ熟讀シテ其利害得失ヲ詳究セラレン事ヲ冀望スルガ故而已何ントナレハ此ノ改正ノ事タルヤ之ヲ實施スル亦タ各大臣非常ノ勞ヲ要スルモノアリテ實ニ容易ノ業ニアラザレバ也

試ニ現改正條約案一タヒ我　皇帝陛下ノ批准ヲ經ルトスレハ改正ノ約款ハ必ラス之ヲ擧行セサル可ラズ我政府ハ果シテ如何ナル方法ヲ以テ條約上特約シタル改革及ヒ其他繁急ノ改革ヲ遂行シ得ベキ乎先ツ司法大臣ハ左ノ事件ノ責任ヲ承當セラレザル可ラズ

一　外國屬籍ノ裁判官及ヒ外國語ヲ我裁判所ニ用ウルヨリシテ生ス可キ司法上ノ困難、外國人ニ與ヘタル一種特別ノ裁判仕法ヨリシテ生ス可キ差縺、及ヒ裁判所ノ裁判權限幷ニ其管轄區域權限ノ差縺等ヲ處分スル事

一　我裁判所ノ構成ヲ改正シテ泰西主義ニ適合セシメ就中全ク合議裁判所ノ制ヲ取ル事

一　裁判官ヲ獨立ニシ其地位ヲ鞏固高尚ニスル事

一　相當資格ヲ具フル裁判官幷檢察官及ヒ其他官吏ヲ備フル事

次ニ內務大臣ハ

行政規則及ヒ地方行政規則ノ改正殊ニ警察規則ノ改正

大藏大臣ハ

右等改正ニ要スル經費ノ準備

陸海軍大臣ハ

陸海軍ノ力ヲシテ充分ニ條約上享受シタル權理ヲ護スルニ足ラシムル事

此等事項ハ實ニ右各大臣ガ其責任トシテ承當セラル可キノ大要トス其他此條約ヲ實行スルガ爲メ直接又ハ間接ニ他大臣ノ責任ニ歸スベキ分モ亦夕多カル可シ之ヲ要スルニ此條約改正ノ大事業ヲシテ能ク實際ノ功ヲ奏セシムルト否トハ全ク各大臣ノ責任ニ屬シ本大臣ガ得テ關スル所ニアラズ是

レ本大臣ガ各大臣ノ豫シメ此條約改正案ニ付其責任ノ如何ンヲ覺悟セラレン事ヲ冀望スル所以ナリ

故ニ各大臣ハ之ヲ思ヒ又之ヲ思ハレ此條約案ニ我

皇帝陛下ノ批准ヲ謂ヒ奉ルノ前ニ於テ右等責任ノ遂ニ擔承シ得ラル可キモノナル乎否ヲ反應熟思セラレ若シ此等改革ハ時機未タ熟セズ實際做シ得ベキノ事ニアラズ或ハ我人民及ヒ制度ノ進歩ハ未ダ泰西主義ニ基イテ制定シタル法律ヲ受用スル事ヲ得ス或ハ我政府ハ未ダ充分ニ泰西主義ノ法律ヲ適施執行シ得ルノ裁判官ヲ備ヘズ或ハ未タ充分ニ外國屬籍ノ裁判官ト並列シ外國語ヲ用キテ訴訟ヲ取扱ヒ得ルノ裁判官ヲ備ヘズ或ハ合議裁判所ノ制ハ相當資格ヲ具ヘタル裁判官ニ乏キノ故ヲ以テ竟ニ實行シ得ルモノニアラズ或ハ我國人ガ從前架掛シタルノ冀望ハ却テ此條約案ニ因テ遮礙セラル可シ右案ニ於テ許シタル讓與ハ國人ノ心ヲ激シ容易ナラザルノ困難ヲ致ス可シトナスナラハ充分丁寧ニ閣議ヲ盡クサレ若シ果シテ此條約案ヨリシテ生スルノ害ハ一時信ヲ各國政府ニ失フノ害ヨリモ更ニ大ナル者アリテ此ヲ以テ彼ニ易フ可ラズトセラルヽナラハ宜ク閣議ヲ定メ

皇帝陛下ノ勅裁ヲ仰キ以テ之ヲ今日ニ破毀セラル可キナリ

蓋シ今日ニ至テ之ヲ破毀シ信ヲ各國ニ失フハ事態固ヨリ重大ナラザルニハアラズ然レトモ猶ホ一時ノ失ニ止ルモノナリ若シ夫レ苟且ノ議ヲ以テ我カ終ニ能ハサルノ事ヲ締約スルハ其弊タルヤ遂ニ測ル可ラズ假リニ此條約案ノ定メタル十五ケ年ノ間ニ於テ不幸ニシテ我政府カ一條款タリトモ之ヲ擧行シ得ザル事アリトセヨ卽チ原時マテ擧行シタル一切ノ功モ之ガ爲メ忽チ水泡ニ屬シ我國ハ惟タ此等ノ事業ヲ半途ニシナガラ旋テ今日ノ現況ニ返ルノミナラズ苟モ一タヒ斯ル却退ノ行歩ヲ著ケタランニハ其遂ニ我ヲ驅テ何等ノ深淵ニ陷ル可キカヲ知ラザル可シ若シ不幸ニシテ此ニ至レハ今日我政府ノ此條約案ヲ訂立シタルノ意思ハ遂ニ以テ內外ニ白ニスル事ヲ得ズ徒ニ成敗ノ迹ヲ以テ議セラレ永ク史上萬世ノ恨ヲ遺ス可キナリ是故ニ各大臣ニ於テ果シテ此條約案ヲ以テ遂ニ實行シ得ルモノニアラズトセラルヽカ若クハ國人ノ心ヲ激シ國家ノ難ヲ釀スノ慮アリトセラルヽナラバ須ラク今日ニ及ンテ之ヲ破毀セラレヨ本大臣ハ復タ何ヲカ言ハン

本大臣ノ如キハ我　皇帝陛下ノ親任ヲ辱クシテ全權委員トナリ各國全權委員ト商辦討議シテ此ニ至リタル者ナレ

バ會議ノ結果トシテ一旦承諾シタルノ案ハ復タ故ナクシテ之ヲ破ル事ヲ得ズ然レトモ本大臣ハ之ヲ外務ニ承ケショリ以來身ヲ以テ報效スル事ヲ決心シタル事實ニ已ニ久シキナリ君ノ爲メ國ノ爲メナラハ如何ナル辱ニ遇フモ固ヨリ甘受シ辭セザル可シ各大臣ハ國家ノ爲メ人民ノ爲メニ此條約案ヲ斥ラル事ヲ以テ必要トセラルヽナラバ斷シテ之ヲ斥ケラレヨ本大臣ハ敢テ以テ憾トナサヾル也各大臣ハ唯善ク之ヲ察セラレヨ

明治二十年七月

外務大臣伯　井　上　馨

附　錄

議者或ハ謂フ此條約改正案中司法制度ノ如キハ尤モ國庫ノ利益ヲ害スルモノトス何ントナレハ許多ノ外國人ヲ雇入レ之ヲ我裁判官檢察官ニ任用シ及ヒ許多ノ通辯官幷ニ飜譯官ヲ置クノ費用ハ甚タ大ナル可ケレバナリト本大臣ハ之ニ應フルニ左ノ事實ヲ以テシテ充分トナス可シ

（第一）　本大臣ハ此條約ニ據リ我裁判官若クハ檢察官トシテ雇入ルヽ外國人ニハ是マデ我政府ガ諸雇外國人ニ給シタルト同樣ノ高俸ヲバ拂ハザル見込ナリ然レトモ內國屬籍ノ裁判官及ヒ檢察官ノ俸給ト之ヲ同クスル事ヲ得ザルハ勿論ナレハ姑ク此同異ハ措テ論ゼズ假リニ右裁判官若クハ檢察官トシテ雇入ルヽノ外國人ニモ亦タ相當ノ高俸ヲ給スルトモ通商條約及ヒ海關稅則ノ改正ヨリシテ生スル海關稅ノ增加ハ之ヲ支辨スルニ於テ餘リアル可シ何ントナレバ此ノ增加ハ今日ノ豫算ニテモ凡ソ七八十萬圓ニ下ラザル可ケレバナリ矧ンヤ全國ヲ開キ內國ノ富益增殖スルニ隨テ海關ノ收入モ亦タ益々多ヲ加フ可キヲヤ且ツ海關稅收入ノ增加シタル分ヲ以テ此等ノ費用ニ充ル事ハ本大臣ガ今日始メテ商量シ得タルノ案ニアラズ本大臣ハ實ニ昨年英獨合議案ヲ提出シテ閣議ヲ乞フノ際ニ於テ海關稅收入ノ增額ハ悉ク之ヲ司法事務上直接又ハ間接ノ費用ニ充ン事ヲ請ヒ置キタリ本大臣ハ今日閣議ノ依然トシテ之ヲ採用セラルヽ事ヲ信スル也

（第二）　通辯官及ヒ飜譯官ヲ置クニ因テ增加スル費用ハ惟タ裁判手數料ヲ改正シテ稍々之ヲ高クスレハ亦タ充分ニ之ヲ補フニ足ル可シ而シテ此改正ハ同時ニ健訟ノ弊ヲ制スルノ利益アル可シ何ントナレハ現今ノ制ニテハ裁判手數料ノ甚タ小ナルヨリ訴訟人ハ濫リニ控訴シ徒ラニ事件ヲ增スノ弊アル事ハ當局者ノ夙ニ認メル所ナレバナリ又タ此通辯官

及ヒ飜譯官ハ我カ改正條約案ニ於テ之ヲ創設シタルニアラズ泰西各國ノ法律中ニモ亦タ裁判所ニ通辯官ヲ置クノ例アルナリ

故ニ本大臣ハ此等費用ノ增加ヲ以テ決シテ國庫出入上ノ不足ヲ致スモノトナサス但シ覺書本文中ニ於テ指出シタル如ク現改正條約案ヲ實施スルガ爲メ須要トスル一切ノ改革更張ノ費用合算スルトキハ或ハ單ニ海關稅ノ一項ノミヲ以テ之ヲ償フ事能ハザル事アル可シ然レトモ同時ニ我カ國富モ亦タ此條約ノ改正ニ因テ增殖スベケレハ本大臣ハ少クトモ其出入差引相當ル事ヲ信スル也議者ハ此等ノ點ニ於テ甚タ無用ナル懸念ヲナサスシテ可ナルノミ

一五七　明治二十年八月四日　井上外務大臣ヨリシーボルト宛

バロン、ヴヲン、シーボルトニ對スル秘密訓令幷ニ添書

此度貴下ハ日本帝國政府ノ命ヲ以テ歐洲各國ノ都府ヘ派遣セラルヽニ付嚴密ニ左ノ件々ヲ照守セラルベシ

第一　貴下歐洲滯在中ノ行動及ヒ職分ハ外務大臣及外務次官ヨリ之ヲ命令ス可シ貴下ハ此度ノ使命ニ附著シタル各事件ニ付常ニ善ク裁度シ祕密ヲ保チ以テ忠實ニ右ノ命令ヲ履行ス可シ

第二　外務大臣及外務次官ノ命令ニ從ヒ新聞紙トノ關係ヲ定立ス可シ各國有力ノ政治家若クハ官吏ニ接スル每ニ機會ヲ失ハス乃チ之レト日本帝國ノ政略ニ關スル意見ヲ交換シ殊ニ力ヲ條約改正ニ關スル問題ニ用ユ可シ貴下ハ斯ル機會ニ遇フ每ニ乃チ之ニ乘シテ眞實ノ情形ヲ說明シ而シテ其都度談話ノ始末ヲ報告ス可シ又タ新聞紙上此問題ニ關シタル論說ニシテ貴下ノ耳目ニ入ルモノアラバ亦タ之ヲ報告ス可シ且ツ貴下ハ斯ル論說ヲ得ル每ニ爾時貴下ガ滯在スル地ニ在ル我カ公使ニ之ヲ報シ幷セテ貴下ガ其地新聞紙トノ關係ヲ告知ス可シ

第三　若シ事ノ急ニシテ延緩ス可ラザル者アルトキハ暗號電信ヲ以テ外務大臣若クハ外務次官ニ通報ス可シ

右等電信ノ費用ハ之ヲ公使館ヨリ受取ルコトヲ得（此場合ニ於テ公使館ハ逆爲替ヲ外務省ヘ送ル可シ）或ハ直ニ外務省ニ申出ツ可シ（此場合ニ於テ外務省ハ電信領收證ニ照シ現費ヲ償還ス可シ）因テ貴下ニ電信符號一冊ヲ付ス其鑰ハ成規ニ照ラシ二ケ月每ニ之ヲ取換フ可シ

第四　貴下ハ日本ヲ離ルヽノ日ヨリ二月廿八日附ノ覺書ニ記載シタル俸銀卽チ銀貨三千五百圓ヲ給セラル可シ而シテ貴下カ「リバプール」ニ到著シタルノ日ヨリハ此外別ニ一ケ年銀貨三千圓ノ割合ヲ以テ手當ヲ給ス可シ貴下ハ之ヲ以テ一切ノ費用卽チ外務大臣若クハ外務次官ヨリノ臨時特別ノ命令ヲ奉スルガ爲メノ入費及ヒ總テ一體ノ訓令ヲ實踐スルガ爲メノ入費ヲ仕拂フ可シ此手當ハ旅費トシテ之ヲ給スルモノニシテ鐵道、汽船、宿泊幷ニ下宿料及ヒ贈遺等ノ費用總テ之ヲ包含ス而シテ此手當ニ付テハ貴下ハ惟領收證ヲ納ルノミニテ充分ナリトシ總テ其遣拂明細報告ヲ要セス

日本ヨリ「リバプール」ニ至ルマテノ航海ニ付テハ別ニ上等船客ノ費用ヲ給ス可シ

右列擧シタル條規ハ總テ此度貴下カ擔承スル特別ノ使命ノ爲メ特ニ之ヲ設ケタルモノナレバ向後普通一般ノ事ニ適用スルノ先例トナスコトヲ得サルベシ

若シ外務大臣若クハ外務次官何時タリトモ貴下ノ使命ヲ中止シ或ハ貴下ヲ日本ニ召還スルコトヲ必要ナリトシ其命令ヲ達スルトキハ貴下ハ速ニ之ヲ奉ズ可シ但シ此場合ニ於テモ貴下歸航ノ入費ハ此度渡航同樣ノ方法ヲ以テ之ヲ給ス可シ

明治廿年（一千八百八十七年）八月四日東京外務省ニ於テ

伯井上馨

本大臣ハ此書翰ニ添ヘタル訓令ノ儀ニ付猶又貴下御心得ノ爲メ左ノ件々申加ヘ候

第一ニ本大臣ハ貴下ニ命スル秘命ヲ銜シテ海外我々公使館所在ノ地卽龍動、伯耳林、巴里、羅馬、維也納、聖彼得堡及ヒ海牙ニ使ヒスルコトヲ以テス貴下ハ右各地ニ至リテ我カ駐劄外交官ニ此度條約改正會議ノ延引ニ至リタル事由ヲ報スル可シ本大臣ハ殊ニ各國政府カ此度ノ始末ニ付或ハ失望ノ感觸ヲ生センコトヲ恐レ斯ル感觸ヲ消セシメンコトヲ欲望ス貴下ハ最初ヨリ條約改正ノ務ニ從事シ詳ニ其ノ進歩ノ次第ヲ知ルコトナレバ我外交官ヲシテ各國政府ノ疑惑ヲ解カシムル爲メ最モ善ク之ニ好議論ヲ供シ得可シ若シ各國政府カ我カ此度ノ決議ヲ誤認シテ反動却退ノ政略ヨリスル者ナリトナサハ不幸實ニ焉レヨリ大ナルコトナカル可シ貴下ハ善ク之ヲ記セヨ我カ政府ハ泰西各國ノ仲間ニ入ルコトヲ

得ンカ爲メ全力ヲ竭盡シテ進取セント欲スル者ナリ而シテ我カ欲スル所ハ成ル丈ケ對等ノ地位ニ上ルコトヲ得ルニアルナリ卽チ夫ノ法律ヲ制定具備シ及ヒ裁判所ノ構成法ヲ改正スルカ如キ右地位ニ躋上スル一亘梯ナル可シ

貴下ハ我カ在外公使館ヲ歷問シテ我カ外交官ニ具報スルニ明治十五年（一千八百八十二年）以來條約改正ニ關シタル始末幷ニ其漸次進歩シタル次第及ヒ此度ノ結果ヲ以テス可シ

貴下此度ノ使命ハ官吏ノ資格ヲ帶往スルモノニ非ラス故ニ貴下ハ我カ公使館所屬員ノ地位ニ置カルヽコト無ル可シ隨テ貴下ハ宜ク貴下自己ノ交際ニ由リ機會ヲ求メテ有力ノ政事家ト談話シ之ヲシテ成ル丈ケ我ニ利アルノ意見ヲ生セシムル樣斡旋ス可シ殊ニ貴下カ伯耳林ニ於テ其ノ從前我ヲ眷顧スル政略ヲ執リタル人々ニ向ヒ善ク或カ事情ヲ通スルコトヲ得ハ本大臣ノ喜ハ尤モ大ナル可シ然レトモ本大臣ハ貴下カ最初ニ先ツ龍動ニ至リ然ル後次第ニ伯耳林、巴里、羅馬、及維也納ニ赴キ而シテ伯耳林ニ返リ夫レヨリ聖彼得堡及海牙ニ往クコトヲ欲望ス故ニ貴下若シ緊要ノ理由ニヨリテ右路割ヲ改ムルコトヲ要スルトキハ其都度大臣ニ報知ス可シ而シテ一應右ノ順序ヲ趁フテ各國都府ニ歷抵シタル後ハ右都府ノ中尤モ貴下ノ在ルコトヲ要スル地ヲ擇ンデ是ニ往ク可シ且ツ貴下ハ各地ヨリ常ニ本大臣ニ報告ヲ送ルヲ要ス

本大臣ハ貴下此度ノ旅行幷ニ其目的ニ付詳ニ外國駐劄我カ外交官ニ通知ス可シ貴下ガ龍動及ヒ巴里ニ滯在中ハ本大臣ガ嘗テ我政府雇兩外國人ノ事ニ付口述シタル次第ヲ善ク心ニ銘スルコトヲ要ス貴下ノ龍動滯在中ニ於テ一名ノ英國法律ヲ修メ幷セテ獨逸語及ヒ獨逸法律ニ通スル相當ノ士ヲ看出シ之ヲ本大臣ニ報ス可シ本大臣ハ此ノ報告ニ接シタル後何分ノ訓令ヲ龍動ニ在ル我カ公使ニ送ル可シ本大臣ハ右雇入ニ關スル契約ノ寫幷ニ約束ノ亘細ヲ貴下ニ通知セムシ可シ貴下ハコノ事ニ付キ何事ニヨラス在龍動ノ我公使ニ報告ス可シ本大臣ハ此ノ報告ニ接シタル後何分ノ訓令ヲ龍動ニ在ル我カ公使ニ送ル可シ本大臣ハ右雇入ニ關スル契約ノ寫幷ニ約束ノ亘細ヲ貴下ニ通知セシム可シ貴下ハ此事ニ付キ何事ニヨラス在龍動ノ我公使ニ報告ス可シ

貴下ハ前述路割ニ從ヒ一應各國ニ歷抵シタル後貴下ノ裁度ヲ以テ中央便利ノ地ヲ擇ヒ之ニ滯在シテ貴下ノ勢力ヲ新聞紙及ヒ雜誌等ニ用ヰ之ヲシテ我カ利益ヲ幇助セシムル樣斡旋ス可シ貴下ハ此目的ヲ以テ全歐到處ニ相當ノ人物、相當ノ新聞雜誌ト關係ヲ結ヒ氣脈ヲ通スル樣ナス可シ而シテ此ノ組織ニ付貴下カ以テ最初トナス所ノ方法ヲ報告ス可シ右ノ次第ヲ以テ貴下ハ自由ニ滯在地ヲ擇フコトヲ得ヘシト雖モ常ニ在伯林我公使館ト消息ヲ通シ居ル可シ是レ書信及ヒ電信ヲ送ルニ便ナルガ爲メナリ

右申進シ候敬具

明治廿年八月四日　外務省ニ於テ

伯井上馨

バロン、ヴホン、シーボルト貴下

一五八

明治二十年八月十二日　井上駐獨臨時代理公使ヨリ井上外務大臣宛

條約改正會議無期延期ノ件回答

附屬書　八月四日附井上代理公使ヨリ獨逸外務次官宛往翰

機密信第十二號

九月二十六日到

條約改正會議中止ノ件ニ關シ去月廿九日附ノ電信[1]ヲ以テ縷々御訓令ノ旨趣敬承致候依テ今回我政府於テ右會議中止ノ事由等當外務省通商局長ライハルト氏又ハ政務課長ラシダウ氏ヘ一應面會ノ上談示致度心組ニテ右電報寫携帶早速外務省ヘ出頭致候處右兩氏共休暇中ニテ不在ノ趣ニ付外務次官ベルヘム伯（當時ビスマルク伯不在中ニ付外務大臣ノ代理ヲ致シ居候）ヘ直チニ面會ヲ請求致シ候ヘ共本日ハ會議有之面接不相叶趣ニ候間當日其儘引取リ申候依テ歸館ノ上不得止別紙ノ通リブリバートノ書翰ヲ相認メ右電報寫封入外務次官ベルヘム伯ヘ送付致候處翌則チ五日外務省ヘ出頭有之度旨回答ヲ得候ニ付當日外務次官ヘ面會ノ上電令ノ御訓示ニ據リ我政府於テ今回條約改正會議無期限(sinedie)中止ノ旨趣等親ラ說明申談致候處在本邦獨乙公使ホレーベン氏ヨリモ既ニ同次官ヘ其旨電報致來リ候ヘ共簡單ノ電信ニ止リ右中止ハ如何ノ事由ヨリ起因セシヤ未タ其詳細ヲ審ニスル事能ハサルハ勿論獨乙政府ニ於テモ其當否如何ノ意見ヲ確定スルニ由ナク拙官ノ書翰並ニ電報ヲ閱覽セシニ依リ始テ其重要ノ關係ヲ有セシ事ヲ了悉シタル旨申述ヘラレ且新コードノ條款中ニ變更ヲ要スル場合ニ於テハ日本政府ヨリ各締盟國ヘ通報セラルヘキ旨趣ハ元來如何ノ目的ナル

ヤ未タ確然詳悉セズ英獨合議案第五條ヲ閲スルニ新コードノ箇條中我政府ニ於テ他日變更ヲ要スヘキ場合ニ於テハ締盟各國ヘ豫メ其旨通報セラルヘク義務ヲ締約セラルヽハ既ニ了知セシト雖モ今般我政府ヨリノ電信ノ如ク之ヲ通報シ各其承認ヲ得タル場合ニ非サレハ如何樣ノ修正ト雖トモ我政府於テ之ヲ執行シ能ハサルノ義務ヲモ負擔セラルヽ義ハ別段ノ明文モナキ故未ダ確然了悉セサル所ナリト談話相成候ニ付右ハ該條款中ニハ其明文記載無之候得共會議錄第二十四ヲ閲讀セラルヽニ於テハ其旨趣ヲ包含シ候旨ヲ相答申候依テ外務次官曰ク然ル場合ニ於テハ本議ノ如キハ凡ソ一國ノ「ヂクニチ」上ニ關係ノ問題ナルヲ以テ成程貴國ノ內閣又ハ人民ノ間ニ反對論ヲ固執スルモノアリテ之ヲ駁論シ遂ニ反對黨ヲ引起ス情勢ニ立至リシハ余ノ能ク通曉シ得ヘキ所ナリ獨乙政府ニ於テモ條約改正ノ完結ヲ視ルハ將ニ近キニアルヘシト確信セシニ今玆ニ會議中止ノ報ニ接到スルハ實ニ貴國ノ爲メニ可惜義ニテ余ノ遺憾トスル所ナリト雖トモ貴國ノ「ヂクニチ」上ニ關係ノ問題ナルヲ以テ視レハ貴政府於テ今日ノ「アクシヨン」ヲ執行セラレシハ亦無余義次第ニテ獨乙政府ノ同意且贊成ヲ表スル所ナリ併シ要スルニ今回ノ中止タルヤ無期限（Sine die）ナルヲ以テ必シモ貴政府ノ容易ニ妨制シ得ヘカラサル他ノ故障ナキニ非サルヘシ依テ拙官於テ尙ホ詳細ノ事由ハ了知シ居ラサルヤ質問ヲ受候ニ付拙官ハ本電信ノ外目下他ニ考按ヲ構造スヘキ基因ナキ旨ヲ相答ヘ乍去尙ホ此上更ニ我政府ヨリ詳報ヲ接手スル場合ニ於テハ早速通牒スヘキ旨ヲ併テ申述候依テベルヘム伯ニ於テモ在本邦ホルレーベン公使ヨリ早晩尙ホ細報ヲ接受セラルヘシ然ルトキニ非サレハ獨乙政府ノ意見如何ヲ確然公答難致ニ付夫レ迄ハ本事件ニ關シ公然ノ往復ハ用ヒスシテ今日拙官ノ口演ヲ「フレンドリ、ヂスポジシヨン」ノ體ニテ了認可致旨答話相成候又我帝國ノ「インストレ」或ハ「ナシヨナル、リフヲルム」上ニ關シ他日補助ヲ要セラルヽ場合ニ於テハ獨乙政府ハ從來ノ如ク常ニ友誼ヲ以テ我政府ノ爲メニ斡旋スル所アラン云々併テ陳述相成候

條約改正會議中止ノ件ニ關シ當日則チ八月五日外務次官ヨリ拙官ヘ開陳ノ意見ハ大要前述ノ通リニ有之候依テ此段別紙相添報上ニ及申候敬具

廿年八月十二日　在伯林

臨時代理公使　井上勝之助

外務大臣伯　井上　馨殿

註　1冒頭ニ言及ノ「去月二十九日附ノ電信」ハ一五五往電ナルニ付參看

附屬書

廿年八月四日附井上代理公使ヨリ獨逸外務次官宛ノ往翰

Confidential

Berlin, 4th August 1887.

Dear Count Berchem,

The day before yesterday I received an important telegram from my Government, instructing me to inform Your Excellency that my Government has been unavoidably obliged to adjourn the Conference for the Treaty Revision. The reasons as given by the telegram, a copy of which I herewith beg to enclose, are, as Your Excellency will perceive, after mature deliberations of our Cabinet, in consequence of certain modifications being made necessary in the draft of jurisdictional convention and which, in its present form, would injuriously affect national dignity.

In view of this, therefore, our Government, whilst regretting this interruption, have been obliged to resort to an adjournment of the Conference *sine die* until it is in a position to show the result of our new codification and court organization and then to negotiate with foreign Powers for the opening of the Empire. I hope Your Excellency will regard the necessity of this step not in the light of a retrogressive movement of our Government whatever, but one founded in the apprehension that the projected jurisdiction scheme, like in Egypt, would injuriously affect national dignity. I had wished, first of all, to consult with either Mr. Reichardt or Mr. Raschdau on this point and then to confer personally with Your Excellency, but I find today that both the above gentlemen are at present absent and therefore, in order to have the means of hastily informing Your Excellency of this new course of affairs, I take this liberty of writing to you which I hope you will kindly excuse. I shall be ready at Your Excellency's disposal to call at the Foreign Office at any time, when most convenient, in order to personally explain more minutely further parti-

culars on the subject.

I remain
Yours truly
K. Inouye.

His Excellency
Count Berchem
&c. &c. &c.

一五九 明治二十年八月十二日 原駐佛代理公使ヨリ 井上外務大臣宛

條約改正會議無期延期ノ件回答

附屬書 二十年七月二十九日外務大臣往電佛譯

機密第四十一號 九月廿六日到

條約改正會議延期ノ義ニ付七月卅一日幷八月一日別紙甲乙號[1]寫ノ通訓電接手致候所文中不分明ノ文字モ有之候得共大概解讀被致候ニ付別紙丙號寫ノ通佛譯文ヲ以テ去十日當國外務省ヘ通知致候尤モ外務大臣フルーランス氏休暇旅行中ニ付通商局長クラブリー氏ヘ右譯文相示シ且ツフルーランス氏ヘ轉送依賴致候クラブリー氏ノ談話ニヨレハ在東京佛國代理公使ヨリハ先般電報ニテ申越候ヘ共未タ充分ニ理由

ヲ示サズ依テ尙ホ書翰ノ來着ヲ待居趣申候

乙號訓電ノ義ニ付テハ當國新聞紙中未タ本件ヲ記載致候モノ無之只タ英國議院ニ於テ議員ノ質問ニヨリテ外務次官ヨリ改正會議延期相成フランケツト公使ノ歸國ヲ待居候趣答辯致候由當地二三ノ新聞ニ記載致候マデニ付未タ何等ノ着手モ不致候ヘ共尙ホ時宜ニヨリ訓電ノ趣旨ニ基キ取計可申存候

右不取敢申進候敬具

明治二十年八月十二日

在佛國
臨時代理公使 原 敬（印）

外務大臣伯爵 井上 馨殿

註 1 別紙甲乙號ハ一五五文書一及二往電參看

附屬書

二十年七月廿九日外務大臣發三十一日巴里着別紙甲號電信佛譯

Traduction de télégramme
Comte Inouye à Hara
le 31 juillet 1887.

Informez Ministre des Affaires Etrangères que, après un examen attentif par le Cabinet Impérial du projet de convention juridictionelle, la nécessité de modification essentielles a été démontrée.

Nous avons trouvé surtout des objections aux stipulations de l'article 5, par lequel la codification Japonaise doit être soumise à l'approbation des Puissances étrangères. La réduction de cet article n'est pas conçue dans ces termes précis, mais, le Cabinet a été amené par les débats ultérieurs de la Conférence à supposer que c'est là la vraie stipulation.

Par conséquent le Cabinet est d'avis, à ce sujet, qu'il serait conforme à notre dignité national de compléter les lois de prime abord, parceque cela prouverait qu'il n'est pas nécessaire de les soumettre à l'approbation des Puissances.

Par autorisation du Gouvernement Japonais, j'ai déclaré aujourd'hui que la Conférence est ajournée indéfiniment, c'est à dire jusqu'à ce que le Gouvernement Japonais puisse faire connaître les résultats de la codification.

Expliquez au Ministre des Affaires Etrangères que, tout en regrettant la nécessité de cette interruption de la Conférence, notre but n'est nullement d'abandonner la marche du progrès, mais, au contraire, de la poursuivre d'une manière compatible avec notre dignité national.

Si le Ministre des Affaires Etrangères le désire vous pouvez lui laisser une copie de ce télégramme.

一六〇 明治二十年八月十五日 西駐露公使ヨリ 井上外務大臣宛

條約改正會議無期延期ノ件回答

機密第六號

去七月卅日電信[1]ヲ以テ條約改正會議中止ニ付其必要ナル理由ヲ當國外務大臣ヘ開陳スヘシトノ御指令ハ當時大臣ギルス氏不在中ニ付次官ウランガリ氏ヘ具サニ面陳致候處同氏ニモ先ツ法律完成ニ御着手ノ方尤ト存スルトノ話ニテ御座候次ニ右電報ノ寫ヲ同氏ニ渡シギルス氏歸府ノ上ハ詳カニ其趣ヲ傳ヘ呉ラレ候樣依賴致置候此段申進候也

明治二十年八月十五日

特命全權公使 西 德 二 郎

外務大臣 井上 馨殿

註 一七月三十日電信ト一五五ヘ一往電

【ホ】 明治二十年九月一日 米国公使ヨリ外務大臣宛来翰

條約改正會議無期延期ノ件

附屬書 九月一日附在本邦米國公使發米國々務卿宛往翰

No. 192

United States Legation,

Tokio, September 1, 1887.

His Excellency

Count Inouye Kaoru,

H. I. J. M's Minister for Foreign Affairs,

Sir,

When Your Excellency did me the favor and the honor to send to me when at Nikko by Mr. H. W. Denison of the Foreign Office a copy, in manuscript, of Your Proposed Note the Foreign Delegates of the Treaty Conference, some days in advance of its official promulgation on July 29th, I took occasion to verbally express through Mr. Denison my very high appreciation of the act, and for the explanation through that gentleman of the causes and interesting contemporary history of the circumstances which led to the important action of the Japanese Cabinet and Government in adjourning the Treaty Revision Conference sine die.

Since then I have had the honor to receive Your Excellency's printed *Note* (which thus becomes an archives of the Treaty Conference) which follows the literal text of the manuscript copy which I had already acknowledge (?) at your hands. I took occasion to express the opinion at the time to Mr. Denison that under both English and American parliamentary usage as practised in all our legislative bodies an adjournment "sine die" was *ipso facto* a dissolution of the body so adjourned, that any subsequent words imposing a condition was by our parliamentary and congressional manuals inoperative because of the self-evident contradictory and irreconcilable character of the terms employed. "Without a day" being, as Your Excellency is aware, the literal translation of the old Latin parliamentary law term, and (?) means what the translated words literally purport and have been so construed in practice for at least a century of English and American legislative history. When it is desired to adjourn a legislative body, for instance for a long or short period dependent on an occurrence of some certain contingency, the universal usage in such cases has been to proclaim by a resolution or act of the Parliament or of the Congress and proclaimed by the speaker or presiding officer as the organ of the Legislative body if adopted, that the body or house (whatever it may be) by its vote and authority is hereby adjourned until a day certain, or (if an uncertain day) to such time as shall hereafter be determined by the occurrence of some definite event, —naming the event. In such cases the words "sine die" are never used. Nevertheless I was deeply gratified when I heard that your undoubted intention and meaning was *not* to adjourn *finally* or to *dissolve* the Treaty Conference, but that the fourth paragraph of Your Excellency's official Note of the 29th of July last speaking for yourself as President of the Conference and First Delegate of Japan, and for Your Excellency's Government as well, was designed to be taken and construed by the foreign Delegates in a broad and liberal and untechnical sense. That when the codification of the laws of the Empire shall have been completed (whether that be early or late was not a proper subject of enquiry, though of deep interest) that then the time intended by the Japanese Government would have arrived to invite the same—not a new—Conference, with the same Powers—if not the same Delegates—to resume its labors. I accept this construction in this instance in the spirit which is indicated by Your Excellency's Government.

I have in transmitting this official printed Note of Your Excellency to Washington deemed it my duty to acquaint my Government of the construction which the Japanese Government have placed on the Note and proclamation of adjournment of the Conference in which the terms "sine die" are

used in advance of the qualification and condition afterwards therein designated. While this despatch to my Government, a copy of which I beg to enclose, herewith, for the information and use of Your Excellency, was originally designed for the information of my Government only, nevertheless I have deemed it since not improper by virtue of the cordial personal and official relations between Your Excellency and the United States Representative in Japan, and the long and uninterrupted friendship of my country towards your own, to enclose to Your Excellency, and to reassure you by this correspondence with my Government of the cordial spirit which still actuates my Government and its Representative toward Japan on this long desired and long delayed Revision of the Treaties.

I avail myself of this occasion to renew to Your Excellency the assurance of my highest consideration.

Richard B. Hubbard

附屬書

二十年九月一日附在米邦米國公使發米國々務卿宛往翰

Copy.

United States Legation,
Tokio, Japan, September 1, 1887.

Hon. T. F. Bayard,
Secretary of State,
Washington,

Sir,

I have the honor to transmit, herewith the printed copy in duplicate of the "Note addressed by the Minister for Foreign Affairs of Japan to the Foreign Delegates 29th July, 1887."

The manuscript copy of this Note has been already forwarded to the Department of State in my despatch No.—

Since forwarding that despatch, my attention has been invited by Count Inouye to the fourth paragraph of the said Note, which is as follows, to wit;— "The under signed has in consequence the honor to inform the honorable Delegates that he is authorized by his Government to declare, herewith, the adjournment of the Conference sine die until such time when the Japanese Delegates will be able to place before the Conference the work of codification, which will serve as the best evidence of the sincere intention which continues to animate the Government for the assimilation of its administration and laws with the West." He desires it distinctly understood, that, whatever may be the technical parliamentary construction of the words sine die, they are nevertheless qualified by the latter clause of the said paragraph, and that the adjournment is limited to that period of time when the "Japanese Delegates will be able to place before the Conference the work of codification" of the laws &c.

Count Inouye, representing his Government, gives assurance that the Conference is not regarded as dissolved, but only adjourned for the reasons indicated, and to resume its labor when the condition-subsequent imposed by his Government has been complied with.

This construction I have informed the Minister for Foreign Affairs would be received and acted upon as thus proclaimed, and I have taken great pleasure in assuring that progressive and enlightened statesman of the Foreign Office that I would at the earliest date convey to my Government the light in which the Government of Japan now regards the status of the Treaty Revision Conference. *When* the Japanese Delegates will be ready to submit such a codification of the laws as indicated is not even intimated by them or their Government. Untill the recent dissentions in the Cabinet on the proposed Treaties of Revision, the foreign Delegates had been given to understand that within a year at most the codes would be completed. Now, however, no member of the Government seems willing to indicate or even to conjecture when the codes will be ready. I should perhaps not venture a prediction where their own representative men are "at sea", so to speak, on this point but I am inclined with all due respect to the opinion of some others in official life who differ with me, to the opinion that the calmer "second thought" will soon resume sway as to Treaty Revision policies in the Japanese Govern-

ment, and the sincere and friendly disposition of the Treaty Powers, and the just and liberal policy of the Minister for Foreign Affairs be recognized with approval and Treaty Revision become an accomplished fact at a day long anterior to 1890, and probably far within the official terms of the present Ministers and Delegates who have sat in this Treaty Conference.

I have also taken occasion since the adjournment of the Conference to assure Count Inouye that while regretting deeply dissensions in the Japanese Cabinet of Ministers, which may have at least delayed the Revision of the Treaties (if not fatally imperiled the success of the long felt justice and necessity) that nevertheless my Government to-day, as for many years heretofore, stands ready either independently or by cooperation with the Treaty Powers, to give Japan full relief from her quasicommercial and political *thraldom* and to recognize, even now, (as proposed by my Government in 1878) the *present* and absolute autonomy of the Empire.

遂ケ候テ今回御訓示ノ旨趣ニ基キ條約改正會議無限延期ノ始末ニ關シ委曲開陳致候當日對話ノ大要ハ別紙横文書ノ通ニ有之但右ハ英語ヲ以テ相互ニ談話セシ事ナレハ敢テ其儘之ヲ記ス依テ委細ノ義ハ別紙ニテ御了悉相成候樣致度候左候テ此頃ハ外務大臣及次官共不在ナルヲ以テ直接ニ面談シ本義ニ關シ其意見ノ如何ヲ閣下ニ本便報上シ得サルハ遺憾ニ不堪所ニ候得共右ラシダウ氏ハ本件ニ關シ其當局者タルヲ以テ見レハ其意見モ亦タ當外務ノ省議ヲ動(マヽ)スルニ勢力ヲ有シ此度ノ結果ヲ爲シタル始末ニ付善ク其事情ヲ悟了シ敢テ我政府カ反動却退ノ政略ヨリ此度ノ延期ヲ爲シタル等ノ如キ誤認寸毫モナキノミナラス將來ノ我計畫ニ尚獨政府ハ好意ヲ以テ協力斡旋シ他日我準備整頓シ條約改正會議再開ノ場合ニ際シ其通知ヲ得ルニ於テハ獨政府ハ先シテ欣然委員ヲ派遣シ尚商量スル所アラン云々ノ好言ヲ豫メ玆ニ聽取シタルハ實ニ拙官ノ喜悦不過之所ニ御座候

將又當國新聞紙上ニモ此度ノ事實ヲ十分明白ニ記載セシメンカ爲メ「クンビネル」氏ヘモ善ク其情由ヲ談示候末「キヨルニシヱ」又ハ「ナシヨナル、ツアイツング」等ノ如キ當國有力ノ新聞紙ニ載明爲致候事ニ取計ヒ會議無限延期ノ

I have the honor to be,
Sir,
Your obedient servant
Richard B. Hubbard

Enclosure as above.

一六二　明治十年九月十二日　井上駐獨臨時代理公使ヨリ井上外務大臣宛

條約改正會議無期延期ニ對スル獨逸側ノ態度ニ關スル件

附屬書　九月十五日井上代理公使ト「ラシダウ」氏トノ對話大要

機密第十五號　　十一月九日到

此度條約改正會議無限延期ノ義ニ付今般機密送第七三九號貴信ヲ以テ「ビロン、フヲン、シーボルト」氏ヘノ秘密訓令寫等相添ヘ縷々御訓示ノ趣敬承仕候依テ先般機密第十二號ヲ以テ及報上置候次第モ有之早速當外務省ヘ出頭外務次官ヘ面會ノ上委曲開陳可致心組ニ罷在候處折悪同官事ハ當時病氣ニテ加養ノ爲メ地方ヘ旅行ノ由又外務大臣モ他行中ニテ未タ歸伯無之由ニ付公使館參事官ラシダウ氏ヘ面談ヲ

電報ノ外本件ニ關シ我レニ不利ヲ來スヘキ等ノ如キ義ハ幸ヒ未タ當新聞紙上ニ何等記載無之候尚此上公私ニ關セス時機ニ臨ミ充分ニ意ヲ用ヒ將來ノ我施設上ニ好結果ヲ得候樣成ル丈ケ注意ニ盡力可致候

此段別紙相添及報上申度候敬具

廿年九月廿二日　　在伯林
臨時代理公使　井上勝之助

外務大臣伯　井上　馨殿

附屬書

二十年九月十五日井上代理公使トラシダウ氏トノ對話大要

Report of a Conversation held at the German Foreign Office, on Thursday, the 15th September 1887.

Inouye. At the beginning of August I had personally called and communicated to His Ex. Count Berchem that my Government had declared the adjournment of the Treaty Conference *sine die*, at the same time, handing him a copy of my telegraphic instructions which I had received and

about which you are no doubt well aware.

Raschdau, Yes, Count Berchem has handed me the copy of the telegram, together with the private letter which you had addressed to him and I have carefully perused them both.

Inouye. By this mail, I am in receipt of further particulars and instructions from my Government on the subject and as I then promised Count Berchem that I would inform him as soon as I was in receipt of further details, I have consequently called today in order to have a confidential conversation with him, but I regret to hear just now that he is unwell and obliged to go into the country for his health.

Raschdau. Yes, I am sorry to say he has a great pain in his neck which might prove dangerous if he did not have quiet and rest now. So, at the advice of the doctors he went away a few days ago.

Inouye. I hope it is nothing very serious and that he will soon recover. You recollect very well that in the beginning of May this year, my Government had at last succeeded in forming a Draft Jurisdictional Convention which, though not yet signed, was nearly agreed upon by the Conference and submitted already by the different Delegates to the approval of their respective Governments. But since then, in the meanwhile, public opinions in the Japanese Press and also elsewhere were heard that we had made too much concessions to the Treaty Powers in having the Treaties revised, that some of these concessions, as for example Articles IV and V, were incongruous with national dignity, whilst others were considered as too difficult to be carried out, such as Article VII § 13. Then it was that the public began more and more to be excited. Not only persons in the Government but also those outside of official circle began to feel alarmed that we might be giving too much concessions in order to have the exterritorial jurisdiction abolished. Under these circumstances, if our Cabinet had maintained its position in adopting the revised draft, it might have led the popular fanaticism to the highest pitch of excitement resulting probably in the overthrow of the present Government and the consequence will be that we might probably unable to carry out the international covenant, we had entered into by the Revised Treaty, which fact would be attended by all the consequences of the violation or non-fulfilment of a treaty.

From these and similar reasons of internal administration, my Government came to the conclusion that it was necessary to introduce some further modifications into the Draft Jurisdictional Convention and that it would be still more in conformity with national honour if we could have all these matters of jurisdiction and procedure which, properly speaking, belong to the sphere of internal legislation, left unregulated by the Treaties and that it would be better if we could have the Articles IV and V, which if misinterpreted and misapplied might oblige us to submit ourselves to a sort of legislative tutelage, eliminated entirely from the Draft. In order to obtain this end, my Government came to the conclusion to adjourn the Conference sine die until such time when the above mentioned codes, upon the elaboration of which, in conformity to Western Principles, the Imperial Government had since long been engaged, shall have been finished and when, in consequence the Treaty Powers shall have been enabled to see, in the meanwhile, what these laws are, to which they shall have to consent to make their subjects obey. By this method we are enabled to maintain contiguity between the present negotiations and our future action in regard to this affair. When the laws are completed, there will no more be any necessity of stipulating in the Treaty to the effect that they should be communicated to Treaty Powers. In the same way, the raison d'être of many other stipulations would fall to the ground. You will thus perceive that the reasons, which led to the adjournment of the Conference, will not only be (?), from a point of eliminating

any clauses in the Revised Treaty which might injuriously affect our national dignity, but also will furnish a good opportunity, in the meantime, of enabling the Treaty Powers to judge for themselves of the nature of our future legislative codes which is the best guarantee that could be produced. I, therefore, earnestly hope that Your Government will not misinterpret, by any means, the action of my Government by this adjournment in the light of our intention to try to maintain our old policy of seclusion. On the contrary, I am authorized to state to you that my Government will concentrate their whole energy to the elaboration of the codes, for some years to come, and try to complete them in the shortest possible space of time in order that we might be able to open the Empire in no distant future. With the opening of the Empire as our inflexible aim, my Government has now determined to tread the more proper and safer way of reaching this end viz. by revising the Treaties after the Codes had been made and

not by first revising the treaties and then make the elaboration of the Codes, in conformity to Western Principles, as (?) one of the suspensive conditions of the enforcement of the Treaties already revised.

Raschdau. I fully understand the motives which led your Government to take the present action. Of course the Japanese Government is quite free and has the right, as any other government taking part in the Conference, to declare the adjournment of the Conference when it seems it is necessary to do so in order to guard its own national interest, such as in this present case.

Although it is a matter of regret to hear of this adjournment, just at the moment when we were of the hope that the question of Treaty Revision would soon be brought to a successful issue, to all parties concerned, yet I can assure you the German Government have nothing to say against the present action of your Government.

It is quite natural for any independent country to act upon what it thinks proper when it sees it affects its national dignity in any way and, especially, when it has to contend against public opinion which denounce its actions.

You may be quite certain that Germany would not have the slightest misconception that this adjournment has been brought about by your Government in order to enable itself to adopt any retrogressive policy. I think myself that, from the present condition of Japan, it would be almost impossible for it to take any such reactionary policy and the present state of things would not admit it. The German Government will continue to hold its relations with Japan in the same state of cordiality as hitherto and we shall always be ready to assist your Government with the same good-will in any matters connected with the further progress of your country, so that when your legislative codes are completed and the Japanese Government is ready to reopen the Conference, I can assure you that Germany will also come forward and be ready to accept the invitation to attend.

Inouye. I thank you cordially for such expressions of good-will and friendship on the part of your Government and I only hope that this adjournment of the Conference will be brief and temporary and that, at no distant future, we shall be able to see its reopening and finally to bring this complicated question of Revision to a successful close. In the meantime, I shall feel obliged if you would be good enough to transmit the subject of our today's conversation to His Ex. Count Bismarck as soon as you have the first opportunity.

Raschdau. I shall certainly not fail to inform him. I expect he will be back in a few days.

一六三 明治十年 月 日 在露本國邦外同國公使ヨリノ機密信譯文

條約改正會議無期延期ニ關スル件

去ル七月十九日（三十一日）ノ會談ヲ以テ日本政府カ條約

改正會議ヲ無定期ニ延期スル事ニ決定セシ旨ヲ通知セラレ而シテ其結果ハ如何アルヘキ ニモセヨ右ノ決定ハ日本ノ政略ガ其動作ト共言論トニ於テ是ヨリ一層獨立ノ境域ニ赴カントスル自然ノ傾向ニ因由スルモノニシテ彼我兩國ノ間ニ現存スル好誼ヲ毫モ損傷スヘキモノニ非ス特ニ該會議ノ無効ニナリシ事ハ聊カモ吾人ノ面目ニ關係ナキカ故ニ吾人ハ虚心平氣ヲ以テ之ヲ觀察シ得ヘシトノ御意見ヲ開陳セラレ致領承候

帝國外務省ハ日本國ト我國トノ將來ノ交際ニ關シテ前段ニ開陳セル閣下ノ御意見ニ全ク致同意候抑吾人カ條約改正事業ニ關與セルハ全ク公平ノ性質ヲ以テセシカ故ニ東京會議ノ延期ニ關シテハ日本國ニ於テ保護スヘキ實利ヲ有スル他諸國ノ之ニ附スルト同一ナル重要ノ關係ハ附セサル事ニ有之候蓋シ此延期ハ聊カモ露國ノ賞牾ヲ蒙ラス候也就テハ日本皇帝陛下ノ政府ニシテ多少露西亞ノ友情ノ眞價ヲ知ラハ日本國ノ利益ノ爲メニハ今日モ尚ホ將來ニ於テモ我國政府ハ輔助贊賛ヲ與フ可シト常ニ信スル事ヲ得ヘク候

註　本機密信ハ露語原文ヨリ佛語及獨語ニ翻譯シタル上其寫一部ヲ二十年十一月十五六日頃露國公使シニウイツチ氏ヨリ青木氏ニ内示シタルモノナルカ如シ

露國外務大臣ヨリ在本邦同國公使ヘノ機密信佛譯文

Traduction d'une dépêche confidentielle de S. Exc. Mr. le Ministre des Affaires Etrangères de Russie à Mr. Schévitch, Ministre de Russie au Japon.

En informant le Ministère Impérial par votre dépêche du 19/31 Juillet ct. de la décision prise par le Gouvernement Japonais d'ajourner sine die la Conférence pour la révision des Traités, V. E. a bien voulu exprimer l'opinion que quelles que puissent être les conséquences de cette décision que vous attribuez d'ailleurs à la tendance naturelle de la politique du Japon vers une plus grande indépendance d'allures et d'opinions,—elle ne saurait en aucune façon altérer les bonnes relations existantes entre nos deux pays, d'autant plus que la non réussite de la Conférence n'affecte en rien notre dignité et peut dès lors être envisagée par nous avec parfaite tranquillité.

Le Ministère Impérial partage entièrement votre manière de voir sus-énoncée au sujet de nos relations futures avec le Japon.

Notre participation à l'oeuvre de la révision des Traités ayant un caractère de complet désintéressement, nous ne pouvons pas attacher à l'ajournement de la Conférence de Tokio la même importance qu'y attribueront peut-être celles des Puissances qui ont des intérêts matériels à sauvegarder au Japon. Pour la Russie, cet ajournement n'entraîne aucun préjudice matériel.

Dès lors le Gouvernement de Sa Majesté l'Empereur du Japon, pour peu qu'il sache apprécier toute la valeur de l'amitié de la Russie, pourra compter, aujourd'hui comme dans l'avenir, sur l'appui que le Gouvernement Impérial sera toujours prêt à accorder aux interêts du Japon.

露國外務大臣ヨリ在本邦同國公使ヘノ機密信獨譯文

Ueberstzung einer confidenziellen Depesche Seiner Excellenz des Kaiserlich Russischen Ministers der Auswärtigen Angelegenheiten an Herrn von Schevitch, Kaiserlich Reussischen Gesandten in Japan.

In Ihrer Depesche von 19/31 Juli d., in welcher Eure Excellenz das Kaiserliche Ministerium von dem Beschluss der Japanischen Regierung-die Vertrags-revisionsconferenz *sine die* zu vertagenbenachrichtigen, belieben Sie Ihre Meinung dahin auszusprechen, dass, welcher Art auch die Consequenzen dieses Entschlusses sein mögen, den Sie übrigens dem naturgemässen Streben der Japanischen Politik nach grösserer Freiheit in ihren Bewegungen und Meingunsäusserungen zuschreiben, derselbe die zwischen unseren beiden Ländern bestehenden freundschaftlichen Beziehungen um so weniger in irgend welcher Art beeinträchtigen dürfte, als der Misserfolg der Conferenz unsere Würde in keiner Weise antatstet und somit unsererseits mit vollkommener Ruhe aufgenommen werden kann.

Das kaiserliche Ministerium theilt vollständig diese Ihre Ansicht in Brtreff unserer zukünftigen Beziehungen zu Japan.

Da unsere Theilnahme an den Arbeiten der vertragsrevision einen durchaus uneigennützigen Character trägt, so können wir der Vertagung der Conferenz in Tokio keine so grosse Bedeutung

beimessen, wie vielleicht diejenigen der Mächte, welche matrielle Interessen in Japan zu wahren haben. Für Russland bedingt diese Vertagung keinerlei materiellen Nachtheil.

Die Regierung Seiner Majestät des Kaisers von Japan kann somit, falls sie den vollen Werth der Freundschaft Russland zu schätzen wissen sollte, wie bisher, so auch in Zukunft auf die bereitwillige Unterstutzung der Interessen Japans durch die Kaiserliche Regierung rechen.

一六四　明治二十六年九月十四日　河瀬駐英公使ヨリ　井上外務大臣宛

條約改正會議中止記事所載タイムス紙送付ノ件

附屬書　二十六年九月十日附タイムス紙記事譯

機第三十六號　十月二十二日到

今般條約改正會議中止ノ擧ニ對シ當國新聞上我政府ノ現ニ此擧ニ出タル所以ヲ誤解スルノ論文等ヲ揭載セシ場合アルニ當リテハ兼テ御電訓ノ旨モアレバ直チニ其誤見ヲ破ル事ニ怠ラザルベキ覺悟ニ有之候處其後新聞ニ顯ハルヽトコロハ孰レモ只タ事實ヲ傳フルノミニ止リ別ニ誤解ノ說ヲ附シテ駁論ヲ試ムルモノモ無之而シテ去十日ニ至リ「タイムス」ニ別紙ノ通揭載有之候然ルニ未ダ面會ハ不致候得共「サー・フランシス・プランケツト」ハ五六日前當地ニ歸着候趣ニ付右「タイムス」ヘ揭載セシメシハ蓋シ同人カ或ハ外務省ノ手ニ出シ事ト察居候

右申進候敬具

明治廿年九月十四日

特命全權公使　河瀬眞孝

外務大臣伯　井上　馨殿

附屬書

本年九月十日倫敦タイムス新聞ノ譯

日本條約改正

聞ク所ニヨレハ日本條約改正ノ商議ニ就キテハ現今ノ地位次ノ如クナリト云フ條約改正ノ商議ハ日本政府ノ請求ニヨリ日本民法諸法典ノ新ニ制定セラレテ條約改正會議ヘ提出セラルヽニ取運フマテ一時中止セラレタリ元來右ノ諸法典ハ新條約ノ執行ニ至ル前ニ發布セラルヘキ筈ナリシカ今日本ハ自ラ望ミテ表向キ條約ノ結了ヲ告クルノ前ニ其制定ヲ卒ヘン事ニ取定メタルナリ此ノ變更ヲ來タセシ所以ハ若シ昨三十日シーボールト告別ノ爲メ來館有之該話中小官ヘ申聞ケ候ニハ同人着英以來プランケツト氏ニ面會ノ節今條約改正中止ノ談ニ及ヒタルニプランケツト氏ノ語次動モスレハプロトコールノ事ヲ發言致候得共最初ハ別ニ怪異トスル所無之然ルニ數次ニ相成候ヨリ或ハ言外ニ意趣ヲ含有スルモノニハアラサルカトノ疑團ヲ結フニ至レル由尤右ニ付何モ明言セシ論說ハ無之候得共シーボールトノ推測ニヨレハ彼ノプロトコールハ固ヨリ機密ニ屬スルモノニ有之候得共英政府ニ於テ會議一旦中止ノ後ニ相成候ヲ口實ト爲シテ條約改正半途澁滯ノ理由ヲ說明センカ爲メ議院次會ノ期ニ至テハ或ハ之ヲ提示セントスルノ內議等有之候モ圖ラレズトモ右ハ全クシーボールトノ推測ニ止ルモノニハ有之候得共小官ニ於テモ關心スル所ナキ能ハズ依テ聞取ノ儘供御參考候間宜シク御熟考相成候樣致度候

右申進候敬具

明治廿年十月一日

特命全權公使　河瀬眞孝

外務大臣伯　伊藤博文殿

條約ノ調印セラルヽニ至ラハ外國公使ハ日本法律ノ良否ヲ確メン爲メ日本ハ泰西立法ノ主義ニ基キ其民法及商法典ヲ制定シ之ヲ擧ケテ條約國ノ認可ヲ經ヘシト要求シタルニ因レリ日本ノ委員ハ既ニ此ノ要求ヲ納レントスルニ當リ日本ノ輿論ハ大ニ之ニ反シテ其非計ヲ咎ムルニ至レリ是ニ於テ日本政府ハ先ツ諸法典ヲ制定シ各國公使ヲシテ日本法律ノ善良ナルヲ認メ得セシメン爲メ之ヲ各國公使ニ示シ得ルマテハ會議ヲ延期スル事ニ決セルナリ此ノ變更タルヤ一モ條約改正ノ方向ヲ變スル事ナク又其結了ヲ危フスル事ナク唯改正條約ノ執行前ニ日本ノマサニ成シ遂クヘクアリシ義務ヲ今ハ其條約ノ調印セラルヽニ至ルノ前ニ於テ成シ遂クヘシト云フニ過キス其他條約改正ノ要領ニ至リテハ皆以テ同意ヲ表スル所ナレハ改正事業ノ主部ハ現ニ已ニ之ヲ成シ遂ケタリト謂テ可ナリ

註　新聞切抜原文省略ス

一六五　明治二十年十月一日　河瀬駐英公使ヨリ　伊藤外務大臣宛

條約改正會議錄公示ニツイテ英政府ノ狀況報告ノ件

機第四拾參號　十一月九日到

一六六　明治三十年一月三十四日　河瀬駐英公使ヨリ伊藤外務大臣宛

條約改正會議中止ニツイテ英政府ノ意向回答ノ件

附屬書　二十年十一月十八日發河瀬公使宛往電

二十一年一月十四日到

機第四拾八號

過般條約改正會議中止ノ儀當國政府ヘ及通知候節同政府ヨリ何等ノ意見申來候事有之哉ノ儀本月十九日接受御電[1]音ヲ以テ御尋問ニ對シ即日電報[2]ヲ以テ機密信第二十八號并ニ同三十七號中具陳致候外別ニ承及候儀無之旨及御回答候右三十七號文尾記載致置候通リプランケツト氏ノ語ニ依レハ英政府ハ該報知ニ對シ何等ノ回答ニ及ハサル云々傳聞ノ儘供御參考候間此段念ノ爲メ申添候

右申進候敬具

明治廿年十一月廿三日

特命全權公使　河瀬眞孝

外務大臣伯　伊藤博文殿

註　1前揭一六五文書
　　2附屬書電文

附屬書

二十年十一月二十六日河瀬公使宛往電

Nissi. Petersburg

Kawasa-Confidential letter No 43 received. Ask British Government or Plunkett not to publish Protocol of conference if possible but if they insist upon publishing then demand that they shall not give only such points as are advantageous to them and omit those advantageous to us but to represent situations of both countries in their true and fair light.

Ito.

一六八　明治二十年二月二日　河瀬駐英公使ヨリ伊藤外務大臣宛

條約改正會議錄公示ニツイテ英外務次官ノ意向通報ノ件

機第五拾壹號

井上外務大臣時代　條約改正會議　一六八

附屬書

二十年十一月十八日發河瀬公使宛往電

Upon your communication to Government to which you are accredited with reference to the adjournment of treaty revision conference what have you learned officially regarding their views.

Ito.

18/11'87

一六七　明治二十年二月三日　河瀬駐英公使ヨリ伊藤外務大臣宛

條約改正會議錄公示ニ關スル取扱方電訓受領ノ件

附屬書　二十年十一月二十六日河瀬公使宛往電

機第五十號

二十一年一月十四日到

英國政府ニ於テ條約改正會議錄ヲ公示スルノ意有之モ難斗旨去十月一日機[1]第四十三號ヲ以テ申進候處去十一月廿六日御[2]電音ニ接シ相成ル可クハ其公示ヲ相止メサセ候樣取斗ヘク若シ相止難キ場合ニ於テハ一方ニ偏セス彼我ノ事情公平ニ相示候樣殊ニ請求可致旨御訓意委悉致承知候

右申進候敬具

明治二十年十二月三日

小官儀本月廿日外務省ニ出頭シ次官サーフイリツプカレイ氏ニ面會ノ上兼テ御電訓ノ旨ヲ含ミ英政府ニ於テハ彼ノ條約改正會議錄ヲ公示スルノ內議ニテモ有之哉公然トナク致尋問候處右樣ノ儀ハ曾テ無之又後日ニ至ルモ之ヲ要スル事有之間敷思考スル由被申候乍然議院開會ノ後ニ至リ萬一條約改正ニ關シ切ニ政府ノ說明ヲ請求スルノ末政府ニ於テ或ハ該會議錄ヲ公示スルノ要用ヲ議スルニ至ルト否トハ之ヲ先知スル事能ハスト雖トモ該會議タル固ヨリ機密ニ屬スルモノ故縱令ヒ萬一其記錄ヲ公示セントスルモ先ツ日本政府ヲ始トシテ諸條約國政府ノ許諾ヲ得ルノ後ニアラサレハ之ヲ擧行スヘカラサルヲ以テ若シ止ヲ得サルノ場合ニ臨マハ必ス其照會ヲ爲スヘキニ付右御承知有リ度旨被申候

右ハカレイ氏一己ノ意見ヲ答ヘタルモノニ有之候得共之レニ據リ推測スルニ會議錄公示ノ儀ハ實際有之間敷ヤト被存候間此段御承知置相成度候

右申進候敬具

明治廿年十二月廿四日

特命全權公使　河瀬眞孝

外務大臣伯　伊藤博文殿